幻想戦記

竜影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻想戦記

【Ｎコード】
Ｎ０８２８Ｑ

【作者名】
竜影

【あらすじ】
ここは・・・・・人間と、神秘の獣――幻獣が共に存在する世界。されど、その暮らしは『共存』とはほど遠い。
４年ほど前に書いた処女作です。投稿にあたり編集はしていますが、文脈なし、わかり辛い描写、ご都合主義、急展開、作り込みの甘さなど目立つと思いますので、温かく見守ってください。こうすればいいという、アドバイスがありましたら、お願いします。また、個人的なイメージや自己解釈で神話上の神々や妖精など書いてるので、皆さんが持っているイメージを損なうかもしれませんので、読む際

はご注意ください。１０／１７日　第二章投降分の誤字修正と加筆を行いました。

プロローグ

ここは、〈人間〉と、神秘の獣〈幻獣〉が共に存在する世界。

されど、その暮らしは『共存』とはほど遠い。

ほとんどの〈人間〉は、〈幻獣〉に畏敬の念を持ち、距離をとって暮らしていた。

人々は強大な力を持つ〈幻獣〉を恐れ、時に崇め、時に命を奪った。

それは〈自然〉への畏敬の念を込め敬う心であり、〈自然〉への挑戦に他ならない。

その中で〈人間〉は出会っていく。

人知を越える超上的な力を持つ獣――

――〈幻獣〉は元より

森羅万象に宿る霊的存在――

――精霊。

死して生物の肉体から放たれながらも現世に留まる存在――霊。

時に願いを叶え、時に災いを呼ぶ存在――魔神。

東洋における超常現象的存在

――妖怪。

人間とほぼ同じ姿の自然的存在

――妖精。

世界各地に生息し、その強さから『最強の幻獣』と呼ばれる――ドラゴン。

異界における闇の住人。人間を誘惑しよう

と狙う存在――悪魔

異界における光の住人。光に満ちた天より人間を見守る存在――天使

やがて、それら全て超越する力を持つ〈神〉を見出し、崇めた。

自然の全ての事象は神々の起こす奇跡と考え、それらを崇める集まりを作った。

だが、時が立つに連れて〈人間〉は――過去に見出した全てを忘れていった。

瓦礫と化した町。血を流して息絶えている二人の人影。それを見て涙を流し、たたずむ少年。空から降る、血の雨。炎により赤く染まった空の下、町は地獄絵図と化していた。

「・・・・・・！」

ベッドの上で、一人の少年が目を覚ます。窓からは朝日が差し、彼の顔とベッドの布団を照らしていた。

「・・・カーテンを閉めずに寝たのか・・・・・・。うっかりしていた・・・・・・」

そう頭をかいた少年、ディステリアは右手を下ろすと、下をうつむいた。

「（また・・・・・・あの夢・・・・・・）」

時々、彼が見る夢。あれがなんなのか、もっとよく知りたい。だが、知ろうとすればするほど、恐怖が支配する。思い出そうとすればするほど、同じように恐怖がわきあがった。

「・・・・・・・・・」

これ以上ここで考えていても仕方ないので、ディステリアは起きて着替えをすることにした。

第1話　少年、初戦闘（前書き）

ネーミングセンスいまいちなので、実在する名前をもじった地名や町の名前を使っています。それでも五十歩百歩。

第1話　少年、初戦闘

ブリテン島にあるイグリース国の中の一地域、イルグラント地方。
そこにあり、イグリース国の首都となってるロンディノスにある市役所の一室で、資料を片手に椅子に座っている男性がいた。そこに、

コンコンコン

「ハイ。どうぞ」

ガチャ

ノックの音に中の男性が答え、扉が開くと黒のスーツを着ている男性が部屋に入って来た。部屋の中には椅子に座り、机の上の資料の一部を手に取り、それを呼んでいる男性がいた。しばらく何かを報告すると、ふと聞いた。

「それは、例の・・・・・・〈クルキド〉に関するレポートですか？」

部屋の中にいた男――ヘクターはその資料を置き、「ああ」と答えた。

「その生物はいったい、なんなのでしょう？魔物とは似ても似つかない特徴があると聞いておりますが、私はやはり・・・・・・そう魔物と変わりないと思います」

「ほう。なぜだね？」

興味があるように、聞くヘクターに、「なぜ・・・・・・と言われても・・・・・・」と男性は戸惑った。答えが出ないでいると、ヘクターは何枚か下の資料を引っ張り出し、それに目を通した。

「見た目は魔物と変わりないようだが、数少ないクルキドの死体を解剖した結果、細胞や体の作りに大きな違いが見受けられる。特に不気味なのが・・・・・・」

そう言って、そのレポートの一文を見る。

「『胃・腸・肝臓などの生態維持に必要な臓器が見当たらない』という点だ。丸一日中観察していた訳ではないが、食料は愚か、なんらかの栄養を摂取していたという報告もない。いくら魔物でも、食料ぐらいは食べるだろう」

「しかし、精霊は食料をとらずとも生き続けられます」

「ああ。精霊は、マナを糧に生きているからな。それゆえに、〈精神生物〉とも言われる。妖精も同じようなものだが、ある程度は物を食べる」

「うーむ。謎が深まるばかりですね～・・・・・・」

ヘクターが資料を机に置くと、二人は「はあ～」と溜め息をつく。

「（まるで何かに呼応するかのように、人々に危害をなす謎の生物。魔物に似ているが、少しばかり違う特性を兼ね備えており、パワー・強靭さはあまり変わらないものの個々の意思を持たず、何者かの統率に忠実に従っているようだった）」

資料を一枚、また一枚とめくる。

「（さらに一番の違いは数の増え方。普通の魔物は他の生物と体の作りが同じため、生殖活動で数を増やすと推測されている。しかし、この魔物は体を分裂させて、爆発的に増えていった。分裂により数を増やす生物は原生生物などが確認されているが、この新種の生物は大きさも強さも段違いだった。何より最大の特徴は・・・・・・）」

考えているヘクターに、男性が話しかける。

「そうだ。彼、今どうしてますか？」

ヘクターは一瞬、「彼？」と首を傾げたが、「ああ、彼か」と頷いた。

「かなり衰弱していたらしいですが、大丈夫だったんですか？」

「ああ。あれからもう、十数年近くたっているからな。今では他の兵たちと混ざって、武術訓練を受けている」
それを聞いて「そうですか」と安堵の溜め息をついたが、すぐに「えええっ!?」と驚いた。
「彼きっての申し出でね。断るには忍びなかったんだよ」
「しかし、よろしかったのですか?素性の知れない者を訓練するなど・・・・・・」
それに対し、「いや、素性の方は、だいたい見当が付いている」と言った。
「彼の体にあるマナの性質を調べてもらった結果、天使特有のものに酷似していることがわかった」
「では、あの彼は天使なのですか?」
「いや、それがそうとは言い切れないんだよ」
その言葉に、男性は首をかしげた。ヘクターが「彼は・・・・・・」と言いかけた時、突然、警報が鳴り響いた。
≪ルウェーズ地方にクルキド出現。数、三十。戦闘員はただちに出動せよ。繰り返す・・・・・・≫
「ルウェーズといえば、ほぼ隣か。すぐに出動してくれ」
男性は「はっ」と敬礼をして、急いで部屋を後にした。

―※＊※―

一方、訓練部屋。出動の警報を聞いた兵士たちが慌ただしかった。
その中で、一人の少年が一人の男性と言い争っていた。
「なんで俺は出動できないんだ!?」
「悪いが、君はあくまで訓練兵だ。実戦に出す訳には行かない」
「だが、人手が足りないんだろ?だったら・・・・・・」
「ディステリア!聞き分けてくれ」

男性が叫ぶと同時に、ディステリアと呼ばれた少年は黙り込んだ。
「シュライク隊長。出撃準備、完了しました」
一人の兵士の報告を聞き、シュライクは「わかった。すぐに行く」と言った。
「では、私も行く。留守を頼んだぞ」
駆け出す二人の姿を、ディステリアは苦虫を噛み潰すような顔で見ていた。

―※＊※―

次々と出動していく兵員輸送用のヘリを、ディステリアは黙って見送っていた。
「やっぱり、戦場に出たかったか？」
横からした声の方を向くと、ヘクターが歩いてきていた。
「仕事から離れていいんですか？あなたはこの国を治める知事でしょう？」
「いや、私は知事ではなくて市長の方だよ。どうもよそ者を嫌うのは、どの国でも同じらしい」
確かに、ヘクターはこの街の者から見ればよそ者だが、それでも国の意向を任せられているのも事実だった。
「あんたも・・・・・俺のことを怪しいと思っているのか？」
「国を担う重役の立場としては、完全に信用するという訳には行かないが、個人的には信用したいと思っている」
ディステリアは暗い顔でうつむいた。
「（できればあの人に紹介したいんだが・・・・・まだ早いらしいからな・・・・・）」
ヘクターがそう思いながらディステリアを見ていたその時、再び警報が鳴り響いた。

《ロンディノス郊外にクルキドが出現。数、一個中隊クラス。繰り返す、ロンディノス郊外にクルキドが出現。数、一個中隊クラス》
「一個中隊クラス？なら、率いている奴がいるのか？」とディステリアが言う。
「わからない。だが、ルウェーズの方へ兵が出動したこのタイミングにとなると、その可能性がある。残りの兵は・・・・・・」
言い終わらない内に、ディステリアが駆け出したので、「どこへ行く！？」とヘクターが叫ぶ。
「戦う力を持っているのに、黙ってここにいるなんて耐えられない！俺が戦う！！」
それを聞いたヘクターが「ま、待て」止めようとしたが、ディステリアはそのまま街に駆け出して行った。
「しょうがないなぁ～・・・・・・」
残ったのは訓練兵と、警備のために残した最少人数の兵士。この状況では街を守るには、現存の訓練兵の中で優秀な成績を出しているディステリアに出てもらうしかなかった。
「やれやれ。我ながらぬるい判断だ・・・・・・」
その数秒後、建物の玄関からディステリアが飛び出した。

―※＊※―

街では、異形の怪物たちが街の家々を破壊していた。ある者は翼が生え、またある者は爪が生え、またある者は一つの体にいくつもの首と頭を持っていた。そんな異形の怪物たちを相手に、人々はなす術もなく逃げ惑っていたが、人々とすれ違いに向かって行ったディステリアは鞘から剣を抜き放ち、大きくジャンプして切りかかった。
「でやあああああっ！！！」
ブン、と空気を切る音がして剣が地面に振り下ろされると、双頭の

四足歩行獣の姿をしたクルキドは中心から両断された。次、と言わんばかりに他のクルキドに方に駆け出した時、後ろに殺気を感じた。振り向いてとっさに剣で防御すると、先ほど倒したのと同じ頭のクルキドが前足を振り下ろしていた。ディステリアは剣を上に振って敵の前足を上に飛ばすと、切り返しで首を切り落とした。倒したクルキドの体が地面に倒れると同時に、後ろから瓜二つの姿をした別のクルキドが襲い掛かってきた。

「もう一体！！」

同じように剣で防御をしたその時、後ろから鳥型クルキドが足を突き出して襲い掛かってきた。寸前で反応したのでかわしたが、バランスが崩れたところに先ほどの獣型クルキドの攻撃をもろに受けてしまった。

「ぐっ・・・・・・！」

唸った後、地面に着地したが、そこに爪と巨体を持つサル型のクルキドが豪腕を叩きつけてきた。とっさに地面を蹴るが、砕かれた道路の欠片がディステリアに当たった。

「ぐっ・・・・・・くそっ・・・・・・」

連携攻撃を前にディステリアは、最初の攻撃以来、相手を倒せないまま追い詰められていた。

「（これが・・・・・実戦・・・・・・）」

今の状況は、訓練では好成績を収めていても実戦経験がない彼の心に少しずつ焦りを生み始めた。こうしている間にも、他のクルキドは街を破壊し続けている。完全に、警備兵が離れているこの時を狙っていた。実戦経験の浅い訓練兵士しかおらず、戦力が少ないこの時を。

「くそっ・・・・・だからって・・・・・・」

ギリッ、と歯軋りをして、自分の剣を強く握り締めた。

「だからって、このまま下がって・・・・・たまるか～！！！」

叫ぶや否や、ディステリアは先ほどよりも速いスピードで突っ込んだが、サル型クルキドはそれをかわし、逆にカウンターをかけて殴

り飛ばした。
「がはっ・・・・・・」
地面に倒れるディステリア。残った力を振り絞りながら起き上がると、他のクルキドたちが街を破壊していた。それを見た時、彼の脳裏に、時々、夢に出てくる光景が浮かんだ。反射的にギリッ、と歯軋りをして、彼の意識は現実に戻って来た。体が震える。思うように力が入らない。そうしている間にも、自分が戦った三体が、破壊活動に移ろうとしている。
「くっそがあああああああぁぁぁぁぁっ！！！！！」
そう叫ぶと、自分の足に剣を突き刺した。仲間の元に向かおうとした三体が再び自分の方を向くと同時に、剣を足から抜き、突っ込んで行った。だが、力が上がった訳でもなく、サル型クルキドの豪腕が彼の剣を砕いた。さらにとどめをさそうと、彼の胴体に鋭い爪が生えた拳を打ち込もうとする。今のディステリアに避けるほどの力は残っていない。敗北＝死を悟った時、彼の中に悔しさが生まれた。
「くそっ・・・・・・くそっ・・・・・・ちっくしょおぉぉぉぉっ！！！」
その時、彼の体から凄まじい魔力が放たれた。それにより、サル型クルキドの拳がはじかれる。さらにディステリアの前に、コウモリの翼のような刀身と鳥の翼のような形をした柄の剣が出てきた。
「（！！・・・・・・これは・・・・・・！！）」
その瞬間に、脳裏に再び先ほどの光景が蘇る。その町がどこか、何が起こったか、彼は知らない。だが、その中で泣いている少年は、自分自身だと直感した。
「（あの時、あそこで何が起こったかは知らないが・・・・・・もう・・・・・あんな思いはたくさんだ・・・・・・！！）」
目の前に現れた剣を掴むと、先ほどとは比べ物にならないほどのスピードで突っ込んだ。サル型のクルキドが再びカウンターをかけようとしたが、腕を構えた時にはすでに胴体が切り離されていた。場を沈黙が支配する。

ゴトッ

だが、切り離された胴体が落ちると同時に、獣型と鳥型のクルキドが一度に襲いかかった。だがディステリアは慌てず、右足を軸にして体を回転させ、剣を振った。鳥型の方は上に上がって逃げたが、獣型は切り伏せられた。残った鳥型が群れの所へ行こうとしたが、飛び上がったディステリアが振り下ろした剣で右の翼を切り落とされ、群れの中に墜落した。それに気付いた群れは一斉にディステリアを睨む。ディステリア本人は剣を肩に担いでいた。

「どうした・・・・・かかって――来いよ!!」

左腕の人差し指と中指を立て挑発すると、群れが一斉に襲い掛かってきた。

「（右から来る・・・・・・!!）」

右から襲い掛かってきた獣人型のクルキドを刀身で捕らえる。

「そこだ!!」

そのまま周りのクルキドをなぎ払った。さっきまで三体に苦戦していたディステリアだが、今度は違っていた。

「（不思議だ・・・・・・剣が軽い。まるで、俺の体の一部のようだ・・・・・）」

先ほどとは打って変わって、次々と敵を仕留めるディステリア。群れの数は最初の半数に減っていた。このままでは不利と考えたクルキドたちは、一斉に襲い掛かった。だが、彼の表情には恐れも何もなかった。

「（なんだ・・・・・このイメージは・・・・・）」

脳裏に浮かんだイメージに従い、体を左回りに円を描くように動かした。すると、彼の足元に白い光の魔方陣が浮かび上がる。そして彼は、同じく脳裏に浮かんだ名前を叫び、剣を地面に突き刺した。

「――ライジング・ルピナス!!」

叫ぶと同時に、彼の周りにいくつもの光の柱が立ち上り、周りのク

ルキドたちを消し飛ばしていた。光が収まると、そこには無数のクルキドの死体と、息を切らしているディステリアしかいなかった。
やがて体に痛みが走り、地面に膝を付く。
「（なんだ、この痛みは？戦闘のダメージ？いや、それにしては・・・・・）」
その時、死体の中から、ムカデと人が合わさったような姿のクルキドが飛び出してきた。ディステリアはすぐに動こうとしたが、逆に地面に腕をつけてしまった。彼は、己の体力が限界に近づいていることに気づいていなかったのだった。
「（ぐっ・・・・・しまっ・・・・・・）」
ムカデ型のクルキドの毒爪がディステリアを捉えようとした時、それを一陣の風が切り裂いた。
「――――！？」
振り向いた方には、麻のマントに身を包み、その下から剣を振っている旅姿の若者の姿があった。砂埃を避けるためのフードは被られておらず、こげ茶色の髪と四角いあごの顔がさらされていた。
「少年。次からは自分の体力を考えた方がいい」
謎の若者がそう言った時、後ろから三つ首の獣型クルキドが一斉に襲い掛かった。ディステリアが「危ない」と叫ぼうとしたが、それよりも早く、
「スラストーム」
若者が自分の体を回転させ、剣で作り出した風の刃でそのクルキドを一斉に切り伏せた。
「す・・・・・すごい・・・・・・」
その姿はまさに圧倒的だった。やがて、勝ち目がなくなったと悟ったクルキドの残党が、町から逃げ出そうとした。
「なっ・・・・・待てっ・・・・・・！！」
追いかけようとしたディステリアだったが、体にダメージが溜まり体力の限界だった彼に、追い駆ける力は残されていなかった。倒れたディステリアの元に、男性が駆け寄った。

「やめておけ。今の常態じゃ、追いついてもやられるのが関の山だ」
「だが――」
「今、ルウェーズに向かった守備隊の半分が、国境から戻ってきている。彼らが始末を付けてくれるだろう」
「・・・・・あんたは・・・・・いったい・・・・・」
聞いたが、ディステリアは意識を失い、道に倒れた。若者が彼を抱えると、そこへ「クトゥリア！？」と声がした。声の方を向くと、そこには武装したヘクターが立っていた。
「よお、ヘクター。いいのか？この町の市長が、武器なんかで武装して？」
「仕方ないだろ、人手不足なんだから。それより助かったよ。奴らを倒してくれて」
「よせやい。ここまでやったのはこの小僧だ。俺は最後にチョコっとね」
「えっ？ディステリアが、この群れを・・・・・？」
周りを見渡すヘクターに、クトゥリアが「ああ」と笑って答える。
「かなり早い内から見ていたが、こいつ結構やるみたいだ。まあ、内に秘めた強大な力に、振り回されている節がある」
「そうか・・・・・。まあ、立ち話もなんだ。後の始末は自警団や部隊に任せて、俺たちは退散しよう」
「ああ、そうだな。先ほどまで戦闘があった町中に君がいるとあっちゃあ、後々、大騒ぎになるからな」
そう話しながら、二人は足早にその場から退散して行った。

―※＊※―

現実か幻か、ハッキリしない。全く光がない暗闇の中に、まるで浮かぶようにディステリアの意識があった。

〔・・・・・ディステリア・・・・・・ディステリア・・・・・・〕

どこからかねちっこい声が響き、ディステリアの名を呼ぶ。

「――誰だ・・・・・・!?」

〔――力に目覚めたようだな、ディステ～リア。我はその時を待っていた・・・・・・〕

「・・・・・待っていた・・・・・・だと・・・・・・?」

〔――ディステリアよ・・・・・・我と共に来い・・・・・・」

「・・・・・・!?」

〔――我なら理解してやれる。・・・・・・お前の辛さ・・・・・・・痛み・・・・・・」

「・・・・・・何を言っているんだ。第一、貴様は何者だ!?どこにいる!」

〔――そうだったな。お前は我と会ったことがない。だが、我はお前のことを知っているぞ。おまえが生まれる・・・・・・ずっと以前から・・・・・・」

「・・・・・・何を・・・・・・言って・・・・・・」

〔・・・・・・お前は力に目覚めたばかりだ。まだ知らないことが多すぎる。おまえ自身の力のこと・・・・・・この世界がいかに醜いか・・・・・・」

その言葉に「!?・・・・・・なん・・・・・・だと・・・・・・」と、ディステリアは怒りを覚えた。

〔・・・・・怒りを覚えたか・・・・・・。やはり、君はまだ知らないようだ・・・・・・。いずれわかると思うよ・・・・・・我が言っていることが・・・・・・」

「待て!姿を見せろ!!」

〔――君の力が強くなれば、この空間の中でいずれ会えるよ。いずれ・・・・・・な」

それを最後に、謎の声は響かなくなった。

「――・・・・・・いいだろう・・・・・・」

ディステリアは、歯軋りしているような感覚を覚えていた。
「・・・・・・俺が強くなれば、ふざけた貴様の姿を拝めるのだな・・・・・・。だったら、強くなってやるよ！！」
拳を握って、高らかに宣言する。それが、自分に接触してきた者の罠だったとしても・・・・・・

第1話　少年、初戦闘（後書き）

記号（―※＊※―）は場面が変わることを表してますが、わかりづらいでしょうか。あと、前後のスペースももっととったほうがいいかな。

第2話　旅立ち

ロンディノス郊外での戦いが終わって、数時間が経過した。ディステリアは傷の手当てを受けて、市役所の医務室に寝かされていた。
「う・・・・・・ん・・・・・・」
目を開けて真っ先に視界に入ったのは、医務室の天井。
「（ここは・・・・・・俺は・・・・・・いったい・・・・・・）」
ゆっくりと体を起こすと、包帯を巻かれた腕を見る。
「（確か・・・・・・ロンディノスで奴らと戦っていて・・・・・・それで・・・・・・）」
「よお、気が付いたか？」
声がしたほうを向くと、街で自分を助けた男性――クトゥリアがドアの近くに立っていた。
「あなたは、確か町で・・・・・・」
「ああ。町のほうは、部隊の兵士たちが後始末を付けてくれているよ」
そう言って、クトゥリアはディステリアの寝ているベッドの近くに来る。
「・・・・・・あっ、あの時は、助けていただいて・・・・・・ありがとうございました！」
ベッドの上でディステリアは急いで頭を下げたが、その瞬間、体に痛みが走った。
「おいおい。医者の話じゃあ、君の体はかなりガタがきているらしいから、無茶はしないほうがいい。ああ、それと・・・・・・いい

ってことよ」
そう言って笑ったクトゥリアにつられて、ディステリアも笑った。

―※＊※―

それから数時間後。ヘクターの部屋にクトゥリアがやって来た。
「本当に久しぶりだな。・・・・・で、今回はなんの用だ?」
「言わずともわかっているだろう?例の件だ」
ヘクターはソファーに座ることを進めるように手を差し出すと、クトゥリアはそれに従いソファーに座った。それに合わせて、ヘクターも向かい側のソファーに座る。
「・・・・・で、今度はどういう頼みだ?資金はあれでギリギリだし、何より、確かなことが言えない今の段階では、君が革命を起こす危険性を懸念しかねない」
「わかっています。しかし、そのことについてはまた今度に話すとして、今回は別のお願いに来ました」
改まった態度に、ヘクターが「なんだね?」と聞く。
「あのディステリアという少年を、貸してはくれないか?」
ヘクターは「えっ?」と驚く。
「彼の中に眠る素質・力はとても高い。だが、それを伸ばすにはここは狭すぎる」
「だが・・・・・だとしたら、どこなら彼の力を伸ばすことができ・・・・・はっ、そうか」
その時、彼の頭にある考えが浮かんだ。
「確かに、君が立ち上げようとしている組織なら世界中で活動が出来るから、彼の中に秘められた力を高めるにはいいかもしれない。だが・・・・・」
「やはり心配か?私がこの世界に、混乱をもたらすかもしれないっ

て？」

「君がそんな人間でないことは、私も重々承知しているんだが、どうも国の上のほうがね・・・・・・」

「仕方ない。もっとも、なにか別の要因があるのかもしれませんが・・・・・」

複雑な表情をしたクトゥリアが目を逸らす。

「おいおい。まさかこの国の中に、君らが相手にしようとしているような、危ない組織に加担する者がいる・・・・・・なんて言うつもりじゃないだろうね？」

「可能性がない訳じゃない。いや、この国以外にも、ハルミア、ルーシア、オルバラード。可能性がある国がたくさんある」

「その、『可能性がある国』のほとんどが、エウロッパ国に集中しているというのが気になるが・・・・・・」

頭を抑えて溜め息混じりに言うと、手を下ろしたヘクターは顔を上げる。

「逆にルーシア国は可能性がある国は一つ・・・・・・だが、他の数十カ国と比べて可能性はずば抜けて高い」

「ルーシアは確か、国土が広いがゆえにそれをいくつかの地方に分けて、中心となる〈王国〉を通じて各地を収めていると聞いているが・・・・・・」

「その〈王国〉は、五年も前に陥落した」

「そういえば、そんなことを言っていたな・・・・・・」

椅子に座わったまま考え込むヘクターに、クトゥリアが続ける。

「あそこは、この国とスヴェロニア国の間にある。それと・・・・・・〈王国〉が陥落してから日が経たない頃から、国境近くの隣町に当たる〈軍事都市ルエヴィト〉で、武器商人と思しき男と何やら話をしていたらしい」

「・・・・・・君と同じように、世界中で活動できる組織を創ろうとしているだけかもしれないぞ？」

だが、「・・・・・・いや。とてもそうとは思えない」とクトゥリ

アは首を振った。
「理由は？」
「半分は勘。もう半分は・・・・・・彼らは危険度ＳＳ（ダブルエスクラス）級の武器を密輸している疑いがあるからだ。そのほとんどが、政府が指定した条約によって製造・使用を禁止されたものばかりだ。・・・・・・あれ、なんて名前だっけ」
「バカな！？彼らの国は、かつてハルミアの持ち出した大量破壊兵器によって、多くの民が犠牲となっている。なのに、それと同じことを繰り返そうとしていると言うのか！？それと、世界規模で思考されている条約くらい覚えていろ」
「あくまで、可能性の話だ。敵も目立った動きをしていないため、こちらも動きが掴みにくい」
「とても信じられん」
ソファーの背にもたれかかり呟くヘクターを見ると、クトゥリアは立ち上がってドアに向かって歩き出した。
「どこへ行くんだ！？」
ヘクターが半ば叫ぶように聞くと、ノブに手をかけて立ち止まる。
「戻るんですよ。今ここで話した全てが、すぐに信じてもらえるとは思っていない。だが、いずれ証明される日が来るだろうと、俺は思っている」
「つまり・・・・・・信じなかったがゆえに、手遅れになった・・・・・と？」
すると「ハハッ・・・・・・そんなことにはさせないよ」と、笑った。
「・・・・・・ディステリアについての話だが・・・・・・彼の返事を聞いてからでいいかね？」
「いや、もう話はしてある。決めるのは彼だ。その時は、連絡を・・・・・・」
ドアを開けると、そこにはディステリアが立っていたのでクトゥリアは目を丸くした。

「ディステリア!?いったい、いつから?」
驚いて立ち上がったヘクターに、「つい、さっきですよ」とディステリアが答える。
「・・・・・見送りにでも、来てくれたのかい?」
そう言って部屋を出るクトゥリアの背中に向かって、「俺、行くよ!!」と、ディステリアは叫ぶ。その言葉に「ええっ!?」と、ヘクターとクトゥリアが驚いた。
「ディステリア・・・・・お前・・・・・・・」
「ああ・・・・・いや、でも・・・・・・・」
戸惑うクトゥリアに、「誘っておいて戸惑うのか!?」とディステリアが叫ぶ。
「いや、そうじゃない。ただ、急すぎないか?もっとよく考えて・・・・・」
「俺は・・・・・・」とディステリアはうつむき、拳を握った。
「俺は今日の戦いで・・・・・・自分の未熟さを知った。シュライクの言うとおり、あの時、無理にでもついて行っていたら、俺はみんなの足手まといになっていた。俺はまだまだ・・・・・力不足だ・・・・・・」
顔を上げて、「だから!!」と、クトゥリアを真っ直ぐ見る。
「俺を連れて行って、鍛えてくれ。必ず強くなって、足手まといにならないようにする!」
最後に「お願いします!!」と頭を下げた。それを見たクトゥリアは頭をかいた。
「参ったな~」
「どうする?今、連れて行っても、鍛えるような施設も本拠地もないのだろ?」
それに対し、「いや、あるにはある」と右手を上げて答える。
「マナナン・マク・リールの話では、まだ俺たち、人間による開発の手が及んでいない島があるそうだ。そこを本拠地にすると・・・・・」

「ちょっと待て！マナナン・マク・リールと言ったら、隣国エリウの海洋神ではないか！？君は、そんな奴と知り合いなのか！？」
「まあ・・・・・な。それにそこは、世界各国の神様の集合場所にするつもりらしいんだ。だから使っていいかどうか・・・・・」
そこまで言うと、顔を上げたディステリアの不安そうな顔を見て、黙り込んだ。そしてしばらく考え込むと、「よし！」と手を叩いた。
「君はしばらく、あの人に預けることにしよう。その人は私が作ろうとしている組織に誘おうと思っているんだ。彼なら、君の力になってくれる」
「その人も、兵士なんですか？」
ディステリアが聞くと、「いや、魔術師だ」とクトゥリアが答える。
「えっ？でも俺・・・・・魔術なんか・・・・・」
一転して不安層な顔になると、ヘクターも不思議な顔をしている。
「クトゥリア、なんで魔術なんだ？彼が武器にしているのは、剣術の方だが・・・・・」
それを聞いて、クトゥリアが「あの戦いを見ていたが」と切り出す。
「彼が倒れる前に放った技。技のスタイルから見て、おそらくあれは中級の魔術技だろう。ただどういう訳か、自分の体のほうにもいくらかダメージを受けるようなんだ」
「ヘクターさん。なんですか？〈魔術技〉って？」とディステリアが聞く。
「〈魔術〉と〈技〉は知っているだろう。〈魔術技〉って言うのは、魔法素（マナ）を操る〈魔術〉と、武器や拳をふるう〈技〉を一緒にした技の系統なんだ。ただ会得するには、〈魔術〉と〈技〉の両方を極めなければならない。普通なら、剣術初心者であるお前が放てるはずじゃないんだ」
眉をひそめるヘクターに、「だが、俺は――」とクトゥリアが言う。
「――そいつが〈魔術技〉を放つのを見たし、大量にいたクルキドが倒されたのも事実だ。訓練者クラスの兵があれだけの数を一度

に倒すなんて、〈魔術特技〉を使ったと考えるしかつじつまが合わない」

「俺が・・・・・・そんな技を・・・・・・」

ディステリアは信じられないと言う表情で自分の右手を見る。

「ただ・・・・・・やはり訓練を受けていないからか・・・・・・魔力の制御が出来ずに体に負担をかけているようだ。君が倒れたのも、おそらくそれが原因だろう」

「・・・・・・そうだったのか・・・・・・」

それを聞いて黙り込むディステリアに、「で、どうする?」とクトゥリアが聞く。

「わかった。しばらくはその人の所にいるよ」

「そうか。では、明日にでも出発の準備をしてくれ。君は最低でも一日は安静にしてなくてはいけないのだからな。出発はあさってだ」

ディステリアは「わかった」と言うと、廊下を歩いて行った。

「あの人・・・・・・とは?」

ヘクターが聞くと、「さあ・・・・・・ね」とクトゥリアが誤魔化した。

―※＊※―

出発の日。朝早くから、町の門には旅支度をしたディステリアとクトゥリアと、見送りのヘクターが立っていた。

「いやあ、見送りご苦労」

「お前じゃない。ディステリアの見送りだ」

ヘクターの冷たい回答に、「あ、そう」と肩を落とす。

「くれぐれも、無茶はしないように。いいね」

「はい」とディステリアが頷く。

「では、行って来ます!!」

街の外へ歩き出す二人を、ヘクターは静かに見送っていた。

―※＊※―

所々に雲がある青空の下。ディステリアとクトゥリアは街道を近くの港に向けて歩いている。
「俺を預けようとしている『あの人』って、どこにいるんですか？」
「さあな。生まれはウェイスでそこに家があるのだが、彼はエウロッパ大陸を渡り歩いているからな」
「つまり・・・・・居場所はわからないと？」と、ディステリアは唖然とした。
「いや、居場所はわかる。この前会った時は、しばらくこのイグリースを旅すると言っていた。だから運がよければ会えるだろう」
「運が悪ければ・・・・・？」と、不安げにディステリアが聞く。
「なかなか会えない。まあその間、おまえの体力も上がってるだろう」
胡散臭そうな表情に加え、黙りこんで道を歩くディステリア。
「そんな顔で見るなよ～」
嘆きながら歩いているクトゥリアに、「見てませんよ」と言った。

―※＊※―

出発から昼ごろを回り、クトゥリアは自分が知っている最低限の知識を、ディステリアに与えていた。
「共に暮らすといえど、ほとんどの者は幻獣に畏敬の念を持ち、同

じ場所には暮らさず遠ざけていた。繁栄した人間は科学と魔法を手に入れ〈文明〉の中で暮らし、幻獣は〈自然〉と共に暮らしていった。この二つの種族は、長い年月の間、共に暮らす者と人と争う者に分かれ始めた」

「知っています。『人間と幻獣の関係』という本に、書いてありました。もっとも、その本は政府に回収され、処分されたようですが・・・・・・」

「・・・・・ああ、よく知ってるな。だが、なんでお前は、その回収処分されたはずの本の内容を知っているんだ?」

「ヘクターさんに見せてもらったんですよ。政府の回収令で、提出する前にちょっと・・・・・・」

すると、「ハハハハハハ。あいつも粋なことをするもんだ」とクトゥリアが笑った。

「なんで政府は、あの本を回収処分したと思う?」

「さあ?」と答えると、クトゥリアは立ち止まると遠くを見た。

「政府は、この世界には〈精霊〉とか〈魔法〉とかいうのは存在しない、という説を唱えている。それらの存在を認めてしまえば〈神〉という存在を認めることにつながり、いつしかその〈神〉を崇める一団が政府を倒そうとするんじゃないか、って恐れているんだよ」

「精霊や魔術は存在しない・・・・・・?じゃあ、俺が使ったあの力は・・・・・・?」

「間違いなく〈魔術〉だろうな。だが、お前は政府お抱えの騎士団に所属していただろ?」

「えっ?ええ・・・・・・」

「世間には精霊や魔法を否定している一方、政府はそうした力に通じる者を監視下、もしくは傘下に置いていて、なおかつ不問にしている。『保護』の名の元に・・・・・・」

「違うのか?」

聞いたディステリアに、「大違いもいいとこだ」と呆れるように言う。

「政府は結局、戦争が起きた時に戦局が有利になる『手駒』を欲しているだけなんだよ。それも、世間から保護してやった恩を着せて」
「・・・・・ひどい話だ」
そう呟くと、眠っている時に聞こえてきた謎の声のことが頭をよぎった。
「まあ、一方でそういった企みを看破されていることを恐れている。監視しているといっても行動は制限されていないし、民間人と変わらず自由だ。だから、この事実を知っているのは神ぐらいしかいない」
「・・・・・・なら、なんであなたは知っているのですか？あなたは・・・・・・神？」
「違うよ」と、クトゥリアは右手を振った。
「さっきの話の続きだが・・・・・時が経ち、文明も発達し、人の数も増えた頃。人間たちは自分たちの住処を確保するために、森を切り開き、山を削り、海を埋め立て、空を汚し始めた。そればかりか、先人が重んじてきた神や精霊たちをないがしろにし、その住処に押し入り破壊していった。今まで人間たちを優しく見守ってきた神々もこればかりには腹を立てたが、動かなかった」
「なぜ？」と、ディステリアが聞く。
「その理由は少々、複雑なものだったんだ。古来、人間たちは神々に祈りを捧げていた。祈り、敬っていれば、自分の身に危険が迫った時に助けてくれる、幸せを与えてくれる。そう信じられていた。だが、それでは人間たちが自分たちの手で幸せを掴もうとしなくなる可能性や、神様が助けてくれるから何もしなくていい、という考えが定着する危険性が出てきた。それらを危惧したため、神は必要最小限の介入しかしないようにし、人間たちとの距離を置くことにした」
一泊置いた後、再び話し出す。
「しかし・・・・・時の経過と共に、神などの超常的存在の介入がない理由は『それらは虚無の存在』とされ、大多数の人間に忘れ

去られたり、知られなかったりした。『我々はこの世界に存在する全てのものを見ることができる』という自惚れも、『神々が虚無の存在』という考えに拍車をかけた・・・・・・」

「だから・・・・・〈神〉と言う存在の否定に・・・・・・？」

「ああ。ある時、精霊たちは自分たちの住処を守るため、人間たちの開発を妨害した。精霊たちと人間たちとの間で小競り合いが続いていたが一触即発の状態で、いつこの二種族の間で大きな争いが起きてもおかしくはなかった。やがて人間同士でも争い始め、世界は荒れて行った。それから、〈人間〉には数え切れないほどの時が流れた」

「自然破壊による環境悪化が、世界各地で起こっていることは知っています。しかし、なぜあなたはそれだけ詳しいのですか？」

それは、ディステリアが今、最も強く持っている疑問。だが、

「いずれ教えるよ。いずれ、な」

そう答えると、クトゥリアは先を急いで行った。

―※＊※―

「・・・・・いずれ君も理解するよ・・・・・・この世界・・・・・人間が支配するこの世界が、いかに醜く、存在するに値しないことを・・・・・・」

闇に包まれた謎の部屋。その中に座る一人の男が、笑みを浮かべて呟いた。

「ソウセツさま。よろしいですか」

「デズモルートか。なんだ？」

「そろそろ、ことを起こそうかと思います。調査はもはや、十分と・・・・・・」

「・・・・・・その慢心が、作戦の失敗を招く。が、そろそろ頃合

かもしれない。・・・・・・よし、やるといい」
「ハハッ、では、早速」と答え、頭を下げると、デズモルートと呼ばれた影の気配は部屋から消えた。
「・・・・・・ククク。第一段階の始まりだ・・・・・・」
部屋の中の男は、不気味に笑った。

第3話　妖精騒動（前編）（前書き）

しばらく妖精たちが登場します。あとがきで解説が欲しければお知らせください。

第3話　妖精騒動（前編）

イグリースを旅立ってから、数日後。

ディステリアとクトゥリアは、とある丘の近くに差しかかっていた。

「そろそろ、君が持っている力を制御する訓練でもしようか」

「賛成。そろそろ、この痛みがうっとうしく思えてきました・・・・・」

苦笑いしながら、右腕に手を添える。まだ強く物を握れない右手は、動かそうとするとまだ少し痛みをともなった。

「あれから数日。かなり戦ったな」

「おかげで・・・・・剣の腕だけは上がっている気はします・・・・・」

その言葉が気に触ったのか、クトゥリアは顔をしかめた。

「な・・・・・なんですか・・・・・？」

「言うじゃないか。なら、今の君の腕がいかほどのものか、私直々に試そうではないか」

ゆらりと揺れるようにディステリアのほうを向くと、クトゥリアは腰の袋から短剣を抜いた。

「えっ・・・・・ちょっと待ってください・・・・・」

「戦いに――待ったはない！！」

そう叫ぶなり、高速の刃がディステリアに襲いかかる。ディステリアはとっさに、どこかから自らの剣を召喚して防いだ。

「――反射神経はいいじゃないか。あとはどうだ！？」

一端、後ろに着地すると、連続で短剣を振る。好戦的な笑みを浮か

べるクトゥリアに対しディステリアのほうはと言うと、刃の軌道を見切って剣で防ぐので精一杯だった。
「どうした!?そんなのじゃ、俺には勝てないぞ!」
「あなたに勝てるなどという自惚れは持っていない。だが、せめてあなたに近づくくらいなら・・・・・・」
「冷静だな。だが、そう思っていては、お前は真の意味で強くなれない!!」

ガッ!

力を込めた一撃に、「うっ」と剣を飛ばされた。ディステリアの剣は宙を舞い、草原の中に刺さった。急いで拾いに行こうとするも、クトゥリアが喉元に短剣の刃を向けていた。
「――どうだ、負けた感想は・・・・・・?」
「・・・・・命のやり取りで負ければ・・・・・・死にますよ」
不機嫌そうな顔のディステリアに、クトゥリアが笑う。
「・・・・・だが、お前は生きている。今の感想は・・・・・・・?」
ボソボソした声に、「・・・・・・聞こえないぞ」とわざとらしく聞く。
「――そりゃあ・・・・・負けたら、悔しいでしょ・・・・・・・」
「――よろしい」
笑顔になって短剣をしまうと、「そうだ」と言った。
「お前の持つその剣、世間に出回っている剣と違うな」
「そ・・・・・そうですか?」
よく見てみると、確かに郊外でクルキドと戦う時まで自分が使っていた剣と比べて、形は違っていた。
「今まで使ったことのない――だが、どういうわけか、俺の手に合うんだよ・・・・・」

不思議そうに、自らの剣を見つめる。
「・・・・・どうせなら、名前をつけないか？」
「名前？」と首を傾げたディステリアに、「ああ、お前だけの名前」とクトゥリアが言う。
「――そうだな。天使のような純白の鳥の翼と、悪魔のような漆黒の翼からなっているから・・・・・『天魔剣』って言うのはどうだ？」
「『天魔剣』・・・・・天使と悪魔の名を、半分ずつ与えられた剣・・・・・確かに――」
名付けられたばかりの剣を、ディステリアは空へ掲げる。
「――天使と悪魔の翼を、合わせ持っている・・・・・」
その時、遠くのほうから犬の鳴き声が聞こえて来た。
「あの吼え声は・・・・・やばい！早く宿を探さなきゃ！！」
慌てるクトゥリアに、「どうしたんだ？」とディステリアが聞く。
「あの吼え声はおそらく――」
説明している間に、「ワン！」と二回目の鳴き声が聞こえた。
「とにかく、急いで宿を探さなくちゃ。急いで――」
そこに、「こっちだ」と誰かの声がした。二人が声の主を探していると、
「こっちだ！」
また聞こえた。声の主を見つけると、赤い帽子とマントを身につけ、長靴を履いたぶち模様の猫が二本足で立っていた。
「君は、まさか――」
クトゥリアの声をさえぎり、「それは後で、早く」と猫が駆け出す。
二人が全速力で追いかけ、廃墟に差しかかると三回目の犬の吼え声が聞こえた。猫が後ろを振り向いたが、何事もなかったことを知るとホッと胸をなで下ろした。
「危なかったですね・・・・・。後ちょっと遅かったら・・・・・」
「遅かったら、どうなってたんだ？」

息も絶え絶えに聞くディステリアに、「八つ裂きにされていた」と青い顔のクトゥリアが答える。
「えっ・・・・・・？」
「その人の言うとおりです。私はケットシー。猫の妖精です」
「あの吼え声はクーシーという妖精犬のものだ。三回吼える前に宿を見つけなければ、野にいる旅人はあっという間に八つ裂きにされる」
「マジかよ・・・・・・」と、状況を理解したディステリアも青い顔になった。
「とはいえ、今回は結構、危ないかもしれない。ここは間違っても宿とはいえない・・・・・・」
周りを見渡すケットシーに、「大丈夫・・・・・・だと思う」とディステリアが言う。
「そうだな。もしもクーシーが襲いかかってきたら、それはそれで訓練になる」
「おい・・・・・・」と睨むディステリアに、「もしもだ」とクトゥリアが付け加える。
「とにかく、私が様子を見てきます」
そう言ってケットシーが去ると、「・・・・・・野宿、だな」とクトゥリアが溜め息をついた。
「・・・・・いったい、何日連続だよ・・・・・・」
この数日間。二人はまともな宿に泊まっていなかった。というのも、謎の怪物クルキドを倒したり、襲いかかってくる魔物を倒したりと、結構、手間取っていた。
「（それもこれも・・・・・・俺が未熟なせいか・・・・・・）」
苦々しげな表情で自らの右手を見るディステリアに、「焦るなよ・・・・・・」と、クトゥリアが静かに言った。
「焦ったって、なんの得にもならないぞ。とにかく、旅をするに当たってお前には野宿に慣れてもらわないと、な・・・・・・」
「・・・・・・もしかして、そのためにわざと？」

「とんでもない。ただ、町に辿り着けないのを利用しているだけさ・・・・・」
そう笑うと、クトゥリアは雨風をしのげそうな廃墟を探し始めた。
「――ああ、あった、あった。ここがいいだろう」
ちょうど手ごろな廃墟を見つけた時、「おーい、クトゥリア～」と、遠くでディステリアの声がした。
「向こうに面白そうなものを見つけたぞ～」
「・・・・・面白そうなもの？」
クトゥリアは、好奇心より嫌な予感を感じながら、ディステリアの声のするほうに駆けて行く。すると、その先に巨大な城が現れた。
「ここなら、雨風は確実にしのげるんじゃないか？」
「確かに。ただし、外見だけが残っていても・・・・・・」
門についている鉄の扉を押し開け、中に入る。
「――無意味なんだけど・・・・・ふむ、これは使えそうだな・・・・・」
「だろ？」とディステリアが言った後、
「・・・・・奴が出てきたら修行にもなるし・・・・・・」
と呟いた。だが、ディステリアには「奴」という程度しか聞こえなかった。
「よし。今日はここに泊まろう」
「よっしゃ」とガッツポーズを握ったディステリア。だが、その様子を上の手すりから見下ろす影があった。

―※＊※―

誰もいなくなった城の中は、どこもボロボロに寂れていた。床に敷かれた絨毯も、壁のかけてある絵も、壁に張ってある壁紙もボロボロだった。

「（見るに耐えんな・・・・・・。だが、今はそんなことも言っていられんか・・・・・・）」

場内を散策して辿り着いた一室には、立派だが上から垂れる布がボロボロに破れた、大きなベッドがある。中に入ってよく見ると、シーツはまだ綺麗なので、寒さをしのげそうだった。

「（使えそうだな。とりあえず、クトゥリアに報告を・・・・・・）」

部屋から出ようと後ろを振り向いた途端、「う・・・・・うーん」と女性の声がする。ハッと後ろを振り返ると、ボロボロなベッドの中で、唯一、シーツがずれ、黒髪の女性が体を起こした。

「（えっ・・・・・使ってた人がいたのか・・・・・・！？）」

寝ぼけ眼でこちらを向くと、少し微笑んだ。一瞬、彼女の顔を見てぼんやりしたディステリアだが、すぐハッとなって頭を振った。

「すまない。ここは君の部屋だったか。すぐ、出て行くから・・・・・」

「待って・・・・・・あなた、誰・・・・・・？」

「た・・・・・・旅の者だよ。勝手に上がってすまない。ここは、君の城かい？」

「いいえ。私も旅の途中。野宿の代わりにここに泊まっているの・・・・・・」

「そうか。すまなかった」

部屋を後にしようとしたディステリアを、「ちょっと待って」と女性が止める。何かと思い再び女性の方を向くと、服がはだけた姿の女性が、ベッドの上で四つん這いになってこっちに迫ってきていた。

「ね～ぇ、お姉さんと気持ちいいこと・・・・・・しない？」

人差し指を口に当て、色っぽく迫る女性に危険を感じたディステリアは、反射的に彼女を蹴飛ばした。宙で回転したその女性は、一回、床に手を着いた後、再び中に待って足から着地する。

「案外やるじゃない、ボウヤ」

色っぽく笑う女性に、ディステリアは寒気を感じた。

「（・・・・・なんだ・・・・・・・こいつ・・・・・・・）」
「おーい、使えそうな部屋は見つかったか？」
ディステリアが警戒を強めたその時、クトゥリアが入ってきた。二人の視線を集めたクトゥリアは、ディステリアと服がはだけた女性を交互に見比べた。
「――――邪魔して悪かった。続けてくれ」
「ちょっと待て～！！」
出て行こうとしたクトゥリアに、ディステリアが叫ぶと、彼は閉めかけたドアを再び開けた。
「――――冗談だ。しかし、なぜここにサキュバスがいる？確か棲んでいるのは、ムルグラント国だったはずだが・・・・・・」
「なんだよ、サキュバスって」
「男性の夢に現れて精気を吸い取る、女夢魔だ」
「なるほどな」と、素手で身構えるディステリアに、サキュバスが笑う。
「私に素手で挑む気？止めときなさい――――」
それをさえぎり、「違うぜ」と呟くと、ディステリアは何もない空間に手をかざす。手の下に青い光の魔法陣が現れ、その中から黒い刀身と白い柄を持つ、翼を模した剣が出てきた。
「（・・・・・・間違いない。あれは〈アストラル〉。精神と肉体の狭間にある空間から呼び寄せている・・・・・・）」
「なっ・・・・・・どこから・・・・・・」
驚くサキュバス。だが、理解する暇を与えず、ディステリアは彼女に切りかかった。轟音が響き、廊下を貫通して部屋の壁に大きな穴を開ける。
「おいおい、城を壊すなよ・・・・・・」
クトゥリアがそう呟いた時、ディステリアとサキュバスは城に入ってすぐの広間に飛び出していた。
「よし、ここなら思いっきり――――」
「それはこっちも同じよ！！」

強気なサキュバスの声にその方を向くと、彼女は背中からコウモリの翼を生やし、両腕の爪を全て伸ばしていた。
「サキュバスの戦闘形態(バトルフォーム)！！」
「色気だけだとおもったら、大間違いなんだよ！！」
サキュバスの右腕の爪が、ディステリアに迫る。剣の刃で防御するものの、受け切れなかった何本かが彼の肩を掠めた。
「くっ・・・・・・」
その傷から滴り落ちた血が、さらなる敵を呼び寄せる。
「・・・・・・血の・・・・・・匂い・・・・・・」
一方。空中のサキュバスは、ディステリアの上の位置を取り、そこから急降下をかける。
「安心しろ。殺しはしない。ぼんやりとだけ意識残して――――」
急降下の勢いを攻撃に乗せ、連続で爪をディステリアにぶつける。
「――――しゃぶり尽くしてやるよ！」
「――――そんなの・・・・・・願い下げだ！！」
攻撃の合間に見えた隙を突き、ディステリアは思い切り剣を振る。
刃は空を切ったものの、その剣速は衝撃波となり、サキュバスの体に直撃した。
「がっ・・・・・・！！」
バランスを崩し、床に向かって落ちだしたサキュバス。倒したと思ったディステリアだが、そこに襲いかかる何者かの影を見て、反射的にサキュバスを庇い、剣で何者かの攻撃を防いだ。
「・・・・・・っ！？」
突然の自分の行動に戸惑いの色を隠せないディステリアは、飛びかかってきた何者か、血のように赤い帽子を被った老人を見据える。
「っ！・・・・・・おおッ！」
ガッ！
剣を振り弾いたのは、赤く血塗られた老人の爪だった。サキュバス

ほど長くはないが、太く鋭い円錐形で、威力は高そうに思えた。
「・・・・・なんなんだ、次から次へと・・・・・・」
床に落下したサキュバス。すぐ後に着地したディステリア。同時に着地した謎の老人に、ディステリアは剣を構えて警戒するも、飛びかかることはできなかった。
「（・・・・・何者だ・・・・・・）」
「――――レッドキャップ・・・・・・」
突然、聞こえて来た声にディステリアは驚き、思わず声のしたほうを向いてしまう。
「――――争いが耐えなかった呪われた古城や、戦場や殺戮現場の跡に棲み、そこに行き暮れた旅人が仕方無しに止まると、肩に担いだ斧で打ち殺し、帽子を新しい血で染め直すという」
エントランスから続く階段の先には、腕を組んで手すりに座ったクトゥリアの姿があった。
「――――人間の力では対抗できないが、十字架を向けられると一本の歯を残して退散する・・・・・らしいのだが、斧を使ってないところを見ると、必ずしも定説どおりではないようだ」
「――――博識だな、小僧。斧というのは・・・・・」
そう呟いたかと思うと、レッドキャップは背中に手を回し、どこからか取り出した斧を構える。
「なっ・・・・・あいつも、どこに武器を・・・・・」
「おそらく、お前と同じだ」
クトゥリアの言葉に、「えっ・・・・・？」と戸惑う。
「そいつと戦うのも修行の内。ただし、殺すなよ。戦闘不能にしろ」
クトゥリアが言うと同時に、レッドキャップが襲いかかった。
「そんな――――無茶ですよ！こんな相手を殺さずに――――」
そう言っている間にも、襲いかかって来たレッドキャップが、斧を振って猛ラッシュをかける。対するディステリアは、それを剣で防ぐので精一杯。
「ここは彼の家なんだろうし。もしそうだとしたら、勝手に上がり

こんだ俺たちや、そこのサキュバスに責任があるわけだし・・・・・・」

「ええい、わかったよ！！」

バックステップで後ろに下がったディステリアに、レッドキャップが斧を振り上げて襲いかかる。だが、ディステリアはそこを狙って、剣の刃先を床に向けた。

「ライジング・ルピナス！！」

天井に向けて上る、幾本もの光の柱。だがディステリアは軌道をやや外側に調整しており、うまい具合にレッドキャップの肩を掠めた。

「ッ！？」

意外な攻撃に驚くレッドキャップ。だが、その隙を突いてディステリアが飛び上がった。

「どぉぉりゃあああああっ！！！！」

渾身の力を込めた思い切りの蹴り。レッドキャップの顔にクリンヒットし、床に叩きつけられたレッドキャップは気を失っていた。

「ふう・・・・・見たか！！」

ガッツポーズをとるディステリア。床に倒れたままそれを見ていたサキュバスは、そのまま床に倒れ意識を失った。

第４話　妖精騒動（後編）（前書き）

考えてみれば、アストラル界の定義がめちゃくちゃだ。劇中じゃ、『未解明』で済ませてるけど、作り込みの甘さが出ちゃったか・・・・。

第４話　妖精騒動（後編）

夜も更けだした頃。ディステリアとクトゥリアは広間に寝袋などを広げて、寝る準備をしていた。ディステリアが戦ったサキュバスは、最初に彼女と会った部屋に寝かせており、レッドキャップは別室に閉じ込めている。と言っても、彼の怪力を持ってすれば、簡単に出られるだろうが。

「・・・・・・とりあえず、これで一晩は明かせるだろう」

城の中だったが何者かの奇襲を用心したテントを張り終えて、クトゥリアは一息ついた。

「・・・・・・それより、今回はこれでいいのか？」

「ん？・・・・・・ああ。あのサキュバスとレッドキャップのことだろ。確かにあいつらは、どちらも危険度は高いから、野放しにするべきではない・・・・・・」

「なら・・・・・・」と言いかけるディステリアを、「だが」とさえぎる。

「――――あいつらは〈人間〉という種に対する害意を示していない。その場合、相手にどれだけ『人間という種に対する害意』を持つ可能性が高くとも、討伐は許されない」

ディステリアが世話になっていた騎士団。いつか町の治安を守るこの組織に入る時のため、その決まりや規律も勉強してきた。だがそれには、クトゥリアの言ったような内容のものはなく、『人間という種に害を及ぼす可能性がある種族は、例え行動を起こしていなくても、見つけ次第討伐せよ』という規律があり、その対象となる種族の名前が書かれたブラックリストまで存在していた。

「・・・・・聞いたことないですよ、そんな規律・・・・・・・」
「――――当たり前だ。俺が作った」
「なんだよ、それ」
「ただ作っただけではない。それが規律になっている組織を作ろうと持っている。いや・・・・・今、そんな組織を作っている」
今のディステリアには、クトゥリアの言っていることの意味が理解できなかった。
「・・・・・それにしても、俺の武器はどこから・・・・・・」
「あれはおそらく、〈アストラル界〉から召喚されるのだろう」
「〈アストラル界〉？なんですか、それ？」
「精神と物質、〈意識〉と〈肉体〉の間にある星状世界のことらしいが・・・・・詳しくは俺も知らない。存在が示唆されている程度で、証明はされていない・・・・・・」
「なんだよ、それ」
苦い顔をして言おうとした時、ディステリアは右手に焼け付くような激しい痛みを感じた。顔をしかめて右手を見ると、火であぶられたかのように焼け爛れていた。
「これは・・・・・どうなって・・・・・・」
「・・・・・わからん。だが、どうやらお前が魔術特技でダメージを受ける理由は、ただ単に使いこなせないだけではなさそうだ・・・・・」
他にも何かある。クトゥリアはそう睨んでいた。
「とりあえず、休むことが優先だな。回復薬（ポーション）を飲んで、一応、リカバークリームを塗っておけ」
言われたとおり傷に薬を塗り、片づけると寝袋に入る。
「お休み～」
とりあえず休める。ディステリアのその期待は、数秒後に打ち砕かれた。
「おわ～、よせ、やめろ～！！」
「ん？なんだ・・・・・？」

体を起こした途端、城の割れかけた窓を突き破って、背中に羽が生えた一匹の犬が飛び込んできた。その犬の背中には赤い帽子とマントに長靴を身につけた猫、ケットシーが馬乗りになっている。
「やめろ。落ち着け～！！」
言葉からしてなだめているようだが、犬のほうは「グルルルルル」と唸りながら暴れていた。
「ちっくしょ～・・・・・・なんなんだ！！」
「あの犬、もしや・・・・・・」
「――――落ち着け、クーシー！！」
クトゥリアの読みどおり、この犬は妖精犬クーシーだった。
「三回吼えるまでに宿を見つけなかった旅人を引き裂く、という本能によって、ここまで来たようだな・・・・・・」
「落ち着いている場合か！？」とディステリアが叫ぶと、背中のケットシーが投げ飛ばされた。
「いててて・・・・・・。あっ、お二人さん。こんばんは」
「はい、こんばんは」
「・・・・・・こんばんは」と挨拶するディステリアだが、すぐ我に返る。
「――――じゃない！どういうことだ！？宿を見つけたら襲いかからないんじゃなかったのか！？」
「それが・・・・・・廃墟に着いた時点じゃ、宿を見つけたというわけではないらしく――――」
ケットシーの説明を遮り、クーシーがディステリアに襲いかかって来た。とっさに天魔剣を取り出し、噛み付きをガードする。すぐに口を離したクーシーは、前足を振りかざして攻撃して来た。
「なんで爪が鋭いんだ！妖精犬だろ、こいつ！！」
「そうは言っても」と言いつつ、クトゥリアはケットシーと共に遠くで観戦していた。
「あの・・・・・・助けなくていいんですか？」
「これくらいのことで生き残れなくては、これから先も同じだ・・・

・・・」

ケットシーが首を傾げた瞬間、「でやあああああっ！！」とディステリアがクーシーを吹き飛ばした。

「ガフッ・・・・・グルルルル・・・・・・」

体を低くして、いつでも飛びかかれるように低い体勢をとるクーシーに、ディステリアも天魔剣を構え直す。

「（旅人を襲う可能性があるということは、危険だな・・・・・・。害意も持っている。ここは・・・・・・）」

痛みがない左手で天魔剣の柄を、強く握り締める。

「――――退治する！！」

「そ・・・・・そんな」

立ち上がって声を上げたケットシーに、「大丈夫だよ」とクトゥリアが話しかける。

「妖精（シー）の塚からあいつを止めるために飛び出したのは、お前だけじゃないはずだぞ」

「あっ」とケットシーが呟いた瞬間、ディステリアとクーシーが飛び出した。

「だぁあっ！！」

天魔剣とクーシーの爪がぶつかる。だが、力はディステリアのほうが強く、クーシーは階段側の壁に叩きつけられる。トドメを刺そうとディステリアが飛びかかった瞬間、クーシーが突き破った窓の左右にある窓が割れ、二つの影が飛び込んできた。

「――――！？」

気付いたディステリアが後ろを振り返り、天魔剣を振る。飛び込んできた影の片方は金属音をさせて後ろに飛び、もう片方はクーシーの前に立ちはだかる。

「（なんだ・・・・・・こいつら）」

影の正体。一人は中世の騎士のような格好をしており、もう一人は頭が犬の形をしている人間のような姿をしていた。

「英雄妖精とも呼ばれるディナ・シーと、力の弱い妖精たちのボデ

ィーガード、スプリガンか。さあ、どうする・・・・・・」
あぐらをかいた膝の上に肘をついたクトゥリアとは裏腹に、ディステリアは新たな敵の出現に警戒を強めた。
「スプリガン。クーシーを頼む」
「言われずとも」
倒れているクーシーを抱えると、スプリガンは横飛びでその場を離れた。腰の剣を抜いたディナ・シーに、ディステリアは体に重圧を感じていた。
「（・・・・・こいつ・・・・・できる。俺よりも・・・・・ずっと・・・・・）」
隙のない構えに攻められないでいるディステリアに、ディナ・シーが切りかかってきた。ギリギリ見えるほどの高速連撃に、ディステリアは防御が精一杯だった。
「（やっぱり・・・・・できる・・・・・！！）」
このまま接近戦は不利と感じ、一端、距離をとる。
「（・・・・・さて、どうするか・・・・・）」
広間の中を走り回っていると、一角にうずくまっていた何かが、「ぐんばああ！！」といきなり声を上げた。
「うわぁっ！？」
ディナ・シーとの戦闘中であるにも拘らず、驚いて飛びのくディステリア。そこにいたのは、巨大な馬のような、ロバのような姿をした何か。
「な・・・・・なんなんだよ、こいつは！？」
「ショックだな」とクトゥリアが答える。
「ショック？ショックって、衝撃とかそういう意味の・・・・・？」
「ああ。人を驚かせるのが非常に好きなボギーの一種でなぁ、その驚かせ方が強烈で引き付けを起こすため、その名がついたんだ。犬や牛の姿に変わるもあり、驚かすため手段選ばない」
「野郎」と攻撃しようとしたら、「やめとけよ」とクトゥリアが止

めた。
「――不用意に手などを出すものなら、手に噛み付姿を消す。その痕は一生消えないという。それでもやるなら、止めないぜ」
「ぐっ」と動きが止まったディステリアに、ディナ・シーが剣を向ける。
「・・・・・？なぜ、隙を突いて来なかった？」
「敵の不意を突くなど、我らの騎士の誇りを汚す・・・・・・」
そう返したディナ・シーに、ディステリアは天魔剣を構え直す。
「何を言っている。不意打ちも立派な戦法だｒｐ。騎士とはいえそれをしないとは、余裕か？」
「・・・・・相手が何者であろうと、正々堂々戦い打ち破る。それが我らの騎士道だ」
「そうか」と言いつつ、ディステリアは内心ホッとした。
「――我が役目。それは騎士道のもと主に仕え、妖精たちを脅威から守ることなり。貴様が妖精にとっての脅威となるなら、容赦はしない！！」
「（――！！・・・・・・守る・・・・・・）」
その言葉に、ディステリアが固まる。
「（・・・・・俺はなんのために戦う・・・・・・なんのために力を求める・・・・・・）」
自問する度に、天魔剣の剣先がだんだん下がり始める。
「（・・・・・・俺は・・・・・・）」
「どうした！？」の声で我に返り、ディナ・シーを睨みつける。
「（！？さっきと目つきが変わった・・・・・・！？）」
「――あんたと同じように、守るために戦う。戦う力を持たぬ者・・・・・一方的に傷つけられる者を・・・・・守る！！」
「――ならそのために、己が傷つき、重荷を背負う覚悟があるか！！」
「ある！！」と叫ぶと、「よかろう」とディナ・シーが叫んだ。
「その覚悟・・・・・全て我にぶつけてみよ！！」

その瞬間、ディナ・シーの体から放たれる闘気が膨れ上がった。
「いくぞ！！」
それでも臆することなく、ディステリアは突っ込んだ。それから数十分、城の中で金属音が響き渡り、夜は更けていった。

―※＊※―

「汝の覚悟、しかと見せてもらった。機会があれば、またどこかで会おう」
ディステリアと戦ったディナ・シーは、他の複数のディナ・シーと共に夜空に飛んでいく。馬の中には、ケットシーやクーシー、ショックを乗せているものもいる。
「なんだったんだ・・・・・・あれは・・・・・・」
疲れきった顔のディステリア。どうやら、勝負はつかなかったらしい。
「あれはディナ・シーと言ってな。元は、トゥアハ・デ・ダナーンと呼ばれる種族がなったとされる妖精たちなんだ」
「なっ・・・・・・トゥアハ・デ・ダナーンって・・・・・・この国の神々じゃないか・・・・・・」
「そうだ。一部の者はティル・ナ・ノーグに逃げ、一部の者は地下に逃げた。その地下に逃げた神々が、力を失い妖精になったといわれている」
「だが・・・・・・トゥアハ・デ・ダナーンの神々は、今も健在だ。だとすると、矛盾が生じるぞ・・・・・・」
それをごまかすように、「あれを見てみろ」と空を指差した。
「あいつらの騎馬行列は妖精の騎馬行（フェアリ・ライド）と呼ばれていて、結構、有名なんだぜ」
「・・・・・・精霊の起こす神秘って奴ですか？」

「おいおい。精霊と妖精は全く別物だぜ」
「同じようにしか思えないけど？」と聞くディステリアに、クトゥリアは溜め息をついた。
「精霊の体を構成しているのは、俺たちの体を構成している〈物質〉とは違うんだよ」
「そうなのか・・・・・？」
「一説によれば、精霊は自らの魂を核に大気中のマナを集めて、〈魂殻（こんかく）〉という体を構成しているんだ」
「妖精はどうなんだ・・・・・？」
その質問に、「えっ？あ・・・・・ああ・・・・・」と詰まった。
「妖精は精霊と違い霊的存在ではなく、自然界の中に暮らすんだ・・・・・」
「ああ・・・・・それで？」
「しかし、いつしか人間とそりが合わなくなり、自分たちの世界〈妖精界〉に移り住んだ。人間界と同じように〈物質世界〉のようだが、〈精神世界〉のようなものでもある」
再び、「それで？」と聞くディステリア。
「妖精界は人間界と比べて、時間の流れが遅い原因は、未だ不明のままだ・・・・・」
三度、「それで？」と聞くと、クトゥリアは観念したようだった。
「すみません。妖精と精霊の違いは、まったくわかりません・・・・・」
観念したクトゥリアに、ディステリアは溜め息をついた。

翌朝。

―※＊※―

「・・・・・う・・・・・・・ん・・・・・・・？」
サキュバスが目を覚ました時には、破れかけたカーテンがかかった窓から朝日が差しかかっていた。
「・・・・・・あたし・・・・・・どうして・・・・・・・」
サキュバスは昨日までのことを思い出す。
「（・・・・・故郷から飛び出して、雨が降ってきて、この城に逃げ込んで、ベッドに寝て、それから・・・・・・・）」
ハッ、とディステリアたちのことを思い出した。
「そうだ、あいつ！！」
「俺がどうかしたか？」
声のしたほうを向くと、トレーを持ったディステリアが間ドアの前に立っていた。
「――お前は！！」
向けられた警戒など気にもせず、部屋に入ってきたディステリアは「そらよ」と、ベッドの側の小棚にトレーを置く。上にはインスタントのコーンスープと、一切れのパンが乗っていた。
「・・・・・何・・・・・これ・・・・・・」
「インスタントコーンスープとパンだ。旅人には結構、当たり前だ」
手を伸ばそうとしたサキュバスだが、すぐに引っ込めてディステリアを睨んだ。
「毒とか入れてるんでしょ！この中に！！」
「フン」と鼻で笑うと、トレーの上に乗っているパンをちぎり、自分の口の中に放り込んだ。
「ちょっと！？」
驚いたサキュバスに目もくれず、パンをかんだディステリアはそのまま飲み込むと、サキュバスに笑ってみせた。
「そら見ろ。毒なんて入ってないだろう。だいたい、そんなやり方、俺は好かん」
「・・・・・スープに入ってるかもしれない・・・・・・」
「疑い深いな」と頭をかいたディステリアは、スープの入った入れ

物に手を伸ばす。だが、「ま・・・・・・待って」と止められた。
「・・・・・・なんだよ」
「・・・・・・せ・・・・・・せっかくあんたが作ってくれたんだから、た・・・・・・食べてやっても――」
「ああ。これ作ったの、俺じゃないぜ」
「え・・・・・・」と呟くと、ディステリアの後に部屋に入ってきた、もう一人の男の顔が浮かんだ。
「クトゥリア、俺の連れが作ったんだ。ちゃんと食えよ」
そう言って部屋を出て行ったディステリアの後ろ姿を見て、サキュバスは胸が高鳴っていることに気付いた。
「な・・・・・・何ときめいてるの!?私はサキュバス。男を惑わす夢魔よ!!」
そう自分に憤慨してパンを食べたが、一気に詰め込んだので喉に詰まってしまった。
「・・・・・・覚えてなさいよ。この借りは、いつか必ず返してやるんだから・・・・・・」
心にリベンジを誓っていた。ちなみに、この城の主のレッドキャップは、このサキュバスの色気に負けて彼女を襲わなかったという。

―※＊※―

城の外。
「いいのかよ。トレーとか置いたままで」
「あれは旅人用の使い捨て品だ。もっとも、使おうと思えばいくらでも使えるが・・・・・・」
「なんだ、それ」と愚痴るディステリアを、「まあまあ」とクトゥリアがなだめた。
そんなことを話しながら城を離れるディステリアとクトゥリアの後

ろ姿を、部屋の窓からサキュバスが見ていた。

第４話　妖精騒動（後編）（後書き）

『人間という種に対する害意』の部分に『・・・』のルビを打ちたいのですが、どうも上手く行きません。

ディナ・シーはディステリアの覚悟を見届けたといいましたが、彼の覚悟はまだまだ脆くて不安定。これから先どうなることやら。

あと用語説明。劇中でするのもあれなので。

リカバークリーム
ポーションと同じ治癒効果を持った塗り薬。ポーションの名前を持っていないのは、元々ポーションが『液体飲料』を指す言葉だから

第5話　二人のアニス（前書き）

元々、特別編のつもりで書きましたが、本編として投稿します。この回から、ディステリアはクトゥリアにタメ口になります。

第5話　二人のアニス

イグリースという島国にある町、ロンディヌスに住む見習い騎士の少年――ディステリアは、旅の男性――クトゥリアになんらかの才能を見出されて、それを生かす力を伸ばすため、修行の旅をしている。
旅の目的が修行であることはもちろんだが、クトゥリアが持っている本当の理由は別にある。
彼が本当の目的は、ある男性を探すこと。彼らは訳があって世界を周っており、特にクトゥリアと彼が探す男性は主にエウロッパ内を周っている。近々、合流する予定となっており、この際なのでディステリアを弟子につけるつもりだった。

―※＊※―

草原の中にある街道。二つの影が道から外れた草むらで激突していた。一つは、青い顔に長く白い牙と鉄の爪を持った片目の老婆。もう一つは、旅人が身につける軽い鎧をまとい、天使の翼が柄に付いた悪魔の翼を模した剣を振るった少年だった。少年の振った黒い剣に腕を切られ、血を散らした老婆は攻撃をやめ、退散していく。それを少年が追おうとすると、
「待て、ディステリア。深追いは禁物だ」
二人の戦いを離れた場所で見ていた男性が止めた。

「クトゥリア。なんだったんだ、あの婆さん・・・・・・？」
「あれはブラック・アニス。この辺りの洞窟に棲み人肉を食らう、老婆の姿をした邪妖精だ」
「なら、倒すべきだったかな・・・・・・」
「どうかなあ・・・・・・？」と、クトゥリアは意味深な笑みを浮かべた。
「もうすぐ港町だ。うまくいけば、今日中にエウロッパ本土に渡れる」
「俺の師匠になる人に会えるんだな。よし・・・・・・」
意気揚々と走って行ったディステリアの後ろ姿を見送り、クトゥリアはポツリと呟いた。
「・・・・・・そううまく行くかな・・・・・・？」

―※＊※―

「け・・・・・欠航～～～！？」
町に着いて真っ直ぐ港へ向かったディステリアだが、港の係りの話に驚いた。
「どういうことだよ！？こんなに晴れてるのに！？」
「この船が通るイグリース・エウロッパ間の海は荒れ模様なんです。潮の流れが滅茶苦茶な上に大津波まで。軍艦でもない限り沈没してしまいます。ですので、しばらくイグリース・エウロッパ間は欠航です。ご了承ください」
係員を見送ってがっかり肩を落としたディステリアに、「やっぱりな」とクトゥリアが言った。
「やっぱりって・・・・・わかってたのか！？」
「ああ」と答えたクトゥリアに、「どうして！？」と声を上げる。
「嵐を起こしているのは、おそらくジェントル・アニスだろ。嵐を

起こしたり、予期せぬ大雨を降らしたりするのは、あの風の精霊くらいだ。・・・・・で、その原因はおそらく・・・・・・」
そこから黙ってディステリアを見るクトゥリアに、「俺かよ!?」と自分を指差して叫ぶ。
「ブラック・アニスを傷つけただろ?おそらく、それの報復・・・・・」
「ちょっと待て。そいつらに接点なんてあるのか!?」
「どちらもカリアッハ・ヴェーラから派生したハッグの一種、アニスという妖精だ。別に友達になってても不思議はない」
「どうするんだ・・・・・・まさか、俺に倒せとでも?」
「それは無理だ。・・・・・・とすれば、どうすればいい・・・・・・?」
答えをじらすクトゥリアに、ディステリアはしぶしぶ自分の考えを口にする。
「・・・・・・・・・謝る・・・・・・・」
「よし、それでいこう・・・・・・」
「・・・・・・で、そいつらはどこにいるんだよ」
「ハイコットランドのクロマティー湾にある洞窟。棲家を共有しているとすればだが・・・・・・」
どの道、行くしかないことはわかっているので、ディステリアはそこへ急ぐことにした。

―※＊※―

洞窟へ向かう途中、ディステリアはクトゥリアに聞いた。
「ところで、なんでブラック・アニスは逃げ出したんだ?」
「ブラック・アニスは・・・・・・非常に足が早く、外でその姿を見てしまった人は逃れようがない。だが、その力は自分の血に依存

しているとされ、怪我を負わすことができれば、傷の手当てをしに棲みかに帰ってしまう。だから旅行者や旅人は、襲われても一太刀浴びせることに集中するのさ・・・・・・」

「・・・・・俺の場合、仕留めそうになってたけど・・・・・・」

「着いたぞ」

クトゥリアが言うと、目の前には大きな洞窟が目に入った。ディステリアが懐中電灯をつけて奥を照らすが、闇は深かった。

「深いな・・・・・・」

「アニスが自分の爪で掘ったものだといわれている。相当な深さのはずだが・・・・・・」

そこに、「待ってたわ」と少女の声がする。洞窟の入口の側には、白い肌の少女が立っていた。

「港を目指してると聞いたから、嵐を起こせば原因を取り除きに来ると思ってた・・・・・・」

「誰だ?」とディステリアが聞くが、少女は答えない。

「・・・・・着いて来なさい。それとも、そんな根性もないかしら・・・・・・?」

挑発じみたことを言って洞窟の奥へ入る少女に、「・・・・・上等だ」と呟いたディステリアは奥へ入っていった。呆れながらも、クトゥリアも続く。

「・・・・・で、あんたは誰だ?」

「私はジェントル・アニス。人間たちは『穏やかなアニス』と呼んでるわ・・・・・・」

「確かに、その名のアニスはいる。だが、彼女は青黒い顔の老婆の姿で知られていて、君のような少女じゃないはずだが・・・・・・」

クトゥリアの問いにも答えず、ジェントル・アニスは二人を洞窟の最奥に連れてきた。

「この部屋で待ってるわ・・・・・・自分を斬りつけた、あんたを・・・・・・」

「おもしれぇ・・・・・・」と笑みを浮かべ、天魔剣を取り出した

ディステリアはドアの前に立つ。
「――――リベンジなら受けて立つぜ！！」
天魔剣を握ってドアを開けると、
「お帰りなさいませ！マイ、ダーリン！」
メイド服を着た黒髪の美少女が出迎えた。訳もわからず立ち尽くしているディステリアをジェントル・アニスが部屋の中に押した。
「・・・・・・・・・・どういうこっちゃ？」

―※＊※―

茶菓子が載ったテーブルを囲み、アニスやクトゥリアたちがテーブルに座っている。
「・・・・・つまり？怯えず反撃してきた俺に惚れたって？」
「そうなのよ～」と頬に手を当てて、照れ隠しするブラック・アニス。先ほどの老婆の姿ではなく、前髪で片方の目を隠している、先ほども説明したような美少女の姿。
「どいつもこいつも怯えながらナイフを振り回して・・・・・・でも、あなたは違った。冷徹なまで冷静な目、瞬時に抜いた剣、鬼気迫る迫力の反撃・・・・・・痺れたわ」
「言ってろ・・・・・・」と、ディステリアはうんざりした表情で顔を背けた。
「・・・・・時化はなんとかしてくれるのか？」
「ええ」とクトゥリアにジェントル・アニスが返す。
「もし、俺たちが来なかったら？」
「凪の海に超特大の大嵐を起こして、あなたたちの乗った船を沈めてたわ」
笑顔のジェントル・アニスに、「・・・・・・で」とディステリアが聞く。

「・・・・・・・・・俺にどうしろと？」
「私を夢中にさせた責任を取ってもらうわ」
「・・・・・・・・・と言うと？」と聞いたが、ディステリアには嫌な予感がしていた。
「――私の夫になって」
「（やっぱり・・・・・・）」
そう思って頭を垂らした時、「ちょっと待った～～～！！」と別のドアが開き、子供の妖精が二人入ってきた。
「あら、あなたたち・・・・・・・」
「知ってるのか・・・・・・・」と脱力しきった声のディステリアが聞くと、子供の妖精が名乗ろうとした。
「僕は――」
クトゥリアに先に名前を言われ、出鼻をくじかれたことの二人がこける。
「シェリーコートとパドルフットか、意外な知り合いがいるな・・・・・」
「なんだ、そいつら？」
「あっちはシェリーコート。ハイコットランド地方の川や山間に棲む水の妖精。旅人をからかう習性があり、頭に貝殻を載せているためが、動く度に音が鳴るからすぐ側にいることが誰にもわかるんだ」
確かに、頭に貝殻を載せた妖精は頭が動く度に、『カラカラ』となっている。
「・・・・・・で、こっちはパドルフット。ハイコットランド中央部、パースシャーの道路沿いに流れる小川に棲む妖精だ。小川で水を跳ねながら動き回ったびしょびしょの足のまま民家を訪れて、家事の手伝いをしてくれることもあるんだが、悪戯をすることのほうが多いという」
「確かに多いわね・・・・・・悪戯」と、腕を組んだジェントル・アニスが納得して頷く。
「・・・・・・で、俺に用があるのか？」

唐突に言われて、二人がギクッと固まる。
「ど・・・・・どうしてわかったの？」
「ブラック・アニスが俺に求婚した時、お前らが出てきただろ。ということは、お前らは俺に用があって出てきた。ついでに言えば、お前らのどちらかはブラック・アニスのことが――」
「わあ！わあ！わあ！言わないで～～～！！！」
シェリーコートが両手を突き出して叫ぶと、「なるほど、お前か」とディステリアが言う。シェリーコートは顔を真っ赤にし、ブラック・アニスも驚いていた。
「あ・・・・・・ああ！そうだよ！アニスお姉ちゃんのことが好きだよ！だから、お前なんかに渡さない！」
そう言うと、シェリーコートは手袋を片方ディステリアに投げつけた。
「・・・・・・？」
「――決闘だ！！」
「――――！？」
誰もが衝撃を受け、その場に固まる。ただ一人、
「（こいつは面白い・・・・・・じゃなかった、大変なことになったもんだ）」
そう思っているクトゥリアを除いて。

―※＊※―

クロマティー湾にある洞窟の裏手に建つ家の庭で、木刀を持ったディステリアとシェリーコートが向かい合っていた。
「え～、ではこれより、ディステリア対シェリーコートの～、ブラック・アニスを賭けた戦いを行ないます！」
「・・・・・・ってか、なんで決闘の場所が家の庭なんだ？しかも、

洞窟の裏だし・・・・・・」
決闘の場所もそうだが、洞窟から通じる家のことやノリノリのクトゥリアに呆れ、ディステリアはうんざりしていた。
「勝敗は、相手が気絶するか負けを認めるかで決する。武器は木刀のみ。ただし、魔法の使用は許可する」
「ディステリアさん！ブラック・アニスお姉ちゃんに傷を負わせたとはいえ、僕は退きません！！」
「あ～、ハイハイ。手加減できないから、覚悟しときな」
適当な表情から一転、真剣な表情で木刀を向けたディステリアに一瞬たじろぐが、シェリーコートは向かって来る。
「でやあああっ！！」
「ホイ！！」
すまし顔の一振りで地面に叩きつける。だが、シェリーコートは立ち上がり、ひるまず木刀をつく。
「ほう・・・・・・！」
身をかわしたディステリアがシェリーコートの左肩を打つ。それほど力は入れてなかったが、シェリーコートは痛みに顔をしかめた。
「ぐっ・・・・・・」
「魔法の使用は禁止されてない。使ったらどうだ・・・・・・」
「何を！！」と向かって来たシェリーコートの攻撃を、一発、二発かわし、三発目を木刀で受け止めカウンターを放つ。
「うあっ！」
飛ばされて尻餅をつくシェリーコートを、ジェントル・アニスとパドルフット、そしてブラック・アニスも心配そうに見る。
「さあ・・・・・・どうする・・・・・・？」
「お前が使ったらどうだ・・・・・・？」
木刀を支えに立ち上がるシェリーコートに、「俺は使えない」と肩をすくめる。
「なんだよ、それ・・・・・・。だったら、僕も使わない・・・・・・。剣術でお前を倒す！！」

「おもしろい！」とシェリーコートの突進を受けて立つ。それを見ていたブラック・アニスは、
「・・・・・どうして・・・・・どうしてそこまで・・・・・・」
「それほど、あんたのことが好きなんでしょ？」
ジェントル・アニスの言葉に、ブラック・アニスは驚きと戸惑いの顔をする。
「でも・・・・・あたしなんか・・・・・・」

ガン！

木刀がぶつかり合う音が響くと、シェリーコートが飛ばされる。
「まだまだ！！」
飛ばされても、飛ばされても向かって来るシェリーコート。ボロボロになってもやめない彼に、ブラック・アニスが声を上げる。
「やめて！どうしてそこまで！！」
シェリーコートに駆け寄ろうとするブラック・アニスを、クトゥリアが腕で制する。
「まだ決着は着いていない。手は出すな」
「でも・・・・・このままじゃ・・・・・・」
「ディステリアは本気を出していない。だが、彼にとっては真剣勝負なんだ。決着が着かず邪魔したら、わだかまりが残る・・・・・・」
暗い顔をするブラック・アニスにクトゥリアが続ける。
「妖精は一生が長い。その長い寿命の中でわだかまりを持ち続けるような時間は、あいつは望んでいない・・・・・・」
息を切らして立ち上がるシェリーコート。ボロボロで、もう立ち上がる力もわずかだった。最後の力をかけた攻撃をディステリアは受けて立つ。その瞬間、
「シェリー！！」

ブラック・アニスが叫ぶ。

ガン！！

折れた木刀が宙を舞い、草の上に落ちる。その後、シェリーコートが草の上に倒れた。

「シェリー！」

駆け寄ったブラック・アニスが、シェリーコートを抱き上げる。

「・・・・・・アニス・・・・・・お姉ちゃん・・・・・・」

「ごめん・・・・・・ごめんね。あなたの気持ち・・・・・・気付かなくて・・・・・・」

近寄ったディステリアに気付くと、ブラック・アニスは顔を上げる。

「ディステリアさん・・・・・・勝負は・・・・・・」

わかりきっていても、聞かずにはいられなかった。ディステリアは頭をかき、ポツリと呟いた。

「・・・・・・負けだよ・・・・・・俺の・・・・・・」

「えっ・・・・・・」と呟くと、シェリーコートは自分の手に木刀が握られていることに気付いた。

「お前の最後の攻撃に、俺は武器を折られた。戦う手段のなくなった、俺の負けだ」

肩をすくめると、振り向いてブラック・アニスを見る。

「・・・・・・どうやら、俺はあんたの夫にはなれないようだな」

皮肉を込めて言った言葉に、「うっ・・・・・・」と唸る。

「一途にあんたのことを思ってる奴がいるんだ。俺なんかに夢中にならずに、よく気付いてやれたな・・・・・・」

「あんた・・・・・・」とブラック・アニスが呟くと、クトゥリアがディステリアの後ろに立つ。

「調子に・・・・・・乗るな～～～！！！」

コブラツイストを決められ、「うぎゃ！！」と悲鳴を上げる。

「いまだ修行中の未熟な坊主が、偉そうなことを言うな！」

「ぎ・・・・・ギブ、ギブ、ギブ・・・・・・入って・・・・・・・間接入って・・・・・・」
ディステリアがクトゥリアの腕を叩いてもクトゥリアはしばらく技を解かず、それを見ていたアニスたちは呆れていた。

―※＊※―

翌日。洞窟の裏手にある家からディステリアとクトゥリアが出てきた。
「すみませんね、迷惑をかけたばかりか泊めていただいて・・・・・・」
振り返ったクトゥリアが話していたのは、ジェントル・アニスだった。
「気にしなくていいわ。それはそれで楽しかったし。それより・・・・・ごめんなさい。そっちの気持ちも考えずに、押し付けるようなことをして・・・・・・」
「気にするな。あいつを切ったのは事実だ」と、げっそりした顔のディステリアが言った。
「なんだ、眠れなかったのか？・・・・・・あっ、もしかして、お前・・・・・・」
「うるさい・・・・・・」と顔を背ける。『人食いアニス』の別名を持つ妖精の家にいたため、気が休まらなかったのだ。もっとも、クトゥリアは心からくつろいでいたようだが・・・・・・。
「時化は止ませておいたから」
「悪いな」とクトゥリアが笑うと、二人は出発した。見送りのジェントル・アニスが手を振る。
「（・・・・・・実力ゆえ度肝が座ってるのか・・・・・・それとも・・・・・・脳天気なのか・・・・・・）」

ディステリアにそれがわかるのは・・・・・・もっともっと先の話・・・・・・。

第6話　事件だ！

ジェントル・アニスとブラック・アニスに別れを告げたディステリアとクトゥリアは、近くの港町を目指して歩いていた。と言っても、ブラック・アニスの家は港からかなり離れた場所にあったため、そこを目指しなおす羽目になった。それも、かなり遠回りで。

「まあ、お前の修行にはなるよな」

そう無責任にとられかねないことを言ったクトゥリアを恨まずにはいられない。真っ暗な夜の森を歩くディステリアとクトゥリアは、青白く光る鬼火のような小さな白い蛾に囲まれていた。

「スパンキーに出くわすとは・・・・・いつの間にか低地地方に差しかかってたんだな・・・・・」

「なんだよ、こいつら」とディステリアが聞く。

「低地地方に出現する、洗礼前に、名前も与えられず死んだことを嘆き悲しむ子供の魂がなったもので、明かりにつられて来る人を断崖絶壁や沼地へと誘い込んだり、道に迷わせたりする」

「ようは、つられなきゃいいんだろ・・・・・」

「だが、放っておくわけにも行くまい。東岸沖でよく船が難破するのはこいつのせいと考えられていたから、誰かつられて事故に遭うかも・・・・・」

「なっ・・・・・じゃあ、退治しとかなきゃ・・・・・」

ディステリアは天魔剣を取り出すが、クトゥリアは「フム」とうつむいている。漂うスパンキーの一つを指差すと、

「お前の名前は・・・・・ボウロイだ・・・・・」

「・・・・・何やってんだ？」
行動の意味がわからず思わず聞いた時、クトゥリアの前にいるスパンキーが昇天した。
「なっ、消滅した？・・・・・・何したんだ！？」
「別に、消滅したわけじゃない。昇天したんだ」
慌てるディステリアに対して、クトゥリアは落ち着いている。
「さっきも言ったとおり、スパンキーは名前も与えられず死んだことを嘆き悲しむ子供の魂がなったもの・・・・・・ニックネームでもいいので名前をつけると天に召されるとされる。武器や攻撃魔法で退治する必要はないんだよ・・・・・・」
そういうと、次々とスパンキーたちに名前を送り、昇天させていった。
「あらゆる精霊や妖精の特徴を把握し、正しい対応をすればそれほど脅威はないんだよ・・・・・・」
言葉もないディステリアは天魔剣をしまう。その時、草むらから一つの影が飛び出した。
「――――！？」
敵かと思ったが、先ほどのクトゥリアの言葉を思い出し、天魔剣を出さず手刀で叩き落とす。道の上に倒れたのは、上半身は毛深い人間、下半身は鹿か山羊の姿をした男だった。
「妖精・・・・・だよな・・・・・・？」
「この身体的特徴は・・・・・・ウリシュクか」
「ウリシュク？」とディステリアが聞くと、「ハイコットランド高地地方の谷間の湿地に住むブラウニーの眷族だ」と答えた。
「ここ・・・・・低地地方じゃなかったのか？」
ディステリアが低い声で聞くと、ウリシュクが意識を取り戻した。
「助けてください！！」
「おわ！！いきなりなんだよ！？」
「我々の長が・・・・・ピアレイとスキャントリー・マブが何者かに連れ去られたんです」

「マブって・・・・・・妖精の女王!?」
驚くディステリアに、「マブ違いだ」とクトゥリアが呆れる。
「・・・・・・それにしても穏やかじゃないな。話してみろ」
「ハイ」とウリシュクは頷いた。

―※＊※―

ウリシュクに連れられて小屋にやって来たディステリアとクトゥリアを、一人の美しい女性が出迎えた。
「ウリシュク・・・・・・どこ行ってたの!?」
「ハベトロット。助けてくれる人を探してたんだ」
「こいつは?」とディステリアが聞くと、クトゥリアは首を傾げる。
「ハベトロット。非常に心優しい妖精で、糸紬が下手で困っているかわいそうな娘の代わりに糸を紡いでくれる。醜い老婆の姿をした妖精のはずだが・・・・・・」
「・・・・・・この前会ったアニスたちといい、当てにならないな・・・・・・」
「それって、クロマティー湾に棲むブラック・アニスとジェントル・アニス!?」
ディステリアが嫌味を込めて言うと、ハベトロットが大声を上げて聞く。
「そうだが・・・・・・?」
「じゃあ、アニスたちが言ってたのはあなたたちなのね」
ディステリアが答えると、ハベトロットが詰め寄ってくる。
「お願いします。私たちに力を貸してください」
「事情はこのウリシュクから聞きました。ピアレイとスキャンとリー・マブがさらわれたらしいですね」
「そいつらって・・・・・・こいつらのなんなんだ?」

聞いたディステリアに、クトゥリアは呆れた視線を送る。
「・・・・・ピアレイはウリシュクたちの長、スキャンとリー・マブは糸紡ぎの妖精ハベトロットの上司。どちらも、姿は彼らと変わらないらしい。これくらいのこと知ってると思ったが・・・・・・」
「わ・・・・・悪かったな。危険生物のリストしか、頭に入れてないんだよ・・・・・・」
「恥ずべき無知」と呆れた声で呟くと、クトゥリアは話を戻した。
「他にも、ゲア・カーリングやローレッグ。ハイコットランドに棲む、糸紡ぎや機織に関わりがある妖精がさらわれてるんです・・・・・」
「犯人の狙いは・・・・・・？」
「それはわからないけど、どこに連れて行かれたかはわかります」
「本当か！？」とディステリアが驚いてハベトロットに聞く。
「この森の先には、この辺りに残る古い石造りの城があって、みんなそこに連れて行かれているんです・・・・・・」
「・・・・・石造りの古い城？それって、ペッホが建てたと言う・・・・・・？」
「ハイ」とハベトロットが答えると、「何か関係あるのか？」とディステリアが聞く。
「行ってみないことにはわからない。ディステリア、偵察のつもりで行くが、万が一のことを考え・・・・・・」
「・・・・・戦闘の心構えをしとけ、だろ？わかってるよ・・・・・」
「よし、早速行くぞ」と、クトゥリアとディステリアは小屋を後にした。
「・・・・・大丈夫かな？」
「アニスが言ってた人間だもの。きっと大丈夫・・・・・・」
見送るウリシュクとハベトロットは不安そうだったが、同時に信じてもいた。

―※＊※―

森を抜けた先にある石造りの古城。その中で、大勢のハベトロットやローレッグが機を織り、ウリシュクが出来上がった布を運んでいた。

「ケケケ・・・・・さっき休ませてやったんだ。その分、倍働け・・・・・」

一人の男が支持している様子を、城の窓からクトゥリアが覗き込む。

「ウッピティ・ストゥーリーがいるとは・・・・・・」

聞きなれない名前に顔をしかめるディステリアに、クトゥリアはいつも通り聞こうとする。その時、

「――――ギィィィィィィィィッ!!!!!」

とても耳障りな音が響き、二人が耳を抑える。その直後、突風が二人を襲い吹き飛ばす。地面の草の上に着地して上を見ると、羽毛は白い斑点があり、水かきがある巨大な鳥が飛んでいた。それを見たクトゥリアが声を上げる。

「バカな！なぜ、こんな所にいるんだ！」

「どうしたんだよ、いきなり・・・・・・！？」

巨鳥が急降下して二人の上を過ぎ、突風が吹き荒れる。二人はそれから、腕で顔をかばってやり過ごした。

「ブーブリィ。アガイルシャーの湖に住む巨大な妖水鳥だ。だが、ここはアガイルシャーから数キロも離れている・・・・・・」

「あんだけでかけりゃ、数キロを移動するのも苦じゃないだろ！」

旋回したブーブリィが口を大きく開けて向かって来る。

「水際に来た生物は羊でも牛でも丸呑みにしてしまう。近づくな！飲み込まれるぞ！！」

「上等！！」

吼えると、ディステリアは天魔剣を構えてブーブリィに向かって行った。天魔剣を思いっきり振るが、ブーブリィはその一撃をかわして飛んで行く。

「くそっ・・・・・・・」

「空を自在に飛べる、奴のほうが有利だ。ディステリア、ここは一端――」

「退けるか!!」

飛び上がったディステリアの剣をかわし、ブーブリィが口を開けて捕らえる。

「ぐっ・・・・・・・くそっ!離せ!」

口ばしを叩いて抵抗するが、ブーブリィは意に介さない。古城の塔と同じ高さまで上がったため、クトゥリアにはどうすることもできない。

「てめっ・・・・・・・いい加減に――しろ!!」

ディステリアは思い切り、天魔剣でブーブリィの眉間を突いた。血が吹き出し、ブーブリィが悲鳴を上げた拍子に解放されたディステリアは、天魔剣の刃を上に構えた。

「てめ・・・・・・お返しだ!」

「バカ、よせ!」

「ライジング・ルピナス!!」

クトゥリアの静止も聞かず天魔剣を振り上げ、無数の光の柱が立ち昇る。それがブーブリィの体を貫き、悲鳴を上げながら地面に墜落した。ブーブリィが倒れると同時に着地したディステリアが、膝を着いた。

「ぐっ・・・・・・痛ッ!!」

「だから、止せって言ったんだ。お前、この技で反動を受ける理由がわかってないだろ・・・・・・」

左手で天魔剣を持ち右手を開いてみると、なぜかディステリアの右手の平は火を受けたように焼けていた。

「だが・・・・・こいつ以外に・・・・・・」

『仕留められる技がない』。そう言おうとした時、古城の門から武装した兵士が出てきた。
「なっ・・・・・・気付かれた・・・・・・」
「これだけ騒げば、そりゃあな。一端、退くぞ」
クトゥリアに促されて退こうとした時、巨大な獣の影が飛び出してきた。
「なっ・・・・・・なんだ!?」
「!?」
二人の前に降り立ったのは、山のように巨大な灰色の犬。真っ赤な目を光らせ、唸り声を上げている。
「黒妖犬か・・・・・・?」
「グレイハウンド・・・・・・と言うことは、ビーアスト・ヴェラッハか。ヘブリディース諸島にあるスカイ島のオディル峠に出没したという怪物だ。しかし、おかしいな・・・・・・出現場所が違うような・・・・・・」
不審がるクトゥリアだが、ビーアスト・ヴェラッハが吠え立てて襲いかかって来た。ディステリアとクトゥリアは、二手に別れて牙をかわす。
「こいつを倒さなければ、退くに退けない!!」
「いや・・・・・・俺たちは古城にいる兵士たちに気付かれた。その時点で、捕まるか切り抜けるかの二択しかなくなったって訳だ・・・・・・」
クトゥリアが苦笑いしていると、二人はそれぞれ大勢の兵士に囲まれる。その兵士を監察していると、ディステリアは妙なことに気付く。
「なんだ・・・・・・この違和感?生きている感じがしない、というか・・・・・・」
襲い掛かった兵士を剣で叩き伏せ、「よく気付いたな!」とクトゥリアが叫ぶ。
「・・・・・・こいつらはリビング・アーマー。ゴーレムのように

偽りの命を与えられた、空っぽの鎧だ。もっとも今では、鎧に人間の魂を定着させて作ることもできる・・・・・・」

「なんだよ、それ・・・・・ふざけるな！！」

怒りがこもった一撃がリビング・アーマーを砕いた時、ビーアスト・ヴェラッハがディステリアに襲いかかって来た。

「――こいつ・・・・・！」

天魔剣を振って弾き飛ばすが、ビーアスト・ヴェラッハは着地するとすぐにこちらに牙を剥く。再び天魔剣でいなすが、今度は前足の爪で引っ掻いてきた。

「ぐっ・・・・・このやろ！！」

天魔剣を振って反撃するディステリア。辺りに金属音が響き渡り、両者の間に火花が散る。最後の一撃で両者が離れ、草地に着地するとディステリアにリビング・アーマーが襲いかかるが、体を回転させて天魔剣で一体切り伏せ、時間差で攻めてきたもう一体を真っ向から両断した。だがそこに、ビーアスト・ヴェラッハが爪を振って襲いかかる。

「（・・・・・リビング・アーマーを犠牲にした、三段時間差攻撃・・・・・）」

切り抜ける手段を模索した時、ディステリアは迷いもなく天魔剣を逆さに構える。

「ライジング・ルピナス！！」

光の柱がビーアスト・ヴェラッハを吹き飛ばし、「キャン、キャン」と悲鳴を上げて地面に落ちる。直後、ディステリアは再び焼け付くような痛みに襲われる。

「ぐっ・・・・・」

顔をしかめ膝を着いた所に、ハルバートを振り上げたリビング・アーマーが襲いかかる。が、

「ソニックブーム！！」

体を高速回転させたクトゥリアが放った真空波で吹き飛ぶ。ディステリアが、クトゥリアがいたほうを見ると、リビング・アーマーは

すでに鉄塊と化していた。
「・・・・・ったく、一度ならず二度も。どこまで無鉄砲なんだ」
「その無鉄砲が、あんたの弟子だよ・・・・・・」
「言ってくれるな」と、クトゥリアが残りのリビング・アーマーを片づける。
「ケケケケ・・・・・・随分、好き勝手にやってくれたな・・・・・・」
古城の入り口のほうを見ると、「出やがったな」とディステリアが呟く。古城を陣取っていたウッピティ・ストゥーリーが姿を現した。
「・・・・・・あんたははっきり言って、戦闘向きじゃない。さっさと降参しろ」
「ケケケ・・・・・・俺がただのウッピティ・ストゥーリーだったらな」
その言葉に眉をひそめると、古城から新たなリビング・アーマーが沸き出る。
「ケ～ケッケッケッケ。兵は二万体。お前らに捌き切れるかな・・・・・・？」
杖を取り出して踊りかかったウッピティ・ストゥーリーの攻撃を受け止め、クトゥリアが笑みを浮かべる。
「そんな数、お前に操れるはずがない。戦いながらなら、なおさらな！！」
連続で金属音が響く中、「ケ～ッケッケッケ」と笑う。
「残念ながら、こっちには有能な指揮官さまがいるんだよ」
杖を受け止めているクトゥリアの脇を抜け、リビング・アーマーが膝を着いているディステリアを襲う。すぐに飛び退いて天魔剣で切りつけるが、右手の痛みのせいでうまく剣を握る手に力が入らなかった。
「でいっ！やあっ！くそっ、しつこい！」
最初は一撃で仕留めれていたがだんだん力が入らなくなり、少しずつ狙いがずれてきていた。腕や肩を切り落とされたぐらいではリビ

ング・アーマーは活動をやめず、残った腕や足で攻撃してきた。
「くそっ！！」
剣では間に合わないため足で蹴りつける。よろめいて他のリビング・アーマーにぶつかったが、ディステリアも鎧の硬さによろめき、地面に尻餅を着いた。
「かてっ・・・・・って、鎧だから当たり前か・・・・・」
追撃をかけて襲いかかってくるリビング・アーマーに、ディステリアは一端離れる。後ろを取られることがないように、古城の石壁に背をつけ、身構えた。
「・・・・・クスクス・・・・・無駄よ、無駄。そんなことしても、あんたたちの負けは変わらないから・・・・・」
どこからか聞こえた声に耳を澄ませ、その元を探る。視線を横に走らせ上を見ると、城の屋根の上にわずかに人影が見えた。即座に、ディステリアは壁を蹴り、天魔剣を構える。
「ライジング・ルピナス！！」
天魔剣を振り上げ、本日三度目のライジング・ルピナスが城の上部を吹き飛ばす。舞い散る石の欠片の中、一つの人影が吹き飛ばされていた。
「きゃあああああっ！！」
「見つけたぜ！リビング・アーマーの指揮官！！」
直後、ディステリアを激痛が襲う。「くっ・・・・・」と人影が体勢を整え、背中に羽を表す。蝶のような形をしたそれは、妖精族独特のもの。
「――――！！お前も妖精！？」
「その通り。我は妖精の女王ニクネヴィンなり！！」
ニクネヴィンが作り出した無数の光の球が、ディステリアを強襲する。
「うわあああっ！！」
慣れない空中で翼を出すこともできず、ディステリアは地面に落下した。

「どうした!?緊急時にすぐ出せるよう、イメトレしとけって言っただろ!!」
ウッピティ・ストゥーリーの攻撃を捌くクトゥリアに、「・・・・・・んなこといってもよぉ・・・・・・」と体を起こしたディステリアが答える。
「余裕ね・・・・・・そんなものないくせにさ!!」
ニクネヴィンがクトゥリアに光の弾を撃った時、「ああ」とクトゥリアが不敵な笑みを浮かべる。
「――そっちの弟子は・・・・・・な」
その一瞬でクトゥリアは光の球を捌ききり、ウッピティ・ストゥーリーにも戦闘不能なほどのダメージを与えていた。
「なっ・・・・・・!!」
ニクネヴィンが驚いた瞬間、城の壁が爆発し、大勢の妖精たちが逃げ出した。彼らを誘導しているのは、ディステリアとクトゥリアに仲間の救助を依頼したハベトロットとウリシュクだった。
「何!?」
「あいつら・・・・・・どうして・・・・・・?」
だが、ディステリアはその疑問を頭の隅に押しやり、ニクネヴィンが呆気に取られている隙に、左手に天魔剣を握って切りかかる。寸前で気付いたニクネヴィンは後ろに飛んでかわし、剣の刃は左横腹の服を掠めた。
「――惜しい!!」
「このっ――」
ニクネヴィンの反撃より早くディステリアの攻撃が入ると思った瞬間、ビーアスト・ヴェラッハが天魔剣に噛み付いた。
「忘れてたぜ!このっ!」
ディステリアがビーアスト・ヴェラッハを叩き伏せた瞬間、ニクネヴィンの攻撃が彼の左肩を打つ。
「あんたたちに私は倒せないよ」
「上等だ・・・・・・」

ディステリアが天魔剣を構えたその時、彼方からディナ・シーの大群がやって来た。
「――ディナ・シー！？」
ディステリアが驚いている間、ディナ・シーたちはリビング・アーマーを片づけ、ウッピティ・ストゥーリーとニクネヴィンに武器を向けて取り押さえた。その内の一人が、ディステリアとクトゥリアに気付く。
「ほう、お前たちか。今回は手間をかけたな」
「なんでお前らが・・・・・・？」
「我らは妖精王オベロンより、妖精族間の社会秩序を守っている」
「へえ～・・・・・・」と呆気に取られていると、取り押さえられたニクネヴィンが抵抗している。
「離しなさいよ。私は、妖精の王族なのよ！！」
「そんなものは関係ない。ウッピティ・ストゥーリー、ニクネヴィン。誘拐の罪により、お前たちを拘束する」
ディナ・シーたちにより、ウッピティ・ストゥーリーとニクネヴィンは縛られ、連れて行かれた。

―※＊※―

「俺たちは囮だったわけか・・・・・・」
「すみません」と謝るハベトロットに、「いや、いいさ」とクトゥリアが答える。
「作戦が成功してよかったよ。みんな、達者で暮らせよ」
妖精たちはみんな頭を下げて、森の中へ帰って行った。
「それにしても・・・・・・あいつらは、なんで糸紡ぎの妖精をさらってたんだ・・・・・・？」
納得しきれてないディステリアの疑問に、クトゥリアも頭を悩ます。

「ウッピティ・ストゥーリーは人間の手伝いをするゴブリンの眷族だ。その代わり、過大な報酬を要求する」
「ということは、黒幕は人間・・・・・・？」
「わからない。悪意ある老婆のデーモンであるニクネヴィンが指揮していたことも気になるが・・・・・・」
唸るクトゥリアに「わからないことだらけか・・・・・・」とディステリアは頭をかく。
「ま・・・・・とりあえずは、一件落着か・・・・・・」
「ところで・・・・・・何か忘れてるような・・・・・・」
クトゥリアの言葉に首をかしげていると、「あっ！！」とディステリアが叫ぶ。
「エウロッパ本島行きの船！！」
「こりゃ・・・・・・今日はもう諦めるしかないな・・・・・・」
時計を見たクトゥリアが溜め息をつくと、ディステリアもがっくりと肩を落とした。その日、最後の船の出港時刻は、すでに一時間も過ぎていた。

第7話　血塗られた魔獣は

旅を続けるディステリアとクトゥリアは、とある村に差しかかっていた。
「ディステリア、用心しとけよ」
「？どうしてだよ・・・・・・」
村に入ったところで口を開いたクトゥリアの言葉に、ディステリアは首を傾げた。
「ヘッドリー村。ここに現れる悪戯好きな妖精と言ったら、ヘッドリー・コウだな・・・・・・一日で考え付く限りをしてはゲラゲラ笑い楽しんでいる、悪戯好きの獣型妖精。いわゆるボギー・ビーストって奴だよ」
「ふーん・・・・・・ところで・・・・・・何か臭わないか？」
「そういえば・・・・・・血生臭いな・・・・・・」
クトゥリアが鼻を動かす。その時、クワや槍を持った村人たちが、鬼気迫る表情で駆け抜けていた。
「・・・・・・何かあったのか？」
「行くか」
目配せすると、ディステリアとクトゥリアは村人の後を追った。次第に血生臭さが強くなり、やがて一軒の小屋に辿りつくとそこの光景に目を見張った。血が辺りに飛び散り、肉片が散らばるむごたらしい光景。クトゥリアは平気なようだったが、ディステリアは軽いめまいがした。
「大丈夫か？」

「大丈夫だ・・・・・・というか、なんであんたは平気なんだ・・・・・」
「こういう光景は、今までも見てきた。それも嫌ほどな・・・・・・」
ディステリアが言葉を失っていると、「これは何事だ」とガラガラ声が聞こえて来た。振り向くとあごひげをたっぷりと蓄えた年季の入った老人が、これまた鬼気迫る表情で歩いて来ていた。
「村長、またです。また家畜が襲われました・・・・・・」
「家の住民は外出していて無事だったようです。しかし、村長・・・・・」
「これでもう9件目。もう悠長なことは言ってられない・・・・・・」
真剣な表情の村人たちに、「ちょっとよろしいですか?」とクトゥリアが話しかけた。
「なんだ、お前らは?」
「・・・・・私たちは見ての通り、旅の者です。もし差し支えなければ、何が起こってるか話してくれませんか?」
「話したところで、あんたらに何かできるのか?」と、村人が疑う。
「それは、話の内容にもよります。よろしいですか?」
「いいだろう」
老人が言った時、こちらに走ってくる足音に気付く。カワウソらしき小動物を抱えた少女が、息を切らして立ち止まる。それを見た村人たちの表情が厳しくなったことに、ディステリアは疑問を感じた。その中で一層厳しい顔の老人が、少女に聞く。
「・・・・・何しにきた」
「家畜がまた・・・・・・襲われたと聞いて・・・・・」
「見てみるか・・・・・・またむごたらしいものだ・・・・・」
少女がゴクッ、と唾を飲んで小屋に入ると、血生臭い臭いが鼻を突いた。小屋の光景に目を見張り、後ろによろめく。
「誰が犯人かもうわかってるはずだ。それでもお前は、目を背け続

けるのか！？」
老人の言葉に答えず走り出した少女に、村人たちは冷たい視線を送っていた。
「あの子がどうかしたのですか？」
「あの子供ではない。問題は、娘が抱えている化けカワウソ・・・・・ドラッゴーだ」
ディステリアはその名に聞き覚えがあった。別名ダウルフー。人間を初めとするあらゆる生き物に襲いかかり、仕留めると即座に食らう。確か自分たち騎士団のリストには、魔獣と記されていたはずだ。その時、ディステリアの脳裏にある仮説が浮かぶ。
「・・・・・この事件は、全てあのドラッゴーの仕業と？」
「お話が早い。私たちの村では、もう何回も家畜や村人が襲われ、食い殺されています。私たちもなんとか退治しようと思っているのですが・・・・・」
「お話はわかりました。しかし・・・・・飼い主がいる限り、現行犯でないと退治できないんですよ。それに時間をかけた調査も必要・・・・・」
「そんな悠長なことを言ってる時間は、我々にはないんです。お願いします・・・・・」
村長の懇願に、「・・・・・わかりました」とクトゥリアが呟く。
「ただし、先ほども言ったように現行犯でないと退治できません。あの少女に付かせてもらいます。いいですね」
「わかりました」と老人は即座に承諾した。

―※＊※―

「あの老人・・・・・ドラッゴーの飼い主の少女の親だな・・」
「お前でもわかるか」

意外そうに目を丸くしたクトゥリアに、「バカにするな」とディステリアが言い返す。
「俺だってそのくらい・・・・・・」
その時、誰かが土の上に倒れるような音が聞こえた。音のほうを見ると、先ほどの少女が大勢の子供に囲まれていた。
「今日もまた家畜が殺された。お前のせいだぞ」
「お前、村長の娘のくせして疫病神を庇うのかよ」
「まだこの子の仕業と決まったわけじゃ・・・・・・」
ドラッゴーを庇う少女を、「うるさい」と子供の一人が蹴りつける。
木陰の草の上に倒れた少女を、子供たちはそのまま袋叩きにする。
「あのガキども・・・・・・」
ディステリアがその光景に怒りを覚えていると、子供の一人が石を掴み上げた。
「村を襲う魔獣は、俺が退治してやるよ」
少女がドラッゴーを庇うように体を屈める。掲げた石が振り下ろされようとした時、その腕をディステリアが掴んだ。
「なんだ、お前・・・・・・」
「こんな物で叩いたら人が死ぬことぐらい、わからないのか!!」
石を取り上げて子供を押し飛ばすと、ディステリアが怒鳴る。
「お・・・・・お前には関係ないだろ。そいつは村を襲い怪物なんだぞ!」
ディステリアが反論しようとした時、「東洋にこんな言葉がある」とクトゥリアの声がする。彼はいつの間にか、子供立ちの後ろに腕組みをして立っていた。
「・・・・・『君子危うきに近寄らず』。君子は自分の身を大切にして、危ないことには近寄らない、という意味だよ」
「危ないことに近寄らないで、どうやって村への脅威を追い払うんだよ!」
「じゃあこれは?『触らぬ神に祟りなし』。初めから関わりを持たなければ、災いを受ける恐れはない・・・・・・」

「どういうことだよ！」
子供が怒鳴ると「頭の悪いガキだな」とクトゥリアが睨み、その迫力に子供たちが怯む。
「・・・・・相手にちょっかいを出して怪我をしても、一言の文句も言えないんだよ。その覚悟があるなら止めはしない。死にそうになったら止めてやる・・・・・」
「お・・・・・覚えてろよ」
あまりの迫力に捨て台詞を残し、子供たちは逃げて行った。クトゥリアが放っていた迫力、というより本当に殺しかねない殺気を感じた。
「さて・・・・・」
殺気を消したクトゥリアは少女のほうに目を向ける。
「また会ったね」
クトゥリアの言葉に首を傾げた少女だが、すぐにさっきのことを思い出す。
「あんたたち・・・・・さっきの・・・・・」
「そ。そのドラッゴーの退治を依頼されて・・・・・」
それを聞いた途端、少女は全速力でその場から走り去る。
「・・・・・そんなこと言われたら、逃げるのは当たり前だろ・・・・・」
「まあ、そうだな」とディステリアに返す。
「だが、話を聞かなければ始まらない。追うぞ」
クトゥリアは少女を追いかけて行ったが、ディステリアは戸惑ってすぐには動けなかった。実力はあるが、いつもどこかふざけている。そんな面しか知らないゆえの違和感に対応しきれていなかった。

―※＊※―

「待てよ！俺たちはお前の敵じゃない！」
「あんたたちのことは知ってるわ。村長たちにこの子を退治するよう頼まれたんでしょう！」
「頼まれたことは頼まれたが、まだ退治するとは決まってない」
クトゥリアの言葉に立ち止まり、「どういうこと？」と疑いの眼差しを向ける。
「一連の事件が本当にそいつの仕業か、調査している」
「いや、こいつの仕業だろ」と言ったディステリアの足を、即座に踏みつける。
「それを知るためには、当時の状況を知る必要がある。信じる必要はないが、話してくれないか・・・・・？」
クトゥリアの真剣さが伝わったのか、「・・・・・わかったわ」と少女は応じてくれた。
「まず、最初に事件が起きた時のことを教えてくれないか・・・・・？」
「最初の事件が起きた時、私と一緒にいなかったから真っ先に疑われて・・・・・」
「その時、事件が起きてからどれくらいでそいつにあった？」
「・・・・・ほんの・・・・・二、三分だったと思う。草むらから出てきて、すぐ抱き上げた・・・・・」
「抱き上げた？その時、体はどうだった？」
「どうだった・・・・・って？」
「たとえば、濡れていたとか・・・・・」
「そんなことなかったよ。何かに濡れてるどころか、血なんて一滴も付いていなかった・・・・・」
「本当だな・・・・・？」とディステリアが確認すると、疑うのかとでも言うように少女が睨み返す。
「クトゥリア・・・・・」
「ああ・・・・・こいつは・・・・・」
そこに、村人の一人がやってきた。

「・・・・・明日、そいつを処刑することが決まった・・・・・・」
「処刑!?・・・・・どうして!まだ、この子の仕業とも決まってないでしょ!」
「なら、誰の仕業だと言うんだ!!」
叫んだ村人の大声に少女が体を震わせると、腕の中のドラッゴーが威嚇する。
「俺たちに任せるんじゃなかったのか・・・・・?」
「見たところ旅の途中のようだし、あんたらの手を煩わせる訳には行かないと、村長の配慮だ」
「(半ば余計だけど・・・・・)」とディステリアは思ったが、口には出さなかった。
「とりあえず、明日は覚悟して置け。明日で、その化け物とはおさらばだ・・・・・」
それだけ言うと、村人はさっさと去って行く。
「・・・・・処刑なんて・・・・・させない」
そう呟くと、少女は足早に去って行く。残された二人は、納得できない表情をしている。
「日が暮れてきた。今日は宿で休もう」
「ちぇ・・・・・結局、手がかりらしい手がかりは見つからなかったな・・・・・」
舌打ちするディステリアに、「いや、そうでもない・・・・・」とクトゥリアが呟く。
「どういうことだよ・・・・・?」
「さあな。知りたければ、明日に備えて寝ればいい」
そういうと、クトゥリアも歩いて行った。

―※＊※―

翌日。ディステリアが目を覚ますと、村人たちが騒いでいた。
「村長の娘がいなくなったぞ」
「まさか、あいつに・・・・・・」
「どうかしたのか?」とディステリアが聞くと、「ああ、あんたか」と村人の一人が答えた。
「村の娘が一人、いなくなった。あの化けカワウソに食われたのかも知れん・・・・・・」
村人の言葉に、ディステリアの表情が厳しくなる。
「・・・・・・血が残っていたのか・・・・・・?」
「いや・・・・・・部屋の中に血はなかった。食らったとして、別の場所で食らってると思う・・・・・・」
「そういえば、あんたの連れもいなくなってるな・・・・・・」
言われてみれば、クトゥリアの姿を見かけない。まあ、クトゥリアに限ってやられるなんてことは・・・・・・。
「う〜む・・・・・・」
百パーセントありえないと言い切れないため、ディステリアは唸るしかなかった。
「とにかく探そう。殺されたにしろ、まだ無事にしろ、まずは見つけてからだ」
「言われなくてもそのつもりだ」と村人が答える。それから手分けをして探したが、夕方になっても見つからなかった。
「・・・・・・肉辺どころか、染みの一つも見つからない・・・・・・」
「川に運んだとしても、川原に少しは残ってるはずだが・・・・・・」
その時、「お〜い、いたぞ〜!」と村人の声がした。
「娘か!?化けカワウソか!?」
「そ・・・・・・それが・・・・・・」
村人たちと共にディステリアが駆けつけると、そこには武器を持っ

た村人に囲まれたクトゥリアがいた。
「・・・・・何やってんの、あんた」
半ば呆れたような顔で、ディステリアが聞いた。
「いや・・・・・あの子がドラッゴーを逃がしたいって言うから、保護者として同伴しただけさ」
「逃がしたい・・・・・!?バカなこと言うな、あれを野放しにしたら、別の村が犠牲になる!あんたもなんで止めなかった!!」
「止める理由がどこにある?」
そ知らぬ顔で聞いたクトゥリアに、「何!?」と村人が驚く。
「あのドラッゴーは、あの子を親だと思ってる。殺すとは思えん・・・・・」
「だが、現に村の家畜は食い殺されている。凶暴な化けカワウソ以外に誰が・・・・・」
その時、村人たちがざわざわとざわめく。村人とディステリアが後ろを振り向くと、ドラッゴーを抱えた少女が歩いて来ていた。
「・・・・・答えは見つかったかい?」
クトゥリアの問いに、少女は黙ってゆっくりと頷く。
「・・・・・私・・・・・この子と一緒にいたい」
「何を・・・・・」とざわめく村人たちを遮り、「私!!」と続ける。
「・・・・・私・・・・・この子が犯人とは思えない。だって家畜が襲われた時間、この子は私と一緒にいたし、はぐれていた時も口に血なんて付いてなかった。川の水で洗ったとしても、毛は濡れてなかった!」
少女の指摘に、村人たちは言葉も出ない。
「(確かに・・・・・家畜や村人を襲ったのなら、口や体に返り血が付いているはずだ。水で洗っても、短時間で乾かすのは不可能。何かで拭いたとしても・・・・・)」
ドラッゴーを疑っていたディステリアも一晩中考えて、状況がドラッゴーの無罪を示していることに行き当たっていた。

「だが、そいつ以外に犯人はいない」
「それは、あんたらがドラッゴー以外に犯人になりうる存在を知らないからだ」
クトゥリアの言葉に村人たちが戸惑っていたその時、家畜小屋のほうから物凄い音が響いた。
「おいでなすったようだ、真犯人が・・・・・・」

―※＊※―

ディステリアとクトゥリアが村人たちと共に音がした現場に辿り着くと、そこは凄惨な光景だった。だが、食い散らかされ、無残な姿をさらした家畜や村人の中に、クトゥリアが犯人と睨んだ存在がいた。馬の足と同体に人間の上半身が付いており、腕は地面に届くほど長く、皮膚がない全身が血管や筋肉がむき出しになっている。
「ナックラヴィー！こいつが犯人だったか！」
「なんだ、そいつ！？」
「人間や家畜を手当たり次第に貪り食らう妖獣だ。だが・・・・・・こいつは海に棲んでいるはずだが・・・・・・」
「――――！来るぞ！」
ディステリアの声に、飛びかかったナックラヴィーの攻撃をかわす。ディステリアが天魔剣で皮膚を裂くと、ナックラヴィーは彼のほうに息を吐いた。
「ぐっ・・・・・・臭い！なんだ、これは！！」
「植物を枯らす猛毒の吐息だ！吸うな！！」
吸わないうちに離れたディステリアだが、不意打ちをもらった時に吸った僅かな毒の作用で体が痺れる。そこにナックラヴィーの蹴りが炸裂する。
「ぐあっ！！」

蹴り飛ばされたディステリアが、柵を破って地面に叩きつけられる。
クトゥリアが応戦するが、長い腕と毒の吐息に防戦一方だった。
「どうしよう・・・・・このままじゃあ・・・・・」
その時、唸っていたドラッゴーが少女の腕から飛び出した。
「行っちゃダメ！」
馬の足に踏みつけられたクトゥリアにトドメを刺そうとしたナックラヴィーの腕を、ドラッゴーが噛み付く。
「――――！？」
「グルルルウウッ！！！」
そのまま、物凄い力でナックラヴィーを投げ飛ばし、地面に叩きつけた。
「ギリギリリリッ！！」
ブリキが擦れるような音を出して襲いかかるナックラヴィー。体格差ゆえか、だんだんドラッゴーが押されてきた。
「そいつの弱点は水だ！川を目指せ！！」
クトゥリアの叫び声にドラッゴーが駆け出すと、ナックラヴィーが追いかける。皮に差しかかったところでドラッゴーが止まり、ナックラヴィーを迎え撃つ。長い腕で殴りつけようとするが、それをかわしたドラッゴーはそれに噛み付き、体を回転させるが持ち上がらない。
「どりゃあああああああっ！！！」
体勢を低くして飛びかかったディステリアが、天魔剣でを打ち上げる。その勢いをそのままに、ドラッゴーはナックラヴィーを川に叩きつけた。
「キギャアアアアアアッ！！」
全身の神経を刺す痛みに悲鳴を上げたナックラヴィーは、河原にうなだれ動かなくなった。

―※＊※―

翌日。
「本当に、ありがとうございました。どうお礼を言っていいか・・・・・」
「いやいや・・・・・・」とクトゥリアが対応していると、ディステリアが刺々しく言う。
「俺たちよりも、お礼を言うべき相手がいるんじゃないか？」
「――――！！・・・・・・・そうだな・・・・・・・」
老人はドラッゴーを抱えている少女のほうに歩いてくる。
「・・・・・ありがとう。お前のおかげだ・・・・・・」
「おじいちゃん・・・・・・この子・・・・・・」
途切れ途切れに言う少女の言葉を遮り、老人はドラッゴーの頭を優しく撫でる。気持ちよかったのか、ドラッゴーは猫撫で声を上げる。
「命の恩人を追い出すような者は、この村にはいない。そうだろう」
老人が振り返ると村人たちも頷く。今度は誰一人、反対するものはいないようだ。それを悟った少女は嬉しそうに声を上げた。
「よかったね♪」
「ギャウ♪」
ドラッゴーを抱えて周った後、ディステリアとクトゥリアのほうにやってくる。
「あなたたちのおかげだよ。ありがとう」
「いつまでも仲良く、な」
クトゥリアの言葉に「うん♪」と頷き、二人を見送った。
「・・・・・たいした奴だよ。あの子・・・・・・」
「どうしたんだ？急に・・・・・・」とディステリアに聞く。
「俺は・・・・・絶対ドラッゴーのような凶悪な幻獣とは、共存なんてできないと思っていた。でも・・・・・・あの子は、その可能性を掴んだ」
「まだ可能性に過ぎないが・・・・・・大丈夫、未来は無限だ」

二人が後にした牧場の村は、雲が流れる青空に見守られていた。
「ところで・・・・・ナックラヴィーに苦戦したの。わざとだな？」
「なんのことかな？」
笑みを浮かべて聞き返すクトゥリアに聞き続けるがとぼけられ続け、とうとうディステリアは折れた。

第8話　企み

クトゥリアとディステリアは、突然の雨に見舞われて、森の中の山小屋で雨宿りをしていた。
「ちくしょう～、また足止めなんて・・・・・・」
「そう言うなよ。この旅は長いほうが、お前がたくさん学べるんだから・・・・・・」
「そうは言ってもよ～～～」
その時、小屋のドアをノックする音がした。クトゥリアは立ち上がりかけ、ディステリアは思わず身構える。
「敵か・・・・・・？」
「・・・・・警戒心が強いのはいいが、強すぎるとただの臆病者だぞ」
呆れたクトゥリアがドアを開けると、ずぶ濡れの姿で緑の服を着ている美しい金髪の髪の貴婦人が立っていた。
「すみません。突然の雨に見舞われて、このざまです。どうか暖炉で体を乾かせてください・・・・・・」
「突然の雨も何も、キミは雨の日などに現れる妖精だろ？・・・・・・グルアガッハ」
「どういうことだ？」とディステリアが聞く。
「雨の日などに現れ、体を乾かせてほしいと頼んでくる。金髪をなびかせているからすぐわかったよ。まあ、どうぞ・・・・・・」
ためらいもなく小屋に招かれ、「失礼します」と中に入った。
「・・・・・民間伝承に伝わるグルアガッハは性別のハッキリし

ない妖精で、な。彼女はその一つ目とされる家庭の守護者であり、彼女の願いを聞き届けてやれば幸運が訪れると言われている」

「・・・・・俺たちのように旅をしている奴にも、ご利益があるのか・・・・・・？」

「えっ・・・・・・旅をなさってるんですか？」と、暖炉の前に座ったグルアガッハが驚く。

「まあ、ね。俺たちもあんたと同じように、突然の雨に見舞われて小屋で雨宿り・・・・・・ってとこだ」

「おかげで船に乗り損ねるし・・・・・・」

説明の後ふてくされるディステリアに、クトゥリアとグルアガッハが苦笑する。

「あ、あの・・・・・・」

「・・・・・こいつの言うことは気にしなくていい。それよりあんた、いいのかよ」

クトゥリアの問いに、「はい？」と聞き返す。

「・・・・・雨宿りのために泊まった小屋に、男二人と女一人。襲われでもしたら大変しゃないか？」

「えっ・・・・・・ええっ！？」

グルアガッハが驚いて声を上げると、ディステリアはクトゥリアのほうに振り返る。

「おい、クトゥリア。聞き捨てならないぞ。俺はそんなことしねえし、俺がそんなことさせるとでも思ってるのか？」

「限らないぞ。修行の一環として襲わせるかもよ・・・・・・？」

「させねぇし、やらねぇ・・・・・・」と、ふてくされたディステリアは後ろに手を組んで寝転んだ。

「・・・・・・・・あなたたちは心配ないようですね」

「じゃあ、今までに何度も・・・・・・？」とクトゥリアが聞く。

「はい・・・・・・でも、その度に魔法で撃退してきましたから・・・・・・」

「魔法が使える・・・・・・？まあ、不思議なことじゃないか・・・

・・・」
「そういえば、さっき『一つ目』って言ったが、他にもいるような口ぶりだったな・・・・・・」
体を転がしたディステリアに、「ああ、いるよ」とクトゥリアが答える。
「二つ目は、毛むくじゃらの男性の姿をしているパターン。力は強いが性格は優しく、お気に入りの農園のために家事や農作業を手伝ってくれる。報酬として牛乳を受け取るが、払い忘れると過労死をしてしまう」
「ブラウニーみたいだな・・・・・・」
「三つ目は、赤と緑の服を着たすらりとした男前の姿をして、森の中の古びた城などに棲み、自分の領域を侵す者があれば魔法を使って悪戯する。そういえばこの辺りに城があったが、あれはキミの仲間のか・・・・・・？」
「・・・・・いえ、私の家でした。しばらく空けていたら誰か使っていたようですけど・・・・・その誰かが暴れたらしく、ボロボロに壊れていました・・・・・・」
泣いているグルアガッハに、ディステリアとクトゥリアは顔を見合わせる。
「まさか・・・・・・」
「まさかな・・・・・・」
「どうかしたんですか？」
「・・・・・あんたが言ってるのってもしかして、ペッホが建てたって言う、石造りの古城じゃないか・・・・・・？」
「はい、そうですけど・・・・・・。お二人とも、犯人を知ってるんですか！？」
期待に満ちた表情のグルアガッハに、クトゥリアとディステリアはためらいながら事情とそこで起こっていたことを話す。
「そ・・・・・・そんな・・・・・・」
「・・・・・・まさか、あんたが住んでいた城だったとは。すまな

い・・・・・・ほら、ディステリアも・・・・・・」
「お・・・・・・おう・・・・・・」と頭を下げたものの、なんか納得がいかなかった。
「・・・・・・いえ、お二人のことは気にしてないんですけど・・・・・・あそこで妖精たちが苦しめられていたと思うと・・・・・・」
「あんたも妖精だからな。辛いだろうが・・・・・・」
「はい・・・・・・」とすっかり落ち込んでしまった。
「・・・・・・私・・・・・・ディナ・シー騎士団に、被害届けを出します」
「えええええっ!?」とディステリアがとどろいて声を上げる。
「その犯人たち・・・・・・許せません・・・・・・」
「ちょ、ちょ・・・・・・ちょっと待て、俺たちのことは気にしないってさっき・・・・・・」
「はい、あなたたちのことは気にしてません。・・・・・・私が許せないと言っているのは、妖精たちを酷使していた犯人です」
「あっ、そりゃ納得・・・・・・」とクトゥリアが頷く。
「そいつがあんたの城を勝手に使わなかったら、俺たちが戦闘で壊すこともなかったし・・・・・・あんただって、仲間が苦しめられていたとこで住むのは後味が悪い・・・・・・」
「はい・・・・・・ものすごく悪いです・・・・・・」
「しかし、だな。妖精誘拐および重労働使役の犯人であるウッピティ・ストゥーリーとニクネヴィンは、すでにディナ・シーたちに逮捕されている。・・・・・・まあ、黒幕は依然不明だが・・・・・・」
「じゃあ、その黒幕さんを許しません。私が魔法でとっちめます」
「とっちめますって・・・・・・できるのかよ」
呆れながら聞くディステリアに、「・・・・・・無理だろうな」とクトゥリアが代弁する。
「決め付けないでください!!」
「まず・・・・・・『黒幕さん』っていてる時点で無理だ。あんた、

争いを好まない。となると、戦闘に慣れてないだろ・・・・・・」
「うっ・・・・・そりゃあ、まあ。・・・・・・襲われても、魔法で威嚇して怯んだ隙に逃げるだけですし・・・・・・」
「だから、無理だって言える。黒幕と戦う以上、そこに辿り着くまでにどれくらいの敵と戦うかわからない。時には命を奪うことだって・・・・・・。あんたにその覚悟があるのか・・・・・・？」
「うっ・・・・・・」と黙り込む。
「ディナ・シーたちも、そこら辺は調べてくれている。あの一件で俺たちも黒幕に目をつけられたかもしれない。俺たちは身を守れるが・・・・・お前はどうだろうな・・・・・・？」
「自分の身ぐらいは自分で・・・・・・」
「護身術程度では話にならない・・・・・・」と言われ、「ううっ・・・・・」とうなだれる。
「わかり・・・・・ましたよ・・・・・・」
グルアガッハがしぶしぶ納得した所に、「・・・・・・ところで」とディステリアが話しかける。
「その服、濡れてて冷たくないか？俺の着替えでよければ、使っていいが・・・・・・」
リュックから着替えを取り出して差し出した瞬間、グルアガッハは目に涙を溜めだしたのでディステリアは体をこわばらせた。
「うわ・・・・・・バカ・・・・・」
「へ・・・・・・？」と首を傾げた瞬間、
「うわあああああああああああああああんっ！！！！！」
物凄い大声で泣き出すと、グルアガッハは大雨の中、山小屋を飛び出していった。唖然とするディステリアに、クトゥリアが話しかける。
「お前、バカ。グルアガッハは、服などの衣類を受け取ると悲しそうに大声で泣きながら立ち去るんだよ」
「何！？聞いてねぇぞ、そんなこと！先に言え！」
「金なのは常識だ。お前、本当に危険生物以外の知識はすっからか

んだな・・・・・・・」
「すっ・・・・・・すっからかんはないだろ、すっからかんは・・・・・・」
降りしきる雨の中、山小屋の中でディステリアとクトゥリアの言い争いが繰り広げられたが、その大声は雨の音にかき消され誰にも知られることはなかった。

―※＊※―

ハイコットランドとライルスランドの境界にある、とある山道で一人の男が複数の男たちに囲まれていた。
「うら、さっさと身包み置いて、とっとと失せろ!!」
「そ・・・・・・そんなことしたら、寒さと餓えで死んでしまいます」
「知るかよ。妖精の一人や二人、死んだって誰もこまりゃしない」
「そりゃ、あんたら人間の話でしょ。私たち妖精は・・・・・・」
「ガタガタうるせぇ!!さっさとその、食いもんでできた服をよこせ!!」
リーダーらしき男が妖精の男を蹴り飛ばすと、一瞬で現れたディステリアが蹴り飛ばされた妖精の男を受け止めた。
「おい、お前ら!よってたかって弱い者いじめか!」
「なんだ、テメエは!?関係ないだろ、引っ込んでろ!!」
「いやあ、そうしたいのは山々なんですけど・・・・・・」
後ろでした声に驚いて、妖精の男性を脅していた男たちが飛び退く。いつの間にか、彼らの後ろにクトゥリアが立っていた。
「て、テメエ・・・・・・いつの間に!?」
「・・・・・相変わらず相手の心臓に悪いな・・・・・・」
ディステリアが呆れていると、「なんなんだ、テメエら!」とリー

ダー格の男が叫ぶ。
「世直しってか?お呼びじゃねぇんだよ、さっさと失せろ!」
「失せるのはてめえらが先だ。大体・・・・・妖精を脅してたら、お前らが報復されるぞ」
「そいつらの仲間が怖くて、こんなことしてるかよ!!」と男たちが笑う。
「・・・・・俺たちには領主さまの後ろ盾がある。あの方の領地内で起きたことなら、妖精どもの報復も怖くない!」
「ほう・・・・・」とクトゥリアが興味深そうに呟く。
「・・・・・どうやら、空腹ゆえ襲った山賊の類でもないようですね。ディステリア、やってしまいなさい」
「ああ。・・・・・って、テメエはやらねぇのかよ!?」
ディステリアが驚くと、「俺はこいつを守らなきゃいけないから」と、妖精の男性の近くに立っていた。あまりの速さに、妖精の男性も驚いて悲鳴を上げる。
「いつの間に・・・・・」
「よそ見してる暇はねぇぞ!テメエら、やってしまえ!!」
「おお!!」
二人の男がディステリアを囲む。妖精の男性が目を瞑った直後、殴られたり蹴られたりする鈍い音が響き、恐る恐る目を空けると、襲いかかって来た男たちが倒れていた。
「・・・・・ったく、弱すぎだ。剣を抜く必要もない」
「人間相手にあれを抜いたら、まずいだろ・・・・・」
呆れているクトゥリアに「そりゃあ、な」と答えると、男たちが一目散に逃げ出す。
「てめえらの顔は覚えたぞ!領主さまに言いつけて、捕らえてもらってやる!!」
「はいはい。その領主にぜひとも、お目にかかりたいものだね・・・・・」
手をひらひらさせてクトゥリアが答えると、男たちは再び一目散に

逃げ出した。
「・・・・・ありがとうございます。しかし、あいつらに目をつけられたということは、この土地の領主に目をつけられたのと同じ。早く立ち去ったほうが・・・・・・」
慌てて忠告する妖精の男性を、ディステリアはマジマジと見る。帽子はクリームチーズ、上着はローストビーフ、ボタンは樫パンでできており、とても服とは思えない。
「な・・・・・・何か・・・・・・・？」
「おい、ディステリア。失礼だろ」
「いや・・・・・・・でも、こいつの着てる服、食べ物だろ?そんな服着てたら、普通気になるだろ?」
ギクッと震えた妖精の男性に、「ああ、こいつか」とクトゥリアが指差す。
「こいつはエイケン・ドラム。この辺りのナンセンス童謡詩によく登場する、食物でできた服を着た妖精だ。この服は、そのまま食べることができる」
「どれどれ?」とディステリアが手を伸ばしてみると、エイケン・ドラムはクトゥリアの後ろに隠れた。
「・・・・・・試そうとする奴があるか、バカ」
「いや、気になるだろう?普通・・・・・・」
手を引っ込めるディステリアに、「お前はもっと他のことを気にしろ」とクトゥリアが注意する。
「・・・・・・さっきの山賊もどきたちが言っていた、領主さまか？」
「ああ」とクトゥリアが頷く。
「人間が妖精の報復を恐れないということは、妖精たちの報復を防げるものを持っているということ。それが何かはわからないが・・・・・」
「神様の守護・・・・・・ってやつか・・・・・・？」
「いや。忌事を犯した人間に対して神の代わりに報復することは、

神自身が許可している。余程、信心深い奴でなければ加護を与えないと思うが・・・・・さっきのような横暴な奴らを抱える奴が、そういう奴とは思えない・・・・・」

「・・・・・それこそ思い込みかもしれないぜ？」

「かも知れない。だが、そう考えてしまう・・・・・考えすぎだろうか？」

そう聞くクトゥリアに、「いや、そうは思わない」とディステリアが答える。

「・・・・・と言っても、俺は難しいことを考えるのは苦手だ」

「その苦手は克服したほうがいい。難しいことを理解できなくても、自分なりの答えを出せるようにならないと・・・・・」

「わかった・・・・・」と頷くと、ディステリアはエイケン・ドラムのほうを向く。

「さっきの領主の話、聞かせてくれ・・・・・」

―※＊※―

一方、そこから数キロ先の野にある一見の立派な城。

「何・・・・・失敗しただと？」

豪華なシャンデリアがかけられた一室で、豪華な装飾が施されたマントをまとった一人の男に先ほどの三人の男が報告をしていた。

「追い詰めたことは追い詰めたのですが、妙な二人組みに邪魔されて・・・・・」

「その妙な二人組、顔は覚えているか？」

「はい、しっかりと。すでに似顔絵を描かせました」

「そうか・・・・・」と近くのテーブルに載ったワイン入りのグラスを手に取ると、それを男の前の床に投げつけた。グラスは割れ、カーペットにワインが散る。

「――その愚か者どもを見つけ出し、私の前に引き立てろ！！その上で、お節介を焼いたことを後悔させてやる！私自らの手でな・・・・・！」

残虐な笑みを浮かべた領主に、三人の男は背筋が震える。

「行け！不眠不休で探し出し、連れて来い！！」

「は・・・・・はい！！」と返事をして、男三人は部屋を飛び出していった。領主は、部屋の大きな窓の前に立ち、外を見る。

「・・・・・いずれ私は、この世界の全てを手に入れる。その手始めがこのハイコットランドだ。ライルスランドやルウェーズも手に入れる。誰にも邪魔はさせん・・・・・・」

やがて、「ククククク・・・・・ハッハッハッハッハッハ」と笑い声を上げる。日に照らされて伸びた影が人間のそれと違う形をしていたことを知る者は、領主本人を含めて誰もいなかった。

―※＊※―

一方、ディステリアとクトゥリア。ディナ・シーに連絡をとって、クトゥリアはある資料を要求していた。

「・・・・・妖精王に捜査資料開示を求められるなんて、あんた何者だよ・・・・・・」

「一般人だが・・・・・・？」とはぐらかしたクトゥリアは、資料をめくって読み始めた。その一枚一枚を読むスピードは尋常ではなく、只者とは思えなかった。

「・・・・・ハイコットランド高地地方の現領主。・・・・・若いな・・・・・市民の支持は得られなかったものの、他の候補者が謎の死を遂げ、異例の少数当選・・・・・」

「・・・・・謎の死か。確かに臭いな・・・・・」

ディステリアが呟くと、資料を届けに来たディナ・シーも話しに加

わる。
「連続した妖精失踪事件が誘拐だとわかり、容疑者であるこの領主の身辺捜査をした結果、そのような事実がわかりました。・・・・・・我々としては、部外者・・・・・・特に人間に資料を見せたくないのですが・・・・・・」
「おう、悪いね」とクトゥリアが言うと、ディナ・シーは肩を落とす。
「・・・・・・オベロンさまとティターニアさま両名の進言で仕方なくですよ・・・・・・」
「・・・・・・ホント、何者だよ」
唖然とするディステリアが聞いた瞬間、無数の鎧を来た人間の足音が耳に届く。
「・・・・・・チッ、もう動き始めたか。ディナ・シー、彼の保護を・・・・・・」
クトゥリアが舌打ちをして捜査資料をしまうと、ディナ・シーはエイケン・ドラムを妖精馬に乗せる。
「彼を助けたあなたがたも助けたいのですが、生憎、妖精馬には人間は乗せられない・・・・・・」
「気にするなって。できの悪い弟子の修行にちょうどいい。ディステリア、行くぞ」
「見つからないように移動、ですね。・・・・・・って、出来の悪い弟子ってなんだよ!!」
ディステリアの声が聞こえたのか、「いたぞ!」と兵士に見つかる。
「げっ・・・・・・」
「バカ弟子・・・・・・」
「・・・・・・では、健闘を祈ります」
ディナ・シーは馬の手綱を引き、その場から駆け抜けていった。その直後、草むらを突き抜けて兵士達が駆けつける。
「見つかった以上、戦う。文句は言わせねぇ・・・・・・」
「言うわ。戦うのは追いつかれたときのみ、今は・・・・・・逃げ

ろ！！」
走り出したクトゥリアに驚きつつ、天魔剣を構えていたディステリアも逃げ出す。
「逃がすな！追え～～～！！」
こうして、森の中で奇妙な追いかけっこが始まった。

第9話　真に恐るべきは人の業と欲（前書き）

題名と内容に違和感があるかもしれません・・・・・・。

第9話　真に恐るべきは人の業と欲

ハイコットランドの小川で一人の老婆が衣を洗っていた。小柄で緑色の服を着ており、水かきの付いた赤い足をしているその老婆は、ブツブツと小言を呟いている。

「・・・・・死ぬ・・・・・・今日か明日・・・・・・・。人々に望まれず地位を得た愚かな王が・・・・・・死ぬ・・・・・・」

そう呟きながら洗い物を続ける老婆に、横を走り抜けたディステリアは気味悪さを感じた。

「なんだ・・・・・・あの婆さん・・・・・・？」

「あれは、ベン・ニーアだ。死期の迫った人物の衣を洗う女性の妖精。貴族の死が近づくと鳴き声を上げる妖精、バンシーの仲間だ」

「じゃあ、誰かが死ぬ？」

眉をひそめて聞いたディステリアに、「大方の見当はついたんじゃないか？」とクトゥリアが聞き返す。

「あいつが死を預言した者・・・・・・そいつは・・・・・・」

その時、「でやあああああっ！！」と脇の草むらから全身を鎧に包んだ兵士が切りかかる。ディステリアは一瞬でクトゥリアの前に出て、その兵士を天魔剣の峰で打った。

「ぐはっ・・・・・・」

倒れた兵士を置いて、後ろから来る兵士たちが追いかけて来る。

「・・・・・・今の動きは７０点。だんだん点数が上がってきてるな。さすが俺の弟子」

「ほざけ！！あくまで仮契約中なんだろ！・・・・・・っつうか、点数なんかつけるな！！」
「でやあああああああっ！！」
「おっと・・・・・・！！」と、草むらから飛び出した兵士を右手で殴り飛ばす。
「・・・・・さすがにコースが読まれていると、周り込みされている。指揮系統の高さがうかがえるな」
「感心するな～～、アホ～～～！！」
とか言ってると、目の前の道に多数の兵士がやってくる。
「分隊か・・・・・こっちだ」
脇道に入ったクトゥリアに、「えっ、ちょ・・・・・・」とディステリアも後を追う。
「バカめ、そこは湖への一本道だ」
「回り込め！！」
兵士たちが迅速に行動する。その頃、ディステリアとクトゥリアは草むらの中にある獣道を通っていた。
「どこに通じてるんだ！？」
「わからん」
「お前な・・・・・・」
その時、二人は開けた場所に出る。そこは広い湖で、向こう岸に城らしき塔が見て取れる。クトゥリアはとっさに草むらに隠れ、ディステリアもそれに習った。
「あそこが、この辺りの領主の城か・・・・・・」
「・・・・・攻めるなら夜か？」
「伊達に騎士勤めしてないらしいな。だが、それは騎士の攻め方じゃない。俺の考えていることも、騎士の攻め方じゃないが・・・・・・」
その時、湖の岸辺で何かの気配がする。二人が身を低くして様子をうかがうと、二人の麗しい女性が歩いていた。その二人を見てクトゥリアが目を見張る。

「・・・・・知り合いか?」
ディステリアに、「いや・・・・・・」と返す。
「美しい娘の姿で人間をたぶらかし、血を吸う邪妖精バーヴァン・シーと美少女の姿をした邪妖精フィディエル。なぜ、この二人があんな男の屋敷でメイドなんか?」
「メイド!?」
ディステリアが驚くと、クトゥリアはディナ・シーが届けてくれた捜査資料を手渡す。
「この資料によれば、メイドとして勤めているらしい。まあ、邪妖精が人間と共に暮らしたいと考えることは滅多にない。加えてあの領主だ。奴に弱みを握られたと考えるのが妥当だろう・・・・・」
その時、どこからか唸り声が聞こえる。不思議に思って声にするほうを覗くと、緑色の服を着ている妖精らしきものが二人の女性に近づいているのが見えた。鼻はなく黄色い馬のタテガミのようなものが尾まで伸び、指の間には水かきがある。
「フーハだと!?どうしてこんな所に!?」
「なんだ、そいつ?」
「水、川や池、時として海にも係わりのある邪悪な妖精たちだ。だが、自ら離れたこんな所になぜ・・・・・」
「目の前に湖がある。ここに棲んでるんじゃないか?」
フィディエルが抱いている子供を下ろすと、子供はあやされるかのような声を出す。すると、湖の草が伸び始めた。今度はフーハがバーヴァン・シーに近づくと、バーヴァン・シーの抱いていた子供がカラスに変化した。しかし、すぐに変身が解けて落ち、バーヴァン・シーがそれを受け止める。その時、服の裾から馬のような足が見えた。
「・・・・・段々、見えてきたぞ・・・・・」とクトゥリアが口の端を釣り上げる。
「どういうことだよ」
「あれを見ろ」と指差したほうを見ると、フィディエルとバーヴァ

ン・シーが子供を抱えている。
「フーハとの子供で、その初代となる者たちには皆、尾のようなものと背中にタテガミのような毛が生えている。だが、あの子供はカラスに変化することができ、足だけは偶蹄目のよう。あの緑の髪の子供は水に強い体性を持ち、沼地の絡まりあった草や水草を操れる・・・・・・。間違いない・・・・・・」
その時、周りから槍が向けられる。気が付くと、二人は追っ手の兵士たちに囲まれていた。さっきまで見ていたフィディエルとバーヴァン・シーは、二人に気付いて慌てて逃げ出した。
「見たな・・・・・・・？あれを見られた以上、生きて返すわけにはいかない・・・・・・」
「へえ・・・・・・・なら、どうするってんだ？」
「本来ならその場で命をもらうが、領主さまは直々に手を下されるという。よって、お前らを領主さまの所に連れて行く・・・・・・」
「いやと言っても力づくだ・・・・・・」
「ほう・・・・・・俺は力づくは嫌いじゃないけど・・・・・・」
ディステリアが天魔剣を構えた瞬間、クトゥリアが彼の首に手刀を当て気絶させた。
「なっ・・・・・・？」
訳もわからぬままディステリアは意識を失い、クトゥリアはその場に座り込んだ。
「抵抗の意思はない・・・・・・ということか・・・・・・？」
クトゥリアは黙っている。
「いいだろう。つれて行け・・・・・・」
二人は縄に縛られ、兵士に城へつれて行かれた。

―※＊※―

ぼやけている視界がハッキリしてくる。目が覚めるとディステリアは起き上がり、周りを見る。そこは石造りの壁に囲まれた地下牢だった。

「俺は・・・・・・いったい・・・・・・」

「目が覚めたか?」と声がすると、同じ牢に入っているクトゥリアが手を上げる。ディステリアはすぐに、クトゥリアの胸倉を掴んだ。

「・・・・・・どういうつもりだ?」

「そんな怖い顔するなよ・・・・・・」

「・・・・・・俺を領主に売るつもりか?」

「そんなつもりだったら、俺は牢に入れられていない・・・・・・」

表情を変えず答えるクトゥリアに、ディステリアは手を離す。

「捕まったのはわざとだ。向こうがわざわざ会うって言ってんだ。あえて侵入する必要はない・・・・・・」

その時、地下牢に足音が響く。兵士がやってきて、「出ろ」と牢を開ける。

「領主さまがお会いになるそうだ。くれぐれも、変な気を起こすなよ」

縄で二人をきつく縛り付けると、兵士は二人を引いて地下牢から出る。

「さて・・・・・・どんな奴かな・・・・・・」

クトゥリアは楽しみであるかのように、笑みを浮かべた。

―※＊※―

領主がいる広間に引き立てられたディステリアとクトゥリアは、豪華な装飾がつけられたマントを身にまとった男が目に入った。

「お前らか・・・・・・私には向かうという愚か者は・・・・・・」

「そういうあんたは、他の候補者の死で領主の地位につけた、幸運

な奴か・・・・・・」
幸運の部分を皮肉そうに言ったディステリアに、「口を慎め」と兵士が縄を引く。
「・・・・・・構わん。今にそんな口を聞けなくしてやる・・・・・・」
そこに、「失礼します」と熱を帯びた女の声がする。胸の辺りが大きく開いたメイド服を来たメイドたちが何人も来た。その中には、湖で見たフィディエルとバーヴァン・シーもいた。
「ご主人さま～。私たち、夜まで待てない～」
すると、領主は猫なで声で「我慢しろ」と言った。ディステリアは気持ち悪くて思わず、身震いする。
「でも～、最近お仕事ばかりだし～。領主さまを落としいれようとする愚か者のせいで、ストレス溜まりまくり～～」
「な・・・・・・なんなんだ・・・・・・」
ディステリアが引くと、さっきから離しているメイドがディステリアのほうを見る。
「・・・・・・あんたたちのせいで、私たちが寂しい夜を送ってるのよ～。私たちで暇を潰すのも、飽きたし・・・・・・」
色っぽい声で唇に人差し指を当てるメイドに、「な・・・・・・何やってんだ・・・・・・」とディステリアが思わず呟くと、クトゥリアが顔をしかめる。
「こいつらの始末をつけたら、久々に楽しむとしよう。そうだな・・・・・・今夜の相手はフィディエルにしてもらおう・・・・・・」
「光栄です、ご主人さま」
フィディエルと呼ばれた女性がスカートの裾を持ってお辞儀をすると、「またフィディエルちゃん～？」と不満そうな声を上げる。
「今夜も楽しませてもらうぞ・・・・・・」
虚ろな目で、「ハイ、ご主人さま・・・・・・」と答えると、フィディエルたちメイドは部屋を後にした。
「・・・・・・洗脳してメイドとは・・・・・・趣味が悪いな・・・

・・・」

睨むクトゥリアに対して、「ハン」とバカにしたように笑う。

「私の理想郷に邪妖精などいらない。だが、美しければ話は別だ。保護してやる代わりに私の僕となり、私を楽しませる。それがメイドというものだろ、何が悪い！」

「・・・・・楽しませるだと・・・・・・」

物凄く鋭い視線で睨むディステリアに、「ああ、そうだ」と領主が笑う。

「あのさまは最高だぞ。美しい女の妖精が隷属的に従い、媚びてくるさまは。お前も私の下に来れば見られたものを・・・・・」

興奮して下品な笑みを浮かべる領主に、ディステリアの怒りは頂点に達した。

「この・・・・・外道が！！！！！」

そう叫ぶと、ディステリアは縄を引きちぎって天魔剣を取り出した。

驚いて慄く領主が悲鳴を上げると、兵士たちが飛び込んで来る。

「な・・・・・縄を引きちぎった！？ば、化け物か・・・・・・」

「そうだな。俺は化け物かもしれない・・・・・だが、ならお前はなんだ！？人間だとでもいうつもりか！！」

「か・・・・・かかれ！殺してしまえ！」

領主の命令で兵士たちが一斉に襲いかかると、ディステリアが睨み返す。天魔剣を反転させて峰で打ち、後ろから飛びかかった兵士にはクトゥリアが飛び膝蹴りで気絶させる。

「・・・・・ったく、段取りは守れよな・・・・・・」

呆れるクトゥリアの縄がするりと抜け、手首を痛そうにさすった。

一瞬目を見張った兵士を剣を抜かず鉄拳で鎧の上から殴り飛ばす。

「・・・・・縄抜けって奴か？関節を外す・・・・・・」

感情の抜け落ちたような、重く冷たい声でディステリアが聞く。

「・・・・・お前、アホ。関節を外した所で腕の太さが変わるわけじゃないから、抜けられるわけないだろ」

いつもと変わらない様子で答え、クトゥリアは右手を上げて見せる。

「親指を畳んだ時、手首を同じ太さになるように日ごろから鍛えておくんだ。そうすれば、腕を縛られても・・・・・・」
口調も動作もいつもと変わりない。が、ディステリアに向けられたその目は、どこか鋭さと危機感があった。そこに、剣を掲げた兵士が切りかかるが、
「・・・・・・邪魔だ」
「ぐあっ」
冷たいクトゥリアの一撃で兵士が一瞬で倒されると、ディステリアも他の兵士を倒していく。領主は「ひえぇ～」と悲鳴を上げた。
「呆気ないな。これで終わりか」
天魔剣を掲げてディステリアが近づくと、領主は窓のほうに後ずさりする。
「こ、こうなったら・・・・・・」
領主が腕輪をつけている左腕にもう一つ腕輪を着ける。ディステリアが不思議に思っていると、領主から不気味な気配が漂い始めた。
「な、なんだ・・・・・・？」
「ハハハハハハ！！」と高笑いすると、領主はディステリアを殴り飛ばした。思わぬ力に、ディステリアは驚く。
「うわっ！！なんだ？さっきのヘタレた雰囲気とはえらい違いだ・・・・・・」
「慌てるな・・・・・・どうやら、あの腕輪にタネがありそうだ・・・・・・」
「ハ～ッハッハッハ！私は無敵！敵う者はいない！」
「ほざけ！！」とディステリアが切りかかるが、領主の腕の一振りで吹き飛ばされる。
「ぐあっ・・・・・・！！なんだよ、いったいどうなってんだ？」
冷静なクトゥリアに対し、ディステリアはまだ頭に血が上っている。天魔剣を構え直して切りかかるが、領主は腕やマントを振るいことごとく攻撃を防ぐ。
「おおおおおおおおっ！！」

「ハハハ！！ぬるいわ！！」
渾身の一撃を黒い魔力をまとった腕の一振りで跳ね返され、「ぐっ・・・・・・」とディステリアが着地する。
「ハハハハハハ！！夜はメイドどもで楽しんでやるんだ！！お前らなど、一捻りにしてくれる！！」
「・・・・・・なるほどな」
渾身の一撃を防いでようやく冷静さを取り戻したのか、ディステリアは静かに呟き口に溜まった血を吹き出す。
「その欲望が力の源らしいな・・・・・・胸くそ悪い！！！」
「・・・・・・なら、どうするというのだ？貴様は俺に勝てん！ハ～ッハッハッハッハッハ！」
すっかり勝った気でいる領主に、「どうかな？」とディステリアは天魔剣の刃を上に向けて構える。
「はぁぁぁぁぁ・・・・・・」
目を閉じて深く息を吐き、領主を睨むとそのままの構えで突っ込む。
「バカめ！！」
領主が撃ち出すエネルギー弾を突っ切り、ディステリアは天魔剣を振り下ろした後、即座に振り上げる。
「――――ライジング・ルピナス！！」
無数の光の柱が立ち、「ぐあああああっ！！」と悲鳴を上げる領主。
右腕に激痛が走るが、ディステリアが気にせず次の構えを取る。
「――――フォーリング・アビス！！」
大きく掲げた天魔剣を振り下ろすと無数の黒い流星が落ち、領主を押し潰した。
「がはっ・・・・・・！！」
技が収まり、ディステリアは激痛に襲われて膝を着くと、そこにクトゥリアが駆け寄る。技を受けた領主がつけた腕輪は壊れており、人の姿に戻っていた。
「大丈夫か？」
「ああ・・・・・・いつっ・・・・・・」

「無理をするな・・・・・・後は、ディナ・シーたちに任せて置こう」
「えっ・・・・・・？」とディステリアが呟いた時、城の外を妖精の騎士たちが囲んでいた。

―※＊※―

主を失った城を後にしたディステリアとクトゥリアは、近くの港を目指していた。
「あの土地を治める領主はどうなるんだ？」
「市民が決めるだろ。今度こそ、厳重な警備のもと行なう選挙で、な・・・・・・」
だが、納得のいっていないディステリアは元より、クトゥリアの顔はさえなかった。
「（・・・・・・あの領主。怪物の姿に変身するあの腕輪を、どうやって手に入れた。それに、選挙中に起きたという、他の候補者の不可解な死。何か関係があるのか・・・・・・）」
浮かない顔のクトゥリアに、「どうした？」とディステリアが聞くが、「いや、なんでもない」と足を速めた。
「・・・・・・それより、喜べ。お前の師匠にする男と連絡が取れた。近くの港から出る船が着くエウロッパの港で落ち合う約束だ」
「本当か！？よっしゃぁ！！」
「そうとわかったら、善は急げだ！港まで走るぞ！」
走り出したクトゥリアを、「おっ、待てよ！」とディステリアが追いかけた。

この後、二人は船を間違えてエリウのほうに渡ってしまい、大変な目に遭うのだった。

幕間（前書き）

最初に断わっておきます。完全オリジナルの異世界が登場します。
そういったものが嫌な方はスルーしてください。あと、ルシファーとミカエルの性格は明らかに独自設定です。

幕間

〈天使たちが住む天界と悪魔たちが住む魔界。その狭間にある、人間たちが住む人間界。それと、もう一つ・・・・・・。かつて、天界を追放され、魔界に落ちた者たちがいた。俗に言う堕天使。一方、魔界の方にも、ほんのごくわずかであったが争いを望まない者もいた。だが、それを主張することは、大魔王ルシファーに逆らうこと。当然、追放されてしまう〉

〈天界から追放され、地上に行くことも、魔界に行くことも拒んだ天使。魔界を追放され、地上に出ることを拒んだ悪魔。通常では決してありえない、二つの存在が出会うという偶然が、天界でも、魔界でも、人間界でもない、新たな世界〈天魔界〉を創造させた。その天使と悪魔は共に暮らし、やがてたくさんの子が生まれた。天使と悪魔の血を合わせ持つその子供たちは、次第に増えて行った〉

〈やがて、天界と魔界から数多くの天使と悪魔たちが、天魔界に移り住んだ。だが、この事態を重く見た二つの世界の指導者は・・・・・・〉

この文の所で焼けた本は、炎に包まれた瓦礫の中にあった。その瓦礫の近くに、体の所々に墨がつき、目からはたくさんの涙を流して上を見ている少年がいた。その少年の視線の先では、一人の天使と一人の悪魔が戦っていた。天使は女で、悪魔は男。互いにやりきれないような表情で、剣を交えていた。

「お父さん！お母さん！やめて～！！」

その度に、少年が叫んだが、二人は戦いをやめようとしなかった。

「ディルト。これは天界と魔界の間で起きた戦い。たとえ相手が誰であろうと、どんな命令であろうと、私たち天使は天使長の命令には逆らえない」

「その通りだ。どんな命令であろうと、大魔王様の命令は絶対。我々が逆らうことができない、運命なんだ！」

二人は再び、武器を交える。

「俺たちが一緒になった時、いつかこうなることは覚悟しなければならなかったのだ」

ギィン！！

金属音がして、二人は再び距離をとって離れる。

「それが・・・・・・」と天使が武器を構え、

「我らの・・・・・・」と悪魔が武器を構え、

「兵士としての・・・・・・宿命なのだから！！」

そこからは、戦いのペースが上がった。天使が振り下ろした剣を悪魔がかわし、悪魔が振りかざした爪を天使が剣で叩き落す。まさに一進一退の攻防だった。その戦いはまさに、相手を倒すための闘い。響き渡る音は、涙を流す少年の心に一つ一つ、深く突き刺さっていった。

「（やめて・・・・・・やめて・・・・・・）」
やがて、天使と悪魔がお互いに武器を構えて突っ込んだ。少年は、その先に何が待っているか悟った。
「やっ――――」
ガスッ!!
鈍い音が響き、飛び散る鮮血。貫かれ、そして墜落する二つの体。爪と剣はそれぞれお互いの急所を、正確に貫いていた。即死だった。
「あ・・・・・・ああ・・・・・・・・・・・・」
駆け寄った少年は、冷たい現実を目の当たりにしていた。やがて、周りに響いていた爆音や金属音がしなくなると、涙を流すかのように、雨が降り出した。

―※＊※―

降りしきる雨の中、動かなくなった両親の体の側で、少年は涙を流していた。
「おい、こっちに誰かいるぞ」
不意に、後ろからそんな声がした。その後に、ガッ、ガッという瓦礫の上を歩く足音や、バサッ、バサッという翼を羽ばたかせる音がした。
「おい、天使がいるぞ!」
さっきと同じ声がした。するとさっきの足音が近づいて来た。いつの間にかそこは、大勢の武装した悪魔の兵に囲まれていた。
「動かないぞ。死んでいるのか?」
「近くにいるのは、子供?」
「この子供・・・・・・天使か」

喋りながら兵たちは、武器を構えながらだんだんと距離を縮めてきた。やがて、一人の兵が気付く。
「おい、こいつ、天使と悪魔の子供じゃないか？」
「おい、どうする？」
「どうするも何も、天使族は我らの敵。たとえ同族の血が流れていようと、容赦はしない」
三番目の悪魔兵が、苦しそうに声を出す。
「ってか、我らの天敵との間に子を成すなんて、馬鹿な奴もいたもんだ」
最初に来た悪魔兵があざけるように言った時、ドクン、と鼓動が鳴った。
「（・・・・・ば・・・・・か・・・・・？）」
涙を流したうつろな目で、ディルトはゆっくりと顔を上げた。
「だが・・・・・、一応は同族の血が流れている訳だし・・・・・」
「連れて帰る、とでも言うつもりか？悪いがそれはできん。天使の血を持つ悪魔など、異端でしかない」
四番目の悪魔兵に二番目の悪魔兵が意見する。
「つまり・・・・・、存在している意味がないんだよ」
再びあざけるように言った言葉に、ドクン、と鼓動が高鳴る。
「（意味が・・・・・ない・・・・・？）」
「おい・・・・・」と、四番目の悪魔兵が諌めるが、その悪魔兵はあざけるのをやめなかった。
「要するに、馬鹿な親のせいで意味も無い命を授かった、馬鹿なガキってことだよ。ハハハハハハ・・・・・」

ドクン・・・・・ドクン・・・・・

「・・・・・まれ・・・・・」
ディルトが呟くと、悪魔兵が驚いて、ゆっくりと立ち上がる少年の

ほうを向いた。
「おいガキ、今なんて・・・・・・」
「黙れって言ってんだよ!!!」
ディルトが叫んだその瞬間、ものすごい魔力が放出された。やがてそれらは、永い封印を解かれた何体もの大蛇が、獲物を求めるかのようにうねりだした。
「なんだ、このガキ?俺たちとやりあうつもりか?」
「貴様・・・・・・・・・・・・」
ディルトは憎しみがこもった目で涙を流しながらも、親を侮辱した悪魔を睨んだ。
「――――を・・・・・・」
何かを呟きだした途端、魔力の一部がディルトの右腕に集まりだした。
「あん?」
「父さんを侮辱するな~!!」
激昂すると共に兵士の一人に突っ込むと、その兵士の体を何かが貫いた。それを見た他の兵士たちは騒然とし、武器を構えて警戒した。
「(ちっ・・・・・・初っ端からこんなに強いなんて、聞いてねぇぞ・・・・・・)」
己の誤算を悟りながら体を貫かれた兵士が倒れると、貫いた物の正体が明らかになった。それは、限界まで大きく広げたコウモリの翼のような形をした剣だった。ただ、返り血を浴びて紅くはなっているが、つばの部分には白い鳥の翼を模した飾りがあった。まるで、悪魔の翼と、天使の翼。二つを合わせたかのような形の剣だった。
「あああああああああっ!!!!」
ブウン!!
音がするほどに剣が振られた直後、そこから悪魔兵たちの悲鳴が響き渡った。

―※＊※―

「なんだ？これは！？」
異変に気づいて駆けつけた、大勢の天使の兵が見たのは、無残にも切り裂かれた悪魔の兵と、返り血を浴び、血が滴る剣を握った、一人の少年の姿だった。その少年の目は、とても冷たいものとなっていた。
「この感じ・・・・・天使の力と悪魔の力を合わせ持っている？異端児か？」
その言葉に、ピクッとわずかに顔を上げた。
「どうする？」
「たとえ同族の血が流れようと、悪魔の血を持つ者は敵でしかない。悪く思うな！」
二番目の天使兵の号令と共に、その場に駆けつけた天使の兵たちは、その少年に飛びかかった。返り血を浴び、冷たい目を持つ少年は一瞬、笑みを浮かべ・・・・・・。

―※＊※―

「ミカエルさま」
光り輝く、巨大なステンドグラスが飾られた一室に、ドミニオンが飛び込んできた。
「我らが天魔界に派遣した部隊が・・・・・・」
言い終わらない内に、「私は・・・・・・」とミカエルが呟く
「・・・・・過ちを犯してしまったのかもな・・・・・・」

「は?とおっしゃいますと?」とドミニオンが首をかしげる。
「部隊は・・・・・全滅か・・・・・・?」
「え!?あ、はい。しかし、どうしておわかりに・・・・・・」
ミカエルは「さあ・・・・・・ね・・・・・・」と溜め息をついた。
「どうなさいますか?援軍をお送りに?」
しばらく考え込んだ後、「いや、しばらくは様子を見よう」と言った。
「様子を・・・・・・ですか?」
「ウム。おそらく今は、ろくに調査もできまい」
「確かに・・・・・・。戦いの後で、荒れ果ててはいますが・・・・・・」
「違う・・・・・・。そう言う意味ではない」
ドミニオンは「は?」と首を傾げたが、ミカエルの言ったとおり、今の天魔界では調査は行えなかった。

―※＊※―

深き闇に覆われた万魔殿の一室、玉座とも取れる場所で、一人の大魔王が報告を受けていた。
「すでに我らが送った部隊は全滅しているとの報告が。ルシファーさま。どうなさいますか?」
「フム・・・・・・」と、ルシファーは玉座の片方に肘をつき、しばらく考えていた。
「戦闘状況は?」
「こちらの部隊が全滅したことにより、沈黙状態です」
「そうか・・・・・・調査隊を一個中隊で派遣しろ」
それを聞いたベリアルは驚いて、「ち、調査隊を・・・・・・ですか?」と聞いた。

「どうした？何を驚いている？」
「ハッ、すぐに編成いたします」
「あと、調査隊には護衛部隊を一個中隊ほど付けろ。そして・・・・・」
一泊置いたルシファーは、真剣な面持ちで付け加えた。
「たとえ気のせいであっても・・・・・少しでも殺気や身の危険を感じたら、すぐに撤退するように伝えろ」
「は？・・・・・はっ、わかりました」
数時間後、調査隊が派遣されたが、出発してしばらくした後、万魔殿に戻って来た。理由は、ルシファーの言うとおり身の危険を感じたから。

―※＊※―

今、天魔界は、とてつもない殺気に覆われていた。その中で自由に動ける者は、天使、悪魔問わず誰一人いなかった。その殺気が覆っている間、両世界は十分な調査を行うことができなかった。それはまるで天魔界が、天界と魔界、両方を憎んでいるようだった。やがて、殺気が消えた天魔界で訪れた者が見た物は・・・・・。

〈やがて、天界と魔界から数多くの天使と悪魔たちが、天魔界に移り住んだ。この事態を重く見た二つの世界の指導者は、いくつかの対策を検討していた。だが、出した結論は・・・・・〉

〈『相手方の世界の情報を聞き出し、戦いを有利に進めよう』〉

〈やがて、光と闇の戦いが始まり、その戦いは狭間の世界を焼いた。人間界ではなく、天魔界の方を。しかし、この戦いは・・・・・・・・〉

〈世界に絶望を抱く、光と闇の力を持つ戦士を生み出すこととなる〉

「・・・・・・ん・・・・・・」
目を覚ました少年は、テントの中で寝袋の中に包まっていた。
「・・・・・・・・またあの夢、か・・・・・・」
寝袋から出した手で寝ぼけ眼を擦り、少年は身体を起こす。
「・・・・・妙な感じだ」
頻度が少なくなったとはいえ、いつも同じ夢を見る。少年にとっては何かの啓示なのか、それとも過去の傷なのか。
「おい、ディステリア！まだ寝てるのか!?」
「今日は起きてるよ。今日は・・・・・・」
気の抜けた声でテントの外の相手に答え、少年は起床した。

幕間（後書き）

プロローグのつもりで書いたものを無理矢理ねじ込みました。違和感が大きいかもしれません。

第１０話　蝶羽の姫君（前書き）

最初は各神話の神々がたくさん登場します。

第１０話　蝶羽の姫君

数日後、ある場所の会議では・・・・・・。
「なぜ、あなたたちは動かないのですか？」
石造りの柱が並ぶ神殿の中。半身半鳥の精霊、カンダルヴァがテーブルを叩き、神々の王ゼウスに聞いた。
「カンダルヴァ殿。しからばお主の主、ヴィシュヌ殿は人間たちに何か対抗をしているのか？」
「い、いや、ヴィシュヌさまは何もせずとも、人間は自ら滅ぶと見られている」
「そうか・・・・・・大体、いや、ほぼ全ての神はそう考えているだろう」
ゼウスがあごに手を当てると、近くの椅子に座っているティル・ナ・ノーグの神の一人、リールが呟く。
「滅ぶには惜しい人間もいるのに・・・・・・あの時のように・・・・・」
「あの時とは、ノアの洪水か・・・・・・誰が起こしたんだっけ？」
別の神が口を開く。しばらくの沈黙の中で、神々が考える。その中で、先に口を開いたのはゼウスだった。
「まあ、それはおいといて・・・・・・これからはどうする」
「もうしばらく、様子を見る他あるまい」と、バルト三国の一つから来た雷神、ペルーンが呟く。
「様子を見る？正気か！？」
ペルーンの同行者であるヤロヴィートが声を荒らげる。

「なら、今すぐにでも攻め入るか？人間ごときを相手に！」
リールの同行者であるルーグが叫んだ。
「まあ、神と人間が戦ったところで結果は見えている。無益な争いはしないほうが賢いのでは・・・・・・？」
「まあ・・確かに・・・・・・」
ゼウスの指摘に呟くと、ルーグは自分の前に置かれていたコップの飲み物を一口飲んだ。しかし、しばらくすると、不思議そうな顔をした。
「我々は今、何について話し合っていたのだっけ？」
ルーグと同じように飲み物を飲んだほとんどの神が、同じように首を傾げる。それを見たゼウスには、すぐに原因がわかった。
「（誰だ！？ネクタルの代わりにネペンテを出したのは！？）」
ネクタルとは、神々の力の元となる神酒で、人間が飲めば不老不死になるといわれている。ネペンテとはそれに忘却の川（レーテ）の水を混ぜたもので、疲労回復の効果があり苦痛や苦悩を忘れさせるが、記憶欠落の効果はないはず。
「（まさか、誰かレーテの水と入れ替えたな・・・・・・）」
とにかく会議を続けさせようと、ゼウスは別の議題を引き出そうとしたが、ふと、頭をよぎったことがあった。
「それにしても、アースガルドの者は何をしているのだ。伝令は伝わっているはずなのだが・・・・・」
オーディンだけでなく、その他のいくつかの国にも、代表となる神か精霊が来てない国があった。距離がありすぎて来ることができない、代表となる存在が決まっていない、国を治める仕事が忙しすぎる、様々な事情があるだろう。だが、議会の場所にも問題があった。議会が開かれているのは〈神界〉のオリュンポス地方、人間世界で言うとエウロッパ大陸にあるラグシェ国。エウロッパ以外の大陸にある地方にいる人々は、はるか昔にラグシェ国の人間に侵略を受けた。それは人間が勝手にやったことなのだが、人間と交流が深い神にとっては、その地域に相当する神界の神々の管理不行き届きでし

かなかった。
『神と思しき力を持つ者は、世界に存亡の危機が訪れ、人間たちの手に終えない事態が起きた時以外は、人間界に必要最低限の介入しかしてはいけない』と言う決まりがあるが、人間に近ければ近いほど、神々の決まりとの板ばさみに苦しんでいた。
だが、今はそんなことを言ってはいられない。下手をすると人間は自分たちの世界を自らの手で滅ぼす。つまり『世界の存亡の危機』なのだ。
「（どうしたものか・・・・・・）」
ゼウスがひげに手を当てて考えたその時、通路から足音が聞こえた。音の速さからして走っているようだ。やがてヘルメスが入ってきた。
「たいへんです！」
「どうした？」
「今しがたヴァルハラより、人間たちがアースガルドへの進行を開始したとの知らせが入った！」
それを聞いて、「なんだと・・・・・・」とペルーンが、「バカな！！」とカンダルヴァが驚き、その場にいる神々が口々に叫ぶ。
「そうか、だからオーディン殿は来られなかったのか」
海を越えた国ジェプトから来た、隼の翼と頭を持つ神、ホルスが呟いた。
「納得している場合ではない。人間がアースガルドに進出したということは、我々の存在を、いや少なくともアースガルドの神々の存在をないがしろにしたということだぞ」
ルーグの言葉に、「許せぬ。すぐにでも神罰を」とヤロヴィートがいきり立つ。
「だが、オーディン殿は人間に負けるほど弱くはあるまい」
カンダルヴァの指摘に、「いや、フェンリル狼に負けるほどだから・・・・・」とホルスの同行者の女神、イシスが呟く。
「なんということだ」
慌てる神々に、「今ここで言い合っている場合ではあるまい」ゼウ

スが声を上げる。
「このような事態、いつあなた方の国にも起こるかわからない。この会議場には最低限のメンバーを残し、後は各自で事態に対応して行こうと思っているが、どうだろうか？諸君」
ゼウスがそう言うと他の神々は、「確かに」、「さすが『大神』と呼ばれるだけはある」と言い合ったが、中には「これで浮気癖がなければ」と言う声もあった。
「こらこら、誰だ？余計なことを言ったのは？」
呆れたホルスの声に、その場は一気にしらけた。
「では、それぞれいったん帰り、情報伝達能力に長けた者を集結させるのはどうだろう」
ルーグの後に、「よし。だが、その集合場所はどうする？」とカンダルヴァが聞く。
「うむ。問題はそこだな」
腕を組むホルスに、ペルーンが案を出す。
「あの場所はどうだ？この世界で、まだ人間が住み着いてない場所があっただろう」
リールが「そうだな。そこが良い」と頷く。
「では、各々方。いつかまた、その場所で」
ゼウスの後に「うむ」と一同が頷いた。

―※＊※―

トゥアハ・デ・ダナーンがティル・ナ・ノーグに戻って、わずか半日。その空を一匹の蝶が飛んでいた。いや、蝶ではない。彼女は蝶の羽根を持つ者。一応、幻獣の部類に入るのだろう。彼女の名は、エーディン。元々は人間であった彼女が蝶の羽根を持つようになった経緯を説明すると、とても長くなってしまう。

「はあ～～～。平和ねぇ～～～」
半日前にオリュンポスで行われた会議の内容を知らないとはいえ、呑気なことを言っている。
「そういえば、オリンポス・・・・・とかなんとかいう所で、どんな会議が行われたのかな?後で誰かに聞いてみよう」
「そう呑気なことを言っている場合では、なさそうですよ」
突然した声に、「誰?」と後ろを振り向くと、そこにいたのはオレンジ色の長髪に銀の髪留めをした、群青色の服を着た女性。エーディンの友達のアリアンフロッドだった。
「あ～、フロッド～」
「略すな～!!」とアリアンフロッドは怒鳴った。
「ティル・ナ・ノーグの宮殿が騒がしいの。それと、急いで戻ってくるようにとアイルさまが・・・・・」
「お父さまが?わかった。で、何かあったの?」
「それが・・・・・」
言いかけて、宮殿に向かおうとした二人の前に突然、誰かが飛び出してきた。
「誰?」
二人は呟いたが、飛び出してきたのは遠い昔、エーディンに一目惚れをしたミディールの妻で、エーディンを蝶に変えた張本人のフォーヴナハ。数百年たった今でも、エーディンは彼女に会っていい気分にはならない。
「どうなされたのですか?こんな所で?」
そう聞いた途端、フォーヴナハは右腕を振り上げ竜巻を起こした。
二人が「え?」と思った瞬間、竜巻に巻き込まれ、あっという間に遠くに吹き飛ばされてしまった。
「きゃあぁぁぁぁ～～～～!!」
悲鳴を上げた二人を巻き込んだ竜巻を見送るフォーヴナハ。その後ろに、黒いモヤのようなものが出てきた。
「これで邪魔者は消えた。ふはははははは・・・・・」

黒いモヤが笑うと、フォーヴナハの姿は消えた。

―※＊※―

「・・・・・・・・おい、クトゥリア・・・・・・・」
「ん、なんだ?ディステリア」
不機嫌そうな少年と、何も気にせず地図を広げている男性。二人は木以外何もない森の中を歩いていた。
「ここは、どこだ?」
「それを今、地図で探している」
地図の上で目を凝らすが、この場所と同じと思われる部分に森はない。ということは、
「こりゃ、迷ったな。確実に・・・・・・・」
そう結論付けて地図を畳んだ。
「・・・・・・ここはエウロッパじゃない、ってことか?」
「おお、察しがいいな。考えられる原因は、あの船だ。恐らく、そこで乗り違えたんだろう・・・・・・」
「・・・・・・ウソだろ」
意気消沈して座り込むディステリアに、「ふむ」とあごに手を当てたクトゥリアが横目で彼を見る。
「(・・・・・・これぐらいで音を上げるとは、メンタル面が鍛えたりないな。彼に会うまでにどう鍛えようか)」
そう考えていると、近くで枝が折れる音と何かが落ちる音がした。
クトゥリアはその方角に目を向け、ディステリアも立ち上がる。
「なんだ!?」
「行ってみるか?」
「当然だ!!」
音が聞こえた場所に向かって、二人は迷わず駆け出した。

―※＊※―

「う～・・・・・ここは・・・・・・？」
エーディンが気付くと、二人はどこかの土地に飛ばされていた。
「ここは・・・・・・前にも来たような・・・・・・・」
周りを覆う木々を見渡していると、アリアンフロッドが起き上がる。
「痛たたた・・・・・・ひどい目にあったわねぇ」
エーディンが「ええ」と頷く。
「ところで、ここはどこなの？」
「うーん。前にも来たことがあるような気はするんだけど・・・・・・」
二人が考えていると、近くで羽音がする。
「あら、お二人さん。こんな所で出会うなんて珍しいわね」
二人が上を見上げると、一羽の大きなカラスが降りてきていた。
「どちらさまですか？」
その途端、カラスはズコッ、とこけて落下。地面にぶつかった。
「・・・・・この姿にならないとわからない？」
カラスがそう言って起き上がると、光に包まれて女性の姿になった。
縁が尖っている緑色の服にクリーム色のスカートをはいており、背中からは黒い翼が生えている。
「黒い翼の鳥人間さん？」

ドシャッ！

黒い翼の女性はまたこけた。
「モリガンです、モリガン。まったく・・・・・・あなたたち、まさかわざとやってない？」

二人が「ええ、わざと」と答えると、またずっこけたモリガンは、呆れた表情をしながら起き上がる。
「全く・・・・・あなたたち、今この世界がどういう状況になってるのか、わかってるの？」
「ええ。確か人間たちが神々や精霊の領域に立ち入ろうとしているのですよね」
アリアンフロッドの答えに、「まあね」とモリガンが言う。
「でも、それだけじゃないの。人間たちがまた戦争を始めたの。このアルスターとコノート間でね」
それを聞き、「なんですって！？」とエーディンが声を上げる。コノートとはアイルランド北西にある国で、エーディンの故郷アルスター王国の隣国である。
「あなたたち、とてもまずい時に来たね。特にエーディン。コノート王の娘のあなたがここにいるということが知られれば、事態はもっと悪くになる」
「なんですって？まったくフォーヴナハってば。最悪な時に最悪なことをしてくれたわね」
アリアンフロッドの言葉に、「なんだって！？」とモリガンが驚く。
「じゃあ、あんたたちがここにいるのにはフォーヴナハが関わっているのかい？」
驚きの表情で聞くモリガンに、アリアンフロッドは「ええ」と頷く。
「なんてことだい。じゃあ、やっぱミディールのとこでも何かあったのか」
「え？どういうことなの？」とエーディンが聞く。
「どうもこうも、もうめちゃくちゃよ。人間たちなんか、昔の戦争の時には使わなかった奇妙な武器を使うし。まあ、私たちには効かないけど。ええと、アルスターとコノート、さらにミディールの治める地下の国が介入して三つ巴の戦いになっちゃって、それから・・・・・」
その時、森の中に凄まじい音が響き渡った。と思ったら、いきなり

茂みの中から大量の兵士が飛び出してきた。身に着けている鎧は迷彩柄で手には槍を持っている者もいれば、機関銃を持っている者もいる。

「な、な、何、何、なんなのよ～！？」

パニック状態のエーディンを見つけると、兵士たちは何やら相談を始めた。

「おい、女だ・・・・・・」

「なぜこんな所に女が・・・・・・？」

「怪しいな・・・・・おい、女！！貴様、見かけない顔だな。どこから来た」

「見かけないも何も。サーカ、お前いつも訓練場の中にいて町には一度も言ったことがないだろ」

「確かにそうだがよぉ～。こんな美人、町にいたか？」

美人と言う言葉に顔を赤らめるエーディンだが、すぐにそうも言っていられなくなった。

「おい、この女。背中から蝶の羽が生えているぞ！」

「あっ、本当だ」

三番目と五番目に出てきた兵士の言葉に、他の兵士たちも緊張が高まった。

「と言うことは、妖精族の者か」

一番目の兵士が三人を睨みつける。

「こっちの女は鳥の翼が生えているぞ！」

「なら、こっちのオレンジの髪の子も妖精族か何か、か・・・・・・・残念、美人なのに・・・・・」

がっかりした五番目の兵士に、三番目の兵士が「バカ者！！」と怒鳴った。

「幻獣と思しき者は見つけ次第抹殺せよ！それがアルスター王の命令だぞ！！わかっているのか、クァイル！！」

それを聞き、エーディンは「（アルスター王の命令？なぜ！？）」と驚いた。

「そうは言うけどよ～、サーカ」
「問答無用だ。全員、任務遂行！！」
サーカの号令と共に兵士全員が武器を構える。モリガンは戦闘向きでは無い、エーディンとアリアンフロッドを庇う形で身構えた。
「どうするの？」と聞くエーディンに、「どうするって・・・・・・」と答えるアリアンフロッド。
「とりあえず、逃げるのよ。さすがの私でもあなたたちを庇いながら戦えない」
モリガンに促された二人は、森の奥へ駆け出した。それを見たサーカは「逃がしはしない」と、逃げる二人に槍を構えて向かって行く。
「させるか！！」
モリガンは突風を起こし、兵士たちの動きを封じる。「クッ」と腕を顔の前に上げた一番目の兵士、部隊長のマルカスや二番目の兵士ビィウル、四番目の兵士デンテュスが唸る。
「今のうちに」
そう言って駆け出した時、突風を突き破ってサーカが突進してきた。
「逃がしはしないと、言ったはずだ！！」
槍が二人に迫った時、草むらの中から飛び出した何かがそれを阻む。
「――――待ちやがれ！！」
「何！？」
驚くサーカに、森の中から飛び出した少年は蹴りを食らわせる。後退したサーカに他の兵士が駆け寄り、少年はエーディンらを庇いながら剣を構えた。
「ディステリア、そいつらは自国防衛の兵士だ。殺すなよ。殺したら問題になる」
「何！？自国防衛ってことは・・・・・・自衛隊？」
「そういうことになるかな」と後から飛び出した男性が肩をすくめた。
「クトゥリア・・・・・・だったら、おかしくないか？」
「貴様らこそなんだ！！」

質問の声を遮り飛び込んだサーカの槍を、横から飛び出した刃が広い別の槍が阻んだ。
「武器を収めてもらおうか」
「貴様・・・・・我らを裏切るのか」
「そのつもりはない」と答えた槍の持ち主を、サーカは睨んでいた。
「じゃあ、なぜその子たちを庇う?惚れたのか?セリュード」
クァイルが問う槍の持ち主は、サーカたちとは違う青い鎧をまとった、金髪の男性。彼が漂わせる気配に、ディステリアは違和感を覚えた。
「バカを言うな。この娘はアルスター王エタアさまのご息女にして、アイルランド王エオホズ・アレイヴさまのお妃であられるぞ」
その途端、「何!?バカな!!」と騒然とするマルカスたち。
「あの〜、言いにくいんですけど・・・・・」
すぐに訂正しようとしたエーディンだが、
「ちょっと待った。しばらくは話をあわせよう」
とアリアンフロッドに言われ、しばらく黙っていることにした。
「大体、君たちの主であるコノール・マクネッサ殿も、半神の英雄クーフーリン殿を味方に加えられているだろう」
セリュードの言葉に、「それとこれとは関係ないだろ!!」とマルカスが叫ぶ。
「いや、あるね。半分であろうと神の血を持つ者。ある意味、幻獣なのでは?」
「貴様!黙って聞いておれば・・・・・」
デンテュスがいきり立つが、「と・に・か・く!!」とセリュードが押さえる。
「この娘たちの身柄はこちらが保護いたす。何か用があるのならエオホズさまにお取次ぎを。」
エーディンたちのほうに向き直り、「では行きましょうか」と言った。
「は、はあ・・・・・」

モリガンとアリアンフロッドのほうを向き、「あなた方もどうぞ」と言った。
「いえ、私はここで失礼するわ」
そう断るとモリガンは、ワタリガラスの姿になってどこかへ飛んで行ってしまった。
「我々も行きましょうか」
「はい」とエーディンが答えると、三人は悔しそうな表情の兵士たちを置いて、森の中を進んで行った。
「いいのですか、隊長。あいつらをこのまま行かせて！」
デンテュスの問いに、「仕方あるまい」とマルカスが答える。
「あの者はエオホズ王の側近。下手に攻撃すれば、この国を二つに割ることになる」
「くそっ。ふざけやがって！！」とサーカが叫び、近くの木に拳を叩きつけ、その木を折った。

第１０話　蝶羽の姫君（後書き）

ケルト神話の中でお気に入りの妖精と女神を出します。自己満足みたいですが・・・・・それで不快になった方、なんかすいません。

第１１話　再会？（前書き）

最初に断っておきます。ちょっと強引な展開、というか茶番と感じられる方がいると思います。

第11話　再会？

セリュードと名乗る騎士に連れられて森を抜けたディステリアら四人は、そのまま城にやって来た。四人はそのまま、堀に渡された橋を渡り庭に入った。
「ここまで来れば、大丈夫でしょう」
セリュードが振り返ると、「は、はあ。あ、ありがとうございました」とエーディンが言った。
「で、では、私たちはこれで・・・・・・」
アリアンフロッドがそう言って城を立ち去ろうとするが、「おいおい、ちょっと待った」と呼び止められる。
「お二人は、どこか行く当てでもあるのか？」
その途端、二人はギクッ、と固まった。行く場所など無かったのである。
「やはり当てなどないのでしょう。どうぞお通りください。王がお待ちです」
ちょうど堀に渡された橋が上がり、入り口が閉まってしまった。
「門も閉まりましたし、今日はひとまずここにお泊まりください」
「・・・・・・」
仕方なく、二人は城の中に入り謁見の間に通された。

―※＊※―

「エオホズ王。エーディンさまとアリアンフロッドさまをお連れしました」
「うむ、ご苦労だった」と答えた玉座に座っている男を見て、エーディンは目を見張った。その男は、エーディンの夫のエオホズ・アレイヴそのものだった。
「そっ、そんな。うそ・・・・・・でしょ」
「久しぶりだな、エーディン。もう数百年になるかな」
「数百年!?」とアリアンフロッドが驚く。
「うそ・・・・・・だって・・・・・・ほんとに・・・・・・エオホズなの・・・・・・?」
エオホズが「ああ」と言った途端、エーディンの目に涙が溢れてきた。はるか昔のエオホズ王との幸せな日々が蘇ってきたのだ。
「エ・・・・・・エオホズ・・!」
感激に涙でいっぱいになったエーディンが駆け寄ろうとした時、
「はい、スト〜ップ!!」
突然、割り込んできたセリュードに、「え?」とエーディンは戸惑った。
「王・・・・・・少し悪戯が過ぎたようです」
「そのようだな・・・・・・すみませんでした・・・・・・ご先祖さま」
そう言ってエオホズとセリュードは頭を下げたが、エーディンにはわからなかった。
「え?」
「いえ、ですから・・・・・・このような悪戯をして、申し訳ありませんでした・・・・・・ご先祖さま!!」
エオホズの言葉に、「えええええ〜〜〜〜〜!?!?!?」とエーディンが声を上げた。

―※＊※―

数分後。

「つまり、このエオホズ王はエーディンの子孫に当たる人ってこと？」

怒り気味のアリアンフロッドに、「そういうことになります」とセリュードが答える。

「まことに、申し訳ありませんでした」

頭を下げるエオホズに、「いえ、いいのよ」とエーディンが言った。

「見抜けなかったこっちも悪いんだから・・・・・・」

そう落ち込むエーディンだが、今目の前にいるエオホズ王はエーディンの夫だったエオホズ王と瓜二つで、見間違えるのも無理はなかった。

「そうよね。あれから数百年も経ってるんだから・・・・・・私って・・・・・バカですよね・・・・・・」

「いえ、人を愛しいと思う気持ちはとてもすばらしいものです。そのようなことも考えず、王にこのような悪戯を持ちかけた私に落ち度があります。責めるなら、私を責めてください」

「何を言う。私こそ、少しでもご先祖さまをからかうと言う気持ちが出てしまった。一国を担う王としては情けなきこと。罰を与えるのなら、私を・・・・・・」

「何を言うのですか王」とセリュードが止める。

「セリュード。私は王として、そなたがこのような悪戯を持ちかけた時、きっぱりと断るべきだった。それなのに・・・・・・私に王としての自覚が足りないからだ・・・・・・」

「そんなことは・・・・・」

言い合う二人に「あのう・・・・・」とエーディンが話しかけると、二人そろって「何か?」と聞いてきた。

「別に気にしてはないですよ。それに、あなたたちのおかげであの

時の幸せな日々を思い出すことができました。ありがとう」
「ご先祖さま。もったいないお言葉です」
笑顔でそう言ったエーディンに、エオホズは王座を下り、片膝を折って頭を下げた。
「頭を上げてください。あなたは仮にも、一国の王なのでしょう」
エーディンに言われて、頭を上げたエオホズは申し訳なさそうな顔をした。
「はは・・・・・そうですな・・・・・・」
と呟くと、再び王座に座った。
「これからどうしましょう。ここに居続けるといずれここに人たちに迷惑がかかります」
さっきとは一転、不安げな表情でアリアンフロッドが聞く。
「ご先祖さまを守るためなら戦うこともいとわない。と、言いたいのは山々なのだが・・・・・・あの国にはクーフーリン殿がいるからな。我が国に多大な被害が出るのは明確。・・・・・・かと、言ってご先祖さまたちをやすやすと受け渡す訳にも行かぬ。どうしたものか・・・・・・」
「すみません。私たちが来たばかりに・・・・・・」と暗い顔をするエーディンに、エオホズは優しく言う。
「そうご自分を疫病神のように言うのは止めてください。セリュード、彼女たち二人を影の国に連れて行ってくれぬか」
「影の国に・・・・・・ですか？」と、セリュードが聞く。
「スカアハ殿が相手なら、簡単に手出しができないはず。たとえ、クーフーリン殿でもな」
「なるほど、スカアハ殿はクーフーリン殿の師。うまくすれば彼を説得できるかもしれない」
「頼めるか？」と聞くエオホズに、「はい。引き受けましょう」とセリュードは答えた。話をつけたエオホズとセリュードを見て、アリアンフロッドとエーディンは話した。
「私たち、無視で話が進んでない？」

「そうね。でも良いんじゃない？」
「そうそう。俺たちなんて空気だぜ・・・・・・」
「「あっ・・・・・・」」
明らかにいじけている口調のディステリアに、エーディンとアリアンフロッドが振り返る。そこでやっと、エオホズ王も視線を向けた。
「そういえば、貴行らは何者だ？」
「お主・・・・・・クトゥリアか？」
「お知り合いですか？」と怪訝そうに眉を寄せてセリューードが聞く。
「ああ。邪竜退治の一件で少し、な。では、その少年は？」
「弟子です。と言っても、師事させようとする者は別におりますが・・・・・・」
「そうか。で、その者を探してこの国に来た・・・・・・ということかな？」
「いえ。乗る船を間違えてやってきた。しかも、気付いたのは森で迷ってしまった後という、なんとも呆れた事情でございます」
隠しもせずサラッと自分たちの失敗を話すクトゥリアに、ディステリアは目を伏せ、エーディンとアリアンフロッドとセリューードは唖然とし、エオホズは何と言っていいかわからず苦笑した。
「それにしても・・・・・・騎士団が妖精を狙う？少しおかしいな」
すぐ釈然としない表情をして呟いたクトゥリアに、エオホズとセリューードは困ったような表情をする。
「実は・・・・・・今この国では、トゥアハ・デ・ダナーンの神々と妖精を排除しようという動きがあります」
「だから、私たちが襲われたんだ」
暗い表情でエーディンが呟くが、「ちょっと待って」とアリアンフロッドが口を挟む。
「それはどうして？」
「我々も、何度も問い合わせていますが・・・・・・納得できるような答えは返っていません」
「ひどい時は門前払いだった、とも聞いている」

「そんな。理由もなしに排除しようとするなんて・・・・・・」
再びエーディンが呟くと、あごに手を当てていたクトゥリアが口を出す。
「・・・・・・妖精と言えば、どっかの領主が妖精を洗脳していたな・・・・・・」
「ああ。そういえば、そんな事件があったな～・・・・・・せっかく忘れられそうだったのに、思い出させるな。あんな胸くそ悪い事件」
毒づくディステリアに、「それはともかく」とクトゥリアは手を叩いた。
「おい！！！」
文句を言うディステリアを遮り、「その事件なら、」とアリアンフロッドが口を挟む。
「ディナ・シーの方たちが、あの領主に縛られていた妖精を連れてきたんです。今、ディアン・ケヒトが洗脳を解く方法を探していると聞いています」
「そうか。それだけが心残りだったんだ」
穏やかな表情でアリアンフロッドに向き直るクトゥリアに、「ウソつけ」とディステリアが小さく呟いた。
「エオホズ王。よければ、彼女たちを送るのに、我らも同行させてくれませんか？」
「何！？」
「影の国といえば、女武芸者のスカアハがいます。彼の修行もつけてくれるかもしれません」
「そんな暇があれば、だがな」
精一杯の皮肉を込めたディステリアに、クトゥリアは意味深な笑みを返す。本心が見えない態度に、ディステリアは警戒を抱く。
「しかし、いいのか？影の国での修行は、下手をすれば命を落とすと聞く」
「ふむ。それは少し困るな～～・・・・・・」

あごに手を当ててわざとらしく唸るクトゥリアを見て、ディステリアは嫌な予感を覚える。
「（まさか、俺を影の国とやらに放り出す気じゃ・・・・・・）」
最初は、胡散臭いけど頼りになる男と思っていたが、最近になってますます訳がわからなくなってきている。そんな不安を抱かれていることなど露知らず、クトゥリアは姿勢を正してエオホズ王に目を向ける。
「とりあえず、我々も影の国を目指します」
「ふむ。セリュード、どうだね？」
「構わないと思います。五人程度では目立たないでしょうし・・・・・」
「決まりですね」とクトゥリアが笑みを浮かべた。

―※＊※―

翌日。
「では、我ら一同。影の国へと向かいます」
「うむ。ご先祖さまたちを頼んだぞ」
「はい。王も、奴らが来るでしょうから十分気をつけてください」
衛兵の「開も～ん」と言う声が響くと、城の門が開いて堀に橋が架かった。しかしそこには、クーフーリン率いる赤枝の戦士団が待ち構えていた。エーディンたちは、唖然とした。
「エオホズ・アレイヴ！幻獣をかくまった罪により、貴様の身柄を確保する。覚悟せよ」
自ら軍を率いて、城から出てきたもう一人のアルスター王、コノール・マクネッサが声を上げた。
セリュードの号令で、ガガガガガッ、と轟音を立てて橋が上がりだした。

「しまった。急いで中に進入しろ!!」
だが、マルカスが号令をかけた頃にはもう門は閉まり、更に城の周りには結界が張られた。
「結界だと!?こしゃくな、クーフーリン殿!!」
マルカスが叫ぶと、軍勢の中から筋骨隆々の大男が出てきた。体には鎧は着けていなかったが、体からは異様な気が放たれていた。
「ふぁっふぁっふぁっ。任せろ」
しゃがれた声で話した後、巨大な腕を振り上げて結界に打ち込もうとした。
「まずい。いくら結界を張っていても、クーフーリンの攻撃を受けたら・・・・・・」
場内のセリュードが言った時には、「ぬおおぉぉぉぉぉぉぉっ!!!」と大男は攻撃態勢に入っていた。拳が結界に当たった瞬間、

ゴオォォォォォン!!!!

耳を突かんばかりの轟音と共にクーフーリンは後ろに飛ばされた。
「ぐおおぉぉぉぉぉぉっ!!!」
「何!?」
「あっさりとやられたな・・・・・・」
マルカスが目を見張り、肩を落としたクァイルが呆れると、自称クーフーリンは兵の集団の中に倒れた。

―※＊※―

一方、城の庭では衛兵たちが騒いでいる。
「どうするのだ?」
「どうすると言われても・・・・・・王」

「とりあえず、時間を稼ぐか・・・・・・・セリュード、その隙に・・・・・」
「わかっております。地下の通路で脱出し、影の国へと向かう。王、あなたも・・・・・・」
「いや、私はこの城の王。簡単に城を開ける訳にはいかん」
「しかし、ここにいては・・・・・・」
「そうですよ。彼らに勝てる見込みはないんでしょう？」
心配するエーディンに、「大丈夫ですよ」とエオホズは答えた。
「この城の結界は一級品。いくらクーフーリン殿でも、そう簡単には破れない」
「時間にして、どれくらい持つのですか？」
セリュードの問いに、しばらくあごに手を当てて考えていた。
「この結界を張った魔術師ではないからわからぬし、攻撃の度合いにもよるが・・・・・・攻撃を受け続ければおそらく、もって半日」
「半日・・・・・・」とエーディンが呟く。
「その間に影の国に行ってスカアハさんを連れて、戻らなければならないんですね？」
アリアンフロッドの後に、「もし間に合わない場合は・・・・・・」とセリュードが聞く。
「わかっている。我々も脱出し、影の国に向かおう。簡単には着けないだろうがな」
こうしている間にも、結界の壁への攻撃が続いている。エオホズが「急いでください」と叫んだ。
「あなたたちも、絶対に無理はしないで下さい。約束して下さい！」
エーディンの言葉に「わかりました」と答えた。
「では・・・・・その約束を誓約（ゲッシュ）にしましょう！」
「それはダメ～～～！！！」
エーディンが慌てて止めた後、アリアンフロッドとセリュードと共に城の中に走って行った。しかし、王様であるエオホズがしてもゲッシュは成り立つのか？

「では私も。ゲッシュ！影の国に着くまで、命に代えても――」
「だから、やめてください！命に代えられると、かえって困るんですよ～～・・・・・・」
「し、しかし・・・・・・」
「グダグダ言ってないで、さっさと行くぞ！！」
渋るセリュードをディステリアが押し、五人は城の中を地下へと急いだ。

第11話　再会？（後書き）

説明

誓約（ゲッシュ）

本来は、戦士たちの契約のことで、これを破ることは死に勝る屈辱だと考えられている。

この物語では、言霊の発見により、現在のエリウ国内では簡易儀式の類に入っている。結べば超上的な力を得るが、破ればその力と共に、代償として自分が元から持っていた何かを失う。

第１２話　影の国へ（前書き）

展開が強引でしょうか。ギャグも入れたつもりですが、つまらなかったらすいません。
って、謝ってばっかだな！

第１２話　影の国へ

城の地下通路に入り、その突き当りまで来ると「!?」とセリュードは後ろに振り向いた。
「どうしたの？」
「何者だ!?出て来い!!」
アリアンフロッドが聞くのとほぼ同時にセリュードが叫んだ。すると通路の中に、一つ、二つと人影が現れた。全身黒いタイツに包まれ、手には鉤爪が付いている。
「何!?あれっ？」
アリアンフロッドが指差すと、セリュードは槍を構え、ディステリアは天魔剣を構える。
「差し詰め、暗殺者と言ったところだろう。急げ!そのロウソクを横に倒せ!!」
向かって来る暗殺者に、セリュードとディステリアが立ち向かう。二人は言われた通りロウソクを横に倒そうとした。しかし、その一角にロウソクは左右に五本もあった。
「「なっ・・・・・・ど、どれなのよ～～～!!」」
「それは・・・・・・極秘事項だ」
「こんな時に何言ってんだ。教えてろ!!」
叫ぶディステリアに、「・・・・・・ダメだ・・・・・・」と答えた。
「「ケチ～～～!!」」
「この城の防衛に係わることなのだ。わかってくれ!!」

暗殺者二人の攻撃を防ぎながらセリュードが叫んだ。暗殺者の攻撃は目に見えないほどの早さだったが、セリュードはその全てを捌いていた。ディステリアも、遅れて現れた暗殺者二人を迎え撃つが、こちらは敵の速さについていけない。

「こう暗いと、相手の動きが見えない」

「そうか。闇夜で戦ったことはあまりなかったな。しまった・・・・・」

「あんたも少し戦え!!」

天魔剣で暗殺者の爪を受け止めながら、ディステリアは後ろで観戦しているクトゥリアに文句を言う。

「こう狭い場所で大勢が戦うと、帰って足を引っ張り合う。・・・・・そうだ、ディステリア。古城での戦いを思い出せ!」

「古城?ああ・・・・・・」

レッドキャップに襲われたあの場所は、月明かりがあってここよりは暗かくなかった。

「だが、あそこで戦ったレッドキャップに比べれば――お前らの攻撃は軽いんだよ!!」

暗殺者の攻撃を止め、すかさず天魔剣を振る。確かな手応えを感じると、足元に暗殺者の体が落ちた。

「――っ!!」

天魔剣から伝わった感覚に、一瞬だけ身震いする。襲ってきたとは言え、人を切った。その恐怖が一瞬だが、連続してよぎる。

「(何震えてるんだ。今までだって、クルキドを何体も倒して来ただろ!)」

その隙に仕掛けてきた暗殺者を、セリュードの槍が貫いて止める。

「・・・・・ディステリア、とかいったな。お前、人を切るのは初めてか?」

「あまり経験がない、ってだけだ」

「そうか」と意味ありげに呟くと、暗殺者から槍を引き抜く。地面に落ちた暗殺者の体は、砂のように崩れて消えた。

「どうやら・・・・・・姿こそ似ているが、こいつらは人間じゃないようだな」
「ですけど、動きや感触は・・・・・・」
話していると、闇の中から同じ姿の暗殺者が迫ってくる。
「ッ！また来た！」
「二人とも、まだか！？」
武器を構えてセリュードが急かすと、暗殺者たちは二人に襲いかかる。その間、エーディンとアリアンフロッドはロウソクを片っ端から倒していった。すると、エーディンが壁のほうから五番目のロウソクを倒した時、

ゴゴゴゴゴッ！！

隠し通路内に響く音と共に壁がドアのように開いた。
「駆け込め！！」
二人が隠し通路に飛び込み、クトゥリアが向かってきた暗殺者を蹴り飛ばすと、壁が閉まりだす。
「まずい。急げ！！」
「セリュードさん！！」
「わかっている！！」
暗殺者を相手取るディステリアとセリュードが閉まりだした壁に向かって走り出し、壁が閉まる直前に壁の隙間に飛び込んだ。暗殺者たちが壁の前に来た時には完全に閉まっていた。
「ふぅ～。なんとかしのげたな」
安堵の溜め息をついた時、エーディンが「え・・・・・・ええ」と頷く。
「・・・・・さあ、行きましょう」
二人を連れてセリュードは、通路を進んで行った。四十分ほど歩くと行き止まりに行き当たった。
「冗談だろ。こんなところで行き止まりなんて・・・・・・」

「そんな訳ないだろ」
ディステリアに言い返したセリュードは壁に近づき、上から下がっているランタンを下に引っ張ると、壁が下に下がりその向こうに階段が現れた。
「行くぞ」

―※＊※―

隠し通路の果てにある階段を上がると、三人は洞窟の中に出た。
「洞窟だ・・・・・・」
「こんな所に出るなんて・・・・・・・」
「俺も知らなかった・・・・・・・」
驚く二人の後、セリュードが呟いたので、二人は「えっ・・・・・・・？」と思わず彼のほうを見た。
「・・・・・・いや。時々、仕掛けが正常に動くか確かめに来るが、ここまで来たのは初めてだ」
洞窟を歩きながらセリュードが言った。洞窟は大して深くなく、すぐに外に出られた。
「では、影の国に行くか。ええと、王に渡された地図によると・・・・・・」
何やら本のような物を広げ、やがて「あっちだな。東の方角だ」と向こうを向いた。
「それ、なんですか？」
アリアンフロッドの質問に「ん？ああ、これか？」と、本を見せる。
「これはな、『地図帳』と言って世界各地の地図がまとめてあるんだ」
「へえ～、便利なんですね」とアリアンフロッドが感心する。
「ところが、あまり普及してないんだよ」

「えっ、どうして?」と聞くが、「さあね」とセリュードは肩をすくめた。
「とりあえず、隣のマン島に渡るために港に行こう。ええと、一番近い港は・・・・・・」
港町を探すセリュードを、ディステリアが怪訝そうな表情で見ている。とその時、遠くから聞こえてきた馬の蹄の音に、エーディンが気付いた。
「なんの音?馬の蹄?」
「だんだん、近づいて来る」
「敵の追っ手か?」
三人が警戒していると、やがてその蹄の音の主が五人の頭上を越えた。
「な、何ぃ~~~~~~~!?!?!?」
着地した馬は、向きを変えこちらにやって来た。それは輝く太陽のような、オレンジがかかった白い毛に包まれた美しい白馬だった。
「はっ、この馬は・・・・・・まさか・・・・・・」
目を見張るセリュードをよそに、エーディンとアリアンフロッドは警戒もせずにその馬に近づき、毛を撫でたりもしていた。
「わあ、綺麗。これ、なんて馬かな?」
「うーん、見たことはあるような気はするんだけど・・・・・・・・」
「あっ、フロッドもそう思う?」
「ええ。って、略するなって・・・・・・」
その時、突然その馬がアリアンフロッドの服をくわえて背中に乗せた。その次はエーディン。そして考えことをしているセリュードに近づくと、そのまま彼を一番前に乗せた。
「なんだろ?乗せて貰えちゃった」
「このまま、影の国につれて行ってくれないかな。なんちゃって」
そうアリアンフロッドが言うと、セリュードが引きつった顔をして呟いた。
「でしたらお二人とも、心していて下さい」

その焦ったような声に、二人はどういうことかわからず「??」と首を傾げた。すると突然、馬が前脚を上げ一声鳴いたかと思うと、いきなり駆け出した。

「ぬぅあぁ・・・・・・」

「やっぱり、しっかり掴まっていて下さい!!」

「「わあぁ・・・・・・・」」

それからは、声として聞き取ることは不可能となった。いきなり最大速度まで加速した白馬に、残されたディステリアは呆然としていた。

「・・・・・・って、おい!俺たちは置いてきぼりかよ!!」

「明らかに定員オーバーだ。さて、俺たちは地道に行くか?」

さほど慌てた様子もなくクトゥリアが考えていると、近くに何かの駆動音が聞こえる。

「(車か・・・・・・?)」そう思ってディステリアが振り向き、クトゥリアも振り返ると、前にあった物に目を丸くした。

「・・・・・船?」

「船、だな」

「お前ら・・・・・・」

船の中から出てきた鎧姿の男に、ディステリアは思わず後ろに下がる。殺気にも似た気配を感じたためだったが、クトゥリアは身構えもしてなかった。

「この船の持ち主か?」

「ん?お前・・・・・・どこかであったか?」

怪訝そうに眉をひそめる男に、「クトゥリアだ。覚えは?」と名乗った。

「クトゥリア・・・・・・はて、聞いたことがあるような・・・・・・」

「おい!エーディンたちがもうあんな所まで行ったぞ!」

ディステリアが指差した方向に目を向けると、セリュードら三人を乗せた白馬はもう豆粒より小さくなっていた。

「ああ、あいつ・・・・・・もう、あんな所まで」
「あの馬は、影の国を目指してるのか？」
「そうだが？」と男はクトゥリアに答える。
「なら、俺たちも乗せて行ってくれ。理由は彼女たちと同じだ」
「何？」
男は抵抗があるようだったが、白馬が駆けて行ったほうを一瞥して簡単に折れた。
「・・・・・・はあ。ここで問答してても、時間の無駄か。わかった、乗れ」
親指で船を指して身をかがめると、クトゥリアに促されてディステリアも船に乗る。
「なあ・・・・・・なんで陸地に船があるんだ？」
「この船はウェーブ・スウィーパー。水陸両用の小型高速艇だ。だよな？マナナン・マク・リール」
「なぜ、俺の名を知ってるかは問わない」
クトゥリアに返答した男――マナナン・まく・リールは、白馬が駆けて行った方角を見据える。
「いくぞ。振り落とされたくなければ、しっかり捕まっていろ」
「何!?それってどういう――」
そこでディステリアの言葉が切れる。先ほどエーディンとアリアンフロッドとセリュードを乗せた白馬。それと同じことを、ディステリアも体験することとなった。それほどのスピードでウェーブ・スウィーパーは駆け抜け続けた。

―※＊※―

三人を乗せて高速で駆けていくその馬は、現在地アイルランド島から海を駆け、その隣のグレートブリテン島に向かって行き、やって

来ましたは影の国。あっという間のこととすぎてエーディンとアリアンフロッドはしばらく理解できなかった。
「～～～～～～～～～～～～～～！！」
「（これほどのスピード、美しい毛並み。間違いない）」
三人を乗せた謎の馬は、そのまま影の国の大きな橋の上を、まるで空を飛ぶかのように突破した。やがて、大きな建物が近づいてくると、馬は減速しその建物の前に止まった。
「なんだ、貴様ら。ここにどうやって来た」
そこには、茶色いスーツの上に、肩や胴体部分に青い線が入った白い鎧を着た、一人の男がいた。馬から降りた三人は顔を見合わせた。
「どうって、見てたでしょう？この馬に乗って来たのよ」
エーディンが馬の頭を撫でながら言ったが、これが向こうの気を損ねたようだ。
「ぬぁにぃ。ここに来る者の素質を試す〈弟子の橋〉をそのよう馬で乗り越えるとは、言語道断。このファーディアが成敗してくれる」
「そのようなってねえ。この馬は・・・・・・」
「問答無用！！」
エーディンが言い終らない内に、ファーディアと名乗った男は、腰に下げていた剣を抜くや否や切りかかってきた。
「！！」
思わず腕を盾にして目を瞑った。やがて金属音がして、エーディンが恐る恐る目を開けると、セリュードの槍がファーディアの剣を受け止めていた。
「貴様、邪魔をする気か？」
「この二人を守ることを、誓約（ゲッシュ）にしたんで、ね。やらせる訳には行かないよ」
細かく言えば、未遂だが。
「そうか。なら、仕方あるまいな。しかし、それとこれとは別だ！！」
剣を振り上げると槍が上に飛ばされる。その隙に、ファーディアが

剣を突き立てようとしたが、セリュードは槍を引き寄せて、それを盾にして剣を防いだ。そのまま槍を傾けて剣を受け流し、ファーディアに突き出したが、紙一重でかわされた。その後、セリュードが槍の柄を押し込むと槍の柄が短くなり刃が長くなる。

「ほお、剣にもなる槍か。面白い物を持っているな」

「どうも」

そう答えた直後、セリュードが突っ込む。今度は剣対剣でぶつかった二人は、あまりの速さに姿が消えたように見え、辺りに金属音が鳴り響く。空中でセリュードが斬りかかるとファーディアの姿は消え、後ろに現れる。振り下ろされる剣を防ぎ、今度は連続で剣を振り回したがことごとくかわされた。

「クッ、やるな」

唸るように呟くセリュード。お互い視覚で確認出来なくなるくらいの速さで動けると言っても、スピードもパワーもファーディアのほうが上だった。セリュードは作戦を変えた。石畳の上に着地すると、剣を構えた形で動かなくなった。

「何やってるの!?あのままじゃあ、やられちゃう」

「セリュードさん!!」

エーディンが叫ぶが、「観念したか!!」とファーディアは建物を足場にしてセリュードの死角に跳んだ。

「終わりだ!!」

剣を逆手に持ち、ファーディアはそこから急降下する。その剣が標的を貫こうとしたその時、セリュードは右に動いた。ファーディアの剣は石畳に刺さり、抜けなくなった。

「ぐっ、しまった・・・・・」

そこに体を半回転させたセリュードの剣が炸裂しようとした。その時、

「――――そこまで!!!」

女性の声が響く。その声で、セリュードの剣はファーディアの喉まで数ミリという所で停止した。

「何者？」
後ろを向くと、長髪でスタイルが良く、黒い半そでシャツの上に、紫色でノースリーブのワンピースのような服を着た女性が立っていた。
「あなたは・・・・・・まさか・・・・・・」
「そう、私がスカアハだ」
セリューードが呟くと、女性が答えた。彼女からは、戦士の威厳とも言えるものが漂っており、別の見方をすると凛々しくも感じられた。
「まさか、ファーディアが敗れるとは、な。まぐれか？」
「さあ。俺、ちょっと幻獣の血が混ざってるんで・・・・・・・・」
「そうか。多少、感覚は鋭い、ということか・・・・・・」
剣を下ろしたセリューードに呟き、フッ、と笑うとスカアハは踵を返した。
「合格だ。その特別な力を持つ馬を使って、弟子の橋を渡ったことは特別に見逃してやる。だが、修行の手を緩めるつもりはないし、優しく教えるつもりのない。私から盗むことだな」
建物に向かって進みだしたスカアハを、「ちっ、違うんです～～」とエーディンは引き止めた。
「私たち、スカアハさんに助けて貰いたくてここに来ました」
アリアンフロッドが慌てて説明しようとする。
「てっきりこと情は知ってると思ってたんだが・・・・・・参ったなぁ」
「何ぃ・・・・・・？」
セリューードはともかく、エーディンとアリアンフロッドの馴れ馴れしい口調で話しかけられたのが気に触ったのか、三人のほうを睨んできた。が、二人の姿を見ると驚いたような表情をした。
「お前ら・・・・・・どうしてここに！？」
「それは、わたくしがご説明します」
その声に全員が上を向くと、大きなワタリガラスが降りて来ていた。
それを見てスカアハが眉を寄せる。

「お前は・・・・・・」
「「まさか・・・・・・モリガン!?」」
エーディンとアリアンフロッドが驚いていると、ワタリガラスが静かに下りて、赤い服を着た美女に姿を変えた。
「やっぱりモリガン!!」
「いいえ、わたくしは・・・・・・」
美女が言いかけた時、「なんだ、マハではないか」と先にスカアハが話しかけた。
「まあ入れ。この前うまい菓子を手に入れたんだ。お前にも分けてやるよ」
「ありがとうございます。その席で恐縮ですが、ルーグさまからのご伝言を、伝えさせていただきます」
建物に向かって歩き出したスカアハに一礼すると、今度はセリュードたちのほうを向く。
「あなた方もどうぞ。あなた方にも関係あることですから」
エーディンとアリアンフロッドは「えっ?」と首を傾げた。超加速した船が館の側を突き抜け、旋回しながら減速しだしたのはその後だった。
「今度はなんだ!?」
ファーディアが悲鳴を上げると、減速した船が館の入り口・・・・・・白馬の側に着地した。
「お・・・・・おおお・・・・・・お・・・・・」
「相変わらずとんでもない加速力だな。かかる負荷も半端ない」
「そうか?俺には何も感じられない」
その船――ウェーブ・スウィーパーから涼しい顔のクトゥリアとマナナン・マク・リール、フラフラ状態のディステリアが降りてきた。
「ここが影の国か・・・・・・ほら、しゃきっとしろ。弟子入りできないぞ」
「俺は、ここへ弟子入りしに来たんじゃなぁぁぁぁぁぁい!!!!!

！」

どこか間抜けなディステリアの声が、影の国にある館の前から響いた。

第１３話　影の国での巡り合わせ

建物の中を歩きながら、セリュードはマハに質問した。
「その伝言には、俺たちがここに来ることも入っているのか？」
「ええ。ですからわたくしは、少し間に合わなかったことになりますね」
少し落ち込んだマハに「気にしなさんな」とセリュードは言った。
「もし俺が負けそうになっても、止めるつもりだったんでしょう？スカアハさん？」
だが、「いや」と、語尾を上げて言ったスカアハの言葉に、セリュードは思わずこけた。
「お前らは、特別な力を持っている馬で弟子の橋を越えて来た。つまり自分の実力で越えた訳ではない。そのような不届き者、私の弟子にする訳には行かんからな」
「すみません。もしあなたが負けていたら・・・・・」
マハが謝ると、「いや、気にしなくていい」と起き上がったセリュードが言った。それを待ち構えていたかのように、ファーディアが聞いてきた。
「それにしても、どうしてお前は俺の死角からの攻撃をかわせたんだ？」
「それは・・・・・空気の音だよ」
「空気の音？」と、エーディンが首をかしげる。
「ああ。俺は集中すると聴覚が高くなるんだ。そのおかげで、真上の空気が切れるのがわかった」

「なるほど、俺が突撃した時の空気が避けた音を聞いて、死角からの攻撃をガードしたってことか・・・・・・」
ファーディアが頷くと、「人間にしてはすごいですね」とアリアンフロッドが言った。
「まあね。ま、それがわからなくてもかわすことはできたけどね」
少し自慢げに言うセリュードに、三人は「えっ？」と呟く。
「お互い移動速度が速いからな。確実に仕留めるには、真正面ではなく死角から攻めるしかない。どこから攻撃してくるかわからなかった時には、死角から攻撃するほうに賭けてかわすつもりだったのさ」
「どのみち、お前の攻撃は当たらなかったという訳か。ファーディア」
スカアハの言葉に、「そ、そのようですね」とファーディアが答えた。
「それでもすごいです」
褒めるエーディンに「まあね」と、少し沈んだ声でセリュードが答える。
「・・・・・さっきも言ったけど、俺は幻獣の血が混ざってるんだ。そのおかげで苦労もした。どこに行っても疎まれ、避けられ、親も失った。そんな時、エオホズ王が俺を拾ってくれた。あの人は言ってくれた。たとえ幻獣の血が混ざっていようが、一緒に暮らそうという意思さえあれば、共に暮らすことができる、ってな」
「そんなこと、言ったんだ。あの人」とエーディンは少し微笑んだ。
「その時、俺は決意した。あの人に仕え、最期まで守り抜こうってな。ま、命を賭けて守ることを誓約（ゲッシュ）にしようとした時、王に猛反対されたが、な・・・・・・」
その後、「はは・・・・・・」と苦笑いをしたちょうどその時、スカアハたちは建物の広間に到着した。入った途端、セリュードの話が聞こえていたのか、
「――――当たり前だ。誓約（ゲッシュ）を守るということは生半端なことじゃな

い」
と、こちらに向かって男の声がした。そこは中央に丸いテーブルが置いてあり、その向こうには白っぽい服と長ズボンを身につけた、一人の美青年がいた。
「おお、クーフーリン」
スカアハの言葉を聞いて、「クーフーリン!?」と、エーディン、アリアンフロッド、セリューード、ディステリアは驚いた。
「ちょうど良かった。この前、オイフェから貰った菓子があるだろ。それを持って来てくれ」
「ああ、悪い。この前ファーディアと一緒に全部食っちまった」
「わっ、バカっ!!」
ファーディアが慌てると、「あっ・・・・・・・」とクーフーリンが口を押さえた。
「ぬぁにぃぃぃ・・・・・・」
その途端、スカアハに怒りが満ちていったので、「「あわわわわ・・・・・」」とクーフーリンとファーディアが慌てだす。
「貴様ら、覚悟は出来てるんだろうなあ!!!」
「うわあぁぁぁぁぁぁっっ!!!!!」
「ゲイボルグ!!!」
右手を上げたスカアハが叫ぶと、轟音を響かせ、広間にあったテーブルはその一撃で、二人の弟子もろとも見るも無残な姿になった。
「いや、必殺の槍で攻撃したらいかんだろ・・・・・・」
セリューードのその突っ込みは、聞こえたかどうか定かではない。ちなみに余談だが、クトゥリアはその様子を『弟子と師匠の微笑ましい戯れ』位にしか見ておらず、恐れられたディステリアに引かれたという。

―※＊※―

「では・・・・・クーフーリン殿は、もう数十年も前からこの影の国で修行を？」
「ああ」
セリュードの問いに、クーフーリンが答えた。この国の伝説に伝わる英雄が、全身包帯でグルグル巻きというのはなんともシュールな光景に思えた。
「第一、俺は転生してこの影の国に来てからは、一度もアルスターには戻ってないんだぞ」
即急で直したテーブルを囲み、エーディン、アリアンフロッド、セリュード、ディステリア、クトゥリア、マハ、ファーディア、スカアハ、クーフーリンは今、コノートで起こっていることについて話していた。テーブルの上に置いてある菓子はスカアハが隠していた物で、持ってきたのはクーフーリンの妻のエマーだ。今はここでクーフーリンと共に世話になっている代わりに、身の回りの世話をしている。
「それで、ルーグ殿はなんと？」
スカアハの問いに、「はい」とマハが答える。
「オリュンポスでの会議の途中、アースガルドが襲われたという報せが入ったので、とりあえず各地の状況を知らせるということにして、一旦は解散したそうです。伝言というのは、近いうちにそちらにエーディン、アリアンフロッド、それと二人を警護しているだろう者が訪れるだろうから、できる限り協力してくれ、とのことでしたが・・・・・」
「そちらのほうは間に合わなかった・・・・・と」
「はい・・・・・すみません」
謝られると、「いや、謝らなくても良いから」とセリュードが言う。
「でも、なんで私たちがここに来るのがわかってたの？」
「あの馬だな」
「えっ？」

エーディンが聞くと、菓子を食べながらクーフーリンが言ったので、アリアンフロッドは思わず聞いた。
「あの馬は親父殿が乗られる神馬、アンヴァルだ。おそらく、お前らを影の国に連れて行くために遣わせたのだろう」
「そうか。どこかで見覚えがあると思ったら・・・・・・」と、アリアンフロッドが納得した。
「だが、それでも腑に落ちないぞ。セリュードらの手助けをしたというのなら、どうしてそいつらが影の国に行くことがわかったのだ？」
ディステリアの問いにクーフーリンは首を傾げ、眉を寄せてまで考えたが答えには至らず、
「・・・・・それは・・・・・・親父殿に聞け」
と言った。エーディンとアリアンフロッドが苦笑していると、マハがスカアハのほうに顔を向ける。
「それからもう一つ。コノートとアルスター間で起こった戦争についてですが、これは何者かが仕組んだ疑いがあるらしいです」
「何者かって、もしかしてフォーヴナハ？」
エーディンの問いに、「さあ、そこまでは」とマハは答えた。
「ただ、ミディールが収める地下の国で、この戦争を大きくする形で関わろうとする動きが見られる、とのことです」
「そうか・・・・・・」
スカアハが考え事をすると、「スカアハ？」と、ファーディアが彼女の顔を覗き込んだ。
「それにしても・・・・・・お前らの国で暴れているって言う奴・・・・・俺の名を語るなんて許せない。今から行って、とっちめて来てやる！！」
怒り心頭に立ち上がったクーフーリンに、「待て、クーフーリン」とスカアハが言う。
「なぜ待てるか！！」
「お前、その国にどうやって行くつもりだ？そろそろ半日だ。話を

聞くからには、歩いていく時間はないぞ」
そう言われて、クーフーリンは「うっ・・・・・・」と言葉に詰まった。
「でしたら、オイフェさんの戦車を貸して貰えばどうですか？」
エマーの提案に「ちょっと待った」とセリュードが割り込む。
「あんたとそのオイフェという奴は、とても仲が悪いと聞く。マハについても、声を聞いた戦士は必ず戦死すると聞くし・・・・・・・・」
不安そうに言うと、スカアハはフッと笑った。
「つまらん冗談だな。そのようなこと、もう数百年も昔のことだ。クーフーリン、ファーディア。この者たちと共にオイフェの所に行き、アルスター国で暴れて来い」
「フッ、合点承知！」と、クーフーリンが右手拳を左手に当てる。
「ここでの修行の成果、見せてやりますよ」
二人が意気揚々としているところに、「あの、クー」とエマーが話しかけて来る。
「ん？」
「必ず・・・・・必ず戻って来て・・・・・・」
不安そうな顔のエマーに、「ああ」とクーフーリンが頷く。その時、彼の手にゲイボルグが投げられた。
「戦場に行くにも丸腰ではまずいだろ。選別だ。持って行け」
「し・・・・・・しかし・・・・・・」と戸惑うクーフーリン。
「お前は一度、ここでの修行を終えている。使いこなすのは造作もないことだろ」
「スカアハ・・・・・・恩に切る」
こうして、クーフーリン、ファーディア、エーディン、アリアンフロッド、そしてセリュードとディステリアは一路、オイフェの所へと向かった。
「・・・・・・お主は行かんのか？」
「ん？」と聞き返したのは、残ったお菓子を頬張ったクトゥリアだ

った。噛み砕いて紅茶を流し込に、「ふうっ・・・・・・」
一息ついてスカアハに目を向ける。その視線は、真剣そのものだった。
「あなたに、色々お聞きしたいことが・・・・・・・」
「ほう・・・・・・」

―※＊※―

影の国にある巨大な建物。スカアハの命によりクーフーリン、ファーディア、セリュード、ディステリア、エーディン、アリアンフロッドは、もう一人の住人であるオイフェを訪ねるために、そこの門前にいた。
「ここにオイフェと言う、もう一人の影の国の住人がいるのか・・・・・？」
「さあな。ここまで来たのは、俺も初めてだ・・・・・・」
セリュードが聞くと、クーフーリンが答える。門を開けると、そこにはスカアハの住む物とほぼ同じ形の建物があった。
「俺たちが準備している間に、マハが報せに来たはずだ」
クーフーリンが周りを見渡していると、「お待ちしておりました」と、門を入って右からマハの声がした。
「オイフェはあちらで、戦車の調整をしております」
それを聞いたファーディアが、「調整？」と首を傾げた。
「はい。もう、そろそろ終わるはずです」
するとそこに「今、終わったぞ～」と声がした。全員が声のほうを向くと、スカアハとほぼ同じ格好をした女性が、両腕を上に伸ばしながら歩いて来ていた。ただし、彼女のほうが髪は短かった。
「お疲れ様です、オイフェさん」
「よう。久しぶりだな、オイフェ」

マハの後にクーフーリンが挨拶したが、彼の顔を見るなり、オイフェは苦虫を噛み潰すような顔になった。
「・・・・・おい。いい加減、会う度にその顔になるのはやめろ」
「無理ですよ。不可抗力なのだから・・・・・・」
二人のやり取りに首を傾げながら、セリュードは戦車が置いてある場所に行った。
「あの二人、前に何かあったのか・・・・・・？」
すると、セリュードとディステリア以外の全員が、微妙な表情をする。
「な・・・・・なんだ・・・・・・？俺、何か変なことを聞いたか？」
戸惑うセリュードに誰もが答えを渋っていたが、それを見たファーディアが溜め息をついた。
「俺らの口からはなんとも・・・・・・。何があったか知りたかったら、本人にでも聞いて見るんだな・・・・・・」
ちょうど近くにクーフーリンが来たので早速、聞いてみようとした時、
「じ、準備できました～」
と慌てたエーディンの声がしたので、セリュードは後回しにすることにした。

―※＊※―

「撃てぇ～！！」
マルカスの号令の後、大砲から次々と弾が撃ち出され、それら全てが城を囲んでいる結界に当たる。
「王。もう長くは持ちません。脱出の準備を」
「うむ、仕方ない。無理をしないことを誓約（ゲッシュ）にかけたからな」

ガッシャァァァン！！

大きな音をたててガラスが割れるかのごとく結界が崩れ去った。

「なっ、もう・・・・・・」

「結界は崩れ去った。全軍、突撃～！！」

「おおおおおおぉぉぉぉっっ！！」

サーカの号令と共に、大勢の兵士たちが勢いよく兵城の門に殺到した。跳ね橋は上げていたが、コノールの軍は堀に新しく橋を架けていた。

「王。これ以上は持ちません！！」

攻撃を受ける城門を、後ろから支えていた衛兵たちが叫ぶ。

「くっ、そこはもう良い。全員、城の中に避難！！」

門を押さえていた衛兵たちが「はい」と言った後、全員そこから放れて城の中へ向かった。そのすぐ後、門の扉が破壊されたくさんの兵士がなだれ込んだ。と思いきや、あまりの大人数のため門の間につかえてしまった。

「な～に、やってんの！！」

デンテュスの後、サーカが「おのれ、どけ！」と槍を持って飛び出した。

「無理ですよ。ほとんどの兵がつっかえて・・・・・・わわっ、待ってください。うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

サーカが槍を縦に構えると、まだ動ける兵士たちは慌てて門の前から逃げ去った。

「あれをやるのか？兵を減らすようなことはするな」

マルカスに「わかってる」と言うと、サーカは黒くなった槍を城に向けた。

「デスト・ブロード！！」

突き出した槍からは、黒い穂先（槍の先端部）のようなエネルギー波が飛び出し、兵がつかえている門の周りを破壊した。それにより

門の壁は崩れ、つかえていた兵士たちは自由になった。
「よし、このまま中を制圧するぞ！！」
マルカスの号令で、「おおおおぉぉぉぉぉっっ！！」と兵士たちが突撃する。その時、
「――――ゲイボルグ！！」
どこからか男の声がしたかと思うといきなり地面が爆発し、門に向かおうとしていた兵士たちが吹き飛ばされた。
「――――なんだ！？」
マルカスが周りを見渡すと、「む、あれは・・・・・・」とビィウルが何かに気付いた。その方角には、黒い馬と灰色の馬が引いた戦車と、それに乗った白銀の鎧を纏った青年がいた。
「なんだ、あれは！？」
「・・・・・あれは、クーフーリン。アサシスの奴ら、しくじりおったな・・・・・・」
驚くマルカスをよそに、ビィウルは何やらブツブツ呟いている。
「間に合ったようだな・・・・・・」
馬車の上で呟くクーフーリンに、セリュードが言う。
「そりゃあ、あれだけアンヴァルを飛ばしたんだ。おかげであいつはヘロヘロだし、この戦車もガタガタ・・・・・・」
「オイフェが持つ戦車も、たいしたことないなぁ」と、クーフーリンが溜め息をつく
「あの人に聞いたんだが、この戦車はあの人が持っている物の中で一番、耐久力が低いんだって、よ」
「何！？じゃあ俺たちは、あの中で最も戦車として不向きな物を借りてきたってのか！？」
「不向きではあるまい。急いでここに戻るには重量の軽い物が良い」
向かってきた砲弾をかわす戦車の中で、ファーディアが冷静に話す。
こうしている間にも、戦車は敵陣に近づいていた。
「それより、エーディンたちはうまく戻れただろうか」
城のほうを向いてクーフーリンが呟くと、セリュードも馬車の上に

乗る。
「戻れたとしても、じきに脱出ということになるかも、な」
その頃、エーディンをアリアンフロッドは、アンヴァルに乗って地下通路から城へと急いでいた。
「それでは・・・・・俺たちがここに来た意味がねぇだろ!!」
クーフーリンが敵陣の中に飛び込むや否や、ゲイボルグを振り回し、群がっている兵士をなぎ払った。
「さっきも思ったんだが、これ昔と違って威力が落ちてんじゃあないのか?」
ゲイボルグを挙げて不満そうに言う。それと同時に、敵の兵士がまた数人斬りかかって来たが、あっという間になぎ払った。
「国の間での戦争が盛んだったあの頃と違って、今では『不殺主義』って奴が広まってるからな。ゲイボルグも、それに合わされているんじゃないのか?」
「へえ〜・・・・・・」
ファーディアの答えにクーフーリンは興味なさげに返して、また襲いかかって来た兵士を殴り倒した。
「何!?」
「強い!!」
「やはりな・・・・・・」
マルカスは驚き、サーカは叫び、ビィウルは押し殺した声で小さく呟いた。その隙にセリュードたちを乗せた馬車は城の門へ走って行った。
「クッ、おのれ。このサーカが成敗してくれる」
槍を構えて向かってきたサーカを、戦車から飛び出したクーフーリンは真正面から受け止めた。
「やるな、貴様!」
「貴様じゃない。俺の名はクーフーリンだ!」
その時、残りの兵士たちの中にざわめきが起こった。同時に、目を見張ったサーカはクーフーリンから離れた。

「クーフーリンだと？」
「しかし、クーフーリン殿は・・・・・・」
「では、どっちが本物だ・・・・・・？」
ざわめく兵士たちの間から、「おもしれぇ」と、彼らがクーフーリンと呼んでいた大男が出てきた。
「この天下の大英雄さまの名を語るとは、貴様覚悟は出来てるんだろうな」
「貴様こそ、俺の名で好き勝手にやったこと・・・・・・後悔させてやる！！」
睨みあう二人。特に自分の名前を使われたクーフーリンは、怒りのあまり眉間に深くシワを刻んでいる。両者が地面を蹴ると、凄まじい気が激しくぶつかり合った。

第１４話　大混戦

その頃。エオホズの城の中では衛兵たちが奮闘していた。だが、戦場にクーフーリンがいるということは精神的プレッシャーが大きく、エオホズの衛兵たちは押されており、赤枝の戦士団は士気が上がっていた。

「このままでは・・・・・・」

その時、城の中から飛び出した影が赤枝の騎士団をなぎ払う。城を守る騎士たちには影の正体はわからなかったが、エオホズにはその正体がわかった。

「ディステリアさん！？」

「増援は俺だけじゃないぜ！」

笑みを浮かべた直後、上から虹が降りてきて赤枝の戦士団の兵士たちをなぎ払い始めた。

「なっ、この虹は・・・・・・・」

「おお、あれを・・・・・・アリアンフロッド殿」

城の天辺にはアリアンフロッドが立っていた。かつて彼女は、虹を使って地上の暴力を一掃したのだ。ということは？

「ん？うわあぁぁぁ、こっちにも来た～！」

当然、暴力を起こしかねない武器を持った衛兵たちも、この虹の攻撃対象になる。

「何！？敵味方お構いなしなのかよ――――！！」

怒鳴るディステリアを虹が吹き飛ばすと、アリアンフロッドは申し訳なさそうに両手を合わせた。

「一旦、武器を捨てて退避～！」

慌てて衛兵たちが武器を捨てると、虹が衛兵たちに向くことはなくなり、まだ武器を持っていた赤枝の戦士団の兵士たちは全員、城の外へと押し出された。

「うわあぁぁぁぁぁぁ！！！」

吹き飛ばされた兵士たちに、「何やってんの」とデンテュスが叫ぶ。

「そんなこと言ったって、全員あの虹に押し出されたんですよ」

兵士が指差すほうを見ると、所々壊された門に新しく扉ができたかのように、虹の壁が張ってあった。

「ちっ、こっちはもう駄目か。サーカ！！」

「ふん、わかったよ」

こちらのほうでは、クーフーリンとその偽者の激しい戦いが繰り広げられていた。大男の繰り出すラッシュを、クーフーリンは全てゲイボルグで受け止めていた。

「ハッハッハ。どうした。手も足も出ないか！？」

渾身の一撃を見舞ってクーフーリンを飛ばした。それもゲイボルグで受けて防いだが、ヒビ一つ入っていない。

「なっ、バカな・・・・・・」

「この程度で俺の名を名乗ろうなど、千年早い」

一瞬、クーフーリンの姿が消えた。と思うと、突然、大男の目の前に姿を現す。

「顔を洗って・・・・・出直して来い！！」

彼の鉄拳がと顔に炸裂し、轟音を立てると、「グハッ・・・・・・」と大男は撃沈した。

「な、クーフーリン殿が・・・・・・」

驚くマルカスに対し、「だから、さっきから言ってるだろ？」と倒れた大男の側を通りながら言った。

「俺が本物だってよ」

クーフーリンの名を名乗っていた偽者はあっけなく、目の前の不敵な笑みを浮かべる本物に倒され、アリアンフロッドが放った虹のおかげで城の中にいた兵士は全て追い出された。おかげで赤枝の戦士

団は背水の陣。
「どうする？かかって来るか？」
クーフーリンの挑発に乗った兵士が、何人か向かってきた。しかし、どれも右腕一つで撃退された。
「あ～、なるほど。この程度の奴は素手で倒せるのか」
「ぐっ、貴様ぁ・・・・・・」
「隊長。ここは俺が・・・・・・」
拳を握るマルカスに、飛び出してきたサーカの攻撃を、ゲイボルグで受け止めた。
「スジは良いな。貴様、名前は？」
「サーカだ。覚悟は良いだろうな、クーフーリン！！」
もはや勝敗は決したこの戦況で、サーカの攻撃は自棄に近い。しかし、ビィウルとデンテュスは何か様子がおかしかった。その時、向こうの山からたくさんの足音と羽音が聞こえてくる。やがて山の向こうから、鎧に身を包んだ大群が姿を現す。
「なんだ、ありゃあ！？」
城の塔の上から見ていたエーディンは目を見張る。
「あれは・・・・・ミディール！！」
大群の先頭にいたのは、地下にある妖精界の王――ミディールだった。
「人間どもは敵だ。全軍かかれ～！！」
号令と共に妖精の兵たちが突撃して来た。すると、空がだんだん黒雲に覆われてきた。
「妖精族だと！？全軍、撃退しろ！！」
残りの兵士たちは、マルカスの号令と共に妖精族の兵に向かって行く。
「妖精族の介入だと！？争いを好まない彼らが、なぜ！？」
サーカと組み合ったままで困惑するクーフーリンに、無数の矢が飛んでくる。思わずサーカを蹴飛ばしたが、その時に矢が肩を掠めた。
途端に体の力が抜けた。

「これは、妖精の矢（シー・アロー）」
妖精の放つ矢を受けると、体の力を奪われるといわれる。クーフーリンは、矢に当たらないように注意しながらエオホズの城へ進んだ。
「王、妖精族が介入してきました」
「バカな、彼らは決して争いを好まないはずなのに！？」
その時、塔の上からエーディンが飛び立つ。
「ご先祖さま、何を・・・・・・！？」
「私、ミディールを説得してきます！」
「ミディールを？やめてください！恐らく彼を説得できるのは、妖精王のオベロンぐらいです！！」
静止の声も聞かず、エーディンはミディールの所へと急いだ。その時、赤枝の戦士団が放った無数の矢が、エーディンに迫ってきた。
「はっ！！」
矢が刺さると思った瞬間、虹が出て矢を弾いた。
「アリアンフロッド！？」
「まったく。あなたがこんな無茶するなんて」
「ごめんなさい」
エーディンが謝ったその時、「なっ、お前ら」と、地上からクーフーリンの声がした。
「早く戻れ！！ミディールがおかしくなっているとしたら、説得なんて聞いて貰えないぞ！！」
「そんなこと、やってみなくちゃわからないよ！！」
そう叫ぶと、エーディンとアリアンフロッドはミディールの所へ飛んで行った。
「おっ、おい・・・・・・！？」

ドゴオオォォォッ！

クーフーリンの近くで爆発が起こった。即座に砲弾が飛んできた方向を見ると、そこにはアリルとメイヴが率いるコノートの軍が来て

いた。
「・・・・・くっ・・・・・・最悪じゃぁねぇか・・・・・・」
苦笑いしていると次々と砲弾が撃ち込まれ、そこら辺で爆発が起こった。
「コノート軍だ！くそっ、こんな時に・・・・・・」
「我らの邪魔をする気か。人間どもが！」
マルカスとミディールが、コノート軍のほうを睨みつける。
「国内が真っ二つに割れている、今がチャンスだ。この国を制覇せよ！」
兵士に命令を送るメイヴ。いまやここは、アルスター国の赤枝の戦士団、コノート軍、ミディール率いる妖精軍の三つ巴の戦いが行われる、修羅場へと化そうとしていた。だが、それを見て、黒いモヤに身を包んだ何者かが呟いた。
「クククククク。全ては、計画通り」

―※＊※―

「撃て、撃て、撃て～！！」
「やめてええっ！！」
妖精兵に命令をするミディールの前に、エーディンとアリアンフロッドが降り立った。
「やめて、ミディール。こんなことしてたら人間と同じになっちゃうよ！！」
「なんだ、小娘？邪魔をするな！！」
「私よ！エーディンよ！忘れたの！？」
「エーディン！？ぐっ！？ぐわあぁぁぁぁぁっっ！！」
エーディンの名前を聞いた途端、ミディールが苦しみだす。
「あ、頭が割れそうだ・・・・・うっ、ぐおおぉぉぉっ」

「ミディール!!」
思わず駆け寄ったエーディンに、ミディールは槍を向けた。その目は赤く不気味な輝きを放っており、普通じゃなかった。
「我を裏切った小娘に用はない。消え去れ!!」
「エーディン!!はあぁぁぁぁっっ!!」
とっさにアリアンフロッドがエーディンの前に虹の壁を作り出し、槍の一撃を止めた。
「ちょっとミディール!いくらふられたからって、『裏切った』はないでしょう!『裏切った』は!そんなんだからあの時、エーディンは自分の意思でエオホズの所に行ったんでしょう!!」
「(ちょっと関係ない気が・・・・・・・)」
アリアンフロッドがミディールに対して文句を言っていた時、フォーヴナハが割り込んできた。
「・・・・・倒す・・・・・・・」
エーディンは「なっ・・・・・・・」と息を呑む。その時のフォーヴナハからは、有り得ないくらいの殺気が漂っていた。
「(くっ、いったいミディールたちに何があったっていうの・・・・・)」
アリアンフロッドにいきなりフォーヴナハが突っ込んできた。エーディンとアリアンフロッドはとっさにかわしたが、地面が音を立てて砕けた。
「そんな・・・・・・・」
「バカな・・・・・・・」
二人はその光景に唖然とした。近くにいるエーディンに向いた時、かろうじて旋風が彼女の腕にドリルのように纏われているのが見えた。
「逆巻く旋風(サイクロン・セイバー)の手刀!?」
二人は目を見張った。フォーヴナハはかつて、魔法の竜巻でエーディンをアルスターのほうに飛ばしたことがある。それなので風の魔法は使えることになるが、攻撃に使えるかは不明である。

「倒す・・・・・・大竜巻（サイクロン）！！」
竜巻が起こり、エーディンとアリアンフロッドに襲いかかる。

―※＊※―

竜巻は妖精と人間関係なく巻き込み、吹き飛ばしていく。ゲイボルグの一振りで竜巻を消したクーフーリンは、二人が向かったミディールの所へと急いでいた。
「（まったく、どうしてこんな無茶を・・・・・・）」
途中、何人かの妖精に襲われたが、とりあえず殴り飛ばして進んだ。
その時、一人の兵士が立ちはだかった。
「貴様をミディールの所に行かせる訳にはいかん」
「何！？貴様は・・・・・・」
「そう・・・・・・赤枝の戦士団のビィウルだ」
目を見張ったクーフーリンに、兵士は呟くように答える。一瞬、ゲイボルグを構えようとしたが、これ以上、余計なものを相手にする時間はなかった。
「なんの用だ。赤枝の戦士団なら、俺がミディールの所に行くのになんの不都合もないはずだ」
「ところが大有りなんだよ。貴様が行けば、ミディールの洗脳が解かれる可能性が１００％確実になってしまう」
「洗脳だと！？」
ビィウルの言ったことが信じられず、クーフーリンは思わず目を丸くする。
「（バカな・・・・・・トゥアハ・デ・ダナーンの一人を洗脳だと？そんなことが出来るのか？）」
「貴様が今、考えていることはだいたい見当が付く。だが、知った所で・・・・・・どうにもならん！！！！」

その時、ビィウルが剣を振りかざし、信じられないほどの速さでクーフーリンを攻撃した。
「（なっ・・・・・・）」
驚く間もなく、そのまま後ろにあった岩に叩きつけられた。
「ぐはっ・・・・・・」
「とっさに槍を盾にして防いだか」
砕けた岩が崩れると、クーフーリンが立ち上がる。
「くっ、速い・・・・・・」
眉をひそめるクーフーリンは立ち上がるが、すぐ違和感を覚えて眉を寄せる。
「（いや、速すぎる。コイツ、本当にただの人間か・・・・・・？）」
「ハッハ。さすが、腐っても元英雄だな。手加減は出来ん」
更なる追撃をビィウルが加える。右から二発、左から三発。その速すぎるスピードに、常人には同時に放たれたように見えるが、クーフーリンの目はそれを正確に捉え、ギリギリで捌かせていた。
「（くっ・・・・・・早い。普通の人間が、この速さで攻撃できるのか・・・・・・？）」
攻撃を全て捌ききったクーフーリンだが、すぐ後に降られた一撃を真正面から受けて、後ろに飛ばされてしまう。その常人には考えられない圧倒的な力の前に、クーフーリンはあっという間に窮地に立たされていた。
「伝説の英雄もその程度か？もっと楽しませて見せろ！！」
剣と振ると地面を砕くほどの衝撃波が放たれた。クーフーリンは起き上がりざまに、ジャンプで衝撃波をかわす。
「なめるなぁ！！ゲイボルグ！！」
ゲイボルグを思い切り突き出したが、ビィウルと離れすぎているために当たらない。
「バカな。あの時は無数の矢が出てきたのに、なぜ・・・・・・」
驚いている隙に、ビィウルの攻撃を三発食らってしまった。

「ぐはっ！！」
「戦場でボ～ッとしてるんじゃない。つまらん。これで終わらせる」
高々と上げた剣からは、黒い光が放たれていた。
「あばよ」

―※＊※―

一方、別の場所。突然、巻き起こった爆発にファーディアが気付く。
ちなみに戦車は、妖精軍の攻撃で走行不能になってしまっていた。
「なんだ。あれは・・・・・まさか・・・・・」
そこへ、天魔剣で兵士を気絶させるディステリアとセリュードが駆けつける。
「ファーディア。エーディンとアリアンフロッドが、ミディールの陣に・・・・・」
「何!?」とファーディアは驚いたが、さらに驚かされることになる。
「さらに二人を連れ戻しにクーフーリンが・・・・・」
「おいおい、アイツはある程度力を封印されていることを知らないんだぞ。早く行かなきゃ・・・・・！！」
その時、「そうは行かないよ」という声と共に、三人の前にデンテュスが立ちはだかった。
「力を封印されているとはいいことを聞いた。なら、ますますあんたらを行かせる訳にはいかん。もっとも、いくらクーフーリンといえど、力を解放してもさほど変わらないと思うが・・・・・」
「ちっ。ディステリア、セリュード。お前は先に行け。ここは俺が食い止める」
「何!?」
「くっ、わかった。コイツも只者じゃあなさそうだ。気をつけろ！

！」
「させないよ！！」
「お、おい！勝手に決めるな！」
講義するディステリアを押して駆け出したセリュードに、デンテュスは剣を向ける。
「それは・・・・・こっちのセリフだ！！！」
耳を突く大きな音と共に、ファーディアからは凄まじい気が放たれていた。
「なんだぁ？」
「俺は、力の封印を解く方法を聞いていたんでね」
「面白い。例え真の力を解放したとしても埋まらない、圧倒的な差を見せてやろう」
凄まじい衝撃が放たれ、半径１０m以内にいた兵士たちは口々に「うわっ」「なんだぁ？」と叫びながら、吹き飛ばされた。セリュードも危うく、それに巻き込まれる所だった。

―※＊※―

所変わってここは影の国。ここでは今、スカアハ、オイフェコンビとバロール、クロークルワッハ、その他フォモール族の大群が戦っていた。
「ぐおわあぁぁっ。どこが一人だけだから楽勝だよ。二人いるじゃあないか」
「しかも、めちゃめちゃ強い」
「グワァァ・・・・・・」
圧倒的な数で攻め入っているはずのフォモール族の大軍は、スカアハとオイフェのたった二人を相手に追い詰められていた。
「この程度の輩、数さえそろえばここを落とせると思ったか」

「甘く見ないでいただきたいですね」
スカアハとオイフェ。本来、ありえないコンビに、一つ目の巨人（といってもここでは人間サイズ）バロールは「くっ」と、苦悶の表情（わからないけど）を浮かべていた。
「なぜ、貴様らフォモールの者がここを襲うのだ」
スカアハの問いに、「言えば、我以外の者の命は助けてくれるのか・・・・・・」とバロールが言う。
「なっ、バロールさま」
「約束しよう。オイフェもな」
オイフェは黙って頷いた。
「フッ。貴様らが人間に力を貸し、我らに対し攻撃しようとしていると聞き、ここを攻めただけだ。だが、どうやら我らは、その話を持って来た者に利用されていたようだ。貴様らが人間の戦いに手を貸すなどありえんからな」
「人間だとしても、資格ある者には技を伝える、としてもか」
「フッ。人間ごときが、お前の教えを生かせるとは思えんが、な」
「我は教えはせん。それより、その者は何者だ？」
「わからぬ。一見すると人間のように見えた。だが、あの力は人間のものとは全く違う。その者は近いうちに、アルスターという国の中で大きな戦いが起こる。その中でお前ら二人が、弟子二人を連れて我らを討伐しに来ると言った」
それを聞き、「一見すると人間？」とスカアハが眉をひそめた。
「・・・・・・まさか、あいつらの所にそいつはいるんじゃあないだろうな」
「だとしたらそのままでは勝てない。スカアハ、クーフーリンに封印している力の解放法は・・・・・・？」
「しまった。ファーディアには教えていたが、あいつには教えていなかった」
そのやり取りに、バロールは「教えないんじゃあ、なかったのかよ」と呟いた。

第１５話　真の力の源

戦場へと急ぐ三羽のカラスがいた。一羽はカンムリガラス。もう一羽はワタリガラス。最後の一羽はオオカラス。その三羽が話をしている。

「急がないと！！」

「そうね、モリガン。早くこの争いを止めないと・・・・・・」

「ティル・ナ・ノーグからも、多数の応援が来ると言っていましたしね」

この三羽のカラスは、モリガン、マハ、そしてバズウが変身したものだった。三人はティルノグから来るダーナ神たちからの伝言を、クーフーリンたちに伝えるために影の国に行ったが行き違いになっていた。そこで彼女らはスカアハに、クーフーリンに力の封印を解除する方法を伝えるように頼まれた。

―※＊※―

そのおかげで、クーフーリンは今もピンチが続いている。地面に叩きつけられたクーフーリンは「ぐはっ」と呻く。鎧の右肩と腹部の部分が砕け、足につけている具足にもひびが入っていた。

「しつこいねぇ～。英雄ってさ、潔く散るものじゃないの？」

息を切らせているクーフーリンに、ビィウルは余裕を見せる。

「ハッ、ハッ、ハッ・・・・・・待たせている人が・・・・・・いるんだ・・・・・・ハッ・・・・・・そいつと・・・・・・約束したんだ・・・・・・必ず帰るって」
「ほう・・・・・・誓約(ゲッシュ)か・・・・・・？」
「いや・・・・・・ただの口約束だ」
「そうか。よかったな、誓約(ゲッシュ)じゃなくて。その約束は、守れないんだからな！！」
満身創痍のクーフーリンにビィウルの剣が迫った時、両者の間に白い斬撃が割って入った。
「なんだ？」
首を傾げるビィウルに何者かが切りかかる。受け止めたのは天魔剣、ビィウルに切りかかっていたのはディステリアだった。
「間に合ったか？」
そして、斬撃を放ったのはセリュードだった。
「セリュード・・・・・・に、ディステリアか。すまねぇ、手間をかけさせて・・・・・・」
「気にするな」
愛用の槍を剣に変形させたセリュードは、ディステリアの戦いを見守る。まだ実力が低いとはいえ、ディステリアはビィウルに決定打を与えられず、徐々に押し返されていき、最後の一撃でクーフーリンたちの側まで下げられる。
「こいつ・・・・・・やっぱり強い・・・・・・」
「こいつは力を封印されたままでは勝てない。早く力の封印を解くんだ」
「ああ」とゲイボルグを構えなおすクーフーリンだが、すぐ眉をひそめる。
「・・・・・・？力の封印？なんだそりゃぁ！！」
「やっぱり知らなかったのか？えっと、封印の解除方法は確か・・・・・・げっ、聞いてこなかった」
「なんじゃそりゃぁ・・・・・・」

膝を着いた時、「本当に万策尽きたな！」とビィウルの剣の一振りで起きた衝撃波に、三人は飲み込まれていった。

「「「うわあああぁぁぁぁっ！！！」」」

―※＊※―

ファーディアのほうは、跳ね返る斬撃を放つデンテュスに苦戦を強いられていた。

「そ～れ、もう一丁！」

音がするくらいの速さで剣を振ると、オーラに包まれた塊のような物が放たれた。その塊は、地面に落ちていた兵士の鎧を砕きながら進んでくる。ファーディアは右に避けたが、岩に当たって帰ってきた斬撃に当たってしまった。

「くそっ！」

「ハ～ッハッハッハ。どうした、スカアハの弟子もその程度か？」

高笑いするデンテュスに立ち上がりながらファーディアが叫んだ。

「まだだ。この程度で、負ける訳には行かん」

叫び、剣を構えるファーディアだが、敵の攻撃のタネがわからない以上、状況は好転しない。

「（だが、なんだ？あの斬撃は。普通は物に当たれば砕けるはずだが・・・・・・）」

「ほ～ら、考えている暇はないよ」

余裕の表情のビィウルの容赦ない攻撃にファーディアは「くっ」と呟く。

―※＊※―

「あれは・・・・・デンテュスか・・・・・・まだ、てこずっているようだな」
辺りに響き渡る音を聞き、デンテュスが戦っている所を見ているビィウルの近くには、クーフーリンが倒れていた。
「（くそっ・・・・・・身体が・・・・・・動かない・・・・・・）」
動けないクーフーリンの目の前には、ゲイボルグが落ちていた。
「（すまない、スカアハ・・・・・・せっかく、またゲイボルグを貰ったというのに・・・・・・）」
不意に、エマーの顔が浮かぶ。

―回想―

影の国のスカアハの館を発つ前、不安そうな顔のエマーが話しかけてきた。
「あの、クー」
「ん？」
「必ず・・・・・・必ず戻って来て・・・・・・」
「ああ」

―回想終わり―

必ず帰る。誓約（ゲッシュ）にこそしなかったが、彼が必ず守ろうと決めていた約束。かつて、赤枝の騎士団の一員として、英雄として戦った神話時代。エマーを残して戦場で命を散らしたクーフーリンが、果たすべき約束だった。
「（あの時、俺はあの約束を誓約（ゲッシュ）にしなかった・・・・・エマー）

」

エマーとの約束が頭をよぎった時、腕に力が入りだした。近くにあったゲイボルグを掴み、立ち上がる。

「（エマー・・・・・・俺は・・・・・・俺は――――！）」

動く力さえも残ってなかった筈のクーフーリンが立ち上がりだした時から、彼の体からは強いエネルギーのようなものが放たれている。それを感じたビィウルは驚きの表情で振り向いた。

「バカな。まだ立ち上がる力があるとでもいうのか！？」

「――――うおおおおおぉぉぉぉっ！！」

ドッ！！！

何かがあふれ出すような音がしたかと思うと、辺りに突風が吹き荒れた。それどころか、先程と比べてクーフーリンがまとう空気が変わった。

「な・・・・・・んだ・・・・・・？この・・・・・・プレッシャーは・・・・・・」

目を見張るビィウルに、クーフーリンはゲイボルグを握って突進する。とっさに剣を盾にしたが、ゲイボルグの激突の瞬間に体を物凄い衝撃が襲い、ビィウルの体を後ろの岩に叩きつけた。

「！？・・・・・・何・・・・・・なんだ？この力は？」

さっきまで瀕死だったはずのクーフーリンに吹き飛ばされ、ビィウルは驚いた。それからもクーフーリンの連続攻撃を剣で防ぐが、さっきと同じ、いやそれ以上の力でビィウルは押されていた。

「くっ、冗談じゃない。デモズスピナー！！」

間合いを離して放った黒い魔力の塊が、回転してクーフーリンに襲いかかる。しかし、それをゲイボルグで受け止めた。

「つあああぁぁぁぁぁぁっ！！」

渾身の力を入れ、突き出したゲイボルグから放った無数の矢を貫通させ、攻撃を打ち消すと同時にビィウルの体を貫いた。

「くはっ・・・・・ば・・・・・・・かな・・・・・・」
無数の矢を体に受け、よろめくビィウル。だが、力尽きる様子はなく、
「なめるなぁ～～！！」
クーフーリンに向かって突進して行った。怒り狂ったように振るわれる剣を全てゲイボルグで捌き、その度にビィウルに槍を突き立てた。
「ごあっ。くっ、なぜだ。なぜ、勝てない・・・・・・」
膝をつくビィウルに、クーフーリンがゲイボルグの穂先を向ける。
「貴様は、なんのために戦う」
その問いに「何？」と一瞬、目を見開いたが、すぐに笑った。
「・・・・・はっ、愚問。我はわが主の望みのため。さらに我を満足させるためだ。それ以外に理由などない」
二人はいつの間にか、ミディールたち、妖精軍の陣地の目前まで来ていた。
「なら、貴様は俺に勝てん。大切なものを守るために戦う、俺やファーディア、セリュード、この国の人たちには・・・・・絶対に！」
「はっ？笑止。大切なものなど、戦うための言い訳に過ぎん。教えてやるよ。俺たちは、貴様らの負の感情より生み出されたのだよ。人間や妖精、さらに神のでも・・・・・な」
「何！？どういうことだ！？」
クーフーリンが叫んだその時、近くで大きな音がしてそちらを向く。頭から血を流したファーディアと、少しえぐれた地面に倒れているデンテュスの姿があった。どちらも鎧がボロボロになっている。
「ファーディア！？」
「デンテュス！？どうしたというのだ」
息を切らしたファーディアがよろめき、剣を支えに踏みとどまった。
「ハッ、ハッ、ハハッ。どうしたって、逆転したのよ・・・・・・ハハッ」

「逆転って、お前もボロボロじゃないか。まあ、お前らはもう後がなくなったな」
ビィウルが「くっ」と噛み締めたその時、空を覆う黒雲の中から黒いモヤに包まれた何者かが降りて来た。
「心配には及ばんよ。クーフーリン殿」
クーフーリンが「何者だ?」と身構える
「わが名はデズモルート。この戦いを望みし者」
「なんだと!?」とファーディアが叫んだその時、ミディールの陣地から爆発がした。
「貴様。何をした」
クーフーリンが叫ぶと、「何も」とデズモルートが答えた。
「ただ、お前の仲間が我が分身を倒しただけのこと」
ファーディアが「何!?」と言った時、爆発の中から足音がした。
ファーディアが振り向くと、エーディンをアリアンフロッド、セリュード、ディステリアがこちらに走って来ていた。

―回想―

妖精の兵たちの守りを突っ切って、セリュードがエーディンとアリアンフロッドの所に来た。
「エーディン、アリアンフロッド!! 大丈夫か!!」
陣に飛び込んできたセリュードに、「セリュードさん」と二人が向く。
「何!?こいつはビィウルが止めている筈・・・・・・」
なぜかフォーヴナハの体から少し出ている、黒いモヤが呟く。
「クーフーリンがここに飛ばしてくれたんだ。少々、荒っぽくて体を打ったが、な」
腰をさするディステリアが天魔剣を構えると、槍を構えて向かって来たミディールを止める。

「ちっ・・・・・この力、長く持たない。おい、セリュード！本当に方法があるのか！？」
「賭けに近いが、やるしかない！！」
ディステリアがミディールを、エーディンとアリアンロッドがフォーヴナハを止めている間、セリュードは黒いモヤに迫る。その時、彼はなぜか武器を抜いていない。
「ミディールとフォーヴナハを操っているのはお前だな！くらえ！リヒトフィスト！」
構えた両拳に光が宿り、それを突き出すと光の拳が放たれる。
「ちっ、ちょっと待った・・・・・」
エーディンが慌てるが光の拳はフォーヴナハの体をすり抜け、後ろにいる黒いモヤに当たった。
「ぐはあぁっ！！ばっ、バカなっ！」
黒いモヤが光を放つと、「ウソ。爆発するのかよ！！」とセリュードが慌てた。
「えい。虹の壁！！」
アリアンフロッドが、ミディールとフォーヴナハの前にも虹の壁が張った。そのおかげで、爆発が起こっても全員無傷ですんだ。

―回想終わり―

「なるほどな。だが、もう遅い。我らの目的は達せられた」
「何！？」と、セリュードがデズモルートと名乗った黒いモヤを睨む。
「この戦場を見ろ。この激しい戦いをもう止める術はない。多くの死者が現れ、我らの兵となる者がたくさん誕生する」
「なんだと！？」と今度はクーフーリンが叫ぶ。
「やがて、この世界を破壊しつくし、新たな世界を作るための！！」
「そんなこと・・・・・させるか～！！」

残像が見えるほどの速さで、クーフーリンがデズモルートに迫る。
しかし、軽くかわされてしまった。
「ぬっ！？」
「ビィウル、デンテュス。ウォーミングアップは終わったのか？」
それを聞き、「「うぉ、ウォーミングアップだと！？」」とクーフーリンとファーディアは驚いた。
「あ、ああ。だが、このざまだ」
ビィウルの答えに「いいではないか」とデズモルートが返す。
「どうせ本当の力の半分しか出せないように抑止しているのだから」
「（なんだと！？あれだけの強さで半分だと！？）」
目を見張って驚いているクーフーリンたちをよそに、デズモルートは喋り続ける。
「いきなり本当の力を使えば、お前らの体は崩壊する。こういう慣らしは必要だ。では帰るとしようか。ビィウル、デンテュス」
「待て。逃がすか！！」
ゲイボルグを構え、突っ込んで行くクーフーリン。だが、デズモルートは「ふんっ」と笑うと、向かって行ったクーフーリンを腕の一振りで叩き落した。
「ぐわあぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
「クーフーリン！」とエーディンが叫び、セリュードも驚きを隠せなかった。
「なんて奴だ。ダメージを受けているとはいえ、あのクーフーリンを一撃で・・・・・・」
「こんな奴が我らの脅威になるとは到底思えんが、あの御方の命令だ。片付ける」
「させるか～！！」
トドメを刺そうとするデズモルートに、セリュードとファーディアが左右から同時攻撃を仕掛けるが、それぞれ片手でたやすく受け止められ、
「ふんっ！！」

腕の一振りで二人とも地面に叩きつけられてしまった。
「うわあぁぁぁぁぁぁっ！！」
「セリュードさん！」
「ファーディア！」
エーディンとアリアンフロッドが二人に駆け寄ると、白い翼が広がったディステリアが跳びかかる。
「おおおおおおおおおっ！！ライジング・ルピナス！！」
痛みを堪えて雄叫びを上げ、ディステリアが天魔剣で切りかかる。
攻撃を受け止めたデズモルートだが、彼の顔を見た途端、白い目を見張る。
「き、貴様・・・・・・」
「――――！？」
不審そうに眉を寄せたが、その瞬間をついてデズモルートはディステリアを吹き飛ばす。
「うわあああああああっ！！」
「ディステリアさん！！」
「貴様は引っ込んでいろ！！」
地面に叩きつけられたディステリアから視線を外し、デズモルートはクーフーリンたちのほうに突き出した両腕にエネルギーを込めだした。
「・・・・・終わりだ」
冷たく呟いたその時、「させるか～！！」と、声がした。デズモルートはチャージをやめ、放たれた一撃をとっさにかわす。
「ん？貴様は？」
大声と共に割り込んできたのは、なんとサーカだった。
「――――赤枝の戦士団、サーカ。我らを利用した借りを返しに来た！」
速いスピードで槍を振るうが、全てかわされてしまった。
「バカな！！」
「人間にしては面白かったよ・・・・・・」

その後に槍の一撃をかわして、後ろ蹴りを放った。サーカはクーフーリンたちの所に落とされた。
「ぐわっ！！」
地面に倒れたクーフーリンたちに、改めてトドメを刺そうとする。
「では皆さん、死んでもお元気で！！」
両手にためたエネルギーを一気に放った。誰もがもう駄目だと思った時、白いイカズチが割って入り、デズモルートの放ったエネルギーを打ち消した。
「なんだ？今のは！？」
「い・・・・・・今のは・・・・・・・まさか・・・・・・・」
ゆっくりと後ろを向くと、神々しい光を纏った一人の雄雄しい男性がこちらに歩いて来ていた。
「・・・・・・親父・・・・・・・」
「太陽神・・・・・・ルーグ・・・・・・」
クーフーリンもセリュードも、その存在の出現に目を見張っていた。

第16話　終幕

デズモルートは、神々しき光を放つ鎧をまとった男、ルーグを見据えていた。

「まさか、貴様が出てくるとは・・・・・・」

「俺だけではない。この争いを止めるため、そして貴様らの企みを止めるため、俺たちは来た」

「俺たち？」

セリュードが首を傾げると。「そう」とルーグがマントを広げる。

「――俺たち、ダーナ神族が！！」

空の上を複数の光が横切った。その光が降り立ち、戦っている兵士たちを止めにかかった。

「オグマにダグダ、ヌアザ、その他ダーナの神々か。だが、いくら貴様ら神であろうと、人間どもが抱いた憎しみを止めることはそうたやすくはない。ルーグよ。貴様もここで、朽ち果てるがよい！！」

両腕を上げ、さっきより強大なエネルギーを放った。だがルーグは、静かに左手で剣を抜いて前に構えた。

「我らを甘く見るな。アンサラー！！」

光を纏った片手剣を振り降ろすと、光が放たれデズモルートの放った攻撃を打ち破る。だが本体の前で打ち消されてしまった。

「バカな！アンサラーの一撃が掻き消されただと！？――親父殿！！」

「騒ぐな。心配ない・・・・・・」

焦りを抱くクーフーリンに、ルーグは静かに厳しい感じの声をかけ

る。デズモルートを睨むルーグの目に宿る光は、何か判別ができない。敵に遅れをとったクーフーリンに対する怒り。かつて自分たちが住んでいた国を、争いで荒らしたデズモルートに対する怒り。それとも、この国の神として目の前の外敵を倒そうとする使命感。いや、どれとも違うと、クーフーリンは感じた。

「無駄だ。我らの力は神に迫っている。いずれ、お前らを超えるだろう」

不敵な言葉で挑発するデズモルートに、ルーグはただ静かにたたずんでいる。

「ほう。この程度では挑発にすらならんか・・・・・・なら、これはどうだ!?」

今度はさっきのエネルギーを空中に放ったかと思うと、そのエネルギーが雷のように降って来る。

「甘い。ブリューグナク!!」

右手を上げると、今度は五つの穂先を持つ長槍が現れた。槍を突き上げると、光の雷が黒い雷を打ち破った。さらに、その攻撃は弧を描いてデズモルートに直撃した。

「ぬぅおっ!?」

今度は効いたらしく、叫んで地面に膝を着いた。クーフーリンたちとは一転して劣勢のデズモルートにルーグが静かに言う。

「言っただろう?我らを甘く見るな・・・・・・と」

「確かに。しっかりと肝に銘じておくよ。だが、この激しい戦いを止めることができるかな?ふはははは・・・・・・」

笑い声を上げるとデズモルートは、ビィウル、デンテュスと共にその場から消えた。

「確かに。これほど激しいと、誰もこちらの話を聞いてくれない。親父、いったいどうするつもりだ?」

不安を隠せないクーフーリンに、ルーグは余裕の笑みを浮かべる。

「姑息な手だが、ちゃんと考えてある。見ろ。太陽弾タスラム。睡眠弾スペシャル」

「「「「おおっ!!」」」」
不思議な文様が描かれた、丸い弾丸を六つ取り出したルーグに、エーディンとアリアンフロッド、クーフーリンとファーディアが期待に満ちた声を出す。
「さらに、それを撃ち出す携帯銃。ゴヴニュに作ってもらった特別性だ」
人間の世界に出回っている、リボルバータイプの拳銃を取り出す。
「「「「おおっ!!」」」」
「タスラムを6発まで搭載して、撃ち出すことが出来る」
「「「「おおぉぉっ!!!」」」」
「いっくぜ〜〜!!」
拳銃に弾を装填し、未だ戦いを続ける人間たちに銃口を向ける。
「いっけね。どうしたら弾が出るか、聞いて来るのを忘れてた」
「「「「おおぉぉっ!?!?」」」」
期待はずれの展開に、全員こけてしまった。こらえ切れなくなったサーカが、「だあぁっ!!」と叫んだ。
「まずそのハンマーを引く!その後、狙いを定めて引き金(トリガー)を引く!その後はハンマーを引いてホルダーを回転させて、新しい弾を撃つ!」
「そうか。人間が使う物を基に作っていると聞いたから、それで良いのか?よ〜し・・・・・・」
銃の使い方を教えてもらい、今度こそ銃の狙いを定め引き金を引く。
ドンッ!!
ヒュルルルルルル・・・・・・パンッ
遠くで炸裂したからか、小さな音に一同は唖然とした。
「どこが特別性だよ。何も起きないじゃあないか!!」
ファーディアの後に、「ていうか、威力低ッ!!」とサーカが叫ぶ。
「これからどうなるの!?」

エーディンも加わってギャアギャア騒いでいたその時、タスラムが撃ち込まれた一帯の兵士たちが静かになりだした。なんと、兵士たちが眠りだしたのだ。

「おっ？」

「おっ？」

「「「「「おおおっ！！」」」」」と、さっきとは打って変わって一同が声を上げた。

「よ～し、この調子で、どんどん撃ち込むぞ！」

ドン！ドン！ドン！ドン！

戦場にタスラムが撃ち込まれる度に、兵士たちは次々と倒れていった。

「何、何。なんで私たちの軍の兵が、次々と眠っていくの！？」

慌てるメイヴに、コノート兵が報告する。

「わかりません。いったい、何が・・・・・おわっ！？」

爆発で兵が吹き飛ばされると、ヌアザが入って来た。

「アリル、メイヴ。貴様らがなぜ？」

「ぬっ、敵だ。迎撃せよ」

アリルの命令で兵士たちがヌアザに襲い掛かる前に、アリルの顔を殴りつけた。

「アリル。この・・・・・」

短剣を振りかざしたメイヴに、「クラウ・ソナス！！」とヌアザが一撃を放つ。

ゴンッ！！

鞘付きのクラウ・ソナスが音を立て、メイヴの頭に直撃した。

「いった～い。何すんのよ～」

「このような争いを起こすからだ」

「・・・・・争い？」
首を傾げたメイヴだが、場の状況を知ると驚いた。
「のわっ、何これ？なんでこんな所にいるの？」
慌てるメイヴをよそに、ヌアザは驚いたような顔をした。
「まさか、メイヴとアリルも操られていたのか。神をも操るとは、恐ろしい敵だ」
実質、軍の司令塔は潰され、さらに睡眠作用のあるタスラムにより戦場にいた兵士たちは次々と戦闘続行不可能となって行った。こうして、大混戦を極めた戦いは終幕した。

―※＊※―

戦いが終わって、数分後。
「クーフーリン。よかった、無事で。あなたに力の封印の解除方法を・・・・・・」
駆け寄るモリガンに、「「いまさら遅い！！」」とクーフーリンとファーディアが声を合わせて叫ぶ。
「はうっ・・・・・・」
「我々より１０分も早く来ていたお前らより我が先に着くとは、戦場を飛び回っていたな？」
「ううっ・・・・・戦女神の悲しい定め・・・・・・」
落ち込むモリガンに、「なんだかなぁ」とセリュードが言った。
「俺が戻って来た頃にはクーフーリンはもう力を解放して戦っていたから、てっきり教えてもらったのかと」
「俺は教えてもらってないぜ。ただ、絶対に負けられないと思ったら、なんか体に力が湧いてきて・・・・・」
不思議そうな顔のクーフーリンに、ルーグが歩み寄る。
「大切な人との約束を守りたい、という強い思いが力の解放の鍵の

ようだな」
「はい。『絶対に負けられないという強い心』と、それの源になる『想い』が力の封印を解く鍵なんです」
モリガンの言葉に、「そうだったのか・・・・・・」とクーフーリンが言った。
「それより、お前ら。早く医療テントに行って傷の手当てをしてもらえ。ディアン・ケヒトたちが治してくれるはずだ」
「わ、わかりました」
ルーグに言われてファーディアが答え、クーフーリンが歩き出すと、エーディンが近くに座り込んでいるサーカにも手を差し出した。
「ほら、あなたも」
「なんで、敵の俺まで」
「もう戦いは終わった。敵も味方も関係ないよ」
「それに、助けてもらったしね」
「あれは・・・・・俺たちを利用した借りを・・・・・・」
アリアンフロッドに言いかけたサーカの言葉を「はいはい」とルーグが遮った。
「クーの馬に救護用の戦車を引っ張ってきてもらったから、それに乗ってテントに行け」
いつの間にか、幅の広い戦車を引いたマッハとセイングレイドが来ていた。
「すまない。親父」
「フッ、気にしなさんな」
ルーグが答えると、クーフーリンたちは二頭が引く戦車に乗り、ディアン・ケヒトたちがいる医療用テントに向かった。それを見送ると、身体を起こしているディステリアに目を向ける。
「・・・・・お前が、クトゥリアの弟子か？」
「弟子じゃない。鍛えられてはいるが、それは人探しを終えるまでのつなぎみたいなものだ・・・・・・」
「腕が鈍らないように、か」とルーグは含み笑いをする。が、すぐ

鋭い目付きになる。
「だが、俺はお前らをあまり信用しない。太陽神という性質上、お前ら人間の行いは全て見られる。それこそ、善悪を問わず・・・・・・」
「細かく言えば、俺もセリュードって騎士も人間ではないですよ」
皮肉を込めて言うディステリアに、「何、バカなことを言っている」とルーグは眉をひそめた。
「現世に生きる存在は、皆同じ『人間』だ。種族、人種などは関係ない。そんなものは些細な問題だ」
ルーグの言葉に、ディステリアは衝撃を受けたような顔になる。人ならざる力を持つ自分は人間ではない。どこかそう思っていたことを否定されたような気がした。悪い気はせず、しかし動揺のためかいい気もしなかった。
「さ、話は終わりだ。怪我を治し次第、どこへでも行くといい・・・・・」
「そうしたいのは山々だが、連れがいない。あいつがいないと、人探しは手がかりなしになる」
「ふん。勝手な奴だな・・・・・・」
背を向けて何やらぼそぼそと呟いたが、ディステリアには聞き取れなかった。

―※＊※―

医療テントでは、白いひげを蓄えた白衣の中年男性とクトゥリアが、何か話しをしていた。
「・・・・・・で、彼らの手口は？」
「特殊な薬品と催眠術で、意識を自分らの支配下に置く。それが奴らの常套手段なのじゃろう」

「解く方法は？」
「まだケースが少ないからなんとも言えんが・・・・・・ワシらが所有している薬でなんとかできるだろう。例の領主とやらに洗脳されておった妖精たちも、ポーションと静養で正気に戻った」
「あなた方の所有する回復薬（ポーション）は、人間界で出回っているものより効果が強いことをお忘れなく・・・・・・」
そう言ってクトゥリアは、懐にしまっていた紙の束を差し出す。
「例の領主の隠し部屋にあった、薬の成分表だ。これで中和剤は作れそうか？」
「やってみよう」
ディアン・ケヒトが紙の束を受け取ると、ちょうどディステリアが入って来た。
「・・・・・・・・何やってんだ？」
「ちょっと、な・・・・・・それよりどうだ、ディステリア？この戦いに参加して・・・・・・」
率直な感想を求めるクトゥリアに、ディステリアは複雑な表情で顔を逸らした。
「・・・・・・・・よく、わからない。人間同士が命を賭けた・・・・・それも国同士の戦い。数百年も昔によくあったことは教義で習ってたが・・・・・・」
「目の当たりにするのは初めてか。まあ、今の世代を生きる者は当然だろうな」
肩をすくめたクトゥリアは、「それに、お前は運がいい」と続ける。
「今回は死人が出なかった。本物の『戦争』はこれよりも陰惨だ。人が人の命を奪うことが、国単位で行われる・・・・・・」
「どうして、そんなことが平気でできるのでしょう・・・・・・」
「下の者は上の者の命令に従う。それが組織だ。だが、俺はそれぞれの信念が優先できる組織を造りたかった」
「それは不可能でしょう？」
眉を寄せて言うディステリアに、「ああ」とクトゥリアが悲しそう

に答える。
「信念というものは、人の数だけ存在する。反発する信念もあるだろう。それを知った時、俺は俺の造りたかった組織が夢幻だと知った・・・・・・」
「じゃあ、今は？」
その質問にクトゥリアは答えない。悲しそうな顔を誤魔化すように、彼のほうに笑顔を向けた。
「さ、行こう。ディアン・ケヒト。駄賃として回復薬はいくつか持ってく」
「おう。毎度あり・・・・・・」
回復薬がいくつか入ったバッグを肩に担ぎ、クトゥリアはテントを出て行く。
「そういえば、そのバッグ。いつもはどこにあるんだ？」
「秘密・・・・・・」
いつもないはずのバッグを指差してディステリアが聞いたが、クトゥリアは意地悪な笑みを浮かべて誤魔化した。

―※＊※―

闇に包まれた、ある建物の中。そこの中に丸いテーブルを囲んだ、八つの影がある。その内の一つが、黒いマントに身を包んだ人の形を取ったデズモルートだった。
「計画通り、アルスターの二ヶ国、コノートの戦いにミディールたち地下の妖精たちが介入し、戦闘が拡大しました」
「そうか。しかし、計画が成功したとは・・・・・・言えない」
「なっ、なぜですか！？」とデズモルートが声を上げると、先程の声が答える。
「確かに怪我人が多く出たし、負の感情のエネルギーもたくさん確

保できた。しかし、この戦いで死亡した者がいない」
「実質、失敗したという訳だ」と、最初とは別の影が割り込む。
「そんな、カーモルさま。ネクロ、それは確かなのか？」
カーモルと呼んだ影の、左の席に座っている影に向かって叫ぶ。
「ええ。間違いなく」
それを聞くと「くっ・・・・・・」と、悔しそうに声を出す。
「だが、あと数日で別の地域の人間どもがアースガルドへ進行する。
ネクロが流した情報によってね」
「ええ。では、そろそろ私は行くとしましょうか」
席を立つネクロに、「どこへ？」とデズモルートが聞く。
「ミッドガルドですよ。あそこでやることもありますしね」
「では、頼んだぞ」とカーモルが言うと、ネクロは「ハッ」と頷いた。
「我らの、理想の世界を作るために」
闇に包まれた部屋の中で、八人の声が同時に木霊した。

一つの島国の戦い
それは・・・・・・さらなる戦
いの、序幕に過ぎず

第17話　ヴァルハラ騒乱（前書き）

新たな国で、新たな戦いが始まります。

第17話　ヴァルハラ騒乱

アースガルドにあるオーディンの館、〈ヴァラスキャルヴ〉の中は騒然としていた。
「なぜ人間どもがここに攻め入ろうとしているのだ」
「知らぬ。あの愚か者どもに聞け！」
アースガルドの神々は怒りをこらえながら話している。その声は薄い灰色のマントに身を包んだ隻眼の神、オーディンの所まで聞こえてくる。
「ミーミル殿、どう思われるかな？」
オーディンが生首（失礼）ミーミルに聞いた。
「ううむ。なぜ人間がここに攻め入ろうとするのか、心当たりはないのか？オーディン」
「いえ、全く」と、オーディンが首を振る。
「ふうむ。なら原因は人間たちのほうに・・・・・」
ミーミルが考え込むと、オーディンは部屋を出て行った。
「おい、わしを元の位置に戻さなくていいのか。おい、お～い」
その声を無視して部屋を出たオーディンは、「ムニン、フギン」と声を上げた。すると、二羽の鳥が飛んできて彼の肩に止まった。
「ミッドガルド側にいる人間たちの様子を見てきてほしい。できれば、なんの目的でこんなことをするのかがわかる情報がほしい。ただし、無理はするな」
オーディンの司令を受けて、二羽の鳥は飛び立って行った。〈ヴァラスキャルヴ〉の中はいまだ騒がしい。

―※＊※―

アースガルドへ通じる虹の橋、ビフレスト。そこには、戦車や装甲車が押しかけていた。その中にある濃い灰色のテントの中で、簡易テーブルの上に置かれた地図の上に、両肘を置いた司令官がいた。
「指令。突入準備、完了しました」
敬礼した兵士の一人に、「うむ、ごくろう」と指揮官が頷いた。
「配置も指示通りです」
「後は・・・・・本部からの命令が下るのを待つだけだ」
同じ頃、近くのテントの側では二人の兵士が話していた。
「ま～ったく、やってられないっすよ。こんなこと」
「まあ、そう言うな。これも任務だ」
「でもよぉ、こんなんで俺たちになんの徳があるんだよ」
「軍の上層部が決めたこと、俺たちがとやかく言うことではない」
グチを言ったことを注意され、兵士は「ちぇ～」と舌打ちをした。
「なんで俺らが、お偉いさん方の別荘地の確保をしなくちゃならねぇ～んだよ。ちくしょう～」
その会話を木の上で聞いているものがいた。一羽の鳥が。

―※＊※―

ミッドガルド。神々からの視点から見て、いわゆる人間の住む世界。
その世界の中にある町の通りを、二人の通行人が横切る。
「ねえ、聞いた～。この国のお偉いさんの話」
「聞いた、聞いた～。確かどこかに別荘を建てるんですって～」
「それが別荘だけじゃないのよ。ゴルフ場やホテルも作るんですっ

て～」
「ええ～、信じられない。この前この近くにホテル建てたのに～」
「しかもその予定地が、空中に浮かぶ島なんですって」
「うっそ～、信じられな～い。そんなのあるの～？」
「それがあったらしいのよ。どこかの科学者が偶然発見したんですって」
「へえ～。あっ、でも確かその島には神様が・・・・・・」
「あんたまだそんなことを信じてるの？そんなのは、迷信よ。め・い・し・ん」
「そうかな～」と呟いた通行人が通り過ぎると、その道の上に枝が出た木に止まっていた一羽のカラスが、大きく翼を広げて飛び去った。

―※＊※―

数日後。ヴァルハラに帰って来たムニン、フギンからの報告を聞いた神々は騒然とした。
「別荘地の確保だと！？ふざけているのかっ！！」
「思い上がりもはなはだしい！！」
「何を考えているのだ！まったく！」
怒りを露わにしている神々がいる一方、冷静な者もいた。
「人間たちは我々の存在を忘れているようだ」
「・・・・・なんか、さびしいね・・・・・・」
フレイの指摘に、暗い顔で隣にフレイアが悲しそうに呟く。
「いや、それよりも問題なのは・・・・・・」
「ああ、そうだ。人間にこのアースガルドを発見するなど不可能なはずだ」
髪の赤い雷神、トールとオーディンが切り出す。

「いったい、どういうことだ」
「・・・・・調べる必要があるな・・・・・」
「ああ」とトールが言うと、オーディンは手を組んで考えこむ。
「この世界の存在は、一人のある科学者が発見したらしい。その者について調べる必要がある・・・・・」
「まさか。お調べになるつもりですか?」
「ああ」とオーディンがバルドルに答えると、「なっ・・・・・・・」と辺りは絶句した。
「何を驚いている。人間どもが何を考えているか知るには一番いいと思うが」
「なっ、何もあなたさまがいかなくとも・・・・・」
「そうですよ。危険です」
「誰が?」
フレイとシフにオーディンが聞き返すと、神々は「えっ?」と唖然となる。
「誰も私が出るとは言ってはいない。ヴァルキリーたちやムニン、フギンに頑張ってもらう。まあ、こき使っているようであまり気は進まないが・・・・・」
「はあ、そうですか」と、ヘズが呟いた。
「そうですね。さすがにもうあなたに出てもらう訳には行かなくなりました」
フレイに指摘を受けオーディンは「ふむう」と考え込んでしまった。
「あの者ならどうでしょう」
不意にフレイアが口を開くと、「誰だ?申してみよ」とオーディンが聞き返す。
「えっ、でも、オーディンさま・・・・・」
戸惑うフレイアに、「構わぬ。申してみよ」とオーディンが言う。
「はあ、では・・・・・」
「まさか、ロキではないだろうな」と、トールが口を挟むとその場は慌ただしくとなったが、一番、驚いたのはフレイアだった。

「なっ、何を言うのですか。私がオーディンさまに彼を推薦するとお思いですか!?」
抗議をするフレイア。オーディンにとってその名はあまり聞きたくないものだった。
「私が推薦するのは、ジークフリートです」
また場が慌ただしくなった。ロキほどでもなかったが、その名もあまり聞きたくなかった。しかしとりあえず、ミッドガルドに様子を見に行くということで一致した。

―※＊※―

同日。ミッドガルドの町を二人の男女が歩いている。男性のほうは白い服と灰色の長ズボンをはいており、女性のほうは薄手の薄緑色のコートを着て、クリーム色のスカートをはいている。
「なんか、こうしてミッドガルドに来るのって久しぶりだよね」
女性のほうがそう言うと、一緒に歩いていた男性が「ああ」と言った。すると女性は振り返って、悲しそうな顔をする。
「もう、あんなことになっちゃ嫌だからね・・・・・・ジークフリート・・・・・・」
ジークフリートと呼ばれた男性は、「もっ、もちろんさ。ブリュンヒルド」と慌てて言った。
「ほんと?」
ブリュンヒルドと呼ばれた女性が聞き、「ああ、もちろんだとも」とジークフリートが答えると、
「オホン、オホン」
わざとらしい咳払いが聞こえた。二人がそのほうを向くと呆れ顔の男がいた。彼も薄手のコートにズボンと、一般的な格好をしている。
「二人とも、オーディン様から言われた任務を忘れてないか」

男にそう言われて二人は、「え?あ、あは、ははは・・・・・・」
と申し訳なさそうに笑った。

―回想―

数分前、ヴァラスキャラヴ。アースガルドの神々の会議が終わって、約一時間後のことだった。
「ヒミンビョルグのヘイムダルより伝令!人間の軍隊が動き出したとのことです」
エインヘリヤルの報告を聞き、「動き出したか」とオーディンは呟いた後、鎧に身を包んだ一人の男性のほうを向いた。
「ジークフリート、先ほども言った通りだ。虫が良いと言うのはわかるが今は頼めるのは君しかいない。・・・・・・頼んだぞ」
「・・・・・・はい・・・・・・」
頷いたジークフリートに、「ほんとに行くの?本気なの!?」とブリュンヒルドが叫ぶように問いただす。
「ああ、本気だ」
静かにジークフリートはそう言った。ブリュンヒルドが何を心配しているのか、オーディンには見当がついていた。かつて結ばれるはずだった二人はある人物の陰謀により引き裂かれてしまった。もしかすれば、その陰謀はある呪いによって引き起こされたのかもしれないが、今この場にいる二人はすぐにでも言い争いを始めそうだった。それを見かねたオーディンは二人をなだめた。
「ふう~。わかった、わかった。こちらから一人つけよう。二人水入らずのところに誰かつけるのは、見張りをつけるみたいで私としても嫌なのだが・・・・・・よろしいかな?」
「えっ、あっ、はい。よろしくお願いします・・・・・・」
戸惑いながらも二人は承諾する。そうして、ジークフリートとブリュンヒルド、そしてあと一人はミッドガルドに行くことになった。

―回想終わり―

その男、スキールニルは不服そうな顔で、「こっちとしては迷惑だし・・・・・・」と文句を言う。

「こんな時こそ、主であるフレイ様の下にいなくてはならないのに・・・・・・」

グチを言うスキールニルを、ブリュンヒルドが「まあまあ」となだめる。

「まあ、その主と他ならぬオーディンさまの頼みだ。断る訳にはいかなかったが・・・・・・」

まだ、しばらくぶつぶつ言っていた。

「しかし、いったい何を調べればいいのかな。お主ら、心当たりは？」

そう聞かれた途端、二人は固まってしまう。

「そうか、わからぬか。実は、私もそうなのだ」

彼自身も、自分に呆れながら溜め息をつき、「困ったな・・・・・・」と頭を抱えた。ミッドガルド内でどう動けばこの事態の発端を見つけ出せるか、彼らにはわからなかった。

「とりあえず、アースガルドを発見したという奴を探し出すか。まずはここからだ」

スキールニルの提案で、三人はある図書館を訪れていた。

「この世界で起こったことを書いている紙の束があるはずだ。確か、新聞とか言ったかな」

「どんな物なの？」と聞くブリュンヒルドだが、「さあな。俺も実際に見たことはない」とスキールニルが答える。

「俺も、だ」

「うーん。だったら絶望的じゃない？」

「ええい。ここでこうやっていてもラチが明かない。行くだけ行っ

て見よう」
三人が図書館の中に入るなり、「わあ～。本がいっぱい」とブリュンヒルドが声を上げた。
「当たり前だ。図書館といえば、本がたくさん置いてある場所だ。ヴァルハラにもあるだろ」
溜め息混じりのスキールニルに言われ、「わ・・・・・・わかってますよ～」とブリュンヒルドは言った。
「さて、どこにあるんだろう」
「知らん」
周りを見渡しながら呟くジークフリートに、スキールニルは答えた。
三人が「うーん」と考え込んでいると、「あの」と一人の女性に声をかけられた。
「はい？」
「何かお探しでしたら、受付の所までお越しください」と、声をかけた女性はそう言った。
「実は私も受付嬢なのですけど」
「じ、じゃあ尋ねるが・・・・・・」
早速、聞くスキールニルに、「はい、なんなりと」と受付嬢は聞き返す。
「新聞、という物はどこにあるかな」
そう聞かれた受付嬢は一瞬、変な顔をした。
「は、はあ。過去の新聞記事をまとめた物でしたら、別館のほうに置いてありますが」
「そうか、ありがとう」
お礼を言って別館に行こうとしたスキールニルを、「ちょっと待った」とブリュンヒルドが引き止めた。
「その別館ってどこにあるの？」
「それでしたら、本館の東のほうにございます。あちらの通路から行くことができます」
スキールニルは礼を言うと、別館のほうに歩いて行った。それを見

送った受付譲は、怪訝そうな顔をする。
「さっきの少年と茶髪の人といい、なんでわざわざ図書館で最近の新聞を読みにくるのでしょう・・・・・・」

―※＊※―

「うわぁ～」
「たくさんあるなぁ～・・・・・・それで、どうする？」
「うーん。そうだなぁ～・・・・・・とりあえず、虱潰しに見ていこう」
三人はそれぞれ作業に取りかかった。
三時間後。三人は「うう・・・・・・う～」と音を上げていた。ジークフリートとスキールニルは椅子の背もたれにもたれているし、ブリュンヒルドは机の上にうな垂れていた。
「な～にやってるのよ」
すると背後から声がしたので、三人はそちらのほうに目を向けた。
「あっ、あんたは！」
「グリームヒルド？！」
二人は驚きの声を上げて、椅子から立ち上がった。クリーム色のドレスに身を包んだ彼女は、この二人の非業の死に深く関わった存在だから。
「グリームヒルド！どうしてここに！」
ジークフリートの問いに「さあね・・・・・・」と、グリームヒルドははぐらかしながら椅子に座る。
「まさか、またジークフリートを・・・・・・」
半ばけんか腰にたずねるブリュンヒルドに、「まあ、そう思うのも仕方ないけど」と肩をすくめた。
「安心しなさい、もうあんなことはしないから。それどころか、頼

みがあるの」
「たっ、頼み～？」
驚くジークフリートとブリュンヒルドに、「ええ」とグリームヒルドが頷く。
「冗談じゃない！！！！私たちがあなたの頼みなんて、聞けると思ってんの！？」
一方的に叫ぶブリュンヒルドに対して、グリームヒルドは黙り込んでいる。
「ブリュンヒルド、それくらいにしてやれ」
静かに言うジークフリートに「でっ、でも・・・・・・」と、心配そうな声を出す。
「そうそう、ジーク君の言う通り。ブリュンちゃん、それじゃあまるで弱いものいじめだよ」
その言葉に「ぶりゅ・・・・・・弱いものいじめ？」と、少し戸惑った。
「それに・・・・・君たちが彼女に会った時から、いったいどれだけの時間が経っていると思っているんだい」
スキールニルの指摘に、今度はブリュンヒルドが黙り込んだ。そう言われてみれば、ジークフリートとブリュンヒルドの二人がグリームヒルドに会ってから数百年の年月が経っている。それなのに彼女の肌にはしわひとつない。ということは。
「あなた・・・・・・まさか・・・・・・」
わなわなと震えながら指差すブリュンヒルドに、グリームヒルドは頷いた。
「あなたまさか、不老不死の力に手を出したんじゃあ」
グリームヒルドは椅子から滑り落ちた。スキールニルは「だめだこりゃ」という顔をしていた。
「・・・・・にっ、鈍い・・・・・・」
立ち上がりながら言うグリームヒルドに、「なんですって！？」とブリュンヒルドがかみつく。

「はあ～。誰かの力で、蘇ったのだろう」
呆れながら口を挟んだ彼に、ブリュンヒルドが「えっ？」と振り向く。
「ええ、そうよ。さすがジークフリート、鋭いわね。誰かさんと違って」
「なんですてぇ～」
「あ～も～。お前ら、いい加減にしろ！！！」
叫んで掴みかかろうとするブリュンヒルドに、堪りかねたスキールニルが叫んだ。
「グリームヒルド。そのことについて話を聞きたい。話してくれるよな」
「ええ、いいわよ。私はそのつもりでここに来たのだから」
「わかった。では、単刀直入に聞こう。お前を蘇らせた奴は何者なんだ？」
「・・・・・この戦いを、裏で引いている者よ・・・・・・」
グリームヒルドは隠しもせずに答えた。その回答に、スキールニルとジークフリートとブリュンヒルドは戦慄を感じた。
「この戦いは仕組まれたもの、だということか」
ジークフリートの問いに「ええ」と頷くと、「・・・・・・・いったい誰が」とブリュンヒルドが呟いた。
「奴は、あいつは私の他に父上やグンテル兄さままで蘇らせたわ」
「グンテルって・・・・・・あのグンテル・ギービヒェか」
「ええ。あのグンナル・ギービヒェもよ」
ブリュンヒルドが「なっ」と、苦虫を噛み潰したような顔になる。
「知っているのか？」
「思い出したくもない・・・・・・」
それもそのはず。そもそもこのグリームヒルドは、ジークフリートとブリュンヒルドと浅からぬ因縁がある。
「とにかく、その『奴』というのが気になるな」
話を戻すとグリームヒルドが、「案内するわ」と言い出した。それ

を聞いた時、ジークフリートとブリュンヒルドの脳裏をある考えが横切った。

「（・・・・・これは、罠なんじゃないのか・・・・・・）」

その時、「ちょい待ち。その前にどうしても聞きたいことがあるんだ」と、割り込んだスキールニルを三人は見た。

「町で聞いた、アースガルドの存在を突き止めたっていう科学者について調べたいのだがそれに関して書かれた物はないのか」

「・・・・・さあ、わからないわ」

「そうか・・・・・。よし、ジークフリート、ブリュンヒルド。お前ら二人はグリームヒルドについて行け」

この指示に二人は「・・・・・はっ？」と、唖然とした。

「いや、だから。お前ら二人はこいつについて行け」

二人が「はあ～～～！？！？」と叫ぶ。二人にはスキールニルの指示が全く理解できなかった。

第17話　ヴァルハラ騒乱（後書き）

ディステリアとクトゥリアが登場しな～～い！！クトゥリアはともかく、ディステリアは主人公なのに・・・・・・。

さて、本編中にやるとうるさくなる補足説明を

ジークフリート、ブリュンヒルド、グリームヒルド間の因縁
この世界では、ジークフリートとブリュンヒルドは相思相愛の関係。ブリュンヒルドと婚約をしたジークフリートに、一目ぼれしたグリームヒルドが自らの城に招いて薬を盛り記憶喪失にした上、その彼を使いブリュンヒルドをグンナルと結婚させた。その後はジークフリートが持っていたニーベルングルの指輪のせいか、彼はグンナルとグトホルムに殺され、ブリュンヒルドも自らその後を追った。
その後、ブリュンヒルドはオーディンの特命によりヴァルキリーに復帰し、ジークフリートはエインヘリヤルに転生された。

原点の話に添ってるようで、全然違うということに最近気付いた。
神様はなんでもありか・・・・・・と思われた方がいると思います。

第18話　接触

「図書館なのに騒がしいぞ～。静かにしてくれ～」
気の抜けた声の苦情が聞こえてくる。ジークフリートとブリュンヒルドがそちらに目を向けると、こげ茶色の髪の男性が立ち上がっていた。彼の横では、ぼさぼさ髪の少年が机に突っ伏している。
「す、すいません・・・・・・」
ブリュンヒルドが謝ると、そちらに近づいたクトゥリアは机に広げてある新聞に気付いた。
「そちらも何か調べ物を？」
「えっ、あっ、はい・・・・・・最近、軍隊が動いてるって話しを聞いて・・・・・・」
「その理由を調べてる、か・・・・・・」
「いえ、そこまでは。ただの興味本位です」
誤魔化そうとするブリュンヒルドに、男性は目を細めて射抜くような視線を向ける。思わず身を強張らせると、警戒したジークフリートが立ち上がる。
「とてもそうとは思えないな。特に、さっきのような会話を聞かされた後は、な」
「――――ッ！！」
「よく言いますね」とスキールニルが口を挟む。
「そちらで突っ伏している少年はともかく、あなたは気配を消して話しを聞いていただろ」
「盗み聞きしたように言うのはやめてくれないか。アース神族の誰かさん」

男性の言葉に、ジークフリートとブリュンヒルドは弾かれたように立ち上がり身構える。対する男性は、少し焦った表情をしてなだめるように手を上げた。
「わあ、待て、待て。俺はクトゥリア、敵じゃない。」
「クトゥリア・・・・・?アースガルドに踏み入った、不遜な人間か!?」
怒気を含んだスキールニルの言葉に、「（げっ、もしかして地雷踏んだ?）」と表情を強張らせる。
「おい。図書館とやらでは、静かにしなければいけないんじゃなかったのか?」
呆れた声に全員の視線が向くと、「「あっ!」」と声が重なる。そこに立っていたのは、クトゥリアたちが島国エリウで会った海神――マナナン・マク・リール。
「・・・・・人並外れた身体能力のお前でも、正真正銘の神は怖いみたいだな」
「当たり前だよ。現世じゃ大丈夫だが、本場だと天地ほどの差が・・・・・」
肩を落とすクトゥリアに話しかけるマナナン・マク・リールを見て、スキールニルたちは少し警戒を緩める。
「・・・・・知り合いか?」
「訳ありだ。・・・・・じゃあ、俺はそろそろ帰る。ディステリア、精進しろよ」
机に突っ伏している少年は、「おう・・・・・」と弱々しい声と共に右手を上げる。それに溜め息をつくと、マナナン・マク・リールは別館を出て行った。
「取りあえず、味方でいいのか?」
「俺としてはそのつもりだ。改めて・・・・・俺はクトゥリア。あそこで突っ伏してるのはディステリアだ」
「俺はスキールニル。こっちはジークフリートにブリュンヒルド。それから・・・・・」

「グリームヒルドだろ。言ったろ？話しを聞いたって・・・・・・・」
クトゥリアが答えた後、ディステリアが身体を起こす。
「さっき言ってた調査・・・・・・こいつも同行させてやってくれ。足手まといになったら、放って置いて構わない」
「構うわ！」とディステリアが文句を言ったが、クトゥリアは無視した。

―※＊※―

どこだかわからない暗い闇に包まれた場所。そこから二つの声の会話が聞こえる。
「首尾はどうだ」
「ああ、ばっちりだ。馬鹿な人間どもがアースガルドへ進行を開始した」
「そうか。クックックック。まあ、すぐに逃げ帰ることになるだろうがなぁ・・・・・・」
「人間は愚かで執念深い。いつかまた、進行を開始する」
「そうなれば、われらが完全に力を蓄えた頃には・・・・・・」
「クックックック。愚かにしろ、人間様々、だな」
そこに突然、「報告します」と別の声が入ってきたので、「んっ？なんだ？」と二つ目の影が答える。
「何者かが三名ほどこちらに近づいています。そのうち一人が、グリームヒルドです」
その報告を聞くと、闇の中にいる者の内の一人が溜め息をついた。
「ふう～、やれやれ。やっぱり、あいつは裏切ったな」
「ええ。あやつらの中では、ひときわ強く『人』としての心を残していましたから。だが、こちらとしては好都合だな」

闇の中にいる者たちは笑い、「期待しているぞ?ネクロよ」と言った。
「下手な期待はかけるなよ?デズモルート。もっとも、君は自分の持場を離れてこんな所に寄り道しているんだ。より成果を上げてもらわなければな?」
「・・・・・相変わらず嫌味な奴だ・・・・・・」

―※＊※―

グリームヒルド、ジークフリート、ブリュンヒルド、ディステリアの四人は、暗い夜道を歩いていた。昼間の時とは違い、ジークフリートは白金の鎧をまとっており、ブリュンヒルドは服の上に、淡い緑の鎧をまとっている。
「本当にこっちなの?」
途中、ブリュンヒルドが疑わしそうに尋ねると、グリームヒルドは彼女に細めた目を向ける。
「疑うのならついて来なくてもいいのよ。そうすれば、私はジークと二人きり」
一瞬、赤くなったグリームヒルドをブリュンヒルドは睨み付けた。
「わかったわよ。ついて行きますよ」
「(・・・・・俺、また空気)」
心の中で嘆くディステリアは三人に気にされない。夜道を歩いて行くと、やがて見た目が立派な建物が見えてきた。四人は、気付かれないように庭の草むらに入った。
「あの中に・・・・・」
その時、茂みに隠れたジークフリートが何かに気付き、
「――!?離れろ」
「わっ」

「きゃっ」
「どわっ！？」
静かに叫んだ直後、ブリュンヒルドとグリームヒルドが悲鳴を上げ、少し遅れたディステリアが突き飛ばされる。四人が離れると、そこに何かの攻撃が当たり爆発が起こった。
「ちっ、ネズミを仕留め損ねたか・・・・・・」
厚い鎧に身を包んだ男が呟いた。左手に付いているガトリングガンが鎧とギャップを持っている。
「なんだ、あいつは・・・・・・」
茂みの中から飛び退いたジークフリートが呟くと、離れた場所でブリュンヒルドが苦い表情をした。
「門番ってとこね」
「あいつが近くに居たことに気付くなんて、さっすがジーク」
ジークフリートを褒めるグリームヒルドは、ブリュンヒルドに抱えられていた。
「「あっ・・・・・・」」
二人は呟くが否やすぐに離れた。
「なんであんたがこっちに居るのよ」
「知らないわよ。あんたが勝手に抱えたんでしょ」
二人が言い争っていると、ガトリングガンを持ったさっきの鎧男が近づいてきた。
「ネズミ君、見ぃ～つけた」
鎧男の声を聞き、二人は「「げっ！！」」と叫んだ。鎧男が右手の剣を振り襲いかかってきた。とっさにブリュンヒルドはグリームヒルドを突き飛ばし、鎧男に剣を突き出す。剣と鎧が激しくぶつかり合うが、彼女の攻撃は全く手ごたえがなかった。
「ぜんぜん効いてない？」
「その程度か。ならこちらから行くぞ」
そう言うなり、鎧の男はガトリングガンを乱射した。ブリュンヒルドはそれをなんとかかわし、剣を構えて突進したが、それでも鎧男

にはなんのダメージも与えられなかった。その隙をついて鎧男が襲いかかろうとした瞬間、どこからか飛んできた石が鎧に当たり、カンッと音を立てる。石の飛んできたほうを向くとグリームヒルドが立っており、彼女は石を拾うとそれを鎧男に向かって投げつけた。

「ふん！お姫さまが石を投げるとは、な」

「それはもう、遠い昔の話よ」

せせら笑う鎧男にグリームヒルドはそう言い放って投げた石は、また鎧に当たった。その隙にブリュンヒルドは鎧男の首元に剣を突き刺した。

「グアッ！！」

今度は手ごたえがあったらしく鎧男は苦しそうに叫んで倒れ、その後、ブリュンヒルドはすぐにそこを離れた。

「やるじゃない。さっき借りはこれでなしよ」

ブリュンヒルドはフッと笑った後、「そういえば、ジークは？」と当たりを見渡した。

ガンッ！ガンッ！ガンッ！

その時、遠くのほうで金属音がした。どうやらジークフリートは他の鎧男と戦っているらしい。

「早く行かなきゃ・・・・・・」

「無駄なことはやめたほうが良い」

二人がそこへ向かおうとした瞬間、さっき倒したはずの鎧男が立ち上がった。再び身構える二人に、鎧男は甲冑を取った。その下には彼女にとって見覚えのある顔があった。

「・・・・・・！？・・・・・・グンナル！？」

その顔はブリュンヒルドのかつての夫（ただし、結婚に関しては陰謀あり）であったグンナル・ギービヒェ。だが、驚いているのはブリュンヒルドだけではなかった。

「・・・・・・・・・どうして？」

グリームヒルドもまた動揺していた。なぜなら、自分の息子であるはずの彼の声は、グリームヒルドの兄のグンテル・ギービヒェのものだった。

「どうしてあなたが、兄さまの声をしているの？」

「ああ、これね。彼の話によると復活の際に手違いがあったらしくてね。そのせいでグンナル・ギービヒェの体とグンテル・ギービヒェの声、あと二人の記憶を持つ全く新しい存在が生まれてしまったって訳」

グンナルの体とグンテルの声を持つその男がさらりと言った。

「なん・・・・・・ですって・・・・・・？」

驚きを隠せないブリュンヒルド。並みの存在が死者を復活させるなど不可能だからだ。だが、今目の前にいる存在は間違いなくかつての夫（しつこいようだが、結婚に関しては陰謀あり）だった。

「そんな訳で、私はグンナルでもグンテルでもない。だが、それでは呼ぶのに不便であろう。とりあえず私の名は、『グナテル』とでもして置きましょうか。ブリュンヒルドさん、グリームヒルドさん」

―※＊※―

一方、ジークフリートのほうも苦戦を強いられていた。

「くっ。しつこいぞ」

ジークフリートは厚い鎧を身にまとった男と戦っていた。その男とは、

「ハア～ッハッハッハッハッハ。俺はこの時をどれだけ待ちわびたか。ジークフリート！貴様の持つ〈ニーベルングンの指輪〉、渡してもらおうか！」

ジークフリートの命を奪った男、グドホルムだった。もっとも、彼は何か勘違いをしているようだった。

「あの時は貴様の反撃に合うと言う不覚を取ったが、今度はそうは行かん。俺はオーディンとかいう奴が従える、エインヘリヤルにも勝る力を手に入れた。今度は貴様が覚悟する番だ。英雄ジークフリート！」

両手の大剣を振り回すグドホルムに対し、グラムを持たないジークフリートには避けるしか手はなかった。何せ奴の持つ大剣にジークフリートは剣を折られたのだ。

「ハッハッハッハッハ！！避けてばかりでは倒せないぞ！！体力切れを狙っても無駄だ。我は疲れを知らぬ体に蘇らせてもらったのだからな」

「ジークフリート、ブリュンヒルド！！くそっ、どけ！ザコども！！」

ディステリアは周りを埋め尽くさんばかりの鎧男と交戦していた。グナテルやグドホルムと比べて地味な鎧をまとっている鎧と比べて簡素な造りだが、なぜか覚えがある。

「（この感触・・・・・・前に戦った、リビング・アーマーか！？）」

だが、確信はない。思い込みを抱き続けるのは、戦闘においても捜査においても危険、とクトゥリアからは言い続けられている。そうしている間にも、ディステリアはジークフリートたちからどんどん離されて行く。

「くっ、グラムさえあれば・・・・・・」

だんだんジークフリートの息が上がってきた。動きの鈍くなったジークフリートをグドホルムの一撃が襲う。なんとかかわしたが、これ以上は持たなかった。

「このままでは・・・・・・」

その時、辺りの雰囲気が変わる。体にまとわり付いた重みがなくなったような感覚も覚える。二人は一瞬驚いたが、グドホルムとグナテルの攻撃を弾くとすぐにその場から離れ構えた。ジークフリートとブリュンヒルドの二人からは、凄まじい闘気があふれ出していた。

「なんだ・・・・・・？」
グドホルムはジークフリートを、グナテルはブリュンヒルドを警戒する。今の二人はさっきまでの二人と違っていた。
「この感じ・・・・・・許可が下りたのね」
「よし、それなら――――！！」
二人が叫んだ途端、何かが開放されてその場の空気が変わった。二人の体から発せられたなんらかのエネルギーがグドホルムとグナテルの体を震わせた。
「この気は・・・・・・」
グナテルが呟いた瞬間、ブリュンヒルドが突っ込んできた。とっさにグナテルは剣を構えてブリュンヒルドの剣を受け止めたが、その時に走った衝撃に後退する。
「ぐっ・・・・・・」
持ち堪えようとするが、ブリュンヒルドが力を込めるとグナテルは後ろに飛ばされ、その衝撃で剣を折られてしまった。
「なっ、なんだとぉ！？」
グナテルはその状況を理解できなかった。今までは明らかに力はこちらのほうが上だったはず。しかし、それが一瞬で逆転した。
「貴様・・・・・・いったい何をした」
唸るように聞くグナテルに対し、ブリュンヒルドが静かに説明をする。
「私たちが現世に行く時、なぜかある程度の力が消失する。だから、戦闘時は専用の戦闘区域となる結界を展開する。そうすることで、私たちは現世戦う際、故郷である神界と同じ力を出すことができる」
「だが貴様らは最初からそうしなかった。なぜだ？」
そう聞かれると、ブリュンヒルドは少し照れくさそうに答えた。
「私は、前にヴァルキリーとしての決まりを破っているし、そんな私たちに結界展開の許可権が与えられるわけがない。何よりこれは判例が少なく実用性があるか見通しがたってない。だから私たちが特例として、任務を与えられると同時に実験台になったって訳」

「ふん、なるほどな」
「さて。納得して貰った所で、決着をつけるよ！」と、ブリュンヒルドは剣を構え直した。

―※＊※―

「・・・・・ということを申しておりますが、解説のスキールニルさん。ブリュンヒルドの言ったことは本当なんでしょうか？」
「なんで私が解説なんだ」
屋敷の近くにある小高い丘から、クトゥリアは双眼鏡を使って戦闘の様子を眺めていた。お遊びとしか言えない言葉に苦い顔をしたスキールニルの後ろには、器具に取り付けられた細長いひし形の結晶が浮いていた。
「・・・・・過去にヴァルキリーとしての決まりを破ったブリュンヒルドに、結界を展開する権限がないのは本当だ。決まりを破った者を人間界（ミッドガルド）に派遣するのも異例・・・・・」
「その結界をわざわざ、彼らがピンチの時まで張らなかったのはなぜですか？」
インタビュー口調のクトゥリアに、スキールニルはあからさまに嫌な顔をする。
「・・・・・・・・極秘事項だ」
「そんなこと言わずに。天界や神界の存在から見れば、人間界は魔法素（マナ）以外にも不純物が多すぎて本来の力が発揮できない、という説に関係あるのですか？」
わずかにスキールニルの眉が動く。小さく笑みを浮かべるクトゥリアにふざけている感じはなく、確信を得たような表情をしていた。
「・・・・・人間界（ミッドガルド）でそれに気付いている者はいないと思ったが・・・・・」

「なら、事実と考えて間違いないですね？」
「俺からは答えられない」
「どおおおおおおおおぉぉぉっっ！！」
かすかに聞こえる叫び声の後、耳を突かんばかりの轟音がして、屋敷のほうから煙が上がる。
「あ～、あ～。派手にやっちゃって・・・・・・」
「あれじゃ、敵を呼び寄せるだけだぞ。ザコとはいえ、侮れない奴もいる」
「だから、こうして監察してるのでしょ」
再び双眼鏡で覗き込むと、大量の兵士に、ディステリアが孤軍奮闘しているのを見つけた。
「ピンチになれば助けてもらえる、って甘えた感情を持たれては困る。かと言って引き渡す前に死ぬのはもっと困る。その見極めが大変なんだよ・・・・・・」
「無茶な教育法だ・・・・・・」
「当たり前だ。俺は教え子を持ったことは、あまりない」
断言するや、顔色を変えて立ち上がったクトゥリアに、スキールニルは少し驚く。
「どうした？」
「少しやばい奴が出てきた。奴と戦うにはまだ早い」
駆け出したクトゥリアを見送ったスキールニルだが、ここで敵に遭遇しても困るので、彼について行くことにした。

第１９話　屋敷での戦い

「!?なんだ・・・・・・」

急に変わった周りの感覚。急に増した技の威力。戸惑うディステリアに、周りを取り囲む兵士が跳びかかる。

「っ!!ライジング――――」

天魔剣を振りかけて思い留まる。孤立しているこの状況で、反動の強い技を使うわけには行かない。これも、クトゥリアから言い聞かされていた。

「スラストーム!!」

そういった時のために教えられていた魔術で兵士を迎え撃つ。付け焼刃に近いのでクトゥリアほどの威力はないが、反撃に向かうための隙を作る事はできる。

「はあっ!!」

兵士の腹の辺りに天魔剣を振り、両断する。重い手応えがあったため中身がからというわけではない。だが、斬られた兵士から流れたのは黒い液体で、血という訳ではなさそうだった。

「はあっ、はあっ、はあっ・・・・・・」

もっとも、ディステリアにそれを確かめる余裕はない。倒した兵士の鎧に足を取られないよう移動している。地面に転がっている鎧やその残骸は、彼に合わせて動いた残りの兵士に踏みつけられ原形を留めていない。

「（ずっとこうして戦っていても埒があかない。どうする・・・・・・）」

一か八かで大技を放って包囲に穴を開け、ジークフリートたちに合流するか。攻撃する場所を間違えれば失敗するし、何よりジークフリートたちからずいぶんと離されてしまった。

「（クトゥリアに増援を頼むか？・・・・・いや、あいつのことだ。『自分でなんとかしろ。これも修行だ』と取り合わない）」

もっとも、彼自身クトゥリアに助けを求めることは控えたかった。頭を振って、一瞬弱きになった自分を奮い立たせる。

「（だったら――）」

足元に転がる、先ほど自分が倒した兵士の鎧。それを、兵士の数が多そうな場所に蹴り飛ばす。一糸乱れぬ動きでかわされるが、それは狙い通りの行動だった。薄くなった包囲の壁に、天魔剣を振るって跳ぶ。

「フォーリング・アビス！！」

剣から放たれた黒い光が、闇の流星となって降り注ぐ。そこでディステリアは、技の選択を謝ったことに気付いた。闇の流星に押し潰された兵士は、抜けられるはずだった道を覆いつくした。

「（しまった――いや、問題ない！！）」

一瞬思った考えを修正し、ディステリアは倒れた兵士の上を駆ける。そこに後ろを取り囲んでいた兵士が跳びかかる。せっかく包囲を抜けたのに、また同じになることは避けたい。草が生えた地面の上に着地するや、その足を軸に自身を回し、魔力を溜めた天魔剣を振り上げた。

「どおおおおおおおぉぉぉっっ！！」

スラストームの感覚で、溜めた魔力を一斉解放。飛びかかった兵士を吹き飛ばした。余波で地面が吹き飛び、轟音と共に煙が昇る。

「はあっ・・・・・はあっ・・・・・・はあっ・・・・・・」

息を切らし、後ろによろめく。そこに、地上を駆けていた兵士が突っ込んでくる。

「ライジング・ルミナス！！」

とっさに天魔剣を振り下ろす。立ち上った光の柱が兵士を打ち上げ、

地面に落とす。煙が晴れた頃、あらかた片付いたので、ディステリアは大きく息をついた。それがこの戦いで、最初で最後の判断ミスとなった。

「・・・・・・ペースを考えてない戦い方だね」

「!?」

ドン!

呆れ、相手を見下した冷たい言葉の後、ディステリアの体を衝撃が襲った。

―※＊※―

急に変わった周りの感覚。急に力を増したブリュンヒルド。それらの理由がわかったグナテルは、笑みを浮かべる。

「どういうことか、よぉ～く、わかった。が、だからと言って、形勢が逆転した訳ではない!!」

すぐさま、左手のガトリング砲を撃った。だが、今のブリュンヒルドには弾丸の軌道が見えていたし、それを剣で叩き落すことも出来た。あっという間に弾丸を切り落とし、さらに一瞬でグナテルとの距離を詰め、左手のガトリング砲を切り落とした。

「ぐぅおっ!?」

切り落とすと同時にブリュンヒルドはその場を離れた。これでグナテルに武器はなくなり、さらにブリュンヒルドの腕についている弓から発射された矢を全て受けてしまい、膝を着いた。だが、圧倒的不利な状況に立たされているはずのグナテルは、なぜか笑っていた。

―※＊※―

「――招来！グラム！」

ジークフリートは叫び、折れた剣を天に向かって掲げた。すると剣は光を発し、形が変わった。その剣こそ、戦いにおいてのジークフリートの真の相棒。かつてオーディンが生み出し、ジグムンドが受け継いだが砕かれ、その息子のジークフリートが蘇らせたという聖剣バルムンク。またの名を〈斬鉄剣〉。

「それが、なんだと言うのだ！！」

それを知らないグドホルムは襲いかかってきたが、今度はジークフリートも向かって行く。

「だあああああぁぁぁぁぁっ！！！」

雄叫びを上げ、グラムを振り下ろした。剣同士がぶつかりあい、次の瞬間、ガラスが割れるような音と共にグドホルムの両手の大剣が、いとも簡単に砕かれた。まともにグラムを受けたのだから、当然といえば当然だった。

「ぐおおおぉぉぉぉっ！おっ、おのれえぇぇぇぇぇぇ！」

「たあっ！」

叫び声を上げて再び突進してきた。今の彼の鎧はそれ自体も武器になるが、グラムの前では無意味で、いとも簡単に鎧を切り裂かれ、グドホルムが転げまわった。

「ぐっ、ぐあああぁぁぁぁぁ」

「お前の負けだ。グドホルム」

「ぐっ、おのれ～」

転げまわるグドホルムに剣を向け、ジークフリートは言った。グドホルムが唸っていると、どこからか声がした。

「――無様ですね。あれだけ見栄を張っといてこの様とは・・・・・」

ジークフリートは周りを見渡す。その後、爆音が響くと共に、吹き

飛ばされたディステリアが地面を転がった。一瞬そちらを向いたジークフリートは、グドホルムの後ろに現れた謎の男に振り返った。その男は、黒いマントを見に付けて体を隠し、紫色のレンズのサングラスをした青年だった。

「ほんと、無様だね。せっかく僕があんたのリクエスト通りの体を与えてやったと言うのに」

「何!?じゃあ、貴様が・・・・・・!!」

叫ぶジークフリートに、青年は涼しい顔をしていた。

「ええ、そうですよ。僕が彼を蘇らせたんです。もう一人蘇らせた人がそっちにいますけど」

「!!」と、青年が指差した所を見ると、そこにはブリュンヒルドとグリームヒルド、さらにグンナルがいた。

「なぜ、こんなことをするんだ。死者を蘇らせるなど、自然の法則に逆らった行為・・・・・・」

再び青年のほうを向き、叫ぶジークフリートに青年は何食わぬ顔で答えた。

「自然に逆らう?はっは、な~にを言うかと思えば。なら貴様はどうなのだ?オーディンの血を引く英雄、ジークフリート。あなたも一度は死んでいる身。なのに、なぜ現世であるこの世界におられるのだ?」

「!!・・・・・それは・・・・・・」

痛いところを突かれ、沈黙するジークフリート。そんな彼を見て、青年は「所詮、世の中なんてそんなものですよ」と嘲笑した。

「それに、あなたが彼をここに連れてきてるとは思いもよりませんでしたよ。クトゥリアさん」

眉を寄せてネクロが声を上げると、隠れていたクトゥリアがディステリアの前に現れる。

「・・・・・クトゥリア。知ってるのか、そいつのこと・・・・・・」

黙っていて答えないクトゥリアに、ネクロも眉を寄せている。だが、

目を伏せると、眉間に指を当てる。
「ふう～。少し悔しいですが、グドホルムさん、グナテルさん。退散します。ここを放棄してね」
「・・・・・わかった。ネクロ」
グナテルが答えると、ネクロと呼ばれた青年は満足そうな顔をした。
「なっ、退散だと。バカ言うな。こいつらをみすみす見逃すのかよ」
倒れたグドホルムが文句を言って起き上がろうとしたが、ネクロに頭を踏まれた。
「うるさいなぁ～。みすみす見逃すとか言うけど、その見逃す相手にここまでやられたのは、誰かなあ～？」
そう言われ、グドホルムは「ぐっ」と黙り込んだ。
「ジークフリートさん、ブリュンヒルドさん。それに・・・・・・・裏切り者のグリームヒルドに、そこに隠れている誰かさん。今回は我々の負けです。でも、完全に・・・・・・ではないですよ。我々の目的はあくまで時間稼ぎとそれを阻害する者の排除、ですから」
「目的は達成された・・・・・と言うことか」
「半分は・・・・・ね」と笑うネクロに、ジークフリートたちの顔が強張る。
「いいことを教えてやるよ。人間たちにアースガルドの存在を教えたのは、この僕さ。そして、軍上層部の別荘地の確保と称して軍を出動させたのも、この僕さ。つまり、君たちが探していた相手は、僕だったと言う訳さ」
勝ち誇ったように言うネクロ。こちらが求めていた情報を思いもよらない場所、それも敵から入手したことに疑問を感じたジークフリートは、裏があると考えずに入られなかった。
「なぜ、そんなことを教える？」
思わず聞いたジークフリートに、ネクロは「クックック」と不気味に笑った。
「さあね・・・・・いや、これは宣戦布告とでもいたしましょうか。我ら〈デモス・ゼルガンク〉は君たち、いや、この世界に存在

する全ての神々、幻獣どもに宣戦を布告する！」
その途端、ネクロとグナテル、そして足蹴にされているグドホルムの周りの土煙が立ち、三人は姿を消した。
「！？・・・・・・待てっ！」
だが叫んだ時には、もうそこには誰もいなかった。「くそうっ」とジークフリートは悔しそうに言った。
「ネクロ、それに〈デモス・ゼルガンク〉。それが・・・・・・・この事態の黒幕・・・・・・」
「どうやら、そうらしいな。まったく・・・・・・神々に宣戦布告するなんてなんていう奴らだ」
「どわっ、いつの間に！！」
突然、現れたスキールニルに、二人が驚いた後、ブリュンヒルドはグリームヒルドのほうを向いて聞いた。
「あなたもあのネクロという奴に蘇らされた。でもどういうつもりか、奴らを裏切った。なぜ？」
スキールニルの問いにしばらく黙っていたが、やがて理由を話し始めた。
「奴らには何か別の目的があって、私たちはその目的のために蘇らされた。でも私は、そいつらに利用されるのは嫌だったの。もう、あんな思いをするのも、誰かにあんな思いをさせるのも・・・・・・嫌・・・・・・だから・・・・・・」
その言葉に、三人は黙り込んだ。だが、しばらくしてスキールニルが口を開いた。
「では、一度アースガルドへ戻ろう。このことを早くオーディンさまに報告しなくてはいけない。それに、彼女のこともあるしな」
ジークフリートが驚いて、「彼女を・・・・・・アースガルドへ連れて行くのか？」と聞いた。
「ああ。彼女をこのままここにおいて行けば、確実に始末される。そうすれば、奴らは再び彼女を蘇らせることが出来る。今度は絶対に裏切らない、忠実な下僕として」

その言葉を聞いて、ジークフリート、ブリュンヒルドは何か恐ろしいものを感じた。
「いいの？そんなに簡単にあたしを信用して」
突然、グリームヒルドが聞いてきた。
「私はあいつらのスパイかもしれないのよ。あいつらを裏切ったのも、あなたたちにここを教えたのも、お兄さまたちに攻撃されたのも全てお芝居だった。そうは考えないの？」
しかしスキールニルは、「その時がくれば、それ相応の対応をすればいい」と言っただけだった。
「珍しいですね。スキールニルがそんなことを言うなんて」
「スキールニルさんって、そんな方でしたっけ？」
「もしかして、惚れちゃったとか？」
こっそりブリュンヒルドがスキールニルに耳打ちをした。
「バカ言うな。それ、アースガルドに戻って、オーディンさまに報告だ」
少し顔を赤くして、スキールニルは歩き出した。

―※＊※―

その頃。アースガルドでは、オーディンたちアース親族と人間の軍隊の戦いが大詰めを迎えていた。
「グングニル！！！」
オーディンの必殺の神槍の一撃は戦車や装甲車を外れたが、その爆風は武器を壊し、敵を無力化にするには十分だった。他のヴァルキリーたちやエインヘリヤルたちも、武器を破壊するだけにとどまった。武器を壊された人間は我先にと逃げ帰った。
「この程度でアースガルドを落とせるとは甘く見られたものだな」
「全くだ」と、バルドルやトールを初めとしたアースガルドの神々

は、口々にそう言った。神々にとって、人間たちの武器だけを破壊するのが簡単なことで、たとえ彼らが不死ではないとしても、人間たちの使う武器は神々の命を奪うには威力が足りない物ばかりだった。

「それにしても、ジークフリートとブリュンヒルドはまだか？」

痺れが切れたような顔のトールに、フレイが答える。

「先ほど、スキールニルからこちらに向かっているという連絡が入った」

「そうか」

オーディンの顔を、「オーディンさま？」とフレイアが覗き込む。

オーディンは何かを考えていた。

「（間違いない。この戦い、何者かに仕組まれたものだな）」

そういう考えが、予感のようにオーディンの頭をよぎっていた。

―※＊※―

同じ頃、別の場所では。背中にパラボラアンテナのようなものを背負った伝令係の兵が、八人の影が囲むテーブルの前に片膝を着いた。

「報告します。先ほど、人間どもの軍隊が逃げ帰ったとのことです」

「思ったより早かったな」

暗い部屋の中、丸いテーブルを囲んで座っている八人の影の内、一人が喋った。

「ふむ。それで、死傷者の数は？」

先程とは別の影が喋ると、「はい」と兵士が答える。

「――人間側の怪我人は部隊の８９％になりますが、死亡者はいません。あと、報告するまでもないとは思いますが、アースガルド側の死傷者数は０人です」

「フッ。さすがだな。これでは我が軍の『怨霊兵』の徴集ができま

せん」
「感心している場合ではあるまい。これで世界各地での裏工作の内、二つの地域での活動の意味がなくなった」
さらに別の二つの影が喋ると、最初の喋った影が口を開く。
「ならば、あそこに期待しますよ。あそこの人間は、最も愚かしい。ほとんどの実力者が、自分こそが国を治めるのにふさわしいと思い、争いを繰り返し行っている、あの国に」
「その国の名は？」
三番目の影が聞くと、「シャニアク」と最初の影が明かした。

第１９話　屋敷での戦い（後書き）

神話での存在が思うように力を発揮できない理由が思いつかない。

最初は、『人間界で圧倒的な力を発揮して目立たないためにあえて封じる』

次は、『強い力の余波で、人間世界に悪影響を与えないため力を封じる』

結局は、『人間界は神界や天界と比べてマナ以外の不純物が多くて、うまくマナを取り込めず力を発揮できない』に落ち着きましたが変更があるかもしれません。

ちなみに不純物とは、人間が生活の中で出した汚染物質とか物質的なものではなく、恨みの念、負の感情とか思念のようなもの。

第２０話　ジークフリートとブリュンヒルドとグリームヒルド（前書き）

これといった題名が思いつかず、ありきたりになってしまいましたね。

第２０話　ジークフリートとブリュンヒルドとグリームヒルド

偶然にもあの屋敷は、かつてグリームヒルドたちが住居として使っていた屋敷で、ニーベルンゲンの指輪を巡る争いの中で炎に包まれ焼け落ちていたのをネクロが修復し、前線基地として使っていた。ネクロ本人にはそこをさまようグドホルムたちの霊を呼び寄せる目的があったにしろ、ジークフリートにとっても、ブリュンヒルドにとっても、グリームヒルドにとっても長くは居たくない場所だった。その翌日。オーディンへの報告も兼ねて、一行はビフレストへ足を運ぼうとしていた。

―※＊※―

その途中、ジークフリート一行は、近くの山道で休憩をしていた。

「はい、ジークフリート」

「ああ、ありがとう。ブリュンヒルド」

水筒を受け取ったジークフリートがブリュンヒルドにお礼を言うと、彼女の頬が赤くなった。

「相変わらず、歯が浮くほどに仲がいい・・・・・・」

その様子を、離れた所でスキールニルと、新しく一行に加わることになったグリームヒルドが見ていた。ディステリアは近くの岩場で、クトゥリアに剣術の型を見てもらっている。

「あの二人・・・・・前からああなのですか・・・・・・？」
「ん？まあな。ヴァルハラに転生してからは、ほぼ毎日ああしてくっ付いている。訓練の休憩時間なんて、どちらかが必ず向こうに様子を見に行くんだ。こういうカップルはヴァルハラでは少ないから、結構、有名だよ」
「そ・・・・・そう・・・・・・」
胸を押えたグリームヒルドは、自分が嫉妬感に駆られていると悟る。かつて自分のために、魔法の薬で記憶を奪いジークフリートを夫にした。その時は彼と一緒にいることが幸せであったと同時に、英雄に妻として選ばれた満足感があった。だが、記憶を奪われたジークフリートはどうだったのだろう。自分といる時、心から笑ってくれた時があっただろうか。
ブリュンヒルドと共に笑っているジークフリートを見て、当時は考えもしなかったことを考えていた。
「過去にしでかしたことに、自責の念を感じているのか？」
スキールニルの指摘に黙って頷く。
「異国では、死者の魂が別の存在に転生した時は、現世の記憶は失われるとされている。だがエインヘリヤルは多くの場合、地上で戦士として戦っていた時の記憶を留めている」
ジークフリートとブリュンヒルドのほうを見て、スキールニルは話を続ける。
「ジークフリートも例外ではない。それに、彼はオーディンさまの血を引いておられる。何かしらの要素で、記憶が強く残っていても、なんの不思議ではない」
その話に、黙り込むグリームヒルド。
「（だったら、私が許されなくても、文句は言えないよね・・・・・・）」
「だが、多くのエインヘリヤルは、そんなのはあまり気にしてはいない」
グリームヒルドは「えっ？」とスキールニルを見上げた。

「エインヘリヤルは戦場で散った魂からなる兵士だ。戦場で散るんだから相手を恨んでいるだろうし、自分も敵から恨みを買っている。だが、エインヘリヤルとなった以上は、仲間同士なのだからそういった恨みは捨ててもらわなければ困る」

再びジークフリートとブリュンヒルドのほうを見ると、二人は何やら言い合っている。

「それをわかっているのかいないのかはわからないが、あいつも現世で自分に起こったことについては、恨み言を言ってないよ」

それでも、グリームヒルドは不安だった。いくら現世で起きたことの恨みは忘れると言っても、自分は彼を最愛の人から引き離した悪女と呼ばれても仕方ない存在。それはジークフリートだけでなくブリュンヒルドに対しても言えることで、今の時代で再会した当初の反応も当たり前のことだった。さらに自分は、世界を脅かす者の手駒として再び生を受けた存在。彼女の脳裏に、その時のことが蘇る。

―回想―

薄暗い地下室の中。ぼやけた視界に入ってきたのは、緑のような不気味な光を放つ魔方陣と、その上にある裸の下半身。目が覚めたばかりのようにぼやけた頭で、少しずつ周りを確かめていく。魔法陣の横に等間隔に置かれた、緑色の液体が入った巨大なカプセル。それと魔方陣を繋ぐ太いコード。その向こう側で聞こえる声。

「あんたが、俺たちを蘇らせたのか？」

グドホルムの問いに、「ああ、そうだよ」とネクロが答える。

「なんのためにだ？」

「あんたらに、俺たちの計画を手伝う兵士になって欲しくてね」

「兵士だ～？まあ、この体を手に入れる交換条件だったから、別にいいけど。だが、いいのか？もし俺たちに良心が目覚めて、あんたらを裏切ることになったら・・・・・」

「その心配はないよ。魂は、冥府でしかるべき手順を踏んでから転生しないと、精神（こころ）の善悪はリセットされない。その前に現世に呼び戻した魂の善悪は生前のまま。だから、君らが裏切る可能性は万に一つもないし、何より君たちが選ばれた理由はそれだからね」
「俺たちは『悪党』だと言いたいのか？」
「いや、違うよ。善にしろ、悪にしろ、君たちは困っているこちらの条件を飲んでくれた、いわば『親切』な人だよ。現世に蘇らせてそちらの望みをかなえるのに協力する。その代わり・・・・・・」
「そちら側にも協力しろ、か」
「だがもし、俺たちの望みがあんたらにとって邪魔なものだったら・・・・・どうするのだ？」
別のほうから別の男性の声がすると、ネクロとグドホルムはそちらに目を向ける。
「おお、グンテルか。お前も蘇らせてもらったのか？」
「いや、体のほうは今からだ。それより、グリームヒルドは蘇ったようだ」
声の主たちが自分のほうを向くと同時に、少しずつ戻ってきた感覚が、自分の足元を満たしている緑色の液体の存在を教えた。緑色だったのは魔方陣の光ではなく、液体のほうだった。
「よう、母上。お久しぶりですな」
「（母・・・・・・上・・・・・・？）」
グリームヒルドのぼんやりした頭の中で、その言葉が反復される。
「おやおや、まだ意識は完全にはハッキリしていないようですね。まあ、しばらくすると完全に覚醒するでしょう」
そう言うとネクロは、近くにあった毛布でグリームヒルドの体を包み、液体から引き上げた。不思議なことにその液体は毛布には染み込まず、さらに引き上げられた彼女の足に付くことも、滴り落ちることもなかった。
「それにしても奇麗になって蘇ったじゃないか。若返ったのか？」
意気揚々のグドホルムを無視して、ネクロは浮かない表情をしてい

た。
「（あの時グンテルは、母親であるはずのグリームヒルドを呼び捨てにした。まさか・・・・・・いや、まさかな。私の理論に間違いはない）」
白い毛布がかけられたベッドの上にグリームヒルドを寝かせ、布団を被せた。
「（それにこの娘は・・・・・・いや・・・・・・まあ、良かろう・・・・・・）」
眼鏡を指で押し上げ、後ろを振り返ると、ネクロは部屋を後にした。

―回想終わり―

「（あいつに無理やり現世に呼び戻された私は、いわば『悪女』のまま。またあの時と同じことを繰り返してしまうかもしれない・・・・・・そうなっても・・・・・・あなたは私を許せるの・・・・・・？）」
心痛な表情でジークフリートのほうを向いた時、「あ～っ、もう。頭にきた」と、怒り心頭のブリュンヒルドが前を通り過ぎた。唖然とするスキールニルと共に、その後ろ姿を見送る。
「何かあったの・・・・・・？」
スキールニルは訳もわからないという表情で、「さあ」と肩をすくめた。ジークフリートは膨れっ面で自分の足に肘を立てており、機嫌が悪いことを物語っていた。
「ちょっと、あいつのことを頼むわ」
「ちょ・・・・・・ちょっと」
グリームヒルドの制止も聞かずに、スキールニルはさっさと行ってしまった。その場に残されたのはグリームヒルドとジークフリートの二人だけで、距離はあるとはいえ、その場に二人きりだった。
「（ど・・・・・・どうしよう・・・・・・）」

過去の出来事の罪悪感と、ジークフリートと二人きりという恥ずかしさに、彼女の顔が赤くなってきた。
「（こういう時は・・・・・・とりあえず話しかけて・・・・・・いや、でも・・・・・・剣で斬り付けられたらどうしよう・・・・・・）」
「おい・・・・・・」
「・・・・・・でも、放って置けないし・・・・・・ああ、でも・・・・・」
「お～い・・・・・・」
「・・・・・・でも放っておけない・・・・・・でも斬りつけられるかも・・・・・・でも・・・・・・」
「おい！！」
「わひゃあっ！？！？」と驚いて声のほうを向くと、目の前にジークフリートが立っていた。
「さっきから何、ぶつくさ言って・・・・・・」
「わ～っ！！わ～っ！！わ～～っ！？！？」
突然、大声で騒ぎ出すグリームヒルドに、ジークフリートは片耳を抑えた。
「あ・・・・・・わ・・・・・・わわ・・・・・・ジーク・・・・・・いつからそこに・・・・・・？」
「お前が『こういう時はとりあえず話しかけて』って、言っている所から」
「えええっ！？声に出てたの！？」
「ああ、全部しっかりと。行って置くが俺は、機嫌が悪いと言うだけで、話しかけて来た奴を斬りはしない」
だがそれは彼女に聞こえず、グリームヒルドは真っ赤にした頬を両手で覆って、反対側を向いた。
「ううううっ・・・・・・なんだか恥ずかしい・・・・・・」
「お～い。聞こえてるぞ～」と呆れたような声に、驚いたグリームヒルドは弾かれたように振り向く。

「記憶を消す薬を盛られた後のことはあんまり覚えていないけど・・・・お前って、思ったことは口で呟くタイプだったっけ？」
「えっ・・・・・・あっ・・・・・・その・・・・・・」
とは言ったものの、グリームヒルドは結局、黙り込んでしまった。
その様子を見て、ジークフリートも溜め息をつく。
「・・・・・・まるで、年端も行かない幼い少女、の反応だな・・・・・・」
その言葉に体が震え、顔が真っ赤になる。
「俺は嫌いじゃないぜ。そういうの・・・・・・」
優しい声で話しかけた後、彼女を抱き寄せるジークフリート。
「だ・・・・・・だめだよ・・・・・・ジーク。だって私は・・・・・・」
「スキールニルが言っていただろ？俺たちは、現世での出来事をいつまでも気にしちゃいられないんだ」
顔を近付けるジークフリートに、「だ・・・・・・だめだってば・・・・・・ジーク・・・・・・」と上目遣いで、ねだるような声で言う。彼に引き寄せられるグリームヒルド。ところが。
「――お～い、一人で何盛り上がってんだ～」
またもした呆れた声で、グリームヒルドはハッと我に返った。実際、ジークフリートはグリームヒルドを抱き寄せてはおらず、顔を真っ赤にして妄想するグリームヒルドを呆れ顔で見ていた。
「全く、人を捕まえていろいろ勝手な考えしてくれて。あいつと同じだな・・・・・・」
首を傾けて「ん・・・・・・あいつ？」と聞く。
「ブリュンヒルドだよ。あいつ、俺がお前のことをいろいろ気にかけるから、またお前との間になにかあるんじゃないかって疑ってるんだよ・・・・・・」
「えっ・・・・・・」とグリームヒルドが呟く。

―※＊※―

「そうなのよ～。ジークフリートったら今朝からずっと、グリームヒルドのことを気にしてるのよ」

崖の近くにある森の入り口。ブリュンヒルドから話を聞いたスキールニルと、合流したディステリアとクトゥリアは困り顔をしていた。

「さっきそのことを聞いたら、『別に、お前の気のせいだろ』だって。信じられる!?」

詰め寄られたスキールニルが、「え・・・・・・まあ・・・・・・」と崖のほうを向いて気まずい表情をする。

「そりゃ～、確かにあいつとジークフリートは夫婦になったし、子供も生まれたけど・・・・・・それはジークフリートが薬を飲まされていたせいで、本心じゃない訳だし・・・・・・それに・・・・・・ヴァルハラで『たとえ薬を飲まされても、二度と私を裏切らない』って言ってくれた・・・・・・でも・・・・・・」

「どうしても疑っちゃうんだ。難儀な話だな・・・・・・」

「ははは・・・・・・」とディステリアが苦笑いすると、クトゥリアは彼の足を踏んだ。

「・・・・・・何をする」

「お前に他人の恋愛事情がわかるのか?」

「大変だということはわかるぞ」

ディステリアの回答に、「ダメだ、こりゃ」とクトゥリアは溜め息をついた。

「あ～っ、他人事だと思って～」

引きつった顔で笑っていたスキールニルに、ブリュンヒルドが怒鳴る。

「他人事だと思ってないよ。俺も昔、恋愛関係でえらい目にあった時があったから・・・・・・」

「あっ・・・・・・」

それを聞き、微妙な表情をするブリュンヒルドと、訳を知らず目を丸くするディステリア。「（それにしても・・・・・・他のヴァルキリーたちの報告によれば、ジークフリートに記憶を消す薬を飲ませたのは確かにグリームヒルドだが、彼と結婚し子供を授かったのは・・・・・・）」

頭に引っかかったことを考えるクトゥリアをよそに、ブリュンヒルドはイライラを募らせていた。

「時に、お前らはこれからどうするのだ？」

スキールニルに話しかけられ、クトゥリアは思考を中断させる。

「結局、我々の戦いに巻き込んで、お前らは自分らの目的を達成できなかっただろう？」

「いや、できたさ。半分は、ね」

笑みを返したクトゥリアに、イライラが吹っ飛んだブリュンヒルドは眉を動かす。

「（今の言い回しって・・・・・・）」

そんな彼女の視線を気にせず、クトゥリアとスキールニルは話しを続ける。

「そうだな・・・・・・このまま隣の国に入ろうと思う。あんたらは、このまま帰るのか？」

「いや。提示報告を済ませたら、また移動するつもりだ。あのネクロという奴のことは、すぐにでも報せないと」

「・・・・・・だよ、な」

視線を逸らしたクトゥリアが肩を落とすと、ストローで水筒の水を飲んでいるディステリアが歩いてくる。

「じゃあ、ここでお別れか？」

「そうだな。残念だ、お前に借りを返せなくて・・・・・・」

「俺は、何か借りた覚えはないぞ？」

「君じゃない。そっちの男に、だ」

スキールニルが目を向けたのがクトゥリアだったので、ディステリアは怪訝そうな表情をする。

「・・・・・・・・・何したの？」
「内緒だ。それより・・・・・・」
眉を寄せてディステリアに近づくと、クトゥリアは水筒を持っている右手を掴むなり自分のほうに引く。支えを失った水筒を、慌てて左腕で掴む。
「何するんだ！！」
「・・・・・・お前、しばらく天魔剣を使った技、禁止な」
「はあっ！？」
間抜けな声を上げたディステリアに右手からグローブを剥がす。彼の右手は、グローブを着けていたにも拘らず焼けただれていた。
「・・・・・・放つ時に剣自体が発熱するのかと思って着けさせてみたが、効果はなかったようだな」
「こいつの耐熱温度が低いんじゃないのか・・・・・・・？」
「それはないだろう。グローブは無傷だ」
そう言って見せたグローブは、使い込んでいるため傷みはあったが、焼けたとかいう感じはなかった。
「アウグスに診てもらえば、原因もわかるかもしれない。それまでは使用禁止だ」
「待て！」とディステリアはクトゥリアの手を払う。
「だったら、俺はしばらく素手で戦うのか！？盗賊とかクルキドとか、あのネクラとかいう奴と！！」
「ネクロだ。戦闘のこと以外だと、案外物覚えが悪いな。お前・・・・・」
わかってたことだが、と呆れた視線で付け加えられたので「うるせぇ！！」と顔を逸らした。
「武器は俺の持ってる物を使え。確か、まだあったはずだ」
そう言って背負っていたリュックを開けると、中をごそごそと漁り始める。しばらく見ていたディステリアとスキールニルだが、ある違和感に気付く。
「（あれ？こいつ・・・・・・）」

「（リュックなんて背負っていたか？）」
二人が不審そうに眉をひそめた時、「ああ、あった」と刀身のない剣を取り出す。
「・・・・・・と思ったら、魔力で刃を作るタイプか。これは早い・・・・・・」
脇に放るとまた漁り始める。リュックに手を入れた男性が、
「あれでもない・・・・・・これでもない・・・・・・」
と中を漁っては取り出したものを捨てるさまは、どこか呆れさせる。
「あった。結局これしかないか」
そう言ってクトゥリアが取り出したのは、どこにでもある普通の剣。
「ブロードソードだと！？初心者用の剣じゃないか！！」
「その認識には、少しばかり語弊がある。こいつだって立派な剣だ」
続いて鞘も取り出し、納めたブロードソードをディステリアに押し付ける。
「・・・・・・死んだら化けて出ますよ」
「責任転嫁か？情けないね～～」
呆れた笑みを浮かべるクトゥリアに恨みのこもった視線を向けるが、使用禁止を言い渡された以上ただのブロードソードでもなんでも使うしかなかった。

ちなみに、「天魔剣を所持してるのは俺じゃねぇか」と魔物との戦闘時に取り出したら、あっという間にクトゥリアの取り上げられたのは別の話。

第２０話　ジークフリートとブリュンヒルドとグリームヒルド（後書き）

劇中でスキールニルが言ってたことについて
彼の主君であるフレイが、一目ぼれをした巨人族の女性ゲルドに、
自分の武器である勝利の剣（ウィニング・ソード）を貢ぎ物として送ったのは有名な話で、
スキールニルはその時に剣を届ける役目を与えられた。
原作で言及はされてないが、この物語では、その道中にとんでもなくえらい目にあったらしく、この話はヴァルハラでも有名な話になると同時に彼のトラウマになった。それ以来、彼は『恋愛』という言葉に反射的に恐怖を表す反応を起こすとか、起こさないとか。

原作を基にした独自設定です。間に受けないように。

第２１話　闇を駆ける騎士（前書き）

舞台が変わります。

第２１話　闇を駆ける騎士

ジークフリートたちがいる国の南・・・・・・隣国にあたる国、ファンラス。遥か昔より貴族が栄え、その貴族たちが中心となって動かす国を、貴族たちは『太陽の国』と呼んだ。しかし、その裏では、貴族以外の貧しい生まれの人間たちが奴隷として売買され、また多くの者たちが、政治的に強い力を持つ教会により、魔女や異端者の汚名を着せられ、〈神〉の名の元に処刑されていた。そのため、貴族以外の者からは恐れを込めて〈恐会〉と呼ばれていた。他国からはこのような処刑制度は取りやめるようにと幾度となく通達が来るが、この国の中にそれを聞き届ける貴族はいなかった。ごく、一部を除いて。

―※＊※―

首都パラーナから南に行った所にあるパラーナ盆地。近くに教会が建っているこの盆地では、異端審問官とそれに仕える教会騎士により、異端の汚名を着せられた者が処刑されていた。今、この時も魔女のこの汚名を着せられた小さな女の子が処刑されようとしている。この少女は、教会に意を唱え、異端者の汚名を着せられ処刑された一家の一人息子の友達で、教会や教会騎士の悪口を言ったため、魔

女の汚名を着せられた。話を聞いた家族はすぐ逃げ出そうとしたが、その矢先、娘である少女が捕まってしまった。

「忌まわしき魔女よ。神の名の下に浄化され、天に召されよ」

執行官が「始めろ」と合図を受け、少女の下に組まれた木に火のついた松明を近づける。その時、後ろからざわめきが起きた。

「ちっ、何を騒いで・・・・・・」

後ろを向いた審問官も、目を見開いた。黒く焦げた十字の木の上に、丈の長いマントと目の部分のみを隠す仮面を身に付け、つばの広い西洋風の帽子を被り、腰にサーベルを差した男が立っていた。

「で・・・・・出たな!!異端の騎士!!」

すぐさま教会騎士たちは、その騎士が乗っている木を取り囲んだ。

「道化騎士(ロリス・リッター)、騎士の名を汚す異端者!今日こそ貴様を捕らえる。かかれ!!」

号令と共に、〈恐会〉の教会騎士たちが一斉に先端のわかれたモリのような物を突き出すが、道化騎士はマントをひるがえして空中で回転すると、張付けにされている少女のほうに向かう。着地と同時に少女の手足を縛っている縄を切ると、解放されて下に落ちる少女の体を受け止めた。

「し・・・・・しまった」

その瞬間、道化騎士(ロリス・リッター)と教会騎士たちの間に煙がわきあがり、それが晴れた頃には道化騎士(ロリス・リッター)の姿も消えていた。

「くそっ、いつの間に。探せ!」

叫ぶと同時に教会騎士たちは、散り散りになって道化騎士(ロリス・リッター)と処刑しようとした少女の行方を捜した。

―※＊※―

盆地と首都の間にある森の入り口。そこに広いマントをまとった男が歩いて来る。森の入り口で止まると、草むらの中から男性が出てきて、その後ろから女性が出てきた。

「お待たせしました。この子で間違いありませんね？」

そう言って、マントに隠していた少女を見せる。女性は「ああ」と言って駆け出し、少女を抱きかかえた。

「ああ、娘です。ありがとうございます。これは、お礼です」

そう言って、男性は金貨の入った袋を差し出したが、道化騎士はそれを押し返した。

「私は金品を得るために、動いているのではありません。ただ、このような非道が許せないのです」

納得せずに、「し・・・・・しかし・・・・・・・」と言う男性を制して、さらに続ける。

「港に船を用意しています。そこにいるパラケルというニット帽を被った男性に、あなた方を船に乗せるように伝えています。さあ、教会の騎士たちに見つかる前に、急いでここを・・・・・・」

「わかりました。ありがとうございました」

ひたすら頭を下げてお礼を言う二人を見送ると、道化騎士（ロリス・リッター）はそこを後にした。

―※＊※―

パラーナとパラーナ盆地のほぼ中間にある小さな町。レンガ造りの貴族の家とは違い、このあたりの家は木と壁の家が多かった。その内の一軒に、先ほどの道化騎士が入って行った。部屋の中に入りドアを閉めると、騎士は「ふう～っ」と溜め息をつき、歩きながら仮面を外して机の上に置いた。下から現れたのは、群青の瞳をした青年の顔だった。

「なぜ、教会は・・・・・・あんな残酷なことができるんだ・・・・・」

先ほど親子と会った時とは違う、力のない声で呟いた後、マントをトランクの中にしまいベッドの下の隠し部屋に隠した。再び溜め息をつくとベッドに腰掛け、そのまま倒れて眠りについた。

―※＊※―

「お父さん！お母さん！嫌だあああああああっ！！！」

森の中。マントをまとった男に抱えられた少年が、泣き叫んでいた。

「ダメだ！もう・・・・・・手遅れだ・・・・・・・」

二人の遥か後ろ。森の外では、異端者の処刑が行われていた。炎はいくつもあり、それぞれ人を焼いていた。この二人はパラーナの有力貴族だったが、不公平な裁判で処刑を行なう異端者狩りを行なう〈恐会〉を非難したため、使用人共々、魔女の協力者という汚名を着せられ、火刑に処された。残酷なことに〈恐会〉側は、幼い少年を張付けにしている十字架を、家族や使用人を張付けにした十字架が全て見える位置に配置し、次々と火を放った。

「こんなこと、残酷では・・・・・・」

「黙っていろ。教会騎士長に聞こえれば、おまえも異端者だ」

少年以外が全て火をつけられ、残りは少年となった時、審問官たちの間にざわめきが生まれた。

「な・・・・・なんだ！？」

ざわめきのほうを向いた時、審問官の顔面に鉄拳が直撃した。体が宙に浮き、地面に倒れた審問官に教会騎士たちが駆け寄っている間に、その何者かは少年が張付けにされている十字架に駆け寄り、縛り付けている縄を切った。

「なっ、いつの間に！？」

気付いた教会騎士たちが飛びかかろうとした時、その男は騎士たちの上を飛び越える大ジャンプを見せ、森の中に入って行った。
「くそっ、追え、追えええっ！！」
そして、今に至る。しばらく森を駆け抜けた後、少年は休憩のために下ろされた。
「なんで、だよ・・・・・・」
呟いた少年を男性が見る。
「なんで、もっと早く来てくれなかったんだよ！そしたら、お父さんもお母さんも使用人のみんなも、死なずにすんだのに！！」
男性は、「すまない」としか言えなかった。
「なんでだ！あんた、無実の人を助けてくれるんじゃないのかよ！！」
大声を出して、少年が立ち上がる。
「本当にすまない。言い訳にしか聞こえないかもしれないが、私は神じゃないんだ。救える者もいれば、救えない者もいる。それが、私の力の底だ」
「っ・・・・・なんだよ・・・・・・それ・・・・・・じゃあ、救われなかった人は・・・・・・」
「私の力が及ばなかった。それだけだ。『大』か『少』。どちらかを救うためにはどちらかを犠牲にしなければならない。誰かを救いたいと思う者に必ず立ちはだかる、この世界のジレンマだ」
「・・・・・・神様って・・・・・・いるのかよ」
「確かに神様はいる。けど、この世界に対しては無関心だ。いや、無関心でなきゃ、いけないんだ・・・・・・でなければ、神が世界に混乱をもたらす存在になってしまう」
悔しさに顔を歪ませ、「くっ・・・・・・うううっ」と泣きそうになる少年の頭を、男性は優しく撫でる。
「もし君が、今の事実を悔しく思うのなら。このジレンマに立ち向かい、背負い、乗り越えていく覚悟があるのなら。俺は自分が持っている全てを君に託したいと思っている。どうだ・・・・・・？」

弾かれたように、少年が顔を上げる。男性も心痛な面持ちで少年の顔を見ている。やがて少年は、決意を固める。
「わかったよ。やってやろう。俺のような思いをするのは、俺だけでたくさんだ」
「わかった。だが、特訓は決して甘いものじゃない。覚悟しろよ」
少年が「はい！！」と返事をすると、二人は静寂と朝霧に包まれた森の中を歩いて行った。

―※＊※―

「はっ！！」
青年が目を開けると、窓から朝日の光が指していた。
「・・・・・・夢・・・・・・か・・・・・・」
不意に、窓を叩く音がする。窓を見ると、足に手紙が入った小さな缶を付けたハトが止まっていた。窓を開けてハトに付いている手紙を取るとそれに目を通した。
「そうか。あの家族は無事、イグリースに渡ったか。さすがパラケルだ・・・・・・」
その時、外からバタバタと騒がしい足音がしてきた。手紙を握り潰すとハトは飛び去り、青年は足音の主が来る前に手紙を机の引き出しにしまった。ガチャッ、とドアが開くのと引き出しが閉まるのはほぼ同時だった。
「やっほ～、ユーリ～。生きてる～？」
無垢な笑顔を振りまく、紅色の髪をした少女が挨拶すると青年、ユーリは溜め息をついた。
「ミリア・・・・・・か」
苦々しく答えるユーリに、ミリアは笑顔を崩さなかった。
「いきなり入って来て『生きてる～？』はないだろ。まるで俺が・・

・・・・」

「だって、いつも辛そうな顔しているんだもん。まるで・・・・・・今にも黙って、いなくなってしまいそうな・・・・・・」

ユーリは一瞬、手がピクッと震えた。そのまま黙っていたが、「用件はそれだけ?」とミリアのほうを向いて聞いた。

「えっ、う、うん・・・・・・」

「じゃあ、しばらく外にいてくれない?これから着替えるから」

ミリア「あっ、そうか。ごめん・・・・・・」

彼女が静かにドアを閉めた後、ユーリは着替えを始めた。

―※＊※―

数分後、着替え終わった家の居間にユーリが出てきた。彼の家は決して広いとは言えなかったが、狭いとも言えない普通の広さの家だった。

「おまえ、どうやってウチのカギを開けたんだ?」

「何、言ってるの?いつも開いてるよ。あなたって、意外に無用心なのね」

静かに「そうか」と言うユーリ。昨日夜遅く、戻ってすぐに寝てしまったので、カギは掛けられずにそのままにされていた。

「今度からは、気をつけることにするよ」

ユーリは台所に立つと、適当に飲み物を用意した。

「また出たんですって。道化騎士(ロリスリッター)」

それを聞くと、ピタッと動きが止まる。

「〈恐会〉は道化の騎士のことを、『騎士の名を汚す異端な存在』って言って、ファンラス中に指名手配しているわ」

飲み物が入ったコップを二つ持って来ると、ミリアはその片方を、

「ありがと」と言って受け取った。

「どんな姿か、掴んでいるのか？」
すると、鞄の中から「これ、手配書」と一枚の紙を出した。そこにはとても本物とは似ても似つかない、長い鉤鼻をした醜い顔の騎士の絵が描かれており、それを見たユーリは思わず、「プッ」と吹き出した。
「あっ、ユーリでも笑っちゃう？こんな顔の人がいたら、目立つのに・・・・・・」
「多分、こいつを怖がらせるための〈恐会〉側の情報工作だろう。にしても・・・・・・」
「『この者、異端者を助ける重罪人につき、見かけた者はすぐに教会へ知らせるように。また、魔術師である可能性もあるため、昼間は姿を変えていると思われる。怪しい者を見かけたら、すぐ教会へ知らせるように』ってさ。うっわ、懸賞金までかけてる。情報提供だけで、二百万だって」
パンをかじりながら、「それだけ〈恐会〉も、必死って訳か」とユーリが呟く。
「俺から見れば、異端狩りの教会騎士のほうが騎士の名を汚している」
「騎士って、自分たちの主に従って、虐殺をするものじゃないの？」
その声にはどこか、怒りのようなものが込められていた。しかし、それを「いや」と、ユーリは否定する。
「元々、騎士とは、王や王妃に仕え、その身を守る者。たとえ敵であっても正々堂々と戦う者たちのことだ。けっして、虐殺者ではない」
それを聞いたミリアが、「でも！」と怒りを込めて立ち上がる。
「〈恐会〉の教会騎士はそうなってるじゃない！ユーリの家族だって・・・・・・」
拳を握って黙り込むミリアを横目で見て、ユーリは自分のコップの飲み物を飲んだ。なぜ知っているのだろう。今もそう思った。
「前々から思ってたんだが・・・・・・お前、なんで俺の家族が『

異端狩り』に殺されたことを知ってるんだ？」
コップを置くと、不振そうに聞いた。
「おじさんに聞いたの。ただ・・・・・それだけ・・・・・・」
そう言うと、静かに椅子に座った。

―※＊※―

一方。ファンラス郊外では、黒や灰色など暗い色の体表や殻を持った生物に剣を持った二人の人影が戦っていた。
二人とも旅人が使うローブを身に付けており、一人は両手に短剣を逆手持ち、もう一人は普通の剣を持って生物の軍団を倒している。
倒されている生物も、赤い目を持つが生物独特の生命力はなく、本能というより衝動的に動き、襲いかかっていた。
「ディステリア、教えられたとおりにやれ！」
「だが、クトゥリア！失敗したら・・・・・」
「その時はフォローしてやる！成功失敗関係なく、経験しなければ意味がない！」
「わかったよ」とディステリアは後ろに下がり、持っている剣を横に構えて目を閉じる。自身の体を流れる魔力を剣に移し、流れる風と鋭い刃をイメージする。
「ガアアアッ！！！」
「おっと、させるか！」
無防備に等しいディステリアに生物が襲いかかるが、間に割って入ったクトゥリアが短剣を振って牽制する。
「よし！！」
目を開けた時、ちょうどクトゥリアがその場を離れる。ディステリアは剣を大きく構え、向かって来る生物に向けて思い切り振った。
「スラストーム！！」

一閃を描いた剣の軌跡が緑色の風の刃に具現化し、前方に飛んで生物をなぎ払った。とっさに避けたものもクトゥリアが仕留めていき、程なくして謎の生物は全滅した。
「これも、クルキドって魔物か・・・・・・」
「ああ」左手の甲で汗を拭うディステリアに、短剣をしまったクトゥリアは答える。
「こいつら、魔物とは違うのか？」
「違うな。ヘクターから、こいつらについて聞いてないのか？」
「えっ？あ、ああ。『魔物並みに厄介な敵性生物』としか、な」
「（あいつにしては、ぼかした説明をしてるな・・・・・・）」
と一瞬思ったクトゥリアだったが、実際クルキドについては『生物に似た構造をしている』以外のことは何一つわかっていない。
「（正体について見当はついているが・・・・・確証がないんだよな）」
クルキド誕生のメカニズム、その因果性、何一つ解明されていない。そんな自分が説明を求められても、ヘクターのことを悪くは言えない。
「・・・・・まあ、それはともかくとして。どうだ、調子は？」
「調子？・・・・・・ああ、腕の痛みか？」
剣をしまったディステリアは、右手を握ったり開いたりして感触を確かめる。
「大丈夫だ。いつものように傷みもない」
「やはり、ライジング・ルミナスとフォーリング・アビスの反動によるものか。・・・・・・もしくは、ディステリアの体質によるものか・・・・・・」
後の言葉を、聞こえないくらい小さな声でぼそぼそ呟くクトゥリアに、ディステリアは眉をひそめる。
「最初に会った時はわかってるようなことを言ってたが、さっきの言葉を聞く限り、今わかったような言い草だな」
「見た時に受けた印象をそのまま言っただけだ。誤解をしたなら訂

正しておくよ」
「もう一つ、訂正すべきことがあるんじゃないのか？」
さらに眉を寄せたディステリアに、クトゥリアは目を瞬かせる。
「あんたは最初会った時、例の俺の技は魔術技とか言ってたな。だが、今俺が放ったスラストームだって、剣を媒体にして放ったんだから、魔術技に入るんじゃないのか？」
「あれは魔術だ。俺の魔力を風の属性に変換し、さらに刃の形に変化させて放つ。なんの媒体もなしに放てれば魔法の類だったんだが、人間だと媒体で形を合わせないと難しい」
「でも・・・・・・大体、魔術と魔法の違いって、なんなんだ？」
「すまん、忘れた」
はっきりと言ったクトゥリアに、「おい！」とディステリアが叫ぶ。
「それはおいといて・・・・・・最初に言ったとおり、魔術と技を組み合わせたものを魔術技と呼んでいる。元来、武器を使った技に、魔術的な属性が付くのはおかしいだろ」
ディステリアは黙り込むと、前に受けた講習のことを思い出す。武器を持った物理攻撃が聞かない霊体の魔物。その対策として、魔術が挙げられている。エネルギー体と言ってもいい霊体に対しエネルギーをぶつけるのはまだ納得できるが、そのエネルギーが物質である、例えば鎧などを変質させるのは納得いかない。
「魔術と魔法については、百年ほど前に研究が再開されたからまだ定義が曖昧なんだ。無論、魔術技についてもな」
「言い訳がましいな」
「否定はしない」
苦笑いしたクトゥリアは、街道の先に見える小さな町に目を向ける。
「さて、そろそろ町だ。そこで少し休憩しよう」
「そこまでに、またさっきのクルキドとか来なければいいんですがね」
疲れた表情でディステリアが言うと、クトゥリアは笑みを浮かべる。
何か、嫌な予感がした。

第２２話　明かされる真実

首都〈パラーナ〉では、教会の異端審問官たちが、一組十人ほどで街の中を歩き回っていた。普段は一組二～四人程度なのだが、道化騎士捕縛のため人数を増やしたのだった。

「いいか。この〈道化騎士（ロリス・リッター）〉の存在・行動は我ら教会への侮辱だ。すぐにでも捕まえて即刻、火刑にかけなければならない」

異端審問官のトップである老審問官と、その補佐の副審問官が教会騎士たちに言う。

「すでにこの三ヶ月、ファンラスだけでも十数回以上の火刑場に現れ、受刑者を連れ出しています。その後の受刑者の行方もわかっていないことから、誰か協力者がいるものと思われます」

「もしそうなら、奴らは組織だって我らの国に攻め入るかも知れん。それを防げるか否かは、諸君らにかかっている。皆の者、全力を尽くすように」

そう言って、教会騎士たちを送り出した審問官のトップ、ラスプは不敵な笑みを浮かべていた。

「ラスプさま。笑っておられる場合ではございません」

「そうか？半年だけでも五百人余り。十分な収穫だとは思わんかね？レマレーナ」

「しかし、異端者として捕まえた九百人余りの内、三百人余りがロリス・リッターなる者に救出されています。救出を恐れて投獄している者が百余り。これでは、期日までに『負の思念』を集めることなど到底できません」

「だな・・・・・・ハイ・アサシス」
そのすぐ後、天上から全身を黒のタイツの上を薄い鎧で包まれたような姿の男が、床に着地した。
「早速だが、このパラーナの中で・・・・・・」
それを、「お待ちを」とアサシスがさえぎった。レマレーナが「どうした?」と聞くと、
「窓の外に、聞き耳を立てている者が」
と答えた。すぐにレマレーナが窓を開けたが、そこから飛び立ったのは白いハトだけだった。
「まさか・・・・・・ハトが敵の刺客とでも言うのか・・・・・・?」
一瞬、馬鹿にしたような言い方で窓を閉めるが、すぐ「いや」とラスプが言った。
「幻獣の中には鳥や獣の声がわかる者がいる。そういった者が動物を使って探りを入れているかも知れん。だから、例え鳥でも聞かれる訳には行かん」
レマレーナは「わかりました」と言って、ラスプの側に侍した。
「では、改めて聞く。このパラーナ内に我らの邪魔をする〈道化の騎士〉と思しき者はいるか?」
「いえ。昨日、森の中で救出した娘を家族に引き渡した後まではつけていたのですが、プレシュの側で見失いました」
「プレシュ?この首都〈パラーナ〉と、処刑場であるパラーナ盆地のほぼ中間にある、あの小さな町か?」
「ハイ。これが撹乱でなければ、〈道化の騎士〉なる者はあの街に潜伏している可能性があるかと」
それを聞いたラスプは「そうか」と呟くと、口を覆った手の下でニヤリと笑った。
「その町なら、ちょうど捜査範囲に入っている。いずれ何か報告が入るだろう」
「そうですか。では、このエウロッパ内に我らの障害となりうる者

は、後どれくらいいる？」
すると、天上から他のハイ・アサシスが数人、膝を折って床に手を付いた形で降りて来た。
「各自、報告をしてくれ」
「ハッ。エリウ国ですが・・・・・・」
「そこの報告はいい。他の場所を」と、レマレーナがかき消す。
「ハッ。アストリアでは依然、そういった者が出現する傾向はありません」
「リタリーでも同じです。ただ・・・・・・」
「ただ、なんだ？」と、レマレーナが聞く。
「あそこに配置したハイ・アサシスが一体、行方をくらませております。おそらくは・・・・・・」
「やられたか・・・・・・」と考えた後、「続けろ」と言った。
「ハッ。アサシス兵三個中隊を率いてウェイスをくまなく捜索しましたが、例の男の発見には、いまだ至っておりません」
「そうか。引き続き捜索せよ。それより、イグリースの報告がまだだが・・・・・・」
「は・・・・・・ハッ。担当の者が遅れているようで・・・・・・」
「かまわん。武器の蓄えはどうなっている」と、ラスプが報告の内容を変えさせる。
「ルーシアの首都、マスコスでの武器調達に、支障はありません。ただ、その動きに不信感を抱いている者がいるようです。ご命令とあれば、すぐにその者を抹殺いたしますが・・・・・・」
「いや、騒ぎを大きくする必要はない。こちらの情報を掴ませなければいいだけだ」
ラスプの後に「そうですね」とレマレーナが頷く。
「――それより・・・・・・イグリースの報告はどうなっている！！」
そこに「も・・・・・・申し上げます！！」と、大声がするとドアが開いた。そこには、部屋の中にいるものと同じハイ・アサシスが

いたが、部屋の中にいたハイ・アサシスたちは姿を消していた。
「なっ、おまえ！ここに来る時は人目につかないように、天井から来るように伝えたであろう！」
慌ててドアを閉めるレマレーナの側を抜け、「申し訳ありません」とラスプの前にひざをついた。
「それで、どうしたのだ？」
ラスプの問いに、アサシスは「ハッ」と頭を下げる。
「ムルグラントに向かっていたクルキドが、目標地点まで残り七十キロの地点で全滅しました」
「そうか・・・・・」
ラスプは一端、答えた後、「！？・・・・・なんだと！？」と、予想外の報告内容に思わず席から立ち上がる。
「その怪物と言うのは・・・・・幻獣か！？」
レマレーナの問いに、「いえ」と首を振る。
「体から発せられるプレッシャーは、魔物のそれを超えています。あのようなものは今まで見たことが・・・・・」
「待て。それ以上はこちらで調べる。その時のおまえの記憶を渡してもらおう」
レマレーナはそのハイ・アサシスの頭に手を置くと、一瞬そこに紫色の光が灯った。光が消えた後に手を離すと、そのハイ・アサシスは糸の切れた人形のように床に倒れた。その後、紫色の光は同じ色の結晶となった。
「すぐに本部に移送し、記憶から分析します」
一人部屋に残されたラスプは、机に肘を付きニヤリと笑っていた。
「奴らの介入か。それほどこの世界を維持したいということか・・・・」

―※＊※―

ほぼ同時刻、〈パラーナ〉から南に数キロ行った場所を、教会騎士の一団が移動していた。
審問官「次の町が我々の見回りの最後に当たる。皆の者、気を抜かずにしっかりとしてくれ」
そのまま一団は、目の前の町に差しかかった。木と壁で造られた家が多い町。そこは、ユーリのいる町プレシュだった。

紙袋にいっぱいの食材を抱え、街の中を歩くミリア。脳裏にユーリの苦しそうな表情が浮かんだ。
「（ユーリはいつもあんな顔をする。苦しそうな、悲しそうな顔。ねえ、何がそんなに苦しいの？何がそんなに悲しいの？）」
ミリアは不安だった。今にも彼が、目の前からいなくなってしまいそうで。
「（どうしてそんなに・・・・・・）」
暗い表情で歩いていたミリアがと何かにぶつかると、彼女が抱えていた食材が道に散らばった。道にしりもちを付いた彼女が見上げると、そこには異端審問官と教会騎士たちがいた。
「貴様！気をつけろ！！」
文句の一つでも言いたかったミリアだが、そんなことをすればすぐさま連れて行かれてしまう。黙って食材を拾っていると、審問官がその中に落ちている宝石を拾い上げた。それに気付いたミリアは「あっ！」と呟いた。
「この宝石は、〈魔法素結晶宝石（マナジュエル）〉か」
〈魔法素結晶宝石〉とは、別名〈魔宝石〉ともいい、大気中を漂っている魔法素（マナ）が結晶化した物だと言われている。一属性のマナが結晶化する理由は不明だが、これがあれば例え魔術が使えない者でも、多少の素養さえあれば魔術が使えるようになる。ちなみに、様々な属性が混ざり合い、かつ原石に近い物が魔石と呼ばれる。
「捕らえよ！」

驚いたミリアの顔を見るや、すぐさま教会騎士に命令し、たちまち彼女を取り押さえた。
「フン、行くぞ」
「お前ら！ミリアをどうするつもりだ！！」
そこへ、ユーリが駆けて来た。教会騎士に殴りかかろうとするが、あっという間に押さえ込まれる。
「ユーリ！！」
「おまえら異端狩りは、騎士を名乗るくせにぶつかっただけで人を異端扱いするのか！？」
「黙れ、小僧！この者は魔女だ。この魔宝石が何よりの証拠だ！！」
審問官が見せた宝石に見覚えがあったユーリは、目を見開いた。
「この力でおまえをたぶらかしていたのだろう。さあ、連れて行け！！」
「待て！何かの間違いだ！！」
「くどい！！」
腕を捕まれた審問官はユーリを突き飛ばし、道に叩きつけられたユーリは、「っ！！」と声を上げる。
「たとえ魔術でたぶらかされたとしても、これ以上邪魔立てすれば貴様も同罪だ。行くぞ」
歩き出す審問官たちを、「待てっ！」と追いかけようとしたが、腕に痛みが走り、動けなかった。
「いつっ・・・・・・」
「おい、君。大丈夫か？」
駆け寄ってきた旅の男性に、「あんたは・・・・・・」と答える。
「俺のことはいい。それより、早く手当てしないと」
「おい、クトゥリア！なんだ、さっきの。無茶苦茶じゃねぇか！」
落ち着いている男性に対し、連れの少年は声を荒げている。いうまでもなく、男性はクトゥリアで、少年はディステリアだ。
「落ち着け！今はこいつの手当てが先だ」
「ふざけるな！あんなの見過ごせるか。俺が・・・・・・」

駆け出そうとしたディステリアの足をクトゥリアがかけたので、派手にこける。
「いてっ・・・・・・何しやがる!!」
「ここで騒動を起こして何になる。まずは、奴らについての情報を集めるんだ。倒すにしろ、壊滅させるにしろ、情報が必要だ」
「・・・・・・選択肢が一個じゃないのか?」
「あの子、ミリアと言ったか?彼女が魔女だなんて、何かの間違いだろう」
「だが・・・・・・奴らは一度だって、間違いを認めたことはない。くそっ!!」
歯を食い縛り立ち上がろうとしたユーリを、クトゥリアは制した。
「とにかく、腕を手当てしないと・・・・・・」
ユーリはその場でクトゥリアに手当てされ、ディステリアは恨みがましい視線を送りながらふてくされていた。

―※＊※―

手当てが終わり、左腕に包帯を巻いたユーリが、家路についていた。その表情は、酷く動揺していた。
「(忘れもしない・・・・・・あの宝石は・・・・・・)」
家が見えたその時、ユーリは突然、駆け出した。

―回想―

森の近くで剣の素振りをしていると、草むらの中から一人の貴婦人が出てきた。月明かりが照らし出すその姿は、背中にコウモリのような翼、額にガーネットを持っていた。

「こんな時間に出歩くなんて、ある意味命知らずね・・・・・・・」
素振りを止め、その女性に思わず見とれてしまった。
「・・・・・・あんたは・・・・・・？」
「私はヴィーヴル。この近くに棲んでいるものよ」
「近くに住んでいる？この近くに人が住めるような場所はないはずだが・・・・・・」
「そう。だから『棲んでいる』。見てわからない？私は幻獣よ」
ユーリは「ああ、そうか」と思って、顔を背けた。
「なんのために、力を求めているの？」
素振りを再会しながら、ユーリはその問いに答える。
「今この時に、やつらの不条理な異端狩りで犠牲になっている者たちを、少しでも多く救えるようになるためだ」
一端、素振りをやめた後、フッ、と笑ったヴィーヴルの顔を見て、一瞬、頬が赤くなり、目を背ける。
「なら、あなたに望みのままの力を授けましょう」
ヴィーヴルはユーリの前に近づくと、自分の額にはまっている宝石に手をやる。
「私の額に入っているこの宝石を手にすれば、あなたは強大な魔力を得ることができます。さあ、どうぞ・・・・・・。今、あなたのすぐ側にあります」
甘い囁きに、ユーリは一瞬、手を伸ばそうとする。だが、『甘い言葉には気をつけろ。強大な力が手に入ると言うならなおさらだ』と言う言葉が頭をよぎり、ユーリは手を下ろした。
「いや、やめて置こう」
「・・・・・・なぜ？」と問うヴィーヴル。
「強大な力を手にするには、それ相応の覚悟と実力が必要だ。俺にはまだ、それが備わっているとは思えない」
視線を落とした自分の右手を握った後、ヴィーヴルを見据える。その顔は頬が少し紅潮しており、少し戸惑っているようだった。
「だからもし、俺がこの先、あんたの力を得るに相応しい男になっ

たら・・・・・その時は・・・・・・・」
「わかりました。その時、私はあなたに仕え、力を添えましょう」
そう言って消えるヴィーヴル。ユーリは「えっ、あっ、違う・・・・・」と言ったが、言い切らないうちにヴィーヴルは姿を消していた。

―回想終わり―

「ミリア・・・・・お前は・・・・・・」
家に駆け込み、部屋の中に置いてあった仮面を手に取ると、それを身に着けベッドの下から引っ張り出したマントを羽織った。
「ミリア・・・・・すぐ行くぞ!!」

―※＊※―

首都〈パラーナ〉の教会本部では、ラスプとレマレーナが廊下を歩いていた。
「なぜ魔女ごときの取調べに、私が立ち会わなければならないのだ？どうせまた、人間どもの勘違いだろう」
「いえ、それが。その者は幻獣の類の可能性が」
それを聞いたラスプは、「何!?」と顔をしかめた。
「なるほど、な・・・・・わかった、その者は今どこにいる?」
「あなたさまがお行きになられますので、例の部屋に」
「そうか。『結界』が張られた部屋なら、余計な奴らに話を聞かれずに済む」
二人は、石造りの壁につけられた木のドアを開け、石の階段を下りて行った。やがて地下の部屋に入ると、椅子に縛り付けられている

ミリアの前に近づいた。
「気分はどうだ?」
「いいわけないでしょ!!あなたが『異端狩り』の親玉ね!」
「白々しいものだな。どうせ、全て知っているのだろう?」
顔をしかめ、「なんのこと?」と言ったミリアのあごを掴み、目を合わせた。
「・・・・・わかっているのだぞ?貴様、幻獣・・・・・・ヴィーヴルだな・・・・・・?」
これに対し、ミリアはラスプを睨み返した。
「魔女の次は幻獣?あなたたちの言いがかりには、ほとほと呆れるわ」
すると、「とぼけるな」とレマレーナは、押収した宝石を取り出した。
「無能な異端審問間は勘違いしていたが、この宝石は〈魔法素結晶(マナジュ)宝石(エル)〉ではないものの、魔力を宿している。そういった宝石は幻獣か、もしくは奴らと係わりのある者しか持っていない。つまり、貴様は幻獣でないにしろ、なんらかの係わりを持つ者だということに間違いはない」
だが、ミリアは「知らない」と言ったきり、黙り込んだ。
「・・・・・フン。まあ、良かろう」
「なっ!よろしいのですか!?」
何も言わずラスプは地下室を後にし、地上の教会に戻った。
「よろしかったのですか?あんなに簡単に取調べをおやめになって」
「あの女が本当にヴィーヴルなら、宝石が外れている今は何も見えないはず・・・・・・」
「!!・・・・・そう言われてみれば」
「それに、宝石は今、我らが握っている。服従させることも簡単なはずだ。だが、あの女の瞳はしっかりしていた」
「では・・・・・あの女はいったいなんと・・・・・・?」
「わからぬ。だが、何者にしろ・・・・・使えるな」

「申し上げます！！」
そこへ、血相を変えた教会騎士が走ってきたので、「今度はなんだ！？」とレマレーナが叫ぶ。
「今しがた、ファンラス港にて、手配中の男『アウグス・フォン・ホーエンハイム』を拘束いたしました」
レマレーナが「何！？」と驚くと、ラスプは「ほう」と呟いた。報告を終えた教会騎士が立ち去ると、ラスプはニヤッと笑った。
「どうやら、運命は我々に味方をしているらしい。レマレーナ！すぐに刑の準備だ」
「裁判も行なわずに、ですか！？」
「奴が異端者・・・・・魔術師であることはまず間違いない。改めて裁判にかける必要はない」
「わかりました。では、ただちに・・・・・・」
「待て、レマレーナ」
ラスプが呼び止めると、「まだ何か？」とレマレーナが聞いた。
「いいことを思いついた。私の部屋に来てくれ。そこでいろいろ指示をする」
レマレーナは「はっ、わかりました」と、ラスプの後に続いた。

第２３話　突入

教会本部の地下牢に、一人の男が入れられている。その男こそ、イグリースでクトゥリアがディステリアを合わせようとした男、魔術師兼医者のアウグス・フォン・ホーエンハイムだった。

「くそ、私としたことが・・・・・・」

イグリースからファンラスに戻り、港に着いたアウグスは、運悪くそこに居合わせた教会騎士に気付かれ、あっという間に囲まれ連行された。

「我ながら、情けない」

自分を責めていると地下牢のドアが開き、二人ほどの教会騎士を引き連れたレマレーナが現れた。

「アウグス・フォン・ホーエンハイム。貴様を即、火刑に処す」

教会騎士の一人が牢屋の入り口を開き、二人がかりでアウグスを立たせる。

「なんだと？・・・・・・教会の異端審問官さまは、ろくな裁判もできないらしいな」

「フン。貴様が異端者であることはすでに明白だ。貴様の処刑は大々的に行なう。連れて行け」

「（大々的？）」

教会騎士に連れられるアウグスは、疑問に思った。今まで、そのようにしたことがあっただろうか。そんな彼に気付いてか、レマレーナはニヤリと笑っていた。

―※＊※―

パラーナの郊外では、四日後に異端者の一斉火刑が行われることが報じられた。今までにないことに一般市民はもちろん、貴族たちも驚いた。

「どういうことだ？こんなことは今までなかったのに」

「〈恐会〉の人たちは、ついに大量虐殺でもするのかしら」

一方、貴族たちの意見は真っ二つにわかれていた。

「このような行為、神に仕える者がするべきことではない。野蛮すぎる！！」

「何を言っている。魔女やその類を一網打尽にできるのだぞ。願ってもないことだ！！」

「お主こそ何を言っている。大体、魔術を使う者は本当に悪なのか！？」

「教会の者がそう言っているのだから、そうなのだろう。それともお主、奴らの肩を持つのか？」

瞬く間に広がり、街の至る所で起こった論争をよそに、町の中を一人の旅姿の少年が歩いていた。マントとフードで顔を隠してはいるが、その少年はユーリだった。ユーリは店頭に置かれたテレビの前に立ち止まった。

「奴ら・・・・・ついにこんなことを・・・・・」

ミリアをさらわれて三日、彼はプレシュの町を出て首都パラーナに来ていた。宿を拠点に町の造り、道筋、異端狩りの本拠地である教会の場所や造り。全てを調べ上げた。いったん、宿の部屋に戻ると、中にはパラケルがいた。

「パラケル！？持ち場を離れていいのか！？」

「ええ、まあ。それに、アウグスさんが捕まったのは、俺の責任でもある。協力させてくれませんか？」

「今回ばかりは、他に手が欲しいと思っていた。別に構わんが・・・・」
「昔のよしみで、この町の中にも何人か協力者がいる。九日後には、全ての準備が・・・・・・」
「いや、明日でなきゃ駄目だ」と部屋を歩くユーリに、パラケルは射抜くような目を向ける。
「明日に、アウグスとその他の異端者として捕まっている者たちが、一斉に処刑される、か。言っちゃ悪いが、これは・・・・・・」
「わかっている。罠だとでも言いたいのだろう」
コップに入れた水を飲んだユーリに、「ほう」と答える。
「気付いていたか。もっとも奴らは、アウグスだけを連れて行くつもりらしい」
首を傾げるユーリに、さらに続ける。
「奴らはアウグスだけを連れて行き、道化の騎士（ロリス・リッター）を待ち伏せする。その間に、地下に閉じ込めている人たちを一斉に・・・・・・殺害する！」
「なっ、ちょっと待て。それが本当だとして・・・・・・なぜ知っているんだ・・・・・・？」
しばらく黙っていたが、パラケルは「フッ」と笑う。
「いずれ、わかるよ。俺の正体も、敵の正体もね」
そう呟いて、意味深な笑いを浮かべるパラケルにユーリは眉を寄せたが、長年付き合った仲間を疑う理由はない。
「とにかく、奴らがアウグスって人をどこで処刑するか、探らないと」
「お前まさか、教会に乗り込むつもりか？」
「そのまさかだ。止めても無駄だよ」
「止めはしない。だが、行くなら急いだ方がいい。奴らは今夜にもアウグスと、あとミリアって子を、別々に連れ出すつもりだ」
それを聞いたユーリは「わかった」と、急いで部屋を出て行った。
「さて・・・・・・と」

それを見送ったパラケルは、椅子から立ち上がって窓に近づいた。
窓を開けると、そこに止まっていた鳥の足に付いている筒に手紙を入れた。
「こいつをあの男に渡してくれ。どこにいるかわからないが、お前ならすぐにでも見つけられるだろう」
するとその鳥は、すぐさま窓から飛び立った。
「頼んだぞ、ワルキューレ」

―※＊※―

マントに身を包んで、教会本部前にユーリが立ち止まった。
「（処刑なんて、させてたまるか！！）」
目元を隠す仮面を被ると、「うおおおっ！！！！」と、堂々と玄関から突っ込んで行った。ドアが突き破られると、中にいた教会騎士たちが慌てふためいた。
「なっ、侵入者だ！！」「道化の騎士（ロリスリッター）だと！？」「侵入者だ～！！」
口々に叫び、襲い掛かる教会騎士たちを、ユーリはサーベルで切り伏せた。とはいえ、サーベルは特別な呪詛のおかげで刃に触れた者が切れないようになっていた。
「何事だ？」
突然の騒ぎに、レマレーナが出てきた。
「あっ、神父長さま。侵入者です、あの〈道化の騎士〉が乗り込んできました」
「なんだと！？わかった。できるだけ異端者どもを移す。その間の時間を稼いでくれ」
教会騎士が「ハッ」と言ったその時、そこへ数人の教会騎士を吹き飛ばして、ユーリが飛び出して来た。
「おっ、おのれ！」

レマレーナと話していた教会騎士が切りかかるが、ユーリがカウンターで蹴りを食らわすと呆気なく気絶した。
「貴様・・・・・ミリアを返せ!!」
レマレーナに向かって、ユーリは叫んだ。
「フン。悪いが、君ごときと付き合う時間はない。始末しろ」
命令と共に、新たな教会騎士が前に進み出る。
「その〈ディゼアトルーパー〉は、軟弱な人間の兵とは比べ物にならないぞ」
立ち去るレマレーナを「待て!!」と追いかけようとするが、彼の前にディゼアトルーパーが立ちはだかる。
「どけ!!」
抜き放ったサーベルで切りかかるが、いとも簡単に受け止められてしまった。
「!?・・・・・ぬおっ!!」
殴りつけられたユーリは、左腕から壁に叩き付けられた。
「ぐっ・・・・・痛ッ・・・・・!!」
まだ完治していない左腕に衝撃を受け、ユーリは顔をしかめた。目前に迫った教会騎士に、サーベルの呪詛を解除して切りかかった。スーツに身を包んだ部分を切ったが、そこから吹き出た血のような液体が腕のような形になってユーリに襲いかかった。
「なんだ、これは!?」
再びサーベルで切りかかったが、次々と噴き出す液体に囲まれ、多方向から攻撃され再び左腕から壁に叩きつけられた。
「かっ・・・・・がっ・・・・・」
怪我をしている左腕を集中的に狙われ、追い詰められたユーリが、これまでかと思った瞬間、突然、
「ユーリ!!」
誰かの声がしたその時、剣を振り下ろそうとした教会騎士たちが、一斉に炎の柱に包まれた。炎が治まった後、唖然とした表情で呟いた。

「・・・・・・ミリア・・・・・・・？」

―※＊※―

その頃、地下室では。唖然とした表情のミリアと、勝ち誇ったような表情のラスプがいた。
「どうやら、君の正体は本当に幻獣らしいな」
「・・・・・・そんな・・・・・・私は・・・・・・」
「ふん、いずれわかるだろう。我々の本部で調べれば」
「何・・・・・・言ってるの？貴方たち〈恐会〉の本拠地は、ここじゃない」
するとラスプは、「ハハハハハハ」と笑った。
「ところが違うのだよ。我々の、真の本拠地は」
「なんですって！？」
ミリアが目を見張った途端、ドアが開いてレマレーナが入ってきた。
「出発の準備が整いました」
「そうか。ご苦労」と、あごでミリアのほうをしゃくると、レマレーナの後ろにいた教会騎士の格好をした兵が、ミリアを連れ出した。
「ディゼアトルーパーを持ち出したか。なら、もはやここには・・・・・・」
「用はありません。地下に収容している人間どもは・・・・・・」
「私が始末をつけよう。君は彼女を連れて、行きたまえ」
頭を下げて「仰せの通りに」と言うと、レマレーナも地下室を後にした。
「さて・・・・・・と、では他の人間どもを始末するとするか」
部屋を出ると、大勢の人を閉じ込めている大きな牢屋の前で立ち止まった。
「な・・・・・・なんだ・・・・・・？」

「あっ、あいつは・・・・・・異端狩りの親玉!?」
うろたえる人々に対し、不気味な笑みを浮かべる。
「皆さん。今日は残念な知らせがあります。今日この時を持って、あなた方の命は新たな世界のための糧となるのです!!」
「なんだって!?」「そんな」「俺たちはどうなるんだ」と、人々が口々に言う。
「ふざけるな!今に道化騎士(ロリスリッター)が俺たちを助けに・・・・・・」
「残念ながら、助けには来ませんよ・・・・・・。なぜなら・・・・・・あの者は私の真の従者たちによって、血祭りに上げられるのです!!」
ラスプの言葉に牢屋の中から、「そんな」と絶望に満ちた声が上がる。
「絶望の中で、朽ち果てるがいい!!ハ～ッハッハッハッハッハ!!」
大笑いの後、立ち去ろうとしたラスプの前に、「そうはさせるか」と、一人の男が立ちはだかった。
「貴様は・・・・・・!?」
「道化騎士(ロリスリッター)の協力者、パラケルだ。ラスプ、貴様の計画、全て聞かせてもらった。だが、貴様の正体についてもっと詳しく聞かせてもらいたい」
「私が口を割るとでも・・・・・・?」
「簡単にいくとは・・・・・・思っていない!!」
剣を取り出すや否や突っ込んだパラケルを、腕を振って迎え撃つラスプ。剣を受けた腕は繋がったまま、両者は互いに押し合った。
「やはり貴様・・・・・・人間ではないな!?」
「貴様こそ、ただの人間にしては鋭すぎる!!」
その声が響くと、いくつもの金属音が地下室に響き渡った。

―※＊※―

〈恐会〉の廊下を駆け抜けるユーリ。途中、何体かのディゼアトルーパーと鉢合わせになったが、なんとか隙を突いて倒していた。そしてついに、異端狩りを率いているラスプの部屋に辿り着いた。ノブに手をかけるといとも簡単に開いたので、罠と思いつつ中に入った。

「誰もいない？・・・・・・ん！・・・・・・あれは」

ラスプの机に駆け寄ったユーリは、そこに載せられている地図を見つけた。

「これは・・・・・・パラーナ盆地の地図か・・・・・・？この日付は・・・・・今日か」

地図には『午前十時、処刑開始』と書かれていた。

「まずい。急がなければ」

窓から飛び出し、屋根の上を飛び越えながら、処刑場所であるパラーナ盆地へと急いだ。

―※＊※―

パラーナ盆地。そこには何人もの教会騎士と執行官、一人の審問官、そして十字架に縛られた一人の男性がいた。

「気分はどうだね？異端の医者」

「これが最高だと思えるか？」

これから火あぶりにされるとは思えないほど、明るい声で答えるアウグスを、「フン」と鼻で笑う。

「その減らず口も、いずれ叩けなくなる。始めろ！」

執行官の一人が、松明を薪に放り投げた。油が掛けられた薪はすぐさま大きな炎を燃え上がらせたが、アウグスが少し精神を集中させ

ると、強風を受けたようにかき消された。慌てふためく教会騎士たちに対し、審問官は落ち着いている。
「フン。やっと正体を表したか」
「本当に魔術を使えるのなら、火あぶりくらいで死なないって言うんだよ」
それを聞き、ざわめきだした教会騎士たちを、「騒ぐな！やつの思惑に乗せられるな！！」と一喝で鎮めた後、審問官が笑みを浮かべる。
「確かにその通りだ。だが、魔術で炎から身を守り続けるにも限界がある。魔力が尽きれば自分を守ることもできず、燃え尽きるだろう」
沈黙の後、アウグスが問い詰める。
「おまえ・・・・・いったい、なんのためにこんなことをする」
「我らの『世界』を守るためだ・・・・・」
その時、教会騎士たちの中から悲鳴が上がった。全員が向いた途端、悲鳴が上がった辺りの教会騎士が、一人、二人と打ち上げられた。ざわめく教会騎士を蹴りで押し退け、アウグスの元に現れたのは、道化騎士ことユーリだった。
「ハハハ。やはり現れたか」
笑い声を上げる審問官に対し、アウグスは縛られたまま叫ぶ。
「なぜ来たんだ？これがおまえをおびき寄せる罠だということは、わかりきっているだろう」
「例え罠でも、誰かを見捨てることはできない！！」
息を切らすユーリに、「あいつも、いい弟子を持ったものだ」とパラケルは呟いた。
「じゃあ、師匠を・・・・・先代の〈道化の騎士〉を知ってるんですか？」
アウグスが「ああ・・・・・」と呟いた。
「ふっ・・・・・異端者。今日で最期だ」
手を上げて「出でよ！！」と叫ぶと、周りから大勢の怪物たちが姿

を表す。
「なんだ!?こいつらは!!」
「神が異端者を裁くために、遣わされたのよ。やれ!!」
一吼えの後、一斉に襲い掛かる怪物たちに、ユーリはサーベルを構えて立ち向かう。一方、丘の上からその様子を見ていた、旅人用のマントに身を包んだ二人が身構える。
「まずい!助けるぞ!!」
「ああ!!」
二人はマントを翻し、盆地へ駆け下りて行った。

第２４話　弟子入り

怪物たちの爪をサーベルで受け止めるユーリ。だがその度に、左腕の傷がうずく。
「（ぐっ・・・・・・）」
痛みで集中力を削られるユーリは敵に決定打を与えられず、追い詰められていた。
「くそっ・・・・・・」
「私のことはいい。早くここから離れるんだ」
「ダメだ。あんたを見捨ててしまったら、今までやってきたことの意味がない」
「私一人のために、命を捨てるものじゃない！君には多くの命を救う使命があるはずだ！！」
片膝を付いたユーリに、トドメを刺そうと怪物が襲いかかる。万事休すと思ったその時、マントを羽織った二人が飛び出して怪物を切り伏せた。その一人が、マントについてたフードをめくる。
「よう、アウグス。久しぶりだな」
「お前、クトゥリアか」
アウグスが目を見張っていると、襲いかかる怪物を、もう一人――ディステリアが剣で切り伏せる。
「お前・・・・・・さっき町で会った」
「あんたが、教会に立ち向かう道化の騎士だったのか。まだ子供じゃないか」
「そういうお前だって子供だろ？」

「何言ってやがる。俺は今年で１６だ！」
「なっ・・・・・。俺は、１４・・・・・・」
「なんだ。やっぱり子供じゃないか」
「その言動だと、お前も変わらないぞ」
呆れたクトゥリアの言葉に、「うっ・・・・・・」と言葉を詰まらせる。そこに怪物たちが襲いかかるが、ディステリアは剣の一閃で弾き飛ばす。
「しかし、おまえが人を連れているとは、珍しいな」
「聞いて驚くな。お前の弟子になる予定の少年だ」
「何！？クトゥリア。じゃあ、その人が？」
「ああ。おまえを預けようと思っている魔術師、アウグス・フォン・ホーエンハイムだ」
「本業は医者だ」
クトゥリアに縄を切ってもらい、解放されたアウグスが言う。そうしている内に襲ってくる魔物たちを、二匹、三匹と切り伏せた。
「それにしても、こいつらなんなんだ？クルキドとは違うようだが・・・・・」
「〈ディゼア〉。人の欲望と憎しみにより作り出された魔獣だ」
「なんでそんな奴らが・・・・・・！！」
次々と現れるディゼアにてこずっている間、審問官は教会騎士たちに指令を出した。
「さあ、神に仕える我が教会の教会騎士の諸君。この機会に異端者どもを、根絶やしにするのだ！」
腕を振り上げ、高らかに宣言する異端審問間。ところが教会騎士たちは戸惑い、所々、顔を見合わせている。
「どうしたというのだ！？」
苛立った異端審問間が声を荒げると、一人の教会騎士が進み出た。
「恐れながら。その怪物は、本当に神がお遣わしになられたのですか？今あの男が、欲望がどうとかと・・・・・・」
「ええい。異端者などの言葉に耳を貸すな！我らは神に仕える異端

審問官だ。我の言葉はすなわち、神の言葉！」
「し・・・・・・しかし・・・・・・」
「ええい・・・・・・黙れ！！」
戸惑う教会騎士に、興奮で頭に血が上った審問官は進み出た教会騎士を手持ちの剣で斬った。それを見た他の教会騎士たちは、戸惑った。
「何を驚いている。この者は我に逆らった、つまり異端者だ。異端者を狩るのが、貴様らの仕事であろう！！」
「だ・・・・・・だからって、いきなり斬ることはないだろう！！」
「そうだ。神に仕える者が不意打ちなんて、するはずないだろう！！」
「おまえこそが異端者だ！！」
やがて教会騎士たちの中から、「そうだ、そうだ」と声が出始める。それを見た審問官が怒りをあらわにした。
「えええぃ。神を裏切る愚か者が。この私が、まとめて成敗してくれる！！」
そういうや否や、体から黒いエネルギーが放たれ、審問官の体が黒く強大な巨人の姿となった。教会騎士たちは驚き、浮き足立った。
「ハハハハハハ。異端者ども、まとめて片づけてくれるわ！！」
太い腕を振りかざした瞬間、背中に翼を生やしたディステリアが割って入る。巨人の腕を剣がぶつかるが、力は圧倒的でディステリアは地面に叩きつけられる。しかも、その衝撃で剣が折れた。
「ぐわっ！くそっ・・・・・・」
「まずいな。仕方ない・・・・・・ディステリア、受け取れ！！」
黒い翼のような形のそれは、クトゥリアに取り上げられていた天魔剣。地面に倒れたままそれを振り、巨人の拳を払う。
「なんだと！？」
「！？あの力・・・・・・ただの筋力強化じゃない・・・・・・」
怪訝そうに眉を寄せるクトゥリアだが、戦闘中に考え事をできる余裕はない。再び拳を振り下ろそうとする巨人に、地面から無数の緑

色の光の鎖が飛び出し、審問官に絡みついた。
「こ・・・・・これは・・・・・・・」
巨大化した審問官の後ろには、右腕をかざし、緑色の光を放っているアウグスの姿があった。
「樹海捕縛・・・・・・アルボルアレスト!!」
手を握ると、緑色の鎖が体を締め付ける。そこに、ディゼアを片づけ、高くジャンプしたユーリがサーベルで切りかかる。
「そこだ!!」
サーベルは大きく、審問官の胸をバツの字に切り裂いた。そこに、落ちるユーリと入れ違いに飛び上がったディステリアが、魔力を帯びた剣先を向ける。
「貫け!!ルミナスランス!!」
突き出した剣から放たれた巨大な光の槍が、二つの傷が重なっている部分を貫いた。
「ぐぎゃあああぁぁぁっ!!!おのれえぇぇぇっ!!」
断末魔の叫びを上げ、審問官の巨大な体は黒い光の粒となって崩れ去った。

―※＊※―

一方、地下室で激しい戦いを繰り広げているラスプとパラケル。不意に、ラスプの動きが止まった。
「!?・・・・・なんだと、我が分身がやられた!?」
「隙あり!!」
パラケルが叫ぶと、腕についている刃の広い剣でラスプの胴体を切り裂いた。
「がは、あああああっ!!」
すぐに振り返り、剣を大きく縦に振り下ろす。

「が・・・・・はあっ・・・・・・・」
地下室の床に両膝を着くと、そのまま体が青い炎に包まれて、灰となって崩れ去った。地下牢に入れられている人たちは口々に、
「や・・・・・・やった・・・・・・」「異端狩りの親玉を倒した」
「あいつ、人間じゃなかったのか」
と言っていた。
「みんな、待たせたな。すぐに出してやるよ」
すぐさま牢のカギをこじ開けると、中から「やった～」「これで帰れるぞ～」と、人々があふれ出した。
「分身がどうとか言ってたけど・・・・・・クトゥリアたちがうまくやってくれたのかな？」
そう呟くと、パラケルも急いで地下室を後にした。

―※＊※―

再びパラーナ盆地。審問官に意を唱えたために着られた教会騎士は、アウグスが治療に当たっていた。
「これでよし。だが、これはあくまで応急処置だ。すぐに町の医者に見せたほうがいい」
「わ・・・・・・わかった」と、怪我をした教会騎士を抱えて立ち去ろうとするが、一回、後ろを向いた。
「あ・・・・・・あの・・・・・・」
「ん？」と首を傾げるアウグスに、「す・・・・・・すまなかった」と教会騎士が謝った。
「・・・・・その言葉は、私にではなく・・・・・・今まで犠牲になった者たちに言うがいい」
教会騎士は「わかった」と言うと、仲間を引き連れ、近くの町に向かった。

「手持ちの薬と魔術であそこまで治すとは、さすがだ。腕は落ちていないな」
「バカを言うな。魔術での治療はあくまで応急処置。自然治癒には劣る」
「それでも、さすがだ。彼を預けるには十分だ」
そう言うと、ユーリと話しているディステリアのほうを向いた。ユーリは左腕に包帯を巻かれており、目を隠す仮面は外していた。突然、ユーリがアウグスの所に近づいてきた。
「アウグスさん。あなたと一緒に、女の子が連れて来られませんでしたか？」
「女の子？さあ、知らないな？」
「俺と同じくらいの、年格好の女の子なんですが・・・・・・」
アウグスは考えたが、「いや、心当たりはない」と首を振った。
「そうですか・・・・・・くそっ、奴らにいっぱい食わされたか・・・・・・！！」

―※＊※―

一方、ファンラス港から十キロ離れた沖を進む、一隻の船。その中の一室では、椅子に縛られたミリアとレマレーナがいた。
「フフフ。ここまで沖合いに来れば、さすがに道化騎士（ロリスリッター）もこれまい。残念だったな？小娘」
ミリアは、黙ってレマレーナを睨んでいる。
「フン。今頃、道化騎士（ロリスリッター）は、我らの手駒が始末しているだろう」
「・・・・・そんな・・・・・ユーリは決して、あなたたちの思惑通りにはさせないわ！」
「ほう。貴様も気付いていたとは、な。あの道化騎士（ロリスリッター）とかいう奴の正体に・・・・・・」

ミリアは驚いた。敵は道化騎士の正体を知っていながら、今まで放っておいた。それが理解できなかった。
「どういうつもり・・・・・・とでも聞きたそうな顔をしているな。我々としてはすぐさま片づけたかったのだが、我が主が危機感をあまり持っていなくてね。ある程度、成果が出さえすればいいという性格だったから・・・・・・」
そう言いながらミリアに近づき、懐の内ポケットから暗い紫色の液体が入った小瓶を取り出す。
「でも、私は違う。確実な勝利のためには、多少、余計なことでもしなければならないと考える。そう、君を我が手駒にすることも」
小瓶にはめてあるコルクを取ると、無理やりミリアの口にねじ込む。飲まないように抵抗するが、無理やり頭を上に向かせられる。と、その時、船を大きな衝撃が襲った。思わずビンから手を離したため、ミリアの口から外れて下に落ちた。
「ちっ、何事だ!?」
入り口近くにある無線を手に取る。
「何者かが船内に侵入を・・・・・・っ!?どわあぁっ!!」
「!?」
爆音と共に連絡が断たれて数秒後に、ドアも吹き飛ばされた。爆炎が晴れるとそこには、肩に剣を担いだ背の高い男性が立っていた。
「くだらない趣味をお持ちで・・・・・・」
「何者だ!?」と構えるレマレーナに、男は部屋に足を踏み入れ、笑顔で答えた。
「旅好きの海洋神です。そこまで言えばおわかりでは・・・・・・？」
「なんだと!?では、貴様・・・・・・」
身構えた頃には、男はすでに通り過ぎており、レマレーナは切り伏せられていた。
「暴れすぎたんでな。今はこれくらいで勘弁してやる」
床に倒れるレマレーナにそう言うと、ミリアに近づいた。

「あなた・・・・・・は・・・・・・」
「あんたには名乗らなきゃわからないか。俺はマナナン・マク・リール。さっきも言ったとおり、旅好きの海洋神さ」
そう言って、彼女を縛っているロープを切った。
「さっき暴れすぎたって言っただろ？おかげで船が沈みそうなんだ。とにかく、脱出するぞ」
椅子から立ち上がろうとしたその時、突然、ミリアが「ううっ」と片膝を着いて苦しみだした。
「・・・・・・熱い・・・・・・・体が・・・・・・・熱い・・・・・・・」
「なんだって！？あの神父風の野郎・・・・・・何か変なのを飲ませやがったな？」
急いで自分の道具袋をあさったマナナン・マク・リールは、青い液体が入った小瓶を取り出した。
「よし、パナシーアが残っていた。こいつでなんとか・・・・・・」
入れ物のふたを開け、ゆっくりミリアに飲ませる。薬を飲んだミリアが深呼吸すると、症状が落ち着き始めた。
「よし、これで・・・・・・」
ところが次の瞬間、ミリアの体がだんだんと縮みだした。そして最後には、7歳ぐらいの少女の姿になってしまった。
「なっ、これはいったい・・・・・・」
ビンのラベルを見るが、ラベルには確かに万能回復薬（パナシーア・ポーション）と書いてある。ではこの状況はいったい。マナナン・マク・リールは、恐る恐る残ったポーションを舐めた。
「！？・・・・・うえっ！！ぺっ、ぺっ、なんだよ、これ。常若（じょうじゃ）薬（くやく）じゃねぇか！？」
思わず吹いたが、元々神々に合わせて作った薬なので、髪であるマナナン・マク・リールに悪影響はない。が、今飲ませた目の前の少女は。
「（まさか・・・・・・入れ替わった・・・・・・？）」

余りの惨状に唖然としていると、幼い体になったミリアがじっと見ていた。
「ん？なんだ？・・・・・・」
「・・・・・私、どうなったの？」
顔を逸らして黙っているマナナン・マク・リールに、ミリアは自分の体を見つめる。ぼんやりとした意識がハッキリしてくると、自分の体に起きた事実を認識した。
「なんで縮んでるの・・・・・・何飲ませたの！？」
立ち上がるミリアだが、目眩がしてふらつく。それを受け止めたマナナン・マク・リールを、ミリアは恨みがましく見上げた。
「ケヒトのヤロ～！！」
ティル・ナ・ノーグに帰ったら一発ぶん殴る。そう心に決めたマナナン・マク・リールだったが、まずはとりあえずこの沈みかけの船から脱出することにした。

―※＊※―

翌日。ユーリの家。
「見付からなかったのか・・・・・・？」
アウグスの問いに、「ああ」とユーリは、崩れるようにソファーに座った。
「俺が行った時には、港からはもう船が出ていた。パラケルがいてくれれば、追いかけられたかもしれなかったが・・・・・・」
「いなかったのか・・・・・・それは、タイミングが悪かったな・・・・・」
クトゥリアが悔しそうに唸ると、ディステリアたちも表情を曇らせる。
「昨日、おまえが港に急いだ時に、パラケルから連絡が入ってな。

異端狩りの親玉を倒し、教会の地下に閉じ込められていた人々を助け出したそうだ」

「そうか・・・・・良かった」

そう呟いたユーリだが、その声は心から喜んでおらず、落胆に満ちていた。

「（俺がもっと早く・・・・・教会の中を移動していれば・・・・・）」

己の無力さに歯軋りするユーリ。それを見て、ディステリアは何かを言おうとしたがクトゥリアに止められた。

「よせ、今はそっとしておいてやれ。お前には、それがわかっているはずだ」

ディステリアが何も言わずにうつむくと、「アウグス、こいつの修行のことだが・・・・・」と切り出した。

「わかっている。明日にも取りかかりたいところだが、その前にやることがある。できるだけ早く終わらせて、『例の島』に渡っておかなければ」

それを聞き、「『例の島』？」と首を傾げるディステリアに、クトゥリアもアウグスも深くは語らなかった。

「お前はどうする？このまま、ミリアって子を・・・・・」

「いや・・・・・俺もそこに行く」

うつむいたまま答えるユーリに、「し、しかし・・・・・」とディステリアが話しかける。

「審問官を率いていたラスプも倒され、その補佐であるレマレーナも行方不明。こうなれば〈恐会〉の機能は麻痺し、自然と異端狩りもなくなるだろう。それ以前に・・・・・」

怪我をした腕を掴み、ユーリは顔をしかめる。

「〈恐会〉は明らかに、裏で何者かが糸を引いていた。そいつらからミリアを取り戻すには、今の俺では足りない・・・・・」

〈恐会〉本部で戦った〈ディゼア・トルーパー〉に手も足も出なかった自分を思い出し、悔しさに奥歯を鳴らす。それを見て、アウグ

スは溜め息をつく。
「わかった。だが、俺に師事する以上、無茶な真似はさせない。長い時間をかけて確実に実力を高めてもらうから、焦らないことだ。いいな」
「・・・・・わかった」とユーリが頷くと、「さて」とアウグスはクトゥリアに目を向ける。
「出発は早いほうがいい。今日できる準備は今日の内に済ませておこう」
「えらく急だな・・・・・それにこの国のことだが、このまま放置して大丈夫か？」
「少なからず、教会の意に反していた貴族もいることだし、後はそいつらが後片付けしてくれるだろう」
「そうだな。この国のことは彼らに任せ、我々は我々のやるべきことをやろう」
互いに頷くクトゥリアとアウグス。そんな二人を見て、ディステリアは首を傾げる。
「我々のやるべきこと・・・・・って？」
その質問にクトゥリアは、「今にわかる」と意味深な笑いを浮かべた。

―※＊※―

その後、ファンラス国では。教会が崩壊したことにより、政権は再び貴族の元に戻り、貴族中心の政治が敷かれると思われた。しかし、同じエウロッパ国内、特に隣国に当たるイグリースからの強い働きかけと、教会のやり方に反発していた貴族たちにより、国の仕組みは少しずつであるが改善されていった。そして今まで長い間、『奴隷』と呼ばれていた者たちはその呼び名から解放され、他と同じ『

人間』として生きることを許された。

しかし、残念ながらそれは、今から１０年も後であり、

この物語が語られる間はかなわない話である。

第２４話　弟子入り（後書き）

用語解説

〈パナシーア〉

〈パナシーア・ポーション〉の略称で、回復用の液体薬である。その作り方は神々が編み出した物で、名前は〈万能薬〉という意味を持っている。効果を抑えた物をパラケルが開発、販売している。

〈常若薬〉

北欧神話でいう、『イドゥンの金のリンゴ』。神には若い肉体維持の効果があるが、人間が飲んでしまうと今の状態から若く幼い体になってしまう。人間が手に入れる危険性を考慮して今は作っていないが、百年以上昔に作った物がいくつか余っており、成分の中和方法が見つかっておらず下手に処分できないでいる。

第２５話　忍び寄る異変

会議から二週間。神々の神殿の中では、ゼウスがアースガルドでの出来事について聞いていた誰かが会話している。
「そうか、分かった。だが、一つだけ府に落ちないことがある」
ゼウスの問いに、「なんでしょうか？」と来訪者は聞いてくる。
「君たちは、今回の争いも介入しないつもりかね？」
「さあ。あなた方は介入するのですか？ゼウス殿？」
「質問を質問で返すのは、人間がよくやる失礼な行為ではないか？違いますかな・・・・・・」
顔をあげて、医者が着る白衣を身にまとった、来訪者を見る。
「天界の・・・・・・ラファエル殿」
医療の天使は、「『さあ』とお答えになったはずですが？」と、両腕を肩の辺りに上げ聞き返す。
「あなたこそ、神、人間問わずに浮気してらっしゃるらしいではないですか。『大神』の名と、奥様が泣かれますよ」
ラファエルはメガネを指で上げながら、嫌味とも取れることを言う。
「ほっといてもらおうか。しかし、次の敵の狙いはなんなのだろうな」
「ティル・ナ・ノーグの方々の話によると、彼らは人間や妖精の不の感情により生み出された。さらに神さえも操ることができる、と言う恐ろしい能力の持ち主らしい」
「真に恐ろしいな。しかし、なぜ我ら神を操ることができるのだ？」
「さあ、どうしてでしょう」と言ったが、実はラファエルにはその

理由の見当は付いていた。
「とにかく、我々は我々で何か対策をしておきますよ。いかに人数が多いと言っても、天界を守るだけで手一杯ですから。何しろ、エンゼルは数が多く伝令役にはもってこいなので貸してくれ、と言われましてね」
「オーディン殿か」とゼウスが聞く。
「自分たちにも、ワルキューレと言う便利連絡役がいると言うのにやれやれ、と言わんばかりに溜め息をつき、額に指を当てた。
「とにかく。あなたも操られないように、注意しておいてください」
帰り際に言ったその一言で、ゼウスはラファエルが謎の敵が神を操れる理由に、見当がついていることに気付いた。

―※＊※―

同日の夜。ナイルの恩恵を受けた国。外国では〈ジェプト国〉と呼ばれていたが、地元では王朝と共にこれといった名称もなく、数百年も栄えていた。しかし、ある日その王が死に、彼に仕えた家来たちがその死を悼み、悲しんでいた。その時、どこからか突風が吹いてきて、王の遺体を消し去った。家来たちは騒然となって王の遺体を捜したが、空の玉座の上に王の遺体が浮かんでいるのを見つけた。
「お前たちに、最後の命を伝える」
家来たちは騒然となった。医師からは死亡が確認された王の遺体が喋っているのだ。そして王は、自分の墓を、それも町の人を使って作るように命じてきた。無論、家臣は反対した。
「聞き入れられない場合は、ナイル川を氾濫させ、この国を破滅させる」
こう脅されては、言うことを聞かない訳には、いかず家臣たちは腹が煮えたぎるのを我慢し、頭を下げた。

「・・・・・御意・・・・・・・」
「しかと伝えたぞ」
一陣の風が吹くと、王の遺体は忽然と姿を消した。

―※＊※―

オリュンポス山のふもとに、ディステリアとクトゥリアが来ていた。
「さて、ここで問題だ。弟子入りする人物を探し当てた俺たちが、いまだ旅を続けている理由は何か？」
「知りませんよ。大方、暇つぶしじゃないんですか？」
不満そうに答えたディステリアに、クトゥリアは眉を寄せて呆れる。
「これから格上の奴が何人もいる連中を相手に、暇つぶしをする余裕があるのか？」
「なら、修行か？」と聞いたディステリアに、「当然」と返した。
「弱くならないためには、基礎を繰り返して実力を維持する。強くなるためには、実力が同等か上の者と戦えばいい」
「アウグスって人の都合がつくまで、基礎を繰り返すということですか？」
「半分正解だ。基礎を維持してたら弱くなることはないが、強くなることもない」
「じゃあ、俺が外したもう半分は？」
眉を寄せて聞くディステリアに、クトゥリアは上を見上げる。崖に阻まれて見えないが、その視線の先にあろうものはオリュンポス山の山頂。
「・・・・・さて、問題はどうやって都合をつけるか、だ」
「なんの話だ？」
聞いてきたディステリアに、「なんでもない」と顔を向けて誤魔化す。

「しばらくはここに滞在して基礎を固める」
「おいおい、正気か？ここには強い魔力が流れているのが俺でもわかる。そんなところに長居したら、ここを司ってる神やら妖精やらが文句を言って来るんじゃ・・・・・・」
懸念を口に出すディステリアに、「そうか、その手があったか」とクトゥリアは目を丸くする。
「よし、テントを張ろう」
「ちょ、聞いてなかったんですか！？」
文句を言いそうになったがこれ以上言っても無駄だと悟り、ディステリアは溜め息をついた。この瞬間、オリュンポス山のふもとに置いて、ディステリアとクトゥリアの滞在が決まった。

―※＊※―

ある湖の湖畔に一人の少女が座っていた。彼女の名前はルルカ。
「（・・・・・ふう・・・・・）」
ヴィーラ、ニクシー、ヴォジャノーイ、南北のルサールカと人間の血を持つ複雑な家系と、それゆえに類まれ見る美貌の持ち主である。彼女には父も母もいない。両親は幼少の頃に起きた殺人事件の犠牲となり、命を落としてしまった。それからは祖父母夫婦の下で暮らし、昨年から二人の反対を押し切り一人暮らしを始めた。その頃からだった。辛いことや悩みがあると、決まってこの湖に足を運んだ。
「（でも・・・・・なんでいつもここに来るんだろう・・・・・・？）」
いつも無意識の内に来るので、理由ははっきりとわからないが、この湖は昔、両親と一緒に遊んだ記憶がある。ほとんど覚えていない幼少時の記憶の中で、唯一、はっきりと覚えている記憶だった。
「（・・・・・誰かを傷つけることもいとわない、もう一人の私・

・・・・・）」

今、彼女を悩ませているのが、時々、表に現れる、彼女自身の『もう一人の人格』。いつもは彼女自身に危機が訪れると出てくるのだが、他者を平気で傷つける性格なので、彼女自身、恐怖を持っていた。それは日に日に大きくなり、彼女を悩ませるほどにもなっていた。

「（・・・・・・・・帰ろう・・・・・・・）」

大抵の悩みはここに来ると解決するのだが、彼女の『もう一人の人格』については、どこか中途半端で終わってしまう。それでも、暗くなる前に帰ろうとした時、どこからか声が聞こえてきた。

「（なんだろう・・・・・・？）」

声がするほうに向かって、ルルカは草むらを進んで行く。すると、草むらの向こう側に、商人らしき男と黒尽くめの男がいた。黒尽くめの男は男から、何やら紙らしき物を受け取って話をしていた。

「ジェラレ、この国で作られている武器の流れを調べている奴らがいる。もし、そいつらにばれたら・・・・・・」

「大丈夫、ばれやしませんよ。もしばれたとしても、我々には辿り着きません」

冷たく笑いを押し殺す、ジェラレと呼ばれた黒尽くめの男に対し、商人の男は慌てた。

「ちょっと待て。話が違うだろ。ばれても決して捕まりはしない、って言うから手を貸してたのに・・・・・・」

「それは我々の話ですよ。さすがに、あなた方までは守れないので、悪く思わないこと」

笑いを堪えるジェラレに対し、「は・・・・・・話が違うだろ」と訴える商人。

「な・・・・・・なら・・・・・・ばらしてやる。お前たちが企んでいること、全てを・・・・・・」

「なら・・・・・・死あるのみだ!!」

突然、商人の体をジェラレの黒い鱗に覆われた腕が貫いた。腕が抜

かれた体が倒れるのを見て、両手で口を覆って息を呑んだルルカに気付くと、「見たな!?」と彼女のほうを向いた。
「み・・・・・見てません」
すぐさま両目を手で覆ってごまかそうとしたが、しばらく唖然としたジェラレに怒鳴られた。
「ふざけてるのか~!!」
「あわわわ・・・・・・」
両目を覆うのをやめて慌てると、ふとジェラレが首を傾げた。
「貴様、どこかで・・・・・・!?あの時のガキか!?」
一瞬、どういうことかわからず、「なんのこと」とルルカは首を傾げた。
「知らない・・・・・って言うのか?まあ、そうだろうな。貴様はまだ、小さいガキだったからな・・・・・」
冷たく笑うジェラレを見た時、彼女の脳裏に何かがよぎる。だが、はっきりとしていないため、よくわからなかった。
「自分の命が危ないっていうのに、まだ小さなガキを庇うために飛び出した、バカな男がいたことは忘れもしねぇ。俺はそいつのせいで、水の中に閉じ込められて捕まったんだからな」
そう言って笑った時、目を見張ったルルカの頭にある言葉がよぎる。

―※＊※―

~―回想―~

「危ない、ルルカ!!――――!!」
突然した声の後に、飛び散る鮮血。
「逃がしは・・・・・しない・・・・・!」
男性の声の後、大気中から噴き出した水が、誰かを中に閉じ込める。
「よか・・・・・った・・・・・」

フッと笑いかけた女性が、視界から消える。その後、地面に倒れている血まみれの男性と女性、同じく血まみれで笑みを浮かべて立っている男性が視界に入る。その男は、今、目の前にいる男だった。

〜―回想終わり―〜

―※＊※―

「・・・・・あなたが・・・・・・お父さんと・・・・・・お母さんを・・・・・・・・・・ああああああああっ！！！」

頭を抱えたルルカが悲鳴を上げた時、体から凄まじい魔力が放たれ、彼女のもう一つの人格が目を覚ました。

「あん？なんだ？まとう空気が変わりやがった」

全身から殺気を放ち、殺意のこもった目で睨みつけるルルカを見て、ジェラレはにやりと笑う。

「敵討ち・・・・・・でも、するつもりか？」

「それもある。・・・・・・が、貴様の耳障りな声を黙らせる！」

「面白い。やれるものなら、やってみろ！！」

挑発に対し、すぐさまルルカは、左右へのフェイントを入れながらも殴りかかる。だが、ジェラレはその全てを掌で流した。

「くっ・・・・・・なら、これで・・・・・・！」

一端、離れると両手に魔力を集中させ、それで湖の水を引き寄せ、ジェラレを包み込んだ。だが、その水を突き破って、服からの露出部分が黒い鱗に覆われたジェラレが、腕に生えた爪でルルカを切りつけた。

「ぐっ・・・・・・くそっ・・・・・・」

後ろに下がって草むらに膝を着いたルルカに、ジェラレは「ハハハハハハハハ」と、高らかに笑い声を上げた。

「ラトデニのおっさんがくれた力は最高だぜ。こんなガキも、簡単

にひねられる」
ルルカは胸の傷を押さえて、「クッ」とジェラレを睨むが、痛みで体が動かなかった。そんな彼女に、笑みを浮かべたジェラレが近づく。
「よく見りゃあ、いい女じゃねぇか。アジトに連れ帰って、可愛がってやるぜ」
もうだめかと思ったその時、突然、ジェラレを衝撃が襲った。吹き飛ばされたジェラレが周りを見ると、一角に旅人用のマントに身を包み、頭に三角の帽子を被っている男が立っていた。
「貴様・・・・・・何者だ!?」
「下賤な趣味の持ち主などに、名乗る名前は持ち合わせていない」
そう言って、マントの下から右腕を上げる。声の調子から、男は若い少年のようだった。
「俺もヤローには興味ねぇ。すぐに・・・・・・消えな!」
鱗の隙間から平たいトゲのような物を飛ばす。それらはマントを貫通するが、そこには地面に落ちたマント以外、何もなかった。
「なっ、どこに・・・・・・?」
すぐさま周りを見渡すが、突然、体に痛みを感じる。気付くと、左肩から胸の右側にかけて切られ、鮮血が飛び散っていた。
「下賤な輩に、俺を捕らえるなど・・・・・・不可能!!」
側には剣を振り上げた体勢の、謎の少年。ジェラレはすぐさま左腕を振るが、少年はルルカの側にいた。
「くそ・・・・・・。貴様、何者だ・・・・・・!?」
「最初に言ったはずだ。下賤な輩に名乗る名など・・・・・・ない」
それだけ言うと、ルルカを抱きかかえ、木の枝を飛び越えながら立ち去った。
「おのれ・・・・・・この屈辱、忘れんぞ・・・・・・!」
残されたジェラレは、悔しさに拳を握っていた。

―※＊※―

湖からだいぶ離れた所で、謎の少年はやっとルルカを下ろした。
「ここまで来れば、もう大丈夫だろう」
遠くを見る少年に対し、ルルカは警戒の眼差しを向けている。それに気付いた少年は、「睨むなよ」と笑った。
「あなたは何者なの？どうして私を助けたの？」
「俺はしがない旅人。助けた理由は君が襲われてたから・・・・・・じゃあ、ダメかな」
それを聞いたルルカは、ますます彼を警戒した。さすがに、これには少年も懲りたらしい。
「わかった、ちゃんと教えるよ。俺の名はクトーレ。クトーレ・ベオヴォルフ。ある事情で旅をしてるんだ。理由はさっきも言った通り」
「私は・・・・・・ルルカ・ヴォージャよ」
フッ、と笑うと「よろしく、ルルカ」と、手を差し出してきた。ルルカは一瞬、その手を取りそうになったが、目つきが変わるとその手を払いのけた。
「お前・・・・・・何者だ。何を企んでいる!!」
だが、彼は「何も」と言って、微笑むだけだった。
「これまた、疑い深いペルソナだね～」
なぜか笑うクトーレに「な・・・・・・なんだと!?」と掴みかかろうとするが、すぐに表人格が出てきて押さえ込まれてしまった。
「もう・・・・・・もう一人の私ったら・・・・・・す、すいません。変な独り言を言って」
頭を下げるルルカに、「別に気にしてないよ」と答えるクトーレ。
「ところで・・・・・・ペルソナってなんですか・・・・・・？」
「『仮面』『人格』『心の化身』。君の場合は、『別人格』だね」
ルルカは「はあ」と呟き、膝を抱えて考え込む。

「別人格・・・・・か」
「町まで送ろうか？」
「いい。まだあなたを、信用した訳ではないから」
そう言って、ルルカは町のほうに駆けて行った。それを見送ったクトーレは、一息ついて携帯電話を取り出した。ボタンを操作して耳に当て、コール音を聞いてしばらく待つ。
《――特務回線、レベル三。この通信は、機動部隊隊員にのみ使用を許された機密回線です》
応対したのは女性の声だが、どこか無感情。対応するプログラムによって聞こえる音声だとすぐわかった。
《使用を望むのであれば、こちらの発信音の後に暗号コードの送信をしてください。コードは音声、メールのどちらにいたしますか？》
「音声だ。コードは・・・・・・」
辺りに気を使いながら、クトーレは決められた暗号を口にする。それからしばらくして、向こうから返答があった。
《合言葉と音声の照合終了。８２．７パーセント、クトーレ・ベオヴォルフのものと一致いたしました。ご用件をどうぞ》
「クトゥリア・クトゥガスター・トレップにつないでもらいたい」
《コールを行います。しばらくお待ちください・・・・・・》
しばらく電話の呼び出し音がする。静かに待つクトーレの耳に、再び女性の音声が聞こえる。
《クトゥリア・クトゥガスター・トレップ所持の通信端末につながりません。重要な用件なら、伝令を飛ばします》
ちなみに、この時出てくる伝令とは、小天使であるエンゼルや戦女神であるヴァルキリー。エンゼルはともかく、ヴァルキリーに関しては主であるオーディンが協力させてくれている。
「そうしてもらいたい。至急、彼に伝えてもらいたいことがある。ランクＡの者で伝えてもらいたい」
《生憎ですが、戦闘及び伝令ランクＡの者は全て出払っております》
「むっ。なら、動ける者で一番高いランクは？」

《Bランクです》
「わかった。頼む」
《では、発信音の後にメッセージをどうぞ》
一度目を閉じると、発信音が聞こえる。噛まないように一呼吸置くと、クトーレは目を開けた。
「俺だ、クトーレだ。至急、伝えたいことがある」
無論、辺りの警戒は怠らない。

その一週間後、事態は動いた。

第２６話　暴風の襲撃者（前書き）

人気の高いオリュンポス１２神登場。しかし、無双な彼らが好きな方は引き返したほうがよいかと。

第２６話　暴風の襲撃者

その一週間後。神々の会議場に、オリュンポスの神々が集結していた。アレス、アテナ、ヘルメス、アフロディーテ、アポロン、アルテミス、デメテル、ヘラ、そしてゼウス。ポセイドン、ヘスティア、ヘパイストスは来ていない。

「皆そろったな。では、会議を始める」

「待った」と、アレスがゼウスを止める。

「ポセイドンとヘスティアとヘパイストスが来てないが？」

「バカね。ポセイドンは海の神殿。ヘスティアはかまど、ヘパイストスは鍛冶場から離れられないのよ」

呆れ顔のアルテミスに、「な、なんだとぉ？」とアレスが突っかかる。

「おいおい。喧嘩している場合か。では、はじめるぞ」

―※＊※―

オリュンポス山やそのふもとの町では何事もなく時が過ぎていく。しかし、それは嵐の前に訪れる、一時の静けさに過ぎなかった。神々の会議が行われている頃、ホーライの一人、エイレーネが山を登っているものに気付いた。

「ん？どうしたの？」

同じくホーライの一人、アエルが聞くとエイレーネが答える。

「何か・・・・・来る」
その場にいたホーライたちが、一斉に山の斜面を見る。すると、そこには、上半身は羽毛に覆われ、全く空を飛べそうにない、骨組みだけの翼を背中に持ち、肩からは左右それぞれ二本ずつ首が出ており、下半身が蛇のようになっている、巨大な怪物がいた。
「あ、あれはまさか・・・・・・」
「テュポーン!?」
「グガアアアアアアアッッ!!」
アウゲとデュシスが慌てた後、謎の怪物が吼え、ホーライたちは浮き足立った。
「ほ、ホントにテュポーン!?」
「だ、大丈夫よ。例えテュポーンでも、この群雲の門は・・・・・・」
ディケとメセンブリアが平静を保とうとする。だが、怪物が雲の中を突き進むと、群雲の門が閉じているにも拘らず、神界の入り口、ホーライたちがいる場所へとやって来てしまった。
「グガアアアアアアアッッ!!」
「き、きゃあああああああぁ!!」
怪物が再び吼えると、ホーライたちは悲鳴を上げ、我先にと逃げ出した。無理もない。この怪物は、かつてオリュンポス山に乗り込み、十二神の長であるゼウスを打ち破り、幽閉した怪物、テュポーンにそっくりなのだから。怪物の雄叫びは、オリュンポスの神殿内に響き渡った。当然、会議をしていたゼウスたちの所にも。
「何事だ!?」
会議室の扉が開き、一人の神が入って来る。それはアレスの部下のボキスだった。
「大変です。神殿内に侵入者です」
「侵入者だと?そんなバカな。ホーライたちは何やってんだ?」
「そ、それが、群雲の門を苦もなく潜り抜けてきたらしいのです」
「そんなバカな!」と、ヘルメスが声を上げるとアテナも席を立つ。

「ありえない。あの門は簡単には潜り抜けられない」
立ち上がったアルテミスも、あごに手を当てて考える。
「昨日の内に進入していた？いや、昨日の見回りでは異常はなかったと聞いているし・・・・・・」
「さらに申しますと、その姿形はかのテュポーンにそっくりだと・・・・・」
「なっ！？」と神々は騒然とした。そんな中、最初に口を開いたのはヘルメス。
「バカな。テュポーンは確か父上が・・・・・・」
「それは確かにテュポーンなのか？」
「わかりません。ただ、姿が似ていると言うだけで・・・・・・」
アポロンが聞くと、ボキスは確信を持たないまま答えた。
「とにかく、行ってみよう」
現場に来たアレスたちは驚いた。他の神々が逃げる中、奮戦しているアレスの部下たちを圧倒しているのは、かつてこの場所に攻めて来た怪物と瓜二つだった。
「なんだ！？ホントにテュポーンそっくりじゃねえか！」
「姿だけじゃない。風をまとっている所も同じだ」
浮き足立つアレスとアポロン。他の神々も焦りの表情が浮かぶ。
「だからと言って断定するのは早い。アレス、アテナ、アポロン、アルテミスは攻撃、他の者は避難を誘導するのだ」
ゼウスの指示で、「了解」と言ったアレス、アテナ、アルテミスは、テュポーンに似た怪物に対し攻撃を開始し、ゼウス、ヘラ、ヘルメス、アフロディーテは負傷した者や戦えない者の避難に移った。分かれるや否や、
「喰らえ！！」
「でえぇぃ！！」
アレスが剣を振り下ろし、アテナが槍で突く。だが、二人とも硬い羽毛に弾かれてしまう。
「ぐわっ！」

「くそっ。これならどうだ!?」
今度はアポロンが金の弓矢を無数に放つが、怪物が腕を振った時に起こった風に阻まれてしまった。
「なんだと!?」
怪物は「グガアァァッ」と吼えながら移動し、殴りかかって来た。
アレスたちはすぐにその場を離れたが、拳と共に起こった突風に、吹き飛ばされてしまった。
「ぐわっ!!」
「くっ!!」
アレスとアテナは神殿の柱に叩きつけられ、呻き声を上げた。
「やっぱ・・・・・強ぇ・・・・・・」
「当然です。我々がテュポーンを元に作り上げ、さらにそこから発展させたのですから」
「誰だ!!」
アレスが叫ぶと、怪物の後ろから一人の男が出てきた。それに、アポロンが目を見張る。
「人間・・・・・だと・・・・・・?」
「貴様!神々の聖域に入り込んで、ただで済むと思ってるのか!?」
アレスが叫んだが、男は不気味に笑うだけだった。
「まさか・・・・・ここ最近起こっている事件を起こしている奴らか」
アポロンの言葉に「まあ、そうですね」と答えた。
「ククッ・・・・・バカな人間どもが例の場所を掘り起こしてくれたおかげで、我々はテュポーンのデータを得ることが出来た。模擬戦では本物を倒す程の力を持ってくれましたしね」
「本物って・・・・・あのテュポーンを倒したって言うのか!?」
「そんな。お父さまでさえ、あんなに苦戦したのに・・・・・・?」
目を見張るアレスとアテナに、謎の男が右腕を上げる。
「我ら〈デモス・ゼルガンク〉の力を舐めないで貰いたい。その気になれば、神でさえ手駒にできる」

「バカな！そんなこと、できる訳ないだろ！！」
残った力を振り絞って、アレスは謎の男に向かって切りかかった。
「愚かな」
何かが砕ける音がしたかと思うと、アレスの剣は折られ、胴を覆っていた鎧も大部分が砕かれていた。
「グアッ！」
「アレス！！」
「バカな・・・・・・」
アテナが叫び、アポロンが目を見張る。その場にいた神々は騒然となった。
「そんな！いくらアレスが、後先何も考えず、ただ一直線に突っ走って、人間にさえ負けるほど弱いと言っても、剣や鎧を砕かれるなんて・・・・・・・」
「おい！！！」
吹き飛ばされ、大きなダメージを受けたはずのアレスが、アルテミスの嫌味に突っ込みを入れた。
「くっ。お前・・・・・・性格、変わったか・・・・・・？」
アレスは鎧の砕かれた部分を押さえながら、苦しそうな表情で言った。
「デーモ。コイツラ、殺シテイイカ？」
「今回は力試しを命じられていたのだが、いずれ始末するんだ。今の内にやっておけ。テュポニウス」
「ワカッタ」
デーモの答えに、テュポニウスが応じた途端、放たれる殺気が強まった。アルテミスとアポロンは弓を構えた。
「くらえ！！」
二人は一斉に、金と銀の矢を無数に発射した。と、同時に左からアテナが攻めた。
「無駄ダ！暴風の絶壁（ケイモーン・ノテロス）！！」
テュポニウスが作り出した、文字通り暴風の壁が攻撃を阻む。アテ

ナはデーモの近くに着地し、金と銀の矢は放った二人のほうに跳ね返った。矢が当たろうとしたその時、雷の壁がそれらを阻んだ。
「これは・・・・・・」
「お父さま」
アポロンとアルテミスが向いたほうから、「みんな、大丈夫か」とゼウスがやって来た。
「ああ、なんとか・・・・・・つうか遅ぇよ、親父」
アレスの文句に、「文句を言うな」とゼウスが言う。
「今、全員の避難が終わったところだ。みんなジェプト国へ向かっている。お前たちもひとまずそこへ向かえ」
「・・・・・ジェプト国・・・・・・？」
それを聞いて一瞬、ニヤッ、とデーモに、「何がおかしい！！」とアテナが叫ぶ。
「いえ別に。親愛なる、アテナさま」
「神々の聖域を荒らしておいて、ぬけぬけと！！」
表面上は怒っていても、内面は冷静なアテナの攻撃は鋭いものだった。
「（この攻撃は、ちっ）」
一瞬、侮っていたデーモの脇腹を、槍が掠めた。
「逃げるのかよ。冗談じゃねぇ！！」
「堪えろ、アレス！今のまま戦えば、いくら我らでもただでは済まぬ！」
そうしている間にも、デーモを攻撃しているアテナのほうに迫るテュポニウスの足元に、ゼウスはすかさず雷を放った。
「貴様の相手は、私だ」
テュポニウスは移動をやめ、どちらを攻撃しようか迷っていた。
「ゼウスの相手をお願いします。オリュンポスを治める大神ですから、あなたの相手にはもってこいでしょう」
「ワカッタ」
アテナの槍をかわしながらデーモが下した命令に、テュポニウスは

頷いた。蛇の下半身をうねらせて標的をゼウスに定め、アポロンとアルテミスはアレスを担ぎ、その場を後にした。

「捻リ潰シテクレル」

「やれるものならやってみろ。雷霆の神槍（ブロント・ロンケー）！」

ギリシャ語で『イカヅチの槍』を表す名の攻撃はテュポニウスに向かうが、あっさり受け止められてしまった。

「無駄ダ。乱気流槍（アナタラクシ）！！」

「『電雷光槍（アストラペー）』！！」

暴風の槍と雷光の槍がぶつかり合う。だが雷光の槍はやがて暴風の槍を打ち抜き、拡散した雷を両腕でガードしたものの、ダメージを受けたテュポニウスは、「グアガァッ！」と悲鳴を上げる。

「（やっば。確かマナの属性の相性じゃ、風の属性を持つテュポニウスは雷の属性を持つ攻撃に強いが・・・・・それがゼウスの攻撃ならやばい）」

アテナの攻撃が止んでいることをいいことに、デーモはテュポとゼウスの戦況を分析していた。心ここにあらずのデーモを見て、アテナは屈辱感を感じた。

「貴様。我を侮辱する気か！？」

怒りを露わにした（と言っても内面は冷静）アテナはデーモに向かって行き、槍を突き出す。槍はデーモの頭を貫いたが、その途端、デーモの姿が消えた。

「我らを侮るな、と言ったはずだ」

「！？」

すぐに後ろを振り向くと、デーモが一瞬で6連続もの攻撃を放っていた。

「ぐっ！」

攻撃を受け、後ろの柱に叩きつけられたアテナは呻き声を上げた。

すぐ目の前には、勝利を確信した顔のデーモがいた。

「これで、終わりだな・・・・・？」

だがデーモは、今自分の目の前にある、自分の拳を受け止めている

物に気付く。それはアテナ愛用の盾、イージスだった。
「イージスだと!?いつの間に!?」
「もう遅い!!」とアテナが叫ぶ。
このイージスの盾には見た者を石に変える蛇の髪の魔女、ゴーゴンの魔力が込められている。最近になって、暴発を避けるために封印が施されたが、その封印は持ち主の身に危険が迫ると解ける仕組みになっている。
「グアッ・・・・・か、体が・・・・・・」
みるみるデーモの体が石になっていく。アテナはその瞬間に、イージスの魔力を放った。
「だあぁぁぁぁぁっっ!!」
魔力はデーモを包み、吹き飛ばし、完全に石化させた。
「はあ、はあ・・・・・・これで・・・・・・」
ゴーゴンの魔力は神々にさえ危険なのだ。ましてや人間が受けて平気であるはずがない・・・・・・はずだった。
「我としたことが・・・・・・」
石がビキッ、と音を立てて砕けだしたので、アテナは「なっ・・・・・・」と驚いた。
「油断した挙句、まだ慣れてもない力を・・・・・・使う羽目になるとはなぁ!!!」
石が完全に砕けると、中から漆黒の翼と漆黒の体毛に包まれた腕、その先の手に生えた鋭い爪、そして鋭い牙を持った男が出てくる。そこからは、先程とは違う禍々しい気のようなもの放たれていた。右腕の爪をぺろりと舐めて呟く。
「ヒヒヒ。いい声で泣いてくれよ」
それが気に触り、「無礼者!!」と叫んだアテナは、一瞬でデーモに近づき槍で付くが、そこにはもうデーモの姿はなかった。
「そんな・・・・・・バカな・・!?」
後ろに気配を感じ、盾を構えるが、攻撃は来なかった。
「くっ、どこに・・・・・・」

「ここだよ、お譲ちゃん」
声がしたその瞬間、背中に激痛が走った。見ると、背中が斬られ血が出ている。次は左肩、その次は右脇腹を斬られていた。
「ぐっ・・・・・・」
「ハッハ。今度は正面から行ってやるぜ」
その声と共に前方にデーモの姿が現れ、アテナは反射的にイージスを前に構えた。しかし、突っ込んでくるデーモに変化はなかった。
「バカめ。レベル2以上はあらゆる補助魔法を受けねぇんだよ！」
アテナは物凄い衝撃でイージスを弾かれてしまい、懐ががら空きになる。
「あばよ」
残忍な笑みを浮かべたデーモに言われた後、正面から爪の一撃をくらった。その一撃は、アテナの胸を覆っている鎧を意図も簡単に切り裂いた。
「なっ・・・・・・・」
誰も、今の状況を信じられなかった。
「アテナ！！」
今まさに止めを刺されようとしている娘の下に、ゼウスは駆け出した。それをテュポニウスが阻む。
「行カセハセン！！」
「邪魔だ！！」
腕に溜めた雷のエネルギーを武器の形へと具現化させた。
「雷霆の三叉槍（ブロント・トライデント）！！」
その槍から放たれる凄まじい雷はテュポニウスを貫き、アテナとデーモの間に割って入った。
「ぐがあああぁぁぁぁぁ！！」
「ぬおあっ！ちっ・・・・・」
その衝撃で、アテナの体が吹き飛ばされる。アテナはそのまま近くの群雲の門を通り、人間界に落ちて行った。
「このクソジジイがぁっ！！俺の獲物を逃がしやがって！！」

怒りを爆発させたデーモが向かって来た。倒れたテュポニウスの陰からゼウスは槍を投げつけたが、「おおっと！」と難なくかわされた。

「ハッハ～。いくら物陰から撃とうと、見えちまえば問題ない。もちっと頭を使って・・・・・・」

その時、上から影が落ちた。上を見上げたデーモが見たのは、怒りに満ちた形相のゼウスだった。先ほど投げた槍は、囮。

「頭を使え？こんな風にか！？」

怒りを昇華させるかのごとく、ゼウスはデーモを殴りつけた。一発殴った後に蹴り上げ、目の前に来たところでもう二、三発叩き込んだ。デーモは成す術も声を上げる間もなく、神殿の床に叩きつけられた。

「ハッ・・・・・・ハッ・・・・・・クソッ・・・・・・クソが・・・・・調子に乗りやがって・・・・・・」

床に手を突き、そのまま空中にいるゼウスを睨む。

「エロジジイが・・・・・・吠え面かかしてやる・・・・・・っ」

自分の胸に手を当てると、デーモの体から更なる圧力が放たれだした。

「行くぜ！レベルフォ・・・・・・」

ズガッ！

「ガハッ・・・・・・！」

叫んだその時、突然、岩を砕く音がしたかと思うと、悲鳴を上げたデーモが男の足を踏みつけていた。

「運用試験中にテュポニウスを失い、さらにまだ慣れてもないレベル3で敗北。大きな失態だな、デーモ」

驚くゼウスをよそに、男は冷ややかな目でデーモを見つめる。

「貴様はアポリュオン。どうしてここに・・・・・・？」

アポリュオン。それはこの地方の言語で『破壊者』を表す言葉。ゼ

ウスはその男から発せられる、デーモとは比べ物にならないほどの殺気を感じていた。
「俺のほうは終わったからな、貴様のほうを見に来た」
「（俺のほう？・・・・・・別の目的か・・・・・・いったい・・・・・・）」
アポリュオンは静かにゼウスのほうを向いた。と思ったら、音もなくゼウスの目の前に来ていた。
「！？」

第２６話　暴風の襲撃者（後書き）

劇中、「テュポニウスはテュポーンを倒した」と言っていますが、だとしてこれをディステリアが倒したら、彼はテュポーンが倒したゼウスより強いということに・・・・・・。

当時はもちろん今でも、パワーバランスを取らせることの難しさを感じています。

第27話　巡り合い

オリュンポス山の中腹に胸元を押さえ、体を引きずるアテナの姿がある。
「私としたことが・・・・・・・ぐっ・・・・・・」
傷の痛みでバランスを崩した途端、崖が崩れてアテナの体は放り出される。
「しまっ・・・・・・・・」
そのままアテナの体は、夜の闇の中に消えて行った。

―※＊※―

「・・・・・・おい」
夜遅く、ディステリアは表情を引きつらせていた。日ごろの鍛錬の疲れもあり、眠りを邪魔された彼の怒りは大きい。が、目の前の状況が当り散らすことを抑えていた。
「これは、なんだ」
「なんだ、と言われても・・・・・・」
聞かれたクトゥリアも対応に困ってる。火の消えた焚き火を囲んだ野営テント。キャンプなどで見られるような、三角形の骨組みに幕を張るものではなく、一定範囲の木にヒモを括り付けて迷彩柄の幕を張る。その中に、体から血を流した女性が落ちてきて、寝袋で寝

ていたディステリアを直撃した。
「とにかく、応急手当だ。ディステリア、脱がせろ」
「はあ!?そ、そんなことできる訳ないだろ!!」
顔を赤くして叫ぶディステリアに、クトゥリアは「はあ～」と溜め息をつく。
「鎧を脱がせろ、ってつもりで言ったんだが・・・・・とにかく、止血するぞ」
「お、おう」と言ったものの、ディステリアにはまだ抵抗感がある。
「この際だ、応急処置のやり方を叩きこむ」
「ちょ。時と状況を考えてくれ・・・・・・」
「考えているさ。今回は俺がいたからいいものを、お前のいるチームに応急手当のできる者がいなかったらどうする?今のような状況に出くわしたら、そいつを見捨てることになる」
「うっ・・・・・・」
「街に連れて行くにしても、まず止血だ。運んでいる間に出血多量で死んだとなったら洒落にもならん。わかったらさっさとやれ!」
これ以上抵抗しようものなら、何が起こるかわからない。ディステリアはしぶしぶ女性の身につける鎧を外し、差し出された布を傷口に当てた。
「（それよりもこの女性、身につけてる武具から考えると・・・・・・）」
あごに手を当てて考えるクトゥリアは、気を失っている女性の顔に視線を落としていた。

―※＊※―

気が付くと、そこは部屋の中だった。窓からは朝日が入り込み、ベッドに寝かされている体には、包帯が巻いてあった。

「・・・・・ここは・・・・・・・」
「気が付いた？」
突然した声に、アテナは警戒を強めて体を起こす。ドアのほうには、水の入った洗面器を抱えた少女が入って来ていた。
「よかった。傷は深いし、崖から落ちたようだったから、もう助からないのかと思ったわ」
笑いかけた少女に、「私は・・・・・・どれだけ・・・・・・」とアテナは聞いた。
「あなたを見つけたのは昨夜らしいだから・・・・・半日も経ってないんじゃない？」
少女は、ベッドの側のテーブルに洗面器を置いた。
「自己紹介がまだだったね。私はセルス。あなたは？」
「私は・・・・・アテナ・・・・・だ」
その名を聞いても、セルスは驚かなかった。
「アテナ・・・・・この辺りの伝説に出てくる『オリュンポス十二神』の一人。いい名前ですね」
「あ・・・・・ああ・・・・・」
「目が覚めたのか？」
アテナが呟いた時、部屋の外から男性の声がした。ドアの所に立っているのはセルスと同じ茶髪の男性だった。
「あっ、クウァル。うん、この人は・・・・・」
「さっき聞こえた。アテナなんだってね？オリュンポス十二神の・・・・・」
部屋に入り、アテナに近づいたクウァルの目は、とても冷たいものだった。
「（なんだ？この冷たい目は・・・・・？）」
クウァルはいきなり、アテナの体に巻かれている包帯を掴んだ。
「ちょっとクウァル！何やって・・・・・」
「俺はなぁ、あんたら神様が大っ嫌いなんだよ・・・・・」
そうは言われても、アテナにはなんのことかわからなかった。

「神話の中じゃ、この世界を造ったとか、人々を救うとか言われてるけど、ならなんで今も苦しんでいる人がいるんだ？」
「それは、人々の行いが悪い・・・・・・」
セルスが口を出そうとするが、「お前には聞いてない！！」とクウァルが怒鳴った。
「俺は貴様ら神が、全てに平等なんで思っていない。貴様らがやることなんて、ただの気まぐれの暇つぶしなんだよ」
「ちょっと待て。我々のすることを、なぜ気まぐれだと言えるんだ？」
「そうだよ。その人に失礼だよ」
「ハン！知らないとでも思ったか？例えば『トロイア戦争』！！」
ハッ、と気付くアテナ。セルスはあごに人差指を当てて考えた。
「えっと確か、結婚式に招かれなかった争いの女神エリスが、『最も美しい人へ』と書いたリンゴを送って、それをヘラとアフロディーテと・・・・・え～と・・・・・？」
「アテナ。つまりこいつだ。三人はリンゴの送り主を巡って争い、それをトロイアと言う国の王子に決めさせた。結果、アフロディーテが決められ、その報復としてトロイア戦争が起こった」
そこまで言うと、クウァルの手の力が強くなった。
「つまり、貴様らの茶番に付き合って、多くの人が死んだと言う訳だ」
「でも、それは・・・・・・第一、この人は名前が同じと言うだけで・・・・・・」
「それだけじゃない。そもそも、なぜエリスが式に招かれなかったか。これにはゼウスが関与しているという説がある」
「お父さまが？」とアテナが目を見張った。
「ほぉ、ボロを出したな。ゼウスは増えすぎた人間を減らすために、手を回していたのさ。自分の浮気癖を棚に上げて！」
そこまで聞いた時、今まで聞いていたアテナのほうも我慢の限界が来た。

「あなたの言っていることは神への冒涜です。これ以上、お父さまのことを悪く言うのをやめてくれないか?」
「ハン、庇うのかよ。あんたの母親をあいつがどうしたかも知らずによ!!」
「お母さま?お母さまのこと知って・・・・・・いる訳ないよね。人間なんかが・・・・・・」
目を伏せて視線を逸らしたアテナに、クウァルはそ知らぬ顔で続ける。
「知らないのは貴様のほうだ。貴様の母親のメティスはな・・・・・・」
「ちょっと待ちなさい、クウァル!!」
その時、なんのことか察しが付いたセルスは、いきなりクウァルの服を引っ張って部屋の外に出た。バタン、とドアを閉めたセルスは、クウァルを睨んだ。
「どういうつもり!?あなた、本当のことを言うつもり!?第一、本人かもわからないのに」
セルスに怒鳴られたクウァルは、「ちっ」と舌打ちをして立ち去ろうとする。
「答えて!!なんであんなこと言ったの!?」
「・・・・・それは、お前もよく知っているはずだ」と、忌々しそうにクウァルが言う。
「あなたが自分の中の『神の血』を嫌悪してるから?だからって、アテナさんに当たるのは間違ってる!」
「『アテナさん』・・・・・・か。ほんの数秒でずいぶんと親しくなったものだ」
「茶化すのはやめて」
見下すような目のクウァルを、セルスが睨みつける。それを見もせずに、「フン」と言ったクウァルは、その場を立ち去った。

―※＊※―

ドアが開くと、すまなそうな顔のセルスが入って来た。
「あの・・・・・アテナ・・・・・さま」
「『さま』は付けなくていい。人間の世界では、わたしは人間も同然なのだから」
「じゃあ、『アテナ』って呼んでいい・・・・・ですか？」
「ああ。それと、敬語もいい。普通に話してくれ」
「うん」と頷くと、セルスは部屋に入ってベッドの側にやって来た。
「クウァルのことは、悪く思わないで下さい。あの子、自分の中の『神の血』を憎んでいるんです」
「『神の血』？あいつは、神の血族なのか？」
「はい。クウァルは・・・・・ヘラクレスの子孫なんです」
「ヘラクレスの？そうか、あの力はどうりで・・・・・」
アテナは、クウァルに掴まれた辺りを触ってそう呟いた。
「クウァル、小さい頃から力が強くて・・・・・そのせいで周りから孤立していたんです。みんな、神様の血が混ざってるなんて思ってなくて、陰では『怪物の血が混ざってる』なんて言われてたんです」
話している内に、だんだんとセルスの声が涙ぐんできた。
「そのせいで、根も葉もないこと・・・・・いろいろ言われて・・・・・ずっと・・・・・ずっと一人で・・・・・辛い目に・・・・・」
涙を流しながら話すセルスを、アテナはそっと撫でた。
「確かに我らは、お主ら人間に対して酷いことをしていたのかも知れん。それでもなぜ、お主は私やクウァルのことを気にかけてくれるのだ？」
「あなたは・・・・・死んだ・・・・・お姉ちゃんに・・・・・よく似てる。それに、困っている人を・・・・・助けるのは・・

・・・・当たり前だもん」
「神・・・・・だけどね」と弱々しく笑ったアテナに、そっと寄り添うセルス。
「あなたのこと・・・・・・・『お姉ちゃん』と思って、良いですか？」
「・・・・・・ああ・・・・・・・」
実の姉に甘えるかのように、セルスはアテナにもたれかかる。だが、神が人間と交流を深めるのは、あまり好ましいこととされてない。世界で起きる出来事に私情を挟み、公平な判断ができなくなる可能性があるからだ。セルスのほうも、神は姉を見殺しに下も同然の存在。それでも・・・・・・面影を重ねずにはいられなかった。
「・・・・・・ムニャ・・・・・・お姉ちゃん・・・・・・」
いつの間にか眠ったセルスを、アテナは実の妹をいたわるかのように彼女を優しく抱きしめた。

―※＊※―

セルスの家の客間。応急手当をしたアテナをつれて来たクトゥリアとディステリアは、ここに通されていた。
「まさか、本当にオリュンポスの一人、アテナだったとはな」
「知らなかったのか？」と聞いたディステリアに、「見当がついたくらいだ」と肩をすくめる。
「しかし、負傷したアテナが落ちてきたとなると、ここの神界で何かあったのか。せっかくアレス辺りに揉んでもらおうと思ったのに・・・・・」
「ちょっと待て。曲がりなりにも神だろ？下手したら腕の一本が・・・・・」
「それはない。アレスはオリュンポス十二神の中で一番弱い部類だ。

半神だったとは言え、人間にも負けている。それでも、下手な部隊長よりか強いと思ったほうがいい」
ゴクリ、と生唾を飲んだディステリアから、クトゥリアは視線を外してポツリと呟く。
「・・・・・・・・・『黄金の時代』から、腕が上がったとも聞いたし、な・・・・・・・」
聞こえずディステリアが首を傾げると、ドアが開いて不機嫌そうなクウァルが入って来た。
「あ、どうも。彼女を受け入れてくれて助かったよ」
「別に。それを選んだのはセルスだ。俺だったら叩き出してたね」
「うわ・・・・・・怪我人を叩きだすなんて、どんだけ根性捻じ曲がってんだよ」
「こっちの事情を知らないくせに、勝手なことを言うな」
苦い顔をしたディステリアにクウァルが視線を向ける。
「ところで、あんたらセルスの知り合いか？」
「いや。知り合いっていったら、クトゥリアなんじゃないか？真っ直ぐここに向かったみたいだし」
「いや。近くにある町に急行しただけだ。ここに来たのも、最初に見かけた家だったから」
それを聞いて、ディステリアとクウァルは唖然とし、顔を見合わせた。
「・・・・・・・随分とシュールな連れだな」
「・・・・・・・一応、師匠なんですけどね」
困ったような顔をしたディステリアに、クウァルは皮肉と同情を込めた視線を彼に向けた。

―※＊※―

そのわずか二時間後。海を超えた先に位置するジェプト国で、ある異変が起きている。この国を治める王族の家来たちが町に出て、町の人たちを強制的に連れて行っていた。町のいたる所で響く悲鳴。と、そこへ、一人の少年が通りかかった。

「なんの馬鹿騒ぎだ？これ？」

「あっ、坊。早く逃げなさい。今、王の家来たちが来て・・・・・・」

「王の命令だ。王の巨大な墓を作るために、町の者を集めている」

「そんな馬鹿げた命令、聞いたことない。それとおばさん、僕は坊ではないですよ。僕は・・・・・・」

少年の言葉に、「馬鹿げた命令とはなんだ！？」と逆上した家来たちが、一斉に少年を取り囲んだ。

「（げっ、やっべ）」

焦った少年はすぐさま立ち去ろうとしたが、先回りした家来に、あっという間に気絶させられ、捕まってしまった。

「国家反逆罪の容疑者だ。誰か護送しろ」

すると、「では、私が」と一人の家来が出てきた。

「ホルテスか。いいだろう。ベイヌス。一緒に行ってやれ」

「わかりました。隊長」

彼らには、連行する時は二人一組になる決まりがあった。こうしたほうが、万が一逃走された時も即急に対処できるからである。

―※＊※―

砂漠を抜けた先にある、主がいなくなった王宮。その近くに、町の人々を強制労働させて作っている巨大な墓がある。最初は拒んでいた町の人たちも、王のためだったらと自分を納得させて一生懸命働

いていた。
「（なるほど。それだけこの国の王は、民のために尽くしたのだな）」
作られる巨大建造物を見上げてそう思う者がいた。その者は現在、縄に縛られ、砂漠の上を引きずられている。
「まったく。人材の確保だけでも忙しいというのに、なぜ反逆者の連行をしなければならないのだ」
最も王に尽くした家来、ホルテスが文句を言う。
「仕方ないだろ？命令なのだから」
護送を進言した家来、ベイヌスが相方をなだめる。
「命令・・・・・か。しかし、王はなぜあのような命令を残したのだ。生前は民のために尽くしたのに、なぜ、今になって民を苦しめるような命令を・・・・・」
「この国を治めていた王は、それほどの名君だったのか？」
「名君・・・・・か、どうかは分からないが・・・・・王は生前、民のために尽くした。税金を安くしたり、養護施設を作ったり、あと病人のための施設を作ったり・・・・・」
ベイヌスの言葉に、「ふ～ん。確かに不思議だよねぇ」と声の主が不思議がる。
「そうなんだよ」
腕組みをして「うんうん」と、頷いているベイヌスにホルテスが話しかける。
「おい、ベイヌス。いったい誰と話してるんだ？」
「えっ？お前じゃないのか？」
「いや・・・・・だとしたら・・・・・」
二人が同時に後ろを振り向くと、さっきまで縄で縛って引きずっていた少年の姿は消えており、代わりに小さな岩が縛られていた。驚いた二人は突然、後ろから衝撃を受け、気を失い倒れてしまう。二人を気絶させたのは、さっきまで捕まっていた少年だった。
「さて・・・・・と。確かめなくっちゃな・・・・・」

そう呟いて少年は、主がいなくなった王宮に入って行った。

第２８話　激闘の序章（前書き）

神様は人間には創造もつかないほどの力を持っている。ならどうして、人間の世界に現れてその力で問題を解決しないのか。その仮説的回答の一つ。

第２８話　激闘の序章

連行中の少年が姿を消したと知らせを受け、王宮内に待機していた家来たちはすぐさま、その少年を探した。少年はと言うと、主がいない玉座が置かれた部屋に来ている。そこは、何十人もの人が入れるほど、広い部屋となっていた。

「なるほどね・・・・・人間の目はごまかせても、僕の目はごまかせないよ。いい加減出てきたらどうだい！？」

すると突然、風が吹き、空の玉座の上に黄金のマスクを被った者が現れた。少年は、それを睨むように見る。

「小僧。ここは王家とそれに仕える者のみが入れる場所。早々に立ち去れ」

「何？じゃあ、あんたは王家の者？」

「そうだ。わが最後の命を家来に伝えるため、冥府より帰還した」

「何を伝えるためにだ？」と少年が睨む。

「『我が墓を作れ。町を見下ろせるほどの、巨大な墓を』とな。そのために、我はここに戻って来た」

だが、少年は驚くどころか、表情を変えることなく睨み続けている。

「いや、違うね。オシリスの話によると、つい先日に亡くなった王の魂は死者の裁判所に来ていない。それどころか、ソカリスの話によると、その王の魂は死者の門をくぐる前に何者かに拉致された」

「ほう・・・・・」と、玉座の上に浮かぶ者が呟く。

「さらに、オリュンポスから来た伝令によると、最近、神々に喧嘩を売った怖いもの知らずがいるらしい。お前じゃないのか？その王の体をのっとるために彼の魂（カー）をさらった、異国からの侵略者！」

場を静寂が支配する。それを破ったのは、王だった。

「クク・・・・・クク・・・・・クハハハハハハ。そこまで知っているとは、さすがだな。いや、そこまで知られるようになった、と言うべきか」
「あんたらの目的って・・・・・何？」
「ククククク。それは教えられん」
「なら、聞き出すのみ」
少年が静かに右腕を上げると、王に取り憑いた謎の存在は両手を広げて笑った。
「ハハハハハハハ。いいのか？この体を攻撃しても。それに、この王に使えていた家来たちも来たぞ？」
その言葉どおり、少年の後ろの扉から何人もの家来が入って来た。
部屋に入るなり、兵士の一人、ベイヌスが少年を指差す。
「あっ、お前は俺たちが連行していた小僧」
「それに、王がいる。なぜ・・・・・」
状況がわからず慌ててるものの兵士たちは、命令一つで少年を捕まえる。それをを見て王は、少年に向けて勝ち誇ったような笑みを向ける。
「これでわかったか。この状況でこの体を攻撃すると、どういう・・・・・」
それを無視し、少年が腕から放った光は王の体を貫いたが、体には傷一つ付いてなかった。その代わり、
「ぐわっ！？な、なんだ？この痛みは！？」
と、王は傷がないはずの右肩を抑える。
「人間の体を傷付けず、貴様を攻撃する術はある。物質ではなく精神に攻撃すれば、王の体を傷付けずに貴様にダメージを負わせられる」
信じられない状況に、場は静まり返っている。
「く・・・・・ククククク、ハ～ッハッハッハ。さすがはアトゥム。完敗だ。わが名はディザ・イースン。よく覚えておけ」
そう言うと、黒い風が巻き起こり、アトゥム以外の者は全員、目を

覆った。風が納まると、王の遺体は静かに玉座に付いた。
「死者の御魂は、死と共に冥府に向かう。その連鎖を犯そうとは・・・・・オシリスたちは大丈夫かな？」
そう呟くと、少年は静かに姿を消した。

―※＊※―

小さな黒い竜巻が、造りかけのピラミッドの近くに降り立った。それはやがて、黒い仮面を被った男の姿となる。
「首尾はどうだった？ディザ・イースン」
呼ばれた男が上を見ると、積み上げられた岩のレンガの上に、目の部分にだけ仮面を被った男が座っていた。長袖に丈の長いマントという格好のディザとは違い、その男はノースリーブを着た体の上に白いマントという、砂漠では考えられない軽装だった。
「カーテ・リウス・マルカイト。砂漠でそのような軽装は、体力の消耗を早めると言っただろ？」
そう言われた男は、「別にいいだろ？」と言ってそこから飛び降りた。
「それと、俺のことは『カルマ』と呼べと言ったはずだ。つ～か、そんな長い名前、よく覚えられたな」
「『カルマ』・・・・・・罪を表す名か。お前にはぴったりかも知れんな」
するとそこへ、王家に仕えた兵士たちがやって来た。ディザを追っていたようだ。それを見るとは、ニヤッと笑った。
「みなっさ～ん。お探しの者は、ここにいますよ～！！」
わざとらしく叫ぶカルマに、ディザは「お、おい！」と諌めたが、兵士たちはすぐにこちらに駆けつけてきた。
「なんだ？ここにいるって聞こえたけど、どこにいるんだ？」

周りを見渡すベイヌス。ホルテスは兵士たちの中で、一番、表情が厳しかった。

「王に乗り移っていたことを考えると、奴は人ではないはずだ」

「ピンポン、ピンポ～ン。大当たり。ここにこうして、人の姿をしていますよ～」

隠すどころか、おおやけにしているカルマにディザが「おい、こら～！」と怒鳴った。

「む？確かに、日が強い砂漠に黒い布をまとっているのは変わっているが・・・・・熱を溜めるから効果がない訳では・・・・・・」

首を傾げるホルテスを見て、カルマはケラケラ笑っていた。

「アハハ～。これだけ言ってもまだわかんないんだ～。人間って結構、アホだね？ディザ・イースン」

そこまで言われると、ホルテスたちは「何！？」と身構えた。

「アラ～？もしかして、やっとわかったの？ホント人間ってアホだよね？ディザ・イースン？」

「アホはお前だ～！！」

叫んで、ディザは思いっきりカルマを殴り飛ばした。だが、殴られたカルマは砂の上に落ちず、宙に浮いた。

「アハハ、痛いよ～。じゃ、俺は先に行ってるから、『アムドゥアド』へね」

作りかけのピラミッドへ飛んでいくカルマの言葉に、兵士たちは驚愕した。

「『アムドゥアド』・・・・・だと！？死者の国へと行く気なのか！？」

目を見張るホルテスの後、ベイヌスが叫ぶ。

「まさか、自殺祈願者！？冗談じゃない！そういうことはよそでやれ・・・・・じゃなくて、思い留まれ！！生きていれば、きっといいことがあるさ」

「アホか！誰がいつそんなことを言った。まあいい。バカな貴様ら人間のおかげで、我らの目的はまた一歩前進した」

「目的だと?」とホルテスが叫び、場の緊張感が高まると共に、兵士たちはディザに槍を向けた。
「貴様ら、何が目的だ!」
「さあな。バカのお前らにもわかりやすく言えば・・・・・・死者の魂をさらう、かね」
「バカな。そんなことができると、本気で思っているのか?第一、生きたまま冥府に行くなど・・・・・・」
ベイヌスの言葉をさえぎり、「そのためのピラミッド」とディザが左腕をピラミッドに向ける。
「なんのために、愚かな人間の体に入ったと思っていたんだ?」
「だが、貴様の目論見は失敗に終わった!!」
怒りに満ちた表情で槍を突き出したホルテスの槍を、ディザはいとも簡単にかわし、地面を蹴って宙に舞った。空中で静止すると、造りかけのピラミッドのほうから土煙が立った。
「な!?なんだ!!」
「ほう、さすがカルマだ。仕事が速い」
空中に浮いているディザの足の下では、ピラミッドからの強風で飛ばされた砂が流れていた。
「貴様!何をした!!」
ピラミッドのほうを向いて何かを呟いたディザに向かって、ホルテスが吼える。
「なぜ、われが貴様らの王に成りすまして、あれを作らせたかわかるか?いくら町の者のために尽くしたとはいえ、自分のために使われれば、その者に対して不満や憎しみを抱く」
戸惑いの表情を浮かべ、「そんなこと・・・・・・」と言いかけるホルテスを、嘲笑するかのごとく見下ろす。
「『違う』とは言い切れまい。口では尊敬していても、心の奥底では嫉妬や憎悪を抱いている。それが・・・・・・人間だ」
まるで、自分が勝者かのごとく笑みを浮かべ、ディザはピラミッドに向かって空中を移動し始めた。ピラミッドのある場所では、材料

となる大量の石のレンガから黒い煙のようなものが立ち上がり、両手を掲げたカルマの前に集められていた。その煙は次第に、車のような形になっていく。

「（そう・・・・・それが人間だ・・・・・口ではなんとでも言えるが、それは何一つ真実ではない。存在する価値もない、下等生物だ！！）」

人間に対する憎悪を抱き、ディザ・イースンは仲間のいる場所へと移動して行った。

―※＊※―

「この煙は、人間が出す『憎悪』の集合体。人間が少なからず持っている『負の感情』が物質に強く宿っていれば、俺の力で引き出し、具現化できる」

「なら、その石のレンガにはその『負の感情』が強く宿っていたのか？」

「いや。この石を運んだ人間の『負の感情』が、少しずつ、少しずつ、長い時間・・・・・とまでは行かないけれど、集まっていき結晶と化した、いわば・・・・・」

「『負の魔力（バー）』ということか」

一通り作業を終えたカルマは、声の主のほうを振り向いた。

「少し違うね。僕らはこれのことを『ネガティゼンス』と呼んでいる。ある国の言葉で『負の思念』を意味する『ネガティブ・センス』から名付けた」

「これから貴様らは・・・・・何をする気だ？」

強くなる声に対し、カルマは冷たく笑う。

「さあね。止めるなら今の内だよ？アトゥム」

今、カルマ睨んでいるアトゥムは、ディザと対峙した時とは違い、

酷く消耗しているような感じだった。
「やっぱり。いくら創造神と言っても、この世界に留まれる時間はそう長くはないようだね。強すぎる力が、逆にこの世界に留まらせるのを邪魔しているか・・・・・・・」
「・・・・・・くっ・・・・・・・」とアトゥムが歯軋りをする。
「世界を造ったとはいえ、その世界の『外』の次元の存在でしかない。神界も冥界も、見方によれば同じ次元に平行して存在する世界、『パラレルワールド』。同じ時空に対して平行に存在はしているものの、『次元の壁』により区切られた世界」
黒い煙の形が鮮明になり、吹き荒れていた風も弱まった。
「『神界』にいる神も、『人間界』に渡ると力が落ちるらしい。だが、創造神が存在するのは『次元の外』・・・・・・」
「違うな。天地を創造した際、俺はその次元の中に存在した。それより、なぜこんな話をする。時間稼ぎか？」
「そう思えたのか？まあいい。俺の単なる好奇心だったんだが、考えてみればあんたら『創造神』は、本来の肉体でこの世界に入ることはできない。いわば、今のあんたは分身だ。仮に入れたとしても、その力は著しく消耗する」
「ふぅ～・・・・・そうだな。ではそろそろ・・・・・・」
そう言った途端、カルマが腕を振り衝撃波を放った。アトゥムはそれをかわし、カルマに掴みかかった。が、カルマは軽くかわすと逆に蹴りを二発、アトゥムに当てた。
「くっ・・・・・・」
蹴りが当たった箇所を押さえて、砂地に膝を付いて着地した。カルマはそんなアトゥムに目もくれず、完全に形が整った車に歩いて行く。
「仲間も来たことだし、そろそろ失礼するよ。分身とはいえ、君の力も限界のはずだからね」
「確かに・・・・・・強大なる力を持つがゆえ、現世では完全な力を持って実体化できない。だが・・・・・・」

ディザが地面に着地すると同時に、アトゥムが立ち上がる。
「――お前たちの力を、削ることはできる！」
そう言うと、腕を振り上げ、王の遺体に憑依したディザに深手を追わせた光を放った。「そんな単調な」とカルマは上半身を右にそらせたが、アトゥムの放った光はカルマの右肩を掠めた。
「なっ・・・・・・」
かわした筈の攻撃を受けたカルマは、アトゥムのほうを睨んだ。だが、アトゥムの体は消えかかっていた。
「後は・・・・・・頼んだぞ・・・・・・」
小さく呟くと、アトゥムの分身は光の粒子となって消えてしまった。
「おい。大丈夫か？」
さほど心配していないような口調で聞かれると、カルマは「ああ」と答えた。
「では行くか。創造神たるアトゥムを倒した我らを、止められる者はいない」
「奢るな。あれはあくまで分身だ」
黒い煙、負の思念を集合させて作った乗り物はディザとカルマを載せると少しだけ宙に浮いた。そのすぐ側の空間に次元を曲げて作った穴を出現させると、その穴を通り、目的地である冥界アムドゥアドへ向かって行った。

第２８話　激闘の序章（後書き）

当時読んでいたマンガに、強大な力を持つがゆえに別の世界に干渉できず、できたらできたで本来の力を発揮できずに負けたキャラが出ていました。案外、神様が人間の世界に干渉できない理由に当てはまるのでないか、と思っていた。

第２９話　アムドゥアド攻防戦（前編）（前書き）

お忘れか、もしくは作者の不注意で知らない方も多いか知りませんが、この作品には、神話を基にした作者の総作が点在しています。鵜呑みにしないようにご注意お願いします。

第２９話　アムドゥアド攻防戦（前編）

ジェプト国方面の冥府である、アムドゥアド。そこでは、冥界の神であるオシリスと、天秤を持つジャッカルの頭を持つアヌビス、黒トキの頭と翼を持つ神々の書記のトトが、死者を裁いているところだった。このところ、冥府を訪れる死者の数は急増しており、誰もが怨恨などの恨みを買い、殺されて冥府に落ちた者だった。いつから、このような世界になってしまったのだろうか。

「次の者、前へ」

玉座に座った神オシリスが喋ると、腰布を巻いた一人の若者が前へ出た。その後、アヌビスが若者とオシリスの間にある天秤の片方に、死者の心臓を、もう片方に真実の女神であるマアトの羽を置いた。天秤は心臓のほうに傾き、トトがそれを記した。その直後に、トトの後ろに控えていたワニの頭、獅子の前足、カバの後ろ足を持つ冥府の獣、アーマンが死者の心臓を一飲みで食べた。前に進み出た若者の魂は、苦しみの声と共に消えた。

「今日は、これで全員でございます」

先ほど記録を記していた紙をしまいながら、トトが言った。

「そうか。最近の人間の魂は、転生できるものではないな」

溜め息をつくオシリスに、「ええ」とアヌビスが答える。

「おかげで、アーマンも食中りになっています」

「ちょっと待った。なんでアーマンが食中りなんかになるの？」

即座にマアトが突っ込むが、誰も答える気はなかった。

「それほど、罪に染まった魂が多いということだ。それより、一週間ほど前に亡くなったとされる王の魂は？」

「依然、門を通ったという報告はない。今までこのようなことはなかったのだが、な」
「ウム。やはり、何者かの介入が・・・・・・？」
オシリスが呟いたその時、上でした羽音に、アヌビスたちは「なんだ？」と首を傾げた。すると、死者の立つ台に、人間の頭を持つタカが降り立ち、それにマアトが目を見張る。
「バー？バーがなんでここに？」
「これは、セケルの放つ、連絡用のバー」
「連絡用・・・・・・って、そんなの、あるの？」
「大変です。何者かがものすごい力で冥府の門を破り、アムドゥアドへ進入してきました」
バーの報告に、「なんだと！？」とオシリスが声を上げる。
「バカな！冥界の門を破ることは愚か、現世にいる者にアムドゥアドへ来ることはできないはず」
トトの後に、「まさか！？」とアヌビスが目を見開く。
「その者はものすごい速さで、この連絡が行き渡っている頃には、もうとっくに進入しているかもしれません」
その時、ものすごい振動がオシリスたちのいる部屋に響いた。
「何！？」
バーが「くっ、奴らが来た・・・・・・」と呟くと、体がスーッと消えた。
「消えた！？」
「己の中の魔力をバーとして具現化し、記憶の一部を写して遠くに飛ばすんだ。存在していられる時間は、そう長くない」
「へえ～。じゃあ、俺たちが来たことはばれてたんだ？」
「何者だ！！」
楽しそうな声がしたほうをオシリスたちが向くと、そこには白い半そで姿の男と、黒いローブを身にまとった男がいた。
「はあ？やっぱりばれてない？」
「そんなことは問題ではない。オシリス神よ。そこにいるアーマン

の中にいる、罪深き死者の魂。貰い受ける」
歩いているディザはアーマンのほうを指差すと、「なんだと!?」
とオシリスが叫ぶ。
「どういうつもりだ!?」
「こういうつもり」
睨むアヌビスにカルマがスッ、両腕を上げて言うと、無数の光の矢を放った。オシリスたちが一斉に散らばると、矢は玉座や石の台を少しばかり砕いた。
「現世から来た生者よ。どういうつもりだ!?」
「貴様ら、自分が何をやってるかわかっているのか!?」
「当然♪」
叫ぶオシリスとアヌビスに対し、ディザは床に膝を着いた状態のアヌビスに、黒い剣を持って頭上から襲いかかる。アヌビスはとっさに腕輪で防御した。金属音が響き渡ったが、剣は腕輪に受け止められていた。
「さすがだな。神々に付ける物は、硬度も高い」
「どうも。だが、この距離なら・・・・・」
アヌビスが後ろに下げた右腕に、黒いエネルギーを溜め出す。それは丸い玉状になった時、ディザに向けて突き出した。
「かわせないだろ!!」
至近距離から攻撃を受けたディザはいとも簡単に吹き飛ばされた。と思ったら、その体は砂の塊のように崩れた。
「さすがだな。冥府の犬神よ」
後ろから声が聞こえた瞬間、アヌビスがそこからジャンプすると、そのすぐ後に三つの斬撃が放たれた。着地したアヌビスの前に現れたものは、ディザなのは間違いないのだが、背中の右側に白い鳥の翼、左側に黒いコウモリの翼、腰から下には太い尻尾が生え、剣を握っていない左腕は褐色のうろこに覆われ、鋭い爪が生えていた。
「魔導変化・レベル3」
ディザはそう呟くと、すぐさまアヌビスに襲いかかった。攻撃を防

御してカウンターをかけようとしたが、直前になって直感的にかわさなければまずいと思い、左に避けた。振り下ろされた剣は神殿の床に当たり、その衝撃波は数メートル先までをえぐった。

「いい判断だ」

だが、その後にディザから尻尾のブローを受け、そこから左腕の連続攻撃を受ける羽目になった。

「（クソッ。こうまで・・・・・・）」

なぶられるだけのアヌビスは、屈辱を感じていた。

「どうだ！これが人間の持つ憎しみから得た力だ！」

右手に持つ剣を逆手に持ち替え、両拳で殴りかかった。アヌビスにはガードで精一杯だった。

「人間一人一人が持つ憎しみは、貴様ら神が持つ力を比べ、ほんの微生物ほどでしかない。だが、それらを凝縮して取り込み、コントロールできたら・・・・・・この通りだ！！！」

鋭いアッパーが炸裂して、大きな音と共に、アヌビスが神殿の宙に舞う・・・・・・はずだったが、ディザの拳はアヌビスが手のひらに持つ天秤の皿に防がれており、ディザが「何！？」と驚いた。

「――己の力で滅びよ」

アヌビスが皿を持っていない左腕を挙げると、もう片方の天秤の皿が現れた。ディザが離れるのと、アヌビスが技を放つのはほぼ同時だった。中空に現れた皿から放たれた衝撃波がディザに直撃した。

「グオオッ！！」

叫び声を上げ、ディザは神殿の床に墜落し、息を切らせたアヌビスも着地した。

「（くっ、なんて威力だ。本来、技の衝撃を吸収・蓄積するはずのヘカを込めた天秤の皿が、技の衝撃を吸収しきれなかった）」

息を切らせながら胴体を押さえたアヌビスは、マアトたちの援護に行こうとする。

「さっきの技・・・・・・効いたぜ・・・・・・」

驚いてさっき倒したディザのほうを見ると、彼は起き上がってきた。

ただし技で受けたダメージのためか、彼の体は元に戻っていた。
「『因果応報』。己の行いは、いずれ自分に帰ってくる。さっきの技、そのままだな」
聞きなれない言葉に顔をしかめながら、アヌビスは警戒した。
「・・・・・ちっ、相手の衝撃をそのまま返す技か・・・・・・どうも苦手だ・・・・・だが・・・・・」
一瞬、ディザはニヤッと笑い、「あいつには効かないぜ」と指差す。
反射的にディザが指差した方向を向いたアヌビスが見たものは、無傷で全く息が上がっていないカルマと、逆に傷だらけで息が上がっているオシリスとトトだった。アムドゥアドでも屈指の実力を持つ二人がかりでも、カルマを抑えるには至らなかった。
「バカな。いったい、何が・・・・・」
「あれ?ディザってやられちゃったの?」
驚いているアヌビスのほうを見て、軽い口調でカルマが言った。
「まあ、生きてりゃいいや。ほぉ~ら、もう一度行くよ♪」
右手を上げ、挑発じみたことを言うと、オシリスとトトの周りに無数の光の槍が現れた。それにアヌビスが目を見張る。
「あれは、トトの・・・・・」
「光神槍、雨あられ!!」
降り注ぐ槍をかわすと、トトはすぐさま反撃に出た。
「閃光の槍、フラッシュ・スピア!!」
だが、トトが放った光の槍は、カルマに届く前に数本の光の槍に貫かれた。
「くそっ・・・・・」
「残念だったねぇ?ほぉら、フラッシュ・スピア返し。光神槍ぉぉッ!」
「くそっ・・・・・」
真横に振った右腕の前に三本の光の槍が現れ、飛んでくる。トトは同じことを言いながら、右に飛んでそれをかわした。
「どうした?逃げてばっかりじゃない・・・・・」

その時、カルマの足元に黒い水のようなものが張り巡らされた。それは、オシリスの使う魔術で放たれた呪力の表れだった。
「カース・バインド！」
足元から出てきた黒い手のようなものがカルマの身体を掴み、動きを封じた。
「よし、これで・・・・・・」
だが、「甘いね」と黒い手の中でカルマが笑ったかと思うと、自身を掴んでいる手や足元にある呪力が全身から生えた光の刃に断ち切られた。
「何！？カース・バインドを・・・・・・」
「切った！？・・・・・・まさか・・・・・・」
目を見張るオシリスとトトに、カルマが余裕の笑みを向ける。
「そう・・・・・・コピーもしちゃったよ♪ほら！！」
そう言って両腕を広げると、その先からオシリスが放ったものと同じ、黒い水のような呪力が放たれ、オシリスとトトを縛りつけた。
「グッ・・・・・・」
「さ・ら・に、こんなんもどうよ♪」
動けないオシリスに向かって、コピーした光の槍を放った。誰もがやられると思ったその時。
「シャイニング・クラッチ！！」
突然、横から光に包まれた爪が割り込んで、寸前で光の槍を叩き折った。
「今の技は・・・・・・バステトか！？」
オシリスが呟くのとほぼ同時に、猫の耳と爪を持った女神が荒々しく着地した。
「よおっ、オシリス！らしくねぇほど、やられてんじゃねぇか」
バステトが馴れ馴れしく話した後、オシリスの身体を縛っている呪力を爪で切った。
「ぐっ・・・・・・ほっといてもらおうか・・・・・・」
「大体、冥府の神がなんで自分と同じ属性の技に捕まってんだよ」

痛い発言を受け、「ぐっ」と唸るオシリス。そこに、自力で呪縛から逃れたトトが、バステトの近くに着地した。
「それより、なんでお前らがここに？」
「ホルスさまからの命令だ」
女性の声のすぐ後に降り立った、弓矢と盾を持ち、背中に翼が生えた女性を見て、オシリスが叫ぶ。
「ネイトか！」
「ラグシェ国より参った使者の話によると、その者は怪物を従えオリュンポスに進行し、ここに避難する途中に待ち伏せていたらしい」
「怪物！？またテュポーンとかいう奴か？」とトトが聞く。
「そいつを基に作った存在らしい。なんと言うのかは知らぬが、基にしたテュポーンとかいう怪物も倒したと言っていたらしい」
「・・・・・マジかよ・・・・・・」
「本気と書いて『マジ』と読む♪」
驚くトトに場違いなほど明るい声でカルマが言い、そんな彼をネイトが睨む。
「貴様・・・・・・」
「まあまあ。そんなに怒ると、台無しだよ。せっかくの美人顔なんだからさ♪」
女性に『美人』と言われて、うれしく思わない者はいない。一瞬、顔が紅潮したが、すぐに顔を振って気を奮い立たせた。
「そ・・・・・そのような言葉で、惑わせようと・・・・・・」
だが、視線の先には何もおらず、彼女のすぐ前には右手を開き、腕を引いて攻撃態勢のカルマがいた。すぐに気付いたネイトは盾を構えて攻撃を防ぐと同時に、オシリスたちは散開した。
「クッ・・・・・速すぎる・・・・・・」
盾で防御したために吹き飛ばされたネイトは、すぐに矢を放った。
「待て。うかつに奴に攻撃すると・・・・・・」
オシリスが叫ぶ。だがカルマは、どんなに矢が腕に刺さろうとそれをコピーして放とうとはせず、ただ避けるだけだった。

「やはり、お前が模写できるのは『技』であって、ただ矢を撃ったり剣で斬ったりする通常攻撃は模写できない」
「ちぇ・・・・・・ばれたか・・・・・・」
舌打ちしたカルマに、「ばれたかではないわ。このバカたれ！！」とディザが叫んだ。
「うるさいなぁ。上司に向かって、バカたれはないだろ。バカたれは」
文句を言い返された後、その場を動こうとしたディザの前に、アヌビスが立ちはだかった。
「逃がしはしないぞ！」
「ちっ・・・・・こりゃ、作戦失敗だな。カルマ！！」
矢を連続で受けた後、蹴りの直撃を貰ったカルマが顔を上げる。
「ちっ、しょうがないなぁ・・・・・一時退却！！」
「逃がすか！！」
ネイトが放った矢に向かって、どこからか取り出した玉を投げつけた。その途端に弾は破裂し、辺りを煙が包み込んだ。
「くっ、煙幕か！」
「気をつけろ！煙にまぎれて、我らを襲うつもりかも知れないぞ！！」
オシリスの号令で、その場にいた神々は一斉に警戒を強める。だが煙が晴れると、ディザとカルマの姿はなかった。
「・・・・・本当に・・・・・・逃げたのか？」
トトが呟くと、「・・・・・・だと、いいのだが・・・・・・」とネイトたちも武器や腕を下ろす。
「・・・・・ん？・・・・・おいおい！アーマンとマアトがいないじゃねぇか！まさか、奴らに！！」
「いや、心配ない」とバステトがオシリスに言った。
「マアトには先に、アーマンを連れてこの場を離れるように言った」
「奴らの狙いが、アーマンの中にある死者の心臓なら、早急にこの場から離れさせるのが道理だ」

「もっとも、奴らが本当に狙っていたのは『罪深き死者の魂』らしい。アーマンの中にあるのは『罪深き死者の心臓』なのだが、どの道開放される訳には行かない」
トトとアヌビスが話し終えると、オシリスも「ああ」と頷いた。
「もし『罪深き死者』が開放され、現世に転生されたら・・・・・・」
そこまで言った時、オシリスたちの脳裏にある可能性がよぎった。
「まさか・・・・・『罪深き死者の心臓』を使って・・・・・・」
「・・・・・・奴ら、深遠に落ちた死者たちを開放するつもりか？」
アヌビスとトトが顔を見合わせる。
「そんなことになったら、最悪、アポピスまで開放される」
「断固阻止しなければならぬ！！タテネンに報せて、奴らを捜索してもらわねば！」
ネイトとオシリスも顔を見合わせる。
「・・・・・なんだか大変なことになったな。私はホルスさまに、現状報告に言ってくるよ」
バステトはそう言うと、彼女は地上に向かって駆け出した。
「私はタテネンにこのことを報せよう。アヌビスとネイトは・・・・・」
「マアトとアーマンを探す。まだ遠くには行っていないはずだ」
「だが、それは奴らにとっても好条件のはずだ。戦いの傷があるとはいえ、それはこっちも同じだからな」
「我々に土地勘があるとはいえ、油断は禁物だ。今この時に、奴らのすぐ近くにいるかもしれない」
トトとネイトの後に、「ああ。急ごう」とアヌビスが言う。話を終えた神々は、すぐに行動を開始した。

第２９話　アムドゥアド攻防戦（前編）（後書き）

※作中、連絡用のバーが出ましたが、実際の神話中には存在しません。作者の完全な総作です。ご注意を。

第３０話　アムドゥアド攻防戦（後編）

翌日。オシリスたちの報せで、ジェプト国、特に地下世界クトニアンにある冥界アムドゥアドに非常警戒態勢が取られ、冥界に可能な限り神々が集まった。一方で、手薄になりがちな地上に必要最低限の数だけ残したが、その中には異国から来たこんな奴が。

「ぬぅ～・・・・・あいつら、ムルグラント国にも喧嘩売ったとか聞いてたけど、まさか本当にここにも攻めてくるとは・・・・・・」

ヘルメスが、ことの次第を伝え、状況しだいでは援軍を送ってもらおうとこの国に来てから一夜が明けていた。

「ふ～、ほんとに大丈夫かな～。親父にアポロン、アルテミスにアテナ、それに・・・・・・」

その時、突然、後ろからした「ヘルメス!?」という声に振り向くと、地下世界から出てきたトトが立っていた。

「なんでお前が!?・・・・・・あっ、そうか。ラグシェ国から来た使者って、お前以外にいないよな」

「まあ、俺は伝令神だからな」

仲間が心配なのを隠し、無理して笑うヘルメス。二つの国の知恵の神は、親しげに話し合った。

「この国の北の海岸線に敵の部隊が展開されているらしいので、援軍を・・・・・っと、思ったのだが、この状況では・・・・・・」

「おそらく、無理だろうな・・・・・・」と、トトは晴れ渡った空を見上げながら呟く。

「これも、奴らの仕業だろうか」

「そうだろうな」

二人が見上げた空は、まるで何事もないかのように青く澄み渡っていた。

―※＊※―

地下世界クトニアンの中にある、とある神殿。その中で、アムドゥアドに来た神々が会議を開いていた。

「アムドゥアド内を重点的に探索していますが、いまだ発見には至っていません」

「奴ら、どこに隠れたというのだ」

「ぬう～・・・・・・」

セルケトの報告とネイトの言葉に、オシリスは唸る。とその時、

「大変です！！」

ジャッカルの姿をした闘神、ウプ・ウアウトが会議室に入って来た。

会議室の神々の視線が向くとタテネンが聞く。

「どうした！？」

「今さっき、混沌の深淵、ヌンより、アポピスが開放されました」

「なんだと！？」とオシリスが叫び、会議室にいた神々は騒然となった。

「どういうことだ。あいつら、混沌の深淵から死者を開放するために、アーマンを狙っていた。逆を言えば、アーマンの中の『罪深き死者の心臓』がなければ、混沌の深淵に何かをすることは・・・・・」

アヌビスがそこまで言った時、ネイトが「まさか・・・・・・」と呟いたのをきっかけに室内の神々、全てが気付いた。

「奴らが『罪深き死者の心臓』を狙ったのは、それがなければ目的を果たせないと錯覚させるため・・・・・？」

「我らを・・・・・欺くためにわざと戦いを挑んだという訳か・・

・・・・くそっ、してやられた！！」
オシリスたち神々は苦虫を噛み潰したような顔になるが、今はそうしている場合ではなかった。
「蛇退治の女神、バステト、マフデトに連絡を。それまでは我らが押さえる」
ウプ・ウアウトが「わかりました！」と答えると、神々は会議室から出てアポピスの出現した場所に行こうとしたが・・・・・。
「ちょっと待った。俺たち、どこにアポピスが出現したか、聞いてないぞ！」
アヌビスの指摘に、「何を言っているのだ！」とネイトが言う。
「アポピスのことだから派手に暴れているはずだ！」
その時、現場に向かっているオシリスたちのすぐ目の前に、巨大な蛇が飛び出した。
「そちらから来るとは、な！！」
大蛇の目がネイトたちに向くのと、彼女らが散るのはほぼ同時だった。大蛇、アポピスは咆哮と共に口から毒液を噴出した。毒液は石畳を溶かしたが、それにかまわずネイトが横から矢を放った。矢は閃光となりアポピスに突き刺さる。
「グウギャアアァァッ！！」
一度、悲鳴を上げるが、今度は身体をひねり、腕を振りかざしてネイトを襲う。空中でさらにジャンプしたネイトは、再び矢を放つ。同時に、下のほうからセルケトが援護の攻撃を放つ。
「シャイン・バースト！」
「ゴアッ・・・・・」
閃光の矢と光の弾がアポピスに直撃し、呻き声を上げる。そこに、間髪入れずにネイトが矢を放ち、追い討ちをかけると、騒ぎを聞いたバステトとマフデトがやって来た。
「おぅ、これまた派手に・・・・・やってんジャン！！」
バステトは会話をするなり魔力を爪に込め、光の爪を伸ばしてアポピスに切りかかった。

「畳みかけるよ！！」
爪を振りかざすバステト、矢を放つネイト。セルケトは移動しながら援護する。しかし、オシリスたちはそれをただ観戦していた。
「さすがは、蛇退治の女神たちだ。我らが手を出す必要もない」
「言い方を変えれば・・・・・・『邪魔』ってことですよね・・・・・・」
そう言った時、二人は落ち込んだ。ふと、アヌビスはあることに気付いた。
「どうした？」
「ええ・・・・・・マフデトは・・・・・・・どこにいるのかと・・・・・」
「ん？そういえば、見かけぬな・・・・・・・」
アヌビスの問いにオシリスが見渡すと、そこへ「遅くなりました」とマフデトがやって来た。
「ああ、マフデト。いったいどこで何をしていたんだ？」
オシリスにそれを聞かれると、「う、ああ」と都合が悪そうに答えた。
「何をやっていたのだ、マフデト。アポピスを封じるには、我ら四人の力が必要だというのに」
ネイトにどやされると、「すまない。その分は今、取り戻す」とマフデトが、アポピスの前に立ち両手を合わせると、アポピスの下に光の円陣が現れた。それが合図だったのか、左右、後方から他の女神たちが一斉にかかる。
「シャイニング・クラッチ！！」
「シャイン・アロー！！」
「バイティング・レイ！」
バステトの巨大な光の爪、ネイトの無数の閃光の矢、セルケトの巨大な光のハサミがアポピスを捉えた。
「グワアッ！！」
そのすぐ後に、マフデトが両腕をゆっくりと広げた。

「混沌たる者よ。あるべき場所へ戻れ！！」
大きく腕を振ると、魔法陣の中から光があふれ、アポピスを飲み込んでいった。
「グガアアアアアアッッ・・・・・・・！！」
断末魔の叫びと共に、アポピスは元いた場所、混沌の深淵ヌンへと戻って行った。
「ご・・・・・・ご苦労さん・・・・・・・」
声をかけたオシリスに、「あれっ？男どもはずっと見てたの？」とバステトが呆れる。
「そのようだ。戦っていたのは、我らだけのようだったからな」
ネイトが溜め息をつき、「はぁ・・・・・・使えねぇなぁ～・・・・・・」と再びバステトが呆れる。
「・・・・・・・・・す、すまぬ・・・・・・・」
さすがの冥府の王も、アポピスとの戦いで何もしていなかったので、言われたい放題でも頭を下げるしかなかった。ただ、マフデトだけは表情が曇ったままだった。
「？どうしたのだ、マフデト？」
ネイトの問いに、「すみません、皆さん。ちょっと、先に戻らせて頂きます・・・・・・」と言うと、足早に去って行った。
「どうしたのだ？」
アヌビスが首をかしげると「何かあったのか？少し様子を見てくる」とネイトが駆け出した。

―※＊※―

しばらく走ったマフデトは、石の壁にもたれかかり、地面に座り込んだ。頭の中では、先ほどの出来事が繰り返される。

―回想―

義理の姉妹であるセシャトと共に、アムドゥアドに侵入した二人組みの捜索をしていたマフデトは、不覚にも隙を突かれてセシャトを人質に取られてしまった。

「お姉ちゃん!!」

「お前ら・・・・・・セシャトを離せ!!」

叫ぶマフデトに、「そうはいかない」とディザが言う。

「この娘を離すには、それ相応の見返りを貰う」

「何!?」

「要するに・・・・・・こちらが出す条件をのめってことだ。さもなければ・・・・・・わかっているな?」

カルマが懐から出したナイフを、セシャトの首元につける。ジェプト国の神は体が丈夫ではあるものの、不死という訳ではない。下手をしたら殺されてしまう。

「・・・・・・条件とは・・・・・・」

声を絞り出すマフデトに、「お姉ちゃん!!」とセシャトが叫ぶ。

「・・・・・・アーマンを・・・・・・罪深き死者の魂をこちらに差し出してもらおう。そうすれば、こいつは無傷で解放してやる」

カルマの要求に、「そのようなこと!!」と叫ぶ。

「できぬか?それとも、我らが信じられぬか・・・・・・なら・・・・・・」

ディザが巻き付けた腕でセシャトの首を締め上げたので、「やめろ!!」とマフデトが叫ぶ。

「なら、要求を呑め。いや、『考えらせてくれ』と言っても待ってやる」

カルマが言ったその時、神殿があるほうで大きな音がした。そのすぐ後にけたたましい咆哮が響き渡る。驚いてそちらのほうを向くマフデトに、余裕の表情でカルマが、「行けよ」と言った。

「混沌の深淵、ヌンよりアポピスを開放した。再びヌンに封印するには、お前を含めた女神四人の力が必要なのではないのか？」
「行けよ。そして、よく考えろ。明日までに、賢明な判断をして見せろ。分かったな」
そう言ってディザとカルマの二人は、セシャトと共に姿を消した。
マフデトは「くっ・・・・・・」と歯軋りしながら、マフデトはアポピスの元へ駆け出した。

―回想終わり―

「くそ・・・・・セシャト・・・・・・ごめん・・・・・・」
うずくまったマフデトの目からは、涙が流れていた。

―※＊※―

アポピスが現れてから、数時間後。地上世界では夜になっていた。
アーマンを狙った理由が囮だと完全に片づけられないため、神々はアーマンにつける警護を外す訳にはいかなかった。少なくとも、敵の目的がハッキリとするまでは。そんな中、スフィンクスが見張っている神殿に一人の女神がやって来た。
「様子はどうだ？」
「これは、マフデトさま！はい、今のところ以上はありません」
トゥトゥの答えを聞き、「そうか」と呟いたマフデトの表情は、どこか複雑なものだった。
「交代しようか？」
「いえ。まだ、大丈夫です」
「そのようなことを言って、もし何かがあれば取り返しが付かない

ぞ」
いきなり後ろからした声にマフデトが振り返ると、石の階段をネイトが上って来ていた。
「は・・・・・母上・・・・・・！」
「トゥトゥ。我らはラグシェ国の神と違って、不死ではない。もちろん、疲労も溜まっていく。だから、休める時に休んでおけ」
「し・・・・・しかし、母上たちが見張っている間に、何かがあったら・・・・・・」
心配するトゥトゥに、「ほう・・・・・」とネイトは呟いた。
「お前も言うようになったが、私を誰だと思っている？」
余裕の笑みを浮かべるネイトに、「わ・・・・・わかりました」と、トゥトゥはしぶしぶ了承した。
「じゃあ、あなたたちは休んでいて」
マフデトに「そうします」とトゥトゥが答えた。
「そうそう、中にはアヌビスさんがいますから、話を通しておいてください」
石の階段を下りていくトゥトゥとスフィンクスを見送って、二人は神殿の前に立った。
「さてと・・・・・アヌビスに話をつけなくては。マフデト。すまぬが行ってくれぬか？」
それを聞き、マフデトは「な・・・・・なぜ・・・・・私が・・・・・？」と驚いた。
「どうした？アーマンを連れ出す、絶好の機会であろう？」
「！？なっ・・・・・なぜ知って・・・・・」
「フム。やはりな」
驚いたマフデトに、ネイトが溜め息をついた。その時、彼女はネイトにいっぱい食わされたことを悟った。ネイトはわざとアーマンのことを聞き、マフデトが口を滑らすように仕向けたのだ。もしマフデトがアーマンを連れ出す気がないなら、「なぜ、そんなことを・・・・・」と聞くはずなので、この時ネイトには、マフデトがアー

マンを連れ出そうとしていることがばれてしまった。
「い・・・・・いつから・・・・・・」
「アポピスと戦った時、様子がおかしかったので、後をつけさせてもらった。しばらくしてお前が、アーマンの警護を言い出したので、私も付いて行くことにした。お前に聞くために、な」
「そうか・・・・・私は最初から、疑われていたのか・・・・・・」
ふと、彼女の瞳に絶望の色が浮かぶ。私はこれから裁かれるのだろうな、裏切り者として。そんな考えが頭をよぎっていた。
「敵も卑劣なものだ。お前の妹を・・・・・・セシャトを人質に取るとは・・・・・・！」
その瞬間、弾かれたようにネイトを見る。
「・・・・・・そのことも・・・・・・なんで知って・・・・・・！？」
「仲間を裏切る苦しみと、大切な家族を助けたい気持ちの板ばさみの中、セシャトの名を呼んで泣き崩れる。それを見れば、奴らが人質を取っていることなど、見当がつく」
全てお見通しのネイトに、一瞬、全てを打ち明けようかと思ったが、そんなことをすれば奴らがセシャトに何を仕出かすか分からない。
「もっとも、全て私の想像だが、な・・・・・・」
『想像』の部分を強調した後、ネイトは神殿の内部へ向かった。
「ど・・・・・・どこへ・・・・・・？」
「アヌビスの話をつけてくる。結局、放って置きっぱなしだったからな」
だが、神殿の入り口のすぐ前に来ると、一回立ち止まった。
「・・・・・・もし、提示された答えをどちらも選べないのなら、新しい答えを求めれば良い。簡単ではないことだが・・・・・・」
ネイトはそう言うと、マフデトを置いて神殿の中に入って行った。
「・・・・・・ネイト・・・・・・いったい何を・・・・・・」
一人残ったマフデトは、これから自分が何をすべきなのか考えた。

アーマンを渡してセシャトを助けるか、それともセシャトを見殺しにするか。どちらを選んでも、マフデトにとっては地獄のようだった。

「（私には・・・・・・どちらも選べない。でも、どちらか選ばないと・・・・・・）」

―※＊※―

一方、セシャトを人質に取っているディザとカルマは、とんでもないことに気付いた。

「なあ、ディザ・・・・・・」

「なんだ？」とディザは仏頂面で聞く。

「この世界って・・・・・・時計ってあるの？」

「・・・・・・知らん」

聞いた相手にソッポを向かれたので、今度は人質にしているセシャトに聞くことにした。

「なあ。この世界に時計って・・・・・・」

縛られているにも拘らず強気のセシャトは、「フン！」と話しかけてきたカルマに対してソッポを向いた。

「・・・・・・ディザ・イース～ン・・・・・・」

泣きそうな声を出した途端、ディザの背筋に寒気がした。

「っ！！きっ、気持ち悪い声を出すな！！」

―※＊※―

その翌日。周りを森に囲まれ、近くに海がある街、パルティオンを

見下ろせる丘の上に、一人の男が降り立つ。その男は、オリュンポス山に攻め入った男、デーモの仲間のアポリュオン。

「まずはあの街からだ」

そう呟くと、アポリュオンはまるで解けるかのように景色の中に消えた。

第３１話　決着と襲撃

考え始めてからどれだけ経っただろうか。地上ではもう日が昇っていたが、地下世界であるクトニアンでは、そういったことはわからない。ふと周りを見てみるとネイトはいなかったので、マフデトは神殿の中に入って行った。入り口を抜けてすぐに、ヒエログリフが一面に彫られた壁にぶつかった。その壁は、一つのヒエログリフごとに溝が入って分けられており、マフデトだけでなく、この国にいるほとんどの神々は〈守りの神殿〉の仕掛けを知っている。その仕掛けどおりにヒエログリフを操作すると、壁の中央部が上がり、奥への通路が現れた。

「（神殿の中は一本道。だから迷うなんてありえないし、ネイトが外に出ようとしているのならすれ違う）」

だが、奥の部屋に着くまでマフデトは、ネイトはおろか誰とも会わなかった。何かあったのかと思いつつ、アーマンがいる部屋のドアを開けた。すると、そこにいたのはアーマンだけで、一緒にいるはずのアヌビスはいなかった。

「（えっ・・・・・どうして・・・・・）」

一瞬、戸惑ったが、脳裏にネイトの言葉がよぎった。

『どうした?アーマンを連れ出す、絶好の機会だろ?』

そっと近づいたマフデトは、まずアーマンに話しかけた。

「アーマン・・・・・起きて、アーマン・・・・・」

すると、アーマンはゆっくりと目を開け、頭を上げた。
「アーマン。私と一緒に・・・・・来てくれる・・・・・？」
拒絶されることを覚悟で聞いたが、アーマンはゆっくりと頭を縦に振った。
「ほんとに・・・・・本当にいいの・・・・・？」
再び、アーマンがゆっくりと頭を振る。マフデトは泣きそうになるのをグッと我慢して、なぜか付いている首輪に結ばれている紐を持って、アーマンを連れ出した。誰ともすれ違うことなく神殿の外に出たマフデトは、遠くを見つめた。
「（待っていて・・・・・セシャト）」
マフデトは覚悟を決めて、アーマンを連れて約束の場所に向かって行った。だがその様子を物陰から見ている複数の影がいたことを、彼女は知らなかった。

―※＊※―

数分後。アーマンが消えたことはすぐオシリスの元に伝わった。
「アーマンが連れ出された!?」
「はい。神殿の守りについていたマフデトの姿も見えません」
「そうか・・・・・」
さほど慌てる様子がないオシリスに、誰も戸惑わない。むしろ、誰もが平然としている。
「・・・・・失敗は許されないぞ？」
「わかっています」

―※＊※―

「えっと・・・・・来てみたのは良いんだけど・・・・・・」
セシャトを縛った綱を持ったディザと、マフデトに脅しをかけたカルマは、待ち合わせの場所に来て立ち尽くしていた。
「約束の時間さえわからないのにこんな所で待っていて・・・・・・いいんだろうか？」
ディザが不機嫌に「知るか！！」と答えた時、アーマンを連れてマフデトがやって来た。
「お・・・・・・お姉ちゃん・・・・・・・」
戸惑うセシャトをよそに、「来たか・・・・・・」とディザが呟く。
カルマたちから放れた場所で、マフデトとアーマンが止まった。
「さあ。アーマンを渡してもらおうか」
カルマの呼びかけに、「・・・・・・わかった」とマフデトが答える。
「お姉ちゃん。ダメ！！」
「黙ってろ！」
ディザが首を絞める腕に力を入れ、「うっ」とセシャトが唸る。
「やめろ！！アーマンを連れてきたら、妹には手を出さないって・・・・・」
「ああ、そう言った。ディザ、その手の力を緩めろ。逃げられない程度にね」
カルマに普通と真逆のことを言われ、「フン」と呟くと、セシャトの首を絞める腕を緩めた。その途端にセシャトが咳き込む。
「契約っていうのは、少しでも違反すると相手に足元を掬われる。よ～く、覚えていてよ」
「なるほど。お前が契約とか約束をバカに守るのには、そういう訳があったのか？」
「っそ。見直したか？」
ディザは鼻で笑うと、「全く」と言った。そんなことは気にせず、カルマはマフデトのほうを向いた。

「『せ～の』で交換する。いいな、余計なことはするなよ。せ～の・・・・・」
アーマンがディザたちのほうに進みだすと、ディザもセシャトを押し出した。と思ったら、身体を縛っていた縄を引っ張ったので、彼女は「きゃっ！！」と地面に倒れた。
「セシャト！！貴様、約束が違うぞ！！」
「フン。人質というのは、簡単には手放さないものだよ。そうだろ？」
「だ～か～ら、余計なことをすると足元を・・・・・・」
カルマが注意しかけたその時、アーマンがセシャトを引っ張っている綱を噛み切った。縄を引っ張る腕に力を入れていたディザは、それを支える縄がセシャトの胴体から切り離されたために、反動で後ろに倒れる。その隙を逃がさず、物陰に隠れていたネイトが飛び出し、
「皆の者、かかれ～！！」
と号令をかけると、あたりに隠れていた神々が一斉に飛び出し、あっという間にカルマとディザを包囲した。武器を向けた神々に囲まれ、ディザとカルマは舌打ちをする。
「・・・・・ほ～ら見ろ。お前が余計なことをするから、足元を掬われたじゃねぇか」
「フン。こういう時は、普通一人で来させるもんだろ。その条件を付けなかった、お前が悪い」
「お前な！上官に向かって、お前とはなんだ。大体『一人で来い』って条件付けても、後をつけられたら同じだろ！！」
周りを囲まれているにも拘らず言い争っているディザとカルマに、その場にいる神々は呆れるしかなかった。一方セシャトのほうは、姉に抱きしめられ、駆けつけた兄トトが縄をほどいていた。
「お姉ちゃん・・・・・お兄ちゃん・・・・・ごめんなさい。私が捕まったせいで・・・・・・」
「気にしないで。あなたが無事で良かったわ」とマフデトが慰める。

「そうそう。この場・・・・・・いや、この国にいる神々は全員が気にしてないよ」
「でも・・・・・！いろいろ言われたんじゃないの!?私が人質にされたせいで、何か傷つくことを・・・・・・」
「そのような者は、この国にはおらん」
泣きそうな顔のセシャトに、慰めるネイトが歩いてきた。
「例えいたとしても、お前と同じ・・・・・・いや、それ以上に酷かったかもな」
「そうだな。人質にされた奴のことを悪く言うような奴は、とんでもなく弱いからな。いろんな意味で」
トトが皮肉を言うと、縛られたカルマが絡んできた。
「そうそう。そういう奴らは、とんでもなくザコ・・・・・・」
「だ～ま～れ～！」
縛られて手足が使えないディザが、カルマに頭突きをした。ゴンッという音が響き渡り、トトたちが振り向くと、二人は頭突きの衝撃で気絶していた。
「あ～あ。こいつら、バカじゃないの？」
トトが溜め息をついて場が和んだその時、殺気を感じたネイトが即座に後ろを向いた。その直後に、無数の黒い火の玉が辺りに降り注ぎ、辺りに土煙が舞った。「なんだ!?」と回りを見渡すと、いつの間にか縛っていたディザとカルマの姿が消えていた。
「――しまった!!」
アヌビスがすぐに辺りを探すと、縛り付けた二人を抱えてクトニアンの空を飛んでいる何者かを見つけた。
「――逃がすか!!」
ネイトを始め、現場にいた神々がすぐに攻撃を放つが、背中に翼が生えた何者かは空中で全て避けてみせた。
「全く、仮にもあなた方二人は俺よりも実力は上なんですから、こんなドジは踏まないでいただきたい」
「何、言ってんの？どうせお前も、ラグシェ国でドジってこっちに

飛ばされてきたくちだろ」
的を射られ、「ぐっ」と唸るデーモ。そうしている間も、ネイトたちはデーモたちに攻撃を続けている。
「くそっ、当たらない」
「うるさいが、カルマたちが手こずってるんだ。俺には到底敵わない」
「そうそう。だから、さっさと逃げてください」
「了解」
軽口を叩くカルマにデーモは静かに答え、大きく翼を羽ばたかせると、突風と共にデーモたちは姿を消した。遠くのほうで見つけると、すぐさま同じようなスピードでネイトたちも追うが、途中で煙幕を巻かれて見失ってしまった。
「くそっ」
煙幕が晴れた頃には、追いかける相手はもう影も形もなくなっていた。

―※＊※―

「・・・・・で、どうよ？収穫は？」
空中を移動しながらジェプト国の国境を越えた辺りで、デーモは運んでいる二人に聞いた。
「上々！！っと、言いたいのだけど、本当は半分って言ったところだな・・・・・・」
カルマが答えた後、縛られている腕を何とか引き抜いて、ディザは手に持っている黒い塊を見せた。
「混沌の深淵、ヌンから引き出した、罪深き死者の魂だ。アポピスに食われるところだったが、なんとか追い出せていい具合に囮になってくれた。結果オーライだ」

それを見たデーモは、満足げな顔を見せた。
「捕まった割には上出来だ。さすがはカルマだな」
「は～は～。褒めるなよ！！」
カルマは思わず自由だった足でデーモを蹴り上げてしまい、それにより「わっ」とカルマを縛っている綱を離してしまった。当然、カルマの身体は落ち、当の本人は
「あ～れ～・・・・・・」
と言いながら、まっすぐ海中に落ちて行った。ドッボ～ン、という水音を聞き、残ったデーモとディザは呆れ顔になった。
「なぜ、お前がそれを持っているか・・・・・・わかったよ・・・・・」
「そうか・・・・・・ついでにあいつ・・・・・・置いて行くか・・・・・？」
「・・・・・賛成・・・・・・」とデーモが言った時、
「こ～ら～！！置・い・て・・・・・行くな～！！」
足を高速で動かして水面を駆け抜けるカルマに、二人は知らん顔をして陸に着くまでそのままで置いておいた。

―※＊※―

その頃のパルティオン。午後三時ごろを過ぎても、アテナはまだセルスの家にいた。本当なら、傷が癒え次第すぐにでも仲間と合流すべきだっただろうが、出来なかった。そのことは、アテナ自身も気にしていた。
「（いずれここにも奴らが来る。そうなったら、この町の人々を巻き込むことになる）」
暗い顔で考え込んでいるアテネの前に、セルスは一杯のお茶を出した。小さなティーカップからは、いい匂いがしていた。

「これは？」
「ハーブティーだよ。ハーブの香りには心を落ち着かせる効果があると言われているの」
カップを手に取り、「ふ～ん」と呟いた後、一口飲んでみた。
「美味しい」
微笑んだアテナを見て、「よかった」と言うセルス。その時、家の外が騒がしくなった。
「何かしら？」
「あのクトゥリアという男とディステリアという男、何かしでかしたのか？」
「まさか・・・・・・」
アテナとセルスが窓の外を見ると、家の屋根に上っている男、アポリュオンが手から光の玉を発射して、街を破壊していた。
「な、なんなのよ。あれ！」
セルスが叫んだ時、バタッ、と音がすると、アテナが外に駆け出していた。
「あ、アテナ！？」
セルスは叫んでいたが、アテナには聞こえていなかった。やがて、屋根の上の男が、駆け出してきた彼女を見つけた。
「こんな所にいたのですか。アテナ」
「お前は・・・・・何者だ！？」
「これを連れているとあれば、おわかりになるでしょう」
アポリュオンが指を鳴らすと、街の近くにテュポニウスが出現した。ただし、オリュンポスの聖域で戦った時と違い、体中傷だらけの継ぎはぎだらけだった。
「奴らの仲間か！？」
「ええ。ある目的のためこの街を襲わせてもらおうと思ったのですが、ちょうどいい。あなたを倒させてもらう」
「いいだろう。付いて来い！」
アテナが叫ぶと森のほうへ駆けて行き、テュポニウスはそれを追っ

て行った。
「大変。私たちも応援に行かなきゃ」
だが、騒ぎを聞き付けた町の人々は、ざわざわと騒いでいるだけだった。その中には、クウァルもいた。
「だが、あいつがいたせいで、あの怪物が来たのだろう?」
「そうだよ。居なくなってくれて助かったよ」
信じられない言葉を聞いて、セルスはショックを隠せなかった。
「あなたたち・・・・・・最低。見損なったわ。もういい、わたし一人で行く」
「待て、セルス」
クウァルが呼び止めるが、それも聞かずに家から武器を持ち出したセルスの前に、複数の兵士が立ちはだかった。町の市民は我先にと逃げ出した。
「援護に行かれては困るのですよ。街の者には、愚かなままで逝ってもらいたいのでね」
「なんですって!?」とセルスが睨む。
「傲慢で自分勝手で心の弱い人間ほど、我らの助けになる。かかれ!!」
兵士がセルスに襲いかかろうとした時、耳を突く金属音がして、向かって来た兵士が跳ね飛ばされた。セルスが恐る目を開けると、汚れがかった白い布の帯に巻かれ、鞘に収まったままの剣を振ったクウァルがいた。
「・・・・・・行けよ」
クウァルの言葉に、「え・・・・・・?」とセルスは戸惑った。
「行け・・・・・・そして・・・・・・お前の正しいと思うことを・・・・・・貫いて来い」
そう言われ、「・・・・・・うん!」と強く頷いたセルスは、立ちはだかる兵士の間をすり抜けてアテナの元に急いだ。
「逃がすな!!」
後を追おうとした兵士たちの前に、剣の鞘を掴んだクウァルが立ち

はだかる。
「お前らの相手は・・・・・・俺だ」
静かな声でそう言いながら、クウァルは巻かれた布を少し解いて、剣を抜いた。
「はいはい、無理は禁物。俺も付き合うぜ」
剣を抜いて横に立ったクトゥリアに、「男と付き合う趣味はない」とクウァルは突き放す。
「・・・・・・・・時と状況を考えましょう」
苦い顔をしたクトゥリアからクウァルが視線を外すと、大勢の兵士が襲いかかって来た。
「ところで、あんたの連れは？」
「増援」

第３２話　共闘、天魔の少年と戦女神

イージスの盾と槍を装備したアテナは、町から離れた場所でテュポニウスと戦っていた。アテナなどの神々は人間の世界ではある程度力が抑えられてしまう。神界と比べてマナの濃度が薄いからと言われているが、詳しいことはわかっておらず、前にクトゥリアが言ったことも仮説でしかない。どちらにしろ、アテナが不利と思われたが、そこで遮蔽物と足場が多い森に誘い込んだ。

「ガルル、ドコダ！？」

「ここだ！！」

アテナの声がしたほうに振り返るが、彼女はそこから別の木の枝に飛び移り、死角からテュポニウスに跳びかかる。後頭部に槍の一撃をくらい振り返るが、アテナは敵の背を蹴って視野の反対側に飛び退く。

「グガッ！？グオオオオオオオッ！！」

ただでさえ力に差があるテュポーン並みの力を持つテュポニウスに、力が弱まっているアテナは森を飛び回りヒットアンドアウェイ戦法で翻弄する。だが、いつまでもやられっぱなしのテュポニウスではなかった。

「オノレハアアアアアアアッ！！！」

「何！？」

テュポニウスの咆哮にアテナが驚いた瞬間、竜巻が吹き荒れ森の木々を吹き飛ばす。一気に開けた視界の中にアテナの姿を見つけ、テュポニウスが突っ込んで行った。

「ソコカアアアアアッ！！！」

倒れた木々をなぎ払って迫るテュポニウスの拳を、後ろに下がりながら槍で捌く。森の木々を吹き飛ばされたらこの先の岩場に誘い込むつもりだったが、想定していた時期よりあまりにも早い。

「くっ！！」

それ是も善戦するアテナだが、違和感を覚えて眉を寄せる。前に戦った時とは違い、テュポニウスの攻撃は荒く隙だらけ。しかも、攻撃を受けそうになってもあの風の壁を出すことはなかったため、次々と攻撃は決まって行った。

「（おかしい。攻撃が入りすぎる。何か罠でも張っているのか？）」

だが、アテナの警戒とは裏腹に、テュポニウスはただ力任せに腕を振って、暴れているだけだった。

「でやあああああっ！！」

雄叫びと共に背中に白い翼を持ったディステリアが、コウモリの翼に似た剣を構えて切りかかる。雄叫びを聞いて当然気付いたテュポニウスが振り返るが、ディステリアは構わず天魔剣を振り下ろす。

「グオッ！ガッ！！」

頭に一撃くらいながらも右腕を振る。ディステリアは翼を羽ばたかせてかわし、天魔剣を振り上げてその腕に一撃を見舞う。

「くっ・・・・・・」

硬い皮膚に阻まれ、傷は浅い。構わず攻撃するテュポニウスの左脇腹に、アテナの槍が刺さった。

「ガッ！？」

「はあっ！！」

こちらに視線を向けたテュポニウスに、槍を連続で突き出す。肩や腕といった硬い殻の付いた部分は弾かれたが、脇腹といった皮膚だけの部分には浅いながらも傷をつける。よろめいたテュポニウスに接近するディステリアだが、地面でうごめいた尻尾に気付きとっさに身をかわす。間一髪、振り上げられた尾をかわし、反転したディステリアはアテナの横に降り立った。

「助かった・・・・・・だが、さっきの雄叫びを上げた不意討ちは

いただけないな・・・・・・」
「気合いを込める意味で上げただけだ」
苦い顔をするアテナに素っ気無く答えたディステリアは、唸るテュポニウスに剣先を向ける。「グ・・・・・・・」
「ん？いきなりどうした・・・・・・」
「グウウガアアアアアッ！！！」
いきなり雄叫びと両腕を上げたテュポニウスに、ディステリアは驚きアテナは警戒を強める。向かってきた敵に二人は左右に散るが、テュポニウスはアテナに向かってきた。
「ッ！？なんで！？」
「ウガ～、ウガ～！！ソノ匂イ、気ニ食ワン！！」
なんのことかわからなかったが、高い攻撃力を持つテュポニウスの攻撃を受ける訳には行かなかった。攻撃をかわし続けていると、いつの間にか岩場に出た。
「援護する！！」
森の中に置いてかれたディステリアが姿を表し、天魔剣に意識を向ける。
「（イメージを固めろ・・・・・・前にやったように、風の刃のイメージを・・・・・・）」
目を閉じればイメージを固めやすいが、いつこちらに攻撃が飛んでくるかわからないこの状況でその行為は問題外。テュポニウスに押されるアテナを見ながら苦心していると、天魔剣に風が集まる。
「（よし！）」
それを大きく振り上げ、
「スラストーム！でやあああああああああっ！！」
と大きく振った。風の刃はアテナに注意が向いているテュポニウスに気付かれることなく、真っ直ぐ飛んで行き直撃した。が、
「ン？」
風の刃が当たった部分を、指先で痒そうにかく。その隙に仕掛けたアテナには左腕で応戦し、彼女は後退を余儀なくされた。

「効いてない！？イメージが弱かったか・・・・・・」
むしろあれだけ隙を作った挙句決定打を与えられなかったとなると、クトゥリアに知れたら何を言われるかわからない。
「未熟だな・・・・・・」
「だあああああっ！もう、わかってるよ・・・・・・って、ん？」
横から聞こえた声に首を傾げると、いつの間にか横にアテナが立っていた。
「なっ、あんた。奴は大丈夫なのか！？」
テュポニウスのほうを見ると、奴は積み上げられた大木に阻まれている。それはさっき竜巻で吹き飛ばされた木だが、よく見ると石化している。
「石になってる。なんで？」
「こいつの力だ」とアテナは左手に持つイージスに目をやる。
「これに込められた魔力を解放すれば、それを浴びたものは石になる」
「げっ！！」
身構えて後ろに下がるディステリアに、「心配はいらない」と顔を向ける。
「今は封印している。しかし・・・・・・現世で封印と解放を繰り返していると、さすがに堪えるな・・・・・・」
顔色を悪くして槍を支えにするアテナに、「おいおい、大丈夫か」と声をかける。その間、テュポニウスは石化した木を拳で破壊している。
「やべっ！こうなったら、もう一度スラストームで・・・・・・」
前に出て天魔剣を構えるディステリアに、「やめたほうがいい」とアテナが止める。
「奴の属性は恐らく風。風属性の攻撃に耐性や無効特性ならまだいいが、吸収能力があると傷を治される」
「だが、さっきはスラストームが当たっても何も起こらなかったぜ？」

「あれは技として成立してなかったからだ。現にダメージを与えられていない。だから、目に見える変化が見て取れないんだ」
「だあああああああっ！要するに、俺が未熟者だって言いたいのかよ～～！」
振り返って声を上げるディステリアに、アテナは落ち着いた様子で口を開く。
「未熟な者は失敗を繰り返す。だが、恥じることはない。そこから己を磨いて、いくらでも変われる。それこそが『未熟者の強み』だ」
「・・・・・・褒めてられるのかどうかわからないけど、どっちかっていうとバカにされてる感じ」
「ふっ。未熟な証だ・・・・・・」
微笑むと、そこに「アテナ！！」とどこからか声がした。二人が振り返ると、袋を背負ったセルスがこちらに向かってやって来ていた。
「セルス！？だめだ！来るな！！」
アテナが叫んだ直後、テュポニウスは石化した大木を全て壊し終えた。
「ちっ！！」
「オノレ～、吹キ飛バシテクレル！！」
ディステリアが仕掛けたのとテュポニウスが叫んだのは、ほぼ同時。テュポニウスは最大威力で竜巻を発生させ、ディステリアはライジング・ルピナスを放った。竜巻と光の柱がぶつかり衝撃が走り、セルスは突風でバランスを崩して下に落ちそうになる。
「うわっ！！」
アテナは一瞬でセルスの近くに来ると、彼女を担いで光の柱と相殺しなかった竜巻をかわし、テュポニウスがいる場所から見て少し高い場所にある草むらに隠れた。
「っふ～～～、間一髪だったな」
ディステリアもライジング・ルピナスを掻き消された後、すぐに空中に逃れた。二人は気付かなかったが、天魔剣を握る手は少し焼けている。

「どうして来たの!?」
「だって、お姉ちゃんのことが心配で・・・・・・・・」
「だからって、ここまで来るなんて。あいつには勝てる見込みが少ないというのに・・・・・・」
下を見下ろすアテネ。テュポニウスは「ウガ～!」と叫びながら、竜巻を起こしていた。
「くっ、このままでは・・・・・・」
「こういう時こそ、ハーブティー。落ち着かなくちゃ、いい考えは思いつかないよ」
「それはそうだが、何もこんな時に・・・・・・それはなんだ?」
背負っていた袋からセルスが取り出した水筒型の魔法瓶を見て、アテナが聞く。
「あれ?魔法瓶って知らないの。私たちは水筒とも呼んでいるけど。これに飲み物を入れておくと、熱いお茶なら熱いまま、冷たい水なら冷たいまま、しばらくは持ち運べるんだよ」
「ほお～。そういえば、ヘパイストスがそのような物を作っていたな」
コップとなるフタを外した魔法瓶からお茶を出すセルスに、ディステリアは苦い顔をする。
「はい。あなたも飲む?」
「いや、俺はいい。どうも、その香りが苦手だ・・・・・・」
「そう?」
ハーブティーの入ったコップをアテナに渡そうとした時、近くで土を擦る音がする。
「ソコカ!」
「げっ!」とディステリアが見上げると、テュポニウスはアテナたちが隠れている場所に攻撃を仕掛けた。ディステリアは翼を羽ばたかせて飛び上がり、アテナがセルスを引っ張ってかわした。その拍子に、セルスの持っていたハーブティーがテュポニウスのほうに飛んでいった。

「あ～、ハーブティーが～」
「我慢しろ！」とアテナが叱咤した時、ハーブティーが頭にかかり、
「ギギョエエ～！！ナンダ、コレハ～！？」
とテュポニウスが悲鳴を上げた。そこに隙を見出したディステリアは突っ込むが、アテナはその様子を見て首を傾げた。
「なんだ？いったい、どうしたというのだ？」
「あ～、ハーブティーがかかっちゃった～」
嘆くセルスを、テュポニウスはギロリと睨む。
「キッサマ～～！！」
「ひ、ひょえぇぇぇ～～！！」
豪腕を振りかざすテュポニウスの攻撃から、間一髪でセルスを助け出したアテナは再び距離をとった。二人に目を向けたテュポニウスは、天魔剣を構えて突っ込むディステリアに直前まで気付かなかった。
「っ！？」
「でやあああああっ！！」
狙いは首。兵士として訓練を受けていたため、急所について講義は受けていた。それは敵の急所を狙うと言うよりかは自分の急所を守るためだが、知識は常に表の使い方を学べば裏の使い方も知ってしまう。
「フウッ！！」
本能で危機を察したテュポニウスは構えた左腕で天魔剣の一閃を防ぎ、反撃を繰り出すも上に飛んだディステリアにかわされる。
「チョロチョロト！！」
「あんたのような格上相手に、そういう戦い方しかできないんでね！！」
正々堂々戦うのは同格相手に限り。力の差が大きい相手にそれを挑むのは、自ら死ぬようなもの。『生き残るための戦い方』でディステリアはテュポニウスに挑んでいる。その間、アテナはセルスを安全な場所まで運んだ。

「どういうことだ?私でなく、セルスに攻撃を向けた?」
「ウガ〜、コノ匂い、気ニ食ワン!」
でたらめに腕を振り回すテュポニウスの攻撃を、ディステリアは難なくかわす。言っていたことを聞いたアテナは、ハッと空になって転がる魔法瓶に目をやった。
「まさか、あいつはあのハーブティーの匂いが苦手なのか?」
とは言っても確かめる術はない。方法を探していると、テュポニウスの拳を天魔剣で防いだディステリアが近くに着地した。
「なあ。さっきの『ハーブ』という葉は、まだあるのか?」
「え?ハーブの葉には色々あるから、持ち歩く人なんていないんだけど・・・・・」
セルスの言う問題とは、効能の他に問題も含まれている。
「いっつ〜〜。なんつぅ衝撃・・・・・・」
「ティステリア。あの魔法瓶を取ってこれるか?」
「はあっ!?こんな状況で何言ってんだ!?」
予想通りの反応を示したディステリアに、アテナは自分が持った仮設を話す。
ポケットからハーブの葉を取り出すセルスだが、アテナは先ほどの自分の言葉に戸惑いを感じていた。
「なるほどね。まあ、他に方法がないから、この際すがってみるか」
「私が奴の気を引く。その隙に・・・・・・」
「よしっ!」
行動に移ったディステリアとアテナは、左右から向かって行った。
「トドメヲ刺シテヤル」
それを見つけたテュポニウスは腕を振り上げて襲って来たが、アテナはその攻撃をかわし槍で応戦する。その隙にディステリアは、テュポニウスから離れた魔法瓶に手を伸ばし、掴むなり飛び立つ。
「えっと。確か茶葉を入れた袋が・・・・・」
魔法瓶を逆さにすると残っていたハーブティー共に、濡れたティーバッグが落ちる。

「（ああ。あった、あった・・・・・・ってか、魔法瓶にティーバッグ入れるなよ）」
魔法瓶の中から下ハーブティーの匂いにディステリアが顔をしかめる。と、下ではアテナが押されていた。
「やっべ！！」
急降下すると共に、左手に持った空の魔法瓶を投げつける。魔法瓶は見事にテュポニウスの頭に当たり、ハーブティーの雫がその鼻を突く。
「ギョエアァァァァ～～～！！」
悲鳴を上げたテュポニウスは魔法瓶を払い除ける。地面に叩きつけられて変形した魔法瓶にセレスが残念そうな顔をしたが、それに気を配る余裕は二人にはない。
「（好機！）」
まだ確信は得られてないが、ハーブにつながるものを嫌うのは確か。突っ込んだアテナが槍を振り上げると、ディステリアは左手のティーバッグを投げる。瞬時に意図を察したアテナは槍の穂先に当て滑らせると、そのまま顔に向けて突き出した。穂先が顔を掠めると、かすかなハーブの香りに悲鳴を上げた。
「やはり、貴様の弱点はこのハーブの香りか！」
「オノレ～！！」と繰り出されるテュポニウスの攻撃をかわし、落ちる寸前のティーバッグを爪先に引っかけ、上に上げて交差した左手に握った。デタラメに振り回される腕を避けながら、彼女はチャンスを待った。
「無茶するな！いくら不死だからって・・・・・・」
援護のために突っ込んだディステリアの一撃を防ぎ、目障りな彼に狙いを定める。
「オ～、ノ～、レ・・・・・・」
勢い余り右腕が地面にめり込んだ。その後、向かって来たアテナに対して振った左腕は空を切り、胴体ががら空きとなった。
「（今だ！）」

アテナは左腕をテュポニウスの口に突っ込み、手に持っていたハーブのティーバッグを口に入れた。
「ゲゴガゲゴガッ！！」
苦手なハーブを口に打ち込まれたテュポニウスは、訳の分からない叫びを上げた。すかさず、イージスの魔力を開放した。放たれた光がテュポニウスに当たり、その体を見る見るうちに石にしていった。
「止めだ！爆砕槍牙！！」
「一気に潰す！フォーリング・アビス！！」
岩となり動きが止まったテュポニウスに、闇の魔力を溜めた天魔剣をディステリアが振り下ろし、アテナが鋭く槍を突き立てた。槍と剣は岩になったテュポニウスを意図も簡単に砕いた。
「やった～」
喜びの声を上げるセルスに、アテナは、ぐっ、と親指を立てた。
「ティステリア、助かったぞ」
「どういたしまして・・・・・いつつ・・・・・・」
空中のディステリアは痛みに顔をしかめるも、地上のアテナとセルスはその理由を知れなかった。

第３２話　共闘、天魔の少年と戦女神（後書き）

アテナは知恵の女神ですが、知略と言うにはあまりにもお粗末ですね。そこは反省すべき点ですが、４～５年経った今でもそこを補うことはできず・・・・・またも反省。

ちなみに、攻撃の際に雄叫びを上げることに意味がないように思ってる方が多いようですが、人は大声を上げると脳のリミッターが緩み、火事場のバカ力に近い力が発揮できる、と言われています。ただし、テレビで見ただけなので、そういうのは信じない人は流してください。

第３３話　激闘！二人の戦神

一方、夕暮れの町では、アポリュオンの軍勢とクウァルとクトゥリアのタッグ、大勢対二人の戦いが繰り広げられていた。
「グワァ！」
町のあちこちでは、もうすでに大勢の兵士が積み上げられており、その中央にはボロボロで黒く汚れた服を着たクウァルがいる。彼が対応できなかった兵士はクトゥリアが倒しており、パルティオンの町に攻め込んだ大勢の軍隊はクウァルとクトゥリアに苦戦していた。
「どうした？もう終わりか？」
「バカな。たかが人間に、これほどの力が・・・・・・」
まだ兵が残っているとはいえ、アポリュオンは只者でない目の前の人間に驚きを隠せなかった。
「来ないなら・・・・・・こちらから行くぞ！！」
クウァルは剣を下段に構え、前に出た。普通の人より動きは速かったが、アポリュオンは剣の一撃を紙一重でかわした。
「人間にしては・・・・・・速いな」
「いつまで余裕でいられるかな！？」
重心を低くしたまま剣を振り下ろし、振り上げ、また振り下ろし。
その動きには無駄がなかった。
「（驚いたな。この剣捌き、素人のものではない。それに・・・・・・この剣・・・・・・）」
その時、アポリュオンの姿勢が、足を伸ばしたまっすぐな形になった。そこにクウァルが剣をまっすぐ振り下ろす。この姿勢では、高

い確率でかわせない。ガッ!!と、鈍い音が周りに響き渡る。
「入った!」
だが剣は、姿勢を低くしたアポリュオンに受け止められていた。
「この剣・・・・・・間違いない」
小さく呟いた後、手から衝撃波を出してクウァルを押しのけた。
「ぐっ・・・・・・」
「その剣、『魔装神具』だな?」
起き上がるクウァルに、指差したアポリュオンが言った言葉。その意味を知らないクウァルが、それをすぐ理解できるはずがなかった。
「まそう・・・・・しんぐ・・・・・・?なんだ、それは?」
眉を寄せるクウァルを見て、「ククククク」と小さく笑った。
「そうか。貴様はその剣の、真の力を知らないのか?」
懐から短刀を取り出し、「教えてやるよ」と続けた。
「同じ力を持った剣で、な」
短刀の刃が黒い光に包まれていき、次の瞬間、その光が長い腕を持った大蛇の形になり、クウァルに襲いかかった。
「何!?」
叫びながらも飛んでかわしたが、突然、蛇は長い腕でクウァルを捕らえ、そのまま地面に叩き付けた。
「ぐわあぁっ!」
叩きつけられた地面から上がる土煙を見て、まるでせせら笑うかの表情を見せる。
「どうだ?これがこの剣『魔邪刃』の力だ」
「まじゃぱ・・・・・だと・・・・・・?」
剣を支えにして体を起こしたクウァルに、蛇は鎌に変化させた腕を振り下ろしてきた。反射的に剣で防御したが、まるで直撃したかのような衝撃を体に受けた。
「ぐっ・・・・・・何・・・・・・・?」
「バカめ。真の力を解放していない状態で、『魔神装具』の攻撃を防げるとでも思ったか?」

よろめき、地面に片膝を突くと、黒い蛇がトドメを刺そうと腕を振り上げた。体の痛みで動けないクウァルに爪が振り下ろされようとしたその時、どこからか飛んで来た炎が黒い蛇を吹き飛ばした。

「何！？」

「炎の刃！『破魔炎刃』か！？」

アポリュオンが叫ぶと、吹き飛ばされた黒い蛇とクウァルの間に、ギリシャ兵の鎧を身にまとい、燃える剣を持った青年が降り立った。

「よう、面白いことやってんじゃねぇか」

間髪入れずに、アポリュオンがその青年に向かって放った黒い光弾は、彼が被っている兜を砕いた。だが、青年はアポリュオンを見据えて一瞬で近づき、剣を振り下ろした。とっさにかわしたアポリュオンだが、斬撃は彼でなく黒い蛇を叩き切った。

「ちっ、外したか」

アポリュオンが「ちっ・・・・・・」と舌打ちした後、両手や指先をいろいろな形に合わせると、先ほどと似たような蛇が現れ、青年に襲い掛かった。だが、青年は空中で不安定な姿勢であるにも拘らずそれをかわし、再びアポリュオンに近づいて、連続で剣を振った。それらをかわし、離れた場所に着地すると、その青年を見据えた。

「貴様は・・・・・・」

「名乗ってなかったか。俺の名は・・・・・・アレス」

「貴様・・・・・・さっきの技は・・・・・・・・」

「さっきの技？さっきの技はな・・・・・・・・」と、アレスは炎がともった剣をゆっくりと振り上げた。

「『火炎牙剣（プロクス・クシポス）』だ」

剣を振り下ろすと共に、炎が斬撃となって放たれた。

―※＊※―

その頃。
「いたか!?」
慌てた様子で聞いたアポロンに、「いえ、おりません」と不和の女神――エリスが答えた。
「どこにいるの?父上も、アテナも・・・・・・アレス兄さまも」
オリュンポスから避難した神々はジェプト国へ渡る手筈だったが、あと少しで到着と言うところで敵の襲撃を受けてしまい、ラグシェ国とジェプト国のほぼ中間に当たる、テルカ島のほうへ引き返したのだった。
「父上やアテナは、確か最後だったな。だがアレスは・・・・・・?」
二人が考えていると、弓を持ったアルテミスが飛び込んで来た。
「お兄さま、エリス。また来たわ!!」
すぐ後に、獣のような体をした二本足の魔物が3体、前方から現れた。
「ちっ、テルカに来てから6回目だ」
「私たちの行き先がばれているの!?」
「密告者が・・・・・・?いや、それは考えられない。いなくなった者は!?」
矢を発射しながらアルテミスが、「アレスとアフロディーテたち」と言った。
「そうか・・・・・・ん?アフロディーテ・・・・・・?」
頭に何かが引っかかり、アポロンは矢を構える手を止めた。そこに、後ろの草むらから敵の兵士が飛びかかる。
「お兄さま!後ろ!!」
エリスが「他にもいたか!?」と叫び、アポロンが気付いた頃には、敵の爪が目前まで迫っており・・・・・・。

―※＊※―

ドドッ！ドドッ！ドンッ！ドドォォン！！

街の中に連続で爆発が起こる。爆発の先には、左肩を押さえたアポリュオンがいた。

「どうした？俺相手に、手も足も出ないか？」

アポリュオンの遥か前には、勝ち誇った笑みのアレスがいた。だが、笑っているのはアポリュオンも同じだった。

「な～に、俺が手を出さなくても、自滅してくれそうなのでね」

「へっ、追い詰められている奴が、何言ってんだよ！！」

再び爆発。その爆発を険しい表情で見つめている者がいた。

「（よりによってアレスが来るとは。このままでは町の被害だけでなく、犠牲者が出かねん）」

なぜか、アレスの性質をよく知っているクウァルは彼の元へ行こうとしたが、体の痛みに立ち上がれなかった。

「おい、大丈夫か！？」

「俺のことはいい。それより、あいつらを・・・・・・アレスを止めてくれ」

「わかった。くそっ、手が足りないな・・・・・・」

眉を寄せて苦々しく呟くと、クトゥリアは爆音がするほうに駆けて行った。

「クソ。こんな時、セルスがいてくれたら・・・・・・」

顔をうつむけていた時、「呼んだ？」とセルスの声がした。顔を上げたクウァルが見たのは、膝に手を乗せてかがむセルスと、その後ろに立っているアテナとディステリアだった。

「セルス・・・・・本当に・・・・・・セルスなのか・・・・・・？」

驚くクウァルに、セルスはムッとする。

「失礼ね。私が幽霊だと思ってる訳？」

セルスが膨れっ面でそっぽを向くと、「悪かった」とクウァルが謝った。
「だが・・・・・本当にセルスなのか?あんな化け物相手に・・・・・」
「アテナとディステリアがいたから大丈夫だったの。そんなこと言うなら、傷を治してあげない」
当のアテナは街で起こる爆発のほうを見ていた。
「あの炎?まさか・・・・・」
「ああ。アレスが来て、あのアポリュオンとかいう奴と戦ってる」
クウァルの言葉を聞き、アテナは顔が青くなった。
「まずい!セルス、早く彼の傷を治してやってくれ」
爆発のほうへ駆け出したアテナを見送り、セルスは首を傾げた。
「どうしたの?あんなに慌てて・・・・・」
「アレスは、アテナと同じ戦神だ」
「そっか、仲間が危ないと思ったのね?」
セルスが倒れているクウァルの側にしゃがむ。彼女の両手の平から放たれる薄緑色の回復魔法の光が、クウァルの傷をふさいでいく。
「いや、違う。アテナが戦術や戦法を重視なのに対して、アレスは血なまぐさい戦いを好む。周りのことなど、目に入るまい」
「おいおい!それじゃあ、街への被害が広がるんじゃないのか!?」
「ああ。まったく、神様ってのは本当に始末が悪い」
傷が治り立ち上がるクウァルに、セルスが「そんな!」と反論する。
「神様が全部あんなのとは限らないよ!全ての神様のこと知らないくせに、勝手なことを言わないで!!」
その反論にクウァルは、「・・・・・そう・・・・・だな・・・・・」と呟いた。
「俺たちは・・・・・世界の全てを知らない。なのに・・・・・知っているつもりでいる。それは彼らにとって・・・・・」
再び爆発が起こる。それを見上げたディステリアが駆け出す。クウァルも傷の痛みが癒えたため、立ち上がる。

「行くぞ！」
駆け出したクウァルを、セルスが追い駆ける。
「（そうだ。何も知らない・・・・・・もしも無知が罪なのだとしたら・・・・・・人間は・・・・・・・・）」

―※＊※―

「オラオラ～、どうした～」
反撃もせず、ただ逃げ回っているアポリュオンに対し、アレスは猛攻とも言うべき追撃をかけていた。
「ちっ、ちょこまかと。なら、最大火力で焼き尽くしてやらぁ！！」
剣にありったけの炎の力を込めると、大きな炎の刃が現れた。アレスがそれを放とうとした時、横から槍が割り込んで来た。
「ぬおっ！？」
身をかわすと、その後にアテナが現れた。
「アレス！ここら一帯を焼け野原にするつもりか！？」
「なっ、アテナ！別にいいだろう？人間の町なんだから！」
「よくない！それでは敵の思うつぼだ！」
二人が言い争っている間、着地したアポリュオンは静かに立ち上がった。
「残念。あと少しというところで、邪魔が入りましたか」
アポリュオンの言葉に「何！？」とアレスが睨みつける。
「恨み、妬み、憎しみ等からなるマイナスエネルギー。それらは我らにとって、兵を作り出す上で必要不可欠なもの。小さな町一つでも、その量は決して少なくないからなぁ」
ククク、と笑うアポリュオンに「なんだとぉ！？」とアレスが叫ぶ。
「じゃあ、てめえは俺に大技を使わせるために、わざと逃げ回ったってのか！？」

「その通りだ。短気な奴ほど少しでも挑発すれば、すぐに切れて大技を使うだろうからな」
アレスは「クッソ～・・・・・・」と悔しがり、剣を持つ腕に力が入る。それをアテナが抑える。
「落ち着け」
「なんだと!?」
「今、挑発に乗ったら、それこそ思う壺だ。ここは一端退いて・・・・・」
「ふざけるな。このまま引き下がれるかよ。大体、テルカで足止めを食らってるっていうのに、ノコノコ帰れるか!」
「テルカで足止め?どういうことだ!?」
そう言って駆け出したアレスに聞いたが、そのまま突っ込んで行った。
「知るかよ!ただ、ジェプトへ向かっている時、敵の待ち伏せを食らったんだ!そんで俺たちは、テルカへ後戻りしなきゃならなかったんだ」
剣を振るアレスを見て、「どういうことだ」と呟くアテナは、すぐに敵に行動を読まれていたことに気付いた。
「お前らは、前にオリュンポスにテュポーンが攻め入った時もジェプト国へ避難した。同じようなことが起これば、また同じ場所に渡ると踏んで、ジェプト国の近くに兵を展開していたのさ。もっとも、ジェプト国では他の用事もあったが、な」
「別の用事・・・・・・だと?」とアテナの表情が厳しくなる。
「んなこたぁ、どうでもいい。ここでてめぇを倒しゃぁ・・・・・・」
「悪いが・・・・・そういう訳にも行かんのだよ!!」
剣を受け止めた左腕を振り、アレスを弾く。彼が着地した隙にアポリュオンはその場から離れ、追撃をかけるために腕に魔力を溜めるが、そこに「甘い!!」とアテナが槍で追撃をかける。
「何!?」

「戦いは常に相手の先の先を読む。私はアレスのようには行かないぞ！」
「ちょっと待て！それじゃぁまるで、俺が後先考えないアホみたいじゃないか！」
「ホントのことだろう！」
アテナにビシッと言われて、アレスはその場にこけそうになった。
そんな彼を無視して、アテナはアポリュオンに向かって連続で槍を突き出した。だが、どれも直撃には至らず、ほとんどが完全に防がれていた。
「ちっ、さすがはアテナだ。ある意味、アレスよりかは強敵だ」
「んだと、コラァ！」
「アレス、挑発に乗るな！」
叫ぶアレスにアテナが注意すると、その隙にアポリュオンが後ろに下がった。すぐに気付いたアテナが前に出ようとしたが、ほぼ同時に彼女の横を人影が駆け抜けて行った。
「はあああああぁぁぁぁぁぁっ！！！」
クウァルが振り下ろされた剣はギリギリでかわされ、空を切り、地面を砕いた。だがアポリュオンが逃げた先には、無数の光の粒が瞬いていた。
「これは・・・・・・！！」
「かませ！！セルス！！」
目を見張ったアポリュオンは慌ててその場から離れようとするが、粒と粒の間を光の線が繋げていった。
「プリズン・クリュスタロス！！」
セルスの叫び声と共に、粒を繋ぐ光はやがて、氷を形成していった。
「空気中の水分と結合して・・・・・・そんなバカな！」
光はやがてプリズムのように透き通った氷の檻を形成し、アポリュオンを中に閉じ込めた。

第３４話　舞い戻りし援軍

その頃、オリュンポス山から遥か西、ラグシェ国と隣国の境にある島。黄金の輝きを持つリンゴがなる大樹の元に、一人の男が訪れた。
「ここか・・・・・・」
その男の声は、どこか安らかな感じがした。
「西の最果て。至福の園にある、黄金のリンゴが実を付ける黄昏の樹・・・・・・」
「何者です」と大樹の下にいた、黄昏と同じ色の髪を持った一人の少女が、訪れた男性の存在に気付いた。
「君は・・・・・・ヘスペリデスか・・・・・・」
「ここは・・・・・・神以外の者が来るべき場所ではない。早く立ち去りなさい」
黄昏のニンフ、ヘスペリデスの一人――ヘスペリアが厳しい顔つきで叫ぶ。だが男は、静かな面持ちで彼女を見ていた。
「な・・・・・・なんですか・・・・・・。早くここから・・・・・・」
だが男は、少女と大樹に近づいて行った。少女は後ずさりして行き、やがて大樹の幹に背を付けた。逃げられない少女に男は近づき、大樹の幹に腕を付けると、少女の顔を覗き込んだ。
「・・・・・・っ・・・・・・！」
自身の身体を貫くような視線に、彼女を恐怖が支配していた。彼女らヘスペリデスは争いことが苦手で、その戦闘能力は皆無に等しかった。身体が硬直してしばらく経った後、男が口を開いた。

「君は・・・・・・過去に何か、大切なものを失ったね・・・・・・」
優しい感じのする静かな声に、少女は驚きを隠せなかった。
「それも・・・・・・今からずっと・・・・・・ずっと、遠い昔。人間の寿命を遥かに超えた年月。それでも・・・・・・今も忘れられない」
「!?・・・・・・どうして・・・・・・それを・・・・・・」
怯えるヘスペリアに、男は静かに「君の目だよ」と答える。ヘスペリアは「えっ?」と困惑する。
「君の目は、何か大切なものを失った者の目をしている。遠い、遠い昔のことでも、忘れられない」
「・・っ・・・・・・っ・・・・・・」
ヘスペリアはいつしか、胸にあふれんばかりの思いを秘めて、涙を流していた。
「だが、それが何かは、さすがに分からない。よかったら、話してごらん」
人間などに話したくない。話しても、分かってもらえるはずがない。数分前の彼女ならそう思った。だが、今、目の前にいる男の優しい言葉に少女の心は揺れ動き、あふれる言葉をせき止める術はなかった。
「あの子が・・・・・・私たちと一緒に・・・・・・ずっとここを守ってくれたあの子が・・・・・・あいつに殺されてしまった・・・・・・。あいつが奪って行ったリンゴは、後でアテナさまが返してくれた。でも・・・・・・あの子は・・・・・・ラドンはもう・・・・・・」
涙があふれ、喋ることが出来なくなったヘスペリアを、男はそっと撫でた。
「その者・・・・・・ヘラクレスに復讐はしたいかい?」
「ふく・・・・・・しゅう・・・・・・?」
ヘスペリアの心は揺れ動いたが、すぐに思い止まった。

「そんなことをしても・・・・・・あの子は生き返らない・・・・・・」

それを聞くと男は、「そうだ」と呟いた。

「だが、やり方しだいでは不可能ではない」

ヘスペリアは恐る恐る、「どういうこと・・・・・・？」と聞くと、男はフッと笑い、冷徹に言った。

「他の生き物から、魂を持ってくるのさ」

再び、ヘスペリアの体を恐怖が支配した。泣き止んだヘスペリアは、恐怖に満ちた顔で男を睨んだ。

「そんな・・・・・・こと・・・・・・」

「もちろん簡単ではない。だが不可能ではない。一人の生者から一人の死者に魂を移せば、どちらも一人。数が変わることはない」

「でも・・・・・・！」と否定するヘスペリア。

「死者の魂は必ず冥界に落ちる。どうせなら死ぬべき者の魂を送り、生きてもらいたい者の魂を取り戻せばいい」

「・・・・・・っ・・・・・・なんて・・・・・・恐ろしい・・・・・・」

ヘスペリアは、そう言わずにはいられなかった。こんなにも恐ろしいことを、平然と口に出来る男が、酷く恐ろしい存在に見えた。

「第一・・・・・・そんなことをすれば、別の誰かが私たちと同じ思いを・・・・・・」

「ヘラクレスの血族・・・・・・」

「っ！？」とヘスペリアが息を呑む。

「生け贄だよ・・・・・・。君たちの大切な存在を奪ったものを使い、その存在を蘇らせる。生憎ヘラクレス自身は神になってしまったが、その血をひく人間は・・・・・・存在する・・・・・・」

「・・・・・・っ・・・・・・くっ・・・・・・」

再び揺れ動くヘスペリアの心。頭の中では警報が鳴り響いていた。

だめだ。その話に乗ってはだめだ。だが、心優しい少女の心が、これに抵抗した。

「・・・・・本当に・・・・・・・ラドンを蘇らせてくれるの・・・・・？」

「それは・・・・・あなたの決意次第・・・・・・」

しばらくの沈黙。そして、顔を背けて「しばらく・・・・・・考えさせて」と、返事をした。

「いいだろう。一日・・・・・・いや、一ヶ月の時間をやろう。その間に決めてほしい」

大樹から離れながら、男はそう言った。

「・・・・・そんなに与えていいの？私が、ゼウスさまたちに知らせるかもしれないよ」

「そうならない・・・・・確信があるので・・・・・」

睨むヘスペリアに、男は小さく笑いかける。ギリッ。ヘスペリアは心の奥底で歯軋りをした。今ここで断りきれないことが、相手に交渉成立の確信を与えてしまった。

「私の名前は、カイネ。カイネ・ヴェルタレイジ。意味は『契約者』」

「かいね？・・・・・っ！！『不変質なもの』・・・・・」

「俺が持ちかけた契約は、誰一人として断れた者はいない。特に、君のような心優しき者では・・・・・いい返事を待ってるよ」

カイネと名乗った男は、そう言い残して姿を消した。

―※＊※―

水晶の塊を見て、「ふう～」と息をついたセルスに、クウァルが「やったか？」と聞く。

「ええ。なんだか、呆気なかったね～」

「おい、てめぇ～」

水晶の塊に近づくセルスに、喧嘩腰で話しかける者がいた。彼女は

首を傾げてそのほうを向く。
「てめぇ～。人間のくせに、俺の獲物を横取りしやがって・・・・・・」
「待て、アレス。ここは彼女たちが住む街なのだから、守ろうとするのは当然だ」
「他の人間は、おいそれと逃げてるのにか？」
止めるアテナに言い返すアレス。これには、セルスもクウァルも黙るしかなかった。
「『我先に』だろ。『追いそれ』は逃げ帰る時に使う言葉だ。まったく、言葉使いもろくに知らんのか」
「うっせぇなぁ。戦いには関係ないだろ？」
「それは・・・・・そうだが・・・・・」と言葉を切るアテナ。
「ところで、コイツどうするつもりだ？」
ふと、アレスが結晶の中に閉じ込められたアポリュオンのほうを向いて、クウァルたちに聞いた。
「しかるべき措置を取るために、身柄を拘束したまでだ。護送した後、しかるべき場所で法廷を下ろす」
クウァルの答えに、「おいおい。そんなに甘くていいのかよ！？」とアレスが呆れる。
「コイツは、そんなんで片づけられるような奴じゃねぇ！！」
「その通り・・・・・・」
冷たいアポリュオンの声に、一同が結晶のほうを向くと、だんだんと表面にヒビが入りだした。
「えっ？クリュスタロスが・・・・・・」
「砕けるだと！？」驚くセルスの後にクウァルが叫ぶと、バキッ、と砕け散った結晶の中から黒い影が現れる。背中に黒い翼の生え、両腕が鋭いトゲの生えたウロコで覆われたアポリュオンが立ち上がった。
「これほどの技を放てるとは・・・・・・魔導変化しなくては破れなかったな」

「（あれは・・・・・・あの時の、デーモという者と同じ・・・・・・）」
冷静なアテナに対し、クウァルは動揺している。
「バカな！セルスの・・・・・・最強の捕縛技を、破っただと！」
「『最強』・・・・・・ね。この世界には、まだまだ他に相手の動きを封じる技が存在する。果たして今の技は、それら全ての上を行くと言えるのか・・・・・・」
「何が言いたい」と、冷静にアテナが聞く。
「さあ・・・・・・ただ、世界はまだまだ広く、人間はその全てを知らない、というだけですよ」
その言葉にクウァルが眉を動かしたが、すぐに警戒と戦闘態勢を取った。より攻撃的な姿に変わったと言うことは、戦いはより激しくなると思った。
「安心しろ。今回はもう、闘うつもりはない」
一同は耳を疑い、「逃げるのか！？」とアレスが叫ぶ。
「そう受け取っていただいても結構です。あなた方を倒しても、それほどマイナスエネルギーは得られないでしょうし、得たとしてもこちらが受けた損害のほうが大きい。何せ、そこの人間に兵の８割を倒されてしまいましたから」
クウァルのほうをあごでしゃくった後、アポリュオンの後ろのほうから黒い煙のようなものが向かって来た。
「何、あれ！？」
驚くセルスに、「マイナスエネルギー・・・・・・」とアテナが呟く。黒い煙はアポリュオンの右腕に巻きつくと、吸い込まれるように消えて行った。
「フム。これの回収だけでも力を使うのでね。それにこの場には神が二人もいる。戦いに勝っても、これを回収できるほどの力を残すのは不可能だろう」
「なんだ？邪魔者は今の内に片付ける、とは考えないのか？」
「挑発し返すのか？まあ、いい。こちらはあなた方を追い込むほう

に兵を送ったので、残っているのは私が従えている一個大隊ほど。それもほとんど壊滅状態。こんな状態で闘うなど、あなたほど好戦的でなくては考えもしません」

「なんだと・・・・・・・」と飛びかかろうとするアレスを、アテナが制する。

「アレス！挑発に乗るなとあれほど言ってるだろ！！」

アレスが「ちっ・・・・・・」と舌打ちしたすぐ後に、アポリュオンの背中の翼が広がった。

「すぐに行ってあげないと、全滅かもしれないよ？何せ、こっちと違って精鋭を送ったからね」

飛び立つアポリュオンを、「待て！」とアレスが追いかけようとするが、「お前が待て！」とアテナが止めた。

「なんで止めるんだ！！」

「あいつが言ったことが本当なら、お父さまたちに危機が迫っているということだ！」

「なっ・・・・・・クッソ～、また来た道逆戻りかよ～・・・・・・・・ていうか、あっちに親父は来てねぇぜ」

「何っ！？では、お父さまはどこに・・・・・・」

「知るか！！」とアレスが叫ぶと、セルスが話に入ろうとする。

「あの～、お取り込み中のところ申し訳ないんですけど・・・・・・・」

同時に「何！？」と、自分のほうを向いた二人（特に鬼気迫るアレス）に、ビクッと身体を震わせたセルスだが、

「あの人は？」

通りのほうを指差した。その方向からは、「アレス～」とスタイルのいい金髪の女性が走って来ていた。

「・・・・・っ・・・・・・アフロディーテ・・・・・・」

苦虫を噛み潰したような顔をしたアテナに、セルスは首をかしげた。

「どうしたんだろう？あんな顔して」

「アテナは、アレスとその愛人のアフロディーテととても仲が悪い

んだ。アレスは同じ戦神である自分を敵視しているし、アフロディーテにいたっては自分と正反対な性格をしてる」
「正反対って？」
「大雑把に説明すれば、アテナは堅実な処女神、アフロディーテはワガママな恋愛神、だ」
「私がワガママ？ちょっと、失礼しちゃうわね」
その説明が聞こえたからか、アフロディーテが不機嫌な顔でクウァルのほうを見る。
「私のどこが、自分勝手って言うのよ」
「本当のことではないか」と言うアテナに、「なんですって！？」とアフロディーテが向く。
「まあまあ。今はそんなことをしている場合ではないのでは？」
セルスになだめられたアテナは「そうだな」と呟いた。
「奴は、オリュンポスから避難した神々のほうに、精鋭部隊を送ったと言ったが、それは本当か？」
「そんなの知らないわよ。私がアレスを追い駆けてる時は、誰も襲って来なかったけど？」
アフロディーテの言葉に、「ハッタリか？」とアレスが呟くと、アテナが考える。
「いや・・・・・戦力は一つでも減ったほうがいいと、向こうも考えたのだろう。だからあえて見送った」
「ちっくしょ～。ぜんぜんわかんねぇや！」
苛立ったアレスが髪をかきむしると、アフロディーテは沈んだ表情をした。
「ごめんなさい。私がもっとよく見ていれば」
「い・・・・・いや、別に、お前が悪いとかそういう訳じゃ・・・・・」
フォローするアレスに、「そうだな」とアテナ言う。
「過ぎたことをあれこれ言ってもしょうがないし、時間がもったいない。急ごう」

「急ぐって・・・・・どこに・・・・・・・？」と、アフロディーテが恐る恐る聞く。
「当然、テルカ島にだ」
「ええ～！？あの距離を戻るの～！？私ヤダ～・・・・・・・」
悲鳴をあげながら、アフロディーテは道端に座り込む。
「ワガママを言うな！！まったく、私は先に行くぞ！」
そう言うと、アテナはそこから飛び立った。途中、何度か屋根の上に着地したが、その度にそこから跳んだ。
「ちっ。あいつの言うことを聞くのは癪だが、アポロンたちにも危機が迫ってんだ。アフロディーテ、無理はしなくていい。ゆっくりでもいいから、お前も来い」
だが、アフロディーテが「ヤダ」と言ったので、「ハア～！？」とアレスは呆気にとられた。その隙を突いて、彼の背中にアフロディーテが負ぶさった。
「アレスがおんぶして行って」
「んな・・・・・ふざけ・・・・・・ちっ、しょうがねぇな～」
ぶつくさ文句を言いながらも、アフロディーテを背負ったアレスは屋根を飛び越えアテナの後を追った。
「私たちも行かなきゃ・・・・・・」
三人の後を追おうとするセルスを、クウァルが「待て、バカセルス」と呼び止める。
「何よ、また～？んっ？今、バカって言った？」
「そんなことはどうでもいい。今回ばかりは、俺たちが首を突っ込んでもいい問題ではない。足手纏いか奴らの人質になるのが関の山だ。お前でも・・・・・・・わかるな」
「ぐっ・・・・・・」と唸るセルス。確かに、奴らの精鋭部隊ともなれば、この町を襲った奴らの何倍も強いに違いない。それは彼女にも理解できた。
「（悔しい・・・・・・私たちを守ってくれる人たちがいるのに・・・・・その人たちの力になってあげられないのが・・・・・悔

しい・・・・・・）」
日が沈み、闇が訪れる街の中、心の奥底でセルスは悔しさを噛み締めていた。

―※＊※―

ほぼ同時刻、テルカ島。兵士の鉤爪がアポロンに迫ったその時、一陣の風が吹き抜けた。風の飛ばされた兵士は地面に着地したが、同時に発生した真空波に切り裂かれた。
「よう。間に合ったか？」
兵士に囲まれたアポロン、アルテミス、エリスが向いた先にはヒマティオンを身にまとった一人の男性と、チュニックを着て上にキトンをまとった四人の青年が立っていた。
「アイオロスと・・・・・・その他４！」
エリスの言葉に、ズドドガッ、と四人がこけた。と思ったら、荒々しそうな顔の男が崖下に落ちた。
「その他４はないでしょう！その他４は！！」
ノトスが溜め息交じりに話すと、残った三人の内、一人が叫んだ。
「そうですよ。ねえ、ボレアス・・・・・・エウロス？」
ゼピュロスが穏やかな表情で周りを見渡すと、一人足りないことに気付いた。
「あの・・・・・・エウロスは・・・・・・？」
「・・・・・・崖下に落ちた」
ボレアスの答えに、「あっちゃ～。後が怖いぞ・・・・・・」とノトスが頭を押さえた。

第３５話　暴風吹き荒れ・・・・・・・

〜―回想―〜

黄昏の島。ヘスペリアが姉の一人、アイグレに聞く。

「ねえ・・・・・・お姉ちゃん・・・・・・・」

「・・・・・・どうしたの？そんな顔しちゃって・・・・・・」

「そんな顔って？」

「どこか、思いつめたような顔。さっき、樹の側が騒がしかったけど、何かあったの？」

「・・・・・・う・・・・・・ううん。なんでもない・・・・・・」

〜―回想終わり―〜

姉との会話を思い出しながら、ヘスペリアはオリュンポス山へと急いだ。

「（最初にあいつが迫って来た時にした、あの嫌な感じ。あいつは、私たちでは到底勝てない。ゼウスさまたちに頼むしかない）」

一心に山肌を駆け上がり、山の頂上へ辿り着いたヘスペリアは、いつもと違うその場の雰囲気に気付いた。

「（おかしい・・・・・・いつもと、何かが違う）」

乱れた息を整えながら、頂上の中央にある大きな遺跡に近づいた。

人間の目には崩れかけた遺跡にしか見えないが、これはゼウスたち

がいる神界への入り口。遺跡の門を潜ることで、人間界と神界をつなぐ通路を通ることができる。と言っても、いつもはそこに雲の門が閉まっているため、通ろうとしても向こう側に通り抜けてしまう。時々、山頂が晴れ渡っていることもあるが、遺跡の通路は閉じられている。はずなのだが、中央に存在する、次元を繋ぐ通路は開通しており、ヘスペリアは神々の神殿の中に入った。

「（おかしい・・・・・いつもは・・・・・）」

警戒心を強めながら、ヘスペリアは神殿の奥へ進んで行く。すると、ボロボロのチュニックをまとい、傷だらけで倒れている男性と、彼に寄り添っている女性が目に入った。直感的に何かを感じたヘスペリアは足を速め、二人に近づいて行き、二つの影の正体を知った彼女は絶句した。

「・・・・・ゼウスさま・・・・・ペルセポネさま・・・・・」

急いで駆け寄ったヘスペリアは、「ゼウスさま。いったい、何が・・・・」と呟いた。

「わからない。久しぶりに戻ってみたら、オリュンポスは静か過ぎるし、神殿の壁や柱は所々が壊れているし、いったい、何があったのか・・・・・」

それを聞いたヘスペリアの脳裏に、あの男の顔が思い浮かんだ。

「ま・・・・・さか・・・・・」

「ヘスペリア・・・・・？」

騒然とするヘスペリアを見て、首を傾げるペルセポネに彼女は何も言えなかった。ただ、彼女の中で、言いようもない恐怖と怒りが渦巻いていた。これは見せしめなのか。もし契約を断れば、こうなるという。強く握る拳が、彼女の中で渦巻くものを物語っていた。

―※＊※―

テルカ島に集結した援軍。その内の一人が、エリスのしょうもない一言で崖下に落ちてしまった。その後、起こりうる事態を察知した神々は、そそくさと防御体制に入った。

「バカめ。これだけの数を相手に防御を固めるか。いくら貴様らが丈夫で、なおかつ不死身でも、何度も攻められればただでは済むまい。全軍！突撃！！」

指揮官らしき兵士の号令により、周りを取り囲んでいた兵士が一斉に神々に襲い掛かる。だがその瞬間、崖のふもとから突風が吹き荒れ、その後すぐに竜巻が巻き起こり、兵士を吹き飛ばした。

「な・・・・・なんだ！？」

突然の事態に浮き足立つ兵士。それを見て平然としている神々。アイオロスは頭を抱えた。

「あ～あ。やっぱり・・・・・か」

「エウロスは怒ると怖いから・・・・・でも、突風と竜巻をいっぺんに起こすことはしなかったな～」

溜め息交じりにノトスが言うと、ボレアスがアポロンたちの近くに飛び降りる。

「それはさておき、こちらに火の手・・・・・いや、竜巻の矛先が向かないうちに、離れるとしよう」

「そうだな。追撃をかけてくる兵士もいるだろうから、それに注意しながら後退しよう」

エリスとアイオロスを殿にし、アポロンたちは他の神々が避難している場所に後退し始めた。

「ま・・・・・待て・・・・・」

だが、追いかけようとした兵士たちは、ことごとくエウロスの竜巻に飲み込まれていった。

「てめぇら～！神々に喧嘩売ってんじゃ、ねえ～！！」

ごもっともな怒りを込め、エウロスが暴風を巻き起こす。いくつもの竜巻が島に発生し、敵の兵士はもちろん、森の木々までも巻き込

んで行った。
「ば・・・・・バカな・・・・・・我らはアポリュオンさまに選ばれた、精鋭のはず・・・・・・」
「そんなこと知るか～！！」
「ぎゃえあああぁぁぁぁ～～～っ・・・・・・！！」
小さな島のほぼ中央で発生した大竜巻が収まった後には、エウロス以外にそこに立っている者はいなかった。

―※＊※―

アテナ、アレス、アフロディーテの三人がテルカ島に到着した頃には、完全に日も暮れており、島は再び静寂に支配されていた。
「着いたぞ。手遅れになっていなければいいが・・・・・」
アテナが周りを見渡すと、アフロディーテを背負ったアレスが追いついた。
「さっき、スゲ～竜巻が起こった。そいつがまだ、いるかも知れねぇ・・・・・・」
「アレス・・・・・・私・・・・・・怖い・・・・・・」
アレスの背中で震えるアフロディーテに、「大丈夫だよ」とアレスが語りかける。
「そんな奴、俺がボコボコに・・・・・・」
「無駄話をしている暇はない。急ぐぞ・・・・・・」
アテナがさえぎったちょうどその時、三人のすぐ側の草むらが揺れる音がした。アテナは警戒を強め、アレスはアフロディーテの前に立つ。しばらくすると、草むらの中から何かが飛び出した。いち早く反応したのはアレス、いや、草むらから飛び出したものがアレスのほうに向かって来た。アレスは即座に剣を盾にそれを受け止めると、それの正体をしっかりと見た。

「なっ・・・・・・お前は・・・・・・・・」
「え・・・・・・アレスさま・・・・・・・・」
草むらから飛び出したのはゼピュロスで、少し下がった場所に着地すると、周りを見渡した。
「アテナさま・・・・・・アフロディーテさまも・・・・・・」
「アフロディーテだって!?」
大声がした後、草むらの中からアポロンやアルテミス、ノトス、ボレアスが出てきた。
「あ、アポロン・・・・・・なんだよ、急に大声なんか出したりして・・・・・・」
アレスにアポロンが駆け寄る。
「いったい、どこに行ってたんだ!みんな心配したんだぞ!」
「うっ・・・・・・ごめんなさい・・・・・・」とアフロディーテが謝る。
「その様子だと・・・・・・アレスに負ぶってもらったな。まったく、足手纏いになるとは思わなかったのか?」
アポロンとアルテミスにきつく言われ、シュンとする。
「おい。足手纏いとか言ったけどな、俺たちが来るまで敵は誰一人でなかったぞ!なあ!」
「まあ・・・・・・そうだな・・・・・・」と言ったアテナのほうを、弾かれたようにアポロンとアルテミスが向く。
「それに、アフロディーテがこちらに来たのも、アレスを心配してのことだったようだから、それくらいで許してやれ」
それを聞いたアポロンは、「ええ〜っ!!」と驚きの声を上げた。
「まあ・・・・・・アテナさまがそう言うのなら・・・・・・」
怒りが消えたアルテミスは、いまだに驚いている兄のほうを向いた。
「どうしたの、お兄さま?そんなに驚かれて・・・・・・」
「アテナが・・・・・・アテナが、アレスを庇った・・・・・・」
「ええ・・・・・・そうね・・・・・・」
だが、数秒後に彼女もことの次第が理解できたらしく、驚きの声を

上げた。
「そんな・・・・・アテナさまが・・・・・・血の気が多くて、人間なんかの挑発にも簡単に乗る、単細胞な戦馬鹿のアレスと、ワガママ、自分勝手、自己中心の三拍子そろった、恋愛のことしか能のなさそうなアフロディーテを・・・・・庇った！仲が悪いはずの二人を！！！」
「・・・・・てめえも、いろいろ言いたい放題言ってくれるじゃねぇの」
「ほんと。アレスを庇ったのも驚いたけど・・・・・そこまで言われると、正直ショック・・・・・」
アフロディーテが、溜め息をついて砂浜に座り込む。アテナ自身も、今さっきの自分の言動に驚きと戸惑いを隠せなかった。
「・・・・・まあ、事実を言っただけだが・・・・・その・・・・・」
アテナは結局、言葉が見つからず、溜め息をつく。
「（他の者に優しさをかける・・・・・か。これも、本来は人間が持つべきもの。神である私には・・・・・不要なはず・・・・・）」
だが、どこかそう言い切れない気持ちもあった。
「それより父上は？アテナは一緒じゃなかったのか？」
自身への戸惑いのため聞こえなかったアテナに、アポロンが再び呼びかける。
「ん？あ、ああ。私は不覚にも、敵の一撃を貰ってしまって・・・・・よくわからぬ」
「けっ、たいしたことのねえ」
悪態をつくアレスを、アルテミスが睨む。それに気付いたアレスは彼女を睨み返し、やがて険悪なムードが生まれた。
「もしも～し、そんなことをしている場合か？」
全員が声のしたほうを向くと、殿を勤めたアイオロスとエリスがやって来た。

「お兄さま！ご無事だったんですね！！」
「ああ。俺はそう簡単にはくたばらねぇよ」
「そうですね。例え人間の戦士に敗れても、お兄さまはしつこく生きられますから」
満面の笑みから出されるエリスの毒舌に、場の空気が冷え込んだ。
「・・・・・お・・・・・・オホン。とにかく、私はエウロスの様子を見てくる。いくらなんでも、一人では心配だ」
アイオロスの言葉を聞き、アテナとアレスの顔がこわばった。
「まさか・・・・・・エウロスは奴らの兵と一人で・・・・・・？」
「そうだが・・・・・・？」とアイオロスが答える。
「まずい・・・・・俺とアテナは、ついさっきまでそいつらの仲間と戦ってきたんだが、そいつが、こっちのほうには精鋭部隊を送った、とか言ってた」
それを聞いたアイオロスが、「なんだって！？」と叫ぶ。
「今はもう静かだ。もしかして・・・・・・」
アポロンが辺りの様子を探ると、アイオロスが「くそっ」と呟く。
「私も残るべきだったか。私は様子を見てくる」
「待ってください。私たちも・・・・・・」
アイオロスと、ボレアスを初めとする三人の風神は、再び草むらの中に入って行った。
「俺たちも行くぞ。この中で一番ダメージを受けてないのは、俺とお前だからな」
「わかった。この際、細かいイザコザは後回しだ！！」
そう話したアテナとアレスも、アイオロスたちを追って森の中に入って言った。
「アルテミスたちは、他の神々と合流しろ。そこも襲われているとも限らん！」
「わ・・・・・わかりました！」
だが、散会した神々を待っていたのは、意外なことだった。

―※＊※―

「ちっ、さすがに・・・・・てこずっちまった・・・・・」
足を投げ出し、その場に座り込んだエウロスが呟く。そこに、待っていたと言わんばかりに一人生き残った兵が飛び出してきた。エウロスは即座に竜巻を矢のように放ったが、大勢の敵を薙ぎ払うのに力を使い果たしており、そいつを仕留めるほどの威力は出せなかった。吹き飛ばされただけの兵士は、鋭い爪を振りかざし再びエウロスに襲いかかった。もう力は残っていない。万事休すかと思ったその時、
「でえぇぇぇりゃあああぁぁぁっ！！」
叫び声と共に横一文字に振られた剣が、エウロスに飛びかかった敵兵士の身体を切り裂き、その勢いで吹き飛ばされた敵の体は、炎に包まれ爆発を起こした。それを見届けた援軍は座り込んでいるエウロスのほうを向いた。
「よお、エウロス」
「な・・・・・アレス・・・・・」とエウロスが驚く。
「ムッ・・・・・アレス『さま』だろ」
「この際どうでもよかろう！」
その声の後に、槍と盾を持った女性と一人の男性が現れた。
「アテナさま、アイオロスさま」
「ちょっと待てぇ！なんでアテナには『さま』を付けるんだよ！」
「アテナさまのおっしゃったとおり、そんなことはこの際どうでもいいだろ」
エウロスの答えに、「なんだと・・・・・」とアレスが拳を握る。
「いい加減にしないか。二人とも！！」
アテナに怒鳴られて二人は静かになると、アイオロスが出てくる。
「まあまあ。エウロス、大丈夫だったか？」

「ええ、なんとか。先ほどは、アレス『さま』が助けてくださったので」
『さま』の所を、嫌味を込めて強調したので、「き～さ～ま～・・・・・・」と、アレスの怒りが溜まってきた。
「『さま』は付けましたよ?アレス『さま』」
「ぐぎりりり・・・・・・・・」
「まあまあ、エウロス。それくらいにしないか。アレス殿はお前を助けてくれたのだろ?」
アイオロスに事実を言われ、「ぐっ」と黙り込むエウロス。
「俺は、ただ敵を倒しただけだ」
「だが、助けたことには変わりあるまい。珍しい・・・・・・」
アテナが「やれやれ」と溜め息をつくと、アイオロスは「では、皆さまの所に戻りましょうか」と切り出した。
「そうだな。エウロス、立てるか?」
「力を使い果たしただけだから、大丈夫だ」
そう言ってエウロスは立ち上がったが、足はふらついていた。
「弱ったな。この場にはネクタルはないし・・・・・・合流するまで辛抱する他あるまい」
困り顔のアイオロスに、「大丈夫だ。行こう」とエウロスが言う。
アテナたちは、他の神々が集まっている場所に移動を始めた。

第３６話　嵐が過ぎて

闇に包まれ、ほとんど光が入っていない部屋に、アポリュオンが入って来た。椅子に座っている男の前に来ると、膝を折って頭を下げた。

「申し訳ございません。ソウセツさま」

頭を下げるアポリュオンに、ソウセツと呼ばれた男が話しかける。

「君がここまでの失態を犯すなんて、珍しいね」

しかし、その話し方から、あまり怒りは持っていないようだった。

「まあ、これでわかったと思うよ。神々を相手にするのが、人間と比べてどれだけ難しいか」

「しかし、私は人間相手に不覚を取り、多くの兵士を失いました」

「だが、その兵士を形作っているマイナスエネルギーは、ちゃんと回収してきた」

ソウセツの横に立っている、全身に黒いマントを羽織っているデズモルートが口を挟む。

「それを踏まえれば、テュポニウスを失った失態は帳消しになる。で、いかがですか？」

しばらく間をおいた後、ソウセツが口を開く。

「うん、いいよ。それだけのことはできると見込んだから、君に『大佐』の位を与えたのだからね」

それを聞いたアポリュオンは「ありがとうございます」と頭を下げ、部屋を後にした。

―※＊※―

「アテナ。無事だったか」と、デュオニソスが話かけてきた。
「デュオニソス!?お前もいたのか?」
オリュンポスの神々と合流したアテナたちは、仲間との再会を果たしていた。するとそこに
「アフロディーテさま～!」
と大勢の女性の声がした。アフロディーテがそちらのほうを向くと、彼女の侍女であるカリテスたちがこちらに向かって来ていた。
「アフロディーテさま、良くぞご無事で・・・・・・」
アフロディーテに、涙を流すアグライアが抱きついた。
「ちょっとアレスさま。アフロディーテさまを危険な目にあわせるようなことだけは、絶対にしないでください!!」
文句を言うエウプロシュネに、「ちょっと待った、悪いのは俺なのかよ!?」とアレスが悲鳴を上げる。
「ヒメロスとピロテスなんか、泣きじゃくっていました」
心配顔のタレイアに、「そうだったの」と呟いた。
「じゃ、早く行って、顔を見せてあげないとね」
カリテスの三人とアフロディーテは、先ほど話に出てきた二人の神の元に急いで向かった。

―※＊※―

それからしばらくした後、神酒(ネクタル)を飲んで力を回復している神々の所に、翼を持った少女が訪れた。その少女は、ゼウスの使いとしてやってきたハーピーの一人、アエロー。彼女たちはオリュンポス山に棲んでいるから、神々と一緒には避難していなかった。

「では、あの人は・・・・・・ゼウスは無事なのですね？」
心配で仕方ないと言う顔で、ヘラが問いかける。
「無傷・・・・・と言う訳ではありませんが、今はペルセポネさまが看病をなさって・・・・・・」
その時、話を聞いていた神々の中から、とてつもない殺気が放たれた。それはヘラと、もう一人。
「すぐにオリュンポスに戻るわよ！！」
「私も行きます！あの浮気癖のあるゼウスなら、ペルセポネに手を出しかねない！！」
いきり立つヘラとデメテルに、「しかし、危険では・・・・・・」とアテナが言う。しかし、
「事態は刻一刻を争うのです！！」
女神二人の気迫に押され、ここまで非難していたオリュンポスの神々は、来た道を戻り始めた。着いて間もなく、ヘラとデメテルはゼウスが寝ている部屋に入った。思ったとおり、ゼウスはペルセポネに迫っており、ペルセポネはそれに迷惑そうな顔をしていた。
「い・・・・・いくらゼウスさまでも、困ります・・・・・・」
「よいではないか、ペルセポネ」
その瞬間、ヘラの怒りがゼウスを直撃し、また滅多に怒りそうもないデメテルの怒りも命中した。ペルセポネを含め、それを見ていた神々は、ただ、呆然として思い知らされた。『女性の怒りは、恐ろしい』と。

―※＊※―

「・・・・・・で？」
「で？とは？」
比較的被害が軽く、明日にでも復興が行われる予定のパルティオン

で、不機嫌そうなディステリアがクトゥリアに声をかけた。
「なんであの時、俺を止めた？どうして民間人であるクウァルたちに戦わせたんだ？」
「素養があるかどうか見極めるため・・・・・と言ったら納得できるか？」
「できない」
「だろうな」
まるでわかっていたかのように、クトゥリアは肩をすくめた。
「今回のことでわかったことがある。やはり我々は人手が足りない。奴らの行動に対応するだけでも、最低でも四人は必要だな」
「クウァルをその四人に加えるつもりか？」
「切り出してはみる。決めるのは彼だ」
「だが、彼は一般人だぞ！」
ディステリアの叫び声に、帰りかけていたクウァルとセルスが振り返る。
「ディステリア。誰でも最初から兵士だったり魔術師だったりするわけじゃない。技術や知識は他者から引き継ぐもの。二人にはそれが必要だ」
「二人？まさか・・・・・」
目を見張ったディステリアはセルスのほうを振り返る。事情が飲み込めない彼女は首を傾げている。
「事情を知ってる俺たちだけで解決できないのか？」
「あれだけ大勢の兵士を見てないのか？あの雑兵の向こうには、アポリュオンと近いレベルの奴がごろごろいるかも知れない。それをたった数人で相手しろと言うのか？」
質問の意味と答え。それは『自殺行為』を指している。人手が足りない、だから素養のある者に持ちかけてみる。その『自殺行為』をせめて生き抜けるレベルにするため。
「だ、だが・・・・・オリュンポスの神々に頼めば人手くらい」
「そういえば知らなかったな」

自身の声を遮ったクトゥリアの冷たい言葉に、ディステリアは言葉を切る。だがクトゥリアは答えず、背を向ける。
「・・・・・今日はもう疲れただろう。もう休もう」

―※＊※―

海の上に浮かぶ妖精の王国ティル・ナ・ノーグに、一見、海を渡るのに適していそうにない一隻の小船が、普通の船と変わらないスピードで辿り着いた。船に乗っているのは旅人用マントの下に軽い鎧を身に付けた背の高い男性と、幼い少女。
少女のほうはきょとんと周りを見渡していたが、男性のほうはいきり立っていた。陸地に到着するとその船は陸に乗りあがり、そのまま海と変わらないスピードで進んでいく。そして一軒の館の前に止まるや否や男性はすぐさま飛び降り、館のドアを開け放った。
そこには燃える火のような色の髪をしているものの、ゆったりとした青い服を着た女神、ブリジットが立っていた。
「えっ、マナナン・マク・リール！？」
「ケヒトはいるか！？」と、マナナン・マク・リールが物凄い剣幕で聞く。
「えっ！？いったい、どうしたの？」
すると、後ろから「うえ～ん、パパ～、パパ～！！」と、女の子の泣き声がした。思いもかけない状況にブリジットは唖然とした。
「あ・・・・・あの・・・・・・」
「あいつの対応は、とりあえずおまえに任せる。とにかく今はケヒトを・・・・・あのバカを探せ！！」
「ば・・・・・バカ・・・・・？」
今までになく怒っているマナナン・マク・リールに、ブリジットは戸惑った。

「くぉ～ら～！！ケヒト～！！」
怒鳴り込んで入った医務室には、ケヒトとその息子のキュアンとミアハ、娘のアミッドとエーディンがいた。
「マナナンさま、お帰りになっていたのですか？」
「マナナンさま。ここは医務室ですから、もうちょっとお静かに・・・・・」
ミアハとエーディンに注意され、「ああ、すまない」とマナナン・マク・リールは謝った。が、
「って、おい、ケヒト！！」
と一端、静かになったものの再び騒がしくなったマナナン・マク・リールは、道具袋から取り出した空の小瓶を突きつけた。
「こいつに〈常若薬〉が入ってたぞ。いったい、どういうことだ！！」
ケヒトが「なんじゃと！？」と叫ぶと、そこへ「失礼します」と、小さな女の子を抱きかかえたブリジットが入って来た。
「あっ、パパ♪」
嬉しそうに手を上げる少女に、ミアハとエーディンは「パパ～！？」と驚く。
「・・・・・さっき〈常若薬〉がどうとかと言っておったな。では、その子は・・・・・・」
ディアン・ケヒトの問いに、「ああ、そうだよ！」とマナナン・マク・リールが叫ぶ。
「回復薬（ポーション）と思ってこいつに飲ませたのが〈常若薬〉だったんだよ！どうして入れ替わってたんだ！？」
「そ、そうは言われても・・・・・・」
ピリピリした空気が医務室を包み、「ぱ、パパ～・・・・・・」とミリアは怖がっていた。
「あ、あの～・・・・・お怒りはごもっともなんですけど、この子の前では・・・・・・」
「・・・・・頼むから、悪ふざけしないでくれ」

「あんたがそれを言える立場なの？」
さっきのかわいらしい態度から一転、ミリアは不満そうに眉を寄せて言い返す。そのやり取りから、ディアン・ケヒトは状況を察した。
「ブリジット・・・・・悪いが、しばらくその子の相手をしていてくれ」
「わかりました」
マナナン・マク・リールの頼みに、ブリジットはミリアを抱きかかえて医務室を離れた。二人の気配が完全に消えた後、「さて」と再びケヒトに詰め寄った。
「どういうことか説明してもらおうか！なんでポーションが〈常若薬〉になってるんだ！俺たち、神には若さを保つ効果しかないが、人間が飲んだら・・・・・」
「まあまあ、落ち着いて。すぐに解毒剤を調合するから・・・・・」
ディアン・ケヒトからそれを聞いたマナナンは「急げよ！！」と怒鳴って、医務室を後にした。
「・・・・・父さん」と、アミッドが情けない声を出す。
「そのような声を出すな。この機会に中和剤が作れるかも知れん。アミッド、ミアハ、手伝ってくれんか？」
アミッドもミアハも「ええ、まあ」と言って、隣の保管庫で作業に取りかかりだした。

―※＊※―

そこから東に数千キロ。エジリア大陸南部に位置する国、ヒンディア。そこにある巨大な霊峰、メール山の頂上にある宮殿。ここは天帝が中心となり、仙界や神界の平和と秩序を守る者たちが勤める場所である。その宮殿の一角を、縁が白い赤色の服を着た、ほぼサル

と同じ顔と体をした男が歩いていた。それはかつて、『孫悟空』と名乗り、『三蔵法師』らと共に、天竺へ経典を受け取る旅をした『斉天大聖』。今の名を『闘戦勝仏』と言った。

「いったい・・・・・なんでお呼び出しなのだろう・・・・・」

闘戦勝仏が不思議に思いながら通路を歩いていると、目の前の通路を歩いている一団がいた。渾身羅漢、浄壇使者、八部天竜、そして、旃壇功徳仏。全員、かつて大罪を犯し、人間たちの世界に転生して共に旅をした仲間である。

「お師匠さまたちも、天帝さまに呼ばれたのか？」

「『も』と言うことは・・・・・闘戦勝仏も？」と、浄壇使者が聞く。

「俺たち・・・・・また何かやってしまったのか？」

「・・・・・まさか。俺は何も・・・・・」

不安そうな渾身羅漢に闘戦勝仏が言う。

「どうかな？兄貴は結構、喧嘩っ早いから・・・・・」

「なんだと！？」

闘戦勝仏が殴りかかろうとした時、「おやめなさい！！」と旃壇功徳仏が言った。

「旃壇功徳仏さま・・・・・」

かつての三蔵法師の愛馬、八部天竜が不安そうな顔で旃壇功徳仏を見る。

「あの旅で、私たちは様々なことを学びました。お前たちがそれを無駄にするなどと、私は考えていません。あなたたちに、身の覚えはないのでしょう？」

そう言われて、「ええ、まあ・・・・・」と四人は答えた。

「なら、もっと胸を張りなさい。やましいことがないのなら、堂々としていることです」

そう言われて「はい！」と四人は答えた。だがその後に、「もっとも」と旃壇功徳仏が付け加える。

「――あなたたちが覚えていないだけだったら、さすがに庇いき

れないと言うことを、覚悟しておいてください」
「ちょ・・・・・私たちを信じているんじゃ、なかったのですか～」
旃壇功徳仏は「もちろん、信じています」と答えて、四人を連れて天帝の間に行った。

―※＊※―

天帝の座っている玉座の間では、すでに天帝の前にかけられている簾（すだれ）が上げられていた。旃壇功徳仏たち五人は、天帝の前に来ると床の上に膝を着いた。
「旃壇功徳仏、闘戦勝物、渾身羅漢、浄壇使者、八部天龍。天帝さまのお呼び出しにより、参上いたしました」
旃壇功徳仏の挨拶に「ウム」と天帝が答える。
「諸君、忙しい中、急な呼び出しに答えてくれて、すまないな」
「いえ。しかし、私たちこの五人をお呼びになるとは、いったいどのようなご用件でしょうか？」
渾身羅漢の質問に天帝は再び「ウム」と言うと、側にいる那魄（ナタ）太子が持っている紙を両手でそれを広げた。
「闘戦勝仏、渾身羅漢、浄壇使者、八部天竜、そして旃壇功徳仏。以上五名に、人間界の視察を命じる」
那魄太子の言葉に、五人は「えええっ！？」と声を上げた。
「お言葉ですが、天帝さま。私たちはまた、何か大罪を犯したのでしょうか？」
すぐさま訳を聞こうとする闘戦勝仏に、「いや、そうではない」と天帝が答える。
「これを頼めるのは、お前たちを置いて他にはいない、と考えたのだ」

「・・・・・と、おっしゃいますと。今、人間たちの世界で、気が乱れていることと何か関係が？」
「さすがは旃壇功徳仏。その通りだ」
そして、天帝は地上の全世界で起きている事態、その裏で暗躍している者、それに対抗している組織〈ブレイティア〉に関する説明をした。しかし、難しい上にスケールが大き過ぎるので、闘戦勝仏も渾身羅漢も浄壇使者も理解しきれず、唯一、旃壇功徳仏のみがついて来ていた。
「つまり・・・・・我々にその謎の組織を壊滅させてもらいたいと？」
「さすがは旃壇功徳仏だな。ただ、そのような組織が結成された理由も、できれば調べてほしい」
「その謎の組織は、ただの悪鬼魍魎の集まりではないのですか？」
闘戦勝仏の質問に、「よくわからぬ」と那魄太子は難しい顔で答える。
「だが、クトゥリアという男なら、私より詳しく知っている。訪ねてみるといい。それと、これから先もそうだが、地上世界を巡る時は、天竺を目指していた修行時代の名前を名乗るといい」
天帝の提案に、「ははっ！！」と四人は頭を下げた。
「それと、これは私個人の頼みとなるのだが、私の弟分を探してほしい。名はナタクと言う・・・・・まあ、もし会ったらだが・・・・・」
「普通この場で頼むことか。それなら、私は天仙聖母碧霞元君の捜索を頼みたい。人間の世界では『玉葉』と名乗っているはずだ」
「ああっ！天帝さまずるいですよ！！」
「ずるくはない。先に頼んだのはそちであろう」
言い争う二人に、「わかりました」と旃壇功徳仏が割り込む。
「――では、そのお二方の捜索も引き受けましょう」
「「「「ええっ！？」」」」と闘戦勝仏たち四人に加え、那魄太子も声を上げる。

「お・・・・・・お師匠さま・・・・・・・」
「大丈夫ですよ。もののついでによろしいんですよね？」
無垢な笑顔で聞く旃壇功徳仏に罪悪感を覚えつつ、「うむ」と天帝が答えた。
「・・・・・・・頼んだぞ」
しかし、その声は先程と違い、『命令する』というより『お願いする』という感じになっていた。

第３７話　調査隊帰還

ディステリアとクトゥリアとの邂逅、さらにラグシェ国での一戦から二週間。その間、ジークフリートたちはミッドガルド中を回った。グリームヒルドの案内もあり、現在の情勢に疎い三人も、ほとんど迷うことなく散策できた。そして、ある宿の一室での会話。

「さて、あれからもう二週間か」

スキールニルが遠くを見るように言う。

「全く。いったい、アースガルドに帰るのはいつですか？」

「まあまあ、そう目くじらを立てなさんな、ブリュンヒルド。今のミッドガルドからできるだけ、全世界の情勢を知って来いと、オーディンさまの命令もあるのだ」

「いつの間に・・・・・？」とジークフリートが呟いたちょうどその時、ハッと気付いたようにグリームヒルドが聞いた。

「そういえば、ジークたちは携帯電話とか持ってる？」

「けい・・・・・たい・・・・・？なんだ？それは・・・・・・」

ああ、やっぱりとでも言うように、頭に手を当てると、「確か、連絡道具の一種か」とスキールニルが言った。

「そういえば、時々、板のような物を顔につけて独り言を言ってる人を見るが、その人が持ってるのが・・・・・？」

町での光景を思い出すジークフリート。

「携帯電話よ・・・・・やっぱり、そういう反応を見せるのね・・・・・」

呆れたような言葉に、ブリュンヒルドはバカにされたような感じがした。
「連絡ぐらい、私たちヴァルキリーが引き受けるわよ」
「だが、スタミナが切れることは切れるだろ？」と、ジークフリートが言う。
「はい。働きすぎると結構、疲れます」
突然したその声に、全員が窓のほうを見る。開けられた窓には一羽の白い鳥が止まっていたが、部屋の中に入ると光に包まれ、一人の女性の姿になると、「ランドグリース！？」とブリュンヒルドは驚きに目を見張った。
「スキールニルさま、ジークフリートさま、お姉さま。オーディンさまより帰還命令が出ています」
「！・・・・・そうか。そろそろ、来る頃だろうと思ってた」
スキールニルは組んだ腕をとき、椅子から立ち上がった。
「この二週間で、ラグシェ国とジェプト国で起こっている謎の事件。おそらく・・・・・・」
「おまえらが会ったネクロって奴、もしくはデモス・ゼルガンクとかいう組織が、関与していると見て間違いないだろう」
ジークフリートとスキールニルが話す。
「私がまだあの屋敷にいた頃に知ったのですが、エリウという国でも戦争があったらしいです。半年ほど前からアルスターと言う国で起こっていた二つの王族の争いが大きくなり、そこに妖精族が治める二つの国が介入してさらに大きくなった、と聞いています」
「それで・・・・・その戦争は・・・・・・？」
ブリュンヒルドが聞くが、「さあ。そこまでは・・・・・・」と沈んだ声で言うと、ランドグリースが補足した。
「ダーナ神族の方々が介入して鎮圧したそうです。もちろん、できるだけ死者を出さずに」
「そうか・・・・・・」とジークフリートが呟く。
「ともかく、詳しいことはさすがにミッドガルドではわからない。

すぐにでも戻ろう」
スキールニルの進言に、全員が「わかった」と言うと、宿の支払いを済ませて、ビフロストに向かって夜の街を駆けて行った。ところが町の外れまで来ると、思わぬ迎えが来ていた。

―※＊※―

「待ってたわよ」
そこにはなんと、二匹の猫が引く馬車で、馬を操る騎手が座る席には一人の美女が座っていた。
「ふ・・・・・フレイアさま!?」
「どうして、フレイアさまがここに!?」
ブリュンヒルドとジークフリートが、驚いて彼女を指差す。
「そんなに驚くことはないでしょう?あなたたちがこの町にいると連絡を受けて、わざわざ来てやったんだから。さ、早く乗って」
「連絡って・・・・・いったい、どうやって?」とスキールニルが戸惑う。アースガルドへの帰還命令を伝えに来たランドグリースはまだここにいるので、フレイアが知る手立てはないはずだった。
しかし、
「これよ」
と見せられた物を見て、グリームヒルドが「あっ!!」と叫んだ。
「携帯電話!!あなたたちも持っていたんじゃない!!」
「ええっ!?そんなバカな!?」とスキールニルが声を上げる。
「いったい、どうして・・・・・!?」
ブリュンヒルドも唖然となる。訳もわからない三人は、とりあえずフレイアに言われたとおり馬車に乗った。猫が引っ張って馬車が動き出すと、フレイアが説明を始めた。
「これはね、ある旅行者がアースガルドに来た時に、一緒に持って

きた物なの。『俺たちの所で重宝しているから、お裾分け』ってね」
「いったい、誰なんですか？」とジークフリートが訊ねる。
「さあ、そこまでは知らないわ。でも、ヘイムダルが通すくらいだから、悪い人じゃないんじゃない？」
そうだろうな、とは思ったものの、スキールニルは納得ができなかった。
「それよりあなたたち。ちゃんと情報は持って帰ってくれたんでしょうね？」
「ああ。この世界で事件を起こしている奴について、いろいろとわかった。この国以外にも結構、手を出し・・・・・・」
ジークフリートの声をさえぎり、「そっちじゃないわ」と言った。
「ミッドガルドで人間たちが使ってる物、特に乗り物についてよ」
意外な言葉に、みんなは黙り込んだ。

―※＊※―

ミッドガルドに戻ったスキールニル、ジークフリート、ブリュンヒルドは、すぐさまオーディンにことのあらましを報告した。
「そうか。ことの次第はわかった。エリウ国のほうでも、何者かが戦争の糸を裏で引いていたということか」
「それで・・・・・・少し腑に落ちないことが・・・・・・」
ジークフリートの問いに、「なんだ？」とオーディンが椅子の横に肘を付いて聞いた。
「ミッドガルドで人間が使っている物、特に乗り物について調べろ、っていったいどういうことですか？」
フレイアのセリフそのままで聞くと、「ああ、そのことか」と手を叩いた。
「実は、人間の世界に合わせた新しいスキールブラズニルを造らせ

ようと思っていたのだが、いかんせん、どういう風に作ったらいいか全く知らない。そこで、おまえたちがミッドガルドに行くと言うから、ついでに調べさせようと・・・・・・」

「聞いていませんよ！」とブリュンヒルドが声を上げる。

「当然だ。スキールニルにこっそり命じたことだ。悪く思うな」

「ほほう。では、俺たちが命がけで敵の正体を調べている間、スキールニルはたかが乗り物について調べていたと言うのか・・・・・・？」

怒りを抑えたジークフリートに対し、「たかがとはなんだ！」とスキールニルが突っかかった。

「こっちだって、いろいろと大変だったんだぞ！乗り物なんて、時代によって中身も外見も違う。最新の物を見つけるのに、どれだけ苦労したか・・・・・・」

涙を拭う真似をした後、ジークフリートと睨み合うスキールニルだが、誰もなだめようともせず放って置いた。

「しかし、なぜ最新の人間界の乗り物について、調べる必要が？」

「うむ。最近の人間界では、我らが使う船は何かと目立つ。外見だけならまだしも、何かの事情で中に人を乗せることになれば、それが、我々が使う物だとわかってしまう」

「何か問題でも？」とブリュンヒルドが問う。

「今の人間界（ミッドガルド）を周って来たおまえたちなら、すでに知っていると思うが、今の人間界では情報が伝わりやすい。もし我々の船に乗せた人間が、『この前、えらく古い造りの船に乗せてもらった』とか言ってしまえば、それが我々の使う物だと言うことがわかってしまう。敵の一部は人間社会に紛れ込んでいるらしいから、そこから知られる可能性は高い」

「なるほど。だから、今の人間界に合わせた物を造ろうとしてるんですね。でも、造れるんですか？」

「ドヴェルガーたちが総動員で取り掛かっても、さすがに時間がかかるだろう。スキールニル。できるだけ今夜中にも、情報をまとめ

てドヴェルガーたちに渡してもらいたい」
すると、睨み合っていたスキールニルが「大丈夫ですよ」とオーディンのほうを向き、どこからか一冊のノートを取り出した。
「アースガルドに帰るまでに、めぼしい情報はまとめておきました。すぐにでも渡せます」
「おお、さすがだ。では早速、頼むぞ」
スキールニルは「了解しました」と、〈ヴァラスキャルヴ〉を出て行った。
「お主らも、ご苦労であった。時が来るまで、休んでいるといい」
「オーディンさま。グリームヒルドは・・・・・・？」
「グリームヒルド？ここに入ってきたのは、お主ら二人とスキールニルだけだったはずだが・・・・・・？」
そう言われて辺りを見渡したが、どこにもグリームヒルドの姿はなかった。その訳は。

―※＊※―

「キャ～～～！！」
戦いの野〈フォールクヴァンク〉にあるフレイアの館、〈セスルームニル〉。その中から、フレイアの悲鳴が聞こえた。しかしその悲鳴に恐怖の色はなく、どっちかというと何かに喜んでいる感じだった。
「か～わいい～♪」
館の中にはフレイアと、胸元が開いた奇麗で大胆なドレスを着た、戸惑い顔のグリームヒルドがいた。
「あ・・・・・あの・・・・・・」
「あ～、でも・・・・・・黄色っていうのはちょっと駄目か。せっかくの金髪なんだし、それが目立つ色を・・・・・・」

「あ・・・・・あの～・・・・・・・髪の色は一応、クリーム色なんですけど・・・・・・」
自分の髪を指で絡ませながら、グリームヒルドが呟く。
「そう？黄色に近いから黒のドレスを・・・・・・いやいや、これはスタイルに自身のある人じゃないと・・・・・・グリームヒルドさんって、スタイルにはどれくらい自身があるの？」
「ス・・・・・スタイルって・・・・・そんな、もったいないです！私、人間界では悪女って言われているんですよ！」
「『言われてる』からって、本質がそうとは限らないんじゃないの？」
そう言われて、何も言えずに黙り込む。
「うーん、やっぱ服を着てるとわからないか。よし。グリームヒルドさん、一端その服脱いで」
「はい。でも・・・・・次はどの服を・・・・・？」
「まだ決めてないわ。だから一回、裸になって」
しばらく唖然となるグリームヒルド。だがその後、「えええっ！？」と叫ぶ。
「スタイルを見るには、裸になったほうが速いわ。そういうことだから、早く脱いで」
グリームヒルドは「え・・・・・・あ・・・・・・その・・・・・・」と、しどろもどろしていた。
「まあまあ、そう照れずに。今は男がいないから、見られる心配もないわ。だから早く♪」
そう言って服に手をかけると、グリームヒルドが「えっ？ちょ・・・・・」と言っている間にも脱がせようとする。ちょうどその時、
「さっきの悲鳴はなんだ！？フレイア、何かあったのか！？」
と部屋のドアが開いた。突然、ノックも無しに入って来た兄フレイに、その場にいた二人は固まった。そのわずか数秒後。
「出て行け～！！！」
フレイアが部屋にあるありとあらゆる物を投げつけて、兄を追い払

った。ドアが閉められると、頭に手を当てて「なんだ?」と首を傾げる。散らかった部屋の中には、顔を紅くして息を切らせたフレイアと、脱ぎかけた服で胸元を隠しているグリームヒルドがいた。
「グリームヒルドさん・・・・・・?」
「は・・・・・・はい・・・・・・・!?」と、グリームヒルドは反射的に直立する。
「私が甘かったわ。今ここにはお兄さまがいるから、こんなことが起きる可能性はあった。全く、私としたことが・・・・・・」
頭に手を当てて溜め息をつくフレイアに、グリームヒルドの緊張が解ける。
「一緒にお風呂に入りましょう?あそこなら、男が入ることはないし・・・・・・恥ずかしくないでしょ?」
「え・・・・・・ええ、まあ・・・・・・」と答えを聞いて「よし、決定」と言うと、タオルやら着替えやらを拾い始めた。
「私の服でよければ、着せてあげるけど」
「そ・・・・・・そんな!?もったいないです」とグリームヒルドは慌てる。
「まあまあ。そんなこと、気にせずに行こう?」
「う・・・・・・うん」
笑いかけるフレイアに答えると、二人は風呂場に行くためにドアを開けた。すると突如、部屋に投げた物が一まとめになって飛び込んできた。
「どわっ!」
叫んでグリームヒルドを引っ張ると、投げ込まれた物は部屋の床に散らばった。
「物を投げるんじゃない!!危ないじゃないか。全く・・・・・・」
そう言って立ち去るフレイを、二人は見送っていた。

第３８話　ドヴェルガーたちの苦労

スキールニルから、現在の人間たちの乗り物についての情報をもらったドヴェルガーたち、黒小人族はすぐさま作業にとりかかった。異国では『妖精の職人』と謳われる彼らの腕は確かで、見る見るうちに外装は出来上がっていった。しかしその一方で、彼らを悩ませる問題があり、彼らはこの三日間、それに頭を悩ませていた。

「問題は、動力を何にするか、だ。さすがに今の時代、帆船はないだろう」

同じドヴェルガーのヴェンドルとアウルヴァンディルは「うーん」と、考え込んでいた。

「スキールニルさまのおかげで、外装及び内装に関する資料は集まりました。しかし・・・・・・」

アウルヴァンディルが考え込むと、ヴェンドルも頭を悩ませる。

「人間たちが使っている船の動力なんて、知らないですからね。それに関する資料もない」

他のドヴェルガーたちが作業をしている間、その中心になっている三人は「うーん」と頭を悩ませていた。

「よぉ・・・・・・作業は順調か？」

「は、はい・・・・・・フレイさま」

後ろからしたフレイの声に振り返ったドヴェルガーは、反射的に「うえっ！？」と言ってしまった。

「どうした・・・・・・？フレイさまに対して、『うえっ』は失礼じゃ・・・・・・！？」

後ろを振り向いたヴェンドルも、つられて振り向いたアウルヴァンディルもドヴェルガーの言葉の意味を知った。ちょうど作業を中断した他のドヴェルガーたちも、その姿に目を見開いた。アースガルドでは美形で有名なフレイの頬が、赤く腫れていた。

「・・・・・どうなされたのですか？いったい・・・・・・・」

アウルヴァンディルに聞かれて「どうもこうも・・・・・・・」と、苦笑いしながら近くの椅子に座った。

「ちょっとばかり、妹の逆鱗に触れてしまってね・・・・・・・このざまだよ・・・・・・」

ヴェンドルたち三人は、「は・・・・・・はあ」と呟いた。フレイは溜め息を付いた後、ほとんど外装ができた船を見上げた。

「いい調子じゃないか。この分なら、今夜にも完成か？」

「まあ・・・・・外装と内装だけならね」

ドヴェルガーの一人が言うと、そこで三人はフレイに今の段階の問題を全て打ち明けた。すると、フレイは腕を組んで溜め息をついた。

「うんうん、わかる。人間が使っている物って、俺たちが無意識の内にすることができちゃうものもあるんだろ？火を起こしたり、槍を遠くに飛ばしたり。この前、アースガルドに攻め入ってきた恐れ知らずの人間なんて、こんなに小さな矢を飛ばしてきたんだ」

そう言って、親指と人差し指で、その銃弾の大きさを見せる。

「そ・・・・・そんなことができるのか！？人間が作った物は！？」

驚くアウルヴァンディル。黒小人族は物作りに高い技術力を持った職人魂が凄まじく、別の種族が自分たちより上の技術を持っていると聞くと黙っていられなかった。見る見るうちに全員、嫉妬と悔しさの炎を灯していった。

「まあまあ、落ち着けよ。今は移動手段の船を造るほうが重要だろ。武器に関しては、また今度」

少し背もたれにもたれてそう言うと、一応、黒小人たちは落ち着いたらしい。しばらく休憩すると、船を仕上げるべく、再び作業に移

った。
「余計なことかもしれませんが・・・・・フレイさま、エイルさまの所へ行かれたらどうですか？せっかくのお顔が台無しです」
心配するドヴェルガーに、「いや、これくらい大丈夫だろ。一晩で治るだろうし・・・・・」とフレイは手を振る。
「しかし・・・・・フレイアさまは魔術（セイズ）の達人です。もしも、顔が醜く腫れ上がる呪いをかけられているとしたら・・・・・？」
「い・・・・・お、脅かすなよ・・・・・」
「しかし、『念には念を』と言いますし・・・・・何より、ブリュンヒルドさまのお話によれば、東洋にはそのような話があるみたいですし・・・・・」
ヴェンドルの言葉に、「いっ・・・・・？」と固まった。
「・・・・・その話・・・・・フレイアは・・・・・？」
「確か知ってたと思いますよ。フレイアさまが食堂でグチを言っていたので、どうなさったのか聞きますと、『東洋には、平気で女に毒を盛る男がいる。そのせいで顔が醜く腫れれば、恨まれるのは当然だ』とおっしゃってました」
腕を組んでヴェンドルが話す。
「ま・・・・・まさか・・・・・フレイアに限って・・・・・そんな・・・・・」
「まあ。我々の気のせいなら、それでいいのですが・・・・・」
「でも、気付かない内にやってたり・・・・・いや、今、かけていたりして・・・・・」
意地悪そうにアウルヴァンディルが言うと、とうとうフレイは「ンギャァァァ～！」と言って、黒小人の工房を飛び出した。
「アウルヴァンディル・・・・・脅かしすぎ・・・・・」
げんなりしたヴェンドルに注意されて、アウルヴァンディルは「てへっ」と舌を出した。

―※＊※―

その翌日。〈ヴァラスキャルヴ〉の主オーディン自らが、工房に様子を見に来た。見ると、船の外装は立派に仕上がっていた。

「フム。さすがはドヴェルガーと黒小人族。いい仕事をしてくれる」

しかし船の側に来ると一変、「なっ!?」と絶句した。広い机に向かって設計図を広げたドヴェルガー、ヴェンドル、アウルヴァンディル。誰もが机に上に体を倒していた。

「・・・・・これはいったい、何事だ!?」

すると、「ああ、オーディンさま」とドヴェルガーが目をこすりながら、体を起こした。

「ドヴェルガー。いったい、これは・・・・・・?」

「実は、人間界の最新の乗り物についている動力がわからないので、我々が独自に新しい動力を作り出そうと・・・・・・」

「ああ、そのことか」

起き出したヴェンドルとアウルヴァンディルに、オーディンは気にせず伝えた。

「実は、ダーナ神族の方々が動力に関する情報を提供してくれると言ってくれてね。だからそれについて・・・・・・って、どうかしたのか?」

ドヴェルガーたちは唖然となり、やがて気が抜けたように机に倒れた。オーディンは「?」と首を傾げた。

「ダーナの方々が使っている技術って!?」

意表をついて飛び起きたドヴェルガーの頭突きをかわし、オーディンは説明した。

「この技術は、人間界にとって〈オーバーテクノロジー〉つまり『現在の技術力では再現不可能な技術』のことだ。万が一、人間たちの手に落ちても再現は愚か、解析も不可能だろう」

オーディンはそう言って、ティル・ナ・ノーグから届いた資料をテ

ーブルの上に置く。
「だが・・・・・君たちの技術力なら再現も可能だと思っているのだが、どうかね？」
すぐさま資料を手に取ったドヴェルガーは「これは」と目を見張った。
「これは・・・・・・間違いなく、ダーナの方々が送ってきた資料なのですか？」
すると、「ああ、そのはずだが」と言った。そこに、目を覚ましたヴェンドルとアウルヴァンディルが資料を手に取ると、その二人も目を見張った。
「これは・・・・・・」
「ああ。我々がスキールブラズニルに使っている技術に、瓜二つとも言わないが、とても似ている」
「これは意外だ。あれ？この資料だけ、使われている技術が違う感じがするのだが・・・・・・？」
アウルヴァンディル、ヴェンドル、ドヴェルガーの目に止まったのは、人間界の一部で使われている〈魔科学〉の技術が使われている、魔法素（マナ）で動く回路の設計図だった。
「この回路は・・・・・・」
「資料を提供してくれたダーナ神によると、人間界のごく一部で開発・研究されている物の設計図らしい。その技術の名前は〈魔科学〉と言うらしいのだが、どうかしたのか？」
資料のページをめくって読んでいたドヴェルガーは、やがてあるページに差し掛かった。
「『大気中に存在するマナの結晶を分子レベルから崩壊させ、そこから放出されるエネルギーから出力を得る』・・・・・・？これでは、大気中にマナが還らないのでは・・・・・・？」
「ああ。だから、一部の地域では『マナを消滅させるほど浪費する技術』として、危険視されているんだ。同じ世界の人間だけでなく、マナが命綱である我々、神もね」

「ちょっと待ってください、オーディンさま。まさか、我々にそのマナを浪費する技術を再現しろと!?」
「まさか。私がそんなに、愚かに見えるのか?」
ヴェンドルの言葉にオーディンが聞き返すと、三人は「はい」と頷き、それを見たオーディンはその場にこけた。
「恐れながら、確かオーディンさまは、リンドと言う巨人族の女性に求愛をしたが断られ続け、挙句の果てに肘鉄砲まで食らい、その腹いせに魔術でとりこにされたとか・・・・・・」
アウルヴァンディルに言われ、オーディンがたじろぐ。
「なっ・・・・・・いや・・・・・・アレは。バルドルの敵を討つために、その・・・・・・」
「その出来事が原因で、王位を追われたんでしたよね?」
そこまでヴェンドルに言われるとオーディンは何も言えなくなり、顔を逸らしながらどこからか何枚かの紙を取り出した。
「私なりに、その回路を改良した物だ。お前たちの技術力なら、再現も難しくはあるまい」
「口止め料・・・・・・それとも、ごまかし・・・・・・」
ドヴェルガーが疑いの眼差しを向けると、オーディンは冷や汗を流す。
「ち・・・・・・違う!断じて違うぞ!!・・・・・・とにかく、後は君たちに任せるからな」
それだけ言うと、オーディンはそそくさと工房を後にした。
「やれやれ。それにしてもどうする?」
そう言いつつ資料を取ったヴェンドルは、目を見張った。その紙に書かれていた図面は、〈魔科学〉で作られた回路を、マナを消滅させるのではなく循環させる仕組みが描かれていた。
「・・・・・・さすがはオーディンさま。知恵の泉の水を飲まれただけのことはある・・・・・・」
ヴェンドルはそう言うとすぐさま別の紙に、その図面を元に自分たちならではの工夫を加えた図面を描き始めた。

―※＊※―

それから大体二週間後。ついに、現在の人間界に合わせた、新型のスキールブラズニルが完成した。

「ここまで・・・・・・ここまで長かった・・・・・・」

「おつかれ・・・・・・みんな、本当にお疲れさま」

よほど苦労したのだろう。ヴェンドルとアウルヴァンディル、その他の黒小人たちは、互いに肩を組み合って泣いていた。

「（そこまで大げさじゃ・・・・・・）」

ドヴェルガーが呆れていると、そこにオーディンが来たので振り向いた。

「あっ・・・・・・オーディンさま」

工房の入り口にはオーディンの他に、荷物を持ったジークフリート、ブリュンヒルド、グリームヒルド、さらにフレイとフレイアがいた。

「どうやら、完成したみたいだな」

「はい。ここまで苦労しましたが、彼らががんばってくれたおかげです」

「何を言うか・・・・・・お前もいろいろ、設計図を描くのに苦労しただろ」

ヴェンドルにドヴェルガーは首を振る。

「俺なんか・・・・・・体より頭を動かしていただけだ。みんなの苦労に比べたら・・・・・・」

「そう謙遜するな。お前だってやり遂げたんだ。胸を張れ」

オーディンの言葉にしばらく黙っていたが、やがて「はい」と、しっかり返事をした。

「オーディンさま。船が完成した所に、俺たちを連れてきたということは・・・・・・」

「察しがいいな。君たちにはこの船に乗ってもらう」
「また、私たちが実験台になれと!?」
「なんの実験台だ。黒小人たちの技術力を信じろ。彼らの失敗作なんて、一万個に一つしかない」
「この船に搭載されている動力が、その通算、一万個目ですが・・・・・？」
ドヴェルガーの言葉に一瞬、その場が沈黙に包まれる。
「冗談ですよ。これは通算、三百十七万十五個目。失敗続きの五個目ですよ」
「つまり、完成までに四個も失敗したってことか？」
不安げにジークフリートが聞く。
「失敗・・・・・とは言えないが、改良の余地あり、と判断された」
それを聞いて「なるほど」と頷くと、「納得してもらえたか？」とオーディンが聞いてきた。
「俺たちだって、ただで失敗したりはしない。失敗から新たな改良点を見つけ出し、それを生かす。俺たちはそうやって、少しずつ『完成』を目指していくんだ」
「なるほど。じゃあこれは、その完成に近い物、ということか」
ジークフリートが見上げると、ドヴェルガーの一人がオーディンを見上げる。
「さあ。まだ改良の余地があるかもしれないから、技術者と言うことで俺たちの内、何人かが付いて行くことになった。よろしいですよね、オーディンさま？」
「ん？ああ、構わんよ。どの道、修理することになれば、君たちに頼むしかないからね」
ドヴェルガーは「ありがとうございます」と頭を下げた。
「では・・・・・ジークフリート、ブリュヒルド、グリームヒルド。以下三名は、この新たなスキールブラズニルに乗船し、世界各国を回ってもらいたい」

「また情報集めですか!?」とジークフリートが聞く。
「いや、そうではない。世界中に点在する『協力者』たちを迎えに行くため、あと我々が戦っている敵と戦うため、この船に乗ってもらいたい」
「では、ついに・・・・・・」とブリュンヒルドが呟く。
「奴らの動きと存在は、まだ特定の者にしか知られていない。だが幸いなことに、奴らの存在を知る人間のほとんどが、我々に協力してくれると言う。奴らの力は強大で、彼ら一人一人では敵わないだろうから、共に戦う必要がある」
「なるほど。俺たちも彼らと協力をしてほしいと言うことか」とジークフリートが、笑みを浮かべて拳を握る。
「そういうことだ。集合場所である〈名も無き島〉へは私も行くことになっている。だから、私も同行させてもらう」
そう言うと、マントを翻し、船に向かって歩き出す。ふと、グリームヒルドが呟く。
「ところで・・・・・・その船に名前はあるのですか・・・・・・?」
「スキールブラズニル〈エスペランザ〉。エスペランザとは古代語で『希望』という意味。まさに今の君たちにぴったりだ」
ヴェンドルの命名に、オーディンはフッと笑った。
「では、行こうか。未来の『希望』を守るために!!」

―※＊※―

工房の入り口から見て、垂直の位置に立っている壁についている、大きな扉が開いた。そこから、左右それぞれ八つの車輪が付いた車に乗った、巨大な船が出てきた。車に乗った船はしばらく坂を転がっていたが、やがてアースガルドの陸上を滑るように進みだした。

ポケットサイズから全ての神々を乗せられるほどの巨大船になるスキールブラズニルと、水陸両用の万能船ウェーブ・スウィーパーの技術を融合させたその船は、ミッドガルドに通じる虹の橋ビフロストがあるヒミンビョルグに進路を向けた。

「ミッドガルドの海につないでくれ」

ヒミンビョルグの側を通りかかった時、オーディンが甲板からヘイムダルに向かって叫んだ。

「了解した。しばらく待ってくれ」

ヘイムダルが答えてから、しばらくエスペランザが止まっていると

「待たせたな」と声がした。

「とりあえず、ティル・ナ・ノーグって所に、できるだけ近い海域につなげた。後の航路は任せるぞ」

「わかった。恩に切る」

オーディンが言うとヘイムダルが微笑む。やがて、虹の橋（ビフレスト）を通りながらエスペランザは人間界の海に降り立った。そこから、短時間で世界を回る、彼らの短い旅が始まった。

第３９話　医者神さまの悪戦苦闘

一方、ティル・ナ・ノーグからこの本拠地の島に渡ってきたディアン・ケヒトは、研究室にこもり、何やら怪しげな薬を調合していた。

「この調合に・・・・・・間違いなければ・・・・・・」

試験管に入った液体を、口の細いビーカーに一滴ずつ落とす。すると、ビーカーの中から小さな爆発音がし、赤い煙が立つと、透明な液体の色が赤に変わった。その瞬間に、ディアン・ケヒトが溜め息はついた。

「やれやれ。また失敗か・・・・・・」

あれから約二ヵ月半。息子であるミアハや、娘であるアミッドと共に様々な薬を調合したが、ミリアが飲んだ〈常若薬〉の解毒剤は、完成のめども立っていなかった。そもそも、その〈常若薬〉の作り方さえ遥か昔に失われていたので、製作過程で材料に含まれている成分になんらかの変化があったとしても、それを探しだすことさえも出来ないでいた。

「（サンプルも解析データも余るほどある。しかし・・・・・・にも拘らず、その効果を打ち消す薬すら作れないとは・・・・・・）」

ディアン・ケヒトは、今まで感じたことの無いほどの無力感を感じていた。そこに、部屋のドアが開いて誰かが入ってきた。薬の調合がうまくいかず、イライラしていたディアン・ケヒトは後ろを振り返り、

「誰じゃ！？ノックもせんで！！」

と怒鳴った。そこに立っていたのは、紅茶の入ったカップをトレーの上に乗せたブリジットだった。

「調合がうまくいかないディアン・ケヒトさまを、リラックスさせよとしましたが・・・・・・」
ブリジットは嫌味がきいた声で呟き、意地悪そうに微笑むと、ドアのほうに反転した。
「いらないようなので、わたくしが頂くといたしましょう」
それを聞いたディアン・ケヒトは、「うぎゃあぁ～！ちょっと待て、待ってくれ～」と悲鳴を上げた。その後、なんとか説得をして、ディアン・ケヒトは紅茶にありつくことができた。椅子に座ったブリジットが聞く。
「調合・・・・・・うまくいっていないの・・・・・・？」
ディアン・ケヒトは「ああ」と溜め息をつきながら、紅茶を一口飲んだ。
「サンプルデータの解析結果を元に、それを打ち消す作用が起こるだろう組み合わせをいろいろと試してみたが・・・・・・結果は見ての通りじゃ」
そう言って、部屋の反対側の箱に入れられてある、解毒剤の失敗作を見せた。
「・・・・・・なんと言うか・・・・・・。悲惨ね・・・・・・」
「まあ、調合の天才である娘のアミッドなら、ワシよりももっと早く・・・・・・いや、とっくの昔に完成させてるかも知れんの」
嫌味交じりの声で言うディアン・ケヒトに、「はあ～」と溜め息をつく。
「嫉妬？あ～あ、いやよね～そういうの。あなたね。私が部屋を訪ねた時、その娘と息子がなんて言ったか知ってる？」
嫌味を交えて、「いや、わしの悪口か？」と言うディアン・ケヒトに、ブリジットはむっとした声で言った。
「『お父さまなら、私よりもうまく作れるかもしれない』。あなたに嫉妬する様子なんて、微塵も感じなかったわ」
それを聞いて、ディアン・ケヒトは衝撃を受けたような顔をした。
「二人は、あなたの医神としての腕を、誰よりも認めているのよ。

そんなあなたがそれじゃあ、出来る薬も出来ないわね」
椅子から立ち上がると、ディアン・ケヒトが飲みかけの紅茶のカップを取り上げた。
「おい、まだ飲みかけ・・・・・・」
「気分転換でもすればいい知恵が浮かぶと思ってたけど・・・・・・あなたには無駄みたいね」
そう言うと、さっさと部屋を出て行ってしまった。
「な・・・・・・なんじゃ。ワシの気も知らないで」
だがディアン・ケヒトは、自分の子供二人がほめていたことを思い出し、少し考えた。自分に呆れながら溜め息をつき、頭をかくと失敗作の薬を入れている箱のほうに歩いて行った。そして、机に戻るとそれぞれのビンに張ってある番号と、同じ番号の資料を探し始めた。
「この薬の成分は・・・・・・すると、こっちは・・・・・・」
そして、薬と資料の成分表を交互に見ながら、失敗作の中からいくつか選び出した。
「これとこれを組み合わせた場合・・・・・・」
いくつかの薬をそれぞれ試験管に入れ、資料と睨み合いを続けながら思案を続けていた。

―※＊※―

翌日。夜が明けてもディアン・ケヒトは資料との睨み合いを続けていた。
「フ～ム・・・・・・ダメじゃ・・・・・・」
椅子の背もたれにもたれかけ、伸びをする。徹夜する結果になったが結局、解毒剤は出来なかった。
「〈常若薬〉は、服用者に悪い症状を起こさせる訳ではない。よっ

て、エリクシールも効かない。果てさて、どうしたものか」
そこに、「父さん、ちょっといいかい？」と、アミッドとミアハが入ってきた。
「なんじゃ？お前さん方が来るとは珍しい。いったい、なんの用じゃ？」
「ボクとアミッドがそれぞれ作った薬と、父さんが作った薬の成分を見比べようと思って」
「なんじゃと！？うまいこと言って、ワシの薬の秘伝を盗む気だろ？帰れ・・・・・と言いたいが・・・・・」
予想外の反応に、二人は顔を見合わせた。
「〈常若薬〉の解毒剤については、ワシも頭を悩ませていた所じゃ。お主らさえ良ければ、一緒に考えてやらん・・・・・こともないぞ」
これまた予想外の反応に、二人は顔を見合わせた。しかし、すぐに
「お願いしま～す」と言った。
「あの・・・・・いいんですか？・・・・・私のような者が、医療の神様である皆さまに意見を言っても・・・・・」
「お主、もしや・・・・・」
二人の後ろから恐る恐る聞いてきた人魚を見て、ディアン・ケヒトが言った。
「あっ・・・・・め・・・・・メリスです。この度は、私のような若輩者をお招きいただき、ありがとうございます。医療の神と称えられるディアン・ケヒトさまのお手伝いできることは、身に余る光栄です」
緊張からか堅苦しい挨拶をするメリスに、「そう硬くならなくても」とミアハが話しかける。
「お主のことは聞いている。ワシらも、お主のような第三者のもたらす意見は貴重だと考える。それが冷静なものなら、なおさらの」
「だから、そんなに緊張しないで。もっと肩の力を抜いて、楽にしていいわよ」

「はあ。それでは、お言葉に甘えて」
アミッドの言葉に、メリスは肩の力を抜いた。

―※＊※―

「フム。エリクサーを参考に、か。悪くはないの」
「お父さまこそ、〈常若薬〉の成分を分析して、ゼロからここまでのものを造るなんて。見直しました」
ディアン・ケヒトの薬の成分表を見て、アミッドが呟いた。
「だが、お互い未だ完成には至っていない・・・・・のだろ？」
ミアハにそう言われると、部屋の中にいる三人は「はあ～」と溜め息をついた。
「とにかく、出来上がった薬を試してみよう。あの子はどこにいる？」
ミアハにディアン・ケヒトが答える。
「ブリジットに聞いてみればいい。しかし、飲ませた後の検査等は、出来ると思わんほうがいいの」
そう言われ、気まずい表情をする。マナナン・マク・リールからミリアを預かって一週間後のこと。試作品の薬を飲ませた後、体の変化を見るため彼女の体をいろいろと検査をした。それが一週間も、しかも朝昼晩の三回にわたって続いたので、ミリアが検査自体を拒否してしまう事態まで発展してしまった。その上ブリジットに、
「まるでこの子を実験台にしているみたい」
とまで言ってしまったので、試作品が出来てもミリアに飲んでもらう訳には行かなくなった。そこで、まだ倉庫に残っている〈常若薬〉の成分を分析し、その作用を打ち消すことの出来る成分の組み合わせを、それこそ一週間半かけて探し出した。ケヒトたちはその結果を元に、〈常若薬〉の解毒剤作りにいそしんでいた。だが、そう

うまく行くとも限らず、解毒剤作りは難航していた。三人は再び「うーん」と悩み込んだ。

―※＊※―

同じように悩んでいる者が、ここにもいた。

「うーん」

「あら。ミリアちゃん、どうしたの？」

いまだ、幼い子供の姿をしたミリアの遊び相手になっている、ブリジットが訊ねる。

「ちょっと・・・・・・ケヒトさんたちのこと、考えてて。せっかく、私のためにがんばってくれているのに、ワガママ言っちゃって申し訳ないな・・・・・・って・・・・・」

「そう・・・・・でも、いいんじゃない？あなた、無理やり薬を飲まされるのはいやだったんでしょ」

「それはそうだけど・・・・・・でも・・・・・そのせいで迷惑かけてたら・・・・・・それって、私のせいでしょ？」

それを聞いて、「ふう」と溜め息をつくブリジット。

「じゃあ・・・・・辛いかもしれないけど、がんばってみる？」

すると、「うん」とミリアは、力強く頷いた。

―※＊※―

数分後、二人はケヒトたちが集まっている医務室にやって来た。

「・・・・・と、言う訳だから、この子の決意に感謝しなさい！」

「そうか。感謝するよ」と、ミアハが答えた。

「こっちも、新しい試作品ができるとこなの。だから、もう少し待っててね」
アミッドが言う。部屋の中には、番号札が貼られた多くの試験管とビーカーがあり、試験管の中には様々な色の液体が入っていた。十本一組の試験管立てが二つあり、片方にはディアン・ケヒトが、もう片方はミアハが作った薬の中から、成分表を見てアミッドが選び出した物が入れられており、なぜか陸上移動ができるマーメイド――メリスがそれをさらに調合していた。ブリジットの側では、ミリアが彼女の服の裾を握って震えていた。
「どうしたの？」
「・・・・・私に変な薬飲ませようとした人が、透明な入れ物をたくさん持っていたの」
それを聞いて、アミッドたちは驚いた。
「そっか。その時のことを思い出しちゃったんだね」
「「できました！！」」
その時、三人の声がした。ブリジットとミリアが三人のほうを見ると、メリスが持つビーカーの中に、〈常若薬〉に負けないほど済んだ青色の液体が入っていた。
「・・・・・本当に出来たの・・・・・・？」
疑わしそうに聞くブリジットに、「我々の二ヵ月半は、伊達ではない」とアミッドは答えた。
「考えてみれば・・・・・〈常若薬〉の成分が、お前さんが飲まされた薬の成分と結合し、突然変異的副作用を起こしたのだろう」
「その薬は、それを打ち消せるの？」
ディアン・ケヒトの個人用語に首を傾げつつ、不安そうにブリジットが聞く。
「いや、打ち消す訳ではない。ただ、前にその子から採取した血液を検査したところ、血液中にある特殊な抗体が出来ていた」
「つまり、〈常若薬〉が『ウイルス』と認識されていたってこと？」
「それが、そうとも言えないの。その子が飲まされようとした薬の

作用かはわからないけど、彼女の体内にある抗体が変異して、体を幼児化させる作用を持つようになってしまったの」
アミッドの後に説明するメリスに、「あっ、人魚のお姉ちゃん」とミリアが言った。
「この部屋で最初に見た時、びっくりしちゃった。まさか、この薬を飲む人があなただったなんて・・・・・子供には、ちょっとばかり苦すぎるかな・・・・・」
メリスの言葉にミリアがブリジットの後ろに隠れると、「ああ、大丈夫よ」と笑顔で話しかける。
「――――薬の効果を阻害せずに味を甘くする液体があるから。もちろん、薬じゃなくてただ甘い味をつけるだけだから、副作用はないわ」
子供に飲ませる薬を甘くするという発想のメリスを、ディアン・ケヒトとミアハは苦い顔で見ていた。
「・・・・・まあ、どのみち想像の域を出ないが・・・・・彼女の幼児化には〈常若薬〉の他に、その前に飲まされた薬が関係あったんだ。それが何かはわからんが、あらかじめサンプルをもらっていたから、中和剤は作れていた」
「わしらが今まで作った薬は、それを元にしていたのじゃ」
「なるほどねぇ。でも、少しおかしくない？その『謎の薬』の中和剤を元にしていたのなら、なぜ今まで効かなかったの？」
「あくまで『中和剤』だ。すでに服用されている薬の成分を、打ち消すことは出来ない。さらに彼女の場合、その成分は排出されずに維持されている。だから、その成分を『無力化』か『破壊』するしかないんだ」
ミアハの説明に、ブリジットが不安そうな顔をする。
「まさかその薬・・・・・成分を『破壊』する作用があるんじゃあ・・・・・」
思わずミリアを庇うブリジットに、アミッドがなだめながら説明をする。その間に、ケヒトは出来上がった薬をコップに移していた。

「まあ、ね。でも、『破壊』と言っても無力化するのに近いし・・・・・これといった副作用もないと考えている」
ミアハに、「もし、副作用が起こったとしたら・・・・・・？」とブリジットが聞く。
「その用心も兼ねて、薬はあそこで飲んでもらう」
ディアン・ケヒトが医務室の中にある扉を開くと、中には丸い円の形に作られた泉があった。
「・・・・・ディアン・ケヒト・・・・・これって」
「お主も知っての通り、〈治癒の泉〉じゃ。ゴブニュに頼んで移動式にしてもろうた」
「大量に怪我人が運び込まれたら、回復薬だけじゃ足りないだろ？」と、ミアハが言う。
「これだけでも、応急処置にはなるだろうて。では、ミリアとやら。早速、頼むぞ」
「う・・・・・・うん」
ミリアは戸惑いながらも、ケヒトたちから渡された薬を飲んだ。すると早速、変化が現れ始めた。
「う・・・・・・うぶ。この感じは・・・・・・」
口を押さえ、膝を着くミリアに「ミリアちゃん、大丈夫！？」とブリジットが聞く。
「う・・・・・・うん・・・・・・大丈夫・・・・・・・・う・・・・・・く・・・・・・・」
ミリアの表情がゆがみ、だんだんと体が成長し始める。その時、ディアン・ケヒトが「あっ！！」と声を上げた。
「しまった！！彼女が元着ていた服が、ここにはない！」
それを聞き、「げげっ」と声を上げる三人。そうしている間にも、ミリアの体はどんどん成長し、今着ている服が破れそうになっていた。
「まずいぞ！！ブリジット！早くこの子の服を持ってきてくれ！」
「わかった」と、ブリジットが答える。

「アミッド！！タオル、タオル！」
ミアハの言葉に、「えっ？あっ、そっか」とアミッドが答える。
「もしも服が破れた時のために・・・・・・」
そうしている間にも、ミリアの体の成長が止まり始めた。
「いかん！！薬の作用が切れ初めておる。いや、副作用かも知れん。彼女を〈治癒の泉〉の中に！！」
ディアン・ケヒトに指示され、すぐさまミアハが「はい！」と言ってミリアを抱え上げた。
「えっ・・・・・ちょっと待って・・・・・」
その声は幼い女の子のものとは違っていたが、ミアハはかまわず彼女を泉の中に放り込んだ。ドボ～ン、水しぶきがたったのと、ブリジットがドアを開けたのはほぼ同時だった。
「持ってきたよ、彼女の服。・・・・・どうだった？」
「どうもこうも・・・・・成功じゃ。彼女の体は、元に戻った」
ブリジットが泉のほうを見ると、全身ずぶぬれで幼女から少女へ成長したミリアが、恨みがましい表情でこちらを見ていた。
「じゃあ・・・・・彼女は元に戻ったのね！？」
「ああ、ばっちりじゃ」
「あはっ。良かったね、ミリアちゃん」
「え・・・・・ええ・・・・・まあ」
だが、笑顔のブリジットとは裏腹に、ミリアは複雑な表情をしていた。とりあえず、彼女がタオルで体を拭いて、ブリジットが持ってきた服に着替えた後、アミッドとミアハは残りの薬の入った試験管を見ていた。
「それで、この残った薬どうする？組み合わせて、新しい回復薬でも作っちゃう」
「いや、だめだ。せいぜい出来て傷薬くらいだろう」
アミッドとミアハの会話を聞いて、「（いったい、どんな組み合わせしているの・・・・・？）」とブリジットは思った。

第４０話　表舞台の動き

エウロッパ大陸の中心的な国イグリースのロンディノスに、エウロッパ大陸にある国の代表者たちが集まって議会を開いていた。その会議には、開かれたのがロンディノスということもあり、ヘクターも参加していた。

「ここ最近、起きている不可思議な出来事について、各自、包み隠さず報告してもらいたい」

アストリア議員の言葉に、リタリー議員が眉を動かした。

「包み隠さず、とは気になる言い方だな。まさか、我らの内、その不可思議な出来事の関与している者がいると？」

「けしからん！貴行は我らのことを疑っているのか！？」

怒りを露わにするエスパニャ議員に、アストリア議員は「いえ」と両手をかざす。

「ただ、我らに資金などについての協力を取り次いでいる、謎の男がいる。この男も何か関わっているかも知れん」

それを聞き、「（おいおい。怪しまれているぞ、クトゥリア）」とヘクターは思った。

「どうお思いでしょうか？イグリース代表議員どの？」

そうアストリア議員に聞かれたヘクターは、「へっ？」と答える。

「おや？もしかして、話を聞いていらっしゃらなかったのでは・・・・・？」

「えっ？いや、まさか。我らに強力を取り次いでくる、謎の男が話に出たでしょう？」

側にいたいグリース議員に「ねぇ」とヘクターが聞くと、アストリア議員はとても小さく「ちっ」と舌打ちをした。
「しかし、アストリア代表議員殿。今の言い方では、まるで我々の中に不可思議な出来事を起こしている、犯人がいるみたいではないか」
ウェイス議員の質問に、アストリア議員は「いえいえ」と言う。
「決してそのようなことはありません。ただ・・・・・エリウで起きた、国を二分する戦争。ムルグラント国での、謎の国への軍の派遣と敗走。さらに、ラグシェ国で今まで確認されたことのない強大な魔物の出現と、ジェプト国での謎の強制労働。さらに、ファンラス国で異端狩りを行なっていた教会の重役二人が、立て続けに行方不明に。どうして、こう連続して不可解なこと件が起きるのでしょうか。どこか、何者かの邪悪な意図があるように感じませんか？」
そう言われて、各国の議員はざわめきだした。
「突飛な考えだとおっしゃる方もいらっしゃるかもしれませんが、私はこの国で起きた一連の事件は、何者かが組織立って故意に起こした事件だと考えています」
「バカな。たった四ヶ月で、何百キロも離れているエウロッパ大陸全土でそのような事件を起こすなど、たった一人で出来るはずがない」
「誰が『一人で』などとおっしゃいました？」
リタリー議員にアストリア議員が言うと、再び議員たちがざわめきだす。
「我々が知らない何かしらの、しかも大きな組織が暗躍をしている。そう思えてならないのです」
「その『謎の組織』に協力する者が、我々の中にいるとでも・・・・・？」
イグリース議員が不満そうに言う。
「皆さんを不愉快にさせるということは、重々、承知しています。しかし、こういった大規模な動きが出来る以上、何者かの後ろ盾が

あると、考えざるを得ないのです」
会議場を沈黙が支配する。その中で最初に口を開いたのは、ヘクターだった。
「では、仮にそのような組織があるとして、いったいどこの何者が糸を引いていると・・・・・・？」
今度は、アストリアの議員が黙り込んだ。しかし、やがて「これは私の想像だが・・・・・・」と口を開いた。
「ここから西へ行った大陸にある大国ハルミアが、一番、疑わしいと思っている」
アストリア議員の言葉に、三度に、会議場の中がざわめいた。
「バカな!?証拠はあるのか!?」
叫ぶエスパニャ議員に、「いえ」とアストリア議員が言う。
「第一、これは『仮に』の話です。実際にそうかどうかは分かりません」
「ならば、このような会議に出すべきではないであろう。イグリース議員補佐殿」
そうウェイス議員に言われて「う・・・・・・うむ」と、ヘクターは黙り込んだ。
「しかし、推測の域を出ないとはいえ、可能性としては否めないのです。そういう訳で、皆さま方も注意されてほしい」
アストリア議員のこの言葉をもって、議会は閉幕した。

―※＊※―

「ヘクター殿」
議会が終わった後、会場となった建物の廊下で、ヘクターがウェイス議員に呼び止められた。
「ああ。エンハム殿」

「・・・・・何を考えているのだ。ここであのようなことを聞くとは」
「と、言うと?」と、ヘクターは再び通路を歩きだす。
「とぼけるな。あの時、アストリアの議員に対して探りを入れただろう?」
「なぜ、そのような恐れ多い真似を・・・・・・?」
とぼけながら歩くヘクターに、「お前の親友のためだろう!?」と叫ぶ。すると、ヘクターは足を止めた。
「アウグスから聞いたぞ。お前・・・・・・」
「お互い、お忙しいのでは?そのような話なら、日を改めて」
ヘクターはそう言って、通路を歩いて行った。車に乗ったヘクターに、イグリース議員、ロイディが話しかける。
「お前が言っていたクトゥリアと言う男。本当に信用がいくと思うか?」
「ええ。それはあなたが、よく知っていると思っているのですが・・・・・」
走り出した車の中で、ロイディは溜め息をつきながら腕を組む。
「確かに。あいつは初めて会った時から、嘘をつくのが下手だ。ましてや、人を騙すなど問題外」
「そのような男と聞きましたから、私も信用をしようと思ったのです」と、ヘクターが言う。
「いや、お前の場合、私よりも付き合いが長いだろう」
「とんでもない。一回、不審を抱いて身辺調査を依頼したのですが、誰を送りつけてもあっさり見破られてしまいました」
「本当に、何者だろうか・・・・・・」と、ロイディが呟く。車は郊外の中をいずこかに向けて走っていた。

―※＊※―

〈名も無き島〉に建つ屋敷の隠し部屋にある会議室に、クトゥリア、アウグス、パラケルの三人が、テーブルを臨んで会議をしていた。
「エウロッパ大陸を一通り回ってみたが、世間一般ではこの組織の存在は愚か、我々が戦おうとしている敵の存在すら、認知されていないようだ」
アウグスの報告に、「それが当然だろうな」とパラケルが言う。
「奴らは情報隠蔽にも力を入れているようだから、奴らの存在を知っているのは我々と、直接、会った者のみ」
「その存在を確認するには、より広い範囲での多くの情報が必要、と言うことか」
「だから、こうして各国で情報を交換しているって訳だ」
「しかし、それにしてはあのルーシアって国の対応は、こちらに非協力的じゃないか？」
「俺も情報収集のために回ろうとしたが、国境警備が厳しくては入れなかったぞ」
クトゥリア、パラケル、アウグスの順で言うと、再びクトゥリアが口を開く。
「まあ、な。七年ほど前に、中心となって治めていた国が滅んでしまったから、そっちの修復のほうに忙しいんじゃないのかな？」
クトゥリアの言葉に、「七年前！？」とパラケルが叫んだ。
「確か、クルキドって生物の動きが活発になり始めたのも・・・・・・」
クトゥリアが「んっ？」と考え、ハッと気付く。
「あ、ああ。七年ほど前だ。何か関係があるのか？」
三人は腕を組んで考えた。そこに、「そろそろいいかな」と声がした。クトゥリアの後ろには、ゼウスが立っていた。
「ゼウス殿。会議は終わられたのですか？」
クトゥリアが聞くと、「いや、まだだ」とゼウス。
「少し相談がある。我々が掴んでいる情報と、今お主らが掴んでい

る情報を、公開し合わんか？」
「ええ？あなた方のほうが、我々より正確な情報を多く持っているのでは？」
驚くクトゥリアに、「ところが・・・・・・そうとは言えんのだ」とゼウスが答える。
「我々はどうも、今の人間界の仕組みに疎くて、な。奴らの動きと思しきものは掴んでいるのだが、それに人間の社会の仕組みが加わると、どうにも・・・・・・」
「なるほど。人間社会に多く溶け込んでいる奴らの情報を知るには、我々に聞くほうが速いと言うことか」
そう言って、アウグスが頷く。
「それに、我らの会議で決まったことをお主らにも聞いてほしい。出てくれるか？」
「わかりました。参りましょう」

―※＊※―

クトゥリアが答えて数分後。神々の議会に、人間であるクトゥリア、アウグス、パラケルを加え、議会を再開した。
「では・・・・・・君たちの目から見て、人間の世界はどうなっている？」
神々を代表してゼウス、三人を代表してクトゥリアが進行する。
「今、最も危険なのは、『王国』が崩落して統治者がいなくなっているスヴェロニア国と、武器密輸の疑いが濃いルーシア国。そして、〈侵略者の国〉として有名なエスパニャ国」
「確かエスパニャ国は、近くにあるカルディア国やサウサリカ大陸にあるインディカやルーフェ、サティシュカの文明を滅ぼしたとか」
アウグスに「ああ」とクトゥリアが答える。

「サティシュカについては侵攻と文明の徹底的破壊の理由を『生け贄の習慣があった』としているが、真実かどうかは不明だ」
「いや、本当らしい。ただ、俺が掴んだ情報によるとルーフェの統治者に警告を受け、その習慣は撤廃したそうだ」
パラケルの補足に、「その上での、侵攻と破壊か」とアウグスが言う。
「〈ルーフェ〉と言う国については、私も聞いたことがある。嵐にあって別の地域に飛ばされたムニンが、その地域についてのことを記憶して来てくれた。別に、生け贄とか言う物騒な習慣は無く、森に石造りの建物を作ってそこを住処にしていたが・・・・・・」
それを、クトゥリアが補足する。
「それは〈インディカ帝国〉のことです。ただ今は、帝国の兵士は武力派に、他の人々は穏健派になっていて、穏健派は武力派に脅かされていると聞く。実際に様子を見に行こうとしたが、サウサリカ大陸行きの航空便は全て欠航にされていました」
「元よりその国の人々は、我らを敵視する者が多い。神界のものでさえ、我々エウロッパ大陸に敵視する者がいる」
ゼウスの言葉に、「それは初耳ですね。いったい、どうして?」とオーディンが聞く。
「遥か昔。今では、『侵略者の国』と言われているエスパニャ国が、まだそう言われていなかった百数年ほど前・・・・・・」
話し始めたクトゥリアに、その場にいる全員の視線が集中する。
「海の向こうにある、別の大陸に民族と交流を深めようと、政府は使者を送った。その時に中心となっていったのが、〈エスパニャ国〉の使節団で、その使節団が最初に訪れた国が〈サティシュカ〉だった」
フレイが「ほう」と呟く。
「だが、集落に入るなり、使節団はそこで行なわれていた生け贄の儀式に目を見張った。そのあまりにもむごい儀式を罵倒した所、人々の怒りを買い、捕まって後の儀式の生け贄にさせられた。生き残

った使節団は命からがら国に帰り、一部始終を伝えたところ、政府は怒りを爆発させ、すぐさま軍を編成した」

ルーグとペルーンが「うむ」とうなる。

「海岸から攻め入ったエスパニャの兵士は、そこにいる人々を生け贄の習慣から逃げてきた人々とは知らず、襲い掛かった。結果、その人々にはエスパニャ軍は『命からがら逃げてきた我々を襲った、凶暴な侵略者』と認識されるようになってしまった。そうとは知らずエスパニャ軍は、そのままサティシュカの集落に侵攻、これを制圧した」

ホルスの付き人としてきたイシスが、静かに息を呑む。

「その後エスパニャの政府は、同じサウサリカ大陸にある他の二文明、ルーフェとインディカをサティシュカと同じく、『人道を外した悪魔の所業を行なう国』と指定して、そこに侵攻した。だがその直後、サティシュカ侵攻の知らせを聞いたルーフェから、通報を受けていた世界政府が介入し、両国が本格的な武力衝突する前に戦争は集結した。しかし、その代償として、エスパニャ国は〈侵略者の国〉と、全世界に認識されるようになってしまった」

あまりにも壮絶な歴史に、アウグスとパラケルはもちろん、その場に居合わせている若い神々は息を呑んだ。

「それでは何か？我々はその、人間どもの勘違いのおかげで、別の大陸の神々に、人間と同格と見られているということか」

ペルーンに「悪く言えば、そういうことになります」と言い、重い空気に包まれる議会。

「しかし・・・・・使節団の生き残りがよく、国に帰れましたね。まさか・・・・・」

フレイの疑問をルーグがさえぎる。

「限らないであろう。だいたい、今、我らが戦っている〈デモス・ゼルガンク〉が当時にも存在していたとしたら、なぜ我々に宣戦布告するのが、今なのだ？」

「確かに。もっと昔から存在していたのだったら、もっと速く世界

で暗躍を・・・・・・」

「仮に存在していたとしてもそれがなかったということは、何か活動できない理由があったのだろう」

オーディンもゼウスも腕を組んで考える。ほとんどの神々が、「うーむ」と唸る。

第４１話　始まりの出会い（前編）

エリウ国での戦いから四ヶ月後。アルスターにある城の王、エオホズの元に一つの書状が届いた。それを読んでしばらくした後、自分に仕える兵士の一人、セリュードを呼んだ。

「なんでございましょうか？エオホズ王」

「トゥアハ・デ・ダナーンの神々が、君に来てもらいたいらしい」

それを聞き、セリュードは「えっ？」と困惑した。少なくともこの地方の神が、人間と何も変わらない自分になんの用だろう。そう思っていた。

「おそらく、この前にコノートやコノール王、妖精族が攻め込んできたこと・・・・・まあ、仕組まれたものだったらしいが、それに関係あるかも知れん。セリュード」

「はい。行って参ります」

セリュードはそう言って、セリュードはエオホズの前に、片膝を折って頭を下げた。

―※＊※―

同時刻、ラグシェ国。あの激闘から三ヶ月が経っており、奇跡的に被害が少なかったパルティオンの復興作業は、最終段階に入ろうとしていた。そんな町に、背中に翼の生えた、美しい少女が降り立っ

た。彼女は何かを探しているらしく、周りをきょろきょろと見渡しており、最初は町の人々はそれに近づこうとしなかったが、何もしないということがわかると彼女に近づいて行った。

「・・・・・・お譲ちゃん」

話しかけられた少女は、一回周りを見渡したが回りに誰もいないことを知ると、話しかけた人のほうを向いて聞き返した。

「私・・・・・・ですか？」

「お譲ちゃん以外にはいないんだけど。誰か、探しているのかい？」

胡散臭そうに話しかける町の人に少女、イリスは気分を害したらしく、不機嫌な声で答えた。

「クウァルと言う人間を探しています。ヘラさまの命令で」

「ヘラ？・・・・・・って、まさか、あの『オリュンポス１２神』の・・・・・・」

それを聞いた町の人たちは、おろおろと騒ぎ出した。知らなかったとはいえ、神様のことを疫病神のように言ったので、いつ罰が落ちてもおかしくないと、この復旧の間、町の人々は復興をしながら怯えていた。

「あなた方の思っていることに関しては、アテナさまから聞いてよく存じております。しかし、今の私たちには、それよりも優先するべき事項がありますので、失礼します」

そう言って一礼すると、イリスはどこかへ立ち去ろうとした。と、そこへ

「俺ならここだ」

と声がした。イリスがそのほうを見上げると、真新しい屋根の上に、首にタオルとかけて手に金槌を持った、半そでシャツ姿の一人の青年が立っていた。

「オリュンポスの神様が、こんな人間崩れになんの用だ？」

クウァルは屋根から飛び降りながら、イリスに悪態をつく。

「こ・・・・・・こら、クウァル。この人は神様の使いなのだぞ」

「だからなんだ？俺には関係ない」

「お・・・・・おい」
神の使いの前で悪態をついたため、町の人はおののいたが、クウァルもイリスも平然としていた。
「なるほど・・・・・アテナさまから聞いたとおり、よほどの神様嫌いのようですね」
「ハッ、どうも・・・・・・」
精一杯の皮肉を込めて返した後、クウァルは道具を持って立ち去ろうとした。
「待ってください。ゼウスさまがあなたと、あなたの恋人に用事があるとおっしゃっております」
次の瞬間、クウァルは手に持っていた大工道具を落とし、ガッシャ～ンという音を響かせた。
「おい、俺と・・・・・・誰がなんだって？」
「はい？」
呆気に取られたイリスが首を傾げると、クウァルは大股で彼女に近づいて行き、鼻先に人差し指を突きつけた。
「あいつは！ただの！幼馴染で！それ以上でも、それ以下でもない！！・・・・・いくら神様でも、ふざけたことはぬかすな！」
言うだけ言うと、クウァルは落とした道具を片づけてさっさと立ち去る。その態度に町の人はおろおろしていた。
「なんですかっ！」
しばらく唖然としていたが、さすがに温厚なイリスも憤慨した。
「許してあげてください。彼、昔からああなんです」
横からした声にそのほうを向くと、一人の女性が歩いて来ていた。
「あなたが、セルスさんですか？」
「ええ。あなたがあいつの『恋人』と言ったセルスです」
「・・・・・え～っと・・・・・・すみません。なんか、変なこと言ってしまったようで・・・・・・」
「気にしないでください。あいつから見れば、私はただの幼馴染なんですから・・・・・・」

そう言うセルスの顔は、どこか寂しそうだった。
「ええ・・・・・と。確か、ヘラさまがお呼びなんですよね？」
「え？ええ。すぐにでも来て欲しいと」
道具を片づけていたクウァルが、「なぜ、俺たちなんだ？」と聞いてきた。
「アテナさまのお話を聞いて、あなたたちにしか頼めないとおっしゃってました」
あらかた道具を戻したクウァルは、「そうは言われても」と呟いた。
「ただ、話を聞くだけでも構いません。神々の神殿に来てもらえませんか？」
「だが、町が・・・・・」
クウァルが呟くと、「心配には及びません」と、まだその場にいた町の人々が話し出す。
「後は我々が立て直します」
「せっかくクウァルや神様が守ってくれた町だ。絶対、立て直して見せますよ」
口々に言う町の人に、セルスはやや気まずく思う。
「（その町をここまで破壊したのは、その神様であるアレスなんだけどな・・・・・）」
あらかた道具を片づけると、「わかった」と返事をした。
「私もついて行っていい？」
「どうせ聞かないんだ。いいだろう？」
セルスの申し出に、クウァルが投げやりの口調で言う。
「ええ。アテナさまも、あなたに話を聞いてもらいたいのだと思います」
イリスの答えに、「決まりだ」とクウァルが言うと、二人はオリュンポス山にある〈神々の神殿〉へ行く準備をした。

―※＊※―

目的地への道中。クウァルも遠出すると聞き、さすがに半そでシャツのままではおらず、暗い黄緑色をした長袖の服を着ていた。山の中腹辺りでクウァルがイリスに質問した。

「俺たちが目指すのは、オリュンポス山の聖域の『アルティス』か？」

「人間にはそう呼ばれているのですか。確かに私たちが目指しているのは、人間たちから見れば『聖域』に当たるので、そういうことになりますね。私たちのほうでは決まった呼び方はないので、その名前を使わせてもらいます」

「それで、なんで神様が虫けら同然の俺たちに来てくれなんて？」

「クウァル・・・・・・」

セルスに物凄い剣幕で睨まれ、クウァルは「ちっ」と黙り込んだ。

やがて、オリュンポス山の頂上にある遺跡跡に辿り着いた。

「ここのどこに神様がいるんだ？」

「黙ってついて来て下さい」

クウァルの問いにイリスが言うと、そのまま真っ直ぐ遺跡の中を進んで行く。すると、中央に近づいた所で、彼女の姿が陽炎のように消えた。

「！？」

二人は一瞬、躊躇したが、イリスの言葉に従って遺跡の中央に進んで行った。すると一瞬、周りの景色が揺らめいたかと思うと、足元に雲のような白い煙に満たされており、白く美しい石柱が何本も立てられている空間に出た。

「奇麗・・・・・・」

「ここが・・・・・・神々の住む『神界』」

「正確には神界のごく一部、人間世界で言うラグシェ地方だ」

声のしたほうを二人が見ると、アテナが歩いて来ていた。

「アテナさん！！」

「イリス、ご苦労さま。久しぶりね、セルス。それと、この前は世話になったわね、クウァルくん」
クウァルは「別に」とソッポを向いた。
「相変わらずね。二人とも、付いて来て。お父さまが・・・・・・ゼウスさまが、お話があると」
「・・・・・面白い。『大神』とも呼ばれる存在が俺たちにどんな話があるか、聞こうじゃないか」
バカにしたようにクウァルが言うと、クウァルとセルスはアテナの後をついて行った。

―※＊※―

神殿の奥で、白いひげを蓄えた老人が玉座に座って出迎えた。
「ようこそ、神界へ。君たちが、アテナを助けてくれた者たちだな？あの時のこと、礼を言おう」
「あっ、いえ」
「建前はいいです」
ゼウスに対しての対応は二人で違う。セルスは恐縮に思い、クウァルは冷たく言った。
「いったい、俺たちになんの用ですか？あんたらと比べてごくわずかな力しかない、俺たち、人間に」
「その言いよう。君は本当にわしら神が嫌いなようだな？」
「すいません」とセルスが謝るのに対し、クウァルは「フン」と顔を背けた。
「いや、かまわんよ。話と言うのは・・・・・今この世界で、我らが戦っている存在についてはもう知っていると思うが、君たちには我らや他の仲間たちと共に、その存在と戦ってほしい」
それを聞いた時、クウァルが「ちょっと待て」と突っかかった。

「これはあんたらが最初にかかわった問題だろ?だったら、最後まであんたらが解決しろよ」
「ちょっと、クウァル」と、セルスがなだめようとする。
「いや、かまわん。確かに君の言うとおりだ。これは我々が知り、今まで我々が対処してきた。だが、いずれやつらの存在は、君たち、人間の世界でも知られていくだろう」
「胡散臭いな。だいたい、あんたら神様さえてこずる奴らに俺たち・・・・・虫けら同然の人間が勝てるのか?」
すると、ゼウスはしばらく間を置いた後、話を切り出した。
「知っているかどうかは知らぬが・・・・・・我ら神は、君たち人間の世界に赴くと、どういう訳かある程度、力が弱くなるのだ」
「どうしてなのですか?」
「それが・・・・・今のところ世界中の誰にもわからぬ」
セルスが聞くと、ゼウスは首を横に振り、それにクウァルがさらに食ってかかる。
「例え力が弱くなるとはいえ、不死であり完璧に近い存在であるあなたがたのほうが、より早く解決できるのでは?」
「そう。確かにそうだ。だが、我々、神が直接、手を下せば、確かに奴らとは互角以上に戦えるだろう。だが、人間は強大な力を持つものに対しては無用な恐怖を覚えやすいし、我らの力は強大すぎるがゆえ、世界に混乱をもたらしかねない。特に、文明が発展している今の人間社会では、な」
不安そうな表情のセルスと、睨むような表情のクウァルは黙り込む。
「それに現世に居続けると我々、神の不死性は失われてしまう。ジェプトやムルグラント国の神々に不死性がないのはそのためだと言われているが、真相はわからない」
「わからないことだらけですね。失礼ながら、あなた本当に神様ですか?」
クウァルの嫌味めいた言葉に、「フッ」と笑う。
「仮に知っていたとしても、私の口から君たちに伝えることはでき

ない。これは君たち、人間が自身の力で知らなければならない『真理』の一つだからな」

ゼウスを睨むようにして、クウァルは「ちっ」と舌打ちした。彼の性格からして十中八苦、断る。そうなると、この場にいる二人はゼウスから神罰が下る。セルスはそう思った。だが、

「いいよ。引き受けてやる」

と言ったクウァルの意外な言葉に、「えっ」と思った。

「そうか。しかし、我々の加護は受けられないので、そのつもりでいてくれないか？」

「俺は神様が嫌いだ。だから、最初から期待してはいない」

心配そうな顔のセルスをよそにゼウスとクウァルは互いに笑うと、クウァルは後ろを振り返った。

「早速、出発しようじゃないか。で、そいつらと戦う拠点は用意しているんだろうね？」

「もちろんだ。もうすぐここに迎えの者が・・・・・・」

と、そこへ「よお～、ゼウス～！！」と大声がした。

「来たようだな、迎えの者が」

ゼウスに連れられて、声がしたほうに来たクウァルとセルスは驚いた。そこには客船と変わりないほど大きな船が、近くに水がないにも拘らず乗り上げていた。

「こ・・・・・これは・・・・・・」

驚くクウァルに、「スキールブラズニル」とゼウスが呟く。

「普段はポケットに入るほどの大きさだが、取り出されると北欧の神々全てが乗れるほど大きな船になるらしい」

その時、「よく知っておられますね」と声がして、船の端から一人の好青年が顔を出した。

「おお、フレイ殿。では、貴公が向かえというわけか」

「ええ。オーディンさまもいらっしゃいます」

と、後ろから「久しいな、ゼウス殿」と、右目に眼帯をした男性が顔を出した。

「オーディン殿か。貴公がわざわざ出向くとは・・・・・・」
「これからの行く末を決める会議。それを開くと言ったのはお主であろう」
「そうだったな。では、乗り込むか」
近くにいたイリスに「ヘラに、後は頼むぞ、と」と言うと、セルスとクウァルを連れて船に乗った。

―※＊※―

「お待ちしておりました」
中に入ると、白いドレスのような服を着た一人の女性が、お辞儀をして出迎えた。
「おお、これはお美しい・・・・・・」
そう言って手を出そうとしたゼウスを、横から出てきた白く美しい手が叩いた。それはなんと、ヘラの手だった。
「ヘラ!?なぜおまえがここに!?」
「あなたの浮気癖が心配で、一緒に行くことにしました」
「しかし、ではオリュンポスは・・・・・・」
「ヘスティアとデメテルに任せてきました」
ゼウスとヘラが言い争いをしている間に、女性は「こちらです」とセルスとクウァルを案内した。通された部屋には、一列に三つずつ椅子が並べられた列が三つ、まるで新幹線の室内のように置かれていた。その中にいくつかには、すでに人が座っていた。
「すごい・・・・・・。北欧の神様が乗る船って、中がこうなっているんだ・・・・・・」
「いえ。この時のためにドヴェルガーの方々が、わざわざ新しく作ったのです」
聞きなれない名前に、セルスは頭に「?」を浮かべた。と、そこへ

「おや、新しい人か」
と椅子に座っていた背の高い美青年が気付いた。
「君たちも『選ばれた』のかい？」
そうセルスに聞く青年をクウァルが睨むと、彼は困ったように頭をかいた。
「とりあえず自己紹介しよう。俺はセリュード。セリュード・クルセイドだ。ケルト国エリウから来た」
差し出された手を、「クウァル・ハークルスだ」と名乗りながら、クウァルが握手した。
「セルス・セオフィルスです。セルスと呼んでください」
「ああ、よろしく。どうやらクウァルには、幻獣の血が流れているようだな」
セリュードの看破に一瞬、二人が驚く。
「ああ、驚かせてすまない。俺も似たようなものだ。妖精族の血が流れている。だからか、相手に似たような力があるとわかるんだ」
「そ・・・・・そうか」
クウァルはそう言ったが、別の国に自分と同じような人が暮らしていたことに、少々の驚きを感じていた。その驚きが冷めやらぬ間、セリュードは後ろの女性に話しかけた。
「グリームヒルドさん・・・・・だっけ？ご苦労さま」
「いえ。私は、自分でやると決めたことをしているだけです」
丁寧に「では」と一礼した後、グリームヒルドはドアを閉めた。
「知り合いなんですか？」
聞いてきたセルスに「いや」と答える。
「この船で知り合っただけだ。俺がいた国には二番目に来たらしいから、出発点に近いムルグラントの人じゃないのかな」
「彼女は最初から、この船に乗っていたのさ」
三人が、新たにした声のほうを向く。そこには、白金の輝きを放つ鎧を身に着けた男性と、ドレスのような服の上に鎧をまとった女性がいた。男性のほうはこちらに歩いて来たが、女性のほうは手に取

っている雑誌に夢中な様子だった。
「俺の名はジークフリート、あそこで本を呼んでいる彼女はブリュンヒルド。俺たちもグリームヒルドもアースガルドから来たんだ」
「アースガルド？どこの国ですか？」と、クウァルが戸惑う。
「人間の世界から見れば、『神界』に当たる世界だよ」
それを聞き、クウァルの顔が厳しくなった。気付いたセルスが慌ててフォローしようと、「あ・・・・・・あの」と言った。
「そろそろ出発の準備が整った頃だろう。この船は水陸両用だからどこへも進める。だから、しばらくゆっくりしてなよ」
そう言うと「ほら、行くぞ」と、まだ雑誌を読んでいたブリュンヒルドを連れて行った。セリュードたちが椅子に座ってしばらくすると、室内にアナウンスが流れた。
〔船内放送をいたします〕
「あの声はさっきの女性、ブリュンヒルドさんだな」と、セリュードが言う。
〔ええ～、次の目的地は～、シャニアク～。シャニアクでございます〕
「そうか。次の目的地は、東洋の国シャニアクか・・・・・・」
クウァルは椅子に座ってそう呟いたが、その約三秒後、
「「「ええ～っ！！」」」
放送の内容が信じられず、三人は飛び上がった。

第４２話　始まりの出会い（後編）

オリュンポスから飛び立ち、海上に着水したスキールブラズニルは、一路シャニアク国へと進路をあわせる。その室内では、セリュードたちが話をしていた。

「まさか、あのシャニアクに次の協力者がいるとは、な～」

セリュードの言葉に、「意外・・・・・・ですか？」とセルスが聞いた。

「意外も何も、あの国は外国から来た人を、自分たちの利益のために利用しかしない。それに、同じ地に住む幻獣・・・・・・いや、あの国では『妖怪』と呼んでいたかな。とにかく、有害無害関係なく目の敵にしているのだよ」

倒したリクライニングシートにもたれかかり、天井を見上げる。しかしクウァルは、厳しい表情をしていた。

「あれ？君の彼氏は、ご機嫌斜めのようだね？」

「か・・・・・彼氏じゃ、ありません！クウァルは、神様とかそういうのが嫌いなんです。自分の中の神様の血のせいで、いじめられたから」

「ああ、わかる、わかる。俺も過去にそういうことがあったから・・・・・」

顔を赤くしたセルスにセリュードは頷いた。この船で彼が気を悪くする原因。セリュードは、それがジークフリートとブリュンヒルドだと見当が付いた。

「言っとくが、あの二人は神様じゃない。ヴァルキリーと言う、神

に仕える兵士のことだ」
「正確にはヴァルキリーは女性のほうで、男性のほうはエインヘリヤルと言う。ヴァルハラにいる限りは不死だが、それ以外ではそれなりにやられる」
いつの間にか、横の通路にジークフリートが立っていた。
「どの道『神界の存在』で、不死身なんでしょう？」
「いや。ヴァルハラでは不死身なんだが、それ以外では普通の人間と同じだ」
その答えに、クウァルは「意外だ」と言う顔をした。
「世界が広いと言っても、不死なのはラグシェ国の神々だけだ。それ以外の国の神は致命傷を負えば死んでしまう。それ以外で不死なのは、アンデッドぐらいのものか？」
「じゃあ、ラグシェ国の神様はアンデッドか。そりゃぁいい」
セリュードが笑うと、慌ててセルスが「しぃ～」と言った。
「気をつけてください。私たちの国の神様は、結構プライドが高いんですから」
「侮辱しようもんなら、権威乱用で神罰を落とす」
「へ・・・・・へえ～、そうなんだ～・・・・・」
クウァルの言葉を聞き、セリュードは青い顔で苦笑いした。
「ケルト国の神様は、そんなことはないのですか？」
「ん？まあ・・・・・呪いをかける奴もいると言えばいるが、その場合、大抵は人間が悪い。とはいえ、ほとんど人間の世界に手出しはしない。力が弱まって妖精になった者もいる、って話だ」
「なるほどね。やっぱ、神様も世界それぞれだな」
話しを聞いていたジークフリートは頷きながらそう呟き、部屋を横切って後ろに行った。
「あの・・・・・どこへ行ったのですか？」
セルスの問いに、「訓練室だよ」とセリュードが答える。
「あそこに、他の協力者もいるんだ。行ってみるかい？」
と、そこへ

〔え〜、もうすぐ〜、シャニアク〜、シャニアク国へ到着となります。必要とあればお客さま方は、準備をして置いてください』
とアナウンスが流れた。その内容にセルスは「準備？」と首を傾げた。
「この船に乗せることになると言うことは、幻獣に対して一定の理解を持ち、なおかつ協力すると言うこと。あの国では、そういう人たちを保護する地域と、追いかける地域があるらしいんだ」
甲板へ行こうとしたクウァルを見て、セルスは「じゃあ」と言う。
「どういう国かよく見てみよう。私の力がその人たちを助けるのに、役立つかもしれないし」
「そうしてくれ。妖精の血を引くとはいえ、俺は完全な魔法は使えないから」
セルスはクウァルを追いかけて、甲板へと向かって行った。

―※＊※―

とある場所にある修練場。他にも数人が鍛錬をしている中、ディステリアと彼を指導するアウグス、見物のクトゥリアもいた。ディステリアは天魔剣を持っており、光と闇の力を使う度傷を追う原因を模索していた。
「協力者集め？」
「ああ。近々、我々の組織に入ってくれる者を集めることになっている」
「そろそろ動き出す、ということですか？」
「いや。顔合わせと訓練が目的だ。スカウトしたての彼らとは連携が出来上がってないし、君が前にも言ったとおり中には素養があるだけで誘った一般人もいる。そんな状態で実戦投入など、死ぬことを命令しているようなものだ」

「なら、巻き込まなければいいじゃないですか」
「言っただろ、人手不足だと。今の状態を維持したまま倒せる敵でもないし、な。それこそ、死にに行くようなものだ」
それはわかる。少ない人数で強大な力を持つ敵が何体もいる場所に行くなど、よほどの実力者でなければ、自ら死にに行くバカでしかない。
「・・・・・前から言っているその敵って、なんなんですか？」
「わからん。ただ、自分たちに都合がいいよう世界が動くよう暗躍している」
「そんなことで世界を動かせるのですか？」
胡散臭そうに聞くディステリアに、「お前は、『世界』を勘違いしてないか？」とアウグスが聞き返す。
「俺が言った『世界』とは、今俺たちが立ってるこの場所が存在する空間じゃない。人々の集まりだ。奴らは長い間社会に潜み、時間をかけて溶け込んでいる。誰にも気付かれず、自分たちの『駒』を揃えようとしている」
「情報を操って自分たちの存在を隠し、誰も知らないうちに武器を手に入れる。兵については特殊のようだが・・・・・・・」
「恨みや憎しみ、負の感情により生まれる・・・・・・・ですか？」
前にユーリから聞いたディゼア・トルーパーについての特徴を思い出す。にわかに信じられないでいたが、あれは人間でもなければ外的要因で改造された動物でもなく、生物かどうかも怪しい。他に判断できる材料がなければ、敵の情報とは言え受け入れるしかない。
「武器の流れについて調べている者もいる。近々戻ってくる予定だ」
「仲間集めのついでに迎えに行く、ですか？」
「どうせ世界を回るんだ。効率はいいほうがいい」
そこを『敵』に攻撃されればひとたまりもないのだが、食えない目の前の男はそこら辺も考えているのだろうか。とそこへ、慌しい足音がした。
「報告！！」

「なんだ？」
「シャニアクに入港許可を求めたスキールブラズニル〈エスペランザ〉が、江戸の艦隊に攻撃されたとのことです」
それを聞いたディステリアは目を丸くし、クトゥリアは肩を落とし、アウグスは頭をかいた。
「そんなバカな！」
「やっぱりな」
「やっぱりなって、わかってたのかよ」
それを無視し、「被害状況は？」とクトゥリアは伝令の兵士に聞く。
「は？・・・・・スキールブラズニルはアースガルド製の船です。現世に存在するいかなる兵器をもってしても破壊はできませんよ？」
「それでも傷は付けられる。そこから重大な事態に陥ることもある。で、どうなんだ？」
「は、はあ・・・・・船は交渉の余地なし、として、とりあえず今乗っているメンバーをつれて帰還するとのことです」
「そうか・・・・・となると、だいぶ出遅れるな」
船に乗っている者のことなどまったく心配していないクトゥリアに、ディステリアは戸惑う。仲間のことなどどうでもいいのか、それともスキールブラズニルの能力を信頼しているのか、果てまた別の理由か。その意図を察することは、今のディステリアにはできなかった。

―※＊※―

シャニアクへの入国を断念したエスペランザは、真っ直ぐ自分たちの本拠内に向かった。その港に入って、しばらく行った場所にある屋敷の中に入るなり、セルスは周りを見渡した。
「うっわ～。広～い」

「当然だろう。小さな島でも、俺たちにとっては広いんだから」
「そうじゃなくて、この建物の中が広いって言ったの」
クウァルは「はいはい」と、小馬鹿にしたように言って、荷物を部屋に運んだ。スキールブラズニルから降りてしばらく行った先にその建物はあり、入り口の門からさらに行った所に、その屋敷は建っていた。屋敷の部屋から望む庭は広く、辺り一面に植木や花々が植えられていた。
「うっわ～。すごい」
「おまえ、さっきからそればかりだな」
突然、横でしたクウァルの声に、セルスは「ギャア～！！」と声を上げた。
「バカバカバカ～！何、女の子の部屋に勝手に入って・・・・・・」
「お前こそ何を言ってるんだ！お前の荷物を持たせたのは、おまえ自身だろう！？」
そう言われて「あっ、そっか」と納得した。クウァルは「全く」と呆れながら、セルスの荷物を下ろした。
「しばらく時間もあるだろうから、荷物を置いたらこの屋敷を回ろうと思う」
「あっ、私も行く」
断るのも面倒だったので、「はいはい」と二つ返事で答えた。廊下を歩いていると、
「やあ、セルス、クウァル」
とセリュードの声がしたが、彼の後ろには二回りほど大きい大男が歩いていた。
「そ・・・・・その、おっきい人は？」
セリュードの後ろにいる大男を恐る恐る指差すセルスに、セリュードは「あははは」と、引きつった笑いを見せた。
「彼はセイクリト。前は赤枝の騎士団に配属されていたんだ。それもご丁寧に敵に洗脳された上に、クーフーリンとまで名乗らされてね」

「おかげで本物にえらい目に合わされましたよ」
そう言って大男、セイクリトが頭をかくと、「よう」と声がした。
全員がそちらを向くと、天魔剣を腰に携えたディステリアが立っていた。
「あっ、久しぶり」
「久しぶりだな・・・・・名前、なんつったか？」
「セルスだよ。泊めて上げたのに忘れないで」
「で、クウァル。神様嫌いのお前が、よく協力する気になったな」
「あっ、そっちは覚えてるんだ。っていうか無視！？」
怒鳴るセルスを「まあまあ」とセリュードがなだめる。そんな彼らに近付いているのはクトゥリアだった。
「話もいいが、そろそろ時間だ。広間でメンバーの顔合わせと行こうじゃないか」

―※＊※―

屋敷の広間から奥に行った所にある、円柱状の突き当りのモニュメントの前に、クウァルたちはやって来た。そこにはクトゥリアを初め、まだ会ったことのない人たちに加え、狼男や人魚、烏天狗までもがたくさんいた。
「さて、現時点でのメンバーがそろった所で、各自簡単な自己紹介をしてもらおう。まず、誰からする？」
クトゥリアが促す。しかし、誰も自己紹介しようとはしなかった。
「全く、仕方ないな・・・・・おっと、まずは私からしなければならないか。これは失礼」
頭をかきながら苦笑いすると、辺りから笑いが聞こえて来た。その後、自己紹介をはじめた。
「俺の名はクトゥリア・クトゥガスター・トレップ。ここでの総司

令官をやっている。ややこしいからクトゥリアと呼んでくれ」
その後、右の男が「よく言うよ」と言った。
「俺は、アウグス・フォン・ホーエンハイムだ。医者がてら、魔術師をやっている」
「俺はパラケル。一端の情報屋だ。と言っても、本当の姿は情報専門の諜報員だが、な」
そのまま笑うと、「そうだったのか」と声がした。声の主は、アウグスを見つけた時に会った少年、ユーリだった。
「じゃあ、次は君。どうぞ」
突然のクトゥリアの言葉に、「え・・・・・・えっと」と戸惑った。
「・・・・・ユーリ・ハンスヴルストです」
「あれ?さっきと違って落ち着きがないな?」
クウァルが首を傾げると「ほ・・・・・ほっといてください!!」と怒鳴った。
「まるでガキだな・・・・・」
「な・・・・・なんだって!?」
ユーリは怒鳴ったが、すぐクトゥリアが「ほらほら、やめんか」と治めた。
「じゃあ、ユーリくんをガキと言った君。自分の名前と年齢を言ってみろ」
しばらく黙っていたが、皆の視線が集中しているのに気付き、「次は俺かよ?」と苦々しく呟いた。
「クウァル・ハークルスだ。年は16」
「あっ、俺と同じだ」
思わず口を挟んだディステリアをクウァルが睨んだが、それに怯む様子がないため溜め息をついた。
「はあ、もういい・・・・・」
「?何が?」
「では、次はクウァルくんの自己紹介の腰を折ったバカ弟子から」
「バカ弟子!?」

ひどい、と言い返しそうになったが、クトゥリアの性格上流されるのがオチなので、気にかけないようにする。
「ま、いいか。俺はディステリア。生まれも育ちも知らないが、物心付いた時はイグリースにいた。今はアウグスさんの所で修行中の身だ。以後、お見知りおきを。っと、自己紹介なんてやったことないから、変でも悪く思わないでくれ」
「いやいや、十分だって」と、呆れた様子で狼男が呟いた。
「えっと、私はセルス・セオフィルス。クウァルの幼馴染で、生まれはラグシェ国です。アテナさまの頼みでクウァルと一緒に来ました。頼りないでしょうが、よろしくお願いします」
「アテナじゃなくて、浮気癖の自称大神の頼みだろ」
クウァルの爆弾発言に誰もが凍りつく。一気に張り詰めた空気を破るよう、セリュードが気まずそうに咳払いした。
「セリュード・クルセイド。エリウで騎士をやっていた。こうして呼ばれはしたが未熟者であるのに変わりはないから、お手柔らかに」
「俺はセイクリト。色々あってここで世話することになった。連中にはかりがあるから、足手まといにならないよう鍛えるつもりだ」
最後に「よろしく」と言った後、「俺の番だな」とディステリアに突っ込みを入れた狼男が言った。
「俺はロウガ。人間は信用できないが、あのほうに選ばれたからには、贅沢は言わん」
「私はメリス。この組織の医療班を担当しています。人魚だからって、陸では動けないってことは無いです。この通り」
そう言って、浮いている下半身を振って左右に移動してみると、全員が驚いた。
「浮遊呪文の応用です」
「まあ、そうなんだろうが・・・・・人魚って、地上で一定時間以上活動すると、泡になって消滅するんじゃないのか？」
「それは童話と代償を払って人間の姿になる薬を飲んだら、の話」
目を丸くしたクウァルにメリスが声を上げる。

「私はそのメカニズムを解明し、人間から人魚に戻る際泡にならないで済む方法を見つけたの。おかげで例の薬で人間社会に潜り込もうっていう人魚が増えて、海の王族から注意されてたの」
「海の王族？・・・・・・と言うと、ポセイドンか？」
「トリトンです」とメリスが答えると、「惜しいな」とクウァルが呟いた。
「よ～し、次は俺だな！俺は・・・・・・」
「クーフーリン！？いたのか！？」
セリュードの素っ頓狂な声にクーフーリンは意気消沈した。そんな彼を半ば無視して、彼の妻のエマー、戦友のファーディア、ジークフリートとブリュンヒルドが自己紹介した。
「まあ・・・・・今は、こんなところか。これから先、協力者を増やしていくつもりだからな」
「後は、君たちで交流を深めてくれ。我々は、会議を行なう」
「じゃあ、自由解散」
そう言ってクトゥリア、アウグス、パラケルが去っていくと、ディステリア、クーフーリン、ファーディア、ジークフリート、セイクリトは修練場に行き、セルス、クウァル、セリュード、ブリュンヒルド、ロウガはそれぞれ話をし、ユーリは一人別行動を取った。

第４３話　静かな再会

それから数日。本拠地に集められた戦士たちは決められた修練時間を終えると、それぞれ自由に過ごした。ある者はさらに己の技を磨き、またある者は出来る範囲で島を散策し、またある者は自らの体を休めていた。こういう訓練を受けると思わなかったセルスは、真っ先にダウンしている。

「島を見て回ろうと思ったのに・・・・・・アウグスさんの鬼～～！クトゥリアさんの詐欺師～～！」

「俺はあいつらのほうが正しいと思う」

ベッドに突っ伏していたセルスは、「なんでよ」と体を起こす。

「お前の中にある魔術の素養・・・・・・俺が思っている以上に高いかも知れない。だとしたら、おまえ自身がそれに潰されないよう鍛えると言うのは正解だと思う」

「でも、あそこまできつくやらなくても・・・・・・」

「魔力制御の集中（コンセイトレイション）だろ？俺は高い筋力の制御だ」

ベッドの上に倒れたセルスに、左腕を掴んだクウァルが愚痴るように呟く。

「制御って・・・・・いつもやってるじゃない」

「押さえた上でな。俺が今やらされているのは、ある程度発揮した上での繊細なコントロールだ」

「うわ～～、ハードル高そ～～」

「実際高い」と、両膝の上に肘を乗せる。

「今までは抑えることしか考えてなかった。アウグスさんたちは、

俺がキチンと制御できるようにしようとしている」
「でも、それって・・・・・・」
今まで嫌っていた自分と向き合うことになる。そう思ったセルスに、クウァルは笑顔を見せる。
「大丈夫だ、それはもう吹っ切れている。じゃないと、修行すら始まってないだろ」
「そっか・・・・・・」とセルスが呟くと、クウァルは立ち上がる。
「じゃあ、俺はもう行くよ。今日掴んだイメージを忘れないうちに反復しとかないと」
「そっか。じゃあ、私も・・・・・・」
「暴発を抑えるため、自主連は控えるよう言われてるだろ。しっかり休め」
「・・・・・・うん」
力を抜いて微笑んだセルスを見ると、「じゃあな」とクウァルは部屋を後にした。

―※＊※―

ユーリは、当てもなく本拠地の中を歩いていた。ふと気が付くと、見知らぬ通路に来ていた。
「（また・・・・・・か・・・・・・）」
別に驚くまでもなく、ただ冷静に周りを見渡した。訓練が終わると本拠地の中を当てもなくさまよい、気が付くと全く知らない場所におり、さらにまたしばらくさまようと、いつの間にか知ってる場所に出る。ここ一週間、暇をもてあましている間はずっとそうやって過ごすことになっていた。
「（こんなつまらないことに、一日の三分の一を浪費する。これじゃあ・・・・・・ミリアを守れなくて、当然か・・・・・・）」

そう考えて、自嘲する。今の自分はとてつもなくおかしい。これでは、まるで。

「・・・・・道化・・・・・・道化の騎士なんかじゃなく、そのまま道化じゃないか・・・・・・」

そんな自分がおかしくて、「ハハハ・・・・・」とつい冷たい笑いをしてしまう。他の誰でもない、自分自身に。

「ル～ル・・・・・ルル・・・・・・」

そんな時、どこからか歌が聞こえてきた。その歌声は、ユーリには聞き覚えがあった。

「ま・・・・・さか・・・・・・」

そんなことはありえない。そう思いつつも、心のどこかに期待があった。そして、確信も。聞こえてくる歌声を頼りに、通路を進んで行くと、ドアが開いている部屋に指しかかった。

「（そんなはず、絶対にない。でも、もしかしたら・・・・・・）」

期待と不安と否定が混ざり合う表情で、部屋の中を覗く。すると、窓際に置かれたベッドの上に上半身を起こした、一人の少女がいた。窓の外を見て歌を口ずさむ、その少女こそ。

「ミリア・・・・・」

その声が聞こえたのか、ミリアは歌うのをやめた。そしてゆっくり、ユーリのほうを向く。しかし。

「あれ・・・・・？誰もいない・・・・・・」

そこには、ユーリの姿はなかった。

「じゃあ、今の・・・・・」

突然、「ミリアちゃん！」と呼ばれたほうを向くと、カルテを持ったメリスが浮いていた。

「だめよ、ミリアちゃん。あなたの他に患者はいないけど、ここは病室なんだから静かにしてもらわないと」

「はーい。ごめんなさい」

ペロッと舌を出したミリアに、「わかればよろしい」と言うと、ベッドの側に椅子を置いて座った。

「あれから一週間。検査でも異常なしだし、体調も良好。もう退院しても問題ないわ」
「そうですか。ありがとうございます」
「いいえ、どういたしまして。私たち、医療班は、怪我人の治療が役目だから。でも・・・・・・」
暗い表情になるメリスに、「でも?」と、ミリアが聞いた。
「助けた命は、また戦場に向かっていく。私たちの役目は命を救うことなのに、その命を再び危険に向かわせている・・・・・・」
「・・・・・・複雑な気持ち・・・・・・ですよね」
「ええ。でも、これは・・・・・・」
「世界の存亡をかけた、『戦争』・・・・・・だ」
声がしたほうを向くと、入り口にはフレイが立っていた。だが、なぜか左腕は、入り口の壁に隠れている。
「えっと・・・・・・あなたは・・・・・・?」
「アースガルドから来た、フレイだ」
メリスの問いにフレイが名乗ると、メリスとミリアも自分の名前を言った。
「確かに、医者は患者の命を救うのが役目だ。本来なら、怪我の治った患者が再び戦地へ向かうことに、大きな抵抗があるだろう。だが、これは戦争だ。しかも、和解の可能性がゼロ。敵を滅ぼすか、滅ぼされるか。そうでなければ、終わらない戦い。出し惜しみすれば、確実に負ける・・・・・・」
あまりに重い言葉に、ミリアは絶句する。
「皮肉なものだな。普段、我々が愚かだと吐き捨てる人間と同じ行為を、この世界を守るために我々が行なうということは・・・・・・」
交渉の可能性を真っ向から否定し、敵対する者を全て徹底的に滅ぼさない限り、戦争をやめようとしない人間。相手が違えども、この組織〈ブレイティア〉は、同じことを行なおうとしている。その重みが、その場にいる全員にのしかかった。

「・・・・・ところで・・・・・・どうしてさっきから、左腕を隠してるの？」
メリスが質問すると、なぜか左腕が暴れだした。
「ああ。これはな・・・・・おっと、ええい、暴れるな！」
フレイが右腕をドアの枠にかけ、一気に左腕を引っ張ると、ユーリが捕まっていた。
「放せ！おい！」
「あっ、ユーリ」
ミリアに名前を呼ばれると、さっきまで暴れていたのがピタリとやんだ。
「あっ・・・・・・ミリア・・・・・・えっと・・・・・・その・・・・・」
「ちっ、男だろ。黙って行って来い！」
フレイに押し出されたユーリは、「うわっ！！」と叫び、つんのめりそうになったがなんとか踏みとどまって、ミリアの前に立った。
だが、いざ向かい合ってみたものの、二人は顔を赤く染めて高いに顔を背け合っていた。
「やれやれ。メリス、俺たちはしばらく、席を外しておこう」
「そ・・・・・・そうね」
メリスはそう言うと、「ごゆっくり」と言い残して、医務室を後にした。後に残ったミリアとユーリは、まだ黙って顔を背け合っていた。
「あの・・・・・・その・・・・・・」
やっと口を開いたが、その後の会話が続かなかった。それからしばらくして、
「あのっ！」
互いにやっと声を出したが、二人とも恥ずかしさにまたすぐに黙り込んだ。
「（なんと言えばいい・・・・・・やはり、謝るべきか・・・・・・？）」

「（ユーリに心配かけちゃったからな～。やっぱり、謝る？）」
しばらく互いに思案しあうと、やっと意を決した。
「ミリア、ごめん・・・・・・」
だが、それをさえぎり「ユーリ！」と声を出したミリアに、ユーリは嫌われたのかと不安になった。
「やっと・・・・・・会えたね・・・・・・」
ミリアの意外な言葉に目を見開くが、すぐ笑って「ああ」と答えた。

―※＊※―

それからまたしばらくすると、ユーリはミリアのベッドに座っていた。
「あの時はごめん、ミリア」
「えっ？なんで謝るの？」
「えっ・・・・・・その・・・・・・お前が異端狩りにさらわれた時、助け出すことができなくて・・・・・・」
すると、ミリアは笑って「気にしてないよ」と答えた。
「だってユーリは、異端狩りにさらわれた人たちを助けたんでしょ？〈道化の騎士（ロリス・リッター）〉として・・・・・・」
「知ってたのか！？」
驚いて振り向くユーリに、「うん・・・・・・まあね・・・・・・」と答える。
「じゃあ・・・・・・お前が奴らにさらわれたのって・・・・・・」
「あっ、ううん。気にしないで」
それをさえぎって、笑顔になる。だが、ユーリにはその笑顔に見覚えがあった。ミリアが自分を心配する時、何も悟られないようにするためにする、いわば『笑顔の仮面』。それを向けられた時、ユーリは胸が詰まる思いがした。

「あの時さらわれたのは、私にも原因があるんだし・・・・・・」
そう呟いて、服の上から胸に下げているペンダントを握る。
「それに・・・・・私のために捕まった人たちを見捨ててたら、私はあなたのことを見損なってたと思う」
「奴らの策略にかかって、捕まった人たちからは離されたんだが、な」
力なく「ハハハ」と笑うユーリに、ふと、悲しそうな視線を向ける。
「あの時・・・・・パラケルが教会に潜り込んでくれていて、本当に助かったよ」
「そうだったの・・・・・・結局、あの人っていったい、何者なんだろう」
ユーリは、顔合わせの時にパラケルが言ったことを話した。
「そうだったんだ・・・・・・。じゃあ、後でお礼を言わないとね・・・・・？」
ユーリが「なんで？」と聞くと、ミリアが笑顔になった。
「ユーリを助けてくれて、ありがとう。・・・・・ってね」
フッと笑って「そうだな」と呟くとユーリは、ベッドから立ち上がった。
「そろそろ、行かないと」
「・・・・・どこに・・・・・行くの・・・・・？」
ミリアがひどく弱々しい声だったので心配そうな顔をしたが、ユーリはすぐに優しく笑った。
「実家・・・・・というより、俺が使っていた家だよ」
すると、「ああ。あそこね」とミリアは頷いた。
「俺が使っていた物が置きっぱなしだと、いつまで経っても新しい借主が借りられないだろ」
それを聞いて、ミリアは「あははは。ユーリらしい」と笑った。
「・・・・・私も行く」
「しかし・・・・・」
ユーリは言いかけるが、そこで言葉を切った。今の彼女はどこかい

つもと違う穏やかな雰囲気がただよっていた。
「あの時・・・・・言ったよね。いつかあなたに、私が持つ魔力を得るに相応しい実力と覚悟が備わったなら、私はあなたに仕えるって。それに・・・・・・・」
「それに・・・・・・・？」と、ユーリが聞く。
「・・・・・・私も・・・・・・あなたが好きだから・・・・・・」
突然の告白に、ユーリは体全体に衝撃を受けたような感覚がした。
だんだん、鼓動が早くなり頬が赤くなる。それはミリアのほうも一緒だった。
「・・・・・・わかった。でも、無理はするなよ。出発はまだだし・・・・・・」
ミリアは「うん、そうだね」と頷くと、ベッドに寝転んだ。

―※＊※―

「感動の再会を果たした感想は？」
医務室から出たユーリが廊下を歩いていると、声をかけられた。
「パラケル。別に、感動の再会って程じゃない」
「なんだか冷たいね～」と言って、パラケルがユーリの側まで歩いて来ると、二人はそのまま歩き出した。
「パラケル・・・・・・・ミリアを助けてくれたのって・・・・・・・もしかして・・・・・・」
「いや。彼女を助けたのは、旅好きの海洋神マナナン・マク・リール。今まさに、旅の真最中さ」
「また・・・・・・旅に出たのか・・・・・・・？」
戸惑い顔で聞くユーリに、「まあ・・・・・・・な」とパラケルは言った。
「それにただの旅じゃない。いろいろな国の情報収集も兼ねている

んだ」
ふと、ユーリが立ち止まると、それを見たパラケルが、「どうした？」と聞く。
「誰がミリアを助けてくれたかは理解した。だが、まだ理解できてないことがある」
「ほう。それはなんだい」と前に振り返りながら言うパラケルに、ユーリは聞いた。
「あんたはなぜ、この組織を立ち上げたんだ？」
すると、パラケルは笑ったまま、ゆっくりとユーリのほうを向いた。
「悪いが・・・・・まだ俺のことを他人に知られる訳には行かないんだ。まあ、時が来たら話してやる。今はそれで簡便な」
そう言って右手を上げると、そのまま通路を歩いて行った。だが、しばらく行くと「あ、そうそう」と振り向いた。
「ミリアちゃんにあんまり心配かけさせるなよ。さっきので、だいたいの気持ちはわかっただろう」
そう言い残すと、再び通路を歩いて行った。

第４４話　予想外の遭遇

屋敷の地下に設けられた格納庫。そこには何やら、普通の倍ほどの大きさがある戦闘機が、７機ほど置かれており、それを一人の作業服姿の男性が見上げて、睨んでいた。
「どうだ？〈ファイター・フライヤー〉の整備状況は？」
「ああ、クトゥリアさん。ぼちぼち、って所ですかね」
首にタオルをかけ、上下ともにつなぎを来た男性、ディックが答えた。
「これに、一小隊が乗る訳ですから、大きさもそれほど用意しなければならない。さらに高い出力と耐久度を両立させるのが、どうにもうまくいきません」
「うーん。やはり、人間の科学力では幾分、無理があるだろうな」
「はい。だれか高い技術力を持つ人が手を貸してくれれば、あるいは・・・・・・」
「そのつてがあるにはあるが・・・・・・」
一瞬、ディックが期待に満ちた表情になる。
「ほ・・・・・本当ですか！？ぜひ、紹介してください」
するとクトゥリアは、「うーん」と悩みだした。
「どうして悩むんですか。まさか・・・・・・」
「そうだ。〈ミスティック・オーバー・テクノロジー〉。君が嫌う、妖精たちの技術だ」
それを聞いたディックは、苦虫を噛み潰したような顔になる。
「〈スキーズブラズニル〉や〈ウェーブ・スウィーパー〉に使われ

ている技術を取り扱えるのは、それを作った神か、もしくは妖精族しかおらんのだ。だから、考えてくれんか・・・・・・？」

ディックはとうとう、「はぁ・・・・・・仕方ない」と言った。

「分かりました。背に腹は替えられぬ、と言いますし。しかし、人間には妖精たちの技術を扱えるほどの、天才的技術力と理解力を持った者はそう多くありません。いったい、どうする気なのです」

「それについては考えてある。すでに世界中から、技術力に長けた神や妖精を幾人か連れて来ている。彼らを技術スタッフとして手伝わせたらどうだろうか？」

「・・・・・・わかりました。しかし、出来ることなら、彼らの作る回路や部品を、もう少し簡単にしていただけないかと思っています。彼らの技術力はあまりにも高すぎて、我々の手では量産は愚か、改良・修理・開発すら出来ません」

「いや、その辺なら心配いらん。協力者たちを連れてきたあの船に使われている動力だが、あれは人間界で使われている『魔科学』の回路を、マナの循環型に改良した物らしい」

しばらく黙って考えると、「やはり無理だ」と答えた。

「あの回路は、我々の現在の科学力の結晶だ。つまり、今の科学力ではあれ以上の物は作れない。我々ではお手上げなのさ」

「だから、この際に技術交換を・・・・・・」

「その技術を我々が理解し、吸収できると言う保障がどこにあるのかね？それとも・・・・・・我々に絶望しろと？」

「バカを言っちゃいかん」と、クトゥリアが言う。

「私は世界中から、優秀な技術スタッフを引き抜いてきたつもりだ。君たちなら、神々の技術を吸収することも可能だと・・・・・・」

半ば睨むように、ディックはクトゥリアを見つめた。

「もし出来なければ・・・・・・そのスタッフはお払い箱ですか？」

「そうならないように、慎重に見定めたつもりだが・・・・・・もしそうなった場合は、責任を持って新しい仕事を見つけてやるよ」

しばらく黙っていたが、やがて「いいだろう。お前を信じよう」と

答えた。

―※＊※―

ファンラス首都の近くにある町、パラーナの近くに一隻の船が着地し、その船から一人の少年が飛び降りた。
「パラケル。わざわざ、送らなくてもよかったのに・・・・・・」
船のほうを見上げて言う少年に、「仕方ないだろ」と一人の男性、パラケルが顔を出した。
「イェーガーはまだ完成していないし、完成していたとしても君には操縦は無理だ。いや、ミリアちゃんなら可能かも・・・・・・」
彼が話しているのは、かつてこの町で〈道化の騎士（ロリス・リッター）〉として活動していた少年、ユーリだった。
「・・・・・ミリアが幻獣・・・・・・だからか・・・・・・？」
不機嫌そうな顔のユーリに、「嫉妬か？」と聞く。
「まさか・・・・・・あいつがなんだろうと、ミリアはミリアだ・・・・・」
それを聞いてパラケルは「そうか、お前は強いな」と呟き、フッと笑った。
「そんなことを聞いて、どうするつもりだったんだ・・・・・・？」
不審そうに聞くユーリに、「いや、別に」とだけ答えた。しばらくした後、ユーリは自分が使っていた家に歩いて行った。それを見送ると、パラケルは後ろに視線を向けて話しかけた。
「それで・・・・・・そんなことを知らなかった君は、いったい何を恐れているんだい・・・・・・？」
後ろから音もなく出てきたのは、不安そうな表情のミリアだった。
「どうして・・・・・・あんなことを・・・・・・？」
「・・・・・聞けば拒絶されるんじゃないか・・・・・・と、不

安そうにしている誰かさんを放って置けなかったから・・・・・・かな」

得意げに言うパラケルに、ミリア無理にでも笑おうとする。

「お～っと、作り笑いはなし、な」

振り返ったパラケルは、わざとらしく手を上げて止めた。

「手伝いに行ってやったらどうだ。一人で生活できるほどの荷物、一人で運ぶのは大変だろう」

「・・・・・・私が・・・・・・幻獣だから・・・・・・人間じゃ・・・・・・ないから・・・・・・・」

辛そうな表情のミリアに、「そうじゃないだろう」とパラケルが言う。

「お前だってあそこで暮らしてたんだ。お前の使っていた物だってあるだろうよ。さっさと行って、取って来いよ」

「でも、私は・・・・・・・」

「そう照れるなって。政治が不安定だったあの時勢、同居なんていくらでもあっただろうよ」

「・・・・・・ち・・・・・・違うよ。私、あそこに住んでいた訳じゃないの・・・・・・」

それを聞き、二人は顔を見合わせた。

「私が住んでいたのは、ユーリの家の隣。ユーリの家にはちょくちょく行ってたけど、同居って程でもないわ」

それを聞いた二人は、この引越しには倍の人手が必要だと言うことを悟った。

「あ～・・・・・・・・・・わかった、手伝ってやるよ。荷物と言っても、それほどないんだろ？」

「あ、いえ・・・・・・・・・確かにそんなに多くないけど・・・・・・・それに、私には幻獣の力があるし・・・・・・」

一瞬、暗い表情になったミリアに「いや」と、アウグスが話しかける。

「――――幻獣ヴィーヴルの力に目覚めたとはいえ、それはまだごく

一部に過ぎん。無理をさせる訳には行かない」
「・・・・・で・・・・・・でも・・・・・・」
言葉に詰まるミリアに、「いいって、いいって」とパラケルが言う。
「下手にまだ慣れてない力を暴走させて、怪我したら大変だし、騒ぎになったら引越しどころじゃない」
「世界政府に危険視される恐れもあるし、それ以前に奴らに感づかれる恐れがある」
「・・・・・・あっ」と、ミリアが呟く。
「俺たちの存在は、まだ世間に知られるべきではない。だが、同時に奴らの動きは掴んでいなくてはならない。案外、難しいんだよ」
力なく笑うパラケルに、ミリアは戸惑いのようなものを感じた。
「（この人が心配してるのは、私のこと？それとも、組織のこと？・・・・・・・・・わからない）」
戸惑うミリアに、「ほら、行くよ」と、パラケルは優しく肩を叩いた。

―※＊※―

数ヶ月ぶりに訪れた我が家。最初にアウグスから拠点のことを聞いた時に、荷物はできるだけ運び出していたので、ユーリが使っていた家の中に残っていた物は、持ち運びに苦労しない小物がほとんどだった。
「アウグスから拠点のことは聞いていたから、前もってできるだけ運んでおいて正解だったな」
使っていた机や、〈道化の騎士〉の衣装や生活服をしまってあるクローゼットなどは、〈エスペランザ〉で〈名も無き島〉に渡る時に、運び出していた。だから今回の引越しは、思ったよりも少ない荷物で済んだ。とは言っても、戻って来るとは夢にも思っていなかった

ので、ティッシュや小物類など、次の借主が独自の判断で処分できる物しか置いていなかったのだが、彼はここを発つ時に肝心なことを忘れていた。

「・・・・・・大家さんにここを出ること、言ってなかった・・・・・・」

そのため、この家の家主はユーリが家出、もしくは異端審問間にさらわれたミリアを助け出すために出ており、すぐに戻って来るだろうと思っていたので、そのままで置いていてくれていた。

「（・・・・・・あの大家さんには・・・・・・悪いことしたな・・・・・・）」

意気消沈して「はあ」と、息をついたその時、突然、家の壁が爆発し、ユーリは外に放りだされた。

「くっ・・・・・・なんだ、今の爆発は!?町中で爆弾の実験でもしているバカがいるのか・・・・・・？」

そう言って家のほうを振り向くが、その壁にはとてつもなく大きな穴があいてしまっていた。

「（・・・・・・大家さん・・・・・・ごめんなさい～～～！！！）」

心の中で謝っていると、何者かにいきなり首を捕まれて投げられた。通りの石畳の上に落ちたユーリは、すぐに体を起こして、自分を投げた相手を見た。

「何者だ!?」

「我が名はガレゼーレ。我が主、ヴォルグラートさまの命により、貴様の命、貰い受ける」

相手はそう言うと同時に、両腕の長い爪を振りかざして襲いかかってきたので、ユーリはすぐさま特殊な魔法で装備をしまっている小物を手で掴んだ。有事の際に備えてアウグスから手渡されていたアクセサリー。そこから発せられた光が彼を包み込み、ガレゼーレは思わず突進をやめて腕で目を覆った。光が収まった時には、彼は『道化の騎士』の装備一式を身につけていた。

「それが噂の『道化の騎士（ロリス・リッター）』か。ラスプの部隊を散々、邪魔したらしいな・・・・・・？」
「部隊・・・・・・だと？では、教会は・・・・・・」
「そうだ。貴様らが恐れていた『恐会』軍は、我らの傘下にあったのだ」
それを聞いた途端、恐会の聖騎士が放った紅蓮の炎に、家族が焼かれていく様子が蘇って来た。次の瞬間、ユーリの頭の中で何かが弾けた。
「・・・・・・貴様ら・・・・・・許さない！！」
叫ぶと同時にユーリの体から、凄まじい魔力がほとばしった。
「・・・・・・報告より魔力が強い？いや、それでも荒いことに変わりはない」
「何をわけのわからないことを！！」
怒りのままに突っ込むユーリ。それが失敗の始まりと気付くのは、だいぶ後になってのことだった。

―※＊※―

その頃。強い魔力を〈エスペランザ〉で待機していたパラケルが感じ取る。船室で読んでいた本にしおりを挟み、椅子から立ち上がって窓から外を覗く。
「この気配は、ユーリか・・・・・・！？」
だが同時に、彼の心が怒りに満ちていることに気付いた。
「（魔術師の力が覚醒した。だが、心は怒りに満ちている。このままでは・・・・・・）」
ユーリの心が、引き出された魔力に引き込まれることを危惧したパラケルは、急いでアウグスの携帯に電話をかけた。
「アウグスか？今、厄介なことになってるぞ」

《ああ、気付いた。もっとも、俺たちより早くミリアが気付いてな。とっくに、そちらに向かってる》

―※＊※―

一方のアウグスは、携帯を片手に走っていた。
「お前も気付いたということは、近くにいるのか？」
《いや、俺は船だ。あいつが使っていた家には、あいつ一人だ》
それを聞いたアウグスは、「なっ」と顔色が悪くなった。
「バカ野郎！！なんのために四人一組（フォーマンセル）になってると思ってるんだ！？」
《えっと・・・・・現段階で俺たちの組織の存在が、世間に出ることを防ぐため・・・・・か？》
「それもある。が、本来の目的は別にあるだろう！」
しばらくの沈黙の後、《あっ》と声を出す。
「チームワークを磨かせ、いざ敵部隊と遭遇したときに各個撃破できるようにするため。もしくは・・・・・・」
《技術が未発達な者を教育するため・・・・・だったよ。くそっ、俺としたことが・・・・・》
「お前・・・・・。最近、気が抜けているんじゃないのか・・・・・？クウァルとの模擬戦でやらかしたらしいじゃないか」
《ばっ・・・・・あれは・・・・・緊張している奴らをほぐそうと・・・・・》
「なら、そういうのは時と場合を考えてくれ。いざ戦う時に・・・・・」
《わかった、わかった。すぐにでも気をつけるよ。じゃあな》
パラケルは、アウグスが《おい、まだ話しは・・・・・》と言いかけているのも聞かず、電話を切った。その後、黙ってうつむくと、

突然、自分の両頬を思い切り、パンパンと叩いた。
「ああ言われたからには、こちらもしっかりしないと、な・・・・・・」
先程とは打って変わっての真剣な目つきになると、パラケルは〈エスペランザ〉のブリッジに急いだ。

第４５話　覚醒する力

一方、ユーリは苦戦を強いられていた。ガレゼーレはスピード・パワー・防御力、どれをとっても人間離れしており、普通の人間である聖騎士としか戦ったことのないユーリには、捕らえることができなかった。

「（くっ・・・・・・なんて速さだ・・・・・・）」

しかも彼は、自分に覚醒した魔術の力を使いこなせない上に、覚醒したことにすら気付いていなかった。

「くっ・・・・・・でえい！！」

チャンスを見つけて反撃に移ってもその攻撃はかわされ、さらに別のほうから爪で突く連続攻撃をくらってしまっていた。

「・・・・・・く・・・・・・そ・・・・・・」

謎の敵が作り出したディゼア兵。それが化けた聖騎士に負けて以来、ユーリは特訓に励み、かつての頃と比べて力をつけた。しかしそれでも、目の前にいる敵を倒すまでにはいたっていなかった。

「（・・・・・・まだ・・・・・・こうも力の差があるとは・・・・・・）」

「苦しめ！泣き叫べ！悲鳴を上げ、もがき苦しめ！貴様はそれ意外、何もできやしない！！」

その連続攻撃に手も足も出ないユーリ。ついには、爪の一撃を腹にくらってしまった。だが、飛ばされている空中で敵を睨むと、地面に足をつけ、踏みとどまった。

「俺は・・・・・俺は・・・・・・俺は・・・・・・！！」
叫ぶと同時に突っ込んだユーリのサーベルを、左腕で防いだガレゼーレは、まだ向かって来る力が残っていたことに目を見開いた。
「（まだこんな力が・・・・・・！？）」
「俺は死ねない。生きて・・・・・必ず帰る！！あいつの所へ！！」
その気迫に一端は押されそうになったガレゼーレだが、激しく息が切れ、簡単に押し返されるユーリを見て、この状態は長くは続かないと悟った。
「そうか。だが、残念な報せだよ。君のその思いは・・・・・叶わない！！」
左腕を物凄い速さで振ってユーリの武器を弾き、がら空きになった体に、ムチのようにしならせた右腕を叩きつけた。空気を切る音の後に肌を叩く音が連続で響き、体を鈍い痛みが襲った。
「・・・・・ぐ・・・・・あ・・・・・」
意識を失いそうなユーリに、まだだと言わんばかりに、今度は上げた右足を彼の頭に叩きつけた。
「・・・・・がっ・・・・・」
偶然、素顔を隠す仮面がヘルメットの代わりとなって衝撃を和らげたが、今の一撃で仮面が砕けてしまう。地面に落ちたユーリに止めを刺さんと、右足を上げてかかとから落とそうとした。その時、
「やめて！！」
護身用のナイフを抜いたミリアが切りかかる。上げていた右足を曲げ、その一撃を真正面から左腕で受け止めた。
「なんだ、小娘・・・・・・？」
「ユーリから・・・・・離れて！！」
相手に見えないように、左袖に隠していたナイフを振る。しかしそれを、首をありえない角度までのけぞらせてかわし、ミリアが驚いた隙に、右足をしならせて彼女を蹴り飛ばす。ミリアは建物の近くに落ち、地面に落ちたナイフも踏み降ろした右足で砕かれてしまっ

た。
「フン、物騒な小娘だ」
体を起こして睨みつけるミリアを見て、ガレゼーレは再び「フン」と笑った。
「聞いた話によると貴様、幻獣らしいな。なぜ人間のような気配しかしないかわからないが、そのおかげで力の使い方を忘れたようだな・・・・・・」
「力の・・・・・使い方・・・・・・？」
目を見張って戸惑っていると、ガレゼーレはニヤリと笑ってミリアに近づき始めた。
「俺が思い出させてやろう。ただし、その時に自我を保っているかどうか、保障はできないがな」
自分をさらうつもりだと悟ったミリアは、右手に持っていたナイフを構える。しかし、ガレゼーレがムチのように伸ばした左腕を振って、その刃を砕いた。反射的に瞑った目を開けた時には、砕けた刃が地面に落ちていた。
「人間が相手ならともかく、そんなおもちゃみたいな物が我らに通じると思っているのか」
ミリアが持っていたのは、鱗が硬いリザードマンですら畏怖するチタン製のナイフだったが、それを平然と『玩具』と言ってのけるガレゼーレに、ミリアは恐怖を感じていた。
「フフ・・・・・貴様の恐怖、手に取るように・・・・・・」
そこまで言いかけた時、先程まで倒れていたユーリが、サーベルを構えて低姿勢で突撃し、それに気付くと同時に振り向いたガレゼーレの体に一撃を与え、その部分を切り裂いた。だが、ガレゼーレは冷徹な表情でユーリの頭を掴み、地面から離した両足で高速の蹴りを見舞った。体が受けた大きな衝撃で声も出ないユーリを、ガレゼーレはさらに蹴り上げ、自らも飛んだ後に容赦なく顔に蹴りを入れ、地面に叩き落とした。
「いやあぁぁぁぁぁ！！」

地面に着地すると、うつむいて座り込むミリアのほうを向いた。
「ユーリ・・・・・なんで・・・・・・」
「ふん。仲間を庇ったか。だがそんなザコ、庇おうと守ろうとすぐに逝くということがわかってないようだな」
見下したユーリを侮辱し、ガレゼーレは放心状態のミリアに近づく。
「私が弱いから・・・・・・私が弱いから・・・・・・私が・・・・・弱いから・・・・・・」
「無意味な悲しみだな。すぐ同じ所に送ってやる！！」
「あ・・・・・・あ・・・・・・あああああああっ！！！！！」
頭を抱えて悲鳴を上げたミリアから放たれる力の圧力に、ガレゼーレは目を見開いた。
「バカな・・・・・・この力は・・・・・・」
ゆっくりと立ち上がったミリアは、いつもの優しい彼女からは到底、想像できない冷たく鋭い目をしていた。全身から殺気を放って睨むミリアに対し、一方のガレゼーレはさほど慌てる様子もなく、頭の中で対抗策を立てていた。
「（覚醒は予想外だったが、慌てることはない。小娘は力の使い方を知らない。なに、すぐにでもばてて・・・・・・）」
「許さない・・・・・・あんたのこと、絶対に許さない！！」
悲痛な叫びとも取れるミリアの言葉に、ガレゼーレは笑みを浮かべる。
「許さない、か。人間に紛れて生きる幻獣崩れごときに、許してもらおうなどと思わない」
だが、ミリアはガレゼーレの動体視力でも捕らえられないほどの速度で動き、ガレゼーレの前に現れた。次の瞬間、ユーリのサーベルが付けた傷に拳を叩きつけ、そのまま突き飛ばした。
「がっ！？」
向かいにある家の前に着地したガレゼーレに、飛び出したミリアが追い討ちをかける。横に飛んでかわすが、外れた拳は家の壁と道の地面が砕けた。

「バカな・・・・・こんな力が、あるはずが・・・・・・」
向かって来る攻撃をかわし続け、防戦一方のガレゼーレ。表では驚いていたが、心の中では笑みを浮かべていた。
「（だが、まあいい。せいぜい粋がっているといい）」
暴走同然のミリアの攻撃をかわし続け、ばてた所を捕まえるというのがガレゼーレの立てた作戦だったが、右からのストレートをかわしても、左足での蹴りをかわしても、ミリアがばてる気配は一向になく、逆に自分のほうがばてて来た。
「（こいつのスタミナは無限か・・・・・このままでは、こちらが先に体力切れになる）」
目論見を完全に崩されたガレゼーレに、ミリアが拳をふるおうとする。その直前、ガレゼーレとミリアの間に、突然、等身大もあるゲル状の壁が出現した。
「考えてみれば、我は魔術を自在に操れる！貴様の体力を奪う術など、他にいくらでもある！」
ゲル状の壁がミリアを包み込もうと、彼女の腕に触れた瞬間、その部分から炎が吹き上がってゲルの壁を焼き尽くした。突然のことに驚いて目を見開くが、次の瞬間にはあまりの高温に蒸発したゲルの煙に紛れて、ミリアが突っ込んで来た。
「ぬう！？」
咄嗟に両腕を構えて防御するが、当たった腕の高熱を受け炎に包まれた。
「炎の魔術だと！？こしゃくな～～～！！！」
叫びつつミリアの放つ炎を防御し続けるガレゼーレだが、伸ばしていた右足で死角から攻撃してきた。気付いて振り返るが、蛇のように自在にしなる足の一撃がミリアの頭に直撃した。
「・・・・・ッ・・・・・ッ・・・・・」
「ハハハ！楽しいね！こういう命のやり取りっていうのは！！」
「楽しい・・・・・だと・・・・・？ふざけるな！！」
思わず笑みをこぼしたガレゼーレにミリアが叫ぶ。完全に怒りに飲

まれていると思っていたため、感心するように目を細めた。
「みんな・・・・・命を守ろうと必死なのに・・・・・なのにあなたは・・・・・なんで命を平気で殺せるの!?」
それを聞いて「ククッ」と含み笑いしたガレゼーレに、「何がおかしいの!?」とミリアが叫ぶ。
「いや・・・・・この世界を守ろうとする貴様らがどんな酔狂かと思った、実は飛んだ無知だったことに驚いてね」
「どういう意味よ!」
「知らないか?とんだ愚か者だ!だから何も知らず、『命を守る』などとほざける」
「黙れ!!」
再び怒りが爆発したミリアは、ガレゼーレに向かって行った。

―※＊※―

町の人々は巻き込まれないうちに逃げていく。それにより目撃者となる者がいなかったのは不幸中の幸いか。もしいれば、アウグスやパラケルはその目撃者を引き入れるか、消すかしかなかった。後者を選べば、露見した際内外から反発が起こり、世界を守るはずの自分たちの組織は瓦解する。
「(だから俺たちは、信念を曲げるわけには行かない。かといって、大々的に存在を明かすことも・・・・・)」
避難する人々を掻き分けて行っても効率が悪いと判断したアウグスは、近くの屋根に飛び乗りそこを移動した。こちらも幸いなことに、逃げるのに夢中で誰も気付かない。
「あそこか・・・・・」
アウグスが駆けつけた時、ちょうどミリアが再び向かって行くところだった。

「あれは・・・・・ミリア？俺としたことが！」
すぐに状況を判断し、呟いたアウグスは、まずは周りへの被害を食い止めるためミリアを止めることにした。ガレゼーレや今のミリアに勝るとも劣らないスピードで動き、ミリアを後ろから両脇の下から腕を絡めて抑えようとした。
「やめるんだ！ミリア！！」
だがミリアは、「離して！！」と涙を流しながら暴れた。
「こいつだけは・・・・・こいつだけは絶対に許さない！！ユーリが・・・・・ユーリが・・・・・こいつのせいで・・・・・・・・！！」
「ミリア！！」
怒りで我を忘れているミリアを、アウグスが叫んで彼女の頬をはたく。乾いた音が辺りに響き渡ると、ミリアは我に返った。
「怒りに任せて力を振るう今のお前は、あいつらと同じだ・・・・・・それに・・・・・今のお前の姿を見たら、あいつらはどう思う」
ハッと気付いたミリアは、再び涙を流しだす。
「そんなことをしても、あいつは蘇らない・・・・・」
「う・・・・・うう・・・・・うわあああああっ！！」
そう言われてミリアは膝を突いて、声を上げて泣きだした。
「ちっ・・・・・仲間がいたのか・・・・・」
ガレゼーレは表面が焼けた両腕をたらし、二人の様子を見ていた。
「貴様・・・・・〈デモス・ゼルガンク〉の者か・・・・・」
「いかにも。我が名はガレゼーレ。〈デモス・ゼルガンク〉八幹部の一人、将軍ヴォルグラートに仕える者だ」
「八幹部・・・・・将軍に仕える、か。ならここまで防戦一方だったのは、ミリアを追い詰めるためか？」
アウグスの指摘に、ミリアはハッと顔を上げる。
「大方、こいつに取り返しのつかないことをさせて心に傷を作り、そこに付け入って引き込むつもりだったのだろ」
「ほう、鋭いな。だが、それを言うなら貴様らも変わるまい」

目を鋭くしたガレゼーレは低い声で続ける。
「才能を鍛える、力の抑え方を教える、世間の悪意から保護する・・・・・そんな名目の元、異能者を集めている貴様らに我らを非難する資格はない」
目を丸くしたミリアはアウグスを見上げる。だが、彼は何も言わない。
「ククク。その沈黙は肯定と見て間違いないな？」
「勘違いするな」
アウグスが静かに言い返す。その声は落ち着き払っていて、焦りもやましさも感じさせない。
「貴様らの暗躍に巻き込まれた奴でも、俺たちが保護してない奴はたくさんいる。その結果どうなった？」
「さあ。私に聞かれても、ね」
わざとらしくとぼけるガレゼーレだが、襲ってきた腕の痛みに顔をしかめる。
「まあ、いい。だが、いずれ我らがすべてを粛清する・・・・・・」
「俺たちがさせない。そんなことより、いいのか？貴様の主の名をばらして・・・・・」
「教えた所で、貴様らにはどうにも出来まい・・・・・・」
不気味な笑みを浮かべるガレゼーレだが、アウグスから発せられるプレッシャーに責めあぐねていた。
「（こいつ・・・・・ただ者じゃないな。・・・・・・俺もあの女のおかげでかなり消耗した。・・・・・潮時か）」
心の中でそう結論付けると、腕の痛みを堪えて懐から煙幕弾を取り出して地面に叩きつけた。噴き出した煙幕が晴れた頃には、ガレゼーレの姿はなかった。
「ふう～」
アウグスが厳しい表情で溜め息をつくと、ミリアはよろめきながら、倒れているユーリに近づいた。
「・・・・・ユーリ・・・・・ユーリ・・・・・私のせいで・

・・・・・」

ユーリの元に歩いて来たアウグスは、医者の癖で無意識の内に彼の脈を取った。すると、何かに気付くかのように目を見開いた。

「・・・・・・!!まだ脈がある。急いで治療すれば間に合うぞ!!」

「えっ・・・・・?ほん・・・・・・と・・・・・・」

だが、それだけ言うとミリアも気を失って倒れてしまった。

「ミリア!!・・・・・・慣れていないのにあれだけの力を使ったんだ。体に疲労がたまっても、不思議じゃないか・・・・・・」

そう呟いた時、「おい、大丈夫か!?」とパラケルが駆けつけた。

「パラケル・・・・・・・・遅い!!!」

いきなり怒鳴られて、「おうわっ!?」と悲鳴を上げたが、周りを見渡すと状況を理解し、すぐに二人を〈エスペランザ〉に運んだ。

第４６話　敗北の爪跡

神界、アースガルドの玄関口、〈ヒミンビョルグ〉。毎回、本拠地がある島から行き来する訳にも行かないので、オーディンと相談してここを第一線にすることになっていた。その一角を、一端ここに戻って来たクーフーリンとファーディアが歩いていた。

「俺たちの組になったヴァルキリーは、ここの生まれだったな。影の国以外にも、こういう場所があったとは・・・・・・」

「意外か？影の国のような場所が、一つだけとは限らない。師匠はそう言っていたぞ」

「そうだったな」

ファーディアに言われた時、人間界（アースガルド）に通じる虹の橋（ビフレスト）から、大きな音が響いてきた。

「なんだ？」

首を傾げた次の瞬間、突然、強大な門から〈エスペランザ〉が高速で突っ込んできた。

「うわっ！！なんだ！？」

クーフーリンが驚いている間に、門を通過した〈エスペランザ〉は急停止し、船体横の階段から慌しく何人かの影が降りた。その中には、ユーリの引越しの仕上げをすると言って彼の家に行ったパラケルとアウグスの姿もあり、二人が押しているストレッチャーにはそれぞれ、ユーリとミリアが寝かされていた。ちょうどその時、グラニとヴィングスコルニルに乗ったジークフリートとブリュンヒルドが帰って来た。

「なんだ？おい、パラケル！」

ジークフリートに名前を呼ばれてすぐに振り返ると、パラケルはすぐアウグスに
「先に行っててくれ」
と言って、ジークフリートとブリュンヒルドのほうに歩いてきた。
「なんだ、お前ら。今、戻ったのか」
「ええ。ところで・・・・・何かあったの？」
ヴィングスコルニルから降りて聞くブリュンヒルドに、「ああ」と答える。
「引越し中に〈デモス・ゼルガンク〉の兵士に遭遇してしまって。そいつにユーリ君が倒され重傷、その怒りで覚醒したミリアちゃんもその反動で昏睡状態・・・・・という状況だ」
すると、「そっちもか」とジークフリートが言った。
「・・・・・ということは、そちらも遭遇したのか」
ファーディアに「ああ」と頷くジークフリート。
「と言っても、最初から力を解放していたから、さほど苦戦はしなかったよ」
「自分の強化を他人任せの奴だったしね」
ブリュンヒルドが溜め息をつくと、それ聞いたクーフーリンが「なんだと～!!」と、声をあげた。
「己の肉体は、己自身が鍛えるべきだと言うのに、そいつの体たらくはなんだ!?」
「いや、クーフーリン。敵にそんなことを言ってもしょうがない・・・・・」
「お前は悔しくないのか!?俺たちが血を吐く思いをして体を鍛えていると言うのに、他人の力で楽をするなど言語道断!!」
特殊な魔法で腕鎧にしまっていたゲイボルグを取り出すと、それを数回転させた後、穂先を向けた。
「加勢するぞ、ジークフリート!!そいつの不届きな根性、共に叩き直してやろうぞ!!」
「いや、加勢も何も・・・・・そいつはもうとっくに退却してる

よ」
グラニから降りたジークフリートの言葉に、「ぬうぅ～～～・・・・・」と唸り声を上げる。
「ところで・・・・・・あなたたちはここで何をしてるの？」
「ん？・・・・・・ああ。同じチームの奴が、ここ一週間近くで得た情報を主に報告するらしい」
クーフーリンの答えに、「主」とパラケルが呟いた。
「・・・・・・確か君たちと同じ組は、ヴァルキリー二人だったな・・・・・・」
「ああ。だから、ここで、しばらく足止め中・・・・・・それよりパラケル、二人の容態はどうなんだ？」
真顔で聞くクーフーリンに、「どうもこうも」と少し小バカにしたように言った。
「ユーリ君の敗北もミリアちゃんの覚醒も、こちらが思ったより早かった。こりゃあ、予定を早めるしかないな・・・・・・」
そう言って、クーフーリンとファーディアを見るパラケルに、その場にいる全員は首を傾げた。

―※＊※―

二人はすぐさま、〈ヨトゥンヘイム〉のガストロープニルにある〈リュリの館〉に運ばれ、そこにいるメングラッドたちの治療によりユーリは一命を取り留め、ベッドに寝かされたミリアも目を覚ました。
「ここ・・・・・・は・・・・・・」
そのミリアは起きてすぐ、ベッドから飛び降りた。

「ユーリは大丈夫なの!?」
病室を飛び出し、館の中を疾走。彼の病室に入った所をエイルに捕まり、説教をされていた。
「仮にもここは病棟なんですから、もう少し静かにしてください」
メングラッドを初めとした治癒の力を持つ女神たちがいるこの館は、負傷者を運び込む病院代わりに使われていた。と言っても、前々からいた患者を追い出すようなことはせず、結論から言うとブレイティアの負傷者が運ばれること以外はいつもとあまり変わりは無かった。
「す・・・・・すみません・・・・・」
「まったく。いくら恋人のことが心配だからって・・・・・」
「えっ!?あっ、いや!!恋人って言うか・・・・・」
「だから!静かにしなさいって、言ってるでしょ!」
ミリアが「すみません」と言うと、近くにいたアウルボダが呆れてため息をついた。
「今のはあなたのほうがうるさかったわよ」
注意されたエイルは、「うっ、ごめん・・・・・」と謝る。
「まったく。あなたたちがうるさいから、患者さんが起きちゃったわよ」
アウルボダの言葉どおり、ベッドのユーリは寝ぼけたような表情で目を覚ましていた。
「ユーリ!大丈夫?」
「あ・・・・・ああ。俺は・・・・・奴に負けたのか・・・・・」
「そ・・・・・それは・・・・・」
弱りきった表情で聞かれたミリアは口ごもったが、その態度はユーリが悟るには十分だった。
「・・・・・隠さなくていい。一度、奴に蹴られて・・・・・その後、地面に蹴り落とされて・・・・・それからの記憶が・・・・・」

「記憶がないんだな」
その時、入り口から声がした。全員の視線がそちらに集中すると、声の主であるアウグスは頭をかいた。
「人間は、あまりにきれいにノックアウトされると、その前後の記憶が抜け落ちるらしい」
「アウグスさん、それは・・・・・・」
ミリアは止めようとしたが、それをユーリが彼女の腕を掴んで止めた。
「いいよ。隠されたほうが、返って辛い・・・・・・」
体を起こした弱々しい表情のユーリに、ミリアは悲しそうな顔をしていた。それを見たアウグスが病室に入ると、後からパラケルも入った。
「あれから二ヶ月・・・・・特訓を重ねて強くなったつもりだったが、奴らには到底及ばなかったか・・・・・・」
「そのようだ。だが、その奴らとの差は、二か月分だけ縮まっている」
「つまり・・・・・特訓は無駄じゃないってこと・・・・・・？」
不安そうに聞いたミリアに、「そうだ」とアウグスが答える。
「いや、むしろ特訓しなければ、奴らに追いつくどころか追い抜くこともできない・・・・・・」
「もったいぶらずに本題を言ってください。ただ見舞いに来た訳じゃないんでしょう・・・・・・？」
そう言われて、「そうか？では、本題を言うぞ」とアウグスは二人を見た。
「ユーリ・ハンスヴルスト、ミリア。両名を他のチームに移すことにした」
「それって、戦力外通告って奴ですか！？」
驚くミリアに「いや、違う」と首を振る。
「奴らが存在を隠したままあんな派手に動くと思わなかったため、俺とパラケルはその対策に終われることになった。おかげで、君た

ち二人のチームから外れざるを得なくなった」
すると、「本当なら――」と、後ろのパラケルが顔を出した。
「――力が覚醒した君たちの指導をするはずだったんだが、クトゥリアを含めた俺たち三人でも手一杯というほどの情報が流れてくるだろうから、しばらく離れられそうにないんだ・・・・・」
「今回の件・・・・・目撃者がいないということがせめてもの救いだが、それでも噂ぐらいはたつだろう。奴らがそれを利用しないはずがない」
「・・・・・かと言って、俺たちの自主連に任せて漠然と訓練していたら、使い方を知らない力にいつ飲まれるかわからない・・・・・ですか？」
「まあ、他にもいろいろあるが、強いて言うなら、そういうことだな。俺たちの他に誰かお前ら二人の師匠になってくれる奴がいてくれれば話しは・・・・・」
「・・・・・もういいです。話はわかりました・・・・・」
パラケルの言葉をさえぎり、顔をうつむけたユーリを、ミリアが心配そうに見る。
「すみません・・・・・一人にして・・・・・もらえますか・・・・・？」
「構いませんけど・・・・・外に行く時や何かあった時は、必ずコールしてね」
メングラッドに「わかりました」とユーリが答えると、メングラッドたちは病室を後にした。
「なら、後で新しいチームのメンバーを知らせにくる」
ユーリの心境を悟り、アウグスもパラケルと共に病室を出た。
「・・・・・ミリアも・・・・・自分の病室に戻ってくれ・・・・・一人にしてくれ・・・・・」
「・・・・・そんな・・・・・ユーリのことが心配でできないよ・・・・・」
膝を抱えて「頼むよ」と呟くが、ミリアは「いやよ」と拒み続ける。

「うるさいな！一人にしてくれって言ってるだろ！！」
怒鳴られてミリアが黙ると、ユーリもハッと我に返る。
「・・・・・ごめん・・・・・・一人になって・・・・・・頭を冷やしたいんだ・・・・・・」
顔を抱えた膝にうずめて「・・・・・・頼むよ・・・・・・」と呟くと、ミリアも暗い表情で「わかった」とうなずいた。
「でも、私・・・・・ユーリの力になってあげたいから・・・・・・少しは頼ってね・・・・・・」
ミリアが病室を出てドアを閉めると、彼女の気配がなくなり次第、声を押し殺して泣き始めた。一方のミリアも、走って自分の病室に戻るとベッドに飛び込み、枕に顔をうずめた。
「・・・・・・う・・・・・・ううっ・・・・・・ううっ・・・・・・」
ユーリもミリアも、人知れず泣いていた。戦いに負けた悔しさや、敵を取り逃がしたことよりも、二人とも大切な人を守れず危険にさらした自分自身が許せなかった。そして、その泣き顔は誰にも見られたくなかったし、泣いてることも知られたくなかった。

―※＊※―

「それで・・・・・二人を教える師匠というのは・・・・・・？」
「いるだろ。適任者が」
〈リュリの館〉の廊下で聞かれると共にアウグスが答えるが、パラケルには心当たりがない。
「いや、わからない。誰だ・・・・・？」
往復時間短縮のために設置された転移装置に乗り、二人はヒミンビョルグに戻ってきた。
「だから、いるだろう。適任者が目の前に」

アウグスがそう言った相手は、ジークフリート、ブリュンヒルド、クーフーリン、ファーディアの四人だった。しかし、パラケルにはまだわからない。

「・・・・・判断力が鈍くなったんじゃないか？その程度で続けられると、こちらの迷惑に・・・・・・」

「ハッハ、きついね～」

陽気に笑い出したパラケルだが、その内には強い怒りを秘めている。それを察してそそくさと逃げようとするアウグスを、パラケルは素早く捕らえるが、

「あれ？」

二人に気付いたクーフーリンが顔を向けると、即座に離れた。

「お前ら、ユーリとミリアは・・・・・・？」

「ああ。二人なら病室にいる。しばらく、ここにいることになるだろうが、二・三日すれば退院だろう」

アウグスからそれを聞いて、「良かった～」と胸をなでおろしたブリュンヒルドにそのまま切り出す。

「そこで・・・・・誰か、あいつらの師匠やってくれないか」

アウグスの信玄に、黙り込む四人。

「ユーリは魔術師としての力の覚醒、ミリアは幻獣の力の覚醒。どちらも、力の操り方を教えてくれる師匠が必要なんだ」

ジークフリートが「そう言われても・・・・・」と考え込むと、

「何か問題があるのか」とクーフーリンが聞く。

「俺が使える魔術は〈ルーン〉と言って、人間が使っている魔術から見れば『原始の魔法』に近いし、それに、俺が使えるのは初級のものだから、あまり参考にはならないと思う。ブリュンヒルドならどうだ？」

「え・・・・・あ・・・・・・・私？・・・・・・・確かに、私なら低位から高位の〈ルーン〉まで使えるけど・・・・・・・」

「・・・・・けど・・・・・・・なんだ・・・・・・・？」と、クーフーリンが聞く。

「その力は今、オーディンさまに封じられているの・・・・・・」
「だったら、さっさとそれを解いてもらえよ。オーディンならこのヴァルハラに・・・・・・」
そこまで言った時、「あ・・・・・・」とクーフーリンが何かに気付いた。
「そうだ。オーディンさまは今、〈名も無き島〉にいる。仮に教えることになっても、封印の解除には時間がかかる・・・・・・」
ジークフリートが言う。ちなみに、ヴァルキリーたちが報告しに行ったのは、オーディンの相談役のミーミルだった。
「あんのおっさ〜〜〜ん!!!じゃあ、どうするんだ?」
クーフーリンが聞くと、アウグスが彼とファーディアを見る。
「クーフーリン、ファーディア。お前ら二人のどちらかなら、〈メイヴ〉が使えるんじゃないのか?」
聞き慣れない言葉に首を傾げたジークフリートとブリュンヒルドだが、聞かれたクーフーリンとファーディアは難しい顔で、あごに手を当てていた。
「うーん、難しいと思うぜ。俺は槍術一本で〈メイヴ〉なんてからっきしだし、ファーディアも他人に教えられるほどうまくなかったと思うぜ・・・・・・」
「悪かったな。それに〈メイヴ〉もさっき二人が言っていた〈ルーン〉と同じ、現代の魔術師から見れば、『原始の魔法』に近いからあまり参考には・・・・・・」
「だが、『原始の魔法』だろうと『現代の魔法』だろうと、基礎は同じはずだろう。だったら、問題はないんじゃないのか・・・・・・?」
パラケルにそう言われて、四人は「うーむ」と悩みこんだ。
「それと、ユーリは元々、戦士タイプだ。できれば、両方の素質を生かせる『魔法戦士』になってもらいたいから、エインヘリヤルかヴァルキリーに習わせたい・・・・・・」
アウグスが言った後、再び「うーむ」と悩んでいると、その側をワ

ンピースとスカート姿のフレイアが通りかかった。〈ビフレスト〉への門を潜ろうとした瞬間、

「「「「ちょっと待った～！！」」」」

彼女を見つけた四人が引き止めた。

第47話　新しい師匠

〈ビフレスト〉の門前で引き止められたフレイアは、パラケルら六人のほうに振り向いた。
「・・・・・私に何か用・・・・・・・？」
「頼みがあるんだ」
ジークフリートが言うと首を傾げる。不快感を抱いている様子はないが、相手は自由奔放な女神。いつ気まぐれを起こして魔術（セイズ）をかけるかわかったものじゃない。
「どうしておどおどしてるか大体見当がつくわ。なんなら、その恐れを現実にしてあげようか？」
「「「「（げっ！！）」」」」
どす黒いオーラを漂わせてフレイアが笑みを向けた途端、六人の心が一つに重なる。が、幸いなことにフレイアはすぐその雰囲気を消す。
「話しを聞くくらいはいいわ。それで、何？」
「ある二人に、魔力の制御方法について教えてもらいたい。一人は人間の少年、もう一人は幻獣の力を持つ少女」
それを聞いたフレイアは、一瞬、首を傾げた。
「幻獣の力を持つ少女・・・・・・って、それどういうこと・・・・・？」
「どういうことって・・・・・確か、ミリアちゃんって人間だったよな・・・・・？」
「ああ。と同時に、幻獣ヴィーヴルでもある」
「はぁ！？どう言うことだ！？」

クーフーリンが聞くとアウグスが答えたので驚き、他の三人も驚いていた。
「・・・・・俺やファーディアのように転生した？いや、しかし、そんなことが・・・・・・」
「俺たちエインヘリヤルは、戦場で命を落とした戦士の魂が転生したものだし、ヴァルキリーだって人間に転生することもある。しかし、それでも・・・・・・納得できないな・・・・・・」
「まあまあ、そう深く気にせずに」
三度「うーん」と考え込む四人を、パラケルがなだめるが、その隙にフレイアが〈ビフレスト〉を渡ろうとする。
「わ～～～！！だ～か～ら～、その二人の魔術の師匠になってくれないか！？」
パラケルに引き止められたフレイアは、迷惑そうだがどこか暗い表情で、戸惑っていた。
「そ・・・・・・それは・・・・・・」
「二人とも聞き分けいいし、お前の指導なら上達も早いだろうから、頼むよ」
それでも、フレイアは戸惑っている。ブリュンヒルドは、ハッとその理由に気付いた。
「もしかして・・・・・・今日もオーズさまを探す旅に・・・・・・？」
ブリュンヒルドの言葉に、ビクッ、と体を震わせたフレイアは、「え・・・・・・ええ」と戸惑いながら答えた。
「そうだったのですか、すみません・・・・・・別の人を探しましょう」
「ちょっと待った～！」
立ち去ろうとするブリュンヒルドにパラケル、クーフーリンが突っ込みを入れる。
「そんなことより、こっちの頼みを優先させてくれよ。俺たちにとって最優先事項なんだ」

「なんですって・・・・・・!?」
パラケルが言ったその瞬間、ブリュンヒルドがギロリと男性陣を睨みつけ、そのプレッシャーに全員、固まった。
「女性にとって、大切な男性の行方を捜すことのほうが何よりの最優先事項なのよ!わかった!?」
これには男性陣も反対できず、「は、はい~!!」と答えるしかなかった。
「(なんで、俺たちが譲らなきゃいけないんだ・・・・・・・)」
「(仕方ないだろ。こういう時のブリュンヒルドは、物凄く怖いんだから・・・・・・・)」
「(さすがの英雄も、愛する女性には敵わない・・・・・・・ってことか)」
「(それって、なんだかすごく情けなくないか・・・・・・・?)」
クーフーリン、ジークフリート、ファーディア、パラケルがヒソヒソ話をする。
「男性陣、聞こえてるわよ!!!」
それを看破され「げええ!」と男性陣が驚くと、「いいの」とフレイアが言った。
「みんな世界を守ろうとがんばっているのに、私だけわがままで・・・・・」
「フレイアさま。だからって、無理することなんてありませんよ。ジークフリートだって、突然私が行方不明になって、長い間戻らなかったらどう思うの!?」
そう言われて、「う・・・・・」と黙り込んだジークフリートに、
「おい、こら」とクーフーリンが怒鳴った。
「誰も、そのオーズって奴を探すなとは言ってない。そいつを探しながらでいいから、二人を鍛えてやってくれないか?」
フレイアはしばらく考えると、「わかったわ」と答えた。
「本当にすみません。私はしばらくここにいますから、その間に基礎的な知識も教えておきますから・・・・・・」

「俺もユーリに、最低限度の知識は与えておくよ。そのほうがあんたの負担も少ないだろう」
すると、少し不機嫌そうな顔をして、ファーディアのほうを向く。
「・・・・・少しばかり引っかかる言い方だけど、助かるわ・・・・・」
後ろを振り向くと、「少しばかり、荷物を加えてくるわ」と言って、自らの館〈セスルームニル〉に戻って行った。

―※＊※―

本拠地の修練場には、ユーリとミリアが重傷を負った知らせが届いていた。
「あいつらが・・・・・やられた？」
「死んではないし、重傷を負ってはいるものの意識はある」
クトゥリアはそう言ったものの、ディステリアや元々一般人であるセルスとクウァルは動揺を隠せなかった。
「アースガルドで治療を受けているから実質軽症に等しいが、同じようなことが何度もあると癖になって傷の治りが遅くなる」
「じゃあ、時間をかけて直したほうがいいってこと？」
「そうだが・・・・・実際問題、完治を待ってる時間はない」
不安そうな表情で聞いたセルスにクトゥリアが答える。
「重傷を負ってもたちどころに直す用意がある。だが、何度も行うことはできない・・・・・前に聞かされた通りですね」
苦々しく呟くクウァルに、「そうだな」とクトゥリアは目を閉じた。
「この場合、こちらの説明不足と言われても仕方ない。だが、今の報せでその不足分を少しは補えたと思う」
「何が言いたいんだ？」とクウァルが聞くと、クトゥリアは間を置いて口を開いた。

「クウァル、セルス。ここまで連れて来て置いていうことではないが、あえて言っておく。退くなら今の内だ」
真剣なクトゥリアの言葉に、セルスとクウァルは目を見張る。
「それ、本気で言ってるんですか！？」
「ああ、本気だ。我々のことは口外しないと約束してくれるなら、手は出さないと約束しよう。ゼウスら神々にも手を出さないよう交渉しておく」
「そんなこと言って・・・・・今更退けませんよ」
右手を握ったクウァルは、近くに置いてある石柱を殴りつける。硬い石柱は殴られた部分からヒビが入り、上のほうがクウァルの上に倒れるが、下から突き上げられた拳で粉砕される。
「これでも、まだ半端な制御なんでしょ？最後までやっておかないと、返って危ないんじゃないですか？」
「そうですよ。今の質問は、まるで丸投げです。一度鍛えるって言ったんだったら、最後まで仕上げてください」
「参加し続けるかは、その時に決めます。どうですか？」
「それは願ってもないが」歯切れの悪いクトゥリアに、クウァルとセルスは眉を寄せる。
「いいのか？私が誘導してるとも限らないのだぞ？」
「そこまで狡猾な人には見えません」
「いやいや、狡猾を通り越してせこいぞ」
口を出したディステリアに、「おい」と顔を引きつらせる。
「わかった。鍛錬を終えた後、改めて聞くとしよう」
そう言って後ろに下がると、「再開！！」と声を張り上げた。

―※＊※―

数日後、ユーリはファーディアから教えてもらったことを、頭の中

で反すうしていた。
「頭で考えず・・・・・感じる・・・・・・」
少しうつむき、繰り返し呟いていると、ガラッと病室のドアが開いて、中にはフレイアが入って来た。
「君がユーリ君ね。どう、体の具合は？」
「すみません、誰ですか？」
彼女のほうを向いて聞いたユーリに、「あら、聞いてない？」と顔を引きつらせる。
「私はフレイア。アウグスに、あなたに魔術の使い方を教えるように頼まれたの・・・・・・」
「そうだったのですか。すみません。お名前は伺っていたのに、気付かなくて・・・・・・」
それに対し、「いいの、いいの」と言って手を上下に振ったが、
「男性の鈍さには、もう慣れてるから」
と、後ろを向いて聞こえないように呟いたので、ユーリは不思議そうに首を傾げた。
「ん？ああ、なんでもないわ。とりあえず、ミッドガルドを旅しながら、私ともう一人で教えることになってるから、よろしく」
「こちらこそ・・・・・お手柔らかに・・・・・・」
弱々しく笑うユーリだが、それを見たフレイアは一瞬、頬を赤らめた。
「どうかした・・・・・・」
不思議に思ったユーリが聞きかけた瞬間、突然「か～わいい～～！！」といきなり抱きついて来た。
「はぁぁいいいいいいいい～～～～～！？！？」
驚いて声を上げるユーリの胸に、柔らかい物が押し付けられるような感触がした。さらにそこに、
「ユーリ～、準備できた～？」
バッグを片手に持ったミリアが入ってきて、しっかりその様子を目撃されてしまった。

「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・あっ・・・・・・ち・・・・・・・違うんだ、ミリア。これはフレイアさんが勝手に・・・・・・・・」
フレイアから離れて、慌てて弁解するユーリだが、ミリアは顔を真っ赤にして
「うるさ～い、ユーリのバカ～～！！」
と、病室で炎を噴出させてしまった。

―※＊※―

数分後、〈ヒミンビョルグ〉。年老いた一人の妖精（アールヴ）が、ユーリとミリアに注意をしていた。
「まったく。病室で炎を噴出させるとは、いったい何事か・・・・・・？」
「す・・・・・・すみません・・・・・・・」
「フレイアさまもフレイアさまです。まだ、未熟な者をからかうなんて・・・・・・特にミリアという者の前で、ユーリという者にちょっかいは出すなとアウグス殿も・・・・・・・」
「・・・・・・もう、過ぎたことなんだからじゃない、オッタル。そうしつこく言わなくても・・・・・・・」
「頼む相手がフレイアさまだから、アウグス殿も注意なされたのでしょう・・・・・・・！！」
すると、ピクッと眉を動かしたフレイアが、不機嫌そうな顔でオッタルを見た。
「つまり・・・・・・今回のことは全面的に私が悪いと、そう言いたい訳・・・・・・・？」
「事実そうなのでしょう。実際、炎を噴き出したのはミリアという者ですが、その要因を作ったのはあなたでしょう」

「あのねえ。魔術のような特別な『力』を使うには、それなりの自覚と責任が必要なのよ。なのに・・・・・・」
「だから、それを教えるように頼まれたのでしょう！」
「うっ・・・・・・」
それを言われるとフレイアは黙り込んだが、しばらくすると「わかったわよ」と呟いた。
「その代わり、手加減せずにビシバシ鍛えるから、覚悟しておきなさい」
すると、二人はなぜか笑った。
「手加減なんてされたら、奴らには到底、追いつけません。それは、こちらからもお願いすることです」
「この『ヴィーヴルの力』については、まだまだわからないことが多いけど、でも・・・・・・不安になんてなっていられない」
「早く奴らと、互角に戦えるようになって・・・・・・」
「早くこの力を使いこなせるようになって・・・・・・」
「「守りたいものがあるんです！！」」
「やれやれ。聞いた以上に、人間できてるな」
ユーリとミリアが同時にいった言葉を聞いて、オッタルは頭をかいた。
「それじゃあ、こちらも手加減しないわ。覚悟なさいよ」
「もしもの時は、俺が止めるから」
「「「えっ？」」」
三人がオッタルのほうを見ると、「聞いてなかったのか」と聞き返した。
「いいえ。四人組の同行はお兄さまに頼んでいるから・・・・・・」
「悪いな、それキャンセルされた。向こうでは、オーディンさまの補佐で忙しいって言っていた」
「そっか。それであなたが来るのね」
「そういうこと。よろしく頼むよ」
残念そうな顔のフレイアに明るい口調でオッタルが言った。こうし

て、ユーリとミリアの新しいチームは、フレイアの猫引き馬車に乗ってアースガルドに降りて行った。

―※＊※―

その頃。格納庫では、ドヴェルガー、アウルヴァンディル、ヴェンドルがある意味での死闘が繰り広げていた。

「だからその場合、乗組員のことを考慮して・・・・・・」

「いつも公共交通を使う訳にも行くまい。それならばいっそのこと、〈イェーガー〉を変形させたらどうだ？」

「悪くはない。悪くはないが・・・・・・これに使われているフレームが、それに耐えられるのか？」

「仮に耐えられるとしても、変形時に生じる衝撃に乗組員が耐えられるかどうか・・・・・・」

ドヴェルガーが考えると、そこに〈イェーガー〉、正式名称〈ファイター・フライヤー〉の開発責任者、ディックが話に入ってきた。

「我々、人間の技術を見くびってもらっては困る。ミサイル攻撃を受けた時や魔物に襲われた時のことを考慮して、コクピットの周りには衝撃吸収板を内蔵している。もっとも、変形させるという発想がなかったから、〈トランス・フレーム〉は採用していない」

聞きなれない言葉に、黒小人の三人は首を傾げた。

「我々の世界では、変形機構を持った戦艦や輸送機には〈トランス・フレーム〉という、特殊強化した骨組が使われている。だが、変形機構と強度を両立させると、どうしても戦艦並みの大きさになってしまう。それならばいっそのこと、と言う訳で・・・・・・」

「戦艦や輸送機と言った、大型機体にしか採用されていない、と言うことか」

今まで腕組みをして聞いていた、ダーナ神族の鍛冶神ゴブニュが聞

いた。
「そういうことだ。だから我々も、〈イェーガー〉に採用しようにも出来なかったのだ」
全員が「うーん」と考え込む。すると、ふとゴブニュが聞いて来た。
「その〈トランス・フレーム〉とやら、我々で見てみないか？」
「それは・・・・・かまわない。ここには、クトゥリアがどこからか持ってきた、解体待ちの戦艦がなぜか山ほどある。中には当然、〈トランス・フレーム〉が内蔵されている物も・・・・・」
「決まりだ！見に行こう！！」
机に手を着いて立ち上がったドヴェルガーの目は、なぜか期待に満ち満ちていた。

第４８話　ある日の訓練風景

本拠地内の訓練場。
「フレイムウォール！！」
セルスの周りに発生した炎の壁。中の彼女は熱によるダメージを受けておらず、炎の壁は敵を攻撃できるだけの威力と敵の攻撃を防げるだけの防御力も持ち合わせていた。
「・・・・・5・・・・・・6・・・・・・7・・・・・・」
近くにいるローブの女性がカウントしている中、セルスは炎の壁の維持に集中している。
「よし、だんだんよくなってる。その調子だ！」
「はい！」
「そら。少し強めに行くぞ！」
「おおおおおっ！！」
クウァルはモンクの男性とのスパーリングで少しずつ力を制御していき、日常生活の中でもいつも以上に力を抑えるよう心がける必要がなくなってきた。
「隙あり！！」
「うわっ！？」
見つけた隙を突いて渾身の一撃を放ったクウァルだが、大振りのその一撃を避けられた上に、逆にがら空きになった横腹に食らってしまった。
「いい一撃だったが、まだ踏み込みが甘いな」
「はい・・・・・・」

「特にお前の攻撃は大振りになりやすいんだから、敵の反撃を避けられるよう足腰を鍛えないと・・・・・・」
物がぶつかる音が響き、「全然ダメだ!!」と声が聞こえる。何かと思いクウァルと相手をしていたモンクが目を向けると、眉を寄せているアレスが膝を着いているディステリアに剣を向けていた。
「その程度じゃ俺から一本もとれないって、何度言わせりゃ気が済むんだ!?」
「くっ・・・・・・もう一回だ」
「そう言って昨日から何回やったと思ってるんだ?その上、どれも同じ結果だ」
よろめきながら立ち上がったディステリアに、アレスは剣を下ろして続ける。
「お前、最近変だぞ!動きは無駄だらけだし、まったく集中していない!」
「集中してるよ。じゃないと、模擬戦にもならないだろ」
「ああ。今まさにそれだ」
「なんだと?」
天魔剣を拾ったディステリアが、肩に剣を担いで不機嫌そうに言って顔を逸らしたアレスの言葉に眉を寄せる。
「こっちの攻撃を防いでばっかりで、反撃する様子がない。いざしたらしたで入ってないし・・・・・・そんな逃げ腰で敵が倒せるのか?」
「カウンターを狙ってるのかもしれないだろ?」
剣士との模擬戦が一段落したセリュードが口を挟むが、「いや、それはねぇ」とアレスは首を横に振る。
「こいつはただ逃げてるだけだ。防御って殻に閉じこもってよ・・・・・・」
「てめ・・・・・・黙って聞いてりゃ!!」
胸倉を掴むディステリアを「おいおい」とセリュードが止めようとするが、アレスは笑みを浮かべている。

「少しはマシな顔になったじゃねぇか。その調子でもう一本やろうぜ」
「いいぜ」とディステリアはアレスを離す。
「あんたが言ってたことは、ただの見当違いだって証明してやる」
距離を取り、互いに武器を構えて激突する。その様子をセリュードとクウァルが見ていると、休憩に入ったセルスがやって来た。
「どうしたの？」
「いや、よくわからん。ディステリアとアレスがケンカしてたみたいだが・・・・・・」
「いつものことじゃない？」
「いや。この前からディステリアとアレスが組み出したんだが、その時からそりが合わないみたいだ」
「どうしてかしら・・・・・・」
セルスとセリュードが考えていると、クウァルは黙って模擬戦を眺めている。ディステリアはアレスに押されており、それを見たセルスが口を開く。
「もしかして、ディステリアがアレスに勝てないから？仮にも神様なんだから、勝てないのは当たり前・・・・・・」
「アレスはその神でありながら、人間にも勝てないんだぞ」
セルスの仮説をクウァルの横槍が否定する。それが聞こえたらしいアレスは眉を動かしたが、動きが鈍ったその瞬間を突いてディステリアは攻撃しなかった。それにはセリュードも気付いたらしく、不審そうに眉を寄せた。
「おかしい・・・・・・」
「どうした？」
「ディステリアは軍属の者だ。新米とは言えそれなりに訓練も積んでるし、クトゥリアさんに連れられて場数も踏んだはずだ」
「そうなのか？全然そんな風には見えないな・・・・・・」
「見た目で判断できないのは当然のことだから・・・・・・」
少しばかり驚くクウァルにセリュードが指摘するが、すぐディステ

リアとアレスのほうに視線を向ける。
「少なくとも素人じゃないんだから、今の隙には気付けたはずだ。それでも動こうとしなかったのは慎重に行動したと考えることもできるが・・・・・・」
「違うの？」とセルスが聞くと、セリュードは腕組みをして唸る。
「・・・・・集中していなくて気付かなかった、と考えるほうが妥当だな」
「嘘・・・・・・」
信じられずセルスが目を丸くすると、「だあああああああっ、やめだ！！」とアレスの叫び声がする。
「やってられるか、こんな茶番。今日はもう降りる！」
「まだ勝負はついてないでしょう」
「勝つ気がないテメエがそれを言うか？ふざけるなよ！」
そう言ってアレスは行ってしまう。止めようとしたディステリアだったが、手を伸ばしかけただけですぐ下ろしてしまった。
「・・・・・・なんだ、ありゃ」
「うーん・・・・・・」
クウァルは呆けた声を出し、セリュードは頭をかいている。こちら側の視線に気付いたディステリアだが、さほど気にする様子もなく通り過ぎようとした。
「あっ、ちょっと待った」
すれ違ったところでセリュードが止める。
「・・・・・・なんですか？」
「ディステリア、ちょっと手合わせしてくれないか？」
「俺と、ですか？」
「そう。エリウで一緒に戦った時から、どれだけ成長したか見てみたいんだ」
そういうセリュードに対し、ディステリアは乗り気ではない。
「・・・・・・アレスとの模擬戦、見たでしょう？あれが俺の今の実力です」

「そうかな？相手の実力なんて、横で見るより実際に手合わせしたほうがよくわかると思うけど？」
「そういうもんなの？」
「俺に聞くなよ」
セリュードの言葉にディステリアの眉がわずかに動く。後ろではセルスとクウァルが顔を見合わせて、不思議そうな顔で会話をしている。視線を落としたディステリアは黙っており、しばらくすると、
「わかった。その申し出、受けよう」
「よし来た」
笑みを浮かべたセリュードは距離を置き、愛用の槍を構えた。
「さあ、行くぞ！！」
先に動いたのはセリュード。遅れてディステリアも突っ込み、二人の武器がぶつかり火花を散らす。ディステリアは槍の穂先を弾くが、その勢いを乗せた柄の一撃を腹に受ける。
「げほっ！？」
横腹に衝撃を受け咳き込み、その隙を突いてセリュードが槍を振るが、その一撃を天魔剣で受け止め、その衝撃を利用して離れる。
「（まあ、そうなるよな）」
穂先を弾かれたら反対側で敵を討ち、その隙を突いて弾かれた穂先を振る。槍術における弱点をカバーした戦い方は広まりつつあったが、同時にその対策もできている。なので、ディステリアの正解ともいえる行動は取れて当然、なのだが・・・・・。
「（・・・・・ちょっと消極的過ぎやしないか）」
突き出された槍を弾き、柄の一撃をかわすか止めるかして剣を振り下ろす。それが、セリュードが予測したディステリアの行動。しかし、今の動きはそこからかけ離れた、防御に徹した動きだった。不審に思いつつ、セリュードは距離を詰める。槍の両側を使った戦法で畳み掛けていくが、ディステリアは防戦一方。
「槍って、ああやって使うんだっけ？」
「いや。あれはもはや、棒術だろ・・・・・」

脇で見ていたセルスとクウァルはそう言っていたが、セリュードは戦い方に拘るつもりはない。無理に拘って命を落とすのも難だし、拘りを持ったまま勝つほど実力が高いわけでもない。次第に弾く力も弱くなり、構えを変えたセリュードは槍を連続で突く。

「（ここで戦い方を変えるか？）」

期待に近い感情を持ってディステリアに仕掛ける。勢いを乗せているため、ここで弾かれたら次の攻撃が仕掛けられない。わずかな隙を突いて仕掛けてこられても、防ぐ術は心得ている。が、なおも防戦一方。

「（どういうつもり、かな！！）」

勢いを載せた一撃を放つ。構えた天魔剣に弾かれるも、その状態から無理矢理足元を狙う。無論、穂先が当たらないよう注意しながら。さすがにこれはジャンプでかわした。

「避けた！」

セルスが声を上げるも、回避は戦闘においてして当たり前。それほど騒ぐほどのことではない。その状態からディステリアは切りかかり、セリュードは槍を横に構えて受け止める。が、武器が当たった瞬間に違和感を覚える。

「（・・・・・？なるほどな）」

空中のディステリアはそのまま天魔剣を押し込むことなく着地する。その瞬間、セリュードの鋭い蹴りが彼を突き飛ばす。

「うがっ！！」

床をバウンドしてそのまま大の字になって倒れる。本当ならこのまま追い討ちをかけるのだが、ディステリアが即座に起き上がろうともしないので構えを解いた。

「（確かに、こんな感じじゃあ怒るよな・・・・・・）」

好戦的で攻めて、攻めて、攻めまくるアレスにとって、今のディステリアの戦い方は腑抜けにしか見えない。頭ごなしに怒鳴るようなことはせず、セリュードは倒れているディステリアに近付いた。

「どういうことか、聞かせてくれるか？」

「・・・・・・ああ」

―※＊※―

「このままで勝てるのか、か・・・・・・」

模擬戦（にもならない武器のぶつけ合い）を終えてセリュードは、訓練場の端に座ってディステリア相談を受けていた。

「ところで・・・・・・」

少し開きえた表情をしてディステリアから視線を外す。もうとっくに休憩時間が終わったはずのセルスがディステリアの後ろに、同じ状況なはずのクウァルもセリュードの後ろに立っていた。

「あんたら、休憩終わったんじゃないの？」

「こっちが気になって集中できないから、今日の訓練は切り上げてもらっちゃった・・・・・・」

「俺は相手がいなくなったから。彼以外に俺の相手が務まる人はいないし、そんな彼は用事があると・・・・・・」

セルスはなんとなくわかるが、クウァルの理由は少し納得できなかった。が、セリュードはこの際気にしない。

「えっと・・・・・・必ず勝てるって保証はどこにもないんだ。だったら、少しでもそれを確かにするために・・・・・・」

「実力をつけなきゃいけないっていうのはわかっている。わかっているけど・・・・・・そうやって力をつけたはずのユーリがあっさり負けた。決して手を抜いた訓練をしていたわけじゃないのに・・・・」

ということは、それなりに密度の濃い訓練だったのだろう。しかし、それで高めた実力でさえ、これから戦う敵には届かなかった。なら、このまま訓練を積んで相手になれるほど強くなれるのか。

「（なるほど。新兵によくある悩みだ）」

過去、セリュードも同じ悩みを持ったことがある。今にして思えば、早めに吹っ切らないと時間がもったいないため、長く悩んでいるわけには行かない。が、一度悩みだすとなかなか抜け出せない。

「（厄介だ・・・・・・）」

「下らん・・・・・・」

クウァルの素っ気無い一言に、「何？」とディステリアが睨み付ける。

「そんなことでウジウジしている暇があったら、さっさと実力をつけたらどうだ」

「テメエ、人の気も知らないで！！」

睨み合うクウァルとディステリアに、「やめてよ」とセルスがなだめる。

「いや、クウァルの言う通りなこと言う通りなんだが・・・・・・」

「こっちは何もできない無力感に打ちのめされたことがあるんだ。もっとも、お前はそんなもの知らないんだろうがな」

「逃げ惑うことしかできない歯痒さは俺も知ってる。だから、俺は剣を取った・・・・・・だが、まだ足りないんだ！奴らと戦うためには」

「だったら、こんなくだらないことで立ち止まってないで、さっさと進んだらどうだ！？」

「俺とお前は違う！お前のように、簡単に割り切れない！」

「俺が単細胞だと言いたいのか！？」

「もう、いい加減にして！！」

セルスの叫び声でディステリアとクウァルはやっと言い争いをやめる。すでに訓練場にいる隊員たちの視線を集めており、険悪なムードが満ちていた。セルスは恥ずかしさから赤面し、気まずそうな表情をしたセリュードは二人に目を向ける。

「二人とも、言いたいことはよ～くわかった。どっちが正しいとか間違ってるとか言えないが、これだけは確実に言える。俺たちに許された時間はそう多くない」

「その通りだ」と上から声がする。壁際の高い位置に作られた通路の手すりに持たれ、クトゥリアがこちらを見下ろしていた。隊員たちはすぐ身を正し敬礼する。
「いや、いいって。みんな、訓練を続けてくれ」
そう言われた隊員たちが訓練を再開すると、クトゥリアは近くの階段からディステリアたちのいる場所まで降りてきた。
「クトゥリアさん・・・・・・みっともないところを見せてしまいました・・・・・」
「悩んだり意見をぶつけたりすることのどこがみっともないんだ？だったら、会議で討論しているお偉い方みんながみっともないぞ」
肩をすくめるクトゥリアに、「そうですね」とセリュードが同意する。
「ディステリア。焦る気持ちもわからなくないんだが、あんまり根を詰めすぎると倒れるぞ」
「すいません・・・・・頭冷やしてきます」
訓練場から出て行くディステリアに「お、おい・・・・・・」と声をかけるが、答えが返ることはなかった。
「やれやれ。まいったな・・・・・」

第４９話　悩める黒き翼

「あんた、いつからいたんだ？」
眉を寄せるクウァルのほうを振り向くと、「君とディステリアが言い合うところから、かな」と正直に話した。
「彼の悩みに気付かなかったんですか？長い付き合いなんでしょう？」
「何分、忙しい身でね。仲間に相談するものと思っていたのだが、まだそれだけの仲間がいなかったか・・・・・」
クトゥリアは溜め息をつきながら頭をかく。彼は気付いていなかったが、ディステリアにとってその相談できる仲間というのはユーリだけだった。
「情報収集に加え、資金の確保、加えて組織の方針も決めなくてはならない。あと忘れてはならないのが、この組織の立ち位置だ」
「立ち位置？」とクウァルが眉を寄せる。
「なんの後ろ盾もなしに、武力を持った組織の存在が許されるわけがないだろ。一応、連合政府直属の試験運用防衛組織という肩書きがあるが、不安定な立場であることに変わりはない」
「その不安定な立場を固めるために、あなた方は奔走してるのですか？」
「ああ」とセリュードに答える。
「『この組織は神様の加護がある』なんて宗教じみたことを表立って言ったところで誰にも信用されないし、かと言っているかどうかもわからない敵の存在を信じてもらえるかどうかもわからない」

「いるかどうかもわからないって・・・・・・」
驚いた表情でクウァルが口を挟む。
「現に町は破壊されているでしょう!?セリュードさんのところだって、訳もなく国同士が争ったりして」
「それは世間ではどう言われてると思う?」
唐突に聞き返され、クウァルとセルスは戸惑う。ただ一人答えを知っているセリュードは、暗い表情をしている。
「『国を治めるはずの王位継承者の錯乱』だそうだ。世間はその程度しか認識していない」
「それに、我々が〈ディゼア〉と呼んでいる怪物も、魔物の突然変異としか認知されていない。裏で糸を引いてる存在のことなど、誰も知らないんだ」
「そんな・・・・・・」
セルスの呟きだけが、むなしく聞こえる。訓練場ないでは、隊員たちが木の武器をぶつける音が響いていた。

―※＊※―

屋敷の外に出たディステリアは、壁にもたれて空を見上げた。
「(あれからいろんな場所を回って、色んな奴と出会い、戦い、俺は強くなった・・・・・・)」
最初は相手にもならず、旅に出てからも苦戦していたクルキドにもそれほど苦戦しなくなった時、アウグスの都合が着いたと連絡を受けた。そして、この島に渡った。
「(ユーリの実力は俺と互角。なのに、負けた・・・・・・)」
ほぼ同等の実力を持つ自分がついて行っていたら彼が負けることはなかったか。否。まったく相手にならなかった相手に、同等が一人増えたところで結果は変わらない。せいぜいアウグスたちが来る時

間稼ぎをして、重症患者が一人増えるだけ。
「（それに、ミリアが力を覚醒させたおかげで生き残れた、と言っていたな）」
それは最初にクルキドと戦った時、自分にも起こったラッキーパンチ。しかも、自分はその力に耐えられなかった。ただの幸運は二度起きるとは限らない。しかもそれでダメージを受けるなら、重傷を負う、負わないにしたってやられることに変わりはない。しかも、格上相手に手傷を負う技で勝てるか。そんな自爆特攻で仕留められなければ味方の邪魔になるし、仕留めても後の戦闘ではお荷物決定だ。
「（やれやれ、あいつの言う通りだな）」
うじうじ考えている暇などない。ディステリアがすべきことは二つ。今よりも実力をつけることと、使う度に傷を負う力を制御する。パンッと、頬を叩いて気合いを入れ、訓練場に戻るべく屋敷に入った。

―※＊※―

訓練場に来ると、そこには誰もいなかった。自分とクウァルの言い争いが原因、とは思えなかったがどこか後味が悪い。一人寂しく素振りでもしようかと思うと、誰かの気配を感じて振り返る。
「セルスか・・・・・・」
「さっきは・・・・・・クウァルがごめんなさい」
「いいさ。あいつの言う通り、こっちも考えすぎてた」力なく笑って天魔剣を召喚し、そっちに視線を向ける。
「（まずは闇属性の力・・・・・・）」
意識と魔力を集中させた天魔剣から、黒い煙のようなものが揺らめく。すると、手に焼けるような痛みが起こる。
「っつ～～・・・・・・」

「どうしたの？」
「いや、なんでもない。悪かったな、心配かけて」
「えっ。聞いただけなんだけど・・・・・・」
目を丸くするセルスに、「いや、そっちじゃなくて」と返す。
「クウァルのこと」
「ああ・・・・・・」
頷いたセルスから視線を外して、再び天魔剣に目を向ける。が、ディステリアを見ている彼女に気付き、居心地が悪そうな顔をする。
「あの、何か？」
「それはこっちのセリフ。一人で特訓したいんだけど・・・・・・」
「特訓とかは魔力の暴走や事故を防ぐため、最低一人でも付き添いをつけるのが決まりでしょ？」
「（そういえば、クトゥリアがそんなこと言ってたな・・・・・・）」
そんなことを思っていると、近付いてきたセルスは屈んで天魔剣を覗き込む。
「前も思ったんだけど、変わった形の剣だね」
「俺専用の剣らしいんだ」
と言ってもどうして自分の手元に現れたか、なぜ自分専用と思ったかはわからない。そう思っていると、
「・・・・・なんか、変なデザインだね」
思わず呟いたセルスの一言にディステリアは固まった。
「あっ、ごめんなさい。趣味が悪いとかそう言ってるんじゃ・・・・・・」
「変わってると思うのは当たり前だと思う」
実際、目の前に現れた時は変わった剣だと一瞬だけ思った。状況が状況なだけに、深く考えず手に取ったが。
「ねえ」
「ん？」
「特訓するなら、誰か付き添いの人連れて来ようか？」

「ああ、そうだな。いざ暴走があった時に収拾がつかないと大変だし」

というのは建前。自分の力のことはセルスたちには知られたくない。光属性の力はともかく、黒魔術と忌み嫌われている闇属性の力も使うので、知られると避けられてしまうかも知れない。

「じゃあ、探してくるね」

「ああ」

適当に答えるとセルスは訓練場を出ようとする。出入り口にまで差し掛かると、足を止めて少し後ろに視線を向ける。天魔剣を逆手に持ったディステリアが、一人でいるためか寂しそうに見えた。

「私・・・・・・」

「ん？」

「ディステリアが闇の力を持っていても、気にしないから」

「はあっ！？」

驚いて声を上げたディステリアを残して、セルスは訓練場を後にする。

「あいつ・・・・・・なんで知って・・・・・・」

クトゥリアが教えたか。いや、違う。確かにふざけた男ではあるが、仲間の秘密を教えるような奴ではない。では、なぜか。セルスに会ってからのことを思い返していると、

「あっ・・・・・・」

思い出した。アテナとの共闘でテュポニウスにトドメを刺す時、思いきりフォーリング・アビス・・・・・・闇属性の技を使ってしまった。

「・・・・・・・・・俺の凡ミスかよ」

眉を寄せて苦い表情をするが、ふとさっきのセルスの言葉が頭をよぎる。

『私・・・・・・ディステリアが闇の力を持っていても、気にしないから』

「・・・・・闇の力がどんなものか、知っててていってるのかね」
そうぼやきつつ、ディステリアは天魔剣に魔力を込めた。今度は、光属性の力を。

―※＊※―

ディステリアの修行の付き添いを探していたセルスは、空いてる人を見つけられないままクウァルとセリュードに会う。先ほど訓練場であったことを話し、どうするか相談していた。
「なるほど。そういうことがあったのか・・・・・・」
「闇属性の力、か。確かに忌み嫌われはしてるよな」
「それで、どうしたらいいのか、って私・・・・・・」
クウァル、セリュード、セルスの順に呟くが、その中でクウァルは厳しい表情をしていた。
「その前にお前、反省すべきことがあるだろ」
唐突にクウァルに言われ、セルスは首を傾げる。
「お前、ディステリアが闇の力を使うこと、あいつからちゃんと聞いたのか？」
「えっ？ううん。使ってるのを見て、それから気にしないって言ったの」
「で、ちゃんと話してもないし、他に話してもいいって言われてないのに、俺たちに相談か」
「えっ、だって・・・・・・他に知ってる人がいるんだったら、仲間に話しても・・・・・・」
「いいわけないだろ！！」
怒鳴ったクウァルがテーブルを叩いて立ち上がる。無意識下での制御ができるようになったからか、怪力の持ち主である彼に叩かれて

もテーブルは無事だ。
「仲間や友達の間でも、隠し事の一つや二つあるもんだ。それを明かすのは本人次第、赤の他人の俺たちが口出すことじゃない」
「だな。はっきり聞いてないんじゃ、憶測で入ってる部分もあるだろ。そこに余計な尾ひれがついたら、取り返しの使いのことになる」
セリュードの指摘に、セルスはやっと自分がしでかしたことの重大さがわかった。
「・・・・・私、なんてことを・・・・・」
「まあ、相談相手を俺たちにしたり、人目のつかない場所に移ったことも踏まえて、頭ごなしに叱るのはやめよう」
「お前、女に甘いとか言われないか？」
「言われない。ってか、どういう意味だ」
クウァルとセリュードは睨み合うが、セルスは落ち込んで二人を止められなかった。

―※＊※―

再び訓練場。ディステリアの元に、セルスとセリュードがやって来ている。
「で、俺の隠し事をうっかり他の奴らに話してしまった、って訳か？」
「ごめんなさい。私が迂闊だった・・・・・」
「まったくだ」と言われ、セルスはますます落ち込んだ。
「それで、俺と相反する妖精の力を持つセリュードは、俺をどうしたいんだ？」
「どうしたいって、どうしようとも思っちゃいないよ。あんたは恩人の一人なわけだし・・・・・」
「俺はほとんど役立たずだったぞ」

「それでも変わらない」とセリュードは穏やかに言う。
「それに、妖精の力が闇属性の力と相反するって、偏見に近い見方だぞ。邪悪な力を持つ邪妖精もいることだし・・・・・・」
「しかし、妖精の先祖って天使か力を失った神々でしょう？」
「天使ってのは俗説だ。神々は・・・・・・まあ、ダーナ神族がそうだし・・・・・・」
「となると、必然的に妖精が持つ力の属性は光に・・・・・・」
「だあああああああああっ、ちょっと待った！」
切りがない言い争いをセリュードが無理やり断ち切る。
「俺たちはこんな不毛な争いをしに来たんじゃない。君に言いたいことがあって来た」
「なんですか？」とディステリアは不満そうに聞き返す。
「あんまり一人で背負い込むな。なんでも話せって言うつもりもないし、確実に正確な答えを出せると言うつもりもない。だが、もっと他人を信じてもいいんじゃないか？」
「他人を、ですか？」
確かに、孤立していたイグリースにいた時のことを引きずってか、ディステリアはあまり他人に心を開かない。光と闇の力のことを相談しているのは、目撃者であるクトゥリアとユーリぐらいなもの。思えば、何を持って彼らを信用しようと思ったのか。
「・・・・・・・・・わかった、話すよ。俺の中にある、光と闇の力のことを」
「光と・・・・・・・・」
「闇・・・・・・？」
「二つあるって知らなかったのかよ」
眉を寄せたディステリアの一言に、セルスは笑って誤魔化す。
「そういえば、俺の前で使った技は光の属性だったな」
「えっ、そうなんですか？・・・・・・って、光と闇って」
「相反する力は反発する。どうして二つの力を持てたんだ？」
「こっちが聞きたいよ。おかげでいつも、技を使う度にダメージま

で受けて・・・・・・」
「「ダメージを受ける!?」」
驚きの声を重ねた二人に、ディステリアはしまったと思った。
「強力な技は使う度に反動を負うと聞くが、お前の技はそれほどのものとは思えない」
「そうなんでしょうね。クトゥリアさんやアウグスさんはそう言ってましたし・・・・・・」
ディステリアが頷き、セリュードが考える。
「ねえ。それ以前に、光と闇って水と油みたいな関係なんでしょう？どうして二つの力をディステリアが持ってるの？」
「水と油って・・・・・・」
「少し違うな」とセリュードが口を出す。
「光があるからこそ闇が生まれ、闇があるからこそ光が存在する意味が生まれる。二つは相反すると言うより、常に存在しあう表裏一体の関係なんだ」
「だったら、ディステリアが光と闇の力を合わせ持っていても、不思議じゃないってこと？」
「なんだけど・・・・・・光と闇の両属性の力を発現した人なんて聞いたことがない」
「だよね。そもそも、魔力の『属性』って何？」
セルスの何気ない一言に、ディステリアとセリュードは固まる。

第５０話　羽ばたく白い翼

セルスの禁断の一言に思考がフリーズしてからしばらく。
「ともかく・・・・・・」
疲れた表情で頭を押さえたセリュードが首を振る。
「力を使いこなせない理由・・・・・・」
「ぶっちゃけ、俺が弱いから」
ディステリアの爆弾発言に、セリュードとセルスがこける。
「いや・・・・・・それはおいといて。何か他に思い当たることは？」
「闇の力を使うから、光の力が反発してる・・・・・・いや、逆かも」
「なら、今なんともないのはなぜだ？使う時だけ作用するなんておかしい」
「何？」
「えっ？」
顔を向ける二人に、「気付いてなかったのか？」とセリュードは目を丸くする。
「戦闘の時だけどこからか湧いてくる、なんてことあるわけないだろう」
「いや。ディステリアの剣はそうだし」
「そりゃ、俺が召喚するから」
「召喚するって、どこから？」
「どっからか」と適当な答えに、セルスは肩透かしを食らったよう

な顔をする。
「（アストラル界なんて、あるかわからない世界から呼び寄せてるなんて、口が裂けても言えるか）」
難しい顔をしてソッポを向いていると、訓練場に誰かが入ってくる。
「結局、その闇の力ってのはどうして使いこなせないんだ」
「クウァル・・・・・・」
セルスが呟くと、「知るか」とディステリアは素っ気無く返す。
「原因がわかってたら、さっさと対応くらいしてる」
「簡単に言うな。俺と同じ原因だったらどうすぐ対応するんだ？」
「？お前と同じ？」
意味がわからずクウァルのほうを向くと、他の二人も向いている。
「俺が、自分自身の怪力を制御できなかったのは、そいつから目を逸らしていたからしい。拒絶し、見ないふりをして、制することなく放置していた。だから、自由に操るどころか制御もできない」
見つめた自分の手を握り締め、クウァルは続けた。
「特異な力も自分の一部。そう受け入れて初めて、力ってのは制御できるらしい」
「俺も、俺の闇の力を拒絶してるから、反動を受けるって言いたいのか？」
「それはわからない。これは開くまで俺の場合だ」
投げ槍に答えたクウァルに、ディステリアは不満を覚える。
「だが、似てるんだよ、お前。怪力を嫌ってた頃の俺と。こんな力、なければよかったって思ってるんじゃないのか？」
「そんなこと・・・・・・」
言いかけて、ディステリアは黙った。闇属性の魔術は呪殺や精神攻撃に近いものが多いため、ほとんどが禁術に分類され嫌われている。そんな世間を知っているため、ディステリア自身も自分が持った闇属性の力を疎んでいたのか。
「・・・・・・・・受け入れる、か」
小さく呟くと、天魔剣に闇の力を集中した。

「お、おい・・・・・・」
セリュードが止めようとするが、ディステリアは集中を続ける。逆さにした状態から立てた状態に持ち直し、黒い魔力が揺らめく天魔剣をゆっくり上げる。
「（受け入れる・・・・・・
闇だろうと光だろうと、この力は俺の一部・・・・・・）」
クウァルに言われたことを頭の中で繰り返しながら、ディステリアは集中を続ける。
「（それを受け入れる。心の底から・・・・・・）」
どことなく手応えを感じ、ディステリアは目を開ける。隅に寄せられたターゲットを見据え、天魔剣を振り下ろした。軌跡から黒い刃が生まれ、ターゲットを砕く。手の痛みは、ない。
「やった・・・・・・やった、制御できた！」

ズキッ！！

喜んだ矢先、天魔剣を握ってる手に痛みが走った。思わず離した剣が床に落ちると、痛みに顔を歪めながらグローブを取る。いつも通り、手の平はただれている。
「・・・・・なんだよ。結局、痛みが遅れただけか・・・・・・」
苦々しく呟くと、セルスはガッカリしたような顔になり、セリュードとクウァルも小さく溜め息をつく。
「大体、さっきの仮説どおりだったら、どうして光属性の技を打った時も反動が来るんだよ」
「知るか」
「お、お前・・・・・・」
挑発気味に返したクウァルにディステリアが眉を動かす。ケンカに入りそうだったのでセルスが止め、セリュードの判断でディステリアの自主連を切り上げさせた。その様子を、入り口の陰から誰かが見ていた。

「・・・・・ほう。なかなかいい感じじゃないか」
陰に隠れていたクトゥリアは、どことなく満足そうに呟いた。

―※＊※―

食堂員から飲料水をもらうと、セリュードはそれをディステリアに差し出す。
「ほら、飲んでろ。体調管理もしっかりやっておかないとな」
「はあ・・・・・・」
受け取った飲み物を口にすると、半分ほど残ったコップをテーブルに置く。
「例の力のことか」
「ええ。早く自在に操れるようにしないと、奴らと戦えるかどうか」
「焦る気持ちはわかるが、それが空回りすると悪循環に陥るぞ」
近くにイスに座ったセリュードの言葉には、どこか重みがあった。
経験した者だけが出せる重みが。
「セリュードさんも、焦った時があったんですか？」
「当たり前だ」
「えっ、嘘？」
目を丸くするセルスに、「どんな人間だって必ず体験する」と言う。
「俺も騎士団に入ったばかりの頃は、早く強くなろうと突っ走って、よく先輩に怒られた。妖精の力も超感覚くらいしかなかったから、足を引っ張らないように、ってな」
「それで、今のように強くなったんですか？」
「強くなれたのは、先輩たちが止めてくれたおかげだ」
思わぬ言葉にディステリアは目を丸くしたが、その反応が予想通りだったのかセリュードは呆れた顔をした。
「あのまま突っ走ってたら、俺は確実に潰れていた。訓練は続ける

からこそ意味がある。実力ってのは、ゆっくり時間をかけて積み上げるもの。だが、自分の限界を超えた無茶を続けていたら、逆に自分を壊すことになる。今の俺があるのは、先輩たちが気にかけていてくれたおかげでもある」

「じゃあ、密度の濃い訓練って、続ける意味があるんですか？」

「そりゃ、そいつの限界ギリギリのところで調整してるんだろ？訓練を受ける奴の体を壊さないように、な」

しかし、実際にその『密度の濃い訓練』をする人がいるのか、セリュードは知らなかった。それが、今この島にいるということも。

「そうよね。私とクウァルが受けてる訓練も、実際きついし」

「そうか？俺から見ればそれほどでもないが」

眉を寄せるディステリアに、「私たちの苦労も知らないで～～」とセルスが文句を言うと、セリュードが苦笑する。

「確かにディステリアから見れば緩いだろうが、セルスとクウァルは一般人だろ？急に君が受けるような訓練に入ったら、確実に潰れる」

「そっか、私たちに合わせてくれていたんだ・・・・・・」

嬉しく思い感慨に耽っているセルスに、ディステリアは少々呆れた視線を送る。が、ほんの数秒でそれを外してセリュードのほうを向く。

「ところで、セリュード」

「なんだ？人がせっかく持ってきたんだから、ぬるくなる前に飲んでくれないか？」

「ああ」と頷いて残った飲料水を飲み、空のコップを置く。

「・・・・・・って、そうじゃない。光の力を操る方法を教授してくれ」

「妖精の力の属性は大半が光、だったな。だが、俺のはかなり荒いぞ？」

「構わない。コツを掴むきっかけになれれば」

「そうだな。きっかけはどこに転がってるかわからない。申し出を

受けよう」
「助かる」とディステリアの表情が明るくなる。
「ただし、それは明日からな。今日はもう、訓練場が閉められてるだろ」
「なっ・・・・・・」
ディステリアは絶句した。ここでは、余分な自主練を押さえるため、決められた時間から訓練場を占められることになっている。それなら別の場所で自主練をすればいいのだが、警備員として巡回中のエンゼルやらに見つかると厄介なので誰もやれない。
「時には、耐えることも大事だ」
「むむ・・・・・・」
落ち着いたセリュードの言葉に、ディステリアは小さく唸った。

―※＊※―

夜。自室のベッドの上で、ディステリアは考え事をしていた。
「（受け入れる、か。俺は闇の力を拒絶してるのか？）」
振り返ってみれば、そう思ったことはない。敵に勝つためには、光の力だの闇の力だの、聖なる力だの邪悪な力など拘ってる暇などなかった。
「（だが、気付かないところでは拒んでいたのかもな・・・・・・）」
そんなことを思いながら、目を閉じ眠りについた。

―※＊※―

燃え盛る町の中にディステリアは立っていた。周りは瓦礫と血だらけの死体のみ。目を覆いたくなる光景の中に、騒然とした表情で立っていた。

「なんだ、ここは・・・・・・」

〔お前の故郷の最後の姿だ・・・・・・〕

聞こえた声に目を見張る。時々見る夢の中に響く声。ねちっこく、耳障りな声。

「・・・・・・・・・久しぶりだな。できれば、二度と聞きたくなかったが」

〔ディステリアよ。我が軍門に下れ・・・・・・貴様が身を寄せている連中では、今貴様がいる世界も故郷と同じようになる〕

「クトゥリアたちがこの光景を再現するというのか？ふざけるな！確かに胡散臭いが信用はできる！」

〔そうではない。奴らは『もたらす』のではない、『回避できない』のだ。奴らの『今の世界を守る』やり方では、破滅の未来は変えられない〕

「なぜ言い切れる！」

〔ぬるいのだ！今ある『居心地のいい場所』に固執している。そんなやり方ではだめなのだ！破壊しなければならない、新たな世界創造のために〕

「だから、妙な怪物を使って人間を苦しめるのか？」

〔なっ！？〕

「気付かないと思っているのか？テメエは俺のいる場所を否定し、引き込もうとしている。抜けるように言い聞かせるならそう思わなかったが、あんたの言い方は俺を自分の元で戦わせたいように聞こえるぞ」

〔ぐっ・・・・・・〕

姿を見せない声の主が怯むと、指を突き出して叫ぶ。

「俺はテメエの言う通りになんかならない！ついでに言わせてもらえば、クトゥリアさんやあいつが見出した仲間を信じる。俺は、今

の道を曲げない！」
〔・・・・・・・・後悔することになるぞ〕
失望の色に染まった声が響くと、先ほどまで感じていた禍々しい気配が消える。周りはまだ、炎が燃え続けている。
「ここは俺の夢の中・・・・・・いや、精神世界なのか？だったら・・・・・・」
周りを見回し、「出て来いよ！」と声を張り上げる。
「俺が使う光と闇の力の化身！俺の一部って言うなら、俺の精神の中にいるはずだろ！」
声は空しく瓦礫の積もった焼け野原に響くだけ。落ち着いたディステリアは表情を引きつらせる。
「・・・・・・・・アホくさ。考えてみれば、どうして力の化身なんて別の意思が俺に宿ってんだよ」
きっかけは食堂でのセルスの一言。

『魔術は神様の使いが人間に宿るから使える力なんじゃないのかな？』

心のきれいな人間に神などの超上的存在が力の一部を与え、魔術に似た力を発現させた話は多々ある。だが、だからってその化身が自立した意思や姿を持つなど・・・・・・。
〔失礼なことを考えてるな〕
後ろを振り返ると、鏡に写ったような自分自身が立っていた。
「お前は・・・・・・」
〔なんだ、自分で呼び出しておいてその反応は？〕
「じゃあ、お前が・・・・・・光と闇の力の化身？」
〔違う〕と目の前のディステリアはあっさり否定する。
〔俺はお前の中の、闇の力に対する恐怖心だ〕
「はあっ！？」
〔わかってんだろ？闇は愚か光の力にも、自分が飲み込まれるんじ

ゃないかって不安があるって」
「それが・・・・・光と闇の力を使うたび、俺が傷を負う原因」
〔また間違えたな〕と目の前のディステリアは呆れる。
〔傷を負うのは単に使いこなせてないから。だが、力を恐れ、その恐怖を拒んでいる限り、本当に制御はできない〕
「だったら・・・・・」
ディステリアは目の前の自分を受け入れようと進み出る。しかし、目の前の自分は後ろに下がる。
〔俺はお前の鏡だ。お前の心が俺の行動だ〕
「だから、俺はお前を受け入れる！」
〔口ではそう言っても、心の奥深くでは拒んでいる〕
鋭い指摘に、ディステリアは目を見張る。何も言えないでいると、周りの景色が消えてきた。
〔もう目覚めだ・・・・・・〕
「ま、待て！！」
消えていく目の前の自分に手を伸ばすが届かない。
〔貴様が俺を受け入れる日・・・・・・待っていてやるよ・・・・・・〕

―※＊※―

「俺は――――！！」
飛び起きたディステリアはベッドの上にいた。窓からは朝日が差し込んでおり、自然と深呼吸した。
「拒んでるのか・・・・・俺の力を・・・・・・」
信じられない。だが、自分自身のことをどれだけ理解できてるか、自信はない。しばらく下をうつむいていたが、厳しい目つきになり前を見る。

「・・・・・これ以上、悩んでいられるか」
昨日クウァルに言われたとおり、立ち止まってる時間はない。迷いながらでも進もう。ディステリアはそう心に決めた。

それが己を受け入れる、第一歩となった。

おまけ。
「は～～～っくしゅん！！」
「もう。九月に入って気温も低くなってきたのに、布団もかけずに寝るなんて信じられない」
ベッドの上で顔が赤いディステリアがくしゃみをする。近くにいたセルスは苦い顔をしており、後ろのクウァルは意地悪そうな顔をしていた。
「バカは風邪を引かないというが、俗説は当てにならないものだな」
「どういう意味だ・・・・・ゴホッ、ゴホッ」
「ちょっと、クウァル。いらない挑発はしない」
「何やってんの、お前ら」
部屋のドアが開くと、入って来たセリュードが目を丸くしている。
「いえ。今日の訓練、ディステリアの調子が悪そうだったんで気になって」
「何かと思ったら、風邪ですってよ」
「・・・・・・・・・体調管理に気をつけるよう言ったはずだが」
「ずみません・・・・・」

鼻声になったディステリアが謝るが、セリュードはこれ以上とやかく言うつもりはなかった。
「さ。見舞いもいいが、あまり騒がしくしたら患者にも迷惑だろう。俺たちはおいとましよう」
「そうですね。ディステリア、お大事に」
三人が出て行くと、ディステリアはティッシュを出して鼻をかんだ。
「くそ～～～・・・・・・」
ゴミ箱にそれを捨てながら、ひどく情けない気持ちになった。

幕間2

エジリア大陸の近くに、海を隔てて存在する島国。別の大陸の者は『シャニアク国』と呼んでいる。この国は大きく分けて、大小四つの島にわかれており、北端にある島〈蝦夷（えぞ）〉に住む者を『エミシ』、南の列島に住む者を〈列島人（れっとうびと）〉と呼び、その間に位置する、国で一番大きく東西に分かれ広がる二つの島〈本土〉に住む自らを『大和人（やまとじん）』と名乗っていた。

これらの島を含めて『日ノ本』という一つの国なのだが、本土に住む大和人は自分たちを『神より生まれし者』、他の二つの島に住む者を『人外の者』と言って蔑み、自分たちこそその土地の支配者にふさわしいとし、幾度も攻め入った。『エミシ』『列島人』というのも、本土に住む者の一方的な呼び方に過ぎない。もちろん、蝦夷、南の列島に限らず、本土の神々の介入によりその争いは長期化せず、長くても一ヶ月で本土側の敗戦に終わっていた。

神々はこれで、もう愚かな争いは起こさないだろうと思った。彼らの願うとおり、時の支配者はこの実情を真剣に受け止めていた。

西の都の支配者は今までの行いを『愚行』と悔い改め、人間は元よりそれ以外の種族との共存を目指す。まずは自分たちの身近な存在でありながら追いやっていた『妖怪』との交渉。今までのこともあり難航し続けるも、なんとか実現にこぎつけることができた。だが、その共存はいつ崩れてもおかしくないほど危うく、対処のため陰陽師も存在し続けている。

東の都の支配者は強硬な姿勢を崩さなかった。自分たちの平和を保つため力を求め蓄えたが、敗戦の記憶と犠牲になった人々の悲しみがそれに待ったをかけていた。しかし、『今まで戦に敗北したのは、指導者が神から見放されていたからだ』という声がどこからか上がり、今度は真にこの国の支配者に相応しい者を決めるため争いが起こりだし、西本土内でもその影響を受けた。

さらに東の都は、友好を結ぼうと別の国からはるばる来た使者たち

を、国内での戦(いくさ)を有利に進めるための武器を手に入れるパイプ役にしたり、なんの罪もないにも拘らずただ気に食わないという理由で殺したりしていた。その為、外国から見てこの国については悪い噂が少なくなかった。これには本土の神々も呆れ、ついには争いを止めることをやめてしまった。

国内には外国からの商人たちの影響により、東西の地域には多くの東洋文化が入り込んでいた。ある時の国を治める指導者は国の全てを東洋文化に改革しようとしたが、それに同調する改革派と反発する保守派に分かれ、大きな争いが生まれた。結果は、外国の最新式武器を輸入した改革派の勝利。立て続けに起きた大きな戦に疲れた武士たちは、主君の命令があっても戦おうとしなかった。だが、起きた戦いのツケが跳ね返る。争いで敗れた者たちは怨念となり、町を変えようとする者たちを次々と殺害し、国の仕組みも文化も改革が中途半端で滞っている状態のまま丸投げされている。

それでも、風習の変化により武士は髪形をチョンマゲにする必要もなくなり、身分制度も消え、江戸東慶の木造住宅家の中には電化製品が溢れている、という奇妙な状態を作っていた。ちなみに、『武士』は身分ではなく刀を携帯している人に授けられる称号のようなものとなっている。

こうして、ゆっくりであるとはいえ、国は変化していき、長い年月が流れていた。

もちろん、それが全てという訳ではない。

―※＊※―

『――異文禄』と書かれた本を持ち主が閉じる。題名のところは黒ずんでいる上に擦り切れていて、なんの異聞禄か読めない。

「本当に、この国に協力者となりえる者がいるのか？」

「わかりません・・・・・・」

マントを身に着けた隻眼の老人に、一人の若者が答える。

「しかし、世界の全てを回ったわけではないが、このような本が出回っているところなど見たことがない」

「当然です。その本の著者は、出版前に自ら命を立ったのですから」

「何？」と、隻眼の老人が眉を寄せる。

「この本を書いた者・・・・・・国の政府にスパイ疑惑をかけられ、弁解を許されない一方的な拷問で心身ともに深刻なダメージを受けた。彼女の故郷の政府が助け出した時には、廃人寸前だったと聞いています」

「すると、自ら命を絶った原因は・・・・・・」

「その後です」と、男性は悲しげな顔をした。

「彼女はスパイなど師弟ない。ただ、真実を知るために取材をしていた。けれども国が外交で不利な立場に立たされてしまったため、

同じ国の人たちは彼女の味方にならなかった」
「それが、自ら命を絶った原因か」
「ええ・・・・・・」と男性が頷くと、「惨いな」と老人は呟いた。
「やりきれないのはその後です。彼女が自殺して外交が持ち直し始めると、国は一転して彼女の肩を持つようになった」
「その頃からか・・・・・・シャニアク国が『愚者の国』と呼ばれるようになったのは」
「いえ。そういう名称は昔からありました。ただ、頻度が増えたというか・・・・・・」
「なるほど・・・・・・」と呟くと、隻眼の老人は本に向けていた視線を若者に移す。
「だが、お前はそんな身勝手な人間を守るために命を賭けようとしている。それは、どうしてだ?」
「っ!!・・・・・・どうして、そんなことを聞くのですか?」
「いや。お前が死に場所を求めてるのではないか、と思ってな」
隻眼の老人の指摘に男性の顔が強張る。
「まあ、私の思い違いならいいが・・・・・・」
「・・・・・・失礼します」
丁寧に頭を下げて歩いて行く男性の後ろ姿を見送り、隻眼の老人は小さな声で呟いた。
「命を粗末にするでないぞ、パラケル」

―※＊※―

永い時の流れ。人間が寿命を向かえるほど長い年月。その中で国は変わって行った。

他の種族と共存を目指し、指導者たちがその身を削る西本土。その中心となるは葛野愛宕群（かどのおたぎぐん）に属する古都、平安京都（へいあんきょうと）。またの名を『たいらのきょうのみや』。現代に蘇った古都は、赴きそのままに新たな姿に変わり続ける。

自らの平穏のため強靭かつ優秀な指導者を選ぶため、覇を競い合う東本土。その中心となるは豊島群（とよしまぐん）に属する都市、江戸東慶（えどとうけい）。現代を生き続ける首都は、開発と共に進歩を続けている。

陸地だけでなく、心も離れてしまった二つの本土。かつて同じ志を持った『西』と『東』は袂を分かち、二つの陸をつないでいた橋は『東西の本土をつなぐだけの道』となってしまった。

特別編1　都を包む影（前書き）

主人公であるディステリアたちがしばらく出ないため、特別編と銘打っています。『本編でも構わない』という意見がありましたら、すぐ修正いたします。この前書きも消すけど・・・・・・

特別編1　都を包む影

愛宕山の中腹を一人の男が登っている。その男は昔ながらの服とは違う、丈と袖の長い洋服をまとっており、異国よりやって来たということは容易に想像できた。その男は、古い大木の間にかけられた注連縄(しめなわ)を潜り、山の中の開けた場所で修行をしている烏天狗と大天狗たちの所に辿り着いた。

「ん？なんだ？」

「人間・・・・・・？」

訪れた男に、組み手をしていた烏天狗たちが戸惑いの声を上げる。自分たちの存在を容認している山伏たちでさえ、恐れを抱いて用事があっても入ってこないというのに。

「愛宕山、太郎坊さまですね？」

「ん？そうだが・・・・・・お主は何者だ」

奥にいた大天狗が聞き返すと、男は臆することなく答えた。

「私は、昇天という者です」

怪しく笑う男に、「人間が私に何用だ？」と太郎坊が聞く。

「はい、全国に散らばる大天狗の下を訪れ、その力の半分以上を奪って来いと・・・・・・言われましてね！！」

突然、太郎坊を殴り飛ばし、後ろの大木にぶつけた。

「太郎坊さま！！」

「貴様ああっ！！何をする！！」

突然の攻撃に烏天狗たちはいきり立つが、「待て！皆の者」と、木に叩きつけられている太郎坊が制した。

「昇天・・・・・・と言ったな。お主にその命令をしたのは何者だ」

「さあね。こっちも聞いてやる義理はないし、あんたらに恨みはないんだけど・・・・・命令なんでね」
昇天が突進するや、太郎坊はすぐ右に飛び、太刀に手をかけた。だがその時、昇天の背中から腕が生えてきて首を掴み、腕はどんどん伸び、別の木に太郎坊を叩きつけた。
「ぬおっ！！」
「太郎坊さまを離せ！！」
一人の烏天狗が昇天に斬りかかって来たが、昇天は太郎坊の首を押さえている腕を縮めてその攻撃をかわし、剣に変化させた右腕を振り下ろす。
「チェックメイトだ」
山に轟音が響き、驚いた鳥たちがはばたく。渾身の一撃を放ち、必ず仕留めたと思っていた昇天だったが、太郎坊はその攻撃を太刀で受け止めていた。
「ば・・・・・かな・・・・・」
驚きを隠せない昇天。太郎坊は、神通力で首を絞めている感覚を錯覚させ、なおかつ反撃の機会をうかがっていた。それを今だと直感した太郎坊は
「ぬんっ！！」
思い切り太刀を振り、昇天を吹き飛ばした。空中でブレーキをかける昇天だがそのすぐ後、横に現れた太郎坊に驚く。太郎坊はすぐさま左下に構えた太刀を振り昇天を吹き飛ばした。
「ぬおおおぉぉぉぉっ！！」
耳を突く轟音と共に地面に叩きつけられた昇天に、太刀を向けて太郎坊が問う。
「さあ、誰の命令か言ってもらおうか」
「それはできません」
謎の声に太郎坊が気付いたその時、疾風が吹いて太郎坊と昇天の間に一人の男が現れた。
「ヘイルさま」

傷付いた昇天が呟くと、ヘイルと呼ばれた男は太郎坊に視線を向けたまま命ずる。
「退くぞ」
「し、しかし・・・・・・」
立ち上がりつつも膝を突いた昇天は反論しかけたが、「上からの命令だ」とヘイルが言う。
「わかった・・・・・・」
昇天が頷くと、再び疾風が吹き、二人の姿は跡形もなく消えうせた。
「逃がさん。追うぞ!!」
昇天の後を追おうしていた烏天狗たちを、「待て!」と太郎坊が止める。
「太郎坊さま、なぜですか」
「あの者、相当の手練だ。おそらく、お主らでは敵わないだろう」
「くそっ・・・・・・」
最初が不意打ちとはいえ、相手は太郎坊を追い詰めたので、自分たちとの実力差は明白だった。烏天狗たちは悔しがるしかなかった。

―※＊※―

山の中腹を、昇天とヘイルが歩いていた。
「よろしかったのですか?このまま引き下がって」
「ああ。計画の成就には、別の方法をとる必要がある」
その時、昇天たちと山に響き渡った音を調べるために山に登ってきた山伏たちが鉢合わせになった。
「「あっ・・・・・・」」
しばらくの沈黙の後、「お主たちは、何者だ?」と山伏が叫ぶ。
「え、ええと・・・・・・俺たちは・・・・・・」
ヘイルは「バカ。さっさと行くぞ」と言うとつむじ風を起こし、二

人は姿を消した。
「・・・・・なんだったんだ？」

―※＊※―

平安京都。その北東にある『鬼門』と呼ばれる場所に、一見の和風式の屋敷があった。『鬼門』とは、鬼や魑魅魍魎が入りやすい不吉な方角とされており、この屋敷は、そこを塞ぐ『門』の役目を持っていた。その屋敷の持ち主こそ、都最強の陰陽師と謳われる陰陽師、安倍晴明（あべのせいめい）だった。

太郎坊が襲撃を受けてしばらくした頃。どこからか晴明が屋敷に帰ると、何やら中が騒がしかった。
「んっ？何やら中が騒がしいが・・・・・」
首を傾げているところに「お帰りなさい、晴明さま」と、屋敷の中から一人の女性が出迎えた。
「おお。貴人（きじん）か。この騒ぎは何だ？」
「はあ。実は、騰蛇と太陰が喧嘩をしてしまって。今、六合が止めに入っているんですが、一向に終わらないんですよ」
「何？六合にしては珍しいな」
貴人、騰蛇（とうしゃ）、太陰（たいいん）、六合（りくごう）。どれも晴明が従えている式神の名で『十二神将』の仲間である。二人は、いまだ騒がしい屋敷の座敷に入って行った。
「だから、晴明さまはそんな贈り物では喜んで下さらないぞ！晴明さまへの贈り物は酒だ！」
「何を言う！晴明さまは博雅（ひろまさ）殿とよく杯（さかずき）を交わされる。だから杯の

ほうがいい！」
「酒！」
「杯！」
「ちょっと二人とも」
広い部屋の中にいる大勢の人の姿を式神の内、騰蛇と太陰は言い争っており、それを一人の女性、六合がとなだめようとしている。しかし、事態は一向に静まる気配を見せなかった。
「私は両方でも良いぞ」
「「「「「「！？」」」」」」
突然した晴明の声に、屋敷の部屋の中にいた式神たちは全員、騒然となった。
「せ、晴明さま・・・・・・！」
青竜の声を皮切りに、「どわわわわわっ！！」と部屋の中にいた式神は、慌てて何かを隠した。
「皆の者・・・・・いったい、何をしていたのだ？」
「「「「「な・・・・・・なんでもありません！」」」」」
「そうか？何か隠したようだが？」
「「「「「な・・・・・・何も隠してません！」」」」」
「本当か？」
「ほ、本当です」
騰蛇がと言うと晴明が「そうか」と言って、部屋の前から去る。式神たちは「ホッ」と溜め息をついた。
「やはり、何かを隠しているか？」
晴明が再び顔を覗かせると、「「「「「「どわ～～～～～っ！！」」」」」」と全員慌てふためいた。

―※＊※―

「あっはっはっはっはっ」
笑ったのは、晴明の友人で都を守る六衛府の一つ、右近衛府中将（みぎこのえふちゅうじょう）に属する、源博雅（みなもとのひろまさ）だった。
「笑いごとではござらん、博雅。私はてっきり、皆に嫌われたのかと思ったのだぞ？」
「本当か？とてもそう思っていた風には聞こえんぞ」
屋敷の軒で話をしていた二人は再び笑った。
「しかし、お前への贈り物で言い争っていたとは、な」
「あまり大きな声で言うな。私は気付いてないことになっている」
「知っていたのか？」と、博雅が目を丸くする。
「まあ、皆は私を驚かせようと思っているようだが。それに乗ってやるのも悪くはない」
「晴明らしいな」と、博雅は笑った。
「ハハ、そうか？ところで、何かあったのか？ただ遊びに来た訳ではなさそうだが・・・・・」
「おお、そうだ。最近、朝廷の内部に何かを企む不貞の輩がいるらしくてな。私はそれを調べるように言われたのだ」
「まさか博雅。それを私に調べろと？」
「いや。私が調べてほしいのは、もう一つのほうだ。その不貞の輩が、どうやら物の怪の力を取り込もうとしているらしい」
「物の怪の？」
晴明は聞き返すと、ふと、朱雀門の上で見つけた怪しい二人組みのことを思い出した。門を通ったのは物の怪であって、物の怪でない。そう言う奇妙な気配を出していた。その二人こそ、愛宕山で太郎坊を襲った昇天とヘイルだったが、晴明はそこまで知らない。
「・・・・・邪悪な気配を漂わせていた。だが、結界により悪霊はこの京の都に入ることはできない。いったい、何者だ」
そう呟く晴明に、博雅は首を傾げていた。

―※＊※―

この頃、愛宕山の天狗たちは何者かによる強襲事件を経て、烏天狗たちに警戒、および各地の大天狗たちへの伝達が行われた。その途中、愛宕山の烏天狗の一人、飛天は安倍晴明を尋ねるべく平安京都へとやって来ていた。

「悪いが、物の怪の類（たぐい）はお通しできない」

平安京都の主な入り口である朱雀門の前で、一人の門番と、やや首の長い一人の烏天狗が言い争っていた。

「物の怪の類って、私が行くって伝達は受けてないのか？」

※平安京都を治める長が定めた条例。それにより一部の妖怪は、平安京都への出入りを許されている。しかし、それに便乗して都内で悪事を働く妖怪も後を絶たず、この条例は月単位で微調整が行われている不安定なものとなってしまっている。今は『上層部が許可を下した場合に限り』という一文が加わり、飛天ら天狗などの条約を結ぶ際に交流があった妖怪でさえ足止めされている。

「そうは言っても・・・・・ああ、田村麻呂さま」

ちょうどそこに、検非違使（けびいし）に属する役人、坂上田村麻呂（さかのうえたむらまろ）が大軍を率いて通りかかった。

「どうしたのだ？」

「はあ、この烏天狗が都の中に入りたいと・・・・・・」

「何？帝への謁見か？」

ここでは、『帝』と書いて『ミカド』と呼ばれる最高指導者がいる。平安京都を中心に、この国の西側の各地でいまだ起こる小さないざこざを収めるため、力を尽くしている。

「いえ、安倍晴明殿を訪ねたく」

「そうか・・・・・しかし弱ったな」

田村麻呂はすぐに困ったような顔をした。

「どうかなされたのですか？」

「いや、近くの村が落武者に襲われたと伝書鳥が届いた」
※『伝書鳥』とは、伝書用に訓練した鳥に手紙を付け、相手に送るというもの。昔は帰巣本能を利用して鳩が使われていたが、今では昼はトンビかタカ、夜はフクロウを使っていた。電話より劣っていると思われがちだが、妖怪など通信機器に疎い者には親しみが深い。ちなみに、文をつけて運ぶ鳥は人並みの知能を持つことからわかるよう妖怪の眷属に近いのだが、それを知る者は黙認している。飛天が平安京都に来ることも、山伏たちが伝書鳥で知らせているはずなのだが、それにもかかわらず足止めを食っていた。
「これから私は、そいつらの身柄の確保に行かなければならない。お主、名はなんと申す？」
「ハイ、飛天と申します」
飛天が答えると、田村麻呂はあごに手を当てた。
「飛天か。不便をかけるが、私が帰ってくるまでここで待ってはくれぬか」
※この国では、人間たちと一部の妖怪の間で和平条約のようなものが結ばれており、それにより、両者の間で大きな争いが起こることはない。だが今現在の情勢では、平安京都のような大きな都へは、都を守る兵の中で実力の高い者の同行がないと中に入れないようになっている。小さな村にいたっては、おとなしい性格の妖怪に限り村の中でも姿が見られる。だがそれでも、人間との間には溝があるというのが現状だった。
「・・・・・わかりました。背に腹は変えられませんから」
「そうか。まあ、晴明殿が迎えに来てくれるかも知れんが、とりあえず待っていてくれ。では、行って来る」
「行ってらっしゃいませ」
門番が頭を下げると、田村麻呂は大群を従え、森の中を進んで行った。本来、検非違使は平安京都の秩序を維持する役目なので都からは出ないはずなのだが、この世界のでは各地の役人と協力して村や街の秩序を守っており、応援要請があればそこに出向きもする。

「さて・・・・・と」
「もしよろしければ、あそこの休憩所で待たれては？」
「お、いいね。じゃ、休ませて貰うよ」
飛天は意気揚々と朱雀門のすぐ側にある休憩所に入ると、そこには団子を食べている安倍晴明がいた。
「待っていたぞ？愛宕山の烏天狗、飛天殿」
飛天はその場に固まった。

―※＊※―

帝。この平安京都の最高指導者、幻流帝（げんりゅうてい）　徳仁（とくじん）。彼は妖怪たちに対して一定の理解をもっており、人間と人と共存可能とされる妖怪たちとの間に平和条約を結んだ人物の一人。だが、江戸東慶を中心とした東の地方には、この条約の締結に反対する者が多かった。
「妖怪は我々にはない、強大な力を持つ。そういったものは殲滅するに越したことはない」
それが彼らの主張だった。それでも、徳仁は根気強く江戸東慶の重役たちに交渉すべく書状を送り続けた。その内、都に何度か使者が訪れるようになったが、彼らの伝言から問題が進む気配はなく、平行線のまま時が過ぎていた。
「いい加減、理解してもらえぬか？」
平安京都の中央に位置する寝殿――黄龍殿の一室で、帝である徳仁が聞くと、江戸東慶からの使者――新道睦月（しんどうむつき）も口を開いた。
「それはこちらのセリフです。妖怪などに人間と同じ場所に住む権利を与えるなど、危険です。人を襲う妖怪たちにとって、これは絶好の機会です」
「だから、人と共に暮らせる妖怪に限り、この条約の対象にしている」

「もし相手が、本性を隠していたら？」
「だから、こちらも手続きの時は慎重な姿勢をとっている。人に危害を加える能力はないか。本人が能力を自粛、もしくは封印する意思があるか。人と共に生きる意志があるか」
「そのような悠長なことを言っていて、取り返しの付かないことになったらどうするんですか！」
数十分前から、このような会話が延々と続いており、「今日もまたこのような水掛け論で終わるのか」と、徳仁は内心がっかりしていた。
「・・・・・・・・・わかりました」
椅子から立ち上がり、「今日はこのあたりで失礼します」と頭を下げた。
「理解してもらえなくて、残念だよ」
「こちらもです」
睦月はそう言って部屋を後にすると、その後すぐに徳仁のデスクの電話が鳴る。黄龍殿の造りは平安時代の書院造だったが、西洋から輸入された電化製品もあふれていた。ここだけではなく、都の市民が暮らす家々も同じである。
「ハイ、徳仁です」
話を戻すが、徳仁が電話を取ると、それは朱雀門の門番からだった。
「徳仁さま。今、門の前に飛天と名乗る烏天狗が来ているのですが・・・・・・」
「ん？そうか。そういえば、そのような者が来るという伝書鳥が来てたな」
「忘れないで下さいよ！」と門番に叱られた。
「すまん、すまん。だが、私に用というわけでもないのだろう？」
「ハイ。安倍晴明殿に取り次ぎたいと」
「わかった。烏天狗を始め、全国４２箇所の大天狗たちとは平和条約を結んでいる。都へ入ることを許可しよう」
「わかりました。では、書類等の処理、お願いします」

徳仁は「ウム」と電話を切ると、徳仁は先ほど来た伝書鳥に付いていた書類を広げた。

「愛宕山の太郎坊殿の遣いか。確かに承った」

そう言って徳仁は、書類の印鑑欄に印を押した。

特別編2　擦れ違う烏と月

「許しも得たことですし、参りましょうか」
「え？え、ええ・・・・・・」
なぜか徳仁が許可を出したことを知った晴明が立ち上がると、団子を食べ終わった飛天も立ち上がった。二人は休憩所の店員に御代を払って朱雀門を潜ると、そこに先ほど徳仁と謁見していた江戸東慶からの使者、睦月が通りかかった。不意に彼は、飛天に冷たい目を向ける。
「烏天狗・・・・・・ですか」
自分のことを言ったと思った飛天は、「・・・・・・何か？」と聞く。
「いえ、別に。友好を深めることもいいですが、何かが起きた時の対処方法も検討すべきですね」
朱雀門を潜って平安京都を後にする睦月を見送り、「なんだ、あいつは？」と飛天が愚痴った。
「江戸東慶から来た使者さんだそうだ。徳仁殿に何か話があったようだな」
二人は朱雀通りを通りながら、話していた。
「江戸東慶と言えば、我々、妖怪のことを目の敵にしている者がほとんどだと・・・・・・」
「ええ。私も江戸東慶の周りの町に行ったことがあるが、空気が合わない。特に、ビルが立ち並んだコンクリートジャングルという所はね」

「コンクリートジャングル？」と飛天が首を傾げた。
「江戸東慶の内陸側にある、大きな建物群だよ。ここことは違う造りの建物がたくさん建てられている。頑丈そうだが、自然にも悪そうだし、その上、空気も汚れている。あのような場所によく住めるものだ」
「そんなに空気が悪いのですか？」
「ああ。この平安京都と比べて、信じられないほどにな」
ちょうどその時、二人の横をバイクが通り過ぎた。
「ああいう、自動で動く乗り物が出すガスのせいらしい。道という道にひしめいているからかな」
「そうなのですか？それにしては、ここの空気はきれいですけど？」
平安京都にも、自動車やバイクの類は導入されていた。だが、都会と比べて空気はきれいだった。
「ああ、それはな。一つは自然が多く残っているから。もう一つは、この平安京都にある自動車には、環境に優しい動力が導入されているからだよ」
「えっ？そんな物があるのですか？」
「ああ。もっとも、異国の技術だが・・・・・・な」
二人はそんな話をしながら、朱雀大路を進んで行った。

―※＊※―

屋敷に着くと早速、晴明は飛天を居間に通した。
「それで、用件は？」
「はい。実は、我々の住んでいる山に、太郎坊さまの命を狙う者が現れたのです」
「何？それで、太郎坊殿は？」
「無事・・・・・とまでは行かなくとも、命に別状はありません。

問題は、その者が人間の姿をしていたにも拘らず、我々の使う妖術と似たような術を、使ってきたということなのです」
それを聞くと、晴明は反射的に眉をひそめ、頭の中で博雅の言葉が反芻される。

『その不逞の輩が、どうやら物の怪の力を取り込もうとしているらしい』

「いや、まさか・・・・・しかし・・・・・考えられなくもない」
再び、「どうかなさいましたか？」と飛天が聞く。
「いえ、何も。こちらも、できる限り調べておきます」
飛天は首を傾げた。だが、晴明に何か心当たりがあるということはわかった。

―※＊※―

所変わって、平安京都から東へ行った場所。現在では各藩を納めている大名は戦をすることを制限されていた。はずなのだが、どこの大名も来る日も来る日も戦を行っていた。農民や町民を集め、歯向かえば切り捨てる。そういったことは禁止されているはずなのに。今日も、ある開けた平原で武装した兵たちが槍で人を刺し、刀で人を斬り、鉄砲で人を撃っている。
「クククククク。デズモルートさまの仰ったとおりだ。この国の奴らは来る日も来る日も争いを起こしている。これならば・・・・・」
やがて、戦が終わり、幾人もの兵士の遺体が転がる平原の中を、一人の男が歩いていた。

「成果はどうだ？リバ・ゲルグ」
その男の後ろにもう一人別の男が現れる。サングラスに黒いコート。
その男は、北欧で暗躍していたネクロだった。
「ネクロさま。上々ですよ。今までの失態を埋めるくらい」
「そうか。やはり、この国の者は愚かだな」
ネクロは、周り、と言うか、遠くを見ながらネクロが続ける。
「己こそがこの国の支配者にふさわしいと言う野心を持ち、それに部下や家臣を巻き込む」
「かつて、この国の改革に反対した者たちの怨念も採取できました。自我さえ奪えば、兵として活用できます」
「そうか。どちらにしても、われらにとってこの国は『宝の山』だな。ククククク・・・・・」
「笑いが止まりませんね。フハハハハハハハ」
死体だらけの平原に、不気味な笑い声が響き渡った。

―※＊※―

出雲の国にある葦原中国（あしはらなかつくに）。地上で唯一、神々が住む高天原（たかあまがはら）や、死者や冥府に神々が住む黄泉国（よもつくに）へ行くことが出来る場所である（ただし、人間の見解）。かつて、最初のこの国に訪れた神、スサノオ。彼は高天原で狼藉を働き、追放された元天津神。国津神となってから訪れたこの国でヤマタノオロチを退治した、という伝承が残る国の中のある村で、事件は起きた。それは飛天が平安京都へ訪れた日から１２日後。山のふもとのある村に声が響いた。
「聞け！人間どもよ！」
その声に、村の者は次々と家から出てきた。
「今から一週間後、村から一人、美しい娘を差し出せ。さもなくば、我は山を降り、貴様らの村を徹底的に破壊する」

一方的な要求の後、静けさを取り戻した村で村人たちが口々に話す。
「山神さまだ」
「山神さまが、生け贄を求めている」
「どうする？」
「どうすると言われても・・・・・・」
「そうだ、お代官さまに相談しよう」
「そうだ、それが良い」
相談した結果、村にある代官所に申し立てることにした。村長である老人と付き添いの若者二人は、早速、代官所に申し出た。
「何・・・・・・？山神が生け贄を求めているだと・・・・・・？」
村長は「はい」と答えた。代官所の庭では、三人とも、白い石が敷き詰められた地面に両手を突いている。
「しかし・・・・・・いくら我ら役人でも、神を相手となると・・・・・」
「いくらなんでも、神さまが村の者を苦しめるはずがありません。きっとなにか別の者の仕業でございます。ですから、どうか・・・・・」
「おねげえします」
後ろにいた若者二人も頭を下げたが、代官はめんどうくさそうな顔をした。
「だめだ。下がれ」
「そ・・・・・・そんな・・・・・・」
村長が前に出ようとしたが、横にいた役人二人が交差した棒を突き出して止めた。
「どうせ、狐狸の類。もしくは・・・・・・お主らが村に住むことを許しておる、物の怪の仕業であろう。そこで、その物の怪の娘を差し出してみよ。そうすればすぐにわかるだろう」
「そ・・・・・・そんな、それでは我々に、その娘を見捨てろと・・・・・・」
「物の怪の仕業なら、同じ物の怪を差し出せば退治、良くて共倒れ

してくれる。それに元々、人間と物の怪は共に暮らすことはできん」
付き添いの村人が、戸惑うように顔を見合わせる。村長は何かを言おうとしたが、結局、何も言えなかった。
「以上だ。下がれ」
立ち去る代官を呼び止める者は、誰一人いなかった。役人に追い立てられて村人たちが帰った後、ふすまの向こう側に去った代官に、役人の一人が話しかけてきた。
「仕掛けは、上々のようでございますね」
「そのようだ。が、ここではその話はするなと申したであろう」
「も・・・・・申し訳ありません」
声を小さくして代官が叱ると、役人は頭を下げた。鼻で笑った後、代官は急ぎ足で廊下を歩いて行き、役人も部屋に戻った。
「ふん、小物が。せいぜい夢を見てるといいわ」
小さく呟いた役人は悔しげに唇を噛み締めながら歩いていった。

―※＊※―

村に帰った村長たちは、まともに取り合ってくれない代官所の対応を聞いて落胆した。夜に村長の家に集まった村人たちは、これからどうするかを話し合ったが、明確な答えが出ないまま二日が過ぎた。誰ももう、精神的に限界に来ていた。
「どうする・・・・・？」
「どうすると言っても・・・・・・もう・・・・・」
「もう・・・・・なんだよ・・・・・・」
「・・・・・生け贄を・・・・・・出すしかない・・・・・」
「なっ・・・・・」
重苦しい空気の中、ついに村人の一人が口を開くと他の村人たちはざわめきだしたが、すぐに静かになった。

「そうだな」
「だが、誰を生け贄にする」
「あんたんとこの娘、奇麗なんじゃないか？」
「なんだと！俺の娘を差し出せってのか！？それより、お前の所の娘のほうがいいんじゃないか」
やがて言い争いになった村人たちを、村長が「よさぬか！！」と怒鳴る。
「ですけど、村長・・・・・・」
「・・・・・皆の言いたいことはよくわかる。だが・・・・・・村の者を犠牲にして、ワシらは平気でいられるのか！？」
集まった村人たちが黙り込む。重苦しい沈黙の中、不意に一人が口を開いた。
「なら・・・・・・村の者でなければいいんだ」
「お前・・・・・・何を・・」
「お代官さまも言っておられただろ。『物の怪の娘を生け贄に差し出してみろ』って。だったら・・・・・・」
その意見に村長は、「だめだ！！」と即答する。
「何故だ！？あいつは人間の子じゃない。物の怪の娘だ。だったら・・・・・・」
「妖怪だろうと、人間だろうと、同じ村に住む仲間を売ることには変わりないのだぞ！！」
再び村人たちがざわめきだす。
「なら、どうしろと・・・・・・もう、時間がない」
「それは・・・・・・これから見つけ出すしかないだろう」
「それで、見つけられなかったら・・・・・・」
「・・・・・・今日の話し合いはこれで終わりだ。解散しよう」
「しかし・・・・・・」
「解散だ！！」
言い返そうとする別の村人を制し叫んだ村長は、背を向けたまま居間を後にした。彼の表情は、とても厳しいものだった。

―※＊※―

同時刻。代官所の一室では、代官が何かの書類を見ていた。
「お代官さま・・・・・・」
突然した声にもさほど驚かず、代官は「ん?」と答えた。
「例の村では、例の娘を差し出すことで意見が合いそうなのですが、村長が歯止めをかけています」
「そうか・・・・・・なら、わかっているな」
「御衣。実行いたします」
声の主がいなくなった後も、代官は書類に目を通し続けた。そこには、『妖力を持つ村人の引渡しについて』と書かれていた。
「ふん。デモスだかなんだかわからぬが、お主らのお手並み拝見とさせてもらうぞ」

―※＊※―

深夜。家の中では、村長が悩んでいた。彼の前にある机の上には、書きかけの手紙が置いてある。
「(このままでは、村の者があの子を引き渡してしまう。かといって、要求を無視して村を滅ぼす訳には行かない・・・・・・なら)」
そこまで考えると、手紙を書くスピードを上げた。その時、
「何をして、いらっしゃるのですか?」
「――――!?誰だ!!」
声に気づいた村長が叫びながらも、慌てて書いていた手紙を机の引き出しにしまう。後ろを振り向いても、そこには誰もいなかったが、

村長は用心のために近くにおいてあった棒を持ち、ふすまを引いた。
「（誰もいない？いや、今、確かに声が・・・・・・）」
明かりのない部屋の中を見回すが、誰の姿もない。
「誰だ！！」
再び叫ぶと突然、何者かにものすごい勢いで体を引っ張られ、さっきまでいた机に叩きつけられた。辺りを見渡しても何もいなかったが、何者かに押し付けられていることはわかった。
「何を・・・・・していらっしゃったのですか？」
さっきと同じ声がした。姿が見えないことから妖怪と同じ存在とわかる。しかし、村長は慌てず己を保つ。
「黙ってないで答えていただきたい。あなたは何をしていらっしゃったのですか？」
「別に、何も」
そう答えると、首を絞められる感覚がして息が苦しくなった。
「ぐっ」
苦しそうに呻くと首にかかった力が少し緩み、さっきの声が同じことを聞いてきた。
「正直におっしゃってください。さっき、何をしていらっしゃったのですか・・・・・・？」
「知らん！さっきからなんだ？姿を見せろ！」
何もいないはずの空間に怒鳴ると、さっきよりも息が苦しくなった。
「質問をしているのはこっちです。もう一度だけ聞きます。さっき、何をしていらっしゃったのですか？」
「知らん！」
「強情な奴だ。これが最後だぞ！さっき、何を・・・・・・」
「知らんと言ったら、知らん！ワシはただ、座っていただけだ！！」
すると、さっきからの息苦しさが消えた。解放された村長は、首を押さえて転がった。
「ぐっ、がはっ・・・・・・・」
「そうか・・・・・・言う気はないか・・・・・・」

息の荒い村長が体を起こした途端、先ほどより強い勢いで壁に叩きつけられた。次の瞬間、腕や体、足を次々と貫かれ、血が噴き出した。悲鳴を上げる暇もなく村長は胸を貫かれ、その命は奪われてしまった。

「バカな奴だ。これなら、愚かな村人のほうがよっぽど賢い」

それを最後に声はしなくなる。後には床に崩れ落ちた村長の死体だけが残った。

「・・・・・待てよ」

それからしばらくして、物音を聞きつけて駆けつけた村人が見た物は、無残にも全身を貫かれ息絶えてる村長を見つけた。そして壁に塗りつけられた血を見て、村人たちは息を飲んだ。

『これは見せしめだ』

村長の血で書かれてあった警告文を見て、村人は恐怖に駆られた。

―※＊※―

翌日。村人は要求どおり、村の娘を一人差し出すことにした。選ばれたのは、村に住む『妖怪の血を引く少女』だった。

「どういう・・・・・こと・・・・・」

村人が差し出すことにした少女の友達、神埼弥生（かんざきやよい）が呟いた。

「仕方のないことだ。これは、村人全員で決めたこと・・・・・」

「全員って・・・・・全員って何!?村長のおじさんは反対してたじゃない!」

「その村長が殺されたんだ。『これは見せしめだ』と近くには書いていた。多分、山神さまが天罰を下したんだ」

「天罰って何!?神さまなら、人を殺していいの!?そんなの、絶対おかしいよ・・・・・」

「子供のくせに、知った風な口を利くな!!」

怒鳴りつけると、弥生が黙り込む。
「・・・・・子供は、大人の言うことを聴いていればいいんだ・・・・・」
その言葉に衝撃を受けた弥生は、思わず泣きそうになり、家を飛び出した。この村のほとんどの子供は、大人の言うことを聞かなくても、逆らうことはしてなかった。だが、弥生だけは違った。大人が言うことでも、自身が納得できなければ逆らっていた。自分の意思で行動し、その中で、村人が生け贄に選んだ少女とも友達になった。その友達が、理不尽な大人によって犠牲になろうとしている。
「あいつを差し出せば、俺たちは救われるんだ。犠牲を出すなら、少ないほうがいい」
「どうせ俺たちには、戦うだけの力なんてないから」
「せっかく解決すると言うのに、それを混ぜ返すような真似はするなよな」
弥生は村を駆け回ったが、誰一人、彼女の言葉を聞こうとはしなかった。

特別編3　意外な派遣者

夕暮れ時、土手にうずくまって泣く弥生。悔しかった。自分が子供だと言うことに。自分に友達を助ける力がないことに。不甲斐無い大人たちに立ち向かえる力がないことに。唯一の理解者である村長は死んでしまい、仲のいい友達は生け贄にされるために閉じ込められた。今の彼女は、一人だった。

「・・・・・悔しい・・・・・悔しいよ・・・・・ごめんね・・・・・皐（さつき）・・・・・」

そんな彼女を励まそうとする者はいなかった。

「泣くなんて、君らしくないな。弥生」

一人を除いて。顔を上げる弥生の前に現れたのは、幼馴染の文月（ふみづき）光輝（こうき）だった。

「光輝・・・・・」

隣の座ると、光輝は夕焼け空を見上げた。

「いよいよ、明々後日か」

呟く言葉に、弥生は体が震えた。

「お別れは・・・・・済んだの」

「なんで平気でいられるの!?」

言い終わらない内に、弥生が怒鳴った。

「なんで・・・・・って・・・・・仕方ないじゃん」

「要求を拒めば、村が滅びるから?だからって、村人を犠牲にするの?それが正しいって言うの!?」

「・・・・・もう諦めかけてる人に、そんなことを言われたくないね・・・・・」

その言葉が、弥生の胸に突き刺さる。黙って立ち上がり、立ち去ろ

うとする光輝に弥生も立ち上がる。
「わ・・・・・・私だって・・・・・・・・！！」
叫ぶ弥生に、光輝は足を止める。
「――――私だって諦めたくない。出切ることなら今すぐにでも友達を助けて、この村から逃げ出したい。でもそんなことをすれば・・・・・・」
「・・・・・・・なら、助けを求めればいい・・・・・・・・」
弥生は、「えっ・・・・・・・・」と光輝を見上げた。その時の光輝の目は、とても冷たく感じた。
「この近くに、平安京都から来ている人たちがいるんだ。まだ近くにいるはずだから・・・・・・・」
「でも・・・・・・・どうやって知らせるの・・・・・・・・？」
すると、弥生の目の前にしゃがんで懐から一通の手紙を差し出した。
「・・・・・・村長が死ぬ前に、『私にもしものことがあったら、書斎の机の引き出しを開けてくれ』って言ってたんで、気になって村長の家に行ってみたんだ。そしたら、この手紙が入れてあったんだ」
弥生はその手紙を開けようとしたが、光輝が止めた。
「だめだよ。村長を殺した奴が見ているかもしれない」
「えっ、ウソ？」
驚いた弥生は周りを見渡したが、辺りには誰もいなかった。
「油断は禁物だよ。村長の家には争った後も、大人数で押しかけた後もなかった。多分、不意打ちをさせられたんだと思う」
「そんな・・・・・・いったい、誰が・・・・・・・？」
声を落とした光輝が「山神の仲間」と呟くと、弥生は目を見張った。
「いろいろ府に落ちないこともあるが、まず間違いないだろう・・・・・」
しばらく黙った後、「どうする」と聞く。
「一か八か、その人たちに会って、その手紙を渡そう」
「でも、そんなことをしたらこの村にはいられなくなる。それに、

奴らに襲われるかもしれない」
「かまわない。こんな村・・・・・私、居たくない！」
そう言った弥生に、「わかったよ」と呟く光輝。
「じゃあ今夜、みんなが寝静まった時に・・・・・」
「何、言ってんの。今すぐよ！」
「な、おい・・・・・」
そう言うや否や、光輝が止めるのも聞かず、光輝を引っ張って村の中を駆け出した。今の彼女にとって、今のこの村は一秒たりとも居たくない場所だった。

―※＊※―

村からだいぶ離れた場所にある竹林。日も暮れて間もない頃、そこに大勢の鎧をまとった男たちがいた。
「がああ・・・・・がああぁぁっ・・・・・」
まるで、獣が取り付いたかのように唸りながらでたらめに剣を振る落武者に、田村麻呂たちは苦戦していた。
「これでは、ラチが開かない」
落武者が刀を振り上げて向かってくると、田村麻呂は刀の峰でその落武者の腹を打った。
「ぐっ・・・・・があっ・・・・・」
呻き声を上げた後、その落武者は地面に倒れた。役人はそれを縛り上げると、持ち上げて運び出した。
「今ので、最後だといいのだが・・・・・」
刀を収めたその時、竹林の向こうから女性の悲鳴が聞こえて来た。
「！？まだいたのか・・・・・」
駆け出した田村麻呂が見たのは、草むらを抜けて目を見張った。
「なんだ、あれは！？」

彼の前にいたのは、二人の少年少女に襲いかかる強大な怪物。ハサミのような爪が付いた腕と、首を持たずそのまま頭がくっついたような胴体を持っており、それと短く太い足を細長い体が繋ぐという、このような生き物が存在するのかと疑いたくなるような姿をしていた。だが、田村麻呂は怯まずに刀を抜いた。

「待て、化け物!!子供を襲うなら、この坂上田村麻呂が相手だ!!」

たとえ化物が相手でも、むやみに傷つけたくなかった。なぜなら、彼は現在に転生する前に戦った妖怪と、互いの実力を認め合ったことがある。たとえ妖怪でも、分かり合える者とは分かり合える。彼は同じような考えを持つ徳仁に賛同していた。だが彼には、それはただの理想でしかないこともわかっていた。

「(だからこそ・・・・・叶わぬ場合は、自分が代わりに傷つく)」

そう決めていた。田村麻呂の存在に気付いた怪物の注意が逸れた時、襲われていた二人はその場から離れた。

「どうした?退かぬなら・・・・・斬る!!」

そう言いつつも、田村麻呂は少しずつ怪物との距離を詰めていた。それに気付いたのか、相手がこちらに爪を突き出す。だが、田村麻呂は瞬間的に踏み込み、刀を振り上げてその腕を切り飛ばした。

「ガギャアァァッ・・・・・・!」

悲鳴を上げた怪物は、一目散にその場から逃げ去った。刀を振って血を散らした田村麻呂は、刀を収めて襲われていた子供に駆け寄った。

「大丈夫か!?」

「は・・・・・・はい。ありがとうございます。お侍さま・・・・・・」

「・・・・・・お侍・・・・・・ねぇ」

それを聞いた田村麻呂は、苦笑いした。そこに、騒ぎを聞きつけた役人がやって来た。

「どうなされたのですか？」
「んっ？子供じゃあないですか。どうしてこんな所に？」
「わからない。だが、怪物に襲われていた」
「妖怪・・・・・・ですか？」と役人が聞くが、「わからん」と答える。
「妖怪にしても、あのような物は見たことがない。とにかく、この二人を送り届けないと・・・・・・」
「やだっ！」と
血相を変えて叫んだ少女に、田村麻呂たちは驚いて目を丸くする。
それを聞いた。
「おい、弥生・・・・・・」
「あんな所には戻りたくない・・・・・・あんな所には・・・・・・」
側にいた少年がなだめるが、泣き出す少女に少年と田村麻呂は「参ったな」と呟く。
「あなた方は・・・・・・その服装は、平安京都の検非違使の方ですか？」
「んっ？あ、ああ」
田村麻呂が答えると、少女の顔色が変わった。
「じゃあ・・・・・・あなたたちは・・・・・・役人・・・・・・？」
「心配ないよ。ウチの村とは違う。実は事情があって村には帰れないんですよ」
「どういうことだ？まあ、ここで話すのもなんだ。とりあえず近くの村に・・・・・・」
「良いんですか！？」
「あちらの事情がわからない以上、仕方あるまい」
役人が驚いた様子で聞いたが、状況が知らない田村麻呂にはこれといった判断材料がなかった。
「それでいいか？」

その後にそう聞くと、「はい」と答えた。
「そうか、では改めて。私は平安京都、検非違使所属、坂上田村麻呂。君たちは？」
「神埼・・・・・・弥生です・・・・・・」
「俺は文月光輝。事情は、いずれ説明します」
「そうか、わかった。では、行こうか」
そう話している田村麻呂たちを、草の陰から見ている者がいた。その者がさらに様子をうかがっていると、光輝がこちらを向いた。視線が合うのとほぼ同時に、そいつの体に閃光が炸裂した。
「ギャッ」
「なんだ！？」
突然上がった悲鳴に田村麻呂が周りを見渡すが、そのすぐ後に、光輝が倒れた。
「光輝！！」
こちらでも悲鳴を上げた弥生が揺するが、反応がない。
「すぐに近くの町に運ぶんだ。早く！！」
近くに来ていた役人は「ハッ」と言うと、すぐさま光輝を抱えて移動した。悲鳴がした場所に来た田村麻呂は辺りを探したが、煙が上がっている、小さな焼け跡以外は何も見つけることができなかった。

―※＊※―

近くの村に二人を連れて行った田村麻呂は、そこの宿で詳しい事情を聞いた。
「それで、いったいどういう事情があるんだ？」
「これを・・・・・・見てください」
聞かれた弥生は懐から一通の手紙を取り出した。受け取った田村麻呂は帝宛の宛先を見ると、弥生に視線を向けた。

「これは？」
「とにかく、読んでください」
そう言われたので、手紙を包んでいる油紙をとって中の手紙を読んだ。
「・・・・・・！！これは・・・・・・」
手紙を読み出した田村麻呂はそれを畳み、険しくなった表情で弥生を見た。
「これは・・・・・・本当に起こっているのか？」
隣でふすまが開く音がすると、「本当だ・・・・・・」と声がした。
声の主の光輝は、ふすまにもたれかかって立っている。
「光輝。もう大丈夫なの？」
「ああ、なんとかな。お宅の所にいる安倍晴明なら、力になれるんじゃないか？いや、例え断られても、力になってくれそうな奴を知っているかもしれない」
「まあ、確かに」
田村麻呂は小さく言ったが、手紙の先を読み表情を曇らせる。
「しかし・・・・・・」
「何か問題でも？」
「生け贄を差し出すまでの期間は、残り三日。ここから平安京都まで、片道一週間と数日。護送する者が十数人いるからもっとかかる」
「他に手はないのか？」と苦しそうな光輝が聞く。
「馬が一頭。私が乗ってきた馬を飛ばせば、ニ、三日で着ける。だが、状況を報告して討伐隊を編成するには、最低でも一日かかるし、その討伐部隊にウチの部隊が加わることになったら、後戻りしなくてはならない。弱ったなぁ」
悲観にくれる弥生と、万事休すかと考える光輝。
「・・・・・・致し方ない・・・・・・少し、副長と相談してくる」
そう言って部屋を後にする田村麻呂。しばらくすると外出の支度を整えて帰ってきた。
「副長と話をして、近くの町に一時駐留することにした。その間に、

私と君で京に行く」
「俺も・・・・・・」
意外そうに目を丸くした光輝が、ふすまから手を離した途端、畳の上に倒れる。
「無理をするな。なぜかはわからないが、君はまだ体力が戻っていないようだ。私が戻ってくるまで、安静にしておいたほうがいい」
「だが・・・・・・」と言う光輝に、田村麻呂が右手の平を上げる。
「この子のことなら心配するな。私が無事に京の都に送り届ける」
その後に弥生のほうを向き、
「あまり時間がない。早く支度をするんだ」
と言って部屋を後にした。数分後、宿の外に出た弥生は、田村麻呂と一緒に馬に乗った。
「えっと・・・・・・なんで私まで・・・・・・？」
「すまないね。一応、証言者として話を聞かせてもらわなくてはいけないんだ。手紙は、一番速い伝書鳥に持たせたから、着く頃にはあちらも事情がわかっているはずだ。じゃあ、しっかり捕まっているんだ！」
そう言って、「はいや！！」と手綱を打つと、馬は一声上げて駆け出した。

―※＊※―

平安京都の中央部にある黄龍殿の一室に、今日もまた睦月が訪れていた。
「正直・・・・・・こういったことには、もう飽きてきているんですよ」
「奇遇だね。私もだよ」
ウンザリとした顔の睦月に笑顔で答える徳仁。その笑顔に、睦月は

怒りを覚える。
「江戸東慶の重役の中には、強硬手段に押し切ろうとする者もいるんです。奴らなら、強引に攻め込むこともいとわない・・・・・・」
「強硬派を強硬派が潰す・・・・・・か。君はそれには反対なのかね？」
徳仁の探るような質問に、「当たり前です」と真っ向から答える睦月。
「血を流して得た政治など、民の反発を招くだけ。俺は・・・・・・それを間近で見ています・・・・・・」
徳仁が「そうか」と呟いた時、コンコンと、部屋のドアをノックする音がした。
「どうぞ」
徳仁が言うと、「失礼します」と言う声と共にドアが開き、着物を着た少女を連れた男性の役人が入って来た。
「徳仁さま。いったい、何時まで待たせるつもりなのですか？」
「す・・・・・すまん。この話が終わってからでもと思っていたんだが・・・・・・」
「そちらが優先事項なのもわかりますが・・・・・・」
部屋を進む田村麻呂は徳仁の側にやってくる。
「この娘にとって、手紙にかかれていたことのほうが優先するべきことなのです」
「わかっている。しかし・・・・・・今の都にはあまり兵が残っていない。どれも、都の周りで起きた戦が元で出払っている。どうしてこうも周りで、よく戦が起こるのかねぇ・・・・・・」
そう言って、そっと睦月のほうを見る。
「人手不足なのは重々、承知しております。だからこそ、私の部隊を近くの町に留めています」
「なるほど。要請さえあれば、すぐにでも動けるように、か。さすがは田村麻呂君だ。だが・・・・・・君の部隊も疲労が溜まっているだろう」

「はあ。それは、まあ・・・・・・」
痛いところを疲れて表情が曇る田村麻呂に、不安そうな顔を浮かべる弥生。それを見た睦月は、無関係な立場のはずなのに歯がゆさを感じた。
「そうだ、睦月君。君がこの子の村に行ってみたらどうだね」
それを聞いて、「は？」と間抜けな声を出す睦月。
「君の言うとおり、人間と妖怪が共存するには、まだまだ問題がある。彼女がいた村には、それが最もよく表れているのだよ。どうだい？いっそ私の鼻を明かすつもりで、その子の村に出向いて、問題を解決すると言うのは」
だが睦月は、「お断りします」と即答した。
「俺にその村の問題を解決させて、共に暮らすきっかけを作らせるつもりなんでしょう？悪いですけど、その手には乗りませんよ。大体、なぜあなた方の治める地域の問題を俺が・・・・・・」
「自信がないのかなぁ？」
挑発する徳仁に、睦月は苛立ちを感じた。だが反論しようとしたその時、
「いい加減にしてください！」
と大声を上げた弥生を、睦月と田村麻呂が見た。
「弥生ちゃん・・・・・・」
「いい加減にしてください。私たちが困っている時になんであなた方は、こんな言い争いをしているんですか」
「この人の話を聞いていなかったのか？人と妖怪が共存を許していても、所詮、全ての場所でそれが成されていない、と言うことさ」
「確かにそうかもしれない。だが、少なくとも妖怪は、古くからその土地に住んでいて、私たちはそこに踏み入った。いわば私たちは『邪魔者』なはずなのだよ」
「だからと言って、共に暮らす義務はないし、理由にもなりません。それに、人と妖怪が交われば『半妖』が生まれます。半妖は両種族から見て『異端』の存在。だから、居場所がない・・・・・・不幸

な存在なのですよ・・・・・・」
その言葉が弥生の胸に突き刺さる。村人から避けられる皐。簡単に皐を引き渡す村の人。思い出す度に、胸が締め付けられる。弥生はなんとか声を絞り出す。
「で・・・・・・も」
「・・・・・・・？」
「たとえ・・・・・・半妖だったとしても・・・・・・・失いたくない・・・・・・友達がいるんです」
「友達・・・・・・確か、半妖らしいな・・・・・・・」
徳仁の呟きを聞いた睦月が目を見開いて、弥生のほうを向く。
「半妖の友達!?バカなっ!?」
「『バカな』と言おうが、これもまた、現実なのだよ」
さらに「どうだい？」と言う徳仁に、睦月は細かく眉を動かす。
「いいでしょう。化けの皮・・・・・・剥がして来て上げましょう・・・・・・」
「できれば、ここに連れて来てはくれないか？」
徳仁の言葉に、三人が驚いた。やがて睦月が静かに聞いた。
「どうして・・・・・・？」
「どうせ村には戻りたくないって言うだろうし、何より、自分を簡単に差し出した村人の所なんかに、その子が戻りたがるとは思えない」
机に両肘を乗せて、指を組んだ形で「違いますか？」と睦月に聞く。
睦月は忌々しそうに舌打ちをした。
「わかった。だが、これはあくまで俺の私情による行為だ。俺の所属する組織は関係ない」
「結構です」
徳仁は少し気味の悪い声を上げて微笑み、引き出しから出した手紙を差し出した。睦月は内心で再び舌打ちをすると、乱暴に手紙を受け取って黄龍殿を後にした。

特別編４　苛立ち

車の中で手紙を読むと、睦月は車を発進させた。目的地をカーナビにインプットして高速に乗り、途中ドライブインで休憩を取りながら車を走らせ続け、目的地に着いた時には、翌日になっていた。訓練を受けている睦月は、最大三日は眠らないで済む。だが車の運転などはそれ以上に慎重な姿勢が求められるので、最低一時間は仮眠をとった。

―※＊※―

茅葺（かやぶき）製の昔ながらの家が立ち並ぶその村は、どう考えても道路が整備されていないので、睦月は村の外に設置された簡易駐車場に車を置くことにした。と言っても、あまり整備はされていないので、路面はデコボコだ。

「いくら車用に整備してないからって、これは酷いよなぁ・・・・・・」

そう愚痴を言いながらも車を降りた睦月は、問題の村に入って行った。

「・・・・・誰も・・・・・・いない・・・・・・？」

人っ子一人いないそこは村だけどゴーストタウンだった。手ぶらで帰るにも帰れないので睦月は奥に進んで行くと、山を後ろに大勢の

村人が歩いて来ていた。睦月はこの村の人間だと気づき、近寄って聞いてみた。

「すいません。今、どこに行って来ていたのですか？」

いきなりの質問に、村人たちはどよめき村人の一人が小さく呟く。

「べ・・・・・・別に・・・・・・」

睦月は、村人たちからの様子や手紙の内容から、ある程度のことには感づいていた。

「なるほど・・・・・・村の娘を一人、生け贄に出した、ってことですよね」

「なっ・・・・・・なぜそれを・・・・・・」

睦月は、平安京都の役人がこの村の子供を保護したこと、その子供が持っていた手紙のことを話した。

「そうか・・・・・・あいつら、どうりで見かけないと思ったら・・・・・・」

「そういうことだったのか。裏切り者め・・・・・・」

「（裏切り者・・・・・・ねぇ・・・・・・）」

睦月は村人の言うことを否定はしなかったが、同時に同意もしなかった。

「だども。いまさら来ようと、もう手遅れだ」

「そうだ。山神さまへの生け贄は、もう差し出した」

睦月は携帯電話の時計を見たが、時刻は朝の七時過ぎを表示していた。

「（早いな～）」

睦月は段々と呆れだした。だが呆れると同時に、どこかイライラしてきた。

「・・・・・差し出がましいようですが、村の住人を差し出して、あんたら平気なのか？」

「本当に、差し出がましいな」

心の中で「悪かったな」と思いつつも、口には出さなかった。

「だったら・・・・・・あんた、どうしたらよかったと言うんだ？」

「まさか、『山神さまと戦え』なんて言うつもりか。そりゃあ、前の村長はそう言ったかもしれねぇけど、オラたちは無事じゃすまねぇ」
「だども、そいつを差し出せば、オラたちは助かる」
口々に「そうだ、そうだ」と叫ぶ村人。それだけなら同情くらいで済んだだろう。だが、歯止めが利かなくなった村人は口々に言い出した。
「だいたい、あの娘は前から気にくわなかったんだ」
「そうだな。妖怪の娘じゃなくても差し出してたな」
「（何？）」
「子供の癖に色々口出しして。親はどういう育て方したんだ」
「親も何も、あいつの親の片方は妖怪だろう。妖怪の色目にかかったバカな男がもうけた恐ろしげな娘だ」
「いや、違うだろ。村のバカ娘が妖怪に色目使って生んだ子だろ？」
「そうか？」
「そうかって、違うか？」
「（出自知らないくせに半妖扱いかよ！？）」
心底呆れていただけだった睦月が、その言葉に驚かされる。
「（後悔の色なし。まあ、仕方ないだろうな・・・・・）」
「大体、どうしておらたちがこんな目に会わなければならなかったんだ？」
「そういえばそうだな。俺たち、どっちかって言うと、神様を大切にしてたよな」
「まさか、あの妖怪の娘がいたから、俺たちが神様を粗末にしてるって思われたんじゃ」
「おお、そうだ。そうに違いない。おらたちがこんな目にあったのは、あいつのせいじゃ」
「そうだ、そうだ。オラたちがこんな目にあうのも、あいつのせいだったんだ」
好き勝手言い出した村人に、今まで黙って聞いていた睦月の怒りが

溜まっていく。
「（・・・・・いや、落ち着け俺。こいつらには妖怪と戦う力はないんだ。これは苦渋の決断なんだ。俺がとやかくいうことじゃない）」
自分に言い聞かせて怒りを静めた睦月は、山に向かって歩き出した
睦月に気付く。
「ま、待て。ど、どこへ行く」
村人が叫ぶと他の村人が振り返り、止まった睦月は彼らに向かって振り返った。
「てめえらの山神とやらのいる山だよ」
それを聞くと、村人たちがざわめきだした。
「そ・・・・・・そんなことしたら、山上さまがお怒りに・・・・・・」
「その前に、交渉かなんかして片付けてやるよ。それが一応、任務だからな」
「やめろ！オラたちは、村の仲間を誰も失いたくねぇ」
再び歩き出した睦月が、ピクッと反応して立ち止まる。
「村の仲間は失いたくない・・・・・・だと・・・・・・？」
「そ・・・・・そうだ・・・・・・」
村人のほうを少し振り向いた睦月は眉間にシワを刻んでいる。
「つかぬことをお聞きしますが、生け贄に捧げられた少女は、あなた方の村の仲間ですよね？」
「違う。あんな小娘、仲間じゃねぇ」
「そうだ。俺たちが親のことを覚えてないのも、妖術か何か使ったに決まってる」
「そうだ。あいつは妖怪の子供。おらたちの仲間じゃない」
口々に言う村人に対し、睦月からは殺気のようなものが放たれていた。ついに、堪忍袋の尾が切れた。
「・・・・・・っざけんなあぁ！！」
村人たちは叫ぶのを止め、黙り込んだ。

「自分たちさえ助かれば、他の誰かがどうなってもいい、ってか？テメエら、そういうことか！？」
「だども・・・・・・お代官さまも、そうしたほうが良いと・・・・・・」
「ふん。自分たちが助かるために、敵の要求を呑む、か。村を守る役人としては、賢明な判断だろう。だがな・・・・・・それで顔色一つ変えないなど最低だ」
「な・・・・・・なんだと・・・・・・」
「最低だ、と言ったんだ！どいつもコイツも根性無しが」
「なら・・・・・・どうすれば良いと言うんだ！」
「それくらい、自分たちで考えろ！！」
睨み合う村人と睦月。だが睦月は、「ハンッ」と笑った後、顔を背けた。
「と言っても、お前らにはわかるまい」
「なんだと！仲間を守った俺たちのどこに文句があるんだ！？」
「その『仲間』を生け贄にした奴らに、そんなことが言えると思っているのか！？」
村人たちが再びざわめきだす。
「何も知らない、何も出来ない。それは当然だろう。だが、知ろうともしない、やろうともしない。そんな奴らが、俺のやることに口出ししようとするな。いいな」
それだけ言うと、睦月は山に向かって歩いて行く。彼の殺気に当てられた村人は、恐れおののくだけでそれを止めようとなかった。

―※＊※―

山神がいるという山は、先ほどの村から見て裏山に当たる。その山道を登りながら、睦月はさっきの村人を思い出していた。

「（妖怪に対して、恐怖を持つのは当たり前。共に暮らすと口では簡単に言えるが、実際にやれるかと言えば別問題。ああいう反応が当たり前・・・・・・じゃあ・・・・・・）」

ふと、黄龍殿の一室であった少女の顔を思い出す。涙を流しそうな目で、必死に訴える少女。

「（あの少女・・・・・・たしか、弥生って名前だったっけ。ヤヨイ・・・・・・陰暦の中の雅称の一つ。俺の名前・・・・・・睦月と同じ・・・・・・）」

あの少女からは真剣さが滲み出ていた。それはどこか純粋な想いを感じさせる。

「（半妖の娘を相手に、ああいう感情が抱けるのか・・・・・・？）」

山の祠が見えてくると、睦月は側の岩に隠れ、上着の中にある妖気計を取り出した。これは彼を含め江戸東慶守護部隊の隊員が常に携帯している装置で、一定範囲内にある妖気を感知し、知らせることができる。妖気計のスイッチを入れて中を探るが、反応はなかった。

「（妖気計に反応はない。では、妖怪の仕業ではないのか？）」

そういう疑問を抱きつつも、とりあえず入り口にかかった注連縄を潜り祠の中に入った。中は暗闇に包まれていたが、しばらくすると目が闇に慣れてきた。中は角の丸まった岩だらけで、村人が置いて行った生け贄の入った桶はおろか、その欠片すらなかった。

「（・・・・・・？欠片すらない？手紙には確か、『生け贄となった少女は、木製の桶の中に入れられている』と書いてあったはず。丸ごと食べられたとしても、一つばかり欠片が残っているはずだ・・・・・・これは・・・・・・不自然すぎる）」

とはいえ、手がかりは何もない。さらに奥へ進むと突如、手に持っている妖気計から警報音が鳴った。つまり、当初の読み通り、この洞窟内に妖怪の類がいるのだ。

「（もしや、それが黒幕か）」

警戒した睦月は洞窟の奥に向かって叫んだ。

「誰だ！そこにいるのは！？」
声が洞窟内に響くが反応はない。少し足を踏み入れ、暗闇に目を凝らしてみると、汚れた着物を着た少女が地面に座り込んでいるのが見えた。
「お・・・・・お前は・・・・・・」
睦月の存在に気付いた少女は、震えながら彼のほうに目をやる。
「聞くまでもないと思うが、君はふもとの村の子か？」
怯えた少女は睦月の問いに頷くと、今度は彼女が震える声で聞いた。
「あなたは・・・・・誰？」
「俺は神童睦月。君の名は？」
「・・・・・めい。芽衣・・・・・・サツキ・・・・・」
名乗った少女に、睦月はふと考えた。
「（サツキ・・・・・『皐月』のことか。弥生って子といい、旧暦の名の人物とよく会うな）」
自分の名前もその旧暦の一つなので、偶然は恐ろしいと思った。
「（それにしても、妖気計に反応があったのに、今はない。誤作動？いや、そんなはずは・・・・・）」
手に持っている妖気計の画面を見たが、画面には『異常無し』と表示されていた。
「（やっぱり誤作動か・・・・・？）」
頭をかきながらそう考えていたが、とりあえず彼女を洞窟から連れ出すことにした。
「とりあえず、ここを出よう。送ってやるよ」
「嫌！」
「（ああ、当然か）」
と叫び声を上げて拒んだサツキに、睦月はすぐにそう思った。徳仁が言ったとおり、自分を生け贄として差し出した村に戻りたがらないのは当然のことだ。
「なら、俺と一緒に来い。ふもとの村よりいい所を知ってる」
だがサツキは、恐怖と疑いのまなざしを睦月に向けていた。

「大丈夫だって。そこにいる奴は、お前がいた村の奴らほど愚かじゃない。悔しいけど・・・・・・」
最後の呟きに、サツキは首を傾げた。睦月は睦月で、嫌いなはずの徳仁を褒めたことに苛立ちを感じていた。
「さあ、どうする」
一つ間を置いて聞くと、サツキはしばらく黙っていたものの、しっかりとした表情で睦月を見上げた。
「・・・・・・行く」
「そうか。じゃあ、行こう」
睦月が差し出した手をサツキが取ったその時、洞窟の入り口に何者かが立ちふさがった。その何者かからは異様な気配が放たれており、振り返った睦月は体が痺れるような感覚に襲われる。押しつぶされるような感覚に耐えながら、声を振り絞った。
「なんだ・・・・・・貴様は・・・・・・？」
立ちふさがった何者かは、自分以外で洞窟に来る者がいたことに驚いたようだった。
「まさか・・・・・・こんな所にまで訪れる人間がいたのか？」
「貴様は何者だ！？」
プレッシャーを振り払うように叫ぶ睦月に、何者かはしばらく黙っていたが、やがて鼻を鳴らして笑った。
「愚かな人間に名乗るのは癪だが、ここまで来た敬意を表して、冥土の土産に教えておいてやろう。わが名は、ギバ・ゲルグ」
そう名乗って、ギバ・ゲルグと名乗った影は右手を振って自らのマントを広げた。
「貴様が・・・・・・山神の正体か・・・・・・」
「いかにも。しかし、目的は生け贄を食らうことにあらず・・・・・・」
疑問を抱きつつも、睦月はサツキを庇いながら洞窟の中を右に寄り始めた。
「真の目的のためにも、今はその娘が必要とされる。悪いことは言

わぬ。今ならその娘を置いてゆけば、命ばかりは助けてやろう」
「断る・・・・・・」
「ほう・・・・・・？」
険しい表情の睦月が答えると、ギバ・ゲルグは興味深そうに目を細めて呟いた。
「そいつは、妖怪の娘だ。スリの女の成れの果てと、髪の化け物の間に生まれた、要するに化け物の娘だ」
それを聞いた睦月は納得した。突然変異により人間から直接、妖怪になった者の子。生まれは人間だが、同時に妖怪でもある。
「（なるほど・・・・・・半妖であることには間違いないか）」
そう思って後ろのサツキを見た。先ほど妖気計が反応したのは、こいつが一時的に放出した妖気に反応したからだった。
「あの村の者は、罪人の娘と言うだけでも抵抗があったようだが、さらに父親が妖怪ときたもんだ。村の者は反対してたが、あの村長は住むことを認めた・・・・・・村の者は、あの村長に少なからず反感を抱いていたようだ」
「（なるほど、当然だな）」
犯罪者の子と同じ村に住むことになる村人の真理を、睦月は否定も肯定もしない。しかし、『人として生きる』のなら頷けるようなものではない。同時に腑に落ちない部分も見つける。村人は『罪を犯した人間の娘』とは言ってなかった。それどころか、サツキの出自についてよく知らないようだった。つまりは、
「（ただの風潮と憶測による、不確かな噂か・・・・・・）」
情報を求め、そこから判断する者にとって、一番あてにしてはならないもの。そうでなくても、人間として不確かな噂を鵜呑みにするなどある意味考え物である。が、このことは今は重要ではない。
「だから、村長が殺されると簡単に我の要求を呑んだ。人間など所詮ああいうものだ。さあ、悪いことは言わぬ。その娘を置いて、さっさとここから立ち去れ」
「（あんな人間が自分と同じなのか・・・・・・）」

村人との会話を思い出し、睦月は苛立ちを感じた。

特別編5　未知との激突

黙り込む睦月に、サツキは不安そうな表情で見る。
「悪いが、その要求には答えられない。こいつを連れ帰り、あの帝の鼻を明かすためにも」
「どういうことだ・・・・・・？」と、眉を寄せたギバ・ゲルグが聞く。
「あの帝ときたら、『妖怪と人間は共生できる』と言ったもんだ。だが、こいつを連れ帰って村の実情を証言させれば、あいつの領地内でも妖怪を恐れている人間がいることを証明できる。それが理由だ」
すると、「ハッハッハッハッハッハ」とギバ・ゲルグが笑い出した。
「なるほど。そのためにここに来たか。面白い。だが、それでも逃がす訳には行かぬ」
「それでも」という言葉が気にかかり、一瞬、睦月の動きが止まった。そこを、ギバ・ゲルグの手刀が襲いかかった。
「ぐっ・・・・・・」
苦しそうに声を漏らした睦月は、襟首を捕まれて洞窟の左側に投げ出される。
「あっ！！」
悲鳴を上げたサツキが駆け寄ろうとすると、ギバ・ゲルグは右腕で彼女の着物の襟を掴んで引き止めた。
「おっと。お前には大事な役目がある。俺と一緒に来てもらうぞ」
「てめえっ！！」

「潰れろ！」
睨み付ける睦月に左手をかざすと、そこから黒い衝撃波が放たれる。
避けられずそれを受けた睦月は岩壁に叩きつけられ、さらにギバ・ゲルグが腕に力を込めると腹に思い衝撃が襲いかかった。
「がはっ・・・・・・」
血を吐き出した睦月が地面に崩れ落ちる。
「ああっ！！」
「ふん、脆いな」
倒れた睦月を見下すように呟くと、サツキの目つきが鋭くなりギバ・ゲルグを睨んだ。そのすぐ後、彼女の長い髪が蛇のようにうねりだし、一束集まると鋭い槍のような形になり、ギバ・ゲルグを突き刺そうとした。
「ふん」
だが、鼻で笑ったギバ・ゲルグは、左腕でその槍を受け止める。その光景にサツキは目を見開いた。
「俺がただの人間だと思ったか？甘いんだよ！」
槍を払い除けた後、サツキの頬を殴った。
「ぁっ！」
小さく呻いたサツキが地面に膝を着き、ギバ・ゲルグは彼女を見下ろす。
「少しばかりいい気になってないか？別にこっちは、採取対象が生きてなくてもいいんだ・・・・・・」
鋭い爪を生やした左手を向けたその時、ギバ・ゲルグの肩と胸部に、二発の弾丸が命中した。
「がっ！？」
衝撃に呻き声を漏らすとサツキを放し、洞窟の壁にもたれかかった。弾丸が飛んできたほうを見ると、口から血を流した睦月が銃をこちらに向けていた。
「てめぇ・・・・・まだ、生きてんのか・・・・・・」
左肩と胸を押さえながら呻くギバ・ゲルグに、立ち上がりながら睦

月が答える。
「ああ。こういうことを想定しておけなくては、とても江戸東慶重役の使いは務まらん」
そう言って腹の辺りの服をめくり、下に付けている防御服を見せる。少し破れてはいるものの体への傷は浅く、致命傷には至っていない。服を離すと、ふと湧き上がった疑問をぶつけてみる。
「てめえも、ただの人間じゃないな？」
「なら、どうだと言うのだ？」
笑うギバ・ゲルグに、睦月は容赦なく銃を向ける。
「俺たちは・・・・・一般人に対して害を及ぼす妖怪と出会った場合、直接、退治することを許されている。だから・・・・・」
再び標準をギバ・ゲルグに合わせると、
「覚悟しろ」
と叫び、再び銃を撃った。ギバ・ゲルグは腕でガードしたが、銃弾は腕に触れた途端に爆発を起こし、思いもよらないダメージを与えた。
「ぐわっ。なんだ、これは！？」
予想外の事態に驚きを隠せないギバ・ゲルグに、腰に付けたナイフを左手で抜いた睦月が切りかかる。
「くらえええぇぇぇぇっ！！」
逆手に持ったナイフで斬りかかるが、ギバ・ゲルグはそこから飛び、洞窟の天井に沿って逃げ出した。
「逃がすか！！」
叫ぶ睦月が銃を撃つと、銃弾は入り口側の天井を吹き飛ばし、ギバ・ゲルグは外の地面に落ちた。
「ちっ」
舌打ちをしたギバ・ゲルグは立ち上がると、背中から太い腕のようなものが八本生える。その姿はまるでタコのようで、洞窟の外に出た睦月は驚いた。
「妖怪か！？いや、妖気計に反応がない。貴様、本当は何者だ！！」

そう言って睦月は銃を撃つ。すさまじい威力を誇る爆発銃弾（バーストブリッツ）は、さっきは確実にダメージを与えた特殊弾。だが、ギバ・ゲルグが出現させたタコの足のような触手の表面が揺らめいて、爆発の衝撃を吸収してしまうため、全く効果がなかった。

「ぐっ、ならば・・・・・これでどうだ・・・・・」

そう言って、上着の内ポケットに入っていた小さな機械を取り出すと、銃の後ろのほうに付けてその装置のトリガーを引いた。

《マナエネルギーチャージ》

銃から電子音声すると、銃身に何かのエネルギーが溜まり始めた。

「なんだ、あれは？」

「――――くらえ！」

銃口を向けトリガーを引こうとしたが、それを察知したギバ・ゲルグの触手を槍のように突いた先制攻撃を受けてしまう。

「ぐはっ・・・・・」

息を吐き、地面に膝を付くと「くそっ」と再び銃を向けようとするが、伸ばしてきた三本の足で後ろの岩壁に押さえ付けられ、動きを封じられてしまった。

「何をするつもりか知らないが、ただの人間でしかない貴様には、勝ち目はない」

残り五本の触手が向かって来る。万事休すかと思ったその時、

「きゃあぁぁぁぁぁぁっ！！」

それを見ていたサツキが悲鳴を上げ、彼女の体からとてつもなく強い妖気が放たれ始めた。長い黒髪はさらに伸び、刃物のような鋭い形に変化し、袖がめくれた細長く白い肌の両腕に無数の目が現れた。それを見た睦月の脳裏に、ある光景がよぎった。辺り一面を炎に包まれた町の中に立ちつくす何者か。その者の姿は、闇と煙に包まれて見ることができない。

「なんだ・・・・・やるのか？小娘・・・・・」

謎の変貌を遂げた少女への質問が、睦月の思考を現実に引き戻した。

「ぐううっ・・・・・あああああ！！」

叫び声を上げながらサツキはギバ・ゲルグに向かって、妖力を込めた右腕を振り下ろす。残り五本の内の三本で受け止めたが、彼女の攻撃を止められなかった。

「何!?」

最後に残った二本を足して止めようとしたがやはり止めきれず、彼女の拳はギバ・ゲルグの触手を押し込んだ。

「ぐっ・・・・・・このアマ、少しばかり調子に・・・・・・」

「あああああああああっ!!」

そのまま進み、本体もろとも地面に叩き込んだ。地面を砕き、ものすごい音を響かせた後、離れた地面に着地したサツキは息を激しく切らせる。

「はあっ、はあっ、はあっ・・・・・・」

しばらくすると意識を失い、そのまま地面に倒れてしまった。ギバ・ゲルグが地面に叩き込まれた拍子に開放された睦月は、痛む体を引きずり彼女に駆け寄った。

「おい、どうしたんだ!?おい・・・・・・」

揺さぶってみるが反応はない。すると、土煙の中から呟くような声がした。

「急激な変化に体が対応しきれていない。当然といえば当然か・・・・・」

すぐさま睦月は左腕でサツキを抱え、ギバ・ゲルグに銃を向ける。さすがに無傷ということはなく触手には傷が付いており、それを掻い潜った拳の一撃を受けた服の腹の部分は破れていた。

「貴様、この子に何をした!?」

「何もしてはいない。ただ、さっきも言ったとおり、急激な妖力の強さの変化にその娘の体が耐えられなかっただけのこと」

「『妖力の強さの急激な変化』だと・・・・・・?」

「そうだ。妖怪を忌み嫌っている、江戸東慶部隊に属する貴様なら、聞いたことはあるだろ。半妖や妖怪化した人間は、普段は妖気の放出を極力押さえ、力を使う時だけに開放する。だが、当初はどちら

もその量をうまく調整できず、自らの体に負荷を与える羽目になる」
確かにそう聞いたことがある。後々厄介な存在になる前に、力を使いこなせないうちに対処するのが睦月らのやり方。だが同時に、彼の脳裏に一つの疑問が浮かんだ。
「ちょっと待て!!なぜ貴様は、俺が江戸東慶部隊に属することを知っている!?」
それを聞いたギバ・ゲルグは、顔をうつむけて自らの手を当てた。
「余計なことを喋ってしまったようだが、貴様には関係あるまい。ここで果てるがいい!!」
睦月を押さえていたために損傷がなかった三本の触手を突き出し、睦月を仕留めようとした。しかし、睦月の方は反撃の準備をとっくに終わらせていた。
「チャージはとっくの昔に終わってるぜ!くらえ!!バーストガン!!」
サツキを抱えていない右腕を突き出し、引き金を引いた。銃からものすごいエネルギーの塊が撃ち出され、ギバ・ゲルグの伸ばした触手を砕きながら、本体に直撃した。
「ぬおおおっ!?」
着弾と共に爆発が起こった。煙が晴れた時には地面に開いた穴だけしかなく、敵がこちらの攻撃をかわしたことを示していた。睦月は辺りを警戒したが、ギバ・ゲルグが再び攻めて来ることはなかった。
「(どうして・・・・・・?)」
一瞬倒したと思ったが、使いこなせていなかったとはいえ妖力を開放した者の攻撃を耐えた。その時点で相手が『ただの人間』という考えは捨てるべきで、同時に状況を楽観的に見てはいけなかった。
それなのに、
「(やべっ・・・・・・)」
敵の姿が見えず、攻めても来ない。それに気が緩んだ睦月の体がよろめき地面に倒れそうになるが、銃身に仕込んだ短刀の切っ先で右腕を刺して意識をつなげる。鋭い視線を周りに向けてしばらく警戒

していたが、何も起きないことに安心したのか完全に倒れ、意識も闇の中に落ちて行った。

この時点でギバ・ゲルグが攻めて来たのなら、睦月は確実に死んでいた。だが、江戸東慶守護部隊の装備の威力を侮って負傷したギバ・ゲルグは、この山から退却していた。そういう意味では、睦月とサツキは幸運だった。

―※＊※―

辺り一面を炎に包まれた小さな町。ひしめきあう木造の建物が燃えている中で、一人立ち尽くしている者がいる。チョッキを着た何人もの男たちが銃を撃ったり、槍を突き出したり、剣を振っていたが、その何者かが腕を振ると剣や槍は砕け、跳ね返った銃弾は銃を持つ男たちの体を貫いた。倒れた男たちの中を歩く何者かに、物陰に隠れていた子供が拾い上げた銃を向ける。静かにこちら側を向いたその者は・・・・・大勢の命を奪ったにも拘らず、口元に笑みを浮かべた。

―※＊※―

「・・・・・ぁっ・・・・・・・！？」

目が覚めた時には、太陽がすでに南中に差しかかっていた。周りには戦いの跡が残っており、睦月自身の体にもまだ少しばかり痛みが

残っている。ふと、横をみると側には気を失ったサツキがいる。彼女の体は人間の姿に戻っており、妖気計に反応はなく、さっき感じた妖気も今は感じない。だが、あのような夢を見たばかりか、恐ろしさを感じずにはいられなかった。

「・・・・・こいつはあいつとは違う・・・・・あいつとは・・・・・」

何度か呟いた後、睦月はサツキを抱き上げて山を降りることにした。ふもとにある彼女の村を通るのは控えつつ、車が止めてある村外れを目指した。そんな睦月の頭の中では、今朝からあの戦いが終わるまでの間に見たこと、聞いたこと、感じたことが蘇った。自分たちが助かるために、何も感じずに少女を差し出した村人たち。そいつらの身勝手な主張。さらに妖気計に反応しない、妖怪のような敵。

「（あれはいったい、何者だったんだ・・・・・）」

そう思いながら歩いていると、いつの間にか山の入り口まで降りて来ていた。このまま真っ直ぐ進むと、あの村を横切ることになってしまい、トラブルは避けられそうになかい。睦月は携帯電話を取り出し、マップナビゲーションサイトにアクセスすると村の周りの地図をダウンロードして、回り道できそうなルートを探した。

「（・・・・・よし、行けそうだ）」

地図を確認してルートを見つけると、すぐさま移動を開始する。やがて遠回りをして車の停めてある場所に辿り着くと、すぐにサツキを後部座席に乗せ、出発した。睦月にとってもこの村は、居心地の悪い場所となっていた。

「さて・・・・・平安京都に戻るにしても、どこかに寄らなくては」

睦月の体にはまだ戦いのダメージが残っているので、痛む体では長距離の運転は無理そう。そう判断して、できるだけ近くの町で休憩を取りたいと思っていた。カーナビのスイッチを入れると、画面に辺りの地図が映し出される。

「近くに町があるな。まずはそこによるか・・・・・」

ハンドルと切り、とりあえず目的地に行くことにした。

特別編6　目的の達成

一方、睦月が目的地に定めた町では、田村麻呂の連れていた検非違使の一団が駐留していた。

「もうそろそろ、この町に留まるのも限界です」

「ウム・・・・・・」

それを聞いた検非違使隊の副長、伊庭谷（いばたに）　徹郎（てつろう）がうなるように呟いた。

「そうだな。刻限までまだ半日もあるが、ここまで連絡がないとなると、もう戻ってもよさそうだ」

判断を下し、立ち上がると共に側にいた部下に伝える。

「伝令だ。平安京都に向けて出発する」

「了解。全軍に通達してきます。あの少年は、いかがいたしましょう」

「田村麻呂隊長の言いつけどおり、連れて帰る。ここに置いておく訳にもいかないからな」

「わかりました」

役人は頷いた後、部屋を後にし、徹郎は町での駐留期間中に護送する落武者を預けている警察署に送る、引取りの書類を書いた。

「さて、と。ではそろそろ、参りますか・・・・・・」

―※＊※―

数時間後、準備を済ませた検非違使の一団が出発しようとした丁度その時、近くを車が通りかかった。道の脇に寄せて停めた後、車の窓が開いて近くにいた人に話しかけられる。運転席にいたのは、睦月だった。

「何かあったんですか？」

「いえね。なんでも、近くで起こった戦から逃げて来て、辺りを荒らし回っていた落武者を護送するんですって。帝が戦を起こすことを禁止したというのに・・・・・・」

「平安京都の近くで起こった戦らしいけど、なんでも、禾文（のぎふみ）か豪上（ごうかみ）の辺りから逃げてきたんですって」

「はあ！？そんな遠くから！？」

「あら、そういえば、そうねえ」

睦月が素っ頓狂な声を上げると、町の主婦たちも首を傾げる。さらにおかしなことに、近江は平安京都と隣接して、大名不在のことから戦など起こさない。むしろどこの大名と戦をするのか。

「（どうにもきな臭いな・・・・・・ん？）」

一団に目をやった睦月は、その中に少年が混じっていることに気付いた。

「なんで検非違使の一団の中に、子供が混じっているんだ？」

「ああ、あの子ね。近くで怪物に襲われている所を、保護されたんですって。ほら、あの村の近くの竹林」

「ああ。妖怪だろうと半妖だろうと、住むことを許している・・・・・・あたしゃ、正直言って不安だねぇ」

「でも、妖怪だろうと半妖だろうとさあ、あたしたちには関係ないじゃない。あの村のことだし・・・・・・」

「そういえばさぁ。あの村の村長、殺されてしまったんですって」

「ええっ。誰に！？」

「なんでも、妖怪かどうかわからないけど、その村長・・・・・・山神っていうのへの生け贄に村の娘を差し出すの、反対していたんですって」

「へえ～。立派な人だったんだねぇ～」
「でも、だったらその村長を殺したのって、山神の仲間ってことじゃない」
「あっ、そうか」
主婦たちは噂話に花を咲かせたが、睦月は主婦のする噂話は正直言って好きではなかった。こういう噂話が次第に余計なものを詰め込んでいき、根も葉もない虚偽を生み出し、やがて混乱を招くからだ。実際にそうした場面にはよく合うし、それにより起こってしまった悲劇も知っている。窓に腕を置いて、不機嫌そうな顔で聞いていたが、ふとある考えがよぎった。
「（村の近くで保護された・・・・・？それも妖怪が住むことを許された村。村人は『あいつら』と言っていたから、消えたのは一人とは限らない。と言うことは・・・・・・）」
ドアを開けて車を降りた睦月はそれを確かめようと、一団の中にいる少年――光輝のほうに歩いて行った。自分に近づく人影に気付いた光輝が、顔を上げてそちらのほうを向く。
「ええ・・・・・っと。君は、近くの村の子だよね・・・・・・・・」
ほら、山神が生け贄を求めてきたとかいう・・・・・・」
それを聞いた光輝はすぐさま、「奴らの追っ手か！？」と身構えた。
「ああ、待った！ちょっと待った！！」
睦月はすぐに懐に忍ばせていた手紙を出した。見覚えのある手紙に光輝が構えを緩めると、騒ぎに気付いた徹郎が進軍を止める。
「俺は睦月。少し訳があって、サツキって少女を助けて来たんだ。ほら、あそこの車の中にいる」
それを聞いた光輝はすぐさま車のほうに駆け出し、窓に顔を近付けて後部座席に寝かされているサツキを見つける。
「これは・・・・・」
「わかるのか？どういう状況なのか、俺にはさっぱりなんだ」
「しばらく、今しばらく」
光輝のほうに行こうとした睦月を、馬から下りた徹郎が呼び止めた。

「睦月殿、と仰いましたか。すまぬが、その少年を京の都に連れて行ってもらえぬか？」
「えっ・・・・・・まあ、いいけど・・・・・・」
「かたじけない。我らはご覧の通りの移動の仕方ゆえ、少年の体には堪える。おそらく都までは持つまい」
「まあ、そう言う訳なら・・・・・・俺もあいつにいろいろ聞きたいことがあるし・・・・・・」
「かたじけない」
徹郎は再び頭を下げると、号令をかけて一団を出発させた。それを見送った睦月は光輝のほうを向いた。
「じゃあ、行くか」

―※＊※―

日もだいぶ暮れた頃、ふもとの村の代官所に一人の男がよろめきながら辿り着いた。その男は、山で睦月と戦ったギバ・ゲルグで、代官とつながりがあると知らない奉行所の門番は彼を止めた。
「何者だ？お主・・・・・・」
「・・・・・・代官に会わせろ」
止められたギバ・ゲルグがイライラした様子で呟くと、門番は不愉快そうに眉を寄せた。
「貴様、お代官さまを呼び捨てにするとは、どういうつもりだ！？」
「いいから！代官に会わせろ！！『使いの者が来た』と言えば、わかるはずだ！！」
顔を見合わせた門番の内一人が中に入り、しばらくすると戻って来た。
「会われるそうだ。入れ」
ギバ・ゲルグは中に入ると、真っ先に代官の部屋に駆けつけた。畳

の上に荒々しく座ると、後から代官も出て来た。
「おお、そちか。で、どうだ?首尾は?」
「どうもこうもない。村人の奴ら、計画通りに生け贄を差し出しましたよ。しかし、妙な男が嗅ぎつけてきて、邪魔してきやがった」
「なんだと?では娘は・・・・・・物の怪の娘は・・・・・・!!」
叫ぶと同時に詰め寄った代官の体を、突然、ギバ・ゲルグの腕が貫いた。
「奪い返されましたよ・・・・・・!!愚かな貴様が呼び出しなんてするから、その隙にね!!」
「ガアッ・・・・・・かっ・・・・・・」
腕が抜かれ、呻き声を上げた後、代官は畳みの上に倒れて息絶えた。
「お代官さま、いかがなされました?」
物音を聞きつけた役人がふすまを開けると、穴の開いた体から血を流している代官と、腕に血をつけている男を見つけた。
「お代官・・・・・・皆の者ぉぉ!出合え!出合えぇぇぇぇぇぇ!!」
叫び声が響くと、周りの部屋の商ことが勢いよく開き、中から大勢の役人が出て来た。
「代官さまを手にかけた、不届き者だ。問答無用で切り捨て~い!!」
「おおっ!!」
役人たちは声を上げると、一斉に刀を抜き身構える。それを見ていたギバ・ゲルグはゆっくりと立ち上がった。
「フン、愚かな人間どもが・・・・・・力の差を思いしれ!!」
そう呟いたかと思うと、代官所の中から悲鳴が響き渡った。

―※＊※―

それから数分後。ギバ・ゲルグがいた山のふもとの村の入り口に、何人もの烏天狗が立ち往生していた。
「ですから、山神を名乗る者がここに来るかもしれないということで、我々が警備を・・・・・・」
「うるさい、化け物ども！お前らのような者は爪先一ミリも入れないぞ！！」
「おい、お前！俺たちを化け物呼ばわりしやがって。俺たちを一方的に罵倒するのは、条約で禁止されているだろ！」
別の烏天狗が叫ぶが、村人は聞こうとしない。
「うるさい！そんな条約など、我々は知らん。早く帰れ！！」
「・・・・・村長に会わせてもらおう！！」
「早く帰れ！」と叫ぶ村人に、「村長に会わせてもらおう！」と烏天狗が叫ぶ。
「しつこいな。帰れと言ったら、帰れ！今では私がこの村の村長だ！」
村人たちはそのまま、一方的に烏天狗たちを追い払ってしまった。
諦めて烏天狗たちが帰ってから一時間後、村の中に現れたギバ・ゲルグに村人は不安げな表情で話しかけた。
「あ・・・・・あの～。どちらさまで・・・・・・」
すると突然、その村人の体が貫かれた。凶器を抜かれて倒れた村人が、血を流して息絶える。
「きゃあああぁぁぁっ」
それを見た村の女性が悲鳴を上げ、村人たちが一斉に逃げ出した。
「愚かな・・・・・同じ村の者を見捨てた上に、貴様らを守ろうとした者を追い払うとは。貴様らには、生き長らえる資格はない！！」
苛立ちながらそう言ったリバ・ゲルグが懐からいくつかのカプセルを取り出し、空に投げるとその中から濃い灰色の粒子が吹き出た。
それらが地面に集まり、同じ色をした体の兵士のような物が現れた。
「だが・・・・・愚かだからこそ、我らにとって意味がある。さ

あ、久しぶりのご馳走だ!!思う存分味わえ!!」
号令がかかると共に兵士たちが一斉に散らばり、腕についた爪や獣のような口に生えた牙で、逃げ惑う村人たちを次々と仕留めて食らっていった。やがて家々に火を放ち、十分もしない内に村は紅蓮の炎に包まれていた。

―※＊※―

炎が消え、ほぼ全ての家々が炭となった村に、また新たに一人の男が現れた。
「どうですか?首尾は・・・・・・?」
それを聞いたギバ・ゲルグは、忌々しそうに「ふん」と鼻を鳴らした。
「ん?どうかしたのか?いつになく不機嫌のようだが」
「俺が始末した代官も、最初にそう聞きやがった」
それを聞くとネクロは、「はっはっはっはっは。そりゃ、災難だったね」と笑った。
「山神に化けて娘を差し出させ、後で自分のいいようにもてあそぶ。村の者にからくりを見破られないように、山神の役はお前が引き受け、後で娘を引き渡す。人間の考えることは、実に末恐ろしい」
「本当にそう思っているのか?『実に愚かだ』の間違えじゃないのか?」
「はっはっは、お前には敵わんね」
すると、また忌々しそうに、「ふん」と鼻を鳴らした。そこに、戦場にいた男リバ・ゲルグが現れた。
「しかし、お前との戦いが覚醒のきっかけとなるとは、皮肉としか言いようがない」
「俺が戦いを挑んだんじゃない。あの男がしゃしゃり出たせいだ」

ギバ・ゲルグの言葉に、ネクロが話に入る。
「あの男とは、確か江戸東慶部隊に属すると言う・・・・・・」
「ああ。確か・・・・・睦月とかいう奴だったはずだ。ほら、お前が昔、自分の力を試すために襲った町の・・・・・・」
それを聞いたリバ・ゲルグは、「ほほう」と呟いた。
「確か『弧訓町(こよみちょう)』でしたよね」
「ああ。あいつがあの町の住人の中で、お前の姿を見た唯一の生き残りだ。それが元で妖怪嫌いになったはずなのだが・・・・・・いったいどういうつもりだ?」
「そんなことより、さっさと済ませてしまおう。焼け跡とはいえ人間の住処にいるなど、虫唾が走る」
ギバ・ゲルグとリバ・ゲルグの会話に、「そうですか?」とネクロが加わる。
「私はそうは思いませんよ。人間どもの愚かさを、間近で観察できますからねぇ・・・・・・」
そう呟いて「ククク」と笑うと、リバ・ゲルグは「悪趣味な」と呟いた。

―※＊※―

同時刻。平安京都へ向かう車の中で、睦月は山で見たこと、サツキの身に起きたことを話した。
「『急激な妖力の強さの変化に体が耐えられなかった』。そいつは確かにそう言ったのか」
「ああ。俺もそういうことがあるのを聞いていたから、すぐに理解できた」
「そうか。ついに・・・・・・」
「・・・・・?どうかしたのか?」

光輝が考え込むと、睦月が聞く。すると、光輝は不機嫌そうな顔をした。
「別に・・・・・・妖怪を敵視しているあんたには関係ない。俺はまだあんたのことを信用した訳じゃないからな」
「十分だ。俺も、妖怪や半妖のことを完全に信用した訳ではない」
沈黙に包まれる車内。後部座席のサツキは、まだ目を覚まさない。
「あんたは・・・・・・これからどうするの？」
「・・・・・しばらく、平安京都に留まる」
包み隠さず答えた睦月に、光輝は意外そうに目を丸くする。
「どういう風の吹き回し？俺、あんたのことはあんまり知らないけど、これだけはわかる。あんたは、サツキのような妖怪と係わりのある者は嫌う人間だ」
運転席のほうを向いて言い切る光輝に、「そうだ」と静かに答える。
「俺は妖怪が嫌いで、それを滅ぼすためにそういう組織に入った。だが・・・・・今の俺は、その組織を信用できない」
「どういうことだ？」と、光輝が聞く。
「山で会った敵・・・・・・リバ・ゲルグと名乗ったあいつが、俺が江戸東慶部隊に属していることを知っていた」
「別に不思議じゃない。前もって調べたとも考えられる」
だが、睦月は首を横に振った。
「組織に属する者の戸籍や履歴、顔写真は、厳重に管理されていて、関係者以外は見ることができない。つまり・・・・・・」
「自分の組織の中に裏切り者がいるとでも？悪いが、そのようなことは信用できない」
「・・・・・そう・・・・・・だな・・・・・・」
睦月が呟いた以降は、黙ったまま車を平安京都に向けて走らせて行った。

―※＊※―

この世界のどこかにある建物の廊下。そこを歩くネクロ、ギバ・ゲルグ、リバ・ゲルグ。
「その様子だと、また失敗だったようだね・・・・・」
意地悪そうな声の後に、血のように赤い唇とした妖艶な美女が、通路の角から姿を現した。
「おや、ベノクレインじゃないか？失敗したとは失礼だな」
「ということは、一応の成果はあったみたいだね・・・・・」
「ええ、おかげさまで」
そのネクロの言葉には、シャニアク国の住民に対する皮肉が込められていた。
「しかし・・・・・それならなんであいつは不機嫌な顔をしてんだい？」
そう言われて後ろのギバ・ゲルグのほうを振り向くと、「おや♪」と呟いた。
「なぁに、ちょっと機嫌が悪いだけさ。目的は達成したものの、戦闘には負けたんだからな」
「あははは・・・・・そりゃ、災難だったね？」
「うるさいアマだ。少しはそのうるさい口を、噤んだらどうだ？」
すると、ギバ・ゲルグが頭から床に踏みつけられた。踏みつけているベノクレインの目は先程より鋭く、強い威圧感も漂わせていた。
「あんだと、こら！？てめぇ、誰に口聞いてんだと思ってんだ！？」
「ぐっ・・・・・」
ギバ・ゲルグはベノクレインを睨みつけ体を起こそうとするが、彼女の足の力が強く全く動けなかった。と、いきなり足を離したと思ったら、彼の体が起き上がった所に素早く蹴りを入れた。ギバ・ゲルグの体は二回転半しながら、廊下の向こう側に叩きつけられた。
「ぐあっ・・・・・このアマ・・・・・調子に乗ってんじゃあ・・・・・」

床に倒れ、再び起き上がろうとするギバ・ゲルグの体を再び踏む。
「調子に乗ってるのはどっちだ?たかが中将風情が、上のくらいにいるあたしに勝てるとでも思ってんのか!?」
「何を・・・・・・」
「はぁ〜い、そこまで」
起き上がろうとしたギバ・ゲルグが力を解放しようとした時、ネクロが底抜けに明るい声を出して割り込んだ。
「なんだ?『指揮官』殿」
「『殿』をつける言い方じゃないだろ?それ。それよりも、身内同士でのトラブルは勘弁してくれよ。少なくとも、ゲルグコンビのお二人にはこれからやって欲しいことがあるんだから」
「ふん。どうせたいしたことじゃないんだろ?」
「別に殺すというのなら止めないけど、今の状況で戦力を減らすと、ソウセツさまやカーモルがお前をどうするか・・・・・・」
哀れむような目で自分を見るネクロに、ベノクレインは「ちっ」と舌打ちをして、足を離した。
「はっ、命拾いしたな・・・・・・」
「おいおい、本気で殺す気だったのか?」
立ち去るベノクレインの後ろ姿を見て、リバ・ゲルグは呆れたように言った。
「彼女の性格からして、彼女を切れさせた相手は確実に殺されるな。やれやれ、実力は文句がないんだが・・・・・・性格が・・・・・・」
呆れ顔で頬をかく。起き上がったギバ・ゲルグは、まだベノクレインの後ろ姿を睨み続けていた。
「あの女、今に見てろよ」
その呟きが聞こえた者は、その場にはいなかった。

特別編7　揺れる心

愛宕山。謎の男へイルの襲撃を経て、烏天狗たちは山伏たちとの協力で警備に力を入れていた。その中腹を一人の少年が横笛を吹きながら歩いており、それを物陰から見ている者がいた。ふと、少年が横笛を吹くのをやめた。それと同時に、物陰に隠れていた男が刀を振りかざして飛び出した。しかし、振り下ろされた刀が少年を捉えることはなく、そのまま地面に突き刺さった。飛び出した男は、少年を探すため周りを見渡した。

「不意打ちとは、礼儀を知らないのか？」

上からの声に見上げると、先ほどの少年が数メートル上の木の枝に飛び乗っていた。男は驚いた顔をしたが、少年もまた驚いた顔をしていた。

「まさか・・・・・子供か？」

不意打ちを仕掛けてきた男は実は少年で、青年と間違えるほど大柄な体をしていた。

「子供に子供と言われたくない」

「なんで俺に不意打ちを・・・・・？」

「その、腰に差した刀が欲しいからだ」

そう言って、大柄の少年は遥か上にいる少年の腰に差してある、小刀を指す。

「何故だ？」

「言う必要はない」

問いかける少年に相手は冷たく返す。しばらく場を沈黙が支配した

が、少年は木から飛び降りた。
「俺はこれを渡すつもりはない。それならどうするのだ？」
「わかるだろう・・・・・？力ずくで奪い取る！！」
そう言って、大柄の少年は刀を振りかざして向かって来た。その刀は先ほどの不意打ちに使われた刀とは違い、刃が薙刀の先のようになっており、柄はなくそこには手を防御するためのような四角い物が付いていた。
「変わった刀だな」
「かの有名な武蔵坊弁慶が使ったとされる薙刀の刃を、加工して作った特別な刀だ！」
切りかかってきた少年の攻撃をかわし、少年も叫ぶ。
「『特別』か。それならこいつも同じなんでな、渡す訳にはいかない！」
「なら、怪我をしても知らないぞ！！」
刀を大きく振って突進してきた大柄の少年の攻撃を、少年はかわした。二人の少年の力の差は体格から見て明白で、下手をすると少年のほうが骨折などをしてしまう。そこで、刀をかわして高く舞った少年は、腰に差していた扇子を大柄の少年の足に向けて投げた。そこはいわゆる『弁慶の泣き所』で、当たれば痛さでもだえただろう。だが、大柄の少年は後ろに飛んでそれをかわした。着地した少年は、心の中で舌打ちした。
「体格で差がある場合、弱点を突いて攻撃するのが妥当だ。だが、それくらい俺も読んでいるぞ」
「むっ・・・・・・」
少年は呟くと、腰の刀を鞘ごと抜くと大柄の少年を前に構えた。
「ようやく、やる気になったか。だが、なんで鞘ごとなんだ？」
「・・・・・これで、人を斬りたくないんでね・・・・・・」
「そうか・・・・・・」
静かに呟くと、大柄の少年は刀を振り上げ、全速力で突進して行った。

「（まだだ・・・・・・！！）」
真横に降られた刀をジャンプしてかわした。その後も二度、三度とかわす。ついに大柄の少年は渾身の一撃を放つため、刀を大きく振り上げてきた。だが少年のほうは、自身の刀を振りかぶった刀の前に真横に構えた。
「（全体重を乗せたこの一撃を、受けるつもりか！？）」
だが少年は刀を受けた瞬間、それを左側に傾けた。勢いに乗っていた大柄の少年の刀は鞘に従って左に流れた。
「（まずい！！）」
そのすぐ後、勢いを載せた反撃が来ると睨むと、少しでも身軽になるために刀を手放そうと手を緩めた。だがその瞬間、突然、少年が刀を振り上げ、大柄の少年の刀を遠くに吹き飛ばした。少年が笑った。
「よし、これでやりやすい！！」
だが、笑っていたのは大柄の少年も同じだった。
「武器がなけりゃ、勝てるとでも思ったか？」
そう言って大柄の少年は殴りかかったが、少年はそれを右にかわした。大柄の少年はそれを追ったが、待ち構えていた少年はその腕を掴むと体を後ろにひねり、そのまま投げ飛ばした。
「（なっ・・・・・・これは・・・・・・！！）」
地面に倒された大柄の少年が上体を上げると、閉じた扇子が彼の首筋に当てられた。その瞬間、少年の勝ちが決定した。
「勝負あり、だな」
負けを悟った大柄の少年の心はなぜか晴れ渡っており、彼らは「ハハハハハ」と笑いあった。
「やるじゃねぇか。まさか、あんな手があったとはな」
「『腕力で力の差が大きい場合、技でそれを補え』。先生の口癖だ」
そう言って、少年は扇子を帯に差した。
「俺の名は鬼若だ」
「へぇ～、鬼若か。俺は牛若。『若』揃いだな」

「ははは。そうだな」
鬼若が笑うと、「牛若〜」と少女の声がした。二人が声のほうを向くと、青い髪の少女がこちらに走って来ていた。
「ああ、静香」
「（キレイな子だ）」
安直な言葉で表せば、静香は容姿端麗。鬼若がそんなことを思いながら見とれていると、静香は二人の前で止まって息を切らせた。
「牛若、大変！武蔵先生が・・・・・・」
「武蔵？・・・・・・あ〜っ！！忘れてた！！」
両手を頭に乗せて叫ぶ牛若に、鬼若は首を傾げた。
「今日！寺子屋！！」
「そうよ。何、忘れてるの・・・・・・」
二人のやり取りを見て、鬼若は牛若が寺子屋（学校）をサボっていたということを悟った。
「・・・・・サボりかよ・・・・・・」
「ところで、武蔵先生がどうかしたのか？」
「何よ、さっきは呼び捨てにしたくせに。そうだ、武蔵先生が大変なの。すぐに寺子屋に来て！」
「また俺を連れてくるために罠なんじゃないのか？」
「（おいおい、前科持ちかよ）」
それを聞いて鬼若は驚いた。ここでいう『前科』とは、罪を犯したとかそういう意味でないのであしからず。
「もう、そうじゃないの。南町の人たちが来て、武蔵先生が・・・・・」
「なんだって！？」

―※＊※―

本来、南町奉行所は江戸東慶に存在するものなのだが、その江戸東慶が東洋文化を取り入れ大きく変わったため、今までの奉行所は閉鎖を余儀なくされた。そこを徳仁が引き取り、平安京都の中心となる『所在地』に設置した。この『所在地』は、シャニアク国を４７に分けた各地域に一つずつ存在する。唯一、江戸東慶にはなく、代わりにシャニアク国全土の『首都』が置かれている。

「武蔵先生～」

走ってきた少年の声に、中から出てきた男性と彼を連れた岡っ引が声の主に気付いた。法が改正されてから、武士や岡引が頭をまげにすることは少なくなり、髪をそのままに近い形にすることも広まっていたので、この岡っ引たちも髪はそのままだった。

「やあ、牛若くんか」

十手を腰に差した男性は腰に両手を当てて、意地悪そうに笑った。

「なんだ?また、サボってたのか?」

「はあ、はあ。はい、いつも通り山に行っていました」

「ダメだぞ?子供の内にちゃんと勉強しておかないと、将来ろくな大人にはならん。ん?その、大柄の少年は?」

膝に手を当てて息を整えた後、体を上げて後ろの大柄の少年を紹介した。

「紹介しますよ。その山で会った鬼若。鬼若、こちらは銭型・・・・・」

「まさか・・・・・・銭形平次か!?」

驚く鬼若に、「いや、銭型兵五郎さん」と牛若が言う。一瞬、唖然とした。

「全く、あいつも苦労するなぁ～」

苦笑いしている銭型の後ろを、担架に載せられて運ばれて武蔵が通った。体中傷だらけだった。

「ちょ・・・・・ちょっと待ってください。いったい、何があったんですか!?」

「わからない。ただ、近所の人が悲鳴を聞いた頃には、庭で血を流

して倒れていたそうだ」
「どうしてですか！？」
牛若は信じられないという思いで声を上げ、その間に武蔵は近くに止まっていた救急車に乗せられ、病院に運ばれた。
「いや、我々も何がどうなっているやら。武蔵の腕はよく知っているし、そんな彼に傷を負わせられる者など、そう多くはいまい」
「つまり、容疑者はすぐに絞られるってことですか？」
「いや、逆に見つからない場合もある。今、岡っ引や役人を総動員して探しているが、今のところ見つかっていない」
「くそっ・・・・・いったい、誰が・・・・・」
牛若が悔しそうに拳を握ると、そこに、車のクラクションが鳴った。
牛若たちが振り返ると、そこに止まっている一台の自動車から、一人の男性が降りて来た。
「なんかあったのか？」
そう言いながら歩いて来たその男は、見た目は若いが頭の髪は白かった。
「ああ、平次」
「「ええ～っ！？」」
牛若、静香、鬼若の三人が叫ぶと、男はやる気なさそうに頭をかいた。
「お～い、お前らが何を考えてるか、なんとなくわかるぞ～」
銭型は笑いながら、男の側に近づいた。
「こいつは師走（しわす）平次（へいじ）。俺や武蔵の、寺子屋時代の同級生だ。って、どうして戻って来たんだ！？」
「里帰りだ！したら悪いのか！！」
猛烈な勢いで言い返す平時に、思わず銭型と静香はたじろいだ。
「・・・・・にしても、久しぶりに帰ってみたらこの騒ぎ。いったい、何が起こったんだ？」
「武蔵が、何者かに教われた」
それを聞いた平次が、「なんだと？」と表情を曇らせる。

「武蔵ほどの男があそこまでやられたんだ。犯人は相当の手練だ・・・・・」
すると「・・・・・・ちっ、手遅れだったか」と、平次が舌打ちをした。
「手遅れって、あんた、何か知ってるのか!?」
詰め寄る牛若を制し、銭型に聞く。
「とにかく、武蔵は生きているんだな?」
「あ・・・・・・ああ。深手は負っているが、命に別状はない」
「そうか・・・・・・こりゃ、不幸中の幸いだな・・・・・・」
「・・・・・・あんた、さっきから何を言って・・・・・・?」
牛若が詰め寄るが、平次は彼を制しながら銭型に近づく。
「とにかく、銭型。二~三頼みたいことがある。協力してくれないか?」
「いいが・・・・・・いったいなんだ?」
「急いで虎太郎を探してくれ。あいつも強いから、犯人に狙われている可能性がある」
それを聞くと、「なっ!?」牛若たちはと驚いた。
「お前・・・・・・犯人に心当たりがあるのか!?」
「武蔵に話を聞くまではなんとも言えないが、まず間違いないと思う。とにかく、急いでくれ!」
そう言って車に乗ると、平次は急いで走らせた。

―※＊※―

一方、海の近くにそびえる山。かつてシャニアク国の東西を分ける境に立っていたと伝えられるその山の中腹にある石の上で、一人の山伏が座禅を組んでいた。それを茂みからうかがう、怪しい二つの影。

「奴に間違いないな？」
「そんなこと、ここからじゃわからん。もっとも、襲えばわかるさ」
「そうだな・・・・・・」
互いに頷いた影が一斉に飛び出す。しかし、山伏に腕の爪が届く寸前に、飛び出した者の体は切り裂かれた。
「なっ・・・・・・・」
「にっ・・・・・・・」
突然のことに理解できないまま、体が地面に落ちると同時に、飛び出してきた影は炎を出して消滅した。
「まったく。いったい、なんだというのだ・・・・・・」
座禅を組んでいた山伏は、苦々しい表情をして立ち上がり、刀をしまった。その男は先程、平次の話に出てきた佐々木虎太郎だった。
「銭型から連絡が来た時には半信半疑だったが、こうなれば信じる他あるまい」
携帯を出しながら立ち上がり、遠くの空を眺める。
「まさか・・・・・・あの武蔵が・・・・・・」
と、その時、虎太郎が足を滑らせて体のバランスを崩した。
「おっ・・・・・・あっ・・・・・・あっ・・・・・・」
そしてそのまま、「ああ～～～～！！」と岩から落ちてしまった。

―※＊※―

二日後。病室の中、不機嫌な顔で腕を組んで立っている平次が文句を言う。
「まったく、呆れてものも言えないとはこのことだ・・・・・・」
「まあまあ。武蔵と同じ相手でなくて、良かったではないか」と、銭型がなだめる。
「いや、あえて見逃したのかも知れん。己の不注意で怪我をするよ

うな奴は、放って置いても自滅するだろうと考えて」
頭と右腕に包帯を巻いた虎太郎は、黙って横を向いた。
「しかし、この病院に源内がいたのは不幸中の幸い。おかげで、武蔵も一命を取り留めたらしい」
銭型が言うと、平次も溜め息をつく。
「よもや、かつてのクラスメイトがこんな近くにいるとは・・・・・」
「因果などというものは、信じないのだが、な」
虎太郎がそう言うと、三人とも溜め息をつく。
「それより平次、そろそろ教えてくれないか。お前、武蔵を襲った犯人に何か心当たりがあるのだろう?」
「ああ・・・・・いや・・・・・」
銭型に聞かれた平次は声を詰まらせ、全員眉を寄せた。
「どうしたのだ?」
虎太郎が聞くと、頭をかきながら平次は病室の窓に近づいた。
「・・・・・実は、ここ三週間で、妙なことが起きているんだ」
「妙なこと?」と銭型が聞く。
「全国各地で烏天狗や大天狗が何者かに襲われたり、山神に化けた何者かが生け贄を要求してきたり・・・・・村一つが全滅したり」
「全滅!?そんなバカな!?いつそんなことが・・・・・」
ベッドから起き上がった虎太郎に、銭型が静かに言う。
「おまえは山篭りしてたから知らんのも無理はないか。今から一週間近く前のことだ」
黙り込む三人。所々、雲はあるものの空は晴れ渡っており、何事もないようだった。

―※＊※―

「それは、どういう風の吹き回しだい？」
平安京都に着き数日、そこに留まる理由がないはずの睦月の言葉に、徳仁が聞き返した。部屋の中には徳仁、睦月、光輝の他に、安倍晴明、源博雅、坂上田村麻呂、そして彼の率いる部隊の副隊長である伊庭谷徹郎がいた。
「同じことを、この光輝という少年にも言われましたよ」
そう言って、側にいた光輝の頭に手を載せる。
「別に、どうということはないが・・・・・・俺は、自分の所属している組織が信用できなくなった」
「ん？どういうことだ？」
博雅が聞くと睦月はその場にいるみんなに、サツキが生け贄として出されていた裏山の祠で出合った、謎の男性について話した。
「姿が変わった？にわかには信じがたいな・・・・・・」
「だろうな。誰だって、それが当然の反応だ」
「しかし、その者からは妖気は出ていなかったのだろう？晴明、これは・・・・・・」
博雅が聞くと、「うむ」と晴明が考え込む。
「お主の言っていた者・・・・・・それに、あの飛天という烏天狗の話に出てきた者は、同じ何者かに仕えているということか・・・・・・」
「烏天狗・・・・・・？ああ、あの日、俺がすれ違ったあいつか・・・・・・」
睦月が飛天を思い出すと、「うむ」と晴明が答える。
「飛天殿と申してな。あの者の使えている大天狗の太郎坊殿が、何者かに襲われたらしい。その者も体が変化したらしいが、妖気を発していなかったので、誰もが最初は人間だと思ってたらしい」
「！！では・・・・・・やはり・・・・・・」
目を見張る睦月に「いや」と、晴明が口を出す。
「あくまで仮説だ。我々が数を把握し切れていないだけで、妖怪の能力を持った人間など他にいよう」

「まあ、そうですが・・・・・しかし、片方が天狗を襲い、もう片方は生け贄として半妖の娘を要求してきた。どちらも目的が噛み合わないように思えるのですが・・・・・」
「確かに・・・・・なぁ・・・・・」
徹郎の指摘に博雅が言うと、全員が考え込んでしまった。
「まあ・・・・・子供がいるのにこんな話はどうかと思うが・・・・・」
「子供って、俺のことですか!?」
徳仁がそう言った時、光輝が怒鳴った。
「ん?まあ・・・・・」
「失礼な!俺はこれでも１５です!!」
物凄い剣幕で迫られ、徳仁は「うぅっ・・・・・うむ」と黙り込んでしまった。そんな光輝の頭を睦月が小突く。
「バカ。１５はまだまだ子供だ」
「いやいや。大人ともいうし、子供とも言う。両方の境だな」
世間話に花が咲いた晴明と睦月に、徳仁は深い溜め息をついた。
「とにかく・・・・・睦月くん。これから君はどうするのだ?」
博雅の質問に一瞬、睦月が戸惑った。
「・・・・・俺は・・・・・」

特別編8　接触

睦月は、江戸東慶に戻っていた。乗っていた車を駐車場に止め、荷物を持って鍵を閉めると表情を曇らせた。

〜―回想―〜

江戸東慶へ帰る前、博雅が睦月を呼び止めた。

「危険ではないのか？敵はお主のことを知っているのだろう」

「あくまで可能性だ。俺の所の上層部が謎の敵と繋がっているなんて・・・・・・」

「そうだろうな。だが、可能性がゼロでない以上、用心するのに越したことはない。まあ、それはお主次第だが・・・・・・な」

腕を組む晴明に、睦月は黙っていた。

〜―回想終わり―〜

「・・・・・そんなはずはない・・・・・・そんなはずは・・・・・・」

暗示をかけるように呟きながら、睦月は江戸東慶部隊の本部に戻った。材料こそ違うが外装は江戸東慶時代の建物とほぼ同じで、周りの景色に溶け込んでいた。だが中に入ると、そこは床にタイルが敷

かれ、至る所にエスカレーターが置かれている現代風の雰囲気になっていた。
「睦月さん。お帰りなさい」
ロビーに入った睦月を、受付に座っている女性が出迎える。
「何かあったんですか？顔色が悪いようですけど・・・・・？」
「いや、なんでもない。今日も帝との交渉が平行線だった。ただ、それだけだ」
「そうですか」と受付は心配そうに呟いた。
「俺は部屋に戻る。何かあったら連絡を入れてくれ」
「わかりました」
フロアの中を歩く睦月に頭を下げる。エスカレーターを上り居住フロアに来た睦月は、真っ先に自分の部屋に入った。ドアを閉め、部屋にも上がらず思い悩む睦月。頭の中には晴明の言葉が反芻されていた。
「惑わされるな・・・・・惑わされるな・・・・・」
何度も言い聞かせたが、いまだ心のどこかに自分の組織に対する疑いがあった。

―※＊※―

所変わって、首都より北に位置するとある地方。ここには、かつて本土に広く住んでいたが朝廷の軍により追放された、蛭子神の血族とされる『恵比寿（えびす）』と呼ばれる人々たちが住んでいた。彼らの反撃を恐れた朝廷軍は討伐のための軍を派遣し、エミシ側は悪路王を筆頭に反撃した。記録では両軍を率いていた坂上田村麻呂と悪路王が一騎打ちで戦い、互いの力を認め合い和解したとされているが、実際は違っていた。一度、本当に和解した両軍だったが、朝廷は別働隊を率いて徹底的に攻撃し、エミシの人々を抹殺した。都に戻りそ

れを聞いた田村麻呂はすぐ抗議したが朝廷上層部はそれを聞かず、田村麻呂を『名誉の戦死』と言う建前の元、追放したのだ。

それから六百年、今を生きる人々は、そのツケを払うことになる。

―※＊※―

「目覚めよ・・・・・地に眠りし者たちよ・・・・・・」

大規模な戦が終わった焼け野原の中、地面に右手をかざしたヘイルが怪しげな呪文を唱えていた。

「目覚めよ・・・・・我が声に応えて。汝らの無念を、晴らさんがために」

すると、地面から顔の浮かんだ煙のような、怨霊らしきものがいくつも浮かび上がった。

〔ウア～・・・・・苦しい・・・・・・〕

〔ウア～・・・・・痛い・・・・・・〕

〔ウア～・・・・・憎い・・・・・・〕

大量の悪霊が周りを飛んでいるにも拘らず、ネクロは落ち着いていた。

「我が声に従い、舞い戻れ・・・・・汝らの無念を晴らさんがために」

〔よく言うじゃねぇか・・・・・〕

他の悪霊とは違う、威圧感がただよいはっきりとした声がする。そこには、体格のいい髭の生えた男が立っていた。

〔貴様・・・・・俺たちを蘇らせて、召使いにでもするつもりか・・・・・？〕

「別に・・・・・ただ私は・・・・・いえ、我々はあなた方に無念を、晴らしてもらいたいだけです」

不気味に〔クックック、そうか〕と笑う悪路王。
〔じゃあ・・・・・貴様が俺たちに、肉体を捧げやがれ!!〕
一声上げると同時に、大量の悪霊がヘイルに取り付こうとする。しかし、
「渇!!」
ネクロが目を見開くと、悪霊たちは一つ残らず動きを封じられた。
悪路王も含めて、辺りを漂っていた動きが鈍くなる。
「勘違いしないでいただきたい。我々は、あなた方に協力してもらいたいだけです。我が軍の兵士として」
〔我らにまた、武器を持てと言うのか!?〕
「まあ、そういうことになりますかな。しかし、あなた方の恨みを晴らすには、ちょうどいいと思います。どうですか?」
〔下手な交渉だな。そんなことをして今の我々に、なんの得がある!〕
「我々は、今の政府が邪魔でならないんです。そしてあなた方は、かつて自分たちを滅ぼした朝廷軍の末裔であるこの国の人たちが許せない。あなた方が恨みを晴らすために政府を落としてくれれば、我々としても助かるのです」
黙り込む悪路王に、ヘイルはさらに交渉を続ける。
「なんなら、この国の政府を落とした暁には、この国の支配権はあなた方に譲渡いたします。どうですか?」
〔・・・・・興味はない・・・・・・が、やらなければならないことができた。その条件を呑もう〕
「やらなければならないこと・・・・・・というのが気になるが、いいだろう」
そう言ってヘイルが取り出したカプセルに、次々と悪霊たちが吸い込まれて行った。
「少々引っかかりますが、任務完了ですね・・・・・」

―※＊※―

四時を回り、日が傾き始めた頃。睦月は気晴らしのために散歩をすることにした。特にこれといった目的もなかったため、宿舎の庭や廊下を歩き、一通り見て回った。

「（特に・・・・・怪しい所はない）」

八割方周った所で宿舎一階の曲がり角に立ち止まり、溜め息をつく。

「当然だ。この組織は妖怪やその類を嫌っている」

頭を振って疑念を払った。しかし、時間がたつとすぐに疑念が湧き上がる。

「・・・・・ちっ・・・・・ふざけるな！！」

憤りに思わず、近くの壁を殴りつけた。すると、どこか響くような音がした。首をかしげ、今度はノックをするように叩いたが、やはり響くような音がする。

「なんだ？どうしてただの壁なのに、音が響くんだ？」

近くの窓から外に出てみると、そこからさらに壁が続いていた。反対側に回ってみたが、窓も部屋もない。ますます怪しいと思い、先ほどの場所に戻った。

「・・・・・気のせい・・・・・じゃないよな・・・・・」

こういう仕事に就いていると、自然に感が鋭くなる。そのため睦月には、ここに何かがあると確信があった。ニ～三度壁を叩くと、音が変わる境に切れ目を見つけた。突然開くことを考慮し、バランスを崩さない程度に力を入れると音も立てずに壁が開き、その中に階段が現れた。足音を立てずに下りると、奥へ続く通路を見つけた。

「・・・・・・・・」

眉を寄せた睦月はいつも通り妖気系を取り出すが、反応はなかった。唾を飲み込み、隠し通路を奥へと進んで行くと、その先にあるドアを開く。さらにその向こう側で信じられない物を見つけた。

「な・・・・・なんだ、これは・・・・・」

地下の研究室の中には、実験機の中に入れられた様々な動物。ケースの中には、まるで生き物のように不気味に脈打つ様々な武器があった。

「・・・・・生物実験？・・・・・・生体武器・・・・・・？どれも〈ピース条約〉で禁じられているはず・・・・・」

信じられないと言う表情で奥へ進んで行くと、目の前に檻が見えてきた。その中の大きな檻に入れられているのは、とても服とは思えないボロボロの布をまとった狼の耳と尻尾を生やした少女だった。

少女は失望に染まった、おびえた目で睦月を見た。

「・・・・・・・・・」

おびえた目で見る少女を見て、唖然とした睦月は何も言えなかった。その時、後ろで何人かの足音が聞こえる。急いで物陰に隠れると、白衣をまとった何人かの男が入って来た。

「次の実験は、どうする？」

「どうするも何も、ただの観察だろう？珍しい素体だからって、改造などの実験はネクロさまに禁じられているし」

「だがいずれ、それらの許可を下されると、おっしゃられていたぞ」

カタカタ、と機器のボタンを打つ音がする。睦月は隠れている物陰からそっと様子をうかがった。

「〈ネガディゼンス〉の波長も一定になってきた。『もう慣れた』と言うところか」

「なら、新しい段階に移らなければならないか。新たな『負の感情』を湧き上がらせるための」

「要するに、世界を憎ませればいいんだろう？そうだ、ちょうどネクロさまから生物兵器の培養に関する以来が来ている。いっそのこと、その娘で培養してやるか？」

「グロイな。まあ、波長を見る限り、今の状況に絶望しているこの状態では、そうでもしなきゃ新たな憎しみを抱かせるなど・・・・・ん？」

「どうした？」と研究員の一人が聞く。

「三秒ほど、波長が変わっている。これは・・・・・・」
「プラスの波長を出しているな。何か、俺たちとは違う者を見つけたのか？」
「・・・・・・まさか、ネクロさまがおっしゃっていた、平安京都の隠密？」
それを聞いた睦月の体が、反射的に動いた。一瞬、研究員の一人が何かに気付いたが、他の研究員も睦月もそれに気付かなかった。
「だとしたら時間がないな」
「すぐ打ち合わせよう」
研究員が全員部屋を出ると、睦月はすぐに這い出して閉まったドアに耳を付けた。外に気配がないことを感じて出ようとすると、ふと後ろの少女のほうを向く。閉じかけた瞳は恨みも憎しみもない、ただ絶望だけ。
「・・・・・・待ってな。時間はかかっても、必ず助けに来るから・・・・・・」
そう言って、睦月は研究室を後にした。例えそれが、ただの気休めでしかなくても。

―※＊※―

部屋に戻った睦月はショックが隠せず、しばらく呆然としていた。自分たちが住んでいるすぐ下で、このようなことが行なわれていたとは。自分に訴えるような少女の悲しい顔が、一瞬、サツキと重なる。
「・・・・・・ふざけるな・・・・・・」
激しい憤りを覚え歯軋りした睦月は、研究員が話していた平安京都の隠密を探すことにした。

―※＊※―

夜も更けだした頃。江戸東慶近くの森で複数の陰が飛びかう。木々を鳴らし、高速で跳ぶ影を別の影が追う。枝から離れて落ちる葉を、銀の軌跡が切り刻んだ。連続で響き渡る金属音、木の幹に刺さる黒い刃物。地上に降りた影は誰もが黒装束に身を包んでいたが、その中に一人だけ白い装束に身を包んだ者がいた。そこで対峙しているのは、間違いなく忍びの者――忍者の集団だった。

「・・・・・・さすが江戸東慶を守る忍び集団、簡単には逃がしてくれないわね」

白装束の忍びが呟く。声からして女性だとわかったが、同時に焦りを感じさせる。

「さて・・・・・・私一人で足止めできるかどうか」

「なっ、隊長!?何を言ってるんですか!?」

「相手は相当の手練です。一人でまとめて相手にすれば、確実に命を奪われます」

「そうね。だからこそ、それを捨てる覚悟で残らなければならない」

「なっ・・・・・・!?」

後ろの忍びたちが騒然とすると、「別れは済んだか?」と目の前の忍びが刀を抜く。

「早く行きなさい!隊長命令よ!」

「し、しかし・・・・・・」

「逃がしたところで無駄だ。お前らはまとめて、ここで片づける!」

追っ手の忍びが駆けだし、白装束の忍びとその部下たちが身構える。が、横から銃撃が割って入り、後ろに飛び退いた忍びたちが着地するや銃撃の飛んできたほうを見る。

「誰だ!?」

当然、相手は答えない。追っ手の忍びはクナイを取り出すと、腕を振り上げる。

「隠れても――無駄だ！」

相手が隠れている場所を知ってるかのように草むらに投げつける。だが、再び発射された銃撃がクナイを砕く。落ちたクナイの欠片を見て、忍びは目を細める。

「（光学系の銃撃・・・・・・レーザーのようなものか。このような攻撃ができる携帯武装といえば・・・・・・）」

「ぐあっ！」

「がはっ！！」

「なんだ！？」

先頭の忍びが振り返ると、覆面で顔を隠した男が突っ込んでくる。たなびくマントの下から拳を突き出してくるが、忍びの男は飛び上がってかわす。

「その覆面、剥がしてやる！」

下りながら手を伸ばそうとするが、それより早く白装束の忍びに背中から刺された。

「――――！！」

「ガッ・・・・・・お・・・・・・・・れ・・・・・・・・」

刺された忍びの男は最後の力を振り絞り、自分を刺した白装束の忍びの覆面を剥ぎ取った。露わになった顔に、覆面の男は目を見張った。

「女だと！？」

彼女が地面に着地すると共に、刺された男は地面に倒れた。刺された箇所は急所とされる部分に近く、明らかに殺すつもりで刺していた。

「何を驚いているのですか？私たちは忍びです。こういうことは日常茶飯事・・・・・・」

忍者刀をしまい、剥ぎ取られた覆面を取りながら言った女性は、それを首にかけて覆面の男に鋭い視線を向けた。

「さて・・・・・助けていただいたことに感謝はしますが、顔を見られた以上放っておくわけには行かなくなったわね」
女性が言い終わると共に、覆面の男はとっさにかがむ。左右から飛びかかった黒装束の忍びの武器が空を切る。速く迷いがない一閃は、明らかにこちらの命を取るつもりで放たれたもの。
「・・・・・恩を返す、って考え方すらできないか」
向かってきた忍びを蹴り飛ばす男に、白装束の女性は冷たく呟く。
「わずかなミスが死を招く世界では、その考えは甘さでしかない。よくおわかりでしょう？江戸東慶守護部隊の人」
「そこまでわかるのか！？」
襲いかかる忍びを殴り、蹴り、確実に飛ばす。だが、どんな確かな手応えがあっても、相手の忍びはそれほどダメージを受けてないかのように立ち上がり、周りを囲む。
「我々の情報収集力と判断力・・・・・甘く見てもらっては困るわね」
確かに甘く見ていた。助ければ味方かもと思って話しを聞いてくれると考えていた。だが、自分が同じ立場だったら？明かされたらマズイ秘密を知られた以上、敵だろうと味方だろうと不確定な要素は摘み取る必要がある。そこまでの考えに今更行き着いた。
「待て。俺はあんたらを突き出すつもりはない」
「何を持って信用しろと？」
覆面をし直した女性の言葉に、覆面の男は言葉を詰まらせる。
「（こうなった以上、素顔を明かして信用を得る、っていうのも無理か）」
そもそも、彼女らの追っ手は倒した者だけとは限らない。覆面をしているとはいえ、手を出した時点で彼も十分危ない橋を渡っている。なら、もう後戻りはできない。
「あんたらが何を調べてるかは、見当がついている。江戸東慶守護部隊の地下で行われている生態兵器開発のことだろう」
白装束の女性が目を丸くする。周りの忍びたちが突っ込もうとする

が、
「待て！」
女性が叫ぶと、忍びたちは止まらなかったものの男性の側を通り抜け、警戒は向けているものの跳びかかる気配は見せなくなった。ただし、『見せなくなった』だけかもしれないが。
「話しを聞きましょう」
「罠かもしれないぞ？」
「その時は、あなたの命ごと罠に賭けた者の命をもらうだけ」
自然と怖いことを言う目の前の女性を、当然のごとく恐ろしく思った。
「で、あなたは危険を冒してまで、どれだけのことを教えてくれるの？」
「俺が知ってるのは、近々こちらに培養される生物兵器が届くということだ。それがどこのルートから来るか、詳しくは知らない」
「あっそ」とひどく落胆した声。その時点で、覆面の男は察した。
彼女らにとって、自分は価値なし、と。
「本気で私たちの味方になるつもりなら、必ず生き残ってね。神童睦月くん？」
「げっ！？」ばれてた。そう思った瞬間、周りの忍びが一斉にクナイを投げた。それをかわした睦月は懐から玉を取り出し、地面に叩きつけた。煙幕が辺りを包み、その間に睦月は姿を消した。
「白隊長、追いますか？」
「深追いは禁止。とりあえず、撤退するわよ」
「「「「ハッ！！」」」」
全員が同意すると、忍びたちは姿を消した。

特別編9　交渉

宿舎の自室に戻った睦月は、閉めたドアにもたれかかった。顔を隠していた覆面を取り、力が抜けてそのまま玄関に座り込んだ。
「（あいつには・・・・・俺の正体が知られていた）」
甘かった。それなりの覚悟と準備をして接触したつもりだったが、あまりにも足りなかった。想定より、かなり高いリスクを負ってしまった。
「（忍び・・・・・己の感情と気配を殺し、任務を行う者・・・・・）」
高い技術力と身体能力を持つ彼らは、魔術に近い系統の力を手に入れ、より『最強』に近い戦闘集団となっていた。それでも、幻獣や神々のほうがまだ数倍強い。
「（今も近くに潜んでいるかもしれない・・・・・）」
宿舎の警備は一流で、現役の忍者でさえ簡単には入り込めない。しかし、『ありえない』と油断すれば寝首をかかれる。
「（だが・・・・・だからって、びびっていられるか）」
誰にも何も悟られないように、いつも通りの生活をする。それが睦月の出した結論だったが、
「（ん？待てよ・・・・・）」
すぐ別の答えを出すことになった。

―※＊※―

翌日、宿舎の食堂。朝食をとっている睦月は、あと少しで食べ終わる。
「よう、少しいいか？」
そこに、朝食の乗っているトレーを持った男性隊員がやって来た。
目の前のイスに座ると、「いただきます」と手をあわせて箸を取った。
「朝からサンドイッチか？寂しいね～」
「俺たちの食事に、賑やかも寂しいもあるか」
「相変わらず辛らつだ」と苦笑いすると、「ごちそうさま」と睦月は席を立つ。
「おい。もう少し話に付き合ってくれてもいいだろう？」
「食堂は混んでるんだ。話しがあるなら、後で来い」
立ち上がりかけた男性隊員は、トレーを持って行く睦月を見送る。
「・・・・・ったく。相変わらずお堅いね～」
そう笑みを浮かべてイスに座り直すと、改めて「いただきます」と言って食事にありついた。

―※＊※―

食休めを終えて、睦月は例の地下研究所に探りを入れた。内部の様子や研究員たちの会話の内容から違法な研究なのは明らかだったが、それにしては資料などの管理は雑だった。
「（余程隠ぺい工作に自身があるのかね・・・・・）」
おかげで、昨夜の忍びたちに渡す『生物兵器の運搬ルート』に関する資料は手に入った。長居は無用なので、睦月は早めに帰ろうとした。

「？」

途中で獣耳の子に出会う。彼女に奇妙な機械を付けている研究員に悟られないように会わないほうがよかったが、数回の潜入で会わずに帰れたのは一度だけ。その度に、計測機械をいじってごまかしているが、いつまで通用するかわからない。

「じゃあ、また来るから」

優しく微笑みかけた睦月に少女は頷く。地上の宿舎裏に出ると、隠し通路の扉を閉めて深く息をついた。

「（さて・・・・・・）」

「よう、睦月」

いきなり後ろから話しかけられ、ビクッと体を強張らせる。顔をほんの少し動かして視線を後ろに送ると、朝に話しかけてきた男性隊員が立っていた。

「珍しいな。こんな所で出会うなんて」

「そうですね。散歩ですか？」

「わざわざ宿舎裏に？そう言うお前こそどうなんだ？」

「俺は、散歩ですよ」

振り返り、不敵に笑みを浮かべて答える。

「へえ、そうなのか・・・・・・」

男性隊員は不敵に微笑んだが、その視線に睦月の脳内で警報が鳴った。

「俺はてっきり、宿舎の地下にある違法研究所を探ってるのかと思ったよ」

「――――！？」

見破られて目を見張る睦月。視線を合わせずに言ったり下手に誤魔化したりすると、返って何かあると勘ぐらせてしまう。一般人相手にはこれでばれることはない。だが、江戸守護部隊（同じ職場）の人間には、通用するわけがなかった。

―※＊※―

宿舎近くの自然公園。そこに睦月が足を運ぶと、ベンチに座って本を読んでいた黒髪の女性が立ち上がった。

「待っていたわ」

「よく言うぜ。どうせ、部下に見張らせていたのだろう？」

「ええ」とその女性――白（はく）は、本を閉じながら答えた。

「守護部隊宿舎の警備システム。どれだけのものかと思ったのだけど、私一人感知できないとはね」

「あんた直々に見張ってたのか。光栄だな・・・・・」

内心驚いたが、そんなこと顔には出さず精一杯の皮肉を込めて言った。

「と言っても、私のほうが特異なんだけど、ね」

意地悪そうに笑みを浮かべると、白の周りの気温が下がり空気が白くなる。感じる肌寒さと彼女の笑みから、睦月はすぐ原因に行き当たる。

「・・・・・・・・・雪女」

「・・・・・・の力を持ってるわ」

隠さずに明かした白に目を丸くすると、「んで」と目を閉じる。

「後ろに隠れている人は、キミの差し金かな？」

「っ！！」

睦月が身を強張らせると、白の後ろの木から黒装束の忍びが二人飛び出し、睦月の後ろの外套に飛びかかった。飛び出したのは睦月に絡んだあの男性隊員。彼は二人の忍び相手に、取り出した伸縮機構の付いた鉄棒で応戦していた。

「私を捕まえる気でいたか。まあ、保険って考えが妥当ね」

「くっ・・・・・・」

的を射た発言に睦月は黙る。彼がついて来ていることは気付いていた。知っててわざと見逃していた。その結果、戦闘となっている。

目撃者はいないのがせめてもの救い。
「敵対の意思はありません。伝えたいことがありますので、武器を収めてください」
「私たちに徳があること？」
「例の生物兵器の運送ルートです」
その瞬間、白の表情が変わった。
「それは本当なの？」
「ええ」と重苦しい声で睦月が答えると、白は目を細める。
「聞こうかしら？」

―※＊※―

白が部下を収めた後、睦月は生物兵器の運送ルートはもちろん研究所で見つけたことについて話した。公園の周囲は白の部下の忍びが注意を払っており、聞かれているのは睦月に絡んだ男性隊員のみだった。
「そう。色々なことを調べてきたのね・・・・・・」
「これで、信用していただけますか？」
「すでに知っている情報を与えられて、それで信用すると思っているの？」
「なっ！？」
睦月は目を見張る。何度も危険を冒して手に入れた情報は、すでに手に入れてあったもの。それだけ彼女たちの情報収集能力が高く、同時に自分の持ってきた情報になんの価値はない。そして自分は、二度も交渉に失敗した。
「はあ・・・・・・」
気を張り詰めた睦月が聞いたのは、場違いな溜め息。しかし、相手は諜報活動、暗殺の術を極めた忍者。少しでも気を緩めたら終わり

なので、睦月は警戒を保つ。
「あなたががんばったのはよくわかったわ。忘れてあげるから、さっさと帰りなさい」
「ま、待ってください、隊長!!」
周囲を見張っていた部下が現れ異議を唱えると、「あら」と白が視線を向ける。
「周囲の見張りはどうしたの?」
「他の者が行っております。それより、この二人は隊長の顔を知っています!ここで始末したほうが・・・・・・・」
「やめたほうがいいんじゃねぇ?」
警戒を強める睦月に対し、同行していた男性隊員は気の抜けた声を出す。
「俺は一介の平隊員だけど、睦月はそれなりの実力者だよ?あんたら忍びには及ばないけど・・・・・・」
男性隊員のその言葉に睦月は驚くが、白も彼も落ち着いてる。
「そんな奴が突然消えちゃったら、結構な騒ぎになると思うけど・・・・・」
「そういうこと。だから、見張りはしても早まらないでね」
「り、了解です・・・・・・」
しぶしぶ承諾すると、部下の忍びは一瞬で消えた。
「ということだから、さっさと帰って忘れなさい。少しでもばらしたら・・・・・・」
その一瞬、白から冷たい空気が漂う。雪女がもたらす冷気を操る力だけでなく、彼女が発する殺気でもあると睦月は感じ取った。
「どうするか、わからないわけじゃないよね?」
沈黙する睦月の心を読み取ったのか、「うん、よろしい」とプレッシャーを解く。
「じゃあね。縁があったらまた会いましょう」
「俺としては、これ以上はご遠慮願いたい」
「そう、残念ね」

ポシェットに本をしまいながら言うと、白は睦月たちに背を向けて歩き出した。と、ふと足を止めると、睦月の横に立っている男性退院に目を向けた。

「そういえば、あなたは何者？」

「俺？俺は輝野（てるの）。さっきもいったが、しがない平隊員だ」

「その平隊員が、私たちと肉弾戦で渡り合って殺気にも怯えない。どうしてかしら？」

「さあね。君たちが弱いんじゃない？」

「あら、言ってくれるわね」

なぜか可笑しそうに笑い、白は今度こそ公園から去って行った。

「さて、睦月。今度はこっちのデートに付き合ってもらうぜ」

「デートじゃない。それと、俺は男性と付き合う趣味はない！」

「ああ、そうだな。俺も、だ・・・・・・」

そんな会話をしながら二人が公園を後にする。同じ頃、白は足を止めた。

「しまった。さっき読んでた本、しおり挟むの忘れてた！」

慌ててポシェットから出して開くが、待っている時から仕事モードだったため内容が頭に入っておらず、どこまで読んだかわからなくなっていた。しかも、使っていたしおりは落としてしまっている。

「・・・・・・・・・最悪」

涙目で呟いた白に、影で見守っていた部下は呆れ、または隊長のしおりを探そうと奔走した。

―※＊※―

本部に戻った睦月は、自称平隊員の輝野に連れられてある部屋にやって来ていた。

「ここですか？」

「ああ、そうさ。待ってろ」
輝野が部屋の中に入ってしばらくすると、ドアが開いて手招きされる。睦月が部屋に入ると、隣部屋に続ドアが開いて案内された。
「（なるほど。二重に部屋を取ってるわけね）」
その予測は覆される。それから睦月と輝野は、部屋の中のドアいくつも通って行った。
「おい。いつまで歩くんだよ」
「心配するな、ここで終わりだ」
最後の部屋のドアを開けると、外から差す光に目を覆う。光に慣れてくると手を下ろし、中にいた何人もの隊員たちを見た。
「厚井、威良、加納、毛戸、白根、園地・・・・・・そして、リーダーの有馬だ」
「輝野。まさか、そいつを加えるつもりではないだろうな」
「そのまさかですよ、有馬さん」
「わかってて言ってんのか？」
「本当に大丈夫なんでしょうね？」
「厚井、加納。お前たちも、半年前までは同じだったんだ」
有馬と呼ばれた男に言われ、「「うっ・・・・・・」」と二人が唸る。
「だが、我々は慎重を喫して動いている。もし不穏な動きがあれば、全員の合意を持って君を始末する」
「と言っても、ここに来た時点でもう後戻りはできない」
後ろでドアを押さえている輝野の言葉は、その場にいる者全員が本気であることを容易に感じさせる。それがなくとも、睦月の答えは変わらない。
「わかっています。あなた方に協力します。しかし、なんの集まりですか？」
「宿舎地下の研究所は見たか？」
有馬の言葉に「はい」と、険しい表情で答える。
「我々はあれを暴くために集まった者だ。無論、上層部には報せて

いない。調査の中で、上層部が関わっている可能性も出て来たからね」

それは睦月にも理解できた。違法を取り締まる組織の地下にその施設を作るには、組織の上層部が罰すべき違法に手を出していることになる。

「だから、我々は長い時間をかけて調査すると共に、少しずつ仲間を集めている」

「もっとも、それも限界に近い。我々の動きを知っている上の人間も出始めている」

「何より、今まで信用していた仲間を疑ってるんだ。俺たちもキツイ」

「何年ぐらい続けてるんですか？」

「五年くらいだ」

有馬の答えに睦月は悲しげな表情をする。五年も仲間を疑う地獄に耐えてきた。いつ限界が来てもおかしくないのも頷けた。

「だから、動こうと思っている。事情を知らない隊長たちが立ちはだかるだろうが、玉砕覚悟で・・・・・・」

「ところが、そうしなくてもいいかもしれない近く」

輝野の言葉に、「何？」と誰かが顔を上げる。

「実はこの睦月くん。例の研究所を見ただけでなく、それを調べている平安京都の忍びに接触したんだ」

「マジかよ!?」とさっきとは別の男性隊員が声を上げた。

「交渉は失敗しましたが、利害一致での協力はできそうです。そのための場所もあります」

「と言うと？」

「近く、違法研究者が培養目的の生物兵器を運送すると言う情報を得ました。彼らも知っていますから、うまく共闘できれば協力関係になるきっかけはできるかと」

「相手は隠密なのだろう？大丈夫なのか？」

不安そうな威良に自身を持って答えられる者はいない。

「だが、彼らの手を借りられれば動き安くなるはずだ。ここは賭けてみよう」
有馬の判断に全員が頷く。

―※＊※―

睦月が帰ってから輝野が戻ると、残っている有馬と威良が彼を見た。
「大丈夫なのか？あいつ、ヘイル隊長を信用してるって話だろう？」
「ええ、そこが一番の心配です。ですが、今回の二度の失敗の件で、考えているはずです」
「しかし・・・・・もし考えが足りず、彼が軽率な行動を取って我らに危険が及ぶようなことがあったら・・・・・・」
「その時は斬り捨てます。そうしなければ・・・・・・」
有馬たちは暗い表情をしていたが、そこには強い決意と覚悟も秘められていた。

特別編１０　共同戦線

数日後。ある山奥の道を進む一団がいる。全員山伏の格好をしているが、背中には木の箱を背負っている。
「あいつらか？」
「間違いない。時間とルートがぴったりだ」
その一団を、木々の上から覗く黒装束の男二人。
「だが・・・・・相手は山伏だぞ。ばれないようにやるにしても、もしこれで外れだったら大問題だ」
「ああ、そうだな。だが、まず間違いない」
「どうしてそう言えるんだ？」
「あいつらは大きな間違いを犯している。あの山伏たちが被っている笠。あれは本来、頭巾（ときん）と呼ばれる多角形の帽子のはずだ。それに、山伏は普通布で顔を隠さない。格好から言って、山伏と行者の混同だろう」
知っててわざとやってるのか、それとも知らないで犯した間違いなのか。判断が付かない忍びは、覆面の下で呆れた表情をした。
「・・・・・・・・バカですか、あいつら？」
「知らん。山伏も修験者だから混ざるのも無理ないだろうが」
そんな話をしていると、山道を歩く山伏たちは坂を登って行った。
「そろそろ目標地点だ。そこで仕掛ける」
「了解」
木々が少し開けた辺りに差しかかると、忍びたちは姿を見せる。
「何者だ？」「その荷物の中身、改めさせていただく」
忍び装束の男の言葉に、「断わる」と先頭の山伏が答える。

「この中身は即身仏ゆえ、おいそれと渡すわけには行かない」
厳しい声で答えた山伏の言葉に、忍びたちは顔を見合わせる。
「わかったら早々に立ち去ってもらおう。神の慈悲により、一度は忘れてやる」
今度は、忍びたちに呆れた空気が漂う。
「・・・・・つかぬことを聞くが、即身仏が何か知ってるのか？」
「神の宿る物質にして、現世に留まるための依り代だ」
自信満々に行った山伏に、忍びの一人がこけて地面に落ちた。付きまとう危険が半端なものではない忍びにとっては、その気の緩みは戒めるべきもの。だが、この空気では仕方なくもない。
「待て！それは御神体だ！」
「何！？う、ウソをつくな！！」
「僧侶が土中の穴などに入って瞑想状態のまま絶命し、ミイラ化したもののことだ。座ってても人一人分の大きさだ、そんな小さな箱にはいるかよ」
確かに、山伏が背負ってる箱は人が入るには小さすぎる。入ってせいぜい仏像くらいか。
「そ、そうだ。仏像の即身仏だ！」
「（ダメだ、こりゃ）」とさっきこけた忍びがまたこけた。
「無理あるよな・・・・・」
「ええい、うるさい！暴力に訴えて信仰心に信仰する不神論者に、今天罰を落としてやる！」
先頭の山伏が錫杖を構えると、後の山伏たちも錫杖を構える。飛び降りた忍びたちも、忍者刀やクナイを抜く。
「・・・・・む、無茶苦茶な理論だ」
「ですが、どの道力尽くなんですから、手間が省けるでしょ？」
「そうだな。俺たちのフリをして紛れ込んでいた、その真意も知りたいから手早く片づけたいもんだね。先日の少年？」
横目で見られ、ギクッと身を強張らせると、偽山伏たちが襲いかかって来た。錫杖の一撃は地面から出ていた木の根を切り裂き、忍者

刀で防いだ忍びたちを突き飛ばしていた。
「なんだ、あのバカ力。人間か!?」
「有馬さん、お願いします!」
忍びに化けた睦月の掛け声に、草むらに隠れていた有馬たちが四つの銃身を束ねたランチャーを担ぎ出す。
「忍びの皆さん、息を止めててください!!」
銃身から煙に包まれた球が発射され、偽山伏が避けた後、地面に当たって破裂する。眠気を誘う睡眠ガスで、睦月たちのプランならこれで相手を無力化できる・・・・・はずだった。
「バカが、甘いわ!!」
偽山伏たちの目が赤く光ると白い法衣が破れ、黒いからやトゲが生えた禍々しい姿に変わる。
「なんだ、これは!?」
「ば、化け物!?」
浮き足立つ忍びたちに、偽山伏が変化した怪物が殺到する。一撃で倒されることはなかったが、忍者刀やクナイ、手裏剣や焙烙火矢(ほうろくひや)が通じず劣勢を強いられた。
「くそっ、火遁の術!!」
忍びの一人が印を結び、大きく息を吸い口から火を噴き出す。火は怪物の一人を包み、草や根を伝って燃え広がったが、中から出て来た怪物は多少表面が焦げただけで気にせず向かってきた。
「なんだと!?――ぐあっ!!」
「くっ、一端下がれ!」
指示を受けて下がる忍びを怪物が追うが、そこに横から睦月がバーストガンを撃ち込む。
「ガアアアアアアアアッ!!」
殻が砕けた怪物は地面に膝を突き、傷口から黒い煙を出した後、砕け散った。一方の睦月も、予想以上に大きいバーストガンの反動に、腕に激しい痛みを覚えていた。
「(くっ・・・・・プロテクターなしでリミッター?の解除がこ

れだけ・・・・・・）」
顔をしかめる睦月の別の怪物が襲いかかるが、その動きを鎖が封じる。回りの気から何人かの忍びが鎖鎌を投げており、それを外そうとしている怪物に取り付いた忍びが忍者刀を首に突き刺す。殻と殻の隙間に捻じ込んだ、鋭い切れ味の刀の一撃。さすがに効いたのか、刀を抜いて飛び退くと黒い煙を噴き出して倒れた。
「オノレ！！」
「臆するな！気圧されたら負けだ！」
「食らえ！！」
飛び出した園地の剣が怪物を切り裂く。深手を負った怪物はそれが信じられず、赤い目を見開きながらも園地に爪を振り下ろす。即座に飛び退くが、地面から伸びていた木の根に足を取られ、園地は体勢を崩した。
「うわっ、しまった！」
当然そこを逃すはずがなく、怪物が突っ込んでくる。園地が死を覚悟した瞬間、
「うおおおおおおおおっ！！」
両腕の痛みを堪えた睦月がバーストガンを撃ち、怪物を吹き飛ばした。
「ガギッ！？貴様・・・・・・！！」
着地した怪物の動きが止まる。反射的に下に視線を落とすと、その怪物の足が凍り付いている。
「これは！？」
驚いて攻撃の手を止めた白根に怪物が襲いかかるが、飛び上がった忍びが蹴り飛ばす。
「敵から目を逸らすな！そんなことで、よく今まで生き残れたな！」
「うぐっ・・・・・・！」
辛辣な言葉に白根が唸ると、焙烙火矢の爆発音が耳を突く。晴れた煙の中から出て来た怪物たちはほぼ無傷だったが、ここまで二体倒していた忍びたちは多少の手応えを感じていた。しかし、『必ず勝

てる』という確証は捨てている。
「残りは・・・・・・」
「――――5体!!」
二人の忍びが会話すると怪物たちが飛び上がり、それに合わせて忍びたちも姿を消して火花を散らす。
「十分目立ってるぞ!?」
姿を見せたままの怪物と姿を消しながら戦う忍びの激突は、辺りに金属音を響かせる。その戦いに入り込めない白根たちは周りを見渡すだけだった。
「水遁!!」姿を見せた忍びの一人が怪物たちに水をかける。内一体がジャンプでそれから逃れたが、それを見た睦月が声を上げる。
「奴に攻撃を集中しろ!!」
反発する間もなく、ほとんどの隊員が手持ちの火器を撃ち、自ら逃れた怪物を集中攻撃する。さすがに耐え切れなかったのか、煙の中から姿を見せた怪物は地面に落ちて動かなくなった。
「あと四体!!」
手持ち火器を撃ち尽くした加納が振り返ると、水を被った怪物四体が凍り付いているのを見て驚いた。氷の下に敷かれていた導火線が燃えていき、怪物たちの近くで氷に包まれていた焙烙火矢が炸裂、氷にヒビを入れ中の怪物を爆破した。
「あれだけの爆発で割れないのか!?」
「白隊長の作り出す氷は、これくらいの熱や衝撃ではびくともしない」
得意そうに一人の忍びが言うが、その割にはヒビが入った氷が砕け、中に閉じ込められていた怪物も崩れ落ちた。
「やった・・・・・のか?」
白根が呆けた声を出した時、忍びたちは睦月たちに武器を向ける。
「っ!?どういうつもりですか!?」
「それはこっちのセリフだ。先ほどの戦闘、明らかにそちらが足を引っ張った。我々に味方するフリをして、こちらを全滅させる策略

だったか？」
「そこまで、俺たちにとってハイリスクになるようなことはしない！」
「どうかな？使えようが使えまいが、部下を簡単に切り捨てるような奴らだ」
「何！？」
時に仲間を見捨てなければならない忍びがこれほど言うのなら、敵もそうとう冷酷な連中だ、と睦月は思った。一触即発の空気の中、呆れた溜め息と共に白装束の忍びが姿を見せた。
「疑うのはいいけど、まずは任務よ。箱の中身を確認するわ。毒ガスが仕込まれてることを考えて、結界を張って。他の者は周囲の警戒」
「「「はっ！！」」」
偽山伏たちの荷物を持った白がしっかりとマスクを着けていると、四人ほどの忍びが距離を置いて囲む。彼らは素早く印を結んで、自分たちを角に半透明の壁を作り出す。
「中身の確認は、俺も立ち合わせてください！」
「ダメだ！」と残った忍びが睦月の申し出を却下する。
「君には防毒装備がない。それに、結界の中で隊長を襲うかもしれない」
「お前・・・・・っ！」
掴みかかりそうになった睦月を、「待って」と結界の中の白が止める。
「確認は結界の外からでもできるわ。それで勘弁して」
睦月は目を丸くしたが、もっと驚いたのは彼を止めた忍びだった。
「た、隊長・・・・・！」
「ごめん。もしもの時は、あなたが部隊を退かせて」
覆面の間から悲しそうな目を見せて白は木箱の前に屈み、ふたとなっている板を上に引き上げた。中に入っていたのは緑色の液体が入ったカプセルで、それに入れるには小さすぎる生物が漂っていた。

「胚子かしら。本当に『生物』のようね」
「これが、兵器の元なのか？」
「わからないわ」
結界の後ろから覗き込んでいた睦月の呟きに、白が口元に手を当てて怪訝そうに呟く。
「とにかく、これは平安京都に持ち帰って分析してもう。異論はあるかしら？」
「ない。だろう？」
確認のために仲間を見渡した睦月に、全員が頷いた。
「というわけだ。分析なりなんなりするといい」
「それ以前に、我々ではそれがなんなのか調べることすら・・・・・」
「おぼつかないだろうな」
園地と白根の言葉を継ぎ、有馬が溜め息をつく。
「それで・・・・・」
一泊置いて有馬が顔を上げる。箱のフタを閉め、結界を解いた白たちに視線を向けている。
「今回の共闘で、信用していただけましたか？」
「徳仁さまなら信用したかもしれないが、我々はそうもいかない」
「そうだな。我々に知られた時点で、こいつらはスケープゴートにされた可能性もある」
もっともな意見に「ぐっ」と呟きつつ、簡単に信用されないことに苛立ちを覚える。
「・・・・・・・疑い深いんですね」
「そうでなければ忍びの世界・・・・・特に、暗部の仕事はこなせない」
中身を確認した偽山伏たちの荷物をまとめ、現れた一人の忍びに顔を向ける。
「任せたぞ」
「ハッ！」

その忍びはまとめられた箱を背負い、大きくジャンプして枝の上を駈け抜けて行った。
「一人で大丈夫なのか？いくら腕利きの忍びでも、あれほどの荷物を運んでいたら・・・・・・」
「二人ほど護衛をつけている。それに、お前たちに心配される筋合いはない」
再び出た厳しい言葉に睦月たちは眉を寄せた。空気がギクシャクする中、白が両者の間に立った。
「まあまあ。彼らが信用できるかどうかはこれからわかることじゃない」
「これからですか！？」
睦月たちを疑う忍びが声を上げると、目を丸くする有馬たちのほうを白が振り向く。
「これからも、動きを掴む度にあなたたちも動くんでしょ？」
「そうですね・・・・・その時は、よろしくお願いします」
互いにそれで譲歩し、今回のところは引き上げた。
「よかったのですか、隊長？あいつら、簡単に信用して・・・・・・」
「私がそれだけ甘い忍びに見える？」
細めた目を向けられ、「い、いえ」と顔を逸らす。
「彼らの意思は本物でしょうね。でも、私たちは確信を持って判断しなければならない。彼らが私たちの味方というのは、まだ推測の域を出ない。だから、協力を得られない」
「そうですね」と忍びは頷いた。

―※＊※―

一方の有馬たち。いつもの集合場所に戻った有馬と睦月は、今回の

ことを輝野と話し合っていた。
「やはり、簡単に信用してもらえないか」
「ですね。表裏知り尽くしている彼らの信用を得るのは、容易ではありません」
「それでも・・・・・彼らの力は必要だ。これから少しずつ、信頼を勝ち取るしかない」
「長期戦、ですね」
「ああ」と頷くと、有馬は睦月に目をやった。
「睦月くん、ご苦労だった。ゆっくり休んでくれ」
睦月は黙って頷くと集合場所を後にした。自分の部屋がある宿舎の戻ると、何かにハッとして足を止めた。
「あっ。こいつを返すの忘れてた・・・・・」
そう言って睦月が取り出したのは、公園で拾ったしおり。状況から考えて白の物と見当をつけていたが、戦闘のせいですっかり忘れていた。
「まあ、いいか。これから何度も会うんだし・・・・・」
そう言って差ほど気にする様子もなく、睦月はポケットにしおりを入れて歩いて行った。

―※＊※―

それから二年。睦月たちと白たちは、正体のわからない敵に抗い続けた。本来の仕事をないがしろにするわけにも行かないので、手の空いた者が白たちと共闘した。そこに協力しているという意識はないが、結果だけを見れば協力しており、さらに江戸東慶守護部隊を隠れ蓑にしている敵に痛手を与え続けている。これがどう転ぶか。有馬と白、それぞれのリーダーは警戒を強めていた。

それと完全な余談だが。睦月が拾った白のしおりは、結局返されることはなかった。何度も返し忘れるうちにうっかり彼が、ポケットに入れたまま洗濯機に放り込み、水を吸って見事に破れていた。これを知られた時、白に凍らされそうになった。

特別編11　二年越しの決行

夜も更けた山奥。激しく息を切らせた白装束の男が逃げている。装束と言っても白が着ている忍び装束ではなく、いつかの偽山伏が着ていたような包囲だ。

「はあ、はあ、はあ！撒いたか？」

命からがら逃げた白装束の男は、木の陰に隠れて後ろをうかがう。追いかけていたであろう追っ手の姿がないことを確かめると、男はホッと息をついた。が、すぐ上着の内側を漁り、トランシーバーのような物を取り出す。

「こ、こちら・・・・・・！！」

通信機のスイッチを入れて声を出した直後、左肩に何かが突き刺さる。男がそちらに目をやるとクナイが突き刺さっており、月光の反射で糸が見えるとそのクナイが引き抜かれた。

「があああああああっ！！」

肩口から黒い液体が噴き出し、男が悲鳴を上げる。辺りに響いた断末魔が消えると、地面に倒れた男の体は塵となって消えた。

「やはり、あの怪物の仲間だったか・・・・・・」

男が隠れていた木の枝に隠れていた忍びは、引き抜いたクナイを回収して血を拭いた。

「しかし・・・・・皮肉なものだ。今更、今の男が倒すべき怪物ではなく人間だったらと、不安が湧いて来る」

それは忍者・・・・・・特に暗部として不要な感情。苦悩すればするほど、任務に支障をきたす。

「・・・・・・割り切れ」

そう自分に言い聞かせ、忍びは姿を消す。揺れた枝の木の葉は男だった塵の上に落ち、その様子を草むらから見つめる影がいた。

―※＊※―

江戸東慶守護部隊近くの喫茶店。遥か昔の木造建築を思わせるのはその外見のみで、内部はテーブルやカウンターが配備されており、メニュープレートも壁にかけてある。着物を来た男女のカップルがテーブルでケーキを食べたり、洋服を着た青年が湯飲みでお茶を飲んだり。さらにこの店の裏手には、緑豊かな景色を望めるカフェテラスがある。しかも、その緑は近くの公園のもので、そこに集まって遊具で遊ぶ子供たちの姿は本当に和む。

「・・・・・・・・と、思っているのか！！」

その贅沢な景色と言えなくもない貸し切りテラスで、睦月はテーブルを叩いて立ち上がった。

「何、大声上げてるの、情けない。守護部隊にいるなら、常に冷静を保つよう心得ていなさい」

「それはそうだが・・・・・・余り気を張り詰めすぎると、いざという時にガタが来るぞ」

「気を抜ける時に気を緩めておいたほうがいいですものね」

落ち着いた様子でコーヒーを飲む白は白い着物姿。彼女の席から見て右に座っている輝野は黒のパーカーに紺のズボン。その向かい、睦月から見て右の席に座っている有馬は黒系の地味な色のジャケットを着ている。

「で！一番地味なのは、いつも通りの格好をしている俺かよ！」

「・・・・・・・・誰に向って、何言ってんの？」

コーヒーが残ったカップを置き、白が胡散臭そうな目で睦月を見る。

「いったいどういう状況だよ！他では話せない話しがあるからって

慎重に来て見れば、こんな開けたカフェで集まって！」
「ありえないと思える行動をあえて取り、相手をかく乱させる。これぞ忍術の一つ『雨鳥（うちょう）の術』」
「『雨鳥の術』って・・・・・水でできた鳥で相手を攻撃する、水遁系の術に聞こえなくもないですよ」
「・・・・・・・・・あんた、忍者を取り扱った娯楽作品を読み過ぎ」
明らかに呆れた白の視線はとても冷ややかで、睦月は居心地悪そうにイスに座る。
「複雑なのよね～～。ああいうもので憧れて、私たちと同じ忍者になろうっていうのは嬉しいんだけど、厳しい訓練に耐え得られなくてすぐやめるって人も多いのよね～～」
「嬉しい悩み、というやつか」
「いい迷惑、ってやつよ」
笑みをこぼす有馬に機嫌悪そうに眉を寄せた白が言う。それを見て考え事をしている睦月に、輝野が顔を向ける。
「どうした？そんな神妙な顔して・・・・・・」
「いえ・・・・・やっとここまできたんだな、と思って」
一瞬意味がわからなかった三人だが、互いの顔を見てすぐ理解した。
「そうだな。こうやって話し合いに応じてくれるくらいにはなった、な」
「例によってすぐ近くに部下を配置してるから、妙なマネはしないでね」
「このやり取りにも慣れたな・・・・・」
疲れたような声を出す睦月に、白はにこやかに笑いかけてコーヒーを飲んだ。
「さて、本題に入ろう。こうして来てもらったのは他でもない。君に伝えたいことがある」
真剣な表情の有馬に、「何かしら？」と目を細めた白が聞く。
「我々はそろそろ、宿舎地下の研究所に仕掛ける」

「・・・・・本気で言ってるのかしら」
「当然だ」と輝野が口を出す。
「君たちの正体と接触し、共闘してから二年。奴らの補給を削ぐことはできただろう。だが、奴らもバカではなかったようだ」
「気付き始めたのね。自分たちの動きを探っている者の存在に」
二年近くの物資運搬失敗を偶然で片づけるほど、連中もバカではない。
「警察が主体だが・・・・・我々、守護部隊にも捜査要請が回ってきている。条約違反の生物兵器運用の辺りは隠しているが・・・・・」
「合法的な荷物だって言い張りたいのね、連中。警察は裏に気付くの？」
「無理だろう。気付いたところで、圧力をかけられる」
「組織って、権力に弱いからね・・・・・・」
目を閉じて呆れた溜め息を漏らすと、白は空になったカップをテーブルに置いた。
「俺たちの組織の持つ権限は、警察組織より上にある。俺たちが頼めば協力してくれるんじゃないか？」
「圧力には圧力、かしら？」
呆れたような視線を向ける白に、「なんでそうなる」と苦い表情で睦月が返す。
「だが・・・・・奴らが連合政府と同等の権限を持つ立場にいれば、結局潰される。それ以前に、警察に協力を要請できる立場にいる部隊長たちはこの事態を知らない」
「知らない？」と白は有馬に鋭い視線を向ける。
「ああ。部隊長の誰かが奴らとつながりを持っている可能性がある。それが誰かわからない。何せ、部隊長はガードが固いからな」
「調べるのも容易ではない、か。そういえば、私たちも手が出せなかったわね」
「まさか皆さん・・・・・」

唖然とした声を出した睦月に、誰もが視線を向ける。
「ヘイル隊長たちを疑ってるのですか?確かに、あの人は異国育ちの人ですが・・・・・・」
「そこは問題の焦点ではない。睦月くん、気持ちはわからないでもないが、気をしっかり持ってくれ。動揺を引きずっていてはミスを犯す」
「っ!!わかって・・・・・・います・・・・・・」
しかし、睦月の心情は表情からして吹っ切れていない。
「・・・・・・失礼します」
席を立って睦月はカフェを後にする。それを三人が見送っていると、有馬は溜め息をついた。
「今更だが、彼を引き入れたのは間違いだったか?」
「そうかもしれません。彼は、自分を見出すきっかけを与えてくれたヘイル隊長を尊敬しています。迂闊でした・・・・・・」
落ち込む輝野に、「今更言っても仕方ない」と有馬は声をかける。
「明後日にでも仕掛けます。来てくれればありがたいですが、それはそちらにお任せします」
「そうね。これが罠だという可能性も捨てきれないものね・・・・・・ごちそうさま」
席を立った白は、店内に入ろうとしてドアの前で止まった。
「ここのコーヒー、意外とおいしかったわ。できれば、また飲みたいわね」
「では、またいつかお誘いしますよ。お互い、生きていられたら、ね」
「ええ」と微笑み、白は店内に入って行った。

―※＊※―

夕刻。宿舎の部屋に戻った睦月は、ドアにも垂れて玄関に座り込んだ。

「（そういえば、二年前にもこんなことがあったっけ・・・・・・）」

自分たちの足元で行われていた、理に反した研究。それを知った時に受けた衝撃は凄まじく、何も出来ない自分に力が抜けた。

「（あの子は・・・・・・壊れてないだろうか）」

姿の見えない敵を探る中で、何度か会った少女。彼女を匿うどころか、助けることすら考えられなかった無力な自分。そんな自分が、同じく守護部隊の裏に潜む者を調べている白たちに出会い、有馬たちに出会い、姿の見えない敵の目的を探りながら妨害していた。その間、彼女を放って置いてしまった。

「（壊れていたら・・・・・・俺のせいだな・・・・・・）」

無謀でも助けていたら。そんな後悔が浮かんでは消える。だが、そんなものに意味はない。自分を奮い立たせた睦月は、ある計画を実行することにした。

―※＊※―

同時刻。江戸東慶守護部隊本部の隊長室で、一人の男がデスクワークをしている。

「まったく、ネクロのアホんだら～。俺は忙しいことくらいわかってるだろ・・・・・・」

文句を言いながら頭をかく。机の上には、報告書やら閲覧する必要のある資料やら様々な書類が積まれている。その中に、一つだけ別にしてある書類がある。

『兵器製造に必要な素材の未発注について』

中には、『我々しか知らないはずの運送ルートを突き止めた者が、

運び屋を襲撃して素材を強奪、及び破壊しているのではないか』と書かれている。

「しかも、その強奪者のスパイがウチにいるのではないか、か。あのヤロウ・・・・・・」

はっきり言って屈辱に近かった。ヘイルにとって部下は信頼すべき仲間ではなく手駒だが、手駒以上にならないようううまく立ち回っているつもりだった。それを、あまりこちらに顔を見せない奴が好き勝手に言うのは、ヘイルとしては面白くなかった。

「まあ、仕事はちゃんとしてるから文句は言えないんだけどね・・・・」

深い溜め息をついてイスに沈む。しばらく天井を見上げていると、身を乗り出して判を押した資料を手に持つ。

「さて、と。後は上層部に回して・・・・・・ん？なんだ？」

窓の近くに置いてある通信機の画面に、緊急連絡のメールが映っていた。

「『素材到着。これより実験に入る』・・・・・・やっとか。そういえば、『地下施設に侵入者の形跡あり』とメールが来たのは二年前だったか。全く、ちゃんと気を付けて置けって言っていたのに・・・・・」

文句を言いながら報告書と資料を持って、ヘイルは隊長室を後にする。その後に机の上に置いてあるパソコンに入って来たメールに気付いたのは、部屋に戻って来た数時間後だった。

「ん？メールが来てたのか？ったく・・・・・・」

疲れた表情でイスに座ると、パソコンの画面に映っているメールのアイコンをクリックする。

「今度はこっちか？」

開かれたメール画面上部のアドレスを見て目を丸くする。隊員が隊長に送る、他愛もない会話をする為のプライベートメール・・・・・・というのは仮の姿。その他愛もない会話の中に暗号を込める上級テクニックを、普段からやらせるのがこのメールの目的。

「さて・・・・・この暗号の癖は睦月か。今度はどんなないようだ？」
別のソフトを開くと、解読法に従ってメールの文を訳していく。そこに書き出された解かれた暗号の一文を見て、ヘイルは目を丸くした。『宿舎地下に怪しい研究施設あり。調査を要請する』彼にとってはある意味、衝撃的な内容だった。それは、自分が信じたものに裏切られた、という喪失ではない。
「おやおや。ずいぶんと律儀な奴がいたもんだ。もっとも、おかげで手間が省けた」
それを見たヘイルは、ただ残忍に笑った。

―※＊※―

深夜。明かりを消している部屋の中で、睦月は防護服を身にまとい、手に手袋をはめていた。服も手袋も『超臨界流体』という技術により作られ、多少なりとも防御力は高い。この装備は江戸東慶守護部隊の常時装備であり、睦月にとって任務に就くいつも通りの姿だった。
「（隊長にも、この地下で起きていることに関してメールを送っておいた。応援に来てくれればいいが・・・・・）」
その時、また晴明の言葉が頭に響いた。が、頭を振ってそれを消す。
「（そんなはず・・・・・ない！！）」
ドアを閉めて部屋を出ると、彼の机の画面がついてメールのアイコンが出た。だが数分すると、その画面はひとりでに消えた。

―※＊※―

「やっと届いた～～～～～～！！」
地下研究室の中では、研究員が緑色の液体に満たされたカプセルを掲げて大声を上げていた。地下室に反響した声に他の研究員は耳を塞いだり顔をしかめたりするが、すぐ表情が緩む。
「これでやっと、次の段階に移行できる」
「ああ、そうだ。ここ二年間、なぜか素材が届いてなかったからな」
「おかげで、重要な要がなくて実験を先延ばしにせざるを得なかった。ああ・・・・・・我々の研究の遅れが、組織全体の遅れとなってしまった」
カプセルを置いた研究員は頭に手を当てて、後ろによろめく。が、すぐその後ろにある檻に入れられた少女のほうを振り返る。
「だが、過ぎたことはもう仕方ない。さっさとやってしまおう。ネクロさまからようやく許可が下りた」
白衣を翻して、色々な色の薬を入れた試験管が入れてある試験管立てを持ち上げる。
「成長促進剤は、どの割合で投与する？」
「そうだな～・・・・・・急な成長は母体にも素体にも負荷を与える」
「大丈夫だろう。女性は男性と比べて生き残りやすい。強い遺伝子を持った次の種を確実に残す為の対応だな。さて・・・・・・」
残忍な笑みを浮かべた研究員は、カプセルを持って檻の中の少女に迫る。
「動物と違い、人間と同じ意思を持つ幻獣種は様々な反応を見せる。快感、苦痛・・・・・・それに快楽を見出す者もいる」
「おいおい、お前はその口か？」
後ろの注射機を持った研究員が引き気味に言うと、カプセルを持った研究員は口の端を吊り上げる。
「いや。私はその、愚かともいえる感情を理解したいのだよ。今の人間をさらに見下すために」

「・・・・・・・今まで見た中で、一番の悪趣味だな」
音もなくドアが開いたドアの隙間からそんな呟きが洩れる。だが、それに気付く者は誰一人いない。檻に迫る研究員の足元に、一つの筒が転がってきた。誰にも気付かれずに部屋のほぼ中央に転がると、両端から煙が噴き出した。
「な・・・・・・なんだ!?この煙は!?」
「ゲホッ・・・・・・何も・・・・・・見えない・・・・・・・!!」
煙にむせて咳き込んでいる間に、睦月は音もなく少女の入れられている牢屋に近づいた。
「助けに来たよ」
鍵を破壊して檻を開ける音に気付いた研究員の一人が振り向くと、開いた牢の中には何もいなくなっていた。
「け・・・・・・研究素材が逃げたぞ!!」
研究室の中が騒ぎ出した頃、睦月は少女を連れてそこを飛び出していた。後から追ってきた研究員たちは、銃を突きつけられて止まった。銃口を向けているのは、有馬たちの仲間の厚井、威良、加納、毛戸の四人だった。
「き、貴様ら・・・・・・・」
「さて、これはどういうことか吐かせてもらうぞ」
「ひっ、そ、それは・・・・・・・」
「必要ない・・・・・・」
聞き覚えのある声に厚井たちが周りを見渡す。地下なのに風が吹く音がすると、通路の床や壁に鮮血が飛び散った。

特別編１１　二年越しの決行（後書き）

超臨界流体

超高温と超圧力によって生じる、物質の液体と気体の境の状態を作り出す布に鉄などの物質を織り交ぜる技術。昔テレビでやっていたものだけど、最近は見ない。

特別編１２　裏切り

少女を連れ出した睦月は、隠し通路を走り抜けて宿舎に戻っていた。
「とりあえず、ここまで来れば大丈夫だろ」
息を切らす睦月に対し、少女は不安と疑いの目を彼に向けていた。
「大丈夫だよ。俺は君を、どうこうしようとは思っていない」
だが、少女の眼差しは変わらない。
「・・・・・ああいう扱いを受けてたんだ。すぐに信用しろ、っていうのが無理か。参ったな・・・・・・」
頭をかく睦月に、まるで肯定するかのように少女は頷いた。睦月は驚いて目を丸くしたが、じきにそう言っていられなくなる。
「ま、いっか。とりあえず自己紹介だ。俺は神童睦月だ。君は・・・・・？」
「・・・・・・ユウ・・・・・・・」
「えっ？」と睦月が首を傾げると、少女が答えた。
「・・・・・・流牙（るうが）・・・・・・優（ゆう）・・・・・・」
「ユウか。いい名前だよ。それと・・・・・・」
首を傾げたユウに、睦月は悲しげに微笑んで続けた。
「それに、長いこと待たせてごめん」
「・・・・・・そんなことない。ありがとう・・・・・・・ム・・・・・・」
そこで口ごもって聞こえなくなり、「む？」と首を傾げた時、
「いたぞ～！！」
睦月は開けっ放しにしていた通路から黒いベストに身を包んだ兵士

が追い駆けてきた。
「研究員だけじゃなかったのかよ!!」
だが、思えば当然のこと。外にばれないよう隠しているとはいえ、万が一ばれるようなことがあったらそれに対応する手立てを用意しておくのが当たり前。
「逃げるぞ!!」
多勢に無勢の上、こちらは戦えないユウを抱えている。劣悪な環境に置かれていて衰弱しているため、睦月はユウを背負っていくべきだったが、そんなことを考えさせる余裕を状況は与えてくれなかった。
「（菱を巻くか？いや、ダメだ）」
逃げる時のことを考え、睦月は白から撒き菱をもらっていたが、屋内で使用しないよう釘を刺されていた。自然に生える菱の種子そのままのため簡単に見つかることと、睦月が忍者とつながりがあることがばれてしまう。
「（徹底改革したい江戸東慶の頭目により、忍者はお役ごめんとなった。今や忍者の流派が残っているのは、西本土のみ）」
となれば、西本土が東本土に探りを入れていることが確実にばれてしまう。忍者を使った諜報活動は禁止されてないが、ばれれば問題となる。江戸東慶の組織が平安京都の組織を貶めるため、条約締結の際に残した抜け穴のようなもの。その引き金は今、睦月の手の中にあった。
「ちっ!!」
睦月は手に取っていた菱を懐にねじ込み、ユウの手を引いて走った。だが、引く力を強めてしまったため、ユウは足がもつれて倒れてしまう。手が離れたため振り返った睦月は、そこで始めて自分の犯していた失敗に気付いた。
「（くそっ、何やってんだ、俺！今までこいつはどんな環境に置かれていたか忘れたのか！急な運動ができるはずがない）」
ユウを抱えて宿舎の廊下をしばらく走ると、庭へ続く扉が見えてき

た。
「しめたぞ！！」
扉を開けて庭に逃れた二人の前に、武器を持った有馬たちが現れた。
「睦月、無事か！？」
「はい。でも、気付かれてしまいました。追っ手が来ます」
「いや、上出来だ。追っ手も捕まえて吐かせれば、証拠が揃う！」
「撃て！撃ち殺せ！！」
追っ手が銃を乱射するが、有馬たちはそこから飛び退く。銃口の先端にサイレンサーが付いてるためそれほど音は出なかったが、地面に着弾した時の音は出る。すばやく追っ手の前に迫った園地が剣で銃を切り、白根が銃を構える。彼が持つのは、拘束用に特化して開発された小型のショックガン。引き金を引いたそれの銃口から発射された衝撃波は、武器を失った追っ手を吹き飛ばし意識を刈り取る。ものの数分で睦月とユウを追っていた者は全滅したが、続いて第二陣がやって来る。
「くっ。消耗戦か・・・・・・」
「大丈夫ですよ。増援は呼んであります」
「増援だと？」と白根が聞き返すと、後ろのほうに銃を持った大所帯が現れた。それを見て、有馬たちは目を丸くする。
「良かった、本部の調査隊だ」
「本部って・・・・・お前、隊長の誰かに教えたのか！？」
白根が叫ぶが、睦月は離れた場所にいるので肩を掴んで問いただすこともできない。
「お～い、ここだ・・・・・・」
だが、睦月が声と右手を上げると、駆け出した隊員たちに二人のほうがあっという間に囲まれてしまった。
「なっ、いったいどうして・・・・・・」
状況を理解するよりも早く、兵士の一人が銃のグリップで睦月の後頭部を殴った。不意を突かれ、脳震盪を起こし睦月は地面に倒れた直後に銃を突きつけられる。

「くそっ、やっぱりか！！」
悔しそうな白根の声が響く。彼らも本部からの調査隊員たちに銃を突きつけられ、動けないでいた。成す術もなく動けないでいる睦月に、一人の男が近づく。
「ご苦労だったね、睦月くん」
「ぐっ・・・・・・ヘイル隊長。これは、いったい・・・・・・」
「お前、何も知らないのか！？」怒りのこもった声で怒鳴った白根が、兵士が振り上げた銃のグリップに後頭部を叩かれて倒れた。
「白根！！」
「動くな。できればそのまま動かないでもらいたい・・・・・・」
銃を構える隊員たちと突きつけられている有馬たちの間に張り詰めた空気が満ちる。ヘイルが右腕を上げて隊員たちを抑えようとするが、彼の本心はいつでも撃てるようにすることだろう。
「隊長・・・・・・」
苦しそうな呻き声にヘイルが視線を下ろすと、地面に伏している睦月がこちらを睨んでいる。
「これは、どういうことですか・・・・・・」
「白根くんの言ったとおりだ。君は、何も知らなかったのか？」
呆れたような言葉に睦月が目を見張ると、彼に寄り添っていたユウは後ろから近付いていた兵士に捕らえられてしまった。
「・・・・・・ぁ・・・・・・ムー！！」
「『ムー』、か。ほんの数分で、仲良くなったものだな」
「くそっ・・・・・・なぜだ・・・・・・」
歯を食い縛って起き上がろうとする睦月に、兵士たちが銃口を向ける。
「構わん。言っただろう。『ご苦労だったね』と・・・・・・」
すると、ユウや白根がハッと気付いたように目を見張る。
「そうだよ。この少年は私の命令で、君をここに連れてきたんだよ」
「何を・・・・・・バカな！！」と睦月は叫んだが、ユウは酷く動揺していた。

「・・・・・騙し・・・・・・・てたの・・・・・・・」
「そうだよ。君を助けると言っておきながら、彼は君を裏切ったのだよ。いや、違うな。これこそが彼の役目」
「どういうことだ。説明しろ、睦月！！」
「君を助けるフリをしてここに連れてくる。そして、我々の秘密を知るものを炙り出すのが目的だったのさ」
「つまり・・・・・お前は、最初から俺たちを裏切るつもりだったのか！！」
吼える白根に睦月は何も言えない。覚えがない。だけどそれ以上に、なぜヘイルが・・・・・・自分が尊敬する人物が、自分に銃を向けさせている。
「イヤ・・・・・・」
そんな呆然とした思考に、ユウの声が割り込む。
「嫌アアアァァッ！！！」
頭を抑えたユウが悲鳴を上げると、ヘイルは彼女の耳元で囁く。
「見せてもらえるね？ルー・ガルーの力・・・・・・」
耳元で呟いた後、そっと離れるとユウが唸りだす。
「グ・・・・・があああっ！！」
吠え出したユウの耳と尻尾は、怒りを表すように逆立っている。笑みを浮かべたヘイルが腕を上げると、銃を突きつけていた兵士たちが道を開けるように睦月たちから離れた。ユウは涙を流し、唸りながら睦月を睨んでいた。
「見るといいよ、睦月。これが、君が助けようとした化け物・・・・・ルー・ガルーの力さ」
「グ・・・・・グルルルッ・・・・・・グガアアァァッ！！」
一回吼えた後、鋭い爪を振りかざし、ユウが睦月に襲いかかる。即座に腕を着いて地面から飛び上がったが、ユウの爪は彼の右腕を掠める。
「くっ・・・・・・」
見失わないように視線を向けるが、その時にはすでにユウの腕は間

近に迫っていた。とっさに両腕を交差させて防ぐが成す術もなく地面に叩きつけられた。地面が陥没し、その衝撃が全身に伝わる。

「がはっ！」

「グルルル・・・・・・」

獣のような唸り声を上げて左腕を上げたユウに、ショックガンの衝撃波が直撃する。思わず睦月が視線を向けると、いつの間にかヘイルが引き連れていた隊員の拘束から抜けた有馬たちがこちらにショックガンを構えていた。

「グガアアアアアアアッ！！！！」

「くっ。撃て！！」

衝撃波が発生するも、腕を振り下ろしてその壁を振り払う。しかし、有馬にとってそれは想定済みで、厳しい表情の内では笑みを浮かべていた。

「本命は・・・・・・」

「――俺だ！！」

小さく呟いたヘイルの読みどおり、ユウの死角から飛びかかった白根が剣を振り上げている。彼女が気付いた時にはすでに振り下ろされていて直撃は免れない・・・・・はずだった。

「待ってくれ！！」

割り込んだ睦月の腕が剣を止める。白根がとっさにスピードを緩めたのと、防護服の防御力の高さゆえに助かったが、それでも骨に響くほどの衝撃が来た。

「てめ、どういうつもりだ！！」

白根が思わず叫ぶ。スピードを緩めなければ、いくら超臨界流体の技術で作ったとはいえ切っていた。睦月の防護服に使っている金属と白根の剣に使われている金属では、後者のほうが高度は上なのだから。

「ユウを・・・・・傷付けないでやってくれ」

「はあ！？何寝ぼけたことを・・・・・・」

「ガアアアアアアアッ！！」

ユウの突き出した爪が睦月の背中を打つ。貫かれなかったが衝撃は強く、意識が飛びそうになる。
「がはっ！」
「このっ！」
睦月の肩を抑えて飛び越えた白根が剣を振り、ユウが後ろに飛んでそれをかわす。向かおうとする白根の腕を、顔をしかめた睦月が掴んで止めた。
「ユウがああなったのは・・・・・・俺の責任らしい。だから、傷付けないでくれ」
今のユウが憎しみを向けているのは、よくわかった。なぜ。その理由はヘイルの言う通り、結果的に裏切ってしまったという自責の念が睦月を支配していた。
「だからって、俺たちにこのまま死ねっていうのか！？ふざけんな！！」
「そうはいってない。彼女は俺が止める。だから、有馬たちを連れて逃げろ」
「はあ！？」
睦月の言葉に白根が声を上げ、ヘイルが連れた隊員たちに抵抗していた有馬たちが目を見張る。
「・・・・・・やれやれ。とんだ若造だ」
苦い顔をして有馬が呟くと、その目の前でユウが二人に向かっていく。睦月が白根を突き飛ばすと、ユウの突き出した腕は彼を掴み後ろの地面に押し倒す。

―※＊※―

後ろで自分が引き連れた隊員たちと戦う有馬たちを気にかけず、睦月とユウの様子をヘイルは無表情で見ている。攻撃で傷に劣勢の睦

月を黙ってみていると、後ろにやって来た研究員が話しかけられる。
「さすがです、ヘイルさま。ここまで強い憎しみの波動を出させるとは・・・・・・」
「一瞬でも自分が希望と思った者に裏切られた時、心を持つ者は二つの選択をする。心を完全に閉ざすか、あるいはその者を憎むか」
「しかし、ディゼア・トルーパーを実体化させるとなれば薄すぎるかと。あれは、別の存在との契約で肉体が変貌するほど、濃い思念が必要ですから・・・・・・」
「ふむ・・・・・・」とヘイルはあごに手を当てて声を漏らす。

―※＊※―

蹴り飛ばされた睦月は、ユウを押さえようと手を伸ばした。左腕を掴んだが、ユウが体を回転させ引っ張られる。離した時にはすでに遅く、ユウの間合いに入り込んでいた睦月は、彼女が振り下ろした足で地面に叩きつけられる。睦月はとっさに銃に手を伸ばすが、彼女を殺してしまう恐れからそれを止めてしまう。その隙にユウが襲いかかり、素早く振った両腕で殴りつける。
「がふっ・・・・・・」
衝撃で肺の空気が出て、口の中の液体が洩れかける。下手したら、胃の内容物だったかも。後退して地面に膝を着いた睦月にユウが再び襲いかかろうとした時、彼女の足元から突風が起こり、空高く舞い上げた。戸惑いを見せずすぐに受身を取ろうとしたが、真横から衝撃を受け、斜めに叩き落とされる。
「ガアッ・・・・・・！！」
ユウが呻くとそのすぐ後、空から一人の烏天狗が降りて来た。
「烏天狗だと!?」
「お前は・・・・・・」

唖然とした顔で睦月は呟いた。その烏天狗は、平安京都の門の近くで睦月すれ違った飛天だった。

「貴様・・・・・この江戸東慶は『不可侵条約』により、妖怪の類は入れないはずだ」

「入れない?その割にはいるじゃないか。獣の特徴を持つ、その女が・・・・・・」

起き上がるユウのほうを向く。

「しかし、あの少女はいったい・・・・・・」

少女に気を取られている隙に、ヘイルが引き連れていた隊員たちは銃を飛天に向けて撃った。だが、ほぼ同時に彼の周りに光の壁が現れ、銃弾を全て防いだ。

「飛天殿。江戸東慶の人間は我々の知る物より危険な武器を持っているから、気をつけろと言ったであろう」

声のするほうを向くと、宿舎の屋根に安倍晴明が立っていた。

「安倍晴明だと!?なぜ・・・・・・まさか・・・・・・」

「さあ・・・・・・どうでしょうか?」

倒れている睦月のほうを睨むと、晴明がわざととぼける。隊員たちが銃を撃つが晴明はそれらをかわし、有馬たちがその隊員を殴りつける。その間に飛天は睦月を抱え上げた。

「まさか、貴様を助けることになるとは、な。さっさと行くぞ」

「待て。ユウを・・・・・・あの少女も連れて行ってくれ」

ゆっくりと立ち上がりながら、睦月が頼む。飛天はそれに、意外そうに目を丸くする。

「・・・・・ちっ。わかった」

そう言って一瞬、消えたかと思うと少女の後ろに現れ、首の後ろに当て身をした。ユウは完全に意識を失い、地面に倒れた。

「すぐに立ち去るぞ!!」

隊員たちが睦月たちのほうを向くと同時に突風が起き、気付いた頃にはそこに晴明、飛天、睦月、ユウの姿はなかった。

「ちっ、逃げられたか・・・・・・」

しかし、なぜかヘイルは笑っていた。
「だが、行き先とそこへ至るまでのルートはわかっている。すぐに迎撃しろ！」
命令を受けて駆け出す兵士の足元に銃弾が撃ち込まれる。彼らの前には、息を切らせている有馬たちが立ちはだかっていた。
「させない、と言いたそうだな」
「ああ」と有馬が答えると、ヘイルはわざとらしく溜め息をついて肩を落として見せた。
「まあいいさ。今日のところは裏切り者の排除だ。キミたちも実質、虫の息だろうし、ね」
残された有馬たちは意味を理解し身構える。防護服の高い防御力、衝撃吸収力で体は傷もなくダメージも少ない。だが、唯一露出している首は頭に受けたダメージは防げない。何より、
「体力はいずれ切れる・・・・・いくら装備をつけたところで、消えることのない最大の弱点だ」
嘲るヘイルは、「逃げる体力すら残せなかったようだな」と続けた。
「だが、希望は残せた」
「何が『希望は残せた』ですか。俺たちはあいつの迂闊な行動のせいで全滅ですよ」
悔いのない表情の有馬と皮肉を言う白根。誰もが抱いた不満だったが、有馬の『希望が残せた』と言う言葉には同感だったようだ。
「残念だよ、有馬くん。君はもう少し賢いと思っていたが・・・・・」
「なら、我らの信念を曲げることが、賢いと言うのですか？」
「信念？」
「『力のない者を守る盾となり、戦えない者の代わりに剣となり、和を乱す者を打ち砕く』・・・・・それが江戸東慶主語部隊の設立理由であり、理念だったはずだ」
「ああ、そうみたいだね」
気にする様子のないヘイルに、「なっ！？」と有馬たちは驚く。す

ると、ヘイルは顔をうつむけ肩を震わせる。
「君たちは、何を勘違いしてるんだい？私が、そんな生温い感情だけで、この組織にもぐりこんだとでも？」
「生温い・・・・・・」
「感情だと！？」
有馬や輝野を始め、残った隊員たちが激昂する。江戸東慶守護部隊の理念は、自分たちが共感した『正義』。それを『生温い感情』と言わしめたヘイルに自然と怒りを抱く。
「本当に『正義』を名乗るならさ・・・・・・壊しちゃえよ。今の世界なんかさ！！」
「そのために、罪のない人を殺すのか！？」
「罪のない！？無知でいようとしてる時点で、この世界の人間は全員『罪人』さ！！」
怒鳴ったヘイルが手をかざすと、周りにいた兵士が一斉に向かってきた。そこで有馬たちはやっと気付いた。彼らは、自分の意思を持っていない。
「これは、いったい・・・・・・」
迷う間もなく、有馬たちはヘイルの引き連れた隊員たちと激突した。

特別編１３　破魔の剣

江戸東慶から数メートルの国道沿い。浮かんだ上体で移動する安倍晴明と、不本意そうな顔で睦月を背負い低空飛行している飛天がいる。

「あのユウって子・・・・・・白さんだけに任せて大丈夫なんですか？」

「彼女は優秀な忍びだ。万が一あの子が暴走しても負けはしまい」

「それはそうでしょうが・・・・・・」

そこで言葉を切った飛天は、「（忍び関係あるか？）」と内心思った。

「それより、問題は彼だ」

「ふん。『俺のせいだ』だの、『すまない』だの・・・・・・挙句の果て、『どうしてですか、隊長』だ」

不愉快そうに背負っている睦月に視線を向けると、「ああ～～！！」と大声を上げて止まった。

「うっとうしいったらありゃしないぜ！！」

「それほど、あのヘイルという男を信用していたのだろう」

怒鳴り散らす飛天に対し、晴明は落ち着き払っている。

「晴明、変われ！！俺はこいつを連れ帰りたくない！！」

「それは無理だ。私はここから江戸東慶の様子をうかがわなくてはならない」

しれっと返す晴明に、飛天は歯軋りのような音を口から漏らす。

「お主ら烏天狗に、歯などあったかな？」

「そんなことどうでもよかろう！！」

飛天が怒鳴っていると数人の足音が聞こえる。銃を構えた迷彩柄の

服を来た兵士がこちらに迫っている。
「目標発見。これより、銃殺します」
「穏やかではないね」
銃撃が始まった時、二人は左右に散る。晴明は手を出すわけには行かないため、戦うかどうかは飛天に一任される。戦う場合、連れ帰るはずの睦月は危険に晒されるが、
「（その睦月に苛立っている今の彼は、そんなことお構いなしだろう）」
現に飛天は睦月を乱暴に放り投げ、銃を撃ってくる兵士に向かって行った。
「はあっ！！」
銃弾を避けながら懐に飛び込み、思い切り腹を殴りつける。至近距離から銃を発砲されたが、人間から逆輸入した超臨界流体の技術で作られた法衣が防いだし、妖怪としての体の丈夫さで痛みも感じない。
「でやっ！！」
横薙ぎに振った腕で殴りつけるが、銃に仕込まれていた刀剣に切られる。が、問題なく飛天はその兵士の首をへし折った。あっという間に全滅した兵士は、体が黒い塵になって崩れた。
「人間ではなかったようだな」
「俺としては、どっちでもよかった」
気にする様子のない飛天は、先ほど切られた腕に布を巻いて血を止める。例え今の銃撃で全身に傷を負っても命が尽きることはないだろう、と晴明は思っている。妖怪ならではの再生能力と生命力。それらの要素を差し引いたところで、人間と妖怪の間には埋まらない力の差がある。妖怪退治を生業とする陰陽師でさえ、『力』は妖怪と同じ位置に立っているわけではない。一歩間違えれば逆に、しかも簡単に殺される位置に立っている。晴明はそう考えている。
「・・・・・・・・・い・・・・・・・・おい・・・・・・・」
ハッと気付くと、睦月を背負った飛天が眉にシワを寄せている。

「そんな呆けて、江戸東慶にいる式神の援護は大丈夫なのか？」
「おや、気付いたか」
「あんたがあそこを気にする理由、それしかなさそうだ」
遠くを見た飛天に、晴明はフッと笑う。
「わかったのなら頼む。くれぐれも丁重に運んでやってくれ」
「死なない程度に、は保障する」
軽く息をつくと、飛天は思い切り地面を蹴って国道沿いを駆け抜ける。そのスピードに睦月は耐えられるのか、と一瞬心配になった晴明だが、すぐ無意味だと考え直す。
「さて・・・・・・」
彼は江戸東慶のほうを振り返った。数少ない協力者を助けるため。
「（できるかどうかは問題ではない。やってみる価値がある）」
晴明は意識を集中させ、遠くへ飛ばした。

―※＊※―

同時刻。京都の病院の中を、怪しい人影が移動していた。懐中電灯のわずかな光を頼りに武蔵の病室を見つけると、音も立てずにそのドアを開けた。音も立てずにベッドに近寄り、懐から出したナイフを高々と上げ、布団めがけて一気に振り下ろした。ところが、バスッと音を立てたが手ごたえがない。それどころか、布団に開いた穴から変な液体が流れ出し、シーツから離れられなくなった。
「なっ・・・・・これは・・・・・・！？」
その時、病室の明かりが一気についた。入り口にある電気のスイッチの側には、平次が立っていた。
「武蔵が世話になったな、襲撃犯」
「観念しろ！！」
「御用だ！！」

病室の他のベッドの中から、銭型や他の岡引たちが十手を構えて飛び出す。その時、

「武蔵先生の敵！」

さらに別のベッドから影が飛び出し、木刀を犯人に振り下ろした。

「なっ、牛若くん！？」

銭型が声を出すと、辺りは騒然とした。表情が変わらなかったのは平次と犯人だけで、犯人は木刀に向かってカウンターの蹴りを放って牛若を蹴り飛ばす。平次のいる入り口の側に飛ばされてしまった牛若はすぐさま立ち上がるが、蹴られた衝撃に顔をしかめた。

「くそっ・・・・・・」

木刀を支えにしてなおも飛びかかろうとする牛若を、平次がそっと止める。

「それくらいでやめておけ。君が足手まといになって逃げられでもしたら、元も子もないんだ」

牛若はハッとなり、歯軋りをした。一方、牛若と共に隠れていた鬼若は犯人の顔を見て驚いた。

「あ・・・・・・兄上・・・・・・？」

鬼若の言葉に、再び銭型たちが騒然となる。

「あ・・・・・・兄上って・・・・・・・・」

「霜月梅剣（しもつきばいけん）。俺の・・・・・・・・兄だ・・・・・・・・」

「な・・・・・・・なんだと」と銭型たちが動揺するが、平次は冷静だった。

「事前の情報収集は、捜査の基本ではないのか？」

腰に下げている短刀を抜き、一瞬で踏み込む。平次の短刀を、犯人の男は手に持っていた鎌で防いでいた。

「（は・・・・・・速い・・・・・・・）」

「じっくり聞かせてもらうよ。あんたの目的とか、正体とか。まずは、その体から出ていきな！！」

ガッ、と鎌を弾く。バックステップで下がって逃れる梅剣と追う平次。病室の窓から飛び出した二人は、戦いの場を庭に移した。

「平次・・・・・いったい、何がどうなってるんだ!?」
窓から庭を見下ろす銭型、牛若、鬼若。
「決闘禁止令違反、及び、殺人未遂の容疑で逮捕する。ただし・・・・・」
平次は腰に差してあるもう一本の短刀を抜くと、切っ先を向ける。
「その前に・・・・・取り憑いている体から、退いてもらうぞ!!」
飛びかかり、両手の短刀を高速で交互に振って攻め立てる平次に対し、梅剣は呻きながら防御に専念していた。
「ぐっ・・・・・・」
「どうした!?さっさとその体から出て行ったらどうだ!?」
梅剣を押している平次の言葉に、銭型は首を傾げる。
「いったい、平次はなんのことを言っているんだ?」
「・・・・・鬼若・・・・・おまえ、最初に俺に会った時、腰に差してある刀を狙っただろ?あれと関係あるんじゃないのか?」
「えっ!?まさか!?」
牛若の言葉に銭型は驚いたが、鬼若は「ああ、そうだ」と肯定した。
「刀などの武器を集めるのは、何かの祈願の一種なんだ。お前は、そのために武器を集めていたんだろ?」
「ああ。俺は・・・・・兄上に取り付いた悪霊を払うため、二千本の武器を集めていた。ある祈祷師が、そうお告げをくれた」
「祈祷師が?しかし、おかしい。祈祷師は犯罪をほのめかすようなお告げを伝えることは、できないはず・・・・・いったい・・・・・」
「その祈祷師、偽者だな?」
そこへ別の声がして目を丸くした三人が後ろを振り向くと、入り口に虎太郎がいた。
「実は最近、嘘のお告げを与えて市民を戦に駆り立てる祈祷師がいてな。私の所にも、見つけ次第捕らえろという報せが来た」
「なんだと!?神の言葉と称して人々を戦に駆り立てるなど重罪だ。

いったい、誰がそんなことを・・・・・・」
「その答えの一部を、平次が知ってるのではないか?」
「それと・・・・・・附に落ちない点がもう一つ」
牛若の言葉に、「なんだ?」と銭型が聞く。
「なんで平次さんは、鬼若の兄さんが何かに取り憑かれてるって知ってたんだ?」
「あっ!」
「・・・・・・さあな」
銭型が声を上げ、小太郎が首を傾げていた頃、庭での戦いは鎖鎌の分銅を使った梅剣が押し返していた。
「ハハハハハ。これが魔装神具だったのは幸いだ。これで貴様の勝ちはなくなった」
振り回していた分銅を投げ、飛び上がった平次の右足に絡ませた。
鎖を引いて地面に叩きつけると、禍々しい力を鎌の刃に集中させ、巨大な刃を生み出した。
「終わりだ!!」
「兄さん!!」
「無茶だ」
叫んで飛び出そうとした鬼若を、銭型が止めた。その隙に巨大な刃は平次に振り下ろされた。
「フン」
鼻で笑う梅剣。ところが、土煙の中から眩いばかりの光が出てきた。
「封印・・・・・・解放・・・・・・」
煙の中に立っていた平次の両手には、短刀ではなく一本の光り輝く剣が握られていた。
「な・・・・・・それは・・・・・・」
「魔を祓う白き鳳凰・・・・・・羽ばたけ!!」
平次が両腕を掲げると、その剣から白い鳥のようなエネルギーが現れる。
「・・・・・・魔装神具・・・・・・破魔白凰(はまはくおう)・・・・・・」

「ま・・・・・魔装神具だと!?」
「――祓え!!」
平次が叫び、刀身が振り下ろされると同時に、鳥が羽ばたく。一瞬で鳥が通り過ぎると、梅剣の体から黒い煙のようなものがたった。
「ギャアアアッ!!き・・・・・貴様あああああああああああ!!」
逆上して襲いかかるが、平次は即座に第二派を放った。とっさに鎖で防御したが、鎖は砕け再び梅剣は白い鳥の直撃を受けた。
〔グオオ・・・・・お・・・・・・おのれ・・・・・・〕
それだけ言い残すと梅剣の体から出ていた煙は完全に消え、彼の体は地面に倒れた。
「救護班、彼を!!」
平次の要請にすぐさま病院から救急隊員が飛び出し、倒れた梅剣の体を担架に乗せた。
「・・・・・あいつは・・・・・何者だ・・・・・」
病院に運ばれた梅剣を見届けた後、平次は夜空を見て呟いた。

―※＊※―

江戸東慶を脱出してから一週間。睦月は平安京都で治療を受けていた。その間に、国内では大変な事態になっていた。
「ややこしいことになったな」
「ええ。これも敵の予想内だったのか、それとも即座に立てた策なのか・・・・・」
徳仁と晴明が、それぞれ腕を組んでいる。黄龍殿のリビングルームに置いてあるテレビには、〔江戸東慶守護部隊、宿舎襲撃〕と言う見出しのニュースが報じられていた。
「『八日未明に宿舎が襲撃を受ける。行方不明の一人を除き全員が

死亡』・・・・・・か。これは・・・・・・」
博雅の言葉に、「そうだろうな」と徳仁が答える。
「奴らが皆殺しにしたのだろう。一人行方不明になっている、睦月くんに罪を被せて」
画面には、重要参考人として睦月の顔写真が映されていた。
「ひどいことをする。自分たちの隠ぺい工作のため、自分の部下を・・・・・・」
眉間にシワを寄せる博雅に、「おそらく」晴明がと切り出す。
「部隊を率いる者にとっては仮の部下でしかなかったのだろう。それに・・・・・・このニュースでやっていることはほとんど事実だ」
ニュースでは、烏天狗の一人が不可侵条約を破って江戸東慶に侵入し、江戸東慶部隊の宿舎を襲撃したと報じられていた。
「実際、襲撃はしていないが不可侵条約に違反したのは事実だ。もっともそのおかげで二人を助けられたが・・・・・・」
「二人・・・・・・そうか。睦月という者に協力していた者たちは・・・・・・」
博雅が暗い表情をすると、晴明も表情を厳しくする。
「私がもしもの時に配備していた式神たちも、白くんの部下たちも、あのヘイルという男一人に状況を返された・・・・・・」
「強敵だな。戦うことになって勝てるのか？」
「だが、貴人が見届けた。睦月くんに協力していた者たちが、一矢報いてくれた」
「最後の意地、か」
徳人が呟く。謎の力を発動したヘイルの前に、晴明の式神たちは次々と倒されて行った。有馬たちの集中攻撃と命を捨てた攻撃でヘイルは手傷を負い、その隙に晴明の式神と白の部下たちは命拾いをした。だが、その結果・・・・・・
「この話はもうよそう。それよりも今は、どう切り抜けるかだ」
「ああ、そうだな。睦月と閉じ込められていた少女は助け出せたが、同時に奴らにここを攻め入らせる正当な理由を与えてしまった。早

く手を打たなければ・・・・・・」
「それについて、いい案を持って来てやったぞ」
徳仁が唸ったその時、突然した男性の声に全員がそのほうを向くと、晴明が声を上げた。
「おお!?お主は・・・・・・・!」

―※＊※―

「う・・・・・・う・・・・・・ん・・・・・・・?」
別の一室。ベッドの上に寝かされていたユウが目を覚ました。側の窓は開け放たれており、白い薄手のカーテンが風になびいている。
「気が付いた?」
澄んだような女性の声に、ユウは反射的に体を起こして警戒した。その時、彼女は自分にちゃんとした服が着せられているのに気付いて驚いた。
「よかった。不安定な覚醒をしたって聞いたけど、後遺症はないみたいね」
窓とは逆のほうに座っている、笑顔の女性。ユウはまだ警戒を解かなかった。
「大丈夫。ここは妖怪の力を持つ人たちも保護している。あなたを実験道具にしたりしないわ」
だがユウは、まだ疑いの眼差しを向けている。
「まずは、お互い自己紹介しましょう。私は・・・・・・・」
そこへドアが開き、二人の男女が入って来る。
「あら。久しぶりね、光輝くん、弥生ちゃん」
笑顔で話しかける女性に、二人は一瞬首を傾げた。だが、すぐに思い当たったらしく、ハッとした。
「あ・・・・・・あんたは・・・・・・」

「アオイさん！お久しぶりです！！」
天にも昇りそうな勢いで喜ぶ弥生に、ユウは唖然としていた。
「じゃあ、改めて自己紹介ね。私は如月（きさらぎ）　葵（あおい）。この子は神埼弥生さんで、こっちが・・・・・・」
「文月光輝です。君は確か、睦月さんが助け出したって言う、人間不信の女の子」
「・・・・・・っ！！」
ユウが反応すると、どこからかどす黒いプレッシャーが洩れる。
「まったく。サツキといい、君といい、あの人もよく人外の者と係わるね」
「コ～ウ～キ～ク～ン。そういう言い方はないんじゃないの～？」
笑顔の裏に威圧感を隠しつつアオイが話しかけると、光輝はようやく彼女が放つプレッシャーに気付く。
「うっ・・・・・・」
「・・・・・あれ？今さっき『サツキといい』って言ったけど、サツキちゃん、何かあったの？」
一転して首を傾げたアオイに、弥生は光輝の足を思い切り踏みつけた。彼が痛みにもだえている間に一部始終を話した。
「なるほどね・・・・・・なら、急いだほうがいいか・・・・・・」
最後の呟きに三人は首を傾げた。

特別編１４　希望への旅立ち

睦月は黄龍殿の一部の建物の屋上にいた。自分に守護部隊壊滅の容疑が掛けられていることも、そのことで追われていることも晴明から聞かされている。同時に、自分の敬愛していた上司が、長い間自分たちを騙していたことに心を痛めていた。

「（ヘイル隊長が・・・・・あんなことを・・・・・・）」

破壊された宿舎や施設の映像は、ニュースを見たので知っていた。隊長があんなことをするとは思えない。だが、あれは自分がやった訳ではない。そうなると自動的に、ヘイルを疑わざるをえないのだ。

「（隊長・・・・・・なんで・・・・・・）」

～―回想―～

「君が、神童睦月くんか」

廊下を歩いていた時、後ろからした声に振り向くと、そこに一人の男性が立っていた。

「あんたは・・・・・？」

「今度から君が所属する部隊の率いる者だ」

男性が笑みを浮かべて返すと、睦月はすぐさま身を正してと敬礼した。

「はっ、失礼しました」

「いや、いいよ。実際、部隊のことはほとんど副隊長に任せて、自分はこの通りふらふらしてるさ」

自分に呆れるように、「ハハッ」と笑う。

「失礼ながら、君の経歴を調べさせてもらったよ。妖怪に故郷を滅ぼされたようだね」
一瞬、険しい表情になったが、しばらくすると「はい」と答えた。
「いや、すまない。こちらも傷をえぐるようなまねをするつもりは無い。ただ、これだけは心に留めてくれ」
頭の中で不思議に思う睦月に続ける。
「人間は妖怪に立ち向かう力を持たない。そうした人々を守るためには、我々が『剣』となって、守らなければならない。わかるね」
一瞬驚いたが、すぐに理解し頷いた。
「はい」
「自分のような者を増やさないために、がんばってくれたまえ。期待しているよ」
そう言って、ヘイルは廊下を歩いて行った。

〜―回想終わり―〜

今、気付いた。自分はヘイルに、自分の中にある妖怪への憎しみを増幅させられた。妖怪と共存できるなど、微塵も考えられないように。
「（ああ、そうだ。共に住む妖怪が争いを起こすんじゃない。臆病な人間が・・・・・勝手に騒ぐだけなんだ・・・・・・）」
「ようやく、わかったみたいね」
空を仰いでそう思った時、後ろから声がした。振り向くと、そこにはアオイが立っていた。
「・・・・・如月さん・・・・・・」
「妖怪が人間を襲う理由の大多数は、人間が妖怪の住処を荒らしたため。人間に恨みを持って報復に来る妖怪もいるわ。人間自体を憎む者もいる・・・・・・」
「・・・・・色々いるんですね」

「色々いる、のよ。だから、簡単には言いきれない」
「ですね。色々と複雑そうだ」
「無知は罪じゃない。本当の罪は価値観に縛られ、理解するべきことから目を逸らし、無知であり続けること。それを忘れないで」
「ああ」と
睦月は迷いのない顔で答えたが、「まあ」とアオイは肩をすくめた。
「私もまだまだ、人のことを言えないんだけどね」
「・・・・・なんですか、それ」
げんなりした顔の睦月が聞き返すと、アオイは苦笑して踵を返した。
「一緒に来て。徳仁さまからあなたたちに、話があるの」

―※＊※―

徳仁の部屋に集められた睦月は、思いがけないことを告げられた。
「国外追放・・・・・・ですか？」
睦月の問いに、「ああ」と徳仁は頷いた。
「神埼弥生、文月光輝、芽衣皐、流牙優、そして神童睦月。以上五名を、五年間の国外追放に処す。ただし・・・・・・」
「形式上の・・・・・・ね」
博雅が宣言した後、後ろから声がすると全員が振り向いた。部屋の入り口にはアオイの他にいつの間に別の男性が立っていて、それを見た睦月は目を見開いた。
「鱒津（ますつ）　信玄（しんげん）だ。お前たちを迎えに来た」
「迎えに・・・・・・って。いきなり出て来て、あなたいったい何者なの！？」
「・・・・・素性のわからない者は信用できないか？」
疑う弥生に、困ったような顔で信玄が言う。
「当たり前です」

サツキも、ユウと共に疑いの眼差しで見る。信玄は頭をかきながら溜め息をついた。

「はあ・・・・・・アオイ、おまえの元教え子たちは、人を見る目がないな」

「そう言うあなたこそ、いったい、今まで、どこで何をしていたのですか？し・ん・げ・ん♪」

表面上は笑っているが、今のアオイからはこれまでに感じたことのないほどの威圧感が漂っており、睦月たちはもちろん信玄もたじろいだ。

「な、何って・・・・・・・・・ははは・・・・・・後で説明するじゃ・・・・・ダメか・・・・・・・」

「（す、すげぇ・・・・・・・あの信玄さんが威圧されている）」

部屋を支配している威圧感をものともしていないのは、安倍晴明と徳仁だけだった。

「君たちをここで保護したいのは山々なのだが、それでは敵が利用している政府に付け入る隙を与えてしまう。そこで、君たちをある場所に保護してもらう」

「ある場所？」とサツキが聞く。弥生はその声に、いつもと違う幼さを感じた。

「今この世界全てに、何者かの魔の手が迫っている。我々はある男の警告を受けて、他国に点在している数少ない協力者たちと共に、その組織を支援しているのだよ」

「俺がこの国のあり方に反発して、飛び出したのは知ってるな。睦月」

「はい、町の人から聞きました」

「あれ？あなたたちって、知り合いだったの？」

何を今更、という感じで答えた睦月を見て、アオイが驚いた表情で聞く。

「俺に格闘術や武器の扱いを教えてくれたのは、信玄さんなんです。江戸東慶守護部隊に入ったのを一番に報せようとしたら、すでに・・

・・・・」

「国を出た後だった。俺は世界を放浪している中である奴と巡り会って、その組織の基礎作りをしてたって訳だ。しかし、まさか徳仁が『数少ない協力者』の一人だったとは」

「なんの話ですか？」

「そうよ～。いったい、なんの話～？」

話が見えない睦月は首を傾げると、再び威圧感を漂わせたアオイ信玄に迫る。

「（うわっ・・・・・・）」

「（こんなアオイさんを見たの・・・・・・初めて・・・・・・）」

可憐で優しいアオイしか知らない光輝と弥生は、今の彼女に戸惑っていた。そんな場の空気を、徳仁が咳払いで一変させる。

「ああ～・・・・・・とにかく、近く迎えの者が来ることになっているのだが・・・・・・」

そこへ、血相を変えた一人の近衛兵が入って来た。

「た・・・・・・大変です！」

「どうした？」と晴明が聞くと、近衛兵が徳仁に駆け寄った。

「平安港に、謎の巨大船が。船体コードは登録されていません・・・・・」

すると徳仁は「ほう、来たか」と椅子から立ち上がった。

―※＊※―

平安京都にある港。そこは、東の都に続く橋から海岸線を南に行った先にある。名は平安京都にちなんで〈平安港（へいあんこう）〉。そんな港に、客船ほどもある大きな船が近づいていた。港なので客船や貨物船が来るのは珍しくなかったが、それらの船とも違う見慣れない船に、人々は野次馬根性と不安から集まっていた。

「はいはい、ごめんよ～」
そこに、白い髭を蓄えた老人が割って入る。フードの下から覗く顔からして、彼は変装した徳仁だった。
「いったい、なんの騒ぎだい？」
「ああ。客船が入ったようなのだが、なんか様子が違うんだよ」
その言葉を裏付けるかのように、港の沿岸には制服を身にまとった警備隊員たちが何人も立っていた。徳仁は、その隊長らしき人物を見つけるとすぐにそこに歩いて行った。
「ご苦労さま」
「ん？じいさん、民間人は立ち入り禁止だよ」
気付いた隊員の一人が注意に来たがそれを見た隊長らしき男は慌てて近づいた。
「徳仁さま」
「駄目だよ。今、私はお忍びだ」
「も・・・・・・申し訳ありません」
敬礼した警備隊長がすぐさま謝ると、人だかりのほうがざわざわと騒ぎ出した。
「お・・・・・おい、あれ・・・・・・」
一人の男が指差したほうには、マントに身を包んだ数人と同じ格好をした睦月がいた。手にはトランクを持っているものの顔は隠しておらず、見つかるのは当然だった。
「顔を隠さなければ、見つかるのは道理だろう」
「まあ・・・・・・な」
だが、信玄は少し笑っていた。と、そこへ
「いたぞ！」
睦月と信玄が声のほうを向くと、何人もの武装した人たちがいた。睦月にはその制服に見覚えがあった。自分を取り囲んだ江戸東慶部隊所属特別別働隊、ヘイルの直轄だった。
「さあ♪逃げろ～♪」
「追いかけっこだね・・・・・・」

「ええっ!?ちょっと・・・・・・」
信玄とサツキが出した軽い声に、睦月は驚きつつ走り出す。彼らを初めとした七名は荷物を担いで船に走り、それを大勢の兵士が追いかける。
「逃げるってどこに～!?」
弥生が聞くと、走りながらアオイは「あそこね～」と言った。目の前にあるのは、問題となっている謎の巨大船。そこを目指す真意は睦月にはわからなかったが、疑っている時間はない。と、その時、
「そこまでだ」
軽い鎧を装備した一人の男性が立ちはだかった。
「ヘイル!!」
「まさか国外逃亡しようとは、な。君には失望したよ」
腰に指してある剣を抜くと、睦月も銃に手をかける。
「失望したのは俺のほうです!表では妖怪は立ち入り禁止にしておいて、こんな子を地下に閉じ込めるなんて!」
厳しい顔でマントとフードをまとっているユウを庇うと、ヘイルはせせら笑うように鼻を鳴らす。
「その子は不可侵条約化の町に不法滞在してたので、我々が身柄を拘束していただけだ」
「でたらめだな。この国では、この子のような獣人は住むどころか、入ろうともしない。それにも関わらず、ここにいると言うことは・・・・・」
信玄の言葉を数秒考えて睦月はハッとした。その間にヘイルが剣を向ける。
「元上司のよしみで命だけはとらないでおく。神妙に・・・・・・するんだな!!」
一瞬で目の前に現れ、切りかかったヘイルの剣を、信玄が目にも止まらない速さで抜いた刀で受け止める。
「殺気出しまくってるくせに――何言ってるんだ!!」
突っ込んだ信玄の刀をジャンプで飛び越え、上から目にも止まらな

い速さで連続攻撃を繰り出す。だがそれを、信玄は少ない身のこなしでかわす。

「侵略すること・・・・・・火の如し・・・・・・」

着地したヘイルに、今度は信玄が烈火のように激しい攻撃を加える。

「ちっ、こしゃくな!!」

一方、船までもう少しという所に、ヘイルの部下の兵士たちが立ちはだかった。

「観念するがいい!!」

兵士たちは有無を言わさず武器を抜いて、襲いかかって来た。睦月は銃を抜こうとしたが、相手が自分の所属していた組織のため一瞬、戸惑った。その一瞬の間に、兵士の一人の剣先が睦月の胸を貫こうとする。その時、

「クリス・ウォール!」

どこからか少女の声がして、突然現れた水晶の壁がその剣先を防いだ。その後、甲板の端から少女が顔を出した。

「今の内、急いで!!」

見ると、先ほどの水晶の壁が追っ手の兵士の前に立ち塞がり、船へ乗るための階段までの道を確保していた。何度か打たれるとヒビが入りだしたので、壁が砕けない内に急いで船に乗ることにする。

「ダメです!!奴らに逃げられます!」

「わかった。すぐに片づけて行く!」

ヘイルはそう言うとジャンプで信玄に突っ込み、剣での怒涛のラッシュを叩き込む。だが、何発か打ち込んだ後、急に信玄の姿が消えた。周りを見渡して探したが、後ろを振り向いた時には信玄は出港している船に乗っていた。

「速きこと、風の如し!じゃあな、偽者の守護隊長さん!」

ヘイルが悔しそうに船を見送った後、彼の部下たちや港の警備兵たちが集まる。

「全く・・・・・どうしてくれるんだ。手配犯の国外逃亡を許してしまったぞ」

「三日前、こちらの手を借りる必要がないと言ったのは、そちらではありませんか？」
「なんだと！？」
平安京都の警備隊長に江戸東慶の兵が突っかかるが、喧嘩腰の部下をヘイルが止める。
「やめろ」
「し・・・・・・しかし・・・・・・」
「協力を蹴ったのは我々のほうだ。これは認めざるを得ない。だが、我々のほうも逃がすつもりはない」
「しかし、彼の国際手配は出来ませんよ」
やって来た徳仁にヘイルは一瞬驚いたが、すぐに平静を取り戻した。
「なぜですか？まさかあなたが、手を回しているとでも」
「いえ。まさか、お忘れになったのですか？この国が諸外国にどう思われているか」
「クックック、なるほど、な」
黒い笑みを浮かべた後、ヘイルは背を向ける。
「戻るぞ」
「はっ」と敬礼した部下もついて行った。
「ご苦労だったね」
そう言って歩き出した徳仁に、「はっ」と警備隊の隊員たちが敬礼した。

―※＊※―

睦月たちを見送った徳仁が部屋に戻ると、右側の壁に黒装束に身を包んだ一人の男が片膝を付いていた。
「お待ちしておりました」
「おお、白月か」と徳仁は言うと、デスクの前の椅子に座った。

「それで、どうだった?東北に向かった小隊は」
「恵比寿・・・・・蛭子神の血族との交渉の件は・・・・・・すでに手遅れだったとのことです」
ゆっくりと顔を上げた白の答えに徳仁は目を見張り、変装に使ったコートをかけて溜め息をついた。
「そうか・・・・・・」
「連中、ひどいですよ。わざわざ自分たちで皆殺しにしておきながら、その恨み辛みを江戸東慶の連中に向けさせているんです」
「蛭子神の血族エミシ・・・・・東北に住む人々を全員皆殺しにするのは、いくら連中でも不可能だ」
「被害にあった人々は、ごく一部の地域に住んでいた人たちです。ただ、その地域というのが・・・・・」
首を傾げる徳仁に、真剣な面持ちで続ける。
「かつて、朝廷軍の坂上田村麻呂と、エミシ軍の悪路王が激戦を繰り広げたと言われているのです」
「――――!!そうか・・・・・」
徳仁はイスに座ると、机の上で組んだ手に顔をつけ、今までのことを考える。
晴明が飛天という烏天狗から聞いたという、太郎坊を襲った謎の男。睦月がサツキを助け出す時に会った謎の男。獣の耳を持つユウという少女を地下研究室に閉じ込め、なんらかの実験を行なっていた、もしくはそれを黙認していた江戸東慶部隊隊長ヘイル。そして、一週間前に平次から報告があった、梅剣という男に取り憑いていた謎の悪霊。
徳仁には、全てが繋がっているように思えてならなかった。

―※＊※―

ほぼ同時刻、高速道路を三台の大型バスが走っていた。しかし、その内側には装甲版が貼られており、江戸東慶部隊の面々が横に武器を置いて椅子に座っていた。そして、三台目の一番後ろにある部屋の中、ヘイルは腕を組んで椅子に座っていた。

「（彼らが国外へ逃げたのには、十中八九、徳仁が関係している。いや、あれは本当に逃げたのか・・・・・・？）」

「取り逃がしたようだね」

厳しい表情でヘイルが考えていると、横から軽い感じの声がした。いつの間にかヘイルの横の席には、サングラスをした青年が座っていた。

「ネクロか。本当にお前は、神出鬼没だな」

「はは、どうも。しかし、連中は本当に逃げたのか？」

「やはりお主もそう思うか？」

「・・・・・人間どもの中にも、俺たちの存在に気付き始めた奴らがいる。始末しようにも、一歩手前で行方をくらます」

「確か、ラグシェ国で二人、エリウ国で一人、ファンラス国で一人抹殺対象者が消えたか」

「ああ。知人を襲って誘き出そうにも、神界の連中が見張ってて、下手に手出しはできない」

だが、ヘイルは笑って「だが、実質問題にはなるまい」と言った。

「ハハハ・・・・・まあな」

ヘイルは、ジャケットの内ポケットから二つのカプセルを取り出した。

「今の内に渡しておく。エミシの者たちと悪路王の思念が入っている。もっとも、悪路王のほうは強すぎてカプセル一つ分を締めてしまった」

「それほど強いんだろ？なら、万々歳だ」

だがヘイルには、悪路王が言った「やらなければならないこと」が気になってしょうがなかった。

第５１話　揃った役者

睦月たちが徳仁から、形式上の追放宣言を受けていた頃。シャニアクの協力者から連絡を受け、迎えに行くため〈エスペランザ〉が出港した。

「・・・・・・で？」

乗船メンバーはディステリアの他にはクウァルとセルス、ジークフリートとブリュンヒルド、セリュードがいたのだが。

「よく考えてみれば、これって二年前のメンバーと同じじゃないか」

「あっ、本当だ」

たった今気付いたようにセルスが呟くが、誰一人気にする者はいない。

「まあ、二年前は行き損ねたことだし。今度こそ、どんな国か見ようと思ってるの」

「セルス、俺たちは観光に行くんじゃない」

「それと・・・・・・停泊はできても船を下りることはできない、ということだ」

クウァルとセリュードの説明に、「ええ～～～っ！」とセルスは悲鳴を上げた。

「シャニアクの協力者・・・・・・どんな物好きか、ある意味楽しみだ」

冷たく呟くディステリア。シャニアクという国にいい印象を持ってない彼は、協力者もろくでもない奴と考えていた。その考えが即座に取り消すことになるとも知らずに。

―※＊※―

シャニアク国、平安港に寄った客船スキールブラズニルは、再び大海原を移動している。甲板の上では、睦月たちと彼らを助けた少女、その連れの少年が話をしていた。

「・・・・・さっきは助かった。ありがとう」

礼を言う睦月に、「いえ、それほどでも」とセルスが照れ隠しをする。

「私、セルスと言います。セルス・セオフィルス」

「俺はクウァルだ・ハークルス。俺たち二人はラグシェ国から来た」

「ラグシェ・・・・・って、外国ですか？」と、弥生が聞く。

「当たり前だ。オリュンポスでこの船に乗ってから、次の目的地を聞いて驚いたぞ。まさかこの国に、俺たちの仲間になる人がいるとは・・・・・・」

「・・・・・それほど、この国の評判は悪いのか？」

クウァルの言葉に、苦い表情の睦月が呟いた。

「悪いなんてもんじゃない。最悪すぎるぞ。俺なんかシャニアク人というだけで、殺されそうになった時があったぜ」

信玄の言葉に、全員が「ええっ！？」と驚いた。

「あれ？皆さん、そこまでは知らなかった？」

「当たり前だ。だいたい、俺たちの国はシャニアクの評判こそ悪いが、あの国に住む者に同情する者もいるんだ」

驚きが隠せない様子で、クウァルが言う。

「俺の住んでいた国では、話は聞けど気にしてすらいなかったぜ・・・・・」

別の声がすると、船の入り口の側に、背の高い美青年が立っている。中から出てきたらしく扉が開いていた。

「ああ、セリュードの国ではそうだったのか？」

クウァルが聞くと、セリュードは歩きながら「ああ」と答えた。
「お互い知らぬ存ぜぬじゃ居心地悪いだろう。俺はセリュード・クルセイド」
「セルス・セオフィルスです」
「クウァル・ハークルスだ。で、あっちの髪がさばさばした野次馬がディステリア」
親指を指したクウァルの紹介に、「おい、待て」とディステリアが割り込む。
「誰の髪がさばさばしてるって？」
「ああ、さばさばじゃなかった。ぼさぼさだ。ついでに性格もずぼら、と」
「間違った情報言ってんじゃねぇ！！」
「もう、二人とも。みっともないからやめて」
クウァルとディステリアをセルスが止め、それを見て睦月らは唖然とした。
「神童睦月。元江戸東慶守護部隊員だ」
「外見は若いけど、何歳だ？」
「年齢は１８」と即答すると、「１８だって！？」とディステリアが驚いた。
「俺とあんまり変わらないじゃないか！？」
「知らないよ。そんなこと」と睦月が面倒くさそうに視線を逸らす。
「私は神埼弥生。１６歳」
「芽衣皐です。私も・・・・・・１６です・・・・・・」
「流牙優。見ての通り・・・・・・です」
そうは言ったがわかった者は少なかったようで、首を傾げたディステリアが聞く。
「見ての通り・・・・・とは、獣人と言うことか？」
聞かれたユウは「え、と・・・・・・その・・・・・・」と、おどおどする
「ほら、ディステリア。自己紹介」

「あっ、そっか。クウァルは適当なことしか言ってないんだ」
セルスに指摘されて気付いたディステリアは、改めて睦月たちのほうを向く。
「俺はディステリア。人付き合いはあまりうまくないから、至らない部分が多いと思う。が、仲良くやっていきたい」
「ユウと同じだ・・・・・・」
人とあまり接したことがないユウはそう思ったが、ディステリアと彼女では、『人付き合いはあまりうまくない』の意味が違っている。
「さあ、立ち話もなんだ。中に入ろう」
「そうですね」と睦月は信玄に賛成し、彼らは中に入って行った。

―※＊※―

何事もないように海を進んでいるスキールブラズニルの中に入ると、一気に増えた協力者たちで話が盛り上がり始めた。
「じゃあ君は、シャニアク国で生まれたのかい？」
セリュードが聞くと、「はい」とユウが答えた。
「物心付いた頃から両親と一緒に暮らしていたのですが・・・・・・ある時、あの人たちが来て・・・・・・」
「君を地下施設に連れて行った、か。ひどい話だ。君のご両親は？」
クウァルの質問に、ユウの代わりに睦月が答える。
「おそらく、殺されたのだろう。連中にとって秘密が漏れるのはとても都合が悪いからな」
「・・・・・・ひどい話ね」と暗い表情のセルスが呟いた。
「しかし・・・・・・ケルトやファンラスでならともかくなんで、シャニアク国で獣人の子が生まれたんだ？」
セリュードの言葉に、「獣人？」と睦月が首を傾げた。
「半妖ではないのか？シャニアク国では時々、人と妖怪の間に子が

生まれることがある。だが、妖怪からみれば妖力が弱いし、人間から見れば妖術が使える。両方の種族は愚か、親にさえ捨てられるケースが少なくない」

「それもひどい・・・・・・」とセルスがまた呟く。

「平安京都を治める徳仁さまは、そうした迫害をなくすために、人間と妖怪が一緒に暮らせるように保護条約を結んだの。でも、いまだ迫害はなくならないし・・・・・・」

「首都・江戸東慶を初めとした東本土の人々が、そうした活動に難色を示している。平安京都から西側の地域にも、この条約が受け入れられないという人たちが多い」

アオイと信玄が、沈んだ表情で言う。

「私たちが住んでいた村もそうだったわ。スサノオの降臨伝説がある村で、自分たちには神の血が流れていると信じているらしいの」

「だから、妖怪の血が流れる人は嫌ってたの？訳わかんない・・・・・」

苦々しげに言う弥生に、セルスが言う。

「一口に妖怪と言っても、中には神様と崇められるものもいるんだろ？ほんと訳がわからないな、シャニアク人って」

そんなクウァルに、睦月たちの視線が突き刺さった。しばらく目を見開いていたが、「すまない」と謝った。

「俺たちは・・・・・・これからどこに行くのだ？」

「それはだ、な・・・・・・」

睦月の質問にセリュードは言葉に詰まる。行き先を言っていいのか、視線を向けた彼の代わりに信玄が答えた。

「まだ〈名も無き島〉だよ」

それ以上信玄は何も話そうとしない。やがてスキールブラズニルは、目的地に到着した。世界の人々から忘れ去られた〈名も無き島〉に。

―※＊※―

睦月たちを屋敷に招き入れ、任務完了となったクウァルたちは中を歩いていた。しばらくそうしていると、庭で騒がしい音がした。
「なんだ?今の音は・・・・・・」
クウァルが呟くと、「行ってみるか」とセリュードが言った。庭に行くと、二人の男性が戦っていた。一人は銃を、もう一人はサーベルで戦っている。
「睦月くん!?」
「相手をしているのは・・・・・・ユーリか?」
セルスが驚くと、セリュードが眉をひそめる。睦月の相手をしているユーリに、銃を構えている睦月は攻めあぐねていた。
「・・・・・・どうしたんだ?銃を持っているなら、有利なはず・・・・・」
すると、ユーリが一瞬、クウァルのほうを向いた。その隙を突いて、睦月が銃を構えた。一瞬、ユーリは、発砲の瞬間に地面を蹴った。
「不意打ちしても、文句はなしだよな!」
空中に浮いたユーリに向けて銃を撃ったが、全てサーベルで叩き落された。
「銃弾を全て、サーベルで!?」
「銃弾が見えていなければできない!!なんて動体視力と反応速度だ!!」
二年ぶりに会った彼の実力に驚くセルスとセリュード。
「やはり、銃は効かないか」
睦月が横についているダイヤルを回すと、銃身から刃が出てきて小振りの剣に変形した。
「銃剣だったのか?」
驚くクウァル。相手が着地した後、しばらく深呼吸をしていたが、その間に剣に炎が宿った。
「いっけ〜〜!!」

振りかぶった腕を振り下ろし、剣に溜めた炎を打ち出した。
「烈火――――飛燕太鼓!!」
連続で炎の塊がぶつかった途端、ユーリは逃げ場を失った。そこに睦月が追い討ちをかける。
「飛閃・・・・・・天翔!!!」
ドオッ、と飛んだ炎がぶつかる。それらが治まると、中から無傷のユーリが歩いてきた。睦月は再び武器を構えるが、彼は武器をしまっていた。
「さすが『十二月将』だ。いいだろう。合格だ」
それを聞いた睦月は、「なっ・・・・・・・」と唖然とした。
「何を驚いている。合格だ、と言ったのだ」
「違う。俺が驚いているのは、そんなことじゃない!」
銃をしまって、睦月はユーリに詰め寄る。
「今の『十二月将』ってなんだ?俺はそんなのに入った覚えはない」
「なんだ?聞いていないのか?」
ユーリが取り出した一枚の紙には、こう書かれていた。
『この『新道睦月』と言う少年を、『十二月将』の一員として、そちらに送る。実力を知りたければ、彼と手合わせするも良かろう』
「やられたぁぁぁぁぁ!!」
読み終わった睦月は紙を握り潰し、「あんの狸~~~!!」と悔しそうな声を上げた。そこに、パンパン、と手を叩く音がした。
「あの人は・・・・・・・?」
「さあ・・・・・・俺も知らない」
睦月とユウが首を傾げる。その男こそ、神々と共にこの島の屋敷を管理し、彼らをここに呼んだ張本人、クトゥリアだった。
「立ち話もいいが、そろそろ互いのこと紹介してもらおう。集まってくれ」
「あっ、クトゥリアさん。それ、俺たちはもう終わってます」
セリューードの説明に「んな!?」と、珍しくクトゥリアが間抜けな声を上げる。

「・・・・・お前らが終わってもな～、他の仲間はまだ知らないわけだし。面倒くさいだろうが顔合わせ、頼むよ」
「まあ、敵に間違えられてトラブルを起こすのもなんですし・・・・・」
ユーリとやり終えた睦月もそれほど抵抗感を持ってないようである。
〈エスペランザ〉内で終えた自己紹介を、屋敷のエントラスで再び行った。集められた隊員たちは睦月の若い外見に驚いたが、年齢を即答した彼にもっと驚いた。その後に烏天狗が前に出る。
「俺は飛天。見ての通り烏天狗だ。修行中の身ゆえ、どこまでお役に立てるかわからぬが、以後お見知りおきを」
その後、アオイ、信玄、平次の順で自己紹介をし、船にいなかったメリスを見た飛天が目を見張った。
「ほう、異国の人魚は美しいだけではなく、自力で陸を動けるのか」
「いや、美しいかはともかく、動けるのはこいつだけだから・・・・・」
呆れるロウガに対し、美しいと言われたメリスは照れていた。

―※＊※―

一方、平安京都では。
「では、本日の訓練を始める。用意はいいな?」
すると「はい」と光輝が答えた。
「わかっていると思うが、君は見たものに様々な事象を起こす術が使える。しかし、まだ完全に使いこなせていないため、君自身がダメージを受ける」
「わかっています。それを受けないようにするために、力を制御する修行をしているのでしょう?」
「そうだ。では、今日の修行を始めるぞ」

睦月たちが出発してから二日。晴明は光輝に、邪眼と同じ『視線に起因する術』を使う力が秘められていることを見抜き、それを使いこなせるようにするために、引き取って訓練していた。そのかいあってか、光輝は少しずつではあるが、術を使った時の反動を受けずになっていた。とはいえ、まだ体は刃物で刺されるような痛みを受けていた。

「今日はここまで。明日に備えて、しっかり休め」

「はい、ありがとうございました」

光輝は一礼した後、一人部屋に残った光輝は、布団の上に倒れた。ふと目を閉じると、睦月と楽しそうに話す弥生の姿が頭に浮かぶ。それと共に湧き上がる憤りに、光輝自身、驚きと戸惑いを感じて目を見開いた。

「・・・・・嫉妬してる・・・・・・・？バカな・・・・・・・」

自問自答して出た答えに、一人あざ笑った。

―※＊※―

その日の夜。メンバーのほとんどが食事を取った後、通路でユウとサツキが睦月を取り合っていた。

「ムー。一緒に寝よう？」

「ダメ！睦月は私と一緒に寝るの！」

「ダメ！私！」

「私！！」

ユウとサツキが困り顔の睦月を取り合い、その騒ぎを遠くで信玄と弥生が見ていた。

「いや～、睦月。モテモテだね～」

「仮定はどうあれ、二人とも睦月さんに助けられましたから。二人にとって睦月は、白馬の王子さまなんでしょう」

少々、皮肉を込めた声で言う弥生に、信玄は「ふーん」と声を漏らす。
「呑気なこと言ってないで、助けてくださいよ～！！」
睦月が情けない声を出すと、信玄は楽しそうに笑った。
「まあまあ、楽しそうでいいではないか」
「そんな呑気な・・・・・・」
「ホントよね～。でも信玄。女の子をたぶらかすなんて、あなたは教え子にいったいどういう教育してるの～？」
後ろでした声に二人が振り返ると、アオイが例の威圧感を込めた笑顔を浮かべている。
「え・・・・・えっと・・・・・・」
アオイが威圧感を放ちつつ詰め寄ると、信玄は冷や汗をかく。
「今夜、私の部屋でゆっくり・・・・・ゆっくりと、聞かせてもらいますからね？」
「ま、待て待て待て！若い彼らの目の前でそんなこと言うな」
「変な噂がたったらどうするかって？その時はあなたの自業自得ということで」
「なんでそうなる～～～～！！」
信玄は威圧されたまま、廊下を引きずられて行き、それを見送った後、二人は睦月の取り合いを再開した。
「ユウと一緒！」
「ダメ、私と一緒！」
「おいおい。いったいなんの騒ぎだ、これは？」
三人が声のほうを向くとユーリとディステリアが立っており、その瞬間、睦月は二人を天の助けと思った。弥生から事情を聞くと、ディステリアは呆れ顔になり、ユーリは溜め息をついた。
「つまり・・・・・助けられたお姫さまが、自分を助けた王子さまを取り合っている・・・・・と言うことだな？」
「お前・・・・・嫌味、込めてるだろ」
睦月に歯を食い縛っているような声で言われて、ユーリは全然、と

でも言うかのように、肩をすくめた。
「だが、いつも必ず助けられるとは思わないことだ。俺たち人間の力には限界があり、全ての人間を助けられる訳ではない」
「わかってる。こちとら、昨日今日の新米じゃないんだ。それくらい身にしみてわかって・・・・・・」
「待てよ・・・・・『限界』って、なんだよ」
その時、二人は目を見開いて、「（あっ、新米当然の奴がここにいた）」と思いながらディステリアを見た。
「言ったとおりの意味だ。俺たち、人間はちっぽけな存在。一人で出来ることなど、タカが知れている」
ユーリにそう言われて、「それは・・・・・・そうだが・・・・・・」とディステリアが黙り込む。
「なら・・・・・なんのために・・・・・・『仲間』がいるんだ・・・・・？」
ディステリアにそう言われ、「は？」と呟くユーリ。
「それなら、なんのために『仲間』がいるんだ。なんのために『チーム』があるんだ。なんのために『組織』があるんだ。みんなで助け合うためだろう！？互いに助け合って、できないことをフォローしあって、不可能を可能にする。無限の可能性を生み出す。そのためにあるんだろう！？」
すると、睦月が「アハハハハハ」と、笑い出した。
「確かに、その通りだ。そのために、俺たちはここに集められた。お前さんの負けだな」
「・・・・・なるほど、そういう解釈もある・・・・・・か。だが、理想を叶えるにはとてつもない量の『努力』と『覚悟』がいる。それだけは・・・・・・忘れるな・・・・・・」
そう言って、通路を歩き出すユーリ。
「（でなければ君は・・・・・『大を救うために少を犠牲にしなければならない』というジレンマに、心を砕かれる）」
彼の脳裏には、戦いの中で助け出せなかったミリアの笑顔が浮かび

上がっていた。
「（そうだ・・・・・・俺は・・・・・・・）」
そのまま、半ばよろめくように廊下を歩いて行った。
「・・・・・・って、おい！！行くなら、こいつらなんとかしてくれよ～！！」
取り合いが第二ラウンドに突入した睦月は助けを求めるが、通りかかった者は彼に嫉妬のこもった視線を向けるだけで助けてくれなかった。その夜、彼がどうなったかは誰も知らない。

第５２話　運命のチーム分け

各自、朝食を済ませ、時計が九時を回った所で、現時点のメンバーは広間への集合がかかった。あれからも、続々とメンバーが集まったためか、広間には最初に顔合わせしたメンバーに加え、六十人近く集まっていた。

「諸君。度重なる謎の事件対応の為、世界政府は対策組織の設立を望んでいた。今日より我らはその役目を受け、防衛部隊としての活動を始める」

火事場泥棒的に徳を得た、と言われても仕方ない動きだったが、現世に存在する後ろ盾が得られない以上、表立とうが裏肩に回ろうが活動できない。クトゥリアはそう皮肉を込めていたが、隊員たちを前にそんなこと言えば志気が下がるのでパラケルとアウグスからは止められていた。

「さて・・・・・・長らく明かさなかった、我々の組織の名称。募集の結果、先月やっと決まった」

一気に隊員たちがざわめく。そういえば、ディステリアもこの組織の名前を知らされてなかった。聞いても「秘密だ」の一点張り。

「（まさか、決まってなかったなんて・・・・・・）」

表情を苦くする者、顔を引きつらせる者、大丈夫かと不安がる者様々。「我らの組織の名は〈ブレイティア〉！名のごとく、いかなる時も勇気の雫を胸に抱け！」

「「「「ゆ、勇気の雫を胸に抱け！」」」」

何人かが声を上げる。「（掛け声だったのか！？）」とセリュードを含め何人かの隊員たちが驚き、戸惑う。
「あ～～、諸君。今のは掛け声でもなんでもないから、気にしないように」
隊員たちがこける。大丈夫なのか、再びそんな空気が起こる。
「これより、現時点で集まっているメンバーを、小隊ごとに分けた組み合わせを発表する。君たちは組み合わせ通りのメンバーで、それぞれの役目についてほしい。まず、第一小隊・・・・・・」
メンバーたちとの間に開けられたスペースに、アウグスに名前を呼ばれたメンバーが進み出る。そして、第二小隊までが呼ばれた後。
「次、ディステリア・・・・・セリュード・クルセイド・・・・・・クウァル・ハークルス・・・・・・セルス・セオフィルス・・・・・・」
呼ばれた四人が集まると、互いに顔を見合わせた。
「私たち、一緒のメンバーだね」
「そうだな。だが、私語は後にしたほうがいい」
その後も、メンバー選出は続いていたが、それが終わった時には人数はまだ十数人ほど余っていた。
「残りの者については、この基地の守りについてもらう。しかし、現時点で組んでいるメンバーの相性が悪かった場合、君たちと交代させるかもしれないし、基地の守りはすべからく重要だ。選ばれなかったからと言って、訓練を怠ることのないようにしてもらいたい」
その後、アウグスが説明をする。
「これより、各自についてもらう任務について、説明をさせてもらう。各自、この紙に書かれている場所に移動してもらいたい。では、解散」
グリームヒルドから渡された紙には、『第三小隊集合場所、第三ミーティングルーム』と書かれていた。
「いったい、誰が任務の説明、すると思う」
「さあ？誰でしょう？」

セリュードの質問に、セルスが適当に答える。渡された紙に書かれていた第三ミーティングルームに行くと、そこには情報屋のパラケルがいた。
「ようこそ、第四小隊の諸君。今回の作戦については、私が説明させてもらうよ」
一瞬、ディステリアたちは固まった。
「あれ、どうしたの？もしかして、初めての任務で緊張して・・・・・」
「初めてで緊張しているのは、あんたのほうなんじゃないか？」
「へっ？」
クウァルの指摘に首を傾げたパラケルに、セリュードは続けて尋ねる。
「ここって第三ミーティングルームですよね」
「へっ？」
再び間の抜けた声を出して通路に飛び出すと、入り口の上につけられている『第三ミーティングルーム』のパネルを見つけた。
「アッハッハ～。いや～、俺としたことが。君たちの言うとおり、緊張してるのは俺のほうだったな」
笑いながら戻ってくるパラケルを、椅子に座ったディステリアたちは呆れて見ていた。やがて、パラケルも向かい側の席に着く。
「アッハッハ。いや、本当にすまない。まあ、気を取り直していくが、君たちについてもらいたい任務は・・・・・」
そう言ってパラケルが、テーブルの側に置いてあるトランクから一束の資料を取り出す。
「「「「（あれ？このまま続けるの？）」」」」
一瞬唖然とした四人だが、パラケルは何も気にしない。
「君たちには、エウロッパ大陸を回ってもらうことにする」
「エウロッパ大陸・・・・・って、俺たちの故郷じゃないですか」
セリュードが驚くと、「そうだ」と返した。
「君たちチームメンバー、全員の故郷がある大陸だ。ここを君たち

だけで回れ・・・・・なんてバカなことは言いたくないが・・・・・いかんせん、こちらのメンバーの数がまだまだ足りなくて。だから君たちに、メンバー集めと防衛をしてもらいたい」

それを聞いて、チームメンバーが目を見開く。

「〈六大大陸圏〉の中で、範囲が小さいとはいえ、そこを俺たち四人で防衛しろとは、正気の沙汰とは思えんな」

「ちょっと、クウァル」

セルスが反論したが、確かに広いエウロッパ大陸を立った四人で防衛するなど、どう考えても不可能としか言いようがなかった。それはクウァルに反論しようとしたセルスにも、十分わかりきっていた。

「もちろん、ただ君たちを送り出すほどこちらもバカではない。小隊と世界圏の数がたまたま二倍の数になったために、各圏内に二小隊ずつという、バカな組み分けになってしまったが、君たちがその先で協力者たちを見つければ、それだけ守備範囲が小さくなる。違うかい？」

確かに一理ある。だが、同時にバカバカしくもある。つまり、今から世界に散らばる格小隊は、その先で必ず協力者となる者たちを探し出さなければならない。それが確実な保障はどこにもないし、戦力強化のために引き入れたら自分たちがその『元民間人』を危険に晒してしまう。人の人生そのものを壊しかねない行為。それはわかっていたが、次の瞬間には、クウァルの気に触る一言が飛び出した。

「その大陸にいる神々も微力ながら手伝うから、そう気負わなくていい」

「ふざけるなぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

テーブルを叩いて立ち上がったクウァルの、とてつもなく大きな叫び声が通路に響いた。怒りで力が制御できてなかったらしく、テーブルは彼の怪力で無残に割れていた。

「俺たちを世界各地に行かせておきながら、各地域には神が配置されているんですか！？」

「いやいや、神様本人じゃなくて、その兵士か関係者・・・・・」

「どの道、同じじゃないか！！」
クウァルは散々怒鳴った後パラケルを睨みつけ、パラケルは溜め息を付いて口を開く。
「あのなぁ、クウァル。確かにここには世界各地から、一部ではあるけど神界の方々が来てくれたんだ。神々と何があったか知らないが、そうやってあからさまに敵視していたら、協力してくれる奴も協力してくれなくなるぜ」
痛いところを突かれて、クウァルは黙り込んだ。
「オーディンの所のワルキューレも、一個小隊組んで世界を回ってくれると言うし、君たちの補給にも協力してくれる。だが、それも各自の協力なくしては成り立たない。わかるよな」
さらに追い討ちをかけられ、「う・・・・・うむ」とクウァルは唸った。
「だいぶ神様とか嫌っているようだけど、生まれはどこだい？」
「ラグシェ国」
クウァルとセルスが同時に言うと、パラケルの表情が強張った。その後、理由を察したらしく、額を手で押さえて顔を伏せた。
「なるほど、そういうことか。ラグシェ国は、神と人間のトラブルが耐えない国として有名だからな。ほとんどの人間が神・・・・・・特にゼウスに愛されたことで、そりゃあ、もう、サスペンス劇場的な悲惨極まりない状況に・・・・・・」
「そんな無駄話は、この際どうでもいいでしょう。どの道、俺たちはこの任務を受けなければならない。でなければ・・・・・・」
クウァルの指摘に、「世界は」とパラケルが口を挟む。
「――――奴らによって混乱に落とされるだろう。それも、今までと比べ物にならないほどの規模で」
それを聞いて、セルスは全身が震えるのを感じた。そこに、
「あの～・・・・・ちょっといいですか？」
とディステリアが手を挙げた。
「俺たちはどうやって目的地に行くんですか？まさか、あの小船に

乗って・・・・・・？」
何があったかわからないが、ディステリアは体が震えだしていた。
「あの小船というと・・・・・・〈ウェーブ・スウィーパー〉か。いや、それもいいが・・・・・・それよりもいい物をメカニックたちが作っている」
「いい物？」と、ディステリアが聞く。
「ああ。今の君たちに、必要なはずだよ」
テーブルの上に腕を置いて言うパラケルその表情は、どこか余裕なものだった。

―※＊※―

パラケルに連れられて、格納庫らしき場所に来たディステリアたち。そこには他のチームの人たちも何組か来ており、その近くには何機もの大きな戦闘機らしき物があった。
「ディック～。調子はどうだい～？」
パラケルの呑気とも取れる声を出して、そこにいるメカニックらしき年配の男に声をかけた。だが、声をかけられた方の男は機嫌が悪いらしく、睨むようにこちらを見た。
「ああ、パラケルか。今ドヴェルガーたちに頼んで、動力面の問題を解決してもらったところだ」
ディックの不機嫌さは声にも出ていた。
「どうやら、黒小人たちの技術で問題が解決したことが気に入らないようだな」
パラケルに指摘されて、ビクッと肩を震わせる。
「図星か。言っておく俺たちは・・・・・・」
「わかっている。高度な技術を持つものに嫉妬して、仲違いに時間を潰す暇はないのだろ・・・・・・」

「わかっているのならいい」
「パラケルさん。これはいったい・・・・・・」
パラケルが言うと、セルスが戦闘機らしき物を指差した。
「ああ。聞いて驚くなよ。こいつは〈ファイター・フライヤー〉。まあ、俺たちには長いから〈イェーガー〉とも呼んでいる」
「まさか『いい物』って・・・・・・」
「そう、これだ」と、パラケルがセリュードに答える。
「ディック、早速だが彼らに・・・・・・」
「悪いが、彼らに与えるのは難しくなったぞ」
格納庫に入って来たクトゥリアに、「えっ？」とパラケルたちは首を傾げた。
「今しがたニュースでやっていたのだが・・・・・・エウロッパ連合政府はエウロッパ大陸内に、非常警戒線を張ることを発表した。攻撃対象には国籍不明の戦闘機及び飛行物体が含まれているから、今、彼らに〈イェーガー〉を渡すのは危険だ」
「では、どうしろと？」と、パラケルが聞く。
「こちらで収納方法を用意するしかあるまい。それに、このことは全ての小隊に言えることだ。遅かれ早かれ、普段は〈イェーガー〉をしまっておく方法を探しておかないと、後々面倒なことになる」
「面倒なこと？」
「その〈イェーガー〉が部外者に奪われたり、敵に見つかって破壊されたり・・・・・・ということですか？」
ディステリアが聞いた後に出したセリュードの答えに、クトゥリアは頷く。
「そうだ。収納ツールができ次第、すぐに足の速い者に送らせる。だからすまないが、君たちにはすぐに居場所を探知できるように発信機をつけてもらう」
「俺たちを監視するのか！？」
アクセサリー状の発信機を取り出したクトゥリアに、クウァルが反発する。

「いや・・・・・この発信機は、身に付けている者の居場所を即座に報せるが、何分急ごしらえの物だから、いささか正確さに欠ける。それでも、何もしないよりかはマシだと思うが・・・・・」
クウァルはしばらく睨んで黙っており、それを見てクトゥリアは聞いてきた。
「もし俺たちがあんたらを裏切っても、だいたいの位置さえわかれば、始末するのも訳はない」
「ちょっとクウァル」
「いや、そう取られても仕方ないな」
セルスがクウァルを咎めるが、クトゥリアは笑った。
「笑いごとじゃないですよ。今いる人たちの中にも、クトゥリアさんを疑っている者が何人かいるんですから」
パラケルの言葉を聞いて、セルスは暗い顔になった。
「確かに・・・・・俺を信用するには材料が足りんかも知れないなにせ、起こるかどうかわからない最悪の事態に備えて、仲間を監視しようとしてるのだからな?」
皮肉を込めて言ったクトゥリアの声が聞こえていたのか、他の小隊員たちも戸惑いの表情を見せていた。
「だが、事態は常に最悪のものを想定して備えていなければならない。例え、仲間に疑いの目を向け、逆に不審を向けられることになっても。ただ信じる、信じられるでは組織は成り立たない。『友達』や『仲間だから』という情に流されて判断を甘くする。それではただの『仲良しごっこ』だ、仲間じゃない」
「だからって、仲間を疑い続けるなんてごめんですよ」
会話に割り込んだのは睦月。彼が二年もの間、仲間を疑いながら動いていたことは、〈エスペランザ〉の中で聞いていた。その果ての最悪な結果も。
「おや。君ならわかると思っていたのだがね、睦月くん。情に流されてヘイルという隊長を疑わなかった結果、君はどんな結果を得た?」

クトゥリアの言葉にハッと目を丸くする。ヘイルを無条件に信じ、敵とのつながりを疑わず自分たちの動きを報せた。その結果、二年間共に戦ってきた、『真実を知る仲間』を殺してしまった。

「傷を抉るようなことをしてすまない・・・・・・」

我に返って耳に入ったのは以外にも謝罪の言葉。

「だが、そう言った疑念を越えた先に真の信頼がある、と私は信じているよ。綺麗事にしか聞こえないかもしれないが・・・・・・」

「意見が定まらない人ですね」

皮肉を込めた笑みを浮かべて肩をすくめるクトゥリアに、睦月は皮肉を込めて返す。

「生憎、今でも『自分は正しいのか』とびくびくしている臆病者なわけで」

組織のトップには向かない。睦月はそう思い、どうしてこの組織を作ったのかと疑問を浮かべた。

「それに、今はそんなことを言っていられない。違うか？」

そう言われて、今度はクウァルのほうが黙り込んだ。それを見かねたパラケルが、溜め息をつく。

「やれやれ、その通りだ。論ずるのはいいが、程々にしてくれ。頼む」

顔を背けて「ちっ」と舌打ちしたクウァルを放って置いて、他の三人は話を続けた。

「では・・・・・・我々はどうやって目的地に・・・・・・？」

セリュードの問いに、「うーむ」とパラケルが考え込む。

「・・・・・・トラウマになっている人もいるから、やめようとは思っていたのだが・・・・・・こうなれば仕方ないか」

「・・・・・・と言うことは、まさか・・・・・・」

恐る恐る聞くディステリアにクトゥリアが肩を落として呟く。

「ウェーブ・スウィーパーか・・・・・・もしくは新型のスキールブラズニル〈エスペランザ〉を使うことになるだろうな」

「うっ・・・・・・俺はその、新型にしてほしい・・・・・・」

その願いが届いたのか、各小隊の送り出しは〈エスペランザ〉で行なうことになった。さらに、〈ファイター・フライヤー〉の更なる機能向上と、その収納道具が完成するまでの間、移動は公共交通を使うことになった。

―※＊※―

その後。二年の歳月を費やしてドヴェルガーたちとゴブニュが、〈トランス・フレーム〉の改良案を実現し、その小型化・強度強化に成功したことに、ディックが悔しがったのは言うまでもない。その後、彼らはスタッフたちと協力して、その改良型フレームを量産し、〈イェーガー〉に組み込む作業に取りかかった。しかし、既存の骨組を交換するのはドヴェルガーたちでも難しく、結局、全ての作業を終わらせるのに一機につき一週間半、十二機全部の改良に加え新たに何機か作るのに二ヶ月はかかってしまった。

一方、世界各地に散った小隊たちはこれと言って大きな移動は行なえず、できることと言ったら一定範囲内の防衛とその中での情報収集が限界だった。もちろん、二ヶ月間でデモス・ゼルガンクの工作員とは何度も戦った。しかし、警察などの行政機関や各地の軍隊などは、この敵の存在を認識しておらず、共闘することはないに等しい状況だった。しかし・・・・・・。

―※＊※―

世界のどこかにある、巨大な建物。その中の闇に包まれた部屋の中、九人の影が机を囲んでいた。その影は、ネクロ、カーモル、デズモルート、ベノクレインを含んだ組織、〈デモス・ゼルガンク〉八幹部。そして、その統率者、ソウセツ。

「ムルグラントからの徴収兵は、グンナルにグドホルムか」

幹部の一人、ヴォルグラードがネクロに聞く。

「召霊時のアクシデントによりグンテルと融合してしまいましたが、戦力としては優秀になりました」

「怪我の功名って訳かよ」

幹部の一人、ベノクレインの嫌味めいた声に、「いえいえ」と笑いながらネクロが答える。

「さらに、同じエウロッパ連合国所属のエリウ国からも、何人か招霊させました。デズモルートに手伝ってもらってね」

「ああ、手伝わされた。だが、よもやまた裏切ることになったら・・・・」

「心配には及びませんよ。今度は抜かりなくやりましたから」

ネクロは自分が座っている席のテーブルの端を叩くと、そのテーブルの真ん中に青い光と共に、三人の男の立体衛像が映し出された。

「ご紹介しましょう。ブリアン、ヨハル、ヨハルヴァ。言わずと知れた『トゥレン家三兄弟』です。それから、ダーナとフォモールのハーフ、ブレス」

それに合わせて、立体映像が三人の男から一人の目つきの鋭い男に切り替わる。

「いずれも、ダーナ神族に恨みを持つもの。神に対抗できる貴重な戦力ですな」

幹部の一人、テレノグが言う。

「それとラグシェ国からは、スペシャルゲストを呼ぶつもりです。オリュンポス十二神に恨みを持つ・・・・・・ね」

ネクロのセリフに合わせて、立体映像が消えた。

「ほう。それはある意味、楽しみだ。ラグシェ国では人間と神の間

で起きる恋愛話が尽きないからな」
幹部の一人、クーリアが笑うとソウセツも笑う。
「それだけ、トラブルで神に恨みを持つ人間もいる訳か。ネクロ、私も楽しみにしておくよ」
「ハハハ。これはプレッシャーですね～」
それぞれが話し終わった後、闇に包まれた部屋の、奥の席に座っているソウセツが立ち上がった。
「諸君、今までご苦労だったね。各地の抵抗もあり、我らの当初の目的の達成は難航した。だが、諸君らの働きによりそれも終わりを告げた。まずは、それを感謝しよう」
言葉を切り、前の席に座っている八人に向けて、頭を下げる。
「我らの目的に必要不可欠だったのは、人間が出す『負の思念』。それを手に入れるためにも、人間どもを煽る必要もあった。だが、いかに煽ろうと神々の邪魔が入った。この世界から手を引いたはずの神々に！！」
怒りがこもった声。なんとかそれを収め、ソウセツは続ける。
「・・・・・だが、ある意味、人間どもは我らの期待に応えてくれた。それは同時に、この世界に住む者が、いかに簡単に秩序を乱すかということを示す証明にもなった。人間が愚かでなければ我らが負の思念を得ることもなかったし、何より我らがこのようなことをする必要がない！」
ソウセツは、強く握った右拳を強く机に叩きつける。
「人間どもは、神々の期待を裏切った。それは今に始まったことではない。悠久の昔、『人間』という種が知恵を手に入れたその時から、人間は探究心を持ち、世界の解明に乗り出した。事象、科学、真理。それらを解き明かそうと取り組み始めた。それはいいとしよう。だが、次第に人間は、それを己の欲のためにその過程で得た知識使い始め、やがて世界の罪のない命を巻き込み始めた。『二度と繰り返すまい』。そう誓えども、幾度も、幾度も繰り返す。まるで神々が真に守らんとしたこの世界を傷つけるかのように！！」

だんだんソウセツの声が荒げだし、最後には半ば叫ぶようになった。
「だが、それももうすぐ終わる。この世界を支配していると思い込み、くだらない型に押し込んでいる愚かな人間と、それを作りし宇宙の神々。その使途たる天使たち、対の存在たる悪魔たち。そして、人間以外の創造物たる幻獣、その他の生物たち。それら全てを一度無に返し、我らが新たなる神として秩序を創造する。それこそが、この世界を平和に導く絶対かつ、唯一無二の方法なのだ！」
八つの席に座っている影が、一斉に頷く。
「そのために、この世界にとっての『悪』になる覚悟があるか！？」
一瞬の沈黙の後、
「もちろんです。我が主よ」
「あなたさまを助けるのがカーモルさまの役目なら、我の役目はカーモルさまを助けること。すなわち、あなたさまをお助けすること」
「愚かな人間などには、この世界を任せられませんからね」
八つの影の三つ、カーモルとクーリアとデズモルートがそれぞれ答える。
「この汚れきった世界を変えるため、あなたさまにお仕えします」
「・・・・・というか、『正義』とか『悪』って、傍観者が勝手に決めることでしょ」
「そう言われて見れば、そうだな」
真剣な声のヴォルグラード、軽い声のベノクレインの後、テレノグが皮肉を込めて言う。
「ゆえに、愚問なり」
「やれやれ。まあ、もはや聞くまでもありますまい」と
いかついバーレンダートの後、ネクロが溜め息交じりに言う。それを聞き、ソウセツは一息つく。
「それを聞いて安心した。この堕落に満ちた世界を再生するために・・・・・会戦だ！！」
「我らの、理想の世界のために！！」
闇の中、八人の声が響いた。

幻世紀２０年。年の移り変わりが近づくと共に、世界の水面下で起きていた神々と『世界に害を成さんとする者たち』との戦いの舞台が、世界そのものに変わろうとしていた。しかし、それを知る人間はごく一部の者でしかなかった。

幕間3

ここは天界、天使宮（クルンテープ）。この天使たちの聖域にある宮殿の中の、とても広い部屋。天井のステンドグラスから光が差すその中で、大きなテーブルを囲んで、数人の天使たちが会議を開いていた。四大天使のガブリエル、ミカエル。各天使階級の代表、セラフィム、ケルビム、オファニム。パワー、ヴァーチャー、ドミニオン。プリンスパリティーズ、アークエンジェル。エンゼルはお茶などを運んでいる。

「この二ヶ月間。すでに、ラグシェ国、エリウ国、ガルド国で大規模な戦闘が行われています」

まず、ガブリエルが報告をする。

「メファジャリカ大陸のジェプト国でも同じようなことが起こったと報告を受けている」

「魔界の動きは・・・・・・？」

プリンスパリティーズ代表者の後、険しい表情のミカエルが尋ねる。

「以前、ありません。あの条約を結んで以来、こちらに戦いを挑むこともなくなりましたし・・・・・・」

「地上で何かがあると、真っ先に魔界の者を疑うのは、長きに渡る宿命のためか・・・・・・」

ドミニオンの報告を聞き、机に両肘を立てたミカエルは指を組んだ形で溜め息をついた。その顔は、どこか悲しげだった。

「ミカエルさま。もしや・・・・・・あの時のことを・・・・・・」

「ドミニオン。私がそんなに、弱く見えるのか？」

「いえ、決してそのようなことはございません・・・・・・」

「いや、いい。半分は当たっている」

ミカエルはゆっくり頭を振った後、顔を天使一同に向けた。

「ならばこのまま、地上の動きを監視しつつ、これからの行動を決める。各自、情報収集を怠るな」
天使一同は「ハッ！！」と声を上げ、解散してそれぞれの持ち場に戻って行った。
「・・・・・・『これからの行動』・・・・・・か。いずれ我々も、観戦している訳にも行かなくなるだろうな・・・・・・」
そのミカエルの予感はこの先、的中することになった。

―※＊※―

ほぼ、同時刻。ここは魔界、万魔殿（パンデモニウム）、悪魔たちの巣窟。宮殿の内部はだいぶ慌しかった。
「なんの騒ぎだ。これは・・・・・・」
それに気付き、「ルシファーさま」と闇のように暗い紫の色をした服を着た、天使のような翼を持つ悪魔が答える。
「アスタロトよ。これはなんの騒ぎだと聞いている」
「はい。今、地上では大規模な争いが起こっています」
「わかっている。また地上に出て悪事を働く者がいるのだろう。まったく。我らのほうも取り締まりをしなければならぬか」
悪魔たちが住む魔界は、ある時、天界との話し合いで決めたことがあった。それは、『天界、魔界両方とも人間の住む地上界に手を出さない』こと。天使のほうは、お節介で手を出す者も少しはいたし、地上に少しばかり関わることが仕ことに含まれている天使もいたが、ほとんどのものはこの取り決めを守っている。だが、魔界の者、つまり悪魔たちのほうは、地上に出ては人間にちょっかいを出す者も多数いた。大魔王ルシファーはこれを取り締まるための部署を作り、地上に出ようとする者を未然に防いでいた。
「いえ・・・・・・それが・・・・・・」

アスタロトはそこまで言うと、周りを気にするように見渡した。
「ん？構わん。申してみろ」
「はあ、それでは。実は先日、地上界からこの魔界に不法侵入しようとする者がおりまして・・・・・未遂には終わりましたが、どうやらこの魔界に内通者がいるようです」
「なんだと？」
ルシファーが眉を動かした時、扉が開き山羊の角と頭を持つローブ姿の悪魔が入って来た。彼は下級悪魔の長、レオナール。
「ルシファーさまに報告！」
「何事だ？」
アスタロトが聞くと、レオナールは膝を折った。
「今しがた、〈転移の門〉が開き、何者かが侵入を試みました」
「何！？またか・・・・・・」
アスタロトの後、ルシファーが「フム」と呟いた。
「いずれ我らも係わらずにはいられんか・・・・・・それはさておき、内通者についても調べておかなくては、な」
それを聞いたアスタロトとレオナールは、「かしこまりました」と頭を下げた。

それから、二年が過ぎた頃。両者は動き出した。

幕間4

ここは天界、天使宮（クルンテープ）。この天使たちの聖域にある宮殿の中の、とても広い部屋。天井のステンドグラスから光が差すその中で、大きなテーブルを囲んで、数人の天使たちが会議を開いていた。四大天使のガブリエル、ミカエル。各天使階級の代表、セラフィム、ケルビム、オファニム。パワー、ヴァーチャー、ドミニオン。プリンスパリティーズ、アークエンジェル。エンゼルはお茶などを運んでいる。

「この二ヶ月間。すでに、ラグシェ国、エリウ国、ガルド国で大規模な戦闘が行われています」

まず、ガブリエルが報告をする。

「メファジャリカ大陸のジェプト国でも同じようなことが起こったと報告を受けている」

「魔界の動きは・・・・・・？」

プリンスパリティーズ代表者の後、険しい表情のミカエルが尋ねる。

「以前、ありません。あの条約を結んで以来、こちらに戦いを挑むこともなくなりましたし・・・・・・」

「地上で何かがあると、真っ先に魔界の者を疑うのは、長きに渡る宿命のためか・・・・・・」

ドミニオンの報告を聞き、机に両肘を立てたミカエルは指を組んだ形で溜め息をついた。その顔は、どこか悲しげだった。

「ミカエルさま。もしや・・・・・・あの時のことを・・・・・・」

「ドミニオン。私がそんなに、弱く見えるのか？」

「いえ、決してそのようなことはございません・・・・・・」

「いや、いい。半分は当たっている」

ミカエルはゆっくり頭を振った後、顔を天使一同に向けた。

「ならばこのまま、地上の動きを監視しつつ、これからの行動を決

める。各自、情報収集を怠るな」
天使一同は「ハッ！！」と声を上げ、解散してそれぞれの持ち場に戻って行った。
「・・・・・『これからの行動』・・・・・か。いずれ我々も、観戦している訳にも行かなくなるだろうな・・・・・」
そのミカエルの予感はこの先、的中することになった。

―※＊※―

ほぼ、同時刻。ここは魔界、万魔殿（パンデモニウム）、悪魔たちの巣窟。宮殿の内部はだいぶ慌しかった。
「なんの騒ぎだ。これは・・・・・」
それに気付き、「ルシファーさま」と闇のように暗い紫の色をした服を着た、天使のような翼を持つ悪魔が答える。
「アスタロトよ。これはなんの騒ぎだと聞いている」
「はい。今、地上では大規模な争いが起こっています」
「わかっている。また地上に出て悪事を働く者がいるのだろう。まったく。我らのほうも取り締まりをしなければならぬか」
悪魔たちが住む魔界は、ある時、天界との話し合いで決めたことがあった。それは、『天界、魔界両方とも人間の住む地上界に手を出さない』こと。天使のほうは、お節介で手を出す者も少しはいたし、地上に少しばかり関わることが仕ことに含まれている天使もいたが、ほとんどのものはこの取り決めを守っている。だが、魔界の者、つまり悪魔たちのほうは、地上に出ては人間にちょっかいを出す者も多数いた。大魔王ルシファーはこれを取り締まるための部署を作り、地上に出ようとする者を未然に防いでいた。
「いえ・・・・・それが・・・・・」
アスタロトはそこまで言うと、周りを気にするように見渡した。

「ん？構わん。申してみろ」
「はあ、それでは。実は先日、地上界からこの魔界に不法侵入しようとする者がおりまして・・・・・未遂には終わりましたが、どうやらこの魔界に内通者がいるようです」
「なんだと？」
ルシファーが眉を動かした時、扉が開き山羊の角と頭を持つローブ姿の悪魔が入って来た。彼は下級悪魔の長、レオナール。
「ルシファーさまに報告！」
「何事だ？」
アスタロトが聞くと、レオナールは膝を折った。
「今しがた、〈転移の門〉が開き、何者かが侵入を試みました」
「何！？またか・・・・・・」
アスタロトの後、ルシファーが「フム」と呟いた。
「いずれ我らも係わらずにはいられんか・・・・・・それはさておき、内通者についても調べておかなくては、な」
それを聞いたアスタロトとレオナールは、「かしこまりました」と頭を下げた。

そしてそれから、半年が過ぎた。

第５３話　激闘の開幕

世界のどこにでもある商店街。今日も人々が行き交い、賑わっていた。電気店の店頭のガラス越しに置かれたテレビや、公共の施設に設置された巨大スクリーンが近年の世界情勢を映していた。突然、そのスクリーンに一瞬ノイズが入ったかと思うと、画面が一人の男が立っている映像に切り替わった。それを見た町の人々は、戸惑いの表情を浮かべながら、それを指差していた。

《・・・・・・・・聞くがいい！！愚かなこの世界の住人どもよ！！》

辺りに響き渡る男性の声。一部の町の人が周りを見渡すと、電気店の店頭に並んでいるテレビが、一斉に電波ジャックを受けていた。

《我らは〈デモス・ゼルガンク〉。神に変わり、この世界を修正する者なり・・・・・・！》

スクリーンを見ていた町の人の中に一斉に、戸惑いと不安が沸き上がる。

《この世界の住人どもは、今まで愚かな争いを続けてきた。いや、今もなお、こうしている時でさえ、世界は争いを続けている。ある者は限りある資源を奪い合い、またある者は自分たちこそが神の代弁者だと驕りから名乗り、虐殺を繰り返している》

その放送は各国の都市や議員の所は愚か、全世界のメディアを通じて放送されていた。もちろん、彼らに対抗するために組織された、〈ブレイティア〉が本拠地にしている〈名も無き島〉にも。

「こんな時に声明発表か。つくづく派手好きだな。あの男は・・・・・・」

クトゥリアがそう呟いてた間も、〈デモス・ゼルガンク〉首領、ソウセツが声明を続ける。

《国を治める者は、民を導く重役にいながらその責務を全うすることなく、民のため、国のためと言いながら格差を広げ、民を苦しめ続けている。腐敗した政治は、力のある貴族と同じく己の都合や身を第一に考え、弱い立場の者の声など全く耳を傾けていない。それどころか、平等であるはずの命を選別し、同じ命として見ようともせず、道具としてでしか見ようともしない》

「なんだ？急に話題が変わったような・・・・・」

〈エスペランザ〉の船内で、ミリアと共に小型テレビを見ていたユーリは、ソウセツの演説に違和感を覚えた。

《力の弱い者が異議を唱えれば、何かと言いがかりをつけて追放、ひどい時はその命を抹殺までする。所詮、指導者の地位など、自らと下の立場の者を見下し、虐げるためのもの。全ては己のためでしか過ぎんのだ！》

その時、ユーリの脳裏に魔女狩りの光景が浮かぶ。魔女狩りは、『魔女を捕まえ、世間の平和と秩序を整える』と言う大義名分の元で行なわれていたが、実際は教会が持っていた政治的地位を守るものでしかなく、ユーリもそれを感じていた。

《いつの時代でもそれは確実に起こり、どの指導者でも確実に起こしかねん、まさに指導者が常に持ちえる弊害だ》

平安京、黄龍殿の徳仁の部屋においてある小型テレビを見て、徳仁は溜め息をつく。

「やれやれ。世直しでもしようというのかね。この男は・・・・・・」

《それだけではない。力の弱い者を追いやり、挙句の果てにいわれのない罪を着せて抹殺まで行なう・・・・・知らぬ間に、国の重役どもに殺されている、弱き民がいるのだ!!》

それを聞いた途端、かつて朝廷軍が北へ追いやったエミシの民の存在が頭をよぎった。

《一つでも例を挙げれば、シャニアク国で江戸の者より、蝦夷の住民、琉球の民がそうだ。たった一国でも、三つの呼び名を作り出している。同じ体、同じ腕、同じ足、変わらぬ姿をしていても思想の違いだけで弾圧する!――だけでなく、同じ思想を持つ者でも、その中に一つでも違い部分があれば拒絶し、抹殺する》

後半にソウセツが言っていることは、普通の人間が半妖と呼ばれる、妖怪の血を引く人間を受け入れられない理由の一つでもあった。それを聞いた時、バツが悪そうに徳仁は笑みを浮かべた。

「・・・・・・・・・言ってくれるじゃないか・・・・・・」

《全てが同じ『人間』という存在であり、それぞれ違う『個』を持

っているにも拘らず、貴様らは何様のつもりでその『個』を否定し、己と違うものを抹殺しようとする》

エオホズ王が治めるアルスターでも、騒ぎになっていた。

「王！エオホズ王さま！！」

「わかっている。この放送のことだろ」

自室に駆け込んできた家臣に、エオホズは落ち着いた様子で答える。

部屋のテレビの画面はついており、中には演説中のソウセツが映っていた。

「見ておられたのですか！？」

「いや。どうやらこの放送は、強制視聴のようだ」

テレビのスイッチを押しても、画面が切れることはなかった。

「なっ！？しかし、いったいどうなって・・・・・・」

「わからん」

エオホズは肩をすくめた。その間にもソウセツは、《力の弱い人々が虐げられている》と演説を続けている。

「しかし、この男。いったい、何が言いたいのでしょうか・・・・・・？」

「一見すると、主張にまとまりがないように見えるが・・・・・・」

あごに手を当てるエオホズに、「・・・・・・が、なんですか？」と聞く。

「この男の主張、今の世界政府への不満に集中していないか・・・・・？」

「あっ。そう言われてみれば・・・・・・」

《人間どもが虐げているのは、同じ人間どもだけではない。森を切り開き、大地を崩し、海を埋め立て、空気や水を汚染する。貴様らの繁栄は、神や精霊たちを追いやり、星の命を削って築いているも

のだ！！》
「あっ。変わりましたね」

《この世界は神が創り、見守っているという考えもあるだろう。だが、我々はその理論を否定し、ここに宣言する。この世界を見守る神などいない。全ては幻だ。もし神がこの世界のことを気にかけているのなら、貴様らは即座に抹殺されている！！》

ブレイティア本拠地の会議室にいる神々も、この映像を見ていた。
「我らの存在否定まで始めたか」
「確かに今の時代、人間たちの世界を監視している神はいない」
ゼウスとオーディンが言うと、フレイも話に入る。
「確かその役目は、天使と呼ばれるものが引き受けてくれましたよね」
「だが、介入するまでには至っておるまい」と、オーディンが溜め息をついた。

《確かに存在しているのは、自らを神に置き換えた『人間の指導者』という偽りの神なのだ！！》

街でスクリーンを見ている人々の外れで、ジャケットを着た一人の青年、クウァルがそれを見上げていた。

「『人間の指導者と言う、偽りの神』・・・・・だと」

まるで憎しみを込めているかのように、画面を睨み続ける。

《よって・・・・・役目を放棄した神に変わり、我らはこのような不条理で醜い世界に終止符を打つ。そのためにも、この愚かな者どもの巣食う世界を終わらせなければならない》

不安にざわめく人々の外で、クウァルは静かに怒りの炎を燃やしていた。だが、その理由は彼にもわからなかった。

《我らが神、我らが正義などと、驕りが過ぎる寝言は言わぬ。だが！！我らの手によって、いずれ訪れる『審判の時』。その時までに、己らの犯してきた過ちを悔やみ続けるがいい！》

「・・・・・・・ふざけるな！」

クウァルが思わず呟いたその時、人ごみの後ろのほうにいる、メガネをかけた赤い髪の少女がクウァルのほうを振り向いた。クウァルはしばらく少女に見られていたが、視線に気付いてそちらのほうを向きその場を後にした。やがて声明発表が終わると、ノイズの後に画面は元通りとなる。集まっていた野次馬は、不安に煽られてざわめいていた。

―※＊※―

謎の声明を聞いた各国の代表議員たちは、皆、一斉に会議を開いた。

「いったい、何がどうなっているのだ！」

リタリー議員に、「私が聞きたいくらいだ！」とアストリア議員が叫んだ。

「それにしても、エスパニャとファンラスの代表者は来ないのか！」
「ファンラスは、政治実権を握っていた教会が崩壊し、今は指導者がいない状態だ。この会議に出席すること、自体が無理だろう」
冷静に言ったウェイス代表議員エンハムを、アストリアの議員は睨むように見た。
「だが、ファンラス側の代表がいないのはそれのせいだとして、なぜエスパニャの代表がいないのだ！！」
「アストリア代表議員殿。八つ当たりはやめていただきたい」
しかし、一見落ち着いているようにも見えるイグリース代表議員も、内心はひどく動揺しており、結局会議らしいことはできずに閉幕した。
「（腐敗した政治・・・・・・民を導く力もない・・・・・・全く、返す言葉もないな・・・・・・）」
イグリース議員は、心の中で皮肉に思った。

―※＊※―

エウロッパ大陸のとある町中で、突然爆発が起きた。人々が逃げ惑う間にも爆発が起こり続ける。その爆発の中心にいたのは、あばら骨のような物が背中から前に向かって生え、頭からは内側に湾曲した角が生えた、恐竜のような姿の怪獣。しかも、二本足で立って、周りに向かって口から赤い火の玉を吐いて暴れていた。
「グルラアアッ！！」
吼える度に怪物は腕や尻尾を振り回して暴れ、周りの建物を壊していく。その中で、果敢にも怪物に立ち向かって行く四つの人影があった。このエウロッパ大陸の警護についた小隊の一つ、セリュード率いる〈ブレイティア〉第三小隊だった。
「住民の避難はほぼ完了した。だが、だからって派手な技は控えろ

よ」
「わかっている、それくらい」
指示を出すセリューードにディステリアが叫ぶ。横に倒した天魔剣を右側に構え、光の力を溜める。ある程度制御はできるようになったし、痛みも小さくなった。だが、技として形を成すにはまだ荒く、そこはもう実戦で鍛えていくしかない。
「ルミナスランス！！」
突き出した天魔剣から光の槍が伸びて、暴れる怪物に向かって行く。だがその先には、怪物のほうには剣で切りかかっているクウァルの姿があった。
「うわっ！？何しやがる！！」
気付いてとっさに剣で弾いた後、急停止して怪物から離れる。同時に突っ込んでいたセリューードが相手をしている間、クウァルは思い当たる犯人・・・・・・いや、一人しか思いつかない犯人に向かって叫ぶ。
「またお前か！？ディステリア！！」
「それはこっちのセリフだ。なんで、俺が攻撃するところにお前がいるんだ！」
「お前、もう少し回りを見ろ！！」
「その言葉、そっくりそのままお前に返す！！」
攻撃をやめて言い争っている二人に、怪物が容赦なくテールスイングを放つ。とっさにクウァルがそれを受け止め、持ち前の怪力を発揮してそのまま怪物を開けた場所に放り投げた。
「ちっ、危なかった。お前のせいで、やられる所だったぞ」
「何言ってる！！邪魔している奴が被害者面するんじゃない！！」
言い争うクウァルとディステリアに起き上がった怪物が襲いかかろうとした時、
「いい加減いしないか！」
という声の後に、無数の小さな光の槍が怪物の体に突き刺さった。
「今は戦闘中だ。くだらないケンカなら、よそでやれ！！」

「そうだよ。必死で戦っている私たちには、返って邪魔なんだけど！」

セルスがそう文句を言っている間、怪物が振り下ろした爪をクリス・ウォールで防いでいた。怪物は何度も爪を打ち付けるが、二年の間に研鑽されたセルスの魔術で作り出された水晶へ気は簡単に砕けなかった。

「戦場では、私的な争いは邪魔にしかならん。続けるのなら、よそへ行ってくれ！」

攻撃を防がれて逆上した怪物は後ろに飛び、水晶壁の横に飛び出したセリュードに向けて突進した。それに合わせてセルスが右手をかざし、詠唱で集めたマナを変化・解放する。

「プリズン・クリュスタロス！」

叫び、怪物の足元から生えた水晶の柱が動きを止める。二年前と違い、敵を多い閉じ込める形ではない。ただ動きを阻害するだけの形だが、これのほうが集めるマナの量も今のセルスが必要とする集中力も少なくて済む。

「リヒト・ランス！プラス、リヒト・フィスト！」

何より、味方が追撃をかけやすい。待っていたセリュードが、槍を構えて作り出した光の槍に光の拳を打ちつけ、ミサイルのように勢いをつけて放った。動けない怪物の胸を槍が貫き、絶命と共に体を消滅させた。同時に、マナの拡散により水晶の柱は消滅した。

「絶命と共に消える・・・・・と言うことは、あの怪物もマナで構成されているのか？」

「さあ。でも、少なくともその可能性はあるんじゃない？それよりも・・・・・」

セリュードとセルスが深く溜め息をついた後、いまだ睨み合っているディステリアとクウァルの所に歩いていく。

「二人ともいい加減にしなさい！小さな子供ならまだしも、いい年をしてケンカなんて情けない！！」

「だってよ、こいつがいつも邪魔するんだぜ」

不満を口にしたディステリアに、「なっ！！」とクウァルが声を上げる。
「今度は俺がお前にそのまま返すぜ。邪魔しているのはそっちだろ！」
「なんだと！？」
「いい加減にしなさい！」
そのまま睨み合う二人に叫ぶセルス。その様子に、セリュードは呆れて顔に手を当てた。とそこに、武装した一団が向かって来る。謎の怪物出現の情報を聞いた地方の防衛部隊が駆けつけたのだった。
到着すると同時に、即座に回りの状況を判断した。
「これはいったい、どういうことだ。暴れている怪物というのは・・・・お前たちではなさそうだな・・・・・・」
「当たり前だ」
ディステリアが掴みかかりそうになったが、それと同時に兵士たちが武器を構え、一触即発の状態となる。
「まあ、待て。貴殿ら、見た所どこかの部隊に所属しているようだが、何者か示してもらいたい・・・・・・」
「イルム隊長、しかし」
そう言う男に部下らしき男が呟く。しばらくどうするか悩んでいたクウァルたち三人だが、三人より先にセリュードが進み出た。
「我々は、世界で起こっている不可思議事件に対抗するべく設立された組織、〈ブレイティア〉に属する者です。現在は、〈デモス・ゼルガンク〉と名乗る組織に対応して動いています」
「〈ブレイティア〉・・・・・・ねえ・・・・・・」
あごに手を当てて唸るイルムの様子に、セリュードは彼が疑いを持っているとすぐ察した。それは無理もない。〈ブレイティア〉は急ごしらえの組織に近く、世界連合政府直轄と言っても発表後も世間からの信頼は小さい。
「・・・・・・まあ、住民を救ってくれたことには変わりないんだ。今日はこれで勘弁してやる・・・・・・」

後ろを振り向き、「撤収！！」と声を上げる。
「ハ・・・・・・ハッ」
部下たちは敬礼したが、ほとんどの者はこのまま撤収することに納得していない顔をしていた。
「どうして撤収なのですか。もしかしたら奴らが・・・・・・」
「そうかも知れない。だが、その証拠はないし・・・・・・」
「しかし、彼らが〈デモス・ゼルガンク〉なる組織と無関係とも・・・・・」
別の兵士が言いかけると、イルムは表情を険しくする。
「現段階ではなんとも言えない。それが現状だ・・・・・・」
実の所、この頃の忙しさもあり、イルムも〈ブレイティア〉という組織名は始めて聞いた。全貌を掴めない〈デモス・ゼルガンク〉に対抗してくれるのなら願ってもない話しだが、今の段階で信じる要素はどこにもなかった。
「（さて・・・・・・敵と味方・・・・・・どっちだろうな・・・・・）」

―※＊※―

《そうか、早速そうなったか》
「はい」
宿屋でクトゥリアに報告の通信し、とセリュードは頷いた。
《・・・・・現地の治安部隊と協力を得られれば、こちらとしても動きやすくなる。だが、あちらを納得させられるような情報を、我々は持ち合わせてないと言わざるをえん》
「今のところ政府直轄となっていますが・・・・・・急に信頼しろと言っても、難しいと思います？」
《だろうな。現に発足はしたが、不要論と疑念を持つ者は連合政府

本部の中にもいるらしい》
相も変わらず皮肉を込めた発言をするクトゥリアに、セリュードは同感と思いながら頭を悩ませる。
《我々は今の人間社会にとって理解不能な技術を使っているだけでなく、幻獣たちも仲間に加えている。それは我々に、様々な任務に対応できるという強みであると同時に、弱みでもある》
「弱み・・・・・・畏怖の対象となる神々や幻獣の力を持っている・・・・・ということですね」
《そうだ。今の人間は、幻獣という存在と共生できるとは、おとぎ話の中でしかありえないと思っている》
「実際そうなのですが・・・・・その大多数は『人間中心の社会主義』が原因だと思います。人間は、自分たちが選ばれた民なのだから何をしようと勝手だ、という身勝手な感情がありますから・・・・」
《そうだな。その人間の身勝手さも、〈デモス・ゼルガンク〉は非難していた。だが、同時に彼らはうぬぼれている》
「うぬぼれて・・・・・・？それって、どういう・・・・・・」
その時、町の外れのほうから獣の咆哮のようなものが聞こえてきた。
《どうやら、また出たようだな。可能な場合でいいから、その怪物の体組織か何かをサンプルとして回収してくれ》
「わかりました。回収できたとして、そのサンプルを届ける者は・・・・・？」
《ヴァルキリーか誰か、足の速い者に頼む。とにかく、そちらも無茶はするなよ》
セリュードは「わかりました」と答え、通信を切った。
「さて。買出しに出ているディステリアとセルスに報せないと」

第５４話　三人だけの戦い

その頃、食料の買出しと情報収集に歩いていたクウァルも、先程の咆哮は聞いていた。
「今はまだ遠い・・・・・だが、いつ近くに来るかわからない」
クウァルはすぐに現場へ駆けつけようと駆け出したが、彼の前にこげ茶色のマントに身を包んだ人影が飛び降りて来る。とっさにジャンプで後ろに下がって、身構えたクウァルは警戒した。
「何者だ？」
「クウァル・ハークルス。あの子の恨み、覚悟・・・・・・！！」
少女のような声の後、いきなり短剣を振って襲いかかってくる相手に、クウァルは戸惑っていた。
「くっ・・・・・何者だと聞いている・・・・・」
攻撃を捌き、思い切り蹴り飛ばす。腕の痛みに顔を歪めていると、クウァルが再び問いかける。
「何者か知らぬが、お前に恨まれる覚えはない」
それを聞いて、相手はフードの下で眉を動かした。
「ラドンを殺した・・・・・ヘラクレスの血を引く者・・・・・・」
目を見張って驚くクウァル。彼の血筋を知るのはセルスとブレイティアのメンバーだけで、それ以外の者で可能性があるのは。
「――――！？デモス・ゼルガンク・・・・・・」
「私は・・・・・ヘスペリア」
相手がフードに手をかけ、名乗りながら後ろに下ろすと、下から金髪を持つ少女の顔が現れた。風になびく髪を見て、クウァルは唖然

としていた。
「どういうことだ。お前はいったい・・・・・・・・」
ヘスペリアが冷徹な目を向けると一瞬、彼女の姿が消え、突然クウァルの目の前に現れた。一瞬驚くが咄嗟に腕を交差させてガードすると、とてつもない衝撃の後にヘスペリアの体が大きく飛ばされた。
「（あちらの攻撃力は強いが、それに耐えられるだけの土台はないか）」
クウァルに向かってヘスペリアは攻撃を仕掛け続ける。だが、彼は足腰にしっかり力を込めて攻撃に耐え、攻撃を捌き続ける。
「お前の名前は聞いたことがない。何者なんだ？」
「黙れ！！」
クウァルに叫んだヘスペリアは、彼の体を大きく蹴り飛ばした。今までの攻撃とは違う重い一撃に、歩道の上に膝を突く。
「ゲホッ！？」
咳き込むクウァルの腹に容赦なく蹴りを入れる。激昂した直後からヘスペリデスの一撃は、嘘のように重くなっている。右から振られた腕の一撃を流し、殴りつける左腕を捌く。動きからして素人だと考え、次は足の一撃が来ると思ったが、そこが判断の甘さ。体を回したヘスペリデスが回転の勢いを乗せた腕を振った。
「うおっ！？」
とっさに身を屈めてかわしたが、次の瞬間あごに衝撃が走る。屈む動きに合わせて繰り出された膝蹴り。向かって来る勢いが合わさり、非力なヘスペリデスの蹴りの威力を返って増大させた。
「ガハッ・・・・・・」
仰け反ったクウァルに容赦なく踵を落とす。体勢を崩した状態でもろに食らい、地面に叩きつけられた。
「くっ・・・・・お前、いったい・・・・・・」
自分の足を掴んでいるクウァルを、ヘスペリアは冷たい表情で蹴り上げた。
「かはっ」

呻き声を上げて再び歩道に落ちると、彼女はゆっくりとクウァルに近づいた。
「逆恨みだと思われても構わない。あなたの命で、あの子が蘇るのなら・・・・・・」
クウァルの頭を掴んだ時、「（本当？）」と頭の中で自分の声がした。
「（本当に・・・・・・これでいいの・・・・・・？）」
彼女が戸惑った隙を突いて、クウァルは残りの力を振り絞ってヘスペリアを蹴飛ばした。すぐに両腕でガードしたが、その衝撃は体全体を駆け巡った。
「く・・・・・・まだ、こんな力が！？」
思わぬ反撃に、ヘスペリアは着地した後もすぐには攻撃に移らなかった。クウァルの反撃を警戒してのことだが、彼女にはもう一つ戸惑う訳があった。
「（どうしても・・・・・・非情になれない・・・・・・）」
そのまま何もできないでいると、「どうした」と男の声がした。
「カイネ・・・・・・やっぱり私には・・・・・・」
「できないか？」
姿を見せないまま声がすると、ヘスペリアが震えながら頷く。
「・・・・・・まあいい。だが、その男は君自身の手で倒さなくては意味がないんだ。そいつの甘さに助けられたな、クウァル・ハークルス」
「待て」
痛む体を起こしながら呟くクウァルに、カイネと呼ばれた存在は冷たい声で聞き返す。
「何さ、死に損ない」
「姿を・・・・・・見せろ・・・・・・」
「断るよ」と、カイネの声だけが答えた。
「自分の立場がわかってないようだな。お前は負けた。本当ならもう死んでるんだ。だから質問をする資格もないし、こちらも答える

義理はない」
「ふざけ・・・・・・」
クウァルが言いかけると、「資格といえば」とカイネがさえぎった。
「お前ら人間は、いったいなんの権利があって『人間』以外の種を追いやってるんだ。彼らの住処を奪っておきながら、いったいどの面下げて、土地に戻ってきた動物たちを『害獣』と言えるんだ？」
息も絶え絶えに聞いているクウァルに、「だいたい・・・・・・」と続ける。
「ろくになんの力も持ち合わせていないのに、同族同士で特別な力を持つ者には嫉妬するなんて、バカらしいもいい所だ。お前らは『滅ぶべき種』なんだよ」
悲しそうな表情のヘスペリアに「行くぞ」と命令すると、彼女は素直に従いクウァルに背を向けた。
「待て・・・・・・ぐっ・・・・・・」
追いかけようとしたが体の痛みに襲われ、アスファルトの上に倒れこんだ。薄れ行く意識の中、ヘスペリアの後ろ姿を向けたまま、闇の中に消えて行った。

―※＊※―

獣の咆哮を辿って、町外れの丘にやって来たセリュードは辺りを捜索していたが、怪しいものは何一つ見つからなかった。
「おかしいな。確かにこの辺りのはずだが・・・・・・」
後からやって来たセルスとディステリアも捜査に加わったが、目ぼしいものは何も見つからずにいた。
「確かに、何かの吼え声は聞いた。だが、それよりも・・・・・・」
ディステリアが何かを言いかけたその時、三人の前に突然、地面から腹がムカデのような形のクモが飛び出してきた。

「獣じゃない！？」と、驚くディステリア。
「これは・・・・・どういうことだ！？」と、セリュードも目を見張る。
「ガギャアァァァァッ！！！」
クモとムカデをあわせた形の怪物は吼え声を上げ、セリュードたちに突進して襲い掛かってきた。連続で振り下ろされる左右八本の足が地面を砕くが、三人は全てかわしきっていた。
「どうなっているんだ、これ！？」
「どうやら・・・・・俺たちはこいつらの仲間に誘い込まれたようだ」
「それじゃあ、私たちはまんまと罠にはまったってこと！？」
状況を理解しきれないセリュードたちに、怪物は容赦なく攻撃を仕掛ける。
「このまま逃げ回っていても、埒があかない。行くぞ！！」
「「了解！！」」
ディステリアとセルスが返事をする。セリュードが槍を取り出すと同時に突っ込み、その隙に特殊な魔法をかけたアクセサリー型のお守り、タリスマンからディステリアは天魔剣を、セルスは魔術師が使う杖を取り出した。そうとは知らない怪物は、目の前に突っ込んできたセリュードに攻撃を集中させる。
「はあああっ！！」
槍の穂先と柄をフルに使って、敵の攻撃を捌く。高速で八本の足が繰り出す攻撃を、セリュードは素早い槍捌きで弾き続ける。八本全ての足が弾かれた、わずかな一瞬。
「凍えろ、冷たき吹雪の洗礼！ブリザードランサー！」
杖を振ったセルスの魔術。吹雪に押された大きな氷柱が怪物の腹に当たって砕ける。貫くどころか殻すら砕けなかったことに少し悔しさを感じるが、吹雪に混じっていたのは氷柱だけではない。
「うおおおおおおおっ！！！」
そこにディステリアが天魔剣を振り上げて斬りかかった。

「ギィッ！？」
奇襲に気付いて頭を上げた瞬間、攻撃が止まった足の間を潜り抜けてセリュードが飛び込んだ。槍の柄を押し込んで変形させたスピアを敵の腹に思い切り突き刺し、それと同時に斬りかかったディステリアが怪物の頭を切り落とす。
「ギャ・・・・・ゴッ・・・・・・」
一瞬、倒したかと思ったが、切り落とされた首の下から怪しげな光が灯る。
「なっ！？」
驚くと同時に乾いた音がして、セリュードがスピアで貫いた部分が砕ける。先ほど切り落とした頭の下には別の顔が隠れており、ディステリアたちの驚きが冷めないうちに怪物の上半身と下半身が分離した。
「こいつら、分離した！？」
「いや、違う。元々二体だったんだ」
冷静を保つセリュードのスピアが抜いた体が音を立てて砕けると、そこには内臓らしき物は愚か骨もなかった。二人がそれに驚いている隙に、上半身のクモのような怪物と、下半身のムカデのような怪物が同時に襲いかかる。だが攻撃が入る瞬間、
「ファイヤーウォール！！！」
セルスの声と共に、彼らの間に炎の壁が割り込んだ。
突如、割り込んできた炎の壁を、ムカデ型の怪物はかわすことができずに突っ込み、瞬く間に全身を炎に包まれた。
「ガギャアアッ！！！」
上半身だったクモ型の怪物は間一髪で、クモにないはずの半透明な羽を広げて、空中に逃れた。だが、そこを天使の翼を広げて待ち伏せしていたディステリアが天魔剣を振り下ろす。
「ギョオッ！！」
前足二本で防ごうとするが、激突直後にディステリアが天魔剣を振り上げ、その足を弾く。続けて天魔剣を振り下ろすが他の二本がそ

れを防ぎ、残り四本が横からディステリアに襲いかかる。
「――セルス！！」
「やったことないけど・・・・・うまくいって！！」
セルスが杖の先端を向け、「クリス・ウォール！！」と叫ぶ。ディステリアの両側に水晶の壁が現れ、クモの怪物の足を変わりに受ける。
「（やった、防げた！）」
だが喜んだのもつかの間、その水晶の壁は簡単に貫かれていることに気付く。セルスは最悪の状況を思い浮かべたが、その時すでにセリュードは走り出していた。
「落とせ！！」
「どりゃあああああああっ！！」
翼を羽ばたかせて突っ込み、思い切り天魔剣を振ってクモ型の怪物を地面に落とす。走っていたセリュードは飛び上がり、強く握っていた槍を振り下ろした。クモ型の怪物の右側の足を二本切り落とし、体勢を崩したところに落下して来たディステリアが天魔剣で腹部を狙った。横薙ぎに振った天魔剣をクモ型の怪物は足で防ごうとしたが、ディステリアはその隙間に天魔剣を捻じ込み、体全体を使って振りきった。
「どうだ！！」
だが、振り切った勢いで防御が解けた足の向こうには、無事な胴体部分があった。
「何！？」
「すぐ離れろ！」
後ろに下がったセリュードが声を上げ、一瞬呆けたディステリアも後ろに下がる。クモ型の怪物が反撃しようとするが、
「ファイアボール！！」
そこにいくつもの火の玉が飛んできて、怪物の攻撃を邪魔する。
「リヒト・ランス！」
セリュードの突き出した槍から飛んだ光の槍を、振り向きざまにク

モの怪物が払う。二発目のリヒト・ランすも、連続で突き出される足に掻き消される。が、セリュードたちに焦りはない。クモの怪物の後ろでは、雲に隠れた月を背にディステリアが天魔剣を振りかぶっていた。生物レベルの本能がそれを察して振り返るが、遅かった。

「テネブラエセイバー！！」

天魔剣に集中させた闇の魔力が溢れ、巨大な刃で形成してクモ型の怪物を一刀両断した。縦に切られた体が地面に落ちる頃に、ディステリアも着地して翼をしまった。敵がいなくなっても警戒を解かないでいると、セルスのファイヤーウォールで焼かれたムカデ型の怪物に近づいて、何かをしているセリュードを見て眉を寄せる。

「何してるんだ？」

振り返ったセリュードは、「えっ？ああ」と彼のほうを見る。

「クトゥリアさんにこの怪物のサンプル回収を頼まれていて。それで、皮膚の一部でも、と・・・・・・」

「そのサンプルとやら、こちらに渡してもらいましょうか」

三人が振り向くと、昼間に会ったイルム率いる防衛部隊が銃を向けながら、セリュードたちを取り囲んだ。

「何しやがるんだ、てめえら！！」

叫んで前に出ようとするディステリアに、銃を向ける兵士たち。激突を避けるために、セリュードがディステリアを腕で押し止めた。

「今、彼らと激突するのはまずい。ここは堪えてくれ」

「だが・・・・・・」

「押さえるんだ！」

反論しかけるディステリアに声を落として強く言った。その間にも、治安部隊の兵士は彼らに倒された怪物の遺体を回収しようと取り囲む。その様子を黙ってみているディステリアは、部隊を指揮しているイルムを睨みつける。

「・・・・・何が言いたいかは、だいたいわかる。だが、こちらも上層部の命令だからね。君たちも軍事組織の者なら、それくらい理解できるだろう」

「こちらの目的は、あくまで『防衛』です」
落ち着いた声でセリュードが返す。『上層部の命令』と言う言葉に一瞬、ディステリアは強い憤りを感じたが、次の瞬間にはそれは疑問に変わっていた。
「イルム隊長。サンプルの回収、完了いたしました」
「そうか、ご苦労」
イルムが言うと、銃を構えている兵士の一人が不満に満ちた表情でディステリアたちを見る。
「こいつら、どうしますか」
「彼らについてはなんの命令も受けていない。このまま撤収する」
「り、了解・・・・・・」
またも納得できないと言わんばかりの顔をして銃を下ろして、そのまま部隊は撤退して行った。
「くそっ、あいつら・・・・・・」
「まあ、怒ってもしょうがないことだ」
怒り心頭のディステリアをセリュードがなだめる。
「悔しくないのかよ!?俺たちが苦労して倒した奴を横取りされて!!!」
「そりゃあ、悔しいけど・・・・・・でも、私たちが彼らとトラブルを起こしてここの軍と連携取れなくなったら、それこそ敵の思う壺じゃない」
セルスにそう言われて「ぐっ」と黙り込むディステリア。
「それに、な」
意地悪そうな笑みを浮かべたセリュードが、懐から何かのかけらが入った小さなガラス瓶を取り出す。
「必要なサンプルは。すでに取っていたんだよ」
それを聞いて、「何ぃ〜!?」と驚くディステリア。
「な・・・・・・なんでそれ、黙っていたんだよ」
「ディステリアだと、間違いなく顔に出るからね」
「知られたら取り上げられるかもしれなかったんだ。黙ってて悪か

ったな」
「あ、そう・・・・・」
笑うセリュードに言い返して、ディステリアは顔を逸らす。「だが、そんな少ない量で大丈夫なのか？」
「分析は本部で行うことになる。ヴァルキリーたちが運ぶことになるらしいし、あまり量が多いと大変だろう。それに・・・・・」
サンプルの入ったカプセルをポケットに入れ、セリュードは続きを言う。
「あれだけの量、帰って持て余すのは目に見えている。しばらくすると分解されるみたいだし・・・・・」
「そいつに入ってる間は大丈夫なのか？」
「例え分解しても、残存物を分析するから問題ないんだと」
「ふーん」と声を漏らし、ディステリアは顔を逸らす。しかし、まだイライラしている様子の彼に、セルスは首を傾げる。
「どうしたの？」
「なんでクウァルの奴は来てないんだ！？サボり！？サボりか！？」
「いや～、それはどうだろう」
「いいや、そうだ・・・・・絶対そうだ」
少し呆れた顔で言うセリュードに、ディステリアは断固として譲らなかった。すると、彼の上着ポケットに入っている携帯電話が鳴り出す。
「なんだ？この番号はクウァルか。全く・・・・・」
ディステリアがふたを開いて電話に出るなり、
「おい、クウァル。何やってるんだ！？」
《きゃあ！？びっくりした～・・・・・》
怒鳴ると向こう側から少女の声が聞こえてきた。それにディステリアが目を丸くすると、様子が違うことを察したセルスとセリュードも彼を見る。
《あの・・・・・この携帯の持ち主は、クウァルさんって言うんですか・・・・・？》

思わぬ質問に首を傾げるディステリア。そうとは知らないセリュードとセルスは、顔を見合わせた。
「確かにクウァルなら、遅れる場合は連絡を入れるだろうが・・・・・遅すぎないか？」
「そう言えば、確かに。クウァル、外せない用事ができたら、報せることが多かった・・・・・・」
二人が気付いたちょうどその時、「なんだって！？」とディステリアが声を上げた。
「場所は・・・・・・今、あいつはどこにいるんですか？」
《えっと・・・・・・町の病院・・・・・・大通りを北に真っ直ぐ行って、自然公園の近くにあります》《わかった。すぐに向かいます。あなたの名前と、目印になる物を教えてください」
《えっと・・・・・・フェルミナ・・・・・・フェルミナ・サンカルナ。髪を長く伸ばしていて、メガネをかけているので、それを目印にしてください》
「・・・・・・長く伸ばした髪・・・・・・メガネ・・・・・・わかった・・・・・・」
電話を切ったディステリアに、セリュードとセルスが駆け寄る。
「お前の聞き方・・・・・・ちょっとばかり変だったぞ・・・・・・」
「うえっ！？マジで！？」と、ディステリアが悲鳴を上げる。
「うん。言葉も敬語と混じってて、少し変だったし・・・・・・」
「まあ、知らない奴に馴れ馴れしく話しかけるのもどうかと思うし・・・・・ディステリアなりの他人との接し方なのだろう」
「でも、ねえ・・・・・・」とセルスが苦笑いする。
「とにかく、クウァルは病院にいるんだろ？どの道、いくしかないだろう」
ディステリアとセルスは顔を見合わせて頷くと、クウァルがいる病院へ向かって行った。

第５５話　双子の妖精

「とにかく、クウァルは病院にいるんだろ？どの道、いくしかないだろう」
ディステリアとセルスは顔を見合わせて頷くと、クウァルが収容されている病院へ向かった。夜の町中を疾走するセリュードたち三人は、教えられた自然公園に差し掛かる。そこから周りを見渡すと、緑の丘の向こうに病院らしき建物が見えた。
「あった。あれだ・・・・・・」
「本当なの？」
「疑うのか！？」
セルスが疑わしそうに聞くと、ディステリアが聞き返した。
「町の北にある、自然公園の向こう。あれに間違いない」
「ともあれ、いけば確実にわかる」
セリュードが言って中に入ると、病院のロビーにあるソファーの一つに、赤い長髪を下に下ろした一人の少女が座っていた。
「あの子か・・・・・・？」
そう思ったディステリアが近づくと、少女の目が彼を見上げた。
「ちょっと、すまない。聞きたいことが・・・・・・」
だが次の瞬間、少女の目が鋭くなると、いきなり右腕を伸ばして左の襟を掴んだ。とっさにディステリアは、その手首を掌で叩いて離れさせるが、その時にはすでに体を倒した少女のハイキックがディステリアの頭に向けて放たれていた。
「（なっ・・・・・・！？）」
とっさに上体を反らしてかわすが、蹴りが掠った頬の前側が切れて血が出た。

「なっ――――にするんだよ！いきなり！」
「ちょっと、ここ病院なんだから静かに」
その叫び声を聞いてセルスが注意すると、「うっ」と呟く。
「おい、お前・・・・・・」
そんなディステリアに、蹴りを見舞った少女が険しい表情で話しかける。
「お前が、さっき電話に出た奴か・・・・・・？」
「あ、あれ？電話の奴と・・・・・・違う？」
電話の時と違う声に、ディステリアは戸惑う。
「え？どういう・・・・・・」
呆気に取られるディステリアにセルスが言いかけるが、そこにまた少女が蹴りを放って襲ってきた。
「うわっ！何するんだ！？」
「うるさい。妹を怖がらせた罰だ！」
「ちょっと、二人とも。ここ病院なんだから、もう少し静かに・・・・・」
セルスがなだめようとすると、「そのとおりです！」と厳格そうな顔の看護婦が注意してきた。
「あなたたち、患者さんの迷惑になるでしょう！」
「「す・・・・・すいません」」
怖い顔で睨まれ、頭を下げる二人。その看護婦の気迫に、側にいるセルスも震え上がった。
「フェルミナちゃん。いくらなんでも、初対面の人をいきなり蹴るのは良くないわ。危険だし、何よりあなたの印象を悪くするわ」
「ハイ、気をつけます」
注意されて頭を下げる少女に、ディステリアは首を傾げた。
「フェルミナ？」
その瞬間、今度はディステリアのほうを向いて指差した。
「あなたもあなたです！友達の携帯からかかってきたとはいえ、いきなり怒鳴るとはなんですか。もっと人との付き合い方と言うもの

を・・・・・」
受付から話を聞いたセリュードが戻った時には、ディステリアはガミガミ叱られていた。
「なんだ?どうしたんだ、こりゃあ・・・・・・・」
「ええ・・・・・・と」
苦笑いしながら呟いたセルスから事情を聴くと、セリュードも苦笑いした。
「そうか。だが、いい機会だ。ディステリアにはしっかり、人との付き合い方を覚えてもらおう・・・・・・」
心の中で「すまない」と謝りながら、セリュードとセルスは病室の中に入ろうとした。
「ちょっと、何してるの」
中からした慌てた少女の声に顔を見合わせ、急いでドアを開けた。
メガネをかけた赤い長髪の女の子と、包帯が巻かれた体にシャツを着ようとしているクウァルの姿があった。
「ちょっと、クウァル。あんた、何してるのよ」
「見ればわかるだろう」
入ってきたセルスを見て一言だけ言うと、裾を下ろしたシャツの上に厚手の服を着た。中にいた少女とセルスが唖然としていると、セリュードが口を開く。
「おいおい。かなりの重傷だと聞いたが、本当に大丈夫か?」
「なんでもないですよ。それより一端、出てもらえませんか?着替えができないんですけど・・・・・・」
「着替えができないって、その子の前で思いっきりしてるじゃない!!」
「そいつがいることに、気付かなかっただけだ」
怒鳴るセルスに、クウァルは頭を抑えて溜め息交じりに言った。
「とにかく、出て行ってください。ほら、君も」
「は、はい・・・・・・」
いきなりクウァルに促されて出て行きかけたが、「待ちなさいよ」

とフェルミナが進み出た。
「あんた。助けてやったあたしの妹に、『出て行け』はないでしょ。助けてやったんだから、黙って傷を治したら？」
「それなら心配ない。もう治っている」
フェルミナを睨んで言うクウァルに、「どれどれ？」とセリュードが腹の辺りをさわる。
「ぐっ！？」
セリュードの指先が触れた直後、苦しそうな呻き声を出してクウァルが顔をしかめた。
「おや。治ったと言った割には、結構苦しそうだな」
触られた部分を押さえて、「てめえ・・・・・・」と睨みつけるが、セリュードは平然としている。
「無理して動くことはない。しばらく休んでいろ」
「し、しかし・・・・・・」
「いいから休め」
クウァルは言いかえそうとするが、それをセリュードはそれを抑えた。

―※＊※―

それから三人は、フェルミナと一緒に病院の外を歩いていた。ディステリアは「なんで場所を移すんだ」と文句を言ったが、セルスがそれをなんとかなだめた。
「俺たちが不審者だった場合、すぐに逃げて助けを呼ぶため。病院の中じゃあ、携帯電話が使えないからな」
両手をポンと叩いて、「そうか」と納得するセルスに対し、ディステリアは首を傾げた。
「えっ？どうしてだ？」

「あのねぇ・・・・・病院にある電子機器は、携帯の電波の影響を受けやすいの。患者さんに治療をしている時に機器が問題を起こしたら、大変なことになるの。だから、携帯電話とか電波を放つ物は、病院内ではスイッチを切ってなければいけないの」
「そう言えば、イグリースの詰め所の医療エリアは、電波を発信する機械自体持ち込み禁止だったな・・・・・」
「普通、重要な医療機器が置いてある所は、そういうことになっている。だから、いざ携帯を使う時にすぐに使える場所に移った。そうだろ?」
セリュードが聞くと、「ええ。そんなところよ」とフェルミナは答えた。
「だが、俺たちから逃げるためなら、病院の中のほうが有利なんじゃないのか?」
「なんですって」
ディステリアの言葉に睨みを利かせるフェルミナに少し引くと、セリュードが「いやいや」と言う。
「病院内を走るのはご法度なんだよ。走っていて、運んでいる薬や患者への食事をばら撒いてしまったら問題だからな」
自然公園に差し掛かった所で、「さて」とセリュードが言うと、四人は立ち止まった。
「遅くなったが、とりあえず自己紹介だ。俺はセリュード・クルセイド」
「あたしはセルス・セオフィルス。クウァルとは、同じ町に住んでいた幼馴染なの」
「ディステリアだ。とりあえず、友達が世話になったな」
その言葉が出た一瞬に、セルスはディステリアのほうを向いて目を見張った。
「・・・・・仕方ないだろ。俺たちの存在はまだ極秘なんだろ・・・・・だったら、『仲間』って下手に言えないじゃないか・・・・・」

「それはそうだけど・・・・・・ここまで世渡りが下手とは、思わなかったわ・・・・・・」
呆れるセルスに「なんだと!?」と怒鳴りそうになったが、なんとか堪えることに成功した。
「私は、フェルミナ・サンカルナ。クウァルって人を見つけたのは、妹のシェルミナよ」
「・・・・・・双子・・・・・・しかも、強い妖精の力を引き継いでいるな・・・・・・」
ディステリアとセルスが驚くと共に警戒するフェルミナだが、
「セリュードと同じ!?」
「えっ?同じ?」
思わずディステリアが叫んだので、思いの他早く警戒を解いた。
「今回は、君のおしゃべりに助けられたね」
「・・・・・・悪かったな。おしゃべりで・・・・・・」
不愉快そうな顔で頭をかいていると、フェルミナがセリュードに近づいた。
「あなたは・・・・・・本当に・・・・・・?」
「信じられないのも無理はない。だが、ぼんやりとならわかるはずだよ」
差し出した右手の指先がセリュードの右手に触れると、「・・・・・・本当だ」と呟いた。
「でも、どうして?妖精の血を引いているのに、どうしてその人たちといるの・・・・・・?」
「くぉら、喧嘩売ってんのか!!」
「まあまあ」
唖然としているフェルミナにディステリアが怒鳴ったが、それをセルスがなだめた。
「だって、そう簡単に信じられる訳ないでしょう。異種族の血が混ざった人間を受け入れられるなんて、そんな人、見たことも聞いたこともないわ」

だが、それを聞いたセルスは、前にアポリュオンが言っていた言葉を思い出した。

〜―回想―〜

「世界はまだまだ広く、人間はその全てを知らない・・・・・・というだけですよ」

〜―回想終わり―〜

暗い表情をしているセルスに気付くと、それを見たディステリアは首を傾げていた。

「どうしたんだ、お前？」

「えっ？ううん。なんでもない・・・・・・」

セルスは一端笑顔になったが、すぐにまた暗い表情となる。

「信じる、信じないはそちらの勝手だが、俺は確かに妖精の血を引いているし、そのおかげで辛い目にもたくさんあった。だけど、俺はその先に認めてくれる人に出会い、共に歩める仲間に出会えた・・・・・」

「・・・・・仲間・・・・・・・・に・・・・・・・・」

「フェルミナ？」

とそこに、男の声がした。その声にフェルミナは振り向いたが、セリュードたち三人は一瞬で表情が厳しくなった。それもそのはず。その声の主は、彼らが倒した怪物のサンプルを横取りした部隊を率いていたイルムだった。

「お父さん♪」

「「「ええ〜っ！？お父さ〜〜〜ん！？」」」

「おいおい、そこまで驚くか」

イルムがフェルミナの父とわかった瞬間、驚いて声を上げた三人に、当の本人は苦く笑った。が、それもほんの一瞬のこと。すぐに三人

を見る目が鋭くなる。
「まさか、君たちまでいたとは。何が目的だ・・・・・・？」
「てめえ、どういう意味・・・・・・」
「やめろって」
疑いの目を向けるイルムにディステリアが睨みつけるが、セリュードが抑える。
「企むも何も、何もないですよ」
「心配しないで、お父さん。この人たちも妖精・・・・・・」
だが、「お前は黙っていろ」と睨まれると、フェルミナは体を震えさせて怯んだ。
「・・・・・妖精の血が混ざっている・・・・・そう言って、娘に近づくつもりだったのか・・・・・？」
殺気とも言えるプレッシャーを放って睨みつけるが、体を震わせたのはセルスだけで、セリュードとディステリアは耐え切っていたどころか、逆にプレッシャーをかけていた。
「（す、すごい・・・・・お父さんに睨まれて・・・・・ビクともしないなんて・・・・・）」
だがやがて、「まあいい」とプレシャーをかけるのをやめると、二人も睨み返すのをやめた。
「フェルミナ。彼らには近づかないほうがいい。シェルミナにも、そう伝えなさい」
「で・・・・・でも・・・・・」
搾り出した声で言いかけるが、「いいな！！」と怒鳴られて、ビクッと体を震わせる。
「わかった・・・・・」
頷いたフェルミナを見て、「おい」とディステリアが口を出す。
「てめえ。今の、父親としてないんじゃないか！」
黙っているイルムに、「おい！聞いて・・・・・」と言いかける。
「貴様に・・・・・」
歯軋りの後に聞こえてきたとても重い声。イルムは再びディステリ

アを睨む。
「貴様なんかに・・・・・・私たちの何がわかるというんだ・・・・・・！！」
先程とは比べものにならないほどのプレッシャーが圧し掛かるが、今度もディステリアはものともしない。一瞬でプレッシャーが消えた後も、二人は睨み合っていた。
「二人とも、それくらいにしろよ。無駄に時間を流すだけだ」
セリュードになだめられてもしばらく睨み合っていたが、二人同時に目を逸らした。
「確かに、今こうして時間を浪費している場合じゃない。シェルミナは病院なんだろう？」
「う・・・・・・うん。クウァルって人を診てる・・・・・・・」
「何？」
一瞬目を鋭くしたが、「そうか、わかった」と言うと、イルムは病院に向かって歩いて行った。

―※＊※―

「あの野郎、あの野郎、あんの野郎！！」
宿への帰り道。ディステリアは怒りを露わにしていた。
「まあまあまあ。そう頭から湯下を出さずに・・・・・・」
なだめるセリュードに、「俺は蒸気機関か！？」とディステリアが怒鳴った。
「それに、実際は湯下なんて出てないだろ！！」
その瞬間、唖然としたような顔を見合わせる二人に、ディステリアは目を瞬かせた。
「・・・・・・な、なんだよ・・・・・・」
「あのな、『頭から湯下を出す』って言うのは、ものの例えだ。お

前が言った蒸気機関っていうのは、水を熱して得た蒸気を使って動力を得るだろう?その時に熱が出ることを例えて、頭に血が上って怒っている様子を『頭から湯下を出す』って言うんだ」
「同じような例えに、『頭から煙を出す』という言葉もあるわ」
二人の説明を受けて、「そう・・・・・なのか・・・・・・」と呟いた。
「まあ・・・・・原因はわからなくもないが・・・・・・」
「ああ・・・・・」
それを聞いて、セルスも頷いた。ディステリアが怒っている原因がイルムとのやり取りだということは、容易に想像できた。
「それで・・・・・しばらく俺たちは、クウァルがいないままで怪物退治か?」
「しばらくはそうなるだろうな。チームワーク・・・・・特にお前とクウァルの連携を磨かなければならないのだが・・・・・」
「ああ。なるほど・・・・・ね」
セルスが哀れそうな目でディステリアを見る。
「な、なんだよ、その哀れむような目は・・・・・」
溜め息をついて、「だって・・・・・ねえ・・・・・」とセルスが呟く。
「お前とクウァルの連携の上達は、今このチームが抱えている最大の課題だからな」
そう言われては、ディステリアも黙るしかなかった。
「他にもクリアするべき課題はある。セルスの詠唱時間だ」
胸の辺りまで上げた右腕の腕時計は、４０秒を表示したまま止まっていた。
「今回ほどの敵ならばこれで十分だろうが、そう言っている訳にもいかんだろうな・・・・・」
「・・・・・これから先は・・・・・もっと強い敵が現れるということか・・・・・」
拳を握るディステリアに、「その可能性も、ゼロではないわ」とセ

ルスが言う。
「・・・・・私も、もっともっと精進しなくちゃ・・・・・・」
「その意気だ。だが、無理はするなよ」
「！・・・・・わかってる・・・・・・」
セリュードにそう言われ返したが、その後表情が暗くなったセルスに、セリュードとディステリアは首を傾げた。

―※＊※―

数日後。宿の近くの草原では、セリュードたちが簡単ながらも訓練していた。とはいえ、あまり派手な訓練もできないし、いつ町に怪物が現れるかわからない。さらに、訓練で全員消耗して戦闘に支障をきたしても問題がある。なので、訓練は二人ずつで行ない、今日はセリュードとディステリアの番となっている・・・・・のだが。
「・・・・・クウァルの様子がおかしい？」
「ああ。ディステリア、何か聞いてないか？」
槍を構えておもむろに聞いて来るセリュードに、天魔剣を構えるディステリアは不愉快そうに眉を寄せた。
「俺、あいつ嫌いですから気を回さないようにしています」
「あら。嫌いなほうが余計気になると思ったんだが・・・・・」
困ったように笑いセリュードが踏み出すと、ディステリアも速いスピードで突っ込み打ち合う。
「セリュードさんの感覚で測らないでください」
「そうか、それは悪かった」
何度か打ち合い、武器を湧きに押しやる。左腕を離したセリュードは底に魔力を溜め、相手の腕を狙って振り下ろす。それに対し、ディステリアは天魔剣を支える力を緩め、素早く左手で逆手に持ち直して手前に引く。手刀は天魔剣に防がれたが、後ろに飛んだセリュ

ードは足元に槍を突き出す。足払いを狙ってると察したディステリアは、ジャンプして払われた槍をかわす。
「やれるようになったな」
「どうも」と、着地したディステリアは笑みを浮かべた。
「明日、クウァルの相手はお前だろ？聞いてくれないか？」
「宿では聞けないんですか？」
「二人きりでいる時じゃないと話さないんじゃないか？」
槍を下ろして聞くセリュードに、ディステリアはますます嫌そうな顔をする。
「だったら、セルスにでも頼んでください。あいつのほうが聞きだしやすそうですよ」
「あっ、そっか」
あっさり納得したセリュードに、「（気付いてなかったのかよ）」とディステリアは内心呆れた。

第５６話　因縁の戦い、再び

胸元に青い線が入った小さなリボンがついた制服姿で登校するシェルミナが、三人の男子生徒にからまれていた。
「あの怪物は、お前ら姉妹が呼び寄せているんだろ」
「観念して、正直に言えよ」
「だから、知らないって言ってるでしょう。早く退いて」
「いやだね。正直に話すまで、ここは退かない・・・・・・」
「おい」
だが、言い終わらない内に声がした。男子生徒たちは一瞬体を震わせて周りを見たが、誰もいなかったので、ホッと胸をなで下ろした。
「ビックリした。あの『暴力妖精』が来たのかと思ったよ・・・・・・」
だが振り向いた時には、他の男子生徒たちが殴られて、地面に倒れていた。困惑していると突然、その男子生徒は胸倉を掴まれ、空中に持ち上げられた。足をバタつかせている男子生徒を掴んでいるのは、クウァルだった。
「何、よってたかっていじめているんだ。あん!?」
睨みを利かして脅かすと、男子生徒は「ひえ」と悲鳴をあげてさらに足をバタつかせた。
「逃げたいって言うのか?だったら、さっさと失せろ!!」
倒れている生徒たちのほうに投げられ、当たると同時に呻き声を上げると、気がついた生徒たちと共に一目散に逃げ出した。
「・・・・・ったく、あいつら暇なのか・・・・・・?」
頭をかいて溜め息をつくクウァルに、「クウァルさん?」とシェルミナが話しかける。

「ん？ああ。大丈夫だったか？」
「はい。クウァルさんのおかげで。でも、どうしてここに？」
「この前、助けてもらったからな。お礼を言いに来たら・・・・・・ああいう奴らを見つけたんだ」
厳しい顔つきになったクウァルに、シェルミナは不安そうな表情になる。
「悪質ないじめが続くようなら、俺が付いていようか？」
「え！？そんな・・・・・迷惑じゃないですか・・・・・・？」
シェルミナは顔を真っ赤にして、カバンで顔を隠していた。
「・・・・・もちろん、いつも一緒というわけには行かないが・・・・・俺も同じような目にあってたから、放っておけないんだ」
「そうですか・・・・・」
シェルミナが呟くと、二人はそのまま黙り込んだ。そこに「シェルミナ～」と女の声がした。
「・・・・・じゃあ・・・・・また後で・・・・・」
「ちょっと待って」
右手を上げて去ろうとしたクウァルを、後ろから彼の手を引いてシェルミナが呼び止めた。
「・・・・・携帯の番号・・・・・教えてくれませんか・・・・・？」
突然の申し出に、「ええ～っ！？」とクウァルは驚いた。
「・・・・・ご迷惑・・・・・でしょうか？」
「そ・・・・・そんなことはない」
不安そうなシェルミナに答えたクウァルは、無意識に携帯電話を取り出していた。
「じゃあ・・・・・携帯番号とメールアドレス・・・・・送りますね・・・・・」
「あ、ああ。じゃあ、俺も・・・・・」
互いに戸惑いながら、メール機能を使ってお互いの携帯番号とメールアドレスを交換した。

「じゃ・・・・・じゃあ、また後で・・・・・・」
「うん。バイバイ」
互いに頬を赤くしながら、その時は二人とも別れた。その後に、シェルミナと同じような制服を着て、左手にカバンを持った女の子が、
「おはよう～」と言いながら走って来ていた。
「あっ・・・・・おはよう、ホワン」
後ろを振り向いて挨拶すると、ホワンと呼ばれた少女はシェルミナの顔を覗き込んだ。
「な・・・・・何・・・・・・？」
すると一瞬、意地悪そうな顔になり、「ううん。なんでもな～い♪」ととぼけた。
「もう、意地悪しないで教えてよ～・・・・・・」
校門前に差し掛かると、横を通った紺のブレザーを着た別の男子生徒が二・三人、シェルミナを横目で見て、ヒソヒソと話し出した。
「見ろよ、妖精の女だぜ」
「まだ学校に来るのかよ」
男子生徒向ける冷たい視線に、シェルミナは一転、暗い表情になる。
「シェルミナ・・・・・ちょっと、あなたたち。言い過ぎにも程があるわ」
「なんだよ、お前には関係ないだろ」
「こら～～！！」
そこへ勇ましい声がしたかと思うと、フェルミナがスカートをなびかせながら男子生徒の一人の顔に飛び蹴りを食らわせた。
「あんたたちは、また～～！！」
「やべっ、『暴力妖精』だ！！」
「に、逃げろ！！殺されるぞ！！」
蹴られた男子生徒を引きずりながら、二人は校舎の中に逃げて行った。
「まったく、あいつらときたら・・・・・大丈夫？シェルミナ」
二人のほうを向いて話しかけると、「うん」とシェルミナが答えた。

「あいつらって、ほんといやな奴。どうして何かあると、決まってあなたたちのせいって決め付けるのかしら」
「まったく、迷惑極まりない話だ・・・・・・」
頭に手を当てて溜め息をつくフェルミナ。その後、校舎に入っていく三人を見ている者がいた。
「あの二人か・・・・・・？」
「間違いない。イルム・サンカルナの娘・・・・・・・妖精の血を引く娘だ・・・・・・」
「ならば早速、ウロギートさまに報告だ・・・・・・・」
うごめく影が姿を消したことに気付く者は、誰一人としていなかった。

―※＊※―

宿にしている旅館の部屋。部屋割りはディステリアとセリュード、部屋の中に敷居をもうけてセルスとクウァルとなっている。だが、この日は違った。
「今日から、こっちの部屋に泊めて」
ディフォルメされたクマやフクロウやオオカミやクジャクの柄をしたパジャマとナイトキャップに、わざわざ実家から持って着たマクラを抱いてやって来たセルスの言葉に、セリュードとディステリアは顔を見合わせた。
「どうして？」
「どうして、ですって？」
眉を引きつらせたセルスに言い知れないプレッシャーを感じ、セリュードは表情を強張らせる。
「理由がないなら帰れ。ただでさえ、こんな時間に男二人の部屋に

来るのは危険だとわかってるだろ」
「何よ。あんた、何考えてるの？」
「お前の身を案じて言ってるだけだ」
眉間にシワを寄せてすごむセルスと、半目で面倒くさそうにするディステリア。その間にセリュードはどこかに姿を消していたが、そんなことに気付かず二人は睨み合っている。
「・・・・・で、そんな危険を付きまとわせてまでなんのようだ？部屋に帰りたくなさそうだからクウァルがらみのことだろうな。愚痴ぐらいは聞いてやる」
「じゃあ、部屋入れて。言っとくけど、妙なことしたらぶっ飛ばすから」
「ふん」と横目で見ながら、ディステリアはセルスを部屋に入れた。
「で、なんだ？」
セルスはベッドに座り、ディステリアはイスを寄せて向かいに座る。
「クウァルったら、部屋に戻って携帯見ながら黄昏てるの」
「携帯？またなんで」
「この前助けてもらった女の子のこと、考えてるんでしょ？携帯だけでなく、メールの番号も交換したって言ってたから」
「あっ、そう・・・・・それと、こっちに泊めることとなんの関係がある？」
「なんか居辛くて。せめて、黄昏るのをやめてくれたらいいんだけど、それを言ったら『黄昏てなんかない』って言っちゃって・・・・・」
「じゃあ、黄昏てないんだ」
「いいえ！あれは絶対、黄昏てる！！」
頑なに譲らないセルスに、ディステリアは溜め息をつく。
「携帯番号やメールアドレスくらい、お前とも交換してるんだろ？」
「そうだけど・・・・・今回くらい気にかけてくれなかった・・・・・」
「あいつって、お前以外に友達いなかったんだろ？初めてお前以外

に友達ができて、喜んでるんじゃないか？」
「う～～・・・・・そうも考えられるんだけど・・・・・・」
「何かあるのか？」と眉を寄せてディステリアが聞く。
「女の勘なんだけど、クウァルって・・・・・・シェルミナって子に・・・・・・」
そこで黙り込むセルスに、興味なさげナディステリアは背もたれに腕とあごを乗せる。「なんだ？」
「ううん、なんでもない・・・・・・」
そう言ってセルスは、座っていたベッドに寝転ぶ。
「それ、俺の使ってたベッドだぞ」
「構わない。どうせ泊まるんなら、あんたかセリュードのベッドで寝なきゃいけないでしょ」
イスから立ち上がると、片方の眉を引きつらせる。
「・・・・・・・・・どうせなら、セリュードの使ってたほうで寝たかったな・・・・・・」
寝息を立てて眠ると、「悪かったな」と呟いてセルスに布団をかけた。
「・・・・・貸し一だ」
そう言ってディステリアは部屋を後にする。
「（とりあえず、俺の安眠が奪われるきっかけを作ったクウァルは殴る）」
そう心に決めて向かいのクウァルの部屋に行ったが、鍵はすでにかかっている。セルスの寝ている自室に戻るわけにも行かず、ディステリアはロビーで寝ることにした。

―※＊※―

翌日。朝一でロビーに下りてきたセリュードは、ソファーの上で寝

ているディステリアを見て呆れた表情をした。
「何やってんの？」
「女の子が寝ている部屋で寝るわけには行かないから、ここで寝た」
「呆れた・・・・・こっちはお前にセルスを任せて、クウァルの部屋に泊まったというのに」
溜め息をついて頭をかくセリュードに、「は？」と寝ぼけ眼で体を起こす。
「お前、セルスのベッドで寝たのか？」
「お前な。野宿を知る身としては、ベッドで寝られるのはありがたいことなんだ。贅沢は言わない」
崖の上や岩場で野宿したことがあるディステリアは、その時の寝心地の悪さを思い出した。
「だが、ご心配なく。こちとら、どこででも十分睡眠取れるようになってるから」
「そうか。なら、大丈夫だな」
ディステリアは立ち上がると、大きく息を吸って伸びをする。腕を下ろすと、とりあえずセルスを起こすため部屋に戻った。
「そうだ。彼女、着替え中かもしれないから、ドアを開ける際は注意しろよ」
「俺がそんなへまするか」
その侮りが命取りとなった。ごく自然に部屋に戻り、ドアを開けた途端、
「きゃあああああぁぁぁぁ！！」
「うぎゃあああああああっ！！」ホテルの廊下に男女の悲鳴と爆音が響く。幸いというべきか、その階にいる宿泊客はディステリアたち以外にはいない。悲鳴と爆音で目が覚めたクウァルがドアを開けると、その側に打ち付けられているディステリアが目に入る。
「・・・・・・・・何やってんの？」
「お前のせいで、な・・・・・・」
「俺のせい？」と首を傾げると、ちょうどドアが開いてセルスが出

てくる。彼女はディステリアを一瞥して、
「最！！低！！」
「・・・・・やっぱりな」
騒ぎを聞きつけて登ってきたセリュードが頭を押さえる。ディステリアはそもそもの原因であるクウァルを睨むが、当の本人は訳がわからずボーっとしていた。

―※＊※―

その頃。ある街で、ジークフリート、ブリュンヒルド、エインヘリヤル、ワルキューレのチームが戦闘を行っている。その相手は、グドホルムとグナテルの二人だった。
「今日こそは渡してもらうぞ。ニーベルンゲンの指輪！！」
「だ～か～ら～！指輪はもう持ってないと、前から言っているだろうが！！」
「そんな嘘が――――」
グドホルムは蛇腹状になった鎧に包まれた腕を上げ、一気にそれを地面に叩きつける。
「――――通じると思っているのか～！！」
その途端、大きな音と共に街の道を敷き詰めている石畳が大きく割れ、盛り上がったり、隙間が開いたりした。
「前に会った時より、力が増している！？」
「当然だぁぁぁぁぁぁ！」
着地したジークフリートが叫ぶとグドホルムが吼える。
「あの後、ネクロに頼んで俺が戦意を持てば、筋力が最大になるようにしてもらったからな～！」
それを聞いて、攻撃を避けているジークフリート以外の面々は唖然とした表情になり、敵であるはずのグナテルまでもが、相方の言っ

た言葉に頭を押さえて溜め息をついていた。
「あんたの相方って、パワーアップは他人に頼ってばっかり？」
「う・・・・・うむ。同じ組の者として、頭が痛い限りだ・・・・・」
しかもそれを簡単にばらす．素人並みの失敗に、二人はほぼ同時に溜め息をついた。
「ん？」
それを見て一瞬ジークフリートの注意がそちらに向くと、その隙を突いてグドホルムが攻撃して来る。だが、すぐにそれに気付いてグラムで防御し、弾き飛ばしてから突きをくり出す。それがグドホルムの鎧を掠め、怯んだ隙に連続で切りつける。それを皮切りに、戦いはジークフリートのほうが優勢になっていた。
「バカな。この前は俺のほうが完全に押していたのに・・・・・」
信じられないという表情のグドホルムに、ジークフリートが剣を振る。咄嗟に後ろに飛んだが、凄まじい剣圧によって発生した突風で、かなり離れた所まで飛ばされた。
「今回はこちらも、始めから戦闘結界は張っている。つまり――」
着地したグドホルムに、グラムを上に構えたジークフリートがさらに追い討ちをかける。
「――神界にいる時と同じくらい力を発揮できる！！」
そう言って振り下ろされたグラムを、グドホルムは左腕についている小さな盾を使って軌道を逸らした。
「だが・・・・・ジークフリート！！この前、再会した時に言ったはずだ。『俺は疲れを知らない体にしてもらった』と！！」
そう言って切りかかるグドホルムの突進をかわし、すぐにグラムを振り下ろす。だが、グドホルムはそこからさらに加速し、そのまま勢いに乗ってグラムの一撃をかわした。
「例え神の血を引く半神だろうと、オーディンに仕えるエインヘリヤルだろうと、疲れない訳がない！！」
腰を落として地面に両足をつけ、「だが！！」と叫ぶと、掌を広げ

て引いておいた右腕を思い切り前に突き出し衝撃波を放った。当然ながら、ジークフリートは余裕の表情でそれをかわした。
「そこを行くと俺はどうだ。戦う時は常に最大の力を発揮し、さらに疲れ知らずときた。この完璧に近い俺を貴様らが倒すなど・・・・・絶対！不可能だ！」
しかしジークフリートは、グドホルムのその能力こそが、彼の最大の弱点だと言うことに気付いていた。

―※＊※―

一方、ブリュンヒルドはグナテルと対峙していた。グナテルは最初に戦った時と同じく、左腕にガトリングガンを装備しており、そこから圧縮したマナの弾丸を撃ち出していた。しかし、ブリュンヒルドにはその弾丸も軌道も見えており、左腕の鎧に魔方陣でしまってあった弓を出し、同じくマナを圧縮して作り出した矢を撃ち出した。マナの弾丸と矢は互いに寸分の狂いもなく当たり、相殺された。
「さすがに、簡単にはいかないみたいね！！」
「ああ。お互いにね！」
再びガトリングガンが火を噴く。町の真ん中だったので周りへの流れ弾が心配されたかと思われたが、ブリュンヒルドは全ての弾丸を矢で打ち落としていた。響き渡る銃撃音、だが銃弾は全て矢と相殺していた。
「なるほど。恐ろしいまでの動体視力だ・・・・・だが！！」
いつの間にか抜いていた剣を振り上げて、ブリュンヒルドとの距離を詰める。
「なっ！？」
間髪入れずに、グナテルの剣がブリュンヒルドに向かって突き出される。だが、寸前で抜かれた彼女の剣がそれを防ぎ、次の瞬間には、

剣を使った斬り合いになっていた。ただし、互いに剣を振るスピードは凄まじく、常人には剣がぶつかり合う、連続した金属音しか聞こえていなかった。

「（ちっ。オーディンから追放処分を受けたとはいえ、さすがヴァルキリーだ。気を抜けば、こちらがやられる・・・・・・）」

剣がぶつかり合い、そのまま互いに睨み合う。

「（強い。元が人間だというのが、ウソみたいだ。気を抜けば、こちらがやられる・・・・・・）」

しばらく睨み合った後にほぼ同時に剣を振り、互いに離れた場所に着地する。

「（・・・・・長期戦は、不利なようだな・・・・・・）」

「（・・・・・ならば・・・・・一瞬に勝負をかける！！）」

グナテルとブリュンヒルド。互いに顔つきが変わり、相手は一気に勝負に出ることを察した。その一拍の間はほんの一瞬だったが、二人の感覚では、静寂と緊迫に満ちた数分間にも感じられた。だが、

「うおおおぉぉぉっ！！グラム！！」

「くたばれぇ！！ジークフリートぉぉぉっ！！」

グラムとグドホルムの激突音が二人を現実の空間に引き戻す。と、ほぼ同時にブリュンヒルドとグナテルが動いた。空気を切る音がして二人がすれ違う。一瞬の沈黙。

「・・・・・うっ・・・・・」

どちらかがうめくと同時に、ブリュンヒルドが地面に膝をついた。一方のグナテルは、無傷かと思われたが・・・・・鎧の胴体部分が大きく斬られており、そこからどす黒い血が滴り落ちていた。

「・・・・・ご・・・・・はっ・・・・・」

「ふう～～」

口から血を吐いてグナテルが地面に倒れた後、ブリュンヒルドは深い溜め息をついた。

第57話　張り巡らされる策略

ブリュンヒルドとグナテルの戦いが、一瞬の隙が命取りになる鋭い戦いだったのに対して、ジークフリートとグドホルムの戦いは、体力の多さがものを言う長期戦となっていた。いや、正確には『長期戦にされて』いた。

「でやあぁっ！！」

グラムによる突きを突進でかわし、隙が生じた所に腕の剛力をぶつける。最初の内は余裕でかわしていたジークフリートだったが、次第にグドホルムの狙い通りに体力が削られていった。

「（なるほど、な。攻撃と防御を織り交ぜた突進攻撃で相手の体力を削り、疲れた所を一気に畳み掛ける。『疲れを知らない体』だからこそできる戦術だが・・・・・・）」

苦虫を噛み潰したような表情で、グドホルムのパンチをグラムで防ぐ。

「どうした～！そろそろ、逃げる体力も尽きる頃だろう！！」

余裕の笑みで右腕に持った剣を振りかざし、襲いかかって来たグドホルムだが、それをグラムで受け止めたジークフリートの諦めていない顔を見て、心の中で忌々しく舌打ちをした。

「（くそっ、気にいらねぇ。どう考えても絶対不利なこの状況で、まだ勝てると思っていやがる・・・・・・）」

歯軋りしたグドホルムは、「ふざけんじゃねぇぞ！！」と逆切れして、でたらめに剣を振り出した。その力任せな攻撃をジークフリートは冷静に見切り、全てグラムで受け止めていた。

「フン、がんばるじゃないか。だが、どうがんばってもこの状況を

変えることはできない。さっさと諦めろ！！」
「ハン！冗談じゃないね！」
ジークフリートは勝気な表情で攻撃を捌き続けていた。
「だったら・・・・・後悔する暇も与えずお前を倒して、ニーベルンゲンの指輪を奪ってやる！！」
「（まだ理解していないのかよ）」
それを聞いてジークフリートが呆れた瞬間、グドホルムは攻撃のペースを上げようとした。だがその瞬間、わずかに腕の速度が落ちた。
「はあぁぁぁぁぁっ！！！」
その隙を突き、ジークフリートは一瞬で懐に飛び込み、真横に構えたグラムを胴に向けて思い切り振った。遅れて振り下ろされたグドホルムの剣は、空を切って地面近くで止まった。
「・・・・・ご・・・・・・・・・・」
口から空気を吐き出したグドホルムを、ジークフリートはグラムを振ってそのまま吹き飛ばす。地面に当たって何度か跳ねるグドホルムを見て、ジークフリートはどこか腑に落ちない表情をしていた。
「（・・・・・・・・・・！？）」
彼の持つ剣グラムは、『この世に切れぬ物無し』とまで言われるほどの名剣に与えられる称号〈斬鉄剣〉を与えられている。切れない物は探せばあるだろうが、少なくとも一般に出回っている鎧や盾にこの剣の一撃を止められるものはないはずだった。にもかかわらず、グラムには血が全くついていない。
「・・・・・・ぐ・・・・・・ククク。ハハハハハハ」
戸惑いながらも警戒を強めていると、倒れているグドホルムが不気味な笑い声をあげながら立ち上がった。鎧の胴体部分には深い切れ込みがあったがそこからは一滴の血も流れておらず、それだけでなく切れ込みの入った鎧の下は無傷だった。
「この俺が・・・・・グラムへの対策を、何も考えていないと思ったのか！？」
勝ち誇った笑みのグドホルムに、ジークフリートは剣を構えた。

「（クッ・・・・・・ではあれは、グラムを防御するための特別な装備か。だが、あれはなんだ？グラムはあらゆる物を切ることができる・・・・・・切れない物などこの世にない・・・・・・）」

そこまで考えた時、彼の脳裏にある可能性が浮かんだ。

「その鎧・・・・・・この世に存在しない物で作られているのか！？」

かつてフェンリルと言う巨大な狼をつなぎとめていた鎖〈グレイプニル〉は、『猫の足音』『女性の髭』『熊の腱』『山の根』『魚の息』『取りの唾液』など、本来この世に存在しない物を材料にドヴェルガーが作り上げた。『この世に存在しないもの』で作られていたゆえに、『破壊される』という事象が発生しないため、フェンリルも引きちぎれなかった。ジークフリートは、グレイプニルの丈夫さをそう解釈していた。なら、同じことが起きる鎧を、目の前の敵も装備している。

「・・・・・・ククク・・・・・・ハハハハハハ」

体を仰け反らせてそこまで笑ったグドホルムは、「・・・・・・ハズレだ！！」と高らかに宣言した。

「俺様をグラムから守った物・・・・・・それは・・・・・・」

鎧の端に指をかけ、脱ぎ捨てた後にあった物。それは、なんと。

「コンニャクだ～～～～～！！！」

脱ぎ捨てられた鎧が地面に落ちた音が響いた瞬間、ジークフリートは唖然とした。

「こ・・・・・・コンニャクだと～～～！？」

思わぬ伏兵に、ジークフリートは素っ頓狂な声をあげた。だが、ジークフリートはコンニャクという物を知らなかったので、すぐに疑問がわき上がった。

「コンニャクって・・・・・・なんだ？」

そんなジークフリートに、まるで戦いに勝ったかのような笑みを浮かべる。

「恥ずべき無知だな！いいか！コンニャクというのは・・・・・・

あ？なんだったっけ？」
自分もコンニャクが何か知らず、首を傾けた。周りで戦闘音が響くにも関わらず、そこだけ間抜けな空気が生まれる。
自分もコンニャクが何か知らず、首を傾けた。周りで戦闘音が響くにも関わらず、そこだけ間抜けな空気が生まれる。
「だ～から、なんだよ。コンニャクって・・・・・」
「コンニャクは・・・・・ええ～っと、ええ～っと・・・・・・・・
究極の、対斬鉄剣用特殊装甲だ！！」
「なんだと！？」
戦慄を覚えるジークフリートだが、そこにどこからか呆れた溜め息が聞こえてくる。
「食べ物ですよ。シャニアク国の、ね」
少しばかり呆れた声がすると、ジークフリートは突然の攻撃をグラムで防御した。
「この攻撃を防ぐとは、やはりやりますね」
塵の積もった地面を踏み鳴らす音がしたほうを見ると、グドホルムの前にネクロが立っていた。
「それにしても手をばらすとは・・・・・あなたはアホですか、バカですか？それとも、さっさと死亡フラグを消化したい脳筋ですか！？」
「うるさいぞ、ネクロ！貴様は俺の強化だけをしてたらいいんだ！」
「おや、いいんですか？私にそんな偉そうな口を利いて？」
目を細めるネクロに目もくれず、グドホルムはジークフリートを睨み続けている。あまりに執着が強く、彼以外目に入らない。目的さえ達成されれば味方に損害が出ようと関係ないのは、現時点ではネクロたちにとってマイナスだった。
「（これは確実に失敗ですね・・・・・）」
今ここでジークフリートたちを潰せれば願ってもないが、早急に肉体を修復しなければグナテルは人間で言う『死』を再度体験するし、確実にグドホルムを失うことになる。ネクロ個人としてはどうでも

いいが、〈デモス・ゼルガンク〉全体で考えれば、アドバンテージを与える手駒をみすみす失うことになる。
「時間切れです。帰りますよ、グドホルム」
「何を言ってる。俺はまだまだ暴れ足りない！！」
再び飛びかかろうとするグドホルムを、ネクロが押し留めた。
「相方がやられました。出直しを」
「くそっ。命拾いしたな、ジークフリート。今度、会った時は必ずニーベルンゲンの指輪をもらうぞ」
そう言った後、大きな音を立てて地面から煙が噴き出し、それが晴れた時にはネクロのグドホルムも、地面に倒れていたグナテルも姿を消していた。
「・・・・・だから、ニーベルンゲンの指輪は、もう持っていないというのに・・・・・・」
聞く者がいないにも関わらず、ジークフリートは溜め息混じりにそう言った。
「ジークフリート殿」
そこに、いつの間にか離れていたエインヘリヤルが駆けて来た。
「ヴァルキリーからの連絡です。この町の守備隊が、こちらに向かっているらしいと」
それを聞いたジークフリートは、気まずい表情であごに手を当てた。
「今の段階では、俺たちの関わりは人間たちには知られないほうがいいだろう。撤収するぞ」
エインヘリヤルが「ハッ」と頷き、姿を消した。
「ブリュンヒルド、行くぞ」
「わかってるわよ、ジークフリート」
そして、町の守備部隊が到着した頃には、三人は町から撤収していた。

―※＊※―

同日。学校の教室の中では、男子生徒と女子生徒たちが別々の箇所に集まって、何やら話していた。
「昨日、また怪物が出たんですって」
「聞いたわ。隣町の町外れに出たんだって。この前は、ここの外れだったよね・・・・・・？」
「確か、近くを通りかかった軍の部隊が倒してくれたんだよね・・・・・？」
「違うわよ。どこからかやって来た、かっこいいヒーローが倒してくれたらしいわ」
「ないない・・・・・・」
祈るように両手を合わせて、目をキラキラ輝かせる女子生徒に、他の生徒たちは呆れた表情で否定した。
「でも、どうしてこう立て続けに怪物が現れるんだ・・・・・・？」
「決まってるだろ。誰かが呼び出しているんだ」
「昨日、出てきた怪物も、誰かに召喚されたらしいぞ」
「誰かって・・・・・・誰だよ・・・・・・？」
「それも決まってるだろう・・・・・・・・」
その瞬間、全ての男子生徒と女子生徒が、教室の端にいるフェルミナ、シェルミナ、ホワンに視線を向けた。フェルミナが睨み返すと、全員はすぐさま目をそらしてまたヒソヒソ話しを始めた。悔しそうな表情で、シェルミナは机の下で手の平を握り締める。
「まったく・・・・・・私たちが何をしたって言うのよ。言いたいことがあるんなら、さっさとはっきり言え！！」
大声で怒鳴るフェルミナに、生徒たちは再びヒソヒソ話しをしていた。それが気に障り、ますます頭に血が上ったフェルミナを、シェルミナがなんとか抑えた。
「それがいけないんじゃない？そうやって睨むから、みんな警戒するんじゃない」

「だが、それは・・・・・・」
「やめてよ、お姉ちゃん」
諌めるホワンにフェルミナが声を荒げようとするが、泣きそうな声でシェルミナが止めた。怒りを押し留めて生徒たちを睨んだちょうどその時、教室のドアが開いてた。
「ホームルームを始めるぞ」
一人の男性教師が入って来ると、教室の方々で話していた生徒たちは席に着く。
「すでに聞いていると思うが、最近、この辺りに謎の怪物が現れている」
席についている生徒たちがざわめきだすと、教師は顔をしかめる。
「こらこら。私語は慎め。いつ、どこから来るのか軍も皆目、見当がつかないらしいが、分析の結果、マナの塊だということがわかったらしい」
再び生徒たちが騒ぎ出し、中にはフェルミナとシェルミナのほうを見て、何やらヒソヒソ話す者までいた。
「だから・・・・・ああ、私語はやめんか!!」
一喝入れられると、生徒たちはやっと黙った。
「何を話していたかは、だいたいわかる。君たちの推察どおり、その怪物は何者かが儀式によって作り出したと考えるのが妥当だ。だからと言って、無実の者をいたぶらないように。それは下劣で、人間として最低な行為だ」
生徒の一人が「わかりました」と答えると、「ウム」と男性教師は頷いた。
「よし。なら、授業を・・・・・」
その時、放送に使われるスピーカーから、ザザッ、ザザザッ、と耳障りな音がする。
「なんだ?」
教師が不愉快そうに眉を寄せると、《あ〜、テスト、テスト》と声がした。

《さあ～て～、この学校にいる生徒諸君。名前は明かせないが、私はとある軍属の者だ》

自称、軍関係者が学校の放送に出たことに、生徒たちは戸惑いざわめきの声を上げた。

《君たちも知っての通り、ここ最近、謎の怪物が町で暴れている。その犯人の行方もつかんでいるのだが、被害をなくすには時間も人数も少なすぎる。そこで、この学校の生徒諸君に協力してもらいたい》

廊下では「なんだ、あの放送は」、「今すぐやめさせろ」と教師たちが行きかっていた。

《君たちに犯人を見つけてもらって、それを報せてもらいたい。私の携帯電話の番号は、君たちの携帯電話に転送する》

生徒の一人が携帯電話を取り出すと、その画面にはいつの間にか、見慣れない番号が入力されていた。それと同時に、校門や学校の周りに黒い壁が生えてきた。それを見て、生徒たちが教室の窓に殺到する。

《申し訳ないのだが、この件が解決するまでこの学校は隔離させてもらう。なんたって、犯人はこの学校内にいるのだからね》

パニック手前の生徒たちに、「落ち着け、落ち着くんだ！」と、教師が声を上げる。

《犯人を差し出せば、君たちを解放すると約束しよう。ただし、犯人の生死を問わず・・・・・ね。では、吉報を待っているよ》

動揺し、ざわめく生徒たちをあざ笑うかのように、放送がやんだ。

「落ち着け、落ち着くんだ。すぐに救助が来る。それまで落ち着いているんだ」

「・・・・・救助なんか待たなくても、あの放送が言っていた犯人を見つければ・・・・・」

「それはそうかも知れんが、あの放送の内容が事実とは限らない」

「でも、あの放送どおり携帯に番号が写ったし、犯人だっているんだろ」

「その番号だって、悪戯かもしれない。実際にかかるかだって・・・・・」
「じゃあ、私がかけてみる」
不安に駆られた女子生徒の一人が謎の番号にかけてみる。すると、
《はい》と放送と同じ声が電話に出た。
《犯人は見つかったかい・・・・・・・・？》
「それは、まだだけど・・・・・・だいたい、手がかりもないのに見つけられる訳ないわよ」
《そうか。では、手がかりを与えよう。犯人は不思議な力を持っている。健闘を祈る》
電話が切れると同時に教室を沈黙が包み込み、生徒たちのフェルミナとシェルミナを見る目がさらに冷たくなった。
「・・・・・・だから、お前ら！！」
だが、その怒鳴り声がかえって、張り詰めていた生徒たちの不安を爆発させてしまった。
「捕まえろ！あいつらが犯人だ！」
「生死は問わないんだろ？殺してでも捕まえろ！」
男女問わず生徒たちが殺到した時、フェルミナはすぐに飛び出して、先頭の男子生徒を鉄拳で殴り飛ばした。
「お前ら、覚悟はいいだろうな！！」
怒りが爆発したフェルミナが吼える。だが、生徒たちをかき分けた教師が、「ちょっと待った」と止める。
「殴ったりするのはダメだ。彼らにますます話が通じなくなる。ここは一端、彼らが落ち着くまで逃げるんだ」
「わかったわ。お姉ちゃん、こっち」
フェルミナを引っ張ったシェルミナとホワンが教室を出て行った後、残った生徒たちはすぐに追いかけようとした。
「ちょっと待った、お前ら。まずは話しを聞け」
三人を逃がした男性教師が生徒たちを止めると、後ろの生徒たちがヒソヒソ話を始めた。

「先生を味方につけるなんて、さすが妖精。ずる賢いよ」
「きっと、誘惑したんだよ。表では優等生ぶって、裏では色仕掛けしている」
生徒のヒソヒソ話に、教師は両手の平を挙げて「まあ待て」となだめていた。
「どけよ！！あの放送が言っていた犯人は、あいつらに間違いないんだよ！！」
「そのとおりだ。犯人はあいつらに間違いない」
思わぬ言葉に、生徒たちはざわめきだした。
「理由はどうあれ、この場から逃げ出したんだ。何かやましい所があるに違いない」
すると、男子生徒の一人が「ハハハ」と笑い出した。
「やっぱり先生は俺たちの味方だ。さっさとあいつらを捕まえようぜ」
「まあ、待て。闇雲に探しても時間の無駄だ。まずはいろいろ作戦を練るんだ」
だが、その時のその男性教師の顔は、どことなく残酷な笑みを浮かべていた。

―※＊※―

教室から逃げ出した三人は、他の教室の生徒たちに追われた。階段の影に隠れてやり過ごすと、ホワンはそっと頭を出して周りの様子をうかがう。
「なんとかやり過ごせたみたい」
「でも・・・・・・このまま待っていても埒があかない」
「じゃあ・・・・・・どうするの」
不安そうに聞くシェルミナに、強気な表情でフェルミナが拳を握る。

「あたしらで、真犯人を捕まえるんだ。それが一番、手っ取り早い」
「そうね。でも、私たちだけじゃ、できることは限られる。まずは先生を助け出しましょう」
「その前に・・・・・・私たちが隠れられる場所を探さなくちゃ」
二人が話し合っている間、シェルミナは恐怖に震えていた。
「じゃあ、私が先生を助け出すから、フェルミナちゃんとシェルミナちゃんは隠れられる場所を探して」
「わかった。見つけたら、携帯電話で知らせる。気をつけてね」
静かに頷いたホワンが教室に向かって走り出すと、隙を見計らってフェルミナはシェルミナを連れて、その場を後にした。
「先生・・・・・・大丈夫かしら・・・・・・」
他の生徒に見つからないように隠れながら進んでいると、目の前に人影が現れた。一端、警戒して隠れたホワンだが、影の正体が自分たちのクラスの担任だとわかると、安心して駆け出した。
「先生。無事だったんですね」
だが、彼の周りを漂ういつもと違う空気に、ホワンの体は硬直した。
「先生・・・・・・か。この際だから、私の本当の名前を教えよう」
男性教師は、足音も立てずにホワンに近づいた。
「私の本当の名前は、ウロギート。とある軍の諜報部員だ」
「・・・・・・諜報・・・・・・員・・・・・・？じゃあ・・・・・・今朝の放送は・・・・・・？」
「いや、あれは私の仲間が流したもの。この学び舎に、無用な混乱を招いたことを陳謝する。この通りだ」
そう言って頭を下げるウロギートに、ホワンは戸惑いを感じた。

第５８話　軍の説得

「とにかく、先生が無事でよかった。早くフェルミナちゃんたちの所へ・・・・・・」
「いや、残念ながらそうは行かなくなった」
暗い面持ちでうつむいたウロギートに、「どうかしたんですか」とホワンが聞く。
「何者かがこの学校に生物兵器を送り込んだ。私はそれを掃討しなければならない。だが・・・・・・」
一端、言葉を切ったウロギートは、真っ直ぐホワンを見据える。
「その怪物は、恐ろしく高い殺傷能力を持っており、殺した生徒を自分の下僕にしている。近くに現れれば、高い確率で・・・・・・君は死ぬ」
「そんな・・・・・・」
ホワンが両手で口元を覆うと、「心配はいらない」とウロギートが彼女の右肩に手を置く。
「その怪物は、妖精の使う力が出す特殊な波動に弱い。君が妖精の力を持てば、この危機を乗り越えることができる」
恐ろしさに震えるホワンに、ウロギートは残酷な笑みを浮かべながら、一本の短剣を差し出した。彼女は無意識にそれを受け取る。
「その剣で妖精の力を持つ者を殺し、その血を体に浴びれば、君も妖精の力を得ることができる。君が望んだ妖精の力が手に入るんなら、これほど安いものはないだろう」
「そ・・・・・んな・・・・・・だいたい・・・・・・・妖精の力を持つ人なんて・・・・・・」

「いるだろう。君の近くに妖精の力を持つ者が・・・・・」
その言葉を聞くと同時に、フェルミナとシェルミナが頭に浮かぶ。
「まさか、あなた・・・・・最初からそのつもりで・・・・・・？」
「なんのことかわからないな。ただ、この学校の生徒たちは、君とあの二人を残して全滅した。生き残りたければ・・・・・わかるね」
そう言い残したウロギートは、廊下の奥へ姿を消した。残されたホワンは状況が理解できないまま、その場に立ち尽くしていた。

―※＊※―

生徒たちの手から逃げているフェルミナとシェルミナ。追っ手の気配を感じたフェルミナが身を隠すと、上半身を少しかがめた生徒たちが何人か通り過ぎた。
「なんだ、あいつら？様子がおかしい・・・・・」
様子をうかがっているフェルミナの後ろで、シェルミナは恐怖に震えていた。
「（・・・・・誰か・・・・・助けて・・・・・誰か・・・・・そうだ・・・・・）」
弾かれたように顔を上げると、夢中になって携帯電話の番号を押した。
「（お願い・・・・・出て・・・・・助けて・・・・・）」
コール音がする中、祈るように強く目を閉じる。
「（・・・・・助けて・・・・・クウァル・・・・・）」

―※＊※―

「!?」
突然、クウァルが別の方向を向いた時、前に立っていたディステリアが木刀を振りかざして向かって来た。
「隙あり~~!!!」
だが、クウァルは即座に木刀を構えた右腕でその突撃を受け止め、そこから足に力を入れて押し込もうとするディステリアを逆に押し返し、ついには押し飛ばした。
「いって~・・・・・・くそ・・・・・・」
石畳の上に落ちたディステリアに、「ハハハ、まだまだだな」とクウァルは笑った。
「うるさい。それより、さっき一瞬、どこか見ていたが・・・・・・どうかしたのか?」
「ん?ああ。誰かに呼ばれたような気がして・・・・・・」
その時、クウァルの携帯電話が、着信を知らせる振動を始めた。
「電話か。誰からだ?」
「彼女からだろ?お前がさりげなく、携帯の番号を聞いたという」
「・・・・・・貴様、今度の組み手では容赦しないぞ・・・・・・」
睨みながら、「はい、もしもし?」と電話に出ると、
「クウァル!!」
向こう側から切羽詰った声が聞こえて来た。その途端クウァルは目を丸くして、すぐ眉を寄せた。
「その声はシェルミナ?・・・・・・何かあったのか?」
「そ・・・・・・それが・・・・・・」
シェルミナが状況を説明しようとしたその時、「こっちだ」と声がすると、遠くでドタバタと慌しい足音が聞こえて来た。
「どうかしたのか?」
「わからない。シェルミナ、何があったんだ?」
「が・・・・・・学校が・・・・・・」

事情を聞こうとするが、突然ブツッと音がして聞こえなくなった。
後に聞こえるのは通話が切れた後の音ではなく、テレビの砂嵐のような音だった。
「おい、シェルミナ？おい！？」
「何かあったようだな」
切れた携帯に叫ぶクウァルに、訝しげに眉を寄せたディステリアが話しかける。
「ああ。とにかく、彼女がいる学校に行ってみよう」
駆け出すと同時に、ディステリアは携帯でセルスとセリュードに連絡を取った。

―※＊※―

その頃。町から離れた場所にある丘の上では、合流したクーフーリンとファーディアを加えたジークフリードたちが戦っていた。
「くらえ、ゲイボルグ！！」
突き出されたゲイボルグの先から放たれた無数の矢が、前方にいる二足歩行の怪物を貫く。
「グガアアアッ・・・・・・！！」
轟音を立てて地面に倒れると共に、巨大な体は消滅した。
「どうなっているんだ。こいつら、なんでやられると体が消えるんだ？」
槍を下ろしたクーフーリンに、「さあね」とファーディアが答える。
「少なくとも、今の俺たちじゃあ絶対にわからないことだろうよ」
向こうのほうでは、ジークフリートとブリュンヒルドが鳥形の怪物を倒したところだった。
「ただ・・・・・・この怪物のレジストコード（名前）は決まったらしい。『ディゼアビースト』だそうだ」

「どういう意味か知らないが、いい響きじゃないな・・・・・・」
そこに、さっき戦闘を終えた二人が歩いてきた。
「この辺りは、セリュードたちの担当地域の近くじゃなかったか？」
「おや、そうか・・・・・・警備地域が被るのは少しまずいな」
ジークフリートにファーディアが答える。
「じゃあ、もう少し北に行ってみない？今頃、結構、手薄になっているんじゃない・・・・・・？」
ブリュンヒルドの提案に、「そうだな。行ってみるか」とグラムにまたがるジークフリートたち。だがそこに、
「しばしお待ちを」
と一人のヴァルキリーが、翼を羽ばたかせて降りてきた。
「基地からの緊急伝言です。セリュードたちの担当地区に、巨大な負のエネルギー反応を感知したとのことです。よって本部は、近くにいるあなた方を増援部隊として送ることを決定しました」
「増援・・・・・・か。だが、それくらい通信を入れれば済むこと。それをしなかったということは・・・・・・」
「お察しの通り、皆様に渡す物があります」
クーフーリンの指摘に、ヴァルキリーは懐から取り出した手の平サイズのカプセルを二つ、ジークフリートに渡す。
「これは・・・・・・？」
「かねてから製造されていた、移動目的型小型飛行機〈ファイター・フライヤー〉だそうです」
「ついに完成したか。移動手段を持たない者にとっては、重宝するな」
喜ぶファーディアとは裏腹に、クーフーリンは微妙な表情をしている。
「俺たちには、あまり必要じゃないんじゃないか？」
「いや、ないよりはマシだろう。もう一つは、セリュードたちの分か？」
ジークフリートに、「はい。おそらくそうだと思います」とヴァル

キリーが答える。
「わかった。ちょうど行く用事も出来たことだ。ついでに渡して来るよ」
ジークフリートが話をつけると一同は一路、セリュードたちが滞在する町へ馬を走らせた。

―※＊※―

ディステリアから連絡を受けたはずのセリュードとセルスは、なぜか治安部隊の詰め所にいた。しかも、二人の前には治安部隊隊長であるイルムと、その部下二人が立っていた。
「仲間からの連絡です。娘さんが通っている学校が、何者かによって隔離されました」
携帯を閉じたセリュードからそれを聞き、「なんだと!?」とイルムは顔を青くした。
「・・・・・君たちの仲間の仕業か・・・・・・」
それを聞いて、「バカにしているんですか!?」と立ち上がったセルスをセリュードが押し留めた。
「信じてもらえないかも知れませんが、我々はそのような脅迫じみた方法で、協力を仰いだりはしません。それに、『隔離された』というのは、あくまで状況から見ての私たちの想像です」
疑いの眼差しでセリュードを見るイルムは、「下がってよい」と二人を部屋の外に出して人払いをした。
「いいのか?得体の知れない組織の者を前に、密室で一人になって」
「もしこれで私が死ねば、真っ先に疑われるのはあんたらだ」
「だが、私は妖精の力を持っている。その気になれば、あなたを殺して幻影魔法で生きていた時間を誤魔化せる」
「いくら魔法でも、生物の死亡推定時間は誤魔化せない。それに、

脅迫じみたことはしないんじゃなかったのか」
静かだがギリギリまで張り詰めている、一触即発の空気にセルスは不安を感じずに入られなかった。
「あなたは・・・・・娘さんが心配じゃないんですか？」
「心配だ。だが、私は軍の一部隊を任せられている者。私情で部隊を動かすわけには行かない」
「どこが私情なんですか！？戦う力を持たない人たちが危機に晒されてるんですよ！？」
「確かに、我々の役目は人々の命と安全を守ること。だが・・・・・・生まれながらに高い能力を持つ幻獣やその血を継ぐ者は、防衛対象に入れられていない・・・・・」
信じられない言葉に、「なっ！？」とセルスは絶句する。
「それが軍の掟なんだ。破ればどんな正当な行動でも処罰される。自己の判断で動いて結果を残しても、それで許されでもしたら組織は崩壊する」
信じられないどころか不満が強くなる。そこに、廊下から騒がしい声がしてきたので、彼女の気はそちらのほうに向ける。やがて、騒がしい声は部屋のドアの前でよりいっそう激しくなり、ついには人が殴られる音と呻き声が聞こえた。そして、勢いよくドアが開くと、そこには激しく息を切らせたディステリアとクウァルが立っていた。
「やあ、お二人さん。出迎えご苦労・・・・・と言いたいのは山々なのだが、話し合いはまだまだ終わってなくて・・・・・」
「そんなことはどうでもいい。話は聞いてるだろ。さっさと現場の学校に行くぞ！！」
笑顔で「無理だ」と言い切ったセリュードに、「なぁにぃ～！？」とディステリアが叫ぶ。
「私たち、この人たちに拘束されているの。しかも、これからの話し合いをする・・・・・っていう名目で・・・・・」
「それで来てみれば、ご覧の通りと言う訳だ」
それを聞いたディステリアは、「情けない」と頭を振った。

「セリュードさん。仮にもあなた、エオホズ王に仕えた騎士でしょう。どうして、そんな見え見えの罠にはまるんだ？」
皮肉を込めた丁寧な言葉にセリュードが何か言おうとしたが、クウァルがそれをさえぎった。
「それよりも・・・・・おい、あんた。あんたの娘が危ないんだ。早くあんたの部隊を送ってくれ！！」
だが、イルムは「それは、できない」と答えた。
「なんでだ！！あんたの娘二人が、危ないかも知れないんだぞ！！」
今にも掴みかかりそうなクウァルを、「まあ、待て」とセリュード止める。
「それは、あんたの本心か」
静かに聞くセリュードに、「そうだ」とうなずくイルム。
「なんだよ、それ。いくら幻獣の血を引いてると言っても、生まれたばかりの時から親の力を使える訳じゃないんだ」
「例えそれが事実だったとしても、部隊は動かせない。それは治安維持部隊上層部の見解であり、私も同意見だ」
冷徹なイルムを睨みつけるディステリアたち。だが、セリュードだけはそんなイルムに怪訝そうな顔をしていた。
「あんた、幻獣に関係するものが嫌いなのか？」
「当然だ。幻獣やそれに関係するものは、常人にはない強大な力を持っている。何より私は、『幻獣の力』そのものに係わりたくない」
「いや。それはあなたの本心ではないし、あなたはディステリアが言ったことが事実だと知っているはずだ。なぜなら、あなたの妻は妖精族だったはずだからな」
セリュードが言った思わぬ言葉に、思わず顔を上げる全員が彼のほうを見る。
「・・・・・気付いていたのか・・・・・・？」
驚いた顔のイルムに、「まあ、ね」と座ったまま答えるセリュード。
だが、セルスには納得がいかなかった。
「でも・・・・・どうして？シェルミナちゃんとフェルミナちゃ

んが妖精の力を受け継いでいるということは、あなただって妖精の女性と暮らしていたってことでしょう。それなのにどうして・・・・・・！？」

「君たちには、関係ないことだ・・・・・・・」

「なんだと貴様！」

ディステリアがイルムに殴りかかろうとするが、それを立ち上がったセリュードが止める。

「異種婚姻の結末・・・・・・君も知らないことはないはずだ・・・・・」

押し殺したような声に押し留められ、ディステリアは黙り込んだ。

「大抵の物語では、円満で終わりやすい異種婚姻。だが実際には、異種族との婚姻に対する偏見と差別により破局。もしくは、悲劇的な結末を迎えることが多い」

「知ってる。人々の迫害により、酷い時には一家全員殺害されることもあるらしい。俺の場合は、両親から捨てられたんだが、な」

「俺は両親を一度に失い天涯孤独に。・・・・・・おそらく、あなたも似たようなものでしょう」

クウァルとセリュードが話し、しばらく黙り込んでいたイルムは、

「ああ。そうだ」と顔に手を当てた。

「私の妻は、幻影を作り出す力を持つ妖精だった。だがそれゆえに、当時、起こっていた崖からの落下事件の犯人として警察に捕まり、獄中で亡くなった」

「その事件と幻影を作る能力に、どういう関係があったのよ」

不満そうにセルスが言うと、イルムは険しい表情で続ける。

「被害者と一緒にいた目撃者の話によると、被害者は崖から落ちる前にぼんやりとした映像のようなものを見たと言っていた。警察はそれを作りだしたのは妻だと決め付け、身柄を拘束した」

「だが、あんたの妻は無実だったんだろ。真犯人は誰だったんだ？」

今度はクウァルが聞くと、イルムは首を横に振る。

「その事件の目撃者だった。だが、その犯人は模倣犯で、連続落下

事件に乗じたに過ぎなかった。結局、彼が模倣した連続落下事件の犯人は捕まらず、妻への疑いは最後まで晴れることはなかった」

湧き上がった涙を拭うと、セリュードたちを見つめる。

「以来、娘も妖精の力を持つことが露見し、いじめられるようになった。その時、私は悟った。人間と、それ以外の種族は交わるべきではない。でなければ、妻や娘のような者が永遠に出続ける。幻獣と係わらないようにして、力を隠しながら暮らすことが・・・・・・娘たちの幸せに繋がるんだ・・・・・・」

右手で顔を覆って泣くイルムを見て、クウァルは、ギリッと拳を握った。

「ふざけるな・・・・・それってあんたの逃げだろ・・・・・・」

涙を流すイルムの胸倉を掴みあげる。

「本当に娘の幸せを考えてるんだったら・・・・・・戦えよ!今の世の中と!!」

「・・・・・戦っても、結果は見えている。この世界には、妖精や幻獣の血を合わせ持つ者が暮らせる場所など、ありはしないんだ・・・・・・」

涙を流し唸り続けるイルム。そんな彼に、ディステリアたちは怒りをぶつけることなどできなかった。

「だったら・・・・・俺たちが変えてやるよ、この世界・・・・・・」

戸惑いの表情でイルムがクウァルを見ると、腕を振ってイルムを離す。

「あんたが放棄したこの戦い、俺たち〈勇気の一滴(ブレイティア)〉が勝ってみせる!!」

目を見開くイルムに、「娘さんを助けに行く」と言ってクウァルは背を向けた。

「・・・・・それなら、早く行くといい。今の私には、君たちを捕まえる力はない」

「なら行くぞ。助けを求めているにしては、連絡が全くないぞ」

ディステリアがそう言って、セリュードたちが部屋を飛び出すと、残ったイルムは力が抜けたようにソファーの背もたれにもたれた。

―※＊※―

「はあっ、はあっ、はあっ・・・・・・」
ホワンは逃げ続ける。手には鈍く光る短剣を持って。走り続けたゆえの苦しさに足を止めると、後ろから怪物が迫ってくる。
「ギャゴオオォォォッ！！」
「こ、こないで！！」
悲鳴を上げ、無我夢中で短剣を振るう。刀身は届いていないはずなのに、仰け反った怪物はそのまま倒れる。体に入った切り傷はホワンが振った短剣の軌跡と一致し、極限状態まで追い詰められた彼女の思考はその不自然さに気付くことができなかった。
「はあっ、はあっ・・・・・・どうなったの？」
恐る恐る様子を伺っていると、怪物の傷が塞がり起き上がる。
「っ！また・・・・・・」
それはこれまでに何度も体験していたこと。切っても斬ってもすぐ傷を治して襲いかかって来る。ここまでその繰り返しで、その度にホワンが抱く恐怖は大きくなっていた。
「（いや・・・・・・助けて。誰か、助けて・・・・・・）」

第59話　隔離された学校

治安部隊の詰め所を飛び出すと、セリューードたちはクウァルを先頭に道を、全速力で駆けていた。
「（・・・・・フェルミナとシェルミナは、ずっと前からいじめを受けていたと言っていた。だが、助けを求めている今の状況が、今までのいじめと同じとは到底思えない・・・・・）」
走っているクウァルの前に、四人の目の前に四階建ての家ほどの身長を持つ、ディゼアビーストが立ちはだかった。
「うわっ！？」
攻撃をかわしたセリューードたちは、武器を後ろに構える。
「こんな都合よくいるってことは・・・・・」
「私とセリューードが拘束されたのは、敵の手回しだったってことね」
ディステリアとセルスが武器を構える。
「・・・・・ったく、浸透しているにも程が・・・・・」
その時、武器を取り出そうとしたディステリアを置いて、クウァルはディゼアビーストの中に突っ込んだ。
「ちょっと、クウァル！？」
セルスの静止も聞かず、いきなり突っ込んだクウァルにディゼアビーストが爪を振り下ろすが、クウァルもいつの間にか手甲を装備した右腕を後ろに構える。
「・・・・・急いでいるんだ」
一瞬で敵の目の前に踏み込み、腕を一気に突き出す。
「どっ――――け～～～～っ！！！」
豪腕から繰り出した一撃を受け、右腕から消し飛ぶディゼアビース

ト。その様子を見てセリュードたち三人は唖然とし、その間にも、クウァルは他のディゼアビーストの間を走り抜けて行った。
「・・・・・ギラ!?ガアアッ!!」
我に返ったディゼアビーストが多方向から一斉に襲いかかる。セリュードたちも武器を取り出して飛び出すが、三人が攻撃を放つ前にジャンプしたクウァルは体を回転させ、周りのディゼアビーストを蹴散らした。
「邪魔――するなよ!!!」
突き出された腕が、残っていたディゼアビーストを粉々に砕いた・・・・はずだったが、そのディゼアビーストは上半身と下半身が分離して、クウァルに襲いかかって来た。
「なっ・・・・・・!?」
一瞬、やられると思った瞬間、別のほうから飛んできた二種類の斬撃、二種類の矢が二体に分離したディゼアビーストを一斉に貫いた。
「今日はやけに熱いじゃないか、クウァル」
四人が声のしたほうを見上げると、四頭の戦馬に乗ったジークフリート、ブリュンヒルド、クーフーリン、ファーディアが武器を構えていた。さっき喋ったのは、どうやらクーフーリンらしい。
「クーフーリンたちか。助かる」
脇を通り抜けるクウァルに「お・・・・・・おい」と声をかけるが、彼はそのまま走って行った。
「どうなっているんだ・・・・・・?」
マッハの上で呆けているクーフーリンの横を、セリュードたちが駆け抜ける。
「なっ・・・・・・おい」
「悪い、急いでいるんだ。そいつらの相手を頼む」
「あんたらなら、それほど苦戦しないだろ。後でこの町の学校に来てくれ」
セリュードの後にディステリアが言い、駆け抜けて行った三人をクーフーリンたちは唖然とした表情で見ていた。

「・・・・・・一方的に言いたいことだけ言って行きやがった・・・・・」
「そう言うなよ・・・・・・どうやら、この町の学校で何かあったようだ」
ジークフリートにディゼアビーストが凄まじい速度で爪を突き出すが、駆け出したグラムの背には誰も乗っておらず、突き出した腕が肩の辺りで切り落とされていた。
「セリュードたちのように、俺たちも急いだほうがよさそうだ」
ジークフリートが着地した時、振り向いたディゼアビーストはすでにグラムに切り伏せられていた。その骸が落ちた直後、ブリュンヒルド、セリュード、クーフーリンが一斉に飛び出した。

―※＊※―

陣形を変えずに、道を駆け抜けるセリュードたち。やがて大通りを曲がった先に、何かを囲む高い壁が見えてきた。
「・・・・・・確かにここなのか・・・・・・？」
「聞いた話に間違いがなければ、ここに間違いないはずだ」
セリュードとクウァルが上を見上げる。しかし、その四方は高い壁に囲まれ、中を確認するのは容易なことではなかった。
「だったら・・・・・・とるべき道は一つ！！」
やる気満々で拳を構えるクウァルに、「奇遇だな」とディステリアも剣を構える。
「俺も・・・・・・似たような意見だ・・・・・・」
一瞬、互いにニヤッと笑ったかと思うと、両者ほぼ同時に武器を振った。校門をふさいでいた壁を貫いた轟音が学校の校舎の隅々まで響き渡り、校舎にいる誰もがその音を聞いた。
「・・・・・・ったく、この後どうするんだ。これだけの轟音を響

かせて、気付くなと言うほうが難しい・・・・・・」
セリュードが呆れると二人は、「心配無用だ」と答えた。
「敵が立ちはだかるというのなら・・・・・・」
「倒しながら進めばいい」
クウァルとディステリアが壁に開けた穴から入って行くと、残されたセルスとセリュードは呆れるしかなかった。

―※＊※―

校舎から渡り廊下を通った先にある『第一生徒会室』。元々は学校を正す生徒会および風紀委員が使っていた部屋だったが、校舎に『第二生徒会室』が作られたため生徒会はそちらに移り、部屋事態は生徒に解放されていた。その生徒会室の中に、命からがら逃げて来たシェルミナ、フェルミナ姉妹が隠れていた。
「ホワン・・・・・無事だといいんだけど・・・・・・」
シェルミナが不安そうに呟いたその時、校舎の中に轟音が響き渡った。入り口のドアに耳を付けて外の様子をうかがっていると、何かが殴られる音がしていた。まだまだ遠いが、その音がだんだん近づいていたため、フェルミナが目を見開く。
「（何者かがこっちに近づいている。音からしてホワンじゃない・・・・・）」
神経を研ぎ澄ませ、音の正体を探る。
「（音の主は一人じゃない。・・・・・二人・・・・・・三人・・・・・いえ・・・・・・四人）」

―※＊※―

その音がしている場所を突き進んでいるのはクウァルたち。校舎に突入した彼らの前に、学校の生徒が三人も立ちはだかり、即座に武器を構える二人だったが、さすがに人間を相手に武器をふるえなかった。

「・・・・・おいおい、敵が立ちはだかるなら、倒すんじゃなかったのか・・・・・・？」

「バカ言え」と、クウァルがディステリアに答える。

「こいつら、どう見ても催眠状態じゃないか」

生徒たちの目は虚ろな状態で、とても正気を保っているとは言えず、手出しできないでいる二人にじりじりと迫って来る。

「スリプル・ウィンド」

その時、セルスの声がするとどこからかそよ風が吹いて来て、生徒たちが次々と床に倒れた。

「・・・・・お前ら、いきなりそのざまか？」

セリュードに呆れられた後、「みんな、大丈夫？」と杖を持ったセルスが聞く。

「セルスか。助かったぜ」

ディステリアはそう言ったが、クウァルはセルスのほうを向きもせず、校舎の中を駆け抜けて行った。

「ちょっと、クウァル。お礼を言うくらい、いいじゃない！！」

文句を言うセルスに、「まあいいだろ」と走りながらセリュードが言った。

「悪いがセリュードの言うとおりだ。急いでクウァルを追うぞ！」

ディステリアも駆け出したので一人残されそうになり、

「ちょ・・・・・ちょっと待ってよ～」

とセルスも慌てて追いかけた。それからセリュードたちは、襲いかかって来た生徒を、素手で殴り飛ばす。

「くそ。虱潰しに探しても埒が明かない。何かいい手はないのか」

「クウァル、ちゃんと手加減してあげてよ。例え素手でも、あなた

の力は強いんだから」
「わかっている。下手に手加減しそこねでもしたら、あいつは・・・・・自分を責めちまうだろうからな・・・・・・」
思いつめた表情のクウァルに、セルスはどこか複雑な感情を抱いた。
「（この感じ・・・・・心配じゃない。悲しみ？不安？違う、これは・・・・・・）」
動きを止めたセルスに、操られている生徒が飛びかかった。気付いていたディステリアが左手で床に叩きつけ、蹴り飛ばすと何かを叫んでいる。
「・・・・・・嫉妬だ・・・・・・・」
震えるように両肩を掴み、縮こまっているセルスを、近付いたディステリアが殴りつける。
「・・・・・・いった・・・・・・何するのよ！？」
「何してるって言うのは、こっちのセリフだ。戦いの最中に、ボオーっと突っ立っているんじゃねぇ！！」
セルスとディステリアが攻撃の手を止め、クウァルはその先で操られた生徒の群れに阻まれているため、セリュードが孤軍奮闘する形になってしまっていた。と言っても相手は一般人のため、一応は戦闘訓練を積んであるセリュードたちの敵ではなかった。
「いくらクウァルが怪力の持ち主でも、これだけの数を相手にするのはきついはずだ。すぐにフォローに回れ！」
「と言っても、俺たちが孤立寸前だ。それ以前に、なんでクウァルがあれだけ先行してんだ！」
襲いかかる生徒を蹴り飛ばしたり、投げ飛ばしたりするディステリアを見て、セルスは目を見張った。何もせずにいれば自分が危ないだけでなく、仲間にも迷惑がかかる。この時、彼女は改めて実感した。
「（これが・・・・・『戦い』。これが・・・・・・仲間と・・・・・共に戦うこと）」
顔つきが変わったセルスが杖を前に構え、ディステリアとセリュー

ドが止めた生徒たちを押し退けると、そこにスリプル・ウィンドを放って眠らせる。廊下で襲いかかって来た生徒たちを一通り眠らせて、セルスは一息ついて杖を下ろした。

「クウァル。シェルミナたちの居場所はわかるのか？」

ディステリアの問いに、「いや、わからない」と首を振るクウァル。

「携帯も通じないし・・・・・・くそっ、虱潰しに探すしかないのか・・・・・・？」

「いや、その心配はない」

悔しがるクウァルに、落ち着いた口調でセリュードが言った。

「心を落ち着ければ、魔力の気配を感じることができる。それを辿れば・・・・・・」

「いいって訳か。だが、それを使えるのがセリュードだけとなると・・・・・・」

クウァルに、「何を言ってる」とセリュードが言う。

「これは人間を始めとした、あらゆる生物に備わっているものだ」

「「「ウソ！？」」」

驚いた三人が叫ぶと、「本当だ」とセリュードが答える。

「ただし、これが実際に使えるほど発達しているのは、妖精を始めとした幻獣だけだ。魔術師やその素養がある者も使えるようだが、幻獣のそれと比べて劣るらしい」

「なんでだ？」と焦りを隠したクウァルが聞くと、セリュードが振り返る。

「安全な社会を形成し、その中で暮らしているため、危機感知能力が落ちている、というのが有力な説だ」

「あっ、確かに・・・・・・安全な場所に住んでいると、気を抜いてしまいますよね」

頷いたセルスの声が呑気に聞こえたのか、いらついたクウァルが舌打ちする。

「そんなことより、シェルミナたちの居場所は！？」

「待ってろ、今探る」

目を瞑ったセリュードは、周りに神経を集中させ辺りを探る。待っているクウァルがイライラしている様子を見て、ディステリアが目を細める。

「随分とあの子に熱心なようだな」

「うるさい。ただ、自分の過去に合わせて同情しているだけだ」

クウァルの言葉にディステリアもセルスも目を丸くする。

「あいつも周りから阻害され、友達もあまりいない。俺はそんなシェルミナを守ることで、過去の自分を救っているつもりでいる。ただの自己満足だ」

「そんな・・・・・そんな風に言わないで」

「卑屈になったって、事実を認識してるわけじゃない」

周りの気配を探っているはずのセリュードが口を挟んだので、驚いて三人が振り返る。

「自己満足も偽善も、所詮他人の価値観だ。それが事実だと認識されるのは、当人がそう判断した場合だけだ」

「それは・・・・・そうかも知れないが・・・・・」

「誰に何を言われたか知らないが、俺たちは信じた者を貫けばいいんだよ」

セリュードが優しく肩を叩き、「ああ」とクウァルが頷いた。

「ところでセリュード、妖精の力の気配は掴めたのか？」

「誰かさんたちがうるさくて、集中でいなかったよ」

魔力を感じるやり方は、慣れてなければないほど神経を使う。そういう意味ではセリュードも慣れてないほうということになり、それを妨げたことにディステリアたちは罪悪感を覚える。

「それに・・・・・少々厄介なことになってるようだ」

「厄介なこと？」

首を傾げてセルスが聞いた時、二階の廊下から彼女に向かって何かが飛び降りて来た。その影の正体は彼らよりも大きな体をして、全身に黒い毛とウロコを持った怪物で、落下地点にいるセルスに爪を振り下ろした。

「危ない！！」
気付いたディステリアはとっさに天魔剣を召喚し、セルスの前に割り込んで怪物の爪を弾く。怪物が着地するとは同じような怪物が後から出て来た。
「怪物相手なら手加減の必要なしだ！」
「待て、何かおかしい」
違和感に気付いたセリュードは襲いかかって来た怪物の攻撃をかわし、左拳に光属性の魔力を溜めて殴りつけた。腹を殴られた怪物は苦しそうに呻いてよろめくと、他の怪物たちが割り込む。
「浅い！俺が・・・・・・！」
「だから、待てって！今度は決める」
攻撃しようとするディステリアを押さえ、陣形を崩してまでも飛び込み、今度は両腕を目の前の怪物に打ち込み、溜めていた光属性の魔力流し込んだ。浄化の作用がある光の属性を受けた怪物は、倒れると共に制服を着た少年の姿になる。
「なっ！？これは・・・・・・」
「ウソだろ！？」
それを見て、ディステリアたちは『学校の生徒たちが怪物に変化している』という最悪の事態を予想した。
「元に戻せるなら、無闇に殺せない。くそっ、これも奴らの企みか！」
「ディステリアも、光の力が使えたよね。それで学校の生徒たちを・・・・・！」
「ダメだ。俺のは完全攻撃用だ。セリュードのように加減できない！！」
セリュードとセルスが怪物を弾き、ディステリアは先走るクウァルを止めようと手を伸ばした。後ろの襟首を掴まれ、クウァルは倒れかけるもなんとか踏みとどまる。
「お前・・・・・・邪魔するな！早くしないと、シェルミナが・・・・・！」

「だからってね。あんたが先走るから、私たちも囲まれてるのよ！」
「落ち着ける場所に辿り着けたら、気配を探ることもできる。まずは陣地確保だ！」
「そのためにも、まずはこいつらを寝かせる！！」
向かって行ったディステリアが天魔剣の峰を叩きつける。ほんの一瞬、怪物が変化させられた生徒だと忘れたディステリアは、それを思い出して顔を青くする。後ろにいるセリュードたちも、顔が真っ青になった。
「やっちまった・・・・・・」
思わず呟いた後、怪物が黒いモヤに包まれてそれが晴れると学校の制服を着た少年の姿になる。それに疑問を浮かべた次の瞬間、他の怪物たちも襲いかかる。
「おわっ！」
「おい、ディステリア。さっき、光属性の魔力は・・・・・・」
「込めてない。というか、俺にはまだそんな余裕はねぇ！」
クウァル、セリュード、ディステリアの順で声を上げながら怪物の攻撃を捌く。それを聞いていたセルスは、ある可能性を思いついて杖を掲げた。
「スリプル・ウィンド！！」
眠気を誘う心地よい風を受け怪物たちが倒れ、黒いモヤが弾けると制服を着た少年の姿に戻った。
「やっぱり」
「やっぱり、ってどういうことだ？」
さっぱり訳がわからないディステリアが、天魔剣を肩に担いでセルスに聞く。
「光の力を打ち込まなくても、意識を奪えばいいのよ」
「はあ！？そんなので元に戻るのかよ！？」
「どういう原理かしらないが、それで怪物にされた生徒たちが戻るならやることは決まってる」
クウァルは頷くが、ディステリアとセリュードはそう楽観的に見る

ことができなかった。それから生徒が変貌した怪物に苦戦しつつも、セリュードたちは彼らを元の姿に戻し近くの部屋に移していた。あらかた片付くとセリュードは、シェルミナとフェルミナが持っているだろう妖精の力の気配を探っていた。

「まだ見つからないのか？」

いらつくクウァルに、「しっ！」とセルスが人差し指を口の前まで上げる。

「最初に見つからなかったのは、私たちが騒いでセリュードの集中を邪魔したからでもあるの」

「いつ聞いたんだよ」

「さっき生徒たちを運んでいる時、セリュードが愚痴ってたの」

セルスの答えに、ディステリアは表情を引きつらせた。辺りが静かになると、セリュードはもうしばらく目を瞑っていた

「・・・・・見つけた」

呟いて立ち上がると、「本当か！？」とクウァルが聞く。セリュードは部屋の前に誰もいないことを確かめると、廊下に出てディステリアたちを手招きする。

「こっちだ」

セリュードを先頭に、四人は廊下を駆けていく。

「追われてはいないだろうな」

クウァルの問いに、「どうしてだ？」とディステリアが聞く。

「後をつけられて隠れ場所を暴かれるなんて、間抜けにも程がある」

そんな時、目の前の廊下を、血相を変えた少女が走り抜けるのが見えた。

第６０話　追い詰められる獲物

隔離された学校の中、必死に逃げる少女とそれを追う怪物たち。セリュードたちはすぐに状況を察して動いた。

「助けなきゃ！！」

「当然！！」

セルスが息を呑み、ディステリアが駆け出す。しかし、ディステリアでは光属性の力を使っても怪物を生徒に戻すことができないため、逃げる少女を庇う足止めにしかならない。怪物の爪を天魔剣で止め、後続の怪物もまとめて押し留めると、両手に光属性の魔力を溜めたセリュードが突っ込み怪物に打ち込んだ。

「ギャアアアアアアアッ！！！」

怪物が上げた悲鳴に逃げていた少女が振り返り、倒れる怪物を見て壁にもたれる。が、ディステリアたちが見知らぬ人であることに気付き、後ろに下がる。

「あなたたち・・・・・・・何者・・・・・・・」

「俺たちは〈ブレイティア〉という組織の者だ」

「〈ブレイティア〉？何、それ・・・・・・聞いたことがない・・・・・」

疑いの眼差しを向けるホワンにディステリアが眉を動かすが、詰め寄ろうとする彼をセリュードが止める。

「最近動き出したからな、知られてなくて当たり前だ。いちいち掴みかかるな」

「別に、俺は・・・・・・・」

顔を逸らしたディステリアの後ろにいるクウァルを見て、ホワンは

目を見張った。
「あんた、確かシェルミナの・・・・・・」
「！シェルミナを知ってるのか？」
「彼女と会ってたでしょ、あんた。シェルミナの話にもよく出てたし」
「なるほど。携帯見て黄昏てたのは、そいつと関係あるのか」
「今は関係ないだろ」
からかうディステリアの腹を肘で打ち、冷たく言い放つ。腹を押さえてむせ返るディステリアにセルスが駆け寄ると、クウァルはセリュードの横まで歩く。
「君はシェルミナの友達か？聞いていた特徴と一致するが」
「ええ。どうやらあんたも、本人に間違いなさそうだけど・・・・・・」
「けど？」とセルスが呟くと、ホワンは厳しい表情で続ける。
「私、あんたが味方だって簡単に思わないから」
「そうか。別に構わない」
意外な答えに目を丸くするホワンの前を、クウァルは通り過ぎていく。
「力の気配はこの先か？」
「ああ。ただ、それがシェルミナという子のものかと聞かれると、自身がない」
「は？」とディステリアが聞く。
「気配を感じる場所が探るたびに変わってるんだ。最初はただの誤差と思ったんだが、ここまで変わり続けると自信がなくなってくる」
「多分、シェルミナとフェルミナが移動してるからよ。二人も逃げてるはずだから・・・・・・」
「移動してるわけじゃない。それなら方向や場所につながりがあるはずなんだが、それがなくて滅茶苦茶なんだ」
「えっ、つまり・・・・・・？」
理解で傷首を傾げるセルスに、セリュードは額に指を当てて考える。

「この先に感じた気配も、今探ったら別のほうから感じてるかもしれないんだ。移動したかも疑われるほど距離を離して」
「はあ!?そんなことがあるのか!?」
頭を抱えるセリュードの言葉に、信じられない様子でディステリアが声を上げる。
「わからない。とにかく、判断材料が少なすぎるんだ。この先に言って何があるかないかだけでも確かめる必要がある」
「それは構わないが、こいつはどうする?」
座り込んでいるホワンにディステリアが目をやると、身を強張らせた彼女にセルスが付き添う。
「・・・・・連れて行くしかないだろう。気配の元が本当に移動しているなら戻ればその時間を与えるだけだし、あそこにいる生徒がまた怪物に変わるとも限らん」
「どういうこと?」とホワンが聞くが、「行くぞ」とクウァルに急かされ、五人は進むことになった。
「えっとね、私たちもよくわかってないんだけど・・・・・」
セルスがここに来るまでのことを説明する。確証を得てない情報は返って混乱を招くが、遮断すれば恐怖を招く。確証がないことを断りつつ、自分たちが知ってることを話すことにした。
「じゃあ、怪物になった生徒は元に戻すことができるんですね?」
「でも、原因がハッキリしてない内は気を抜いちゃいけないと思う。元があるなら、それを叩かない限り繰り返しだと思う」
「(そこは『思う』ではなく確定すべきところ)」
不安そうなセルスの言葉にディステリアは内心思っていると、ホワンが立ち上がる。まだセリュードたちを信用していないのか、その表情はとても厳しい。
「この先に何かあるのは、間違いないと思う」
「どうしてそう思うんだ?」
クウァルが聞くと、ホワンはセリュードの前まで行って廊下の奥を見つめる。

「あの先にある部屋、私たちがよく使うから」

―※＊※―

『第一生徒会室』にいるシェルミナは、部屋の隅に座って落ち込んでいる。自分たちは助かるのか、どうしてこんなことになったのかと考え、強い不安を抱いている。

「（クウァル・・・・・・）」

『第一生徒会室』のドアを少し開けるフェルミナは、隙間から外の様子を伺っている。

「（さっきから聞こえる音や悲鳴。あれは何？）」

しかも、少しずつこちらに近付いている。警戒を強めずにはいられなかった。

「フェルミナ・・・・・・私たち、どうなるの？が」

「わからない。けど、このまま隠れてるわけにもいかない」

ドアを閉めて悔しげに拳を握り、シェルミナの側に戻る。

「とにかく、最悪でもここから脱出して助けを呼ばないと」

「脱出って、ホワンはどうなるの！？」

「最悪、って言ったでしょ。逃げる途中でホワンを見つけて一緒に逃げられればいいけど、そんな幸運・・・・・・」

言いかけた時、こちらに近づく複数の足音が聞こえる。

「ホワン！？」

「違う。彼女だったら、足音は一つだけのはず」

「だった・・・・・・」

誰かと聞こうとすると、足音は部屋の前で止まる。敵の可能性を考えたフェルミナは、シェルミナを庇って身構える。

「・・・・・・あそこだ」

「間違いないのか？」

「うん。昼休みにはよく使ってるから」
「この声・・・・・・」
ドアの向こうから聞こえた声にシェルミナが反応すると、そのドアが開いた。現れたのはホワン、クウァル、セリュード、その後ろにディステリアとセルスが立っていた。
「ホワン、クウァル！！」
「シェルミナ、フェルミナ。無事だったんだね！」
再会を喜ぶホワンとシェルミナが駆け寄ると、フェルミナはセリュードたちに目を向ける。「
あなたたちは。どうしてここに？」
「シェルミナから助けを求められた。あと、親父さんからも託された」
「お父さんが・・・・・・」とフェルミナが呟くと、シェルミナはホワンの体をさわる。
「ねえ、大丈夫？怪我とかない？」
「大丈夫よ。この人たちに助けられたから」
ホワンが振り返ると、クウァルはセリュードのほうを向いて聞いていた。
「セリュード。さっき感じてた力の気配は、シェルミナたちだったのか？」
「いや・・・・・何やら嫌な感じの力だった。シェルミナたちの気配を感じたのは最初に探った時だけだし・・・・・・」
「その嫌な力の気配は？」
ディステリアが聞くと、「この奥だ」と廊下の奥を指差した。
「じゃあ、正体を探りにいくか」
「シェルミナたちはここにいるんだ。いいな」
「えっ、ちょっと、クウァル」
不安そうなシェルミナをなだめ、クウァルたちは奥へ進む。それを見送ったシェルミナの肩を、フェルミナが優しく叩いた。
「待っていよう。あいつらのこと信じてるなら」

「フェルミナ・・・・・・」
「少なくとも、あんたは信じてるんでしょ？クウァルって奴のこと」
「うん」と頷いたシェルミナをつれて、フェルミナは『第一生徒会室』に戻る。
「フェルミナは、信じてないの？」
ホワンの問いに「ない」と即答し、シェルミナとホワンは苦笑した。
そんな時、校舎の外で爆音と何かが割れる音が響く。
「何・・・・・・？」

―※＊※―

校門前を塞ぐ壁を破壊し、クーフーリン、ファーディア、ジークフリート、ブリュンヒルドの四人が入って来た。
「先にセリュードの部隊がいるはずだが・・・・・」
ジークフリートが辺りを見渡していると、後ろに開いていた穴が勝手に塞がる。そちらに目をやると、そこに校舎内にいるのと同じ怪物が集まってきた。
「おいおい、ただ隔離されたんじゃなかったのか」
「この状況を見るに、そうではなかったようだ」
クーフーリンとファーディアがゲイボルグとクラドホルグを構えると、怪物たちが一斉に襲いかかってくる。当然、迎え撃とうとしたが、
「ちょっとまて！そいつら、人かも知れないぞ！！」
「なんだと！？」
校舎の窓から顔を出して叫んだクウァルの声に、クーフーリンは思わずブレーキを踏み、飛びかかってきた怪物は回し蹴りで蹴飛ばした。
「どういうことだ、セリュード！！」

「言ったとおりの意味です！この結界を張った奴、生徒たちの恐怖心を具現化させて姿を変貌させてるみたいなんです！」
「そんな！」
「容赦なく倒したいが、それでは・・・・・・」
ブリュンヒルドとジークフリートも武器を構えたまま手出しできない。一応、向かってきた怪物を気絶させてはおり、倒れた怪物は学校の生徒の姿に戻る。
「本当かよ」
「ええ。しかも殺したら完全に怪物になって戻せなくなります！」
「くそっ！だとしたら、自動的に消耗戦かよ！」
悪態をつきながらゲイボルグで怪物を打ち倒しながら、「セリュードに伝えろ！」と声を張り上げる。
「人間の恐怖心を具現化させてるなら、それはこの結界の作用という可能性がある」
「確証があるんですか！？」
「そういう結界があるというのを聞いたことがあるってだけだ！どの道、こいつを壊さなきゃ避難させられない！」
「わかりました、伝えておきます。ですから、くれぐれも殺さないでおいてください！」
そう言ってクウァルは校舎内を駆けて行ったが、ジークフリートとブリュンヒルドは妙な違和感を覚えていた。
「（何・・・・・・？）」
「（何か変だ・・・・・・）」
そこに飛びかかった怪物の爪をグラムで受け止め、ブリュンヒルドがジャンプして蹴り飛ばす。その様子を、廊下の曲がり角からクウァルが伺っていた。
「そうそう、殺さないようにしていてくださいよ。この馬鹿げた世界を守りたいんでしたらね」
「いたわね」
冷たい少女の声に振り返ると、突っ込んだ何者かがクウァルを強襲

する。外から差すわずかな光が、強襲者の金髪を映す。
「おいおい、人違いだ。見た目だけで判断するな」
呆れた声を出してクウァルの姿が変わると、強襲者は目を見張り突き出していた腕を下ろした。
「お前の連れは判断が甘いな、カイネ」
強襲者の後ろの教室の引き戸が開き、誰かが出てくる。
「それは失礼しましたね。先日やっと踏ん切りがついたようなので、それで大目に見てください」
「ふん。ヤダね」
鼻で笑った男に、カイネは何か思い出したように声を漏らす。
「そういえば・・・・・そろそろ毒が効き始めるんじゃない？」

―※＊※―

『第一生徒会室』を奥に進んだ渡り廊下の先に着いたセリュードたちだが、これといって目ぼしい物はなかった。
「本当にこっちだったのか？」
「回を重ねるごとに自信がなくなってるって言っただろ・・・・・・」
不満を口にするクウァルに、疲れた表情のセリュードが返す。
「早く解決して、シェルミナたちが外に出られるようにしないと・・・・・」
「そういえば・・・・・・」と呟いたディステリアに視線が集中する。
「あいつらがまだ学校にいるのって、生徒から逃げると言うより外に出られないからだろ？」
「ああ。外に出ようにも、周りを囲む高い壁のせいで通れないからな」

「私たちは簡単に通れたのにね」
「それを言うなよ」と、ディステリアがセルスに突っ込むと、今度はクウァルが口を出す。
「そういえば、クーフーリンたちが入ったのを見た時も思ったが、壁は壊れてもすぐ再生するようだな」
「とすると、壁というよりかは結界か」
「いや、どちらも壁だろ？」と、ディステリアがクウァルに突っ込む。
「・・・・・お前、文句ばっかり言ってないで、少しは知恵出せ」
「それ以前に静かにしてくれ」
疲れたセリュードの声がすると、三人は彼のほうに目を向ける。
「ダメだ、さっぱりわからなくなった」
「探してたんだ。ごめんなさい」
謝るセルスにセリュードは首を振る。『気にするな』と慰めていると言うより、『今更だ』と無言で責めてるようにも取れる。
「囲んでるのが結界ってことは、作り出してる奴がいるってことだろ？そいつを捕まえて解かせればいいんじゃないか？」
「最近は、マナを取り込んで入力されている術式に従って結界を張る装置も作られている。ウチの城にあるのもそれだし」
「じゃあ、セリュードのほうが詳しそうだね」
納得するセルスに、「いや」とセリュードは首を振る。
「俺は知識をかじってる程度。専用技師か魔術師じゃないと理解でない」
「（セリュードって、魔導騎士じゃなかったっけ？）」
「（はて？）」
声をひそめたセルスとディステリアが首を傾げていると、「とにかく」とセリュードが声を出す。
「これだけ大規模な結界を作り出すものだ。少しばかり魔力の気配を感じさせてもおかしくないのだが」
「（気配、か・・・・・・）」

ふと、ディステリアも目を閉じて気配を探ってみる。しかし、周りの至る所に同じようなものが群がっている感じに驚き、意識を覚醒させる。

「（なんだ、今の。暗い中に紫の魔力の塊が集まってうごめいてる感じだ。あんなのをセリュードは感じてたのか）」

さっき感じた身の毛もよだつような感覚の中、セリュードはシェルミナたちを見つけ出した。すごいと思いつつ、無理はさせられないとも思った。

「発生装置は、ある一定の間隔で置くことで結界を張ることができる。だが、その内一つが壊れるだけで不安定になる」

「不安定になるとどうなるんだ？」

「強度が落ちる。武器の一振りで簡単に壊れるようになるが、俺たちには関係ないな」

発生装置が壊れてるかわからないが、セリュードの言う通り四人もクーフーリンたちも結界を簡単に壊して中に入って来た。少なくとも、ディステリアたちは発生装置をどうにかしなくても結界は壊せる。

「なら、俺たちが結界に穴を開けてシェルミナたちを逃がしたほうがいいんじゃないか？そのほうが、ゆっくり黒幕を探せる」

「・・・・・しかないか。気絶させた生徒たちは、下手に出すわけにもいかないが放っておくわけにもいかないし」

「それはクーフーリンたちに任せよう」

ディステリア、セリュード、セルスの順に意見を口にし、頷く。早速四人は、シェルミナたちがいる『第一生徒会室』に戻った。

「シェルミナ。ちょっと話が・・・・・」

クウァルがドアを開けると、言葉を切って目を見張った。中にはフェルミナとシェルミナとホワンがいたが、彼女は友達であるはずの二人に剣を向けていた。

「シェルミナ、どうしたんだ！？」

ただならない様子に、警戒を向けていたセリュードたちもやって来

る。部屋の様子を見るなり、すぐ身構えてホワンを押さえようとする。
「貴様・・・・・・！」
「動かないで！」
クウァルがすぐにでも飛びかかりそうになったが、ホワンが叫んで踏みとどまる。
「・・・・・・動けば・・・・・・二人とも切ります・・・・・・」
震えているホワンの声に、セリュードは何か違和感を受けた。
「・・・・・・ホワン。どうして・・・・・・どうして・・・・・・？」
震えながら聞くシェルミナに、ホワンはおびえたような表情をしていた。
「・・・・・・ごめんなさい・・・・・・間違っているのはわかってる。でも・・・・・・私はまだ、死にたくない・・・・・・」
「死にたくない？私たちは、お前に何もしない」
フェルミナが言うと、ホワンは首を横に振る。
「違うの・・・・・・もう、この学校で正気を保っている生徒は、あたしたちだけなの。みんな・・・・・・あの怪物にやられて・・・・・・」
「怪物・・・・・・？そのようなものになど、私たちは会わなかった」
「ウソじゃない。先生が・・・・・・そう言ったの・・・・・・」
シェルミナは息を飲み、「先生が？」と聞いた。
「先生は軍の諜報員だったの・・・・・・今朝の放送は、先生の仲間が勝手にやったことで・・・・・・あの後、先生は誰かが送り込んだ怪物と戦うって言ったきり・・・・・・」
眉をひそめるセリュードはすぐ思い当たった。ここに来る途中によく遭遇した、黒い体の怪物。
「・・・・・・気絶させると生徒に戻るあいつらか」
「だが、おい待て。あいつは、生徒に戻せることを知らないのか？」

「あるいは・・・・・・姿を戻せても、元の人間には戻れない」
「そんな・・・・・・」
セルスたちの会話はホワンに聞こえていない。ショックでうつむくシェルミナを庇い、厳しい表情のフェルミナがホワンを睨む。
「それと今のこの状況、どう関係があるの」
「先生が言ってたの。その怪物は妖精が出す力に弱いって。私も妖精の力を持つ者の血を浴びれば、妖精の力が使えるようになる・・・・・その怪物から身を守れる・・・・・・」

第６１話　一瞬の勝負

「バカな！ジークフリートが倒したファーブニルとは訳が違うんだ！バカなことは考えるな！」

セリュードが叫ぶが、その事例を三人は知らない。呪いの財宝を独り占めにしてドラゴンとなった小人ファーブニル。それを退治したジークフリートはその血を浴びて不死となったが、それと妖精を一緒にされたらたまらない。第一、半妖精のセリュードの血に不死の作用は愚か治癒に関する効能はない。

「だから、落ち着け・・・・・武器を置くんだ・・・・・」

「やだ、信じられない・・・・・あなたたちが無事なのは、妖精の力が使えるからなんでしょ？」

セリュードはそうだが、ディステリアとクウァルとセルスは違う。だが、精神的に追い詰められ冷静な判断ができないホワンを納得させるのは難しく、力で抑えるしかなかった。

「結局あんたも、自分が大事って訳・・・・・？」

「そうじゃない！・・・・・そうじゃないけど・・・・・私・・・・・」

フェルミナに厳しく言われ混乱してきたホワンが、両手で祈るようにして短剣の柄を額に当て、涙を流す。

「死にたくない。でも、あなたたちを殺したくない。どうしたら・・・・・いいの・・・・・」

セリュードが後ろに回した指で合図を送り、ディステリアが気付かれないようにゆっくりと動く。だが、どこかから細い針のような物が飛んできて、回り込もうとしているディステリアの足元で小さな金属音を響かせた。

「うわっ！なんだ！？」
それに気付いたホワンが、「動くな」と短剣を向けた。
「ちっ、ディスの野郎。何、失敗(ぽか)やらかしてるんだ」
クウァルが歯軋りをする。ディステリアをちら見して、再びホワンのほうを向く。しかしセリュードは、ディステリアの足元で音を立てた針を見ていた。
「（なぜ、あのような場所に針が？誰かが飛ばした？それなら誰が？）」
セリュードが、顔をほとんど動かさずに周りを見る。すると、天井に張り付いている、怪しい黒い物体を見つけた。その物体は、背中についている一つ目で、ぎょろりとホワンを見つめている。
「（・・・・・監視してるって訳か・・・・・・）」
セリュードは両手を後ろで合わせ、そこに魔力を集中させる。
「（魔力探知能力を持っている可能性もあるが・・・・・・それを探る手も探る時間もない・・・・・・）」
ほんのわずか顔を動かし、セルスとクウァルに視線を送る。
「（やることはわかってるな）」
「（当然）」
「（俺はディステリアと違う）」
「（おい。その顔は、俺をどう思ってるかわかるぞ）」
クウァルの表情から見下されたと思ったディステリアが、眉を寄せて睨み付ける。だが、すぐ思考を切り替えて、目の前のやるべきことに集中する。
「（どう動くにしたって、まずは監視用のあいつか）」
真っ直ぐ黒い物体を見据え、セリュードは賭けに出ることにした。
だが、そちらに集中していた注意は、一人の動きで途切れる。そのせいで動き損ねたセリュードたちの意識が向かった先。シェルミナはゆっくりと立ち上がると、ホワンのほうに近づいた。
「なっ、なんのつもり・・・・・・」
だが、シェルミナは答えない。止めようとするフェルミナを押しや

り、ホワンに近づいていく。
「こ・・・・・来ないで・・・・・・お願い・・・・・・」
泣きそうな表情で懇願するが、シェルミナは歩みを止めようとしない。ホワンは少しずつ、後ろに下がっていく。
「・・・・・お願い・・・・・・近づいたら・・・・・・刺してしまうかも・・・・・・」
「いいよ。私を・・・・・・刺して、ホワン」
思わぬ言葉に全員が驚き、「シェルミナ!!」とフェルミナが叫ぶ。
「妖精の力があれば、生き残れるんでしょ？」
「だからって・・・・・・バカな真似はよせ」
低い声で唸り、セリュードは機会を伺う。室内の様子を見張っている黒い物体に集中し、押さえるタイミングを伺っている。
「（こんな切羽詰った状況は始めてだが、勝負が一瞬なのは変わらない。タイミングを逃すな・・・・・・）」
ただでさえ疲れているのに、まだ集中しなければならない。正直辛かったが、これから起こるであろう悲劇を止めるにはそうも言っていられない。ディステリアが視線を向けるが、考えていることが完全に伝わりはしない。代わりに、近くのクウァルと視線が合う。
「（俺とクウァルが二人を押さえる）」
「（合わせろよ）」
問題は邪魔が入らないか。見張っている黒い物体はディステリアの邪魔をしたことから、まず〈デモス・ゼルガンク〉の同類。そちらはセリュードが押さえようとしている。次の問題フェルミナほうだが、妹の行動に動揺して動けないようなのであまり気にする必要はない。と言っても、何をしでかすかわからないので注意くらいは向けるべき。むしろ問題すべきなのはシェルミナ。
「（これ以上早まるなよ）」
その早まった行動が〈デモス・ゼルガンク〉の狙いだという可能性が大きい。パルティオンでクウァルが聞いた『愚かなままで逝ってもらいたい』という言葉から察するに、連中は何か過ちを犯させて

殺すことを望んでいるようだ。どういう意図があるかセリュードたちは知らないが、敵の思惑はできる限り潰すようクトゥリアからは言われていた。

「（とは言え・・・・・・）」

それができるのか。今のこの状況は、セリュードを試しているようにも感じられる。

「（運命を操る神がいるのなら、こうした状況も回避して欲しいものだ）」

もっともそれを言ったところで、色々言われて言い包められるだろう。

「やめて・・・・・近寄らないで・・・・・・」

後ずさりを続けるホワンの足が、テーブル近くの椅子に当たる。シェルミナは近づいて、彼女が持っている短剣に手を添えた。

「・・・・・私・・・・・・死ぬのは怖いけど・・・・・・もっと怖いのは・・・・・」

手を握ったシェルミナの両腕が震えだし、涙が流れる。

「大切な友達が・・・・・傷つくこと・・・・・・」

「!?・・・・・私・・・・・私は・・・・・・」

「だから・・・・・私の分まで・・・・・・」

目を見張るホワンの短剣の刃先を自分の喉に向け、一気に突き刺そうとする。

「私を力で・・・・・生き残って・・・・・・」

「やめて!!」

とホワンが叫ぼうとした瞬間、真っ先にセリュードが動き、ほんのわずかな一瞬の後にディステリアとクウァルが動いた。

「（うまくいけよ・・・・・・!!）」

飛び上がったディステリアは上から、床を蹴ったクウァルは下から手を伸ばし、セリュードの手は黒い物体の目玉に迫った。

―※＊※―

暗闇に包まれたモニター室。その中で一人、画像を見ているウロギートがいた。

「あの小娘には、『ディゼアビースト・スレイブドール』の姿と能力を見せている。もうそろそろ精神的に追い詰められてくるはずだ」

画像に映っているのは、追い詰められた表情で短剣を持っているホワンと、彼女の手を握っているシェルミナ。何もできずに部屋の入り口で傍観しているだけのセリュードたちは、大した脅威と認識していない。

「（・・・・・ククククク・・・・・そうだ、苦しめ。苦しんで、苦しんで、苦しんだ末に友を殺め、『自責の念』に苦しめられるがいい・・・・・・）」

口元をニヤリと歪ませ、不気味な笑みを浮かべる。

「（後悔と自らへの憎しみを抱いて自らの命を絶てば、我が同胞に加えられる・・・・・・）」

画面の端でディステリアが、シェルミナとフェルミナのいる所に移動しようとしているのが目に入る。

「（回り込むつもりか・・・・・？こしゃくな）」

指をすばやく動かすと、黒い物体に針が生え、ディステリアの足元に飛ばした。針は床に刺さらず彼の足元に散乱したが、狙い通り音を立てたらしく、ホワンがセリュードたちのほうに短剣を向けた。

「邪魔はさせんぞ。そろそろ、こいつの精神は限界のはず・・・・・」

そう言っている間に、近づいたシェルミナがホワンの手に自分の手を添え、喉を突き刺そうとする。飛び出したディステリアがシェルミナを突き飛ばし、代わりにホワンに胸を刺される。

「これは・・・・・」

ウロギートは思わずイスから立ち上がる。まさか、邪魔者である〈

ブレイティア〉のメンバーが代わりに刺されるとは。
「幻獣の血を秘めているとはいえ、本質は人間。刺された場所次第では即死もありえる」
ウロギートにとってはうれしい誤算。胸を刺されたディステリアは崩れ落ち、血相を変えて駆け寄ったセルスが治癒術をかけたが、血まみれのディステリアは動かない。
「どうやら、急所だったようだな」
術をかけるのをやめうな垂れるセルスを見て、クウァルは唖然とする。その後、ホワンは絶望に満ちた表情で反対側の壁にもたれ、詰め寄ったフェルミナに血まみれの短剣を突き刺した。胸を貫かれて床に倒れるフェルミナを見て、ホワンは錯乱状態に陥り、発作的に自分の胸を剣で貫いた。姉と親友の子を目の当たりにして、シェルミナは呆然とした表情で座り込んだ。
「これは・・・・・・！」
クウァルがシェルミナの体を揺さぶるが、なんの反応を返さない彼女に顔をうつむける。ハッとしたように顔を上げ、監視カメラのほうを見ると、怒りに満ちた顔で拳を振り上げ、カメラを破壊した。映らなくなった画面を見てウロギートは立ち尽くしていたが、やがて顔を歪めて笑みを浮かべた。
「・・・・・・ク・・・・・・・・ククク・・・・・・・クハハハハハハハ！！」
誰もいないモニター室に響く笑い声。天井を仰ぎ、顔に手を当て、しばらくウロギートは笑い続けた。
「これは傑作だ。これほど早く自責の念に追い詰められるとは！！これなら今すぐにでも、最高のディゼア兵を作り出せる・・・・・・」
笑いながらモニター室のドアを開け、廊下を歩いていく。
「外の元英雄どもも、そろそろ結界を発生する装置に気付く頃だろう。潮時だな」
怪物の姿に変化させているとは言え、中身は戦闘技術を知らない一

般人。殺せないとはいえ、戦い慣れた英雄たちの手にかかれば、制圧されるのは当然。そんなことを考えながら、自分が担任をする教室に辿り着く。

「その前に仕上げと行こう。人間のディゼア化。思考を失ったビーストにすらできなかったが、今回得たデータを生かせば・・・・・・わざわざ〈負の感情〉を結晶化しなくても兵士を造り出すことができる」

教室に入り、縛って魔方陣に入れてある生徒に近づく。生徒たちは意識を失っているため逃げることもできない。笑みを浮かべたウロギートが近づく。

「さて。最後にも役立ってもらおう。こちらが退くまでの時間稼ぎぐらいには、な」

その時、突然後ろのドアが開く。目を見張って後ろを振り向くと、そこには。

「ずいぶんと驚いてますね・・・・・・先生・・・・・・」

驚愕に目を見開くウロギートの前には、シェルミナ、フェルミナ、ホワンの三人が立っていた。

―※＊※―

追い詰められた状況の中。シェルミナが自ら喉に剣を突き刺そうとした瞬間に起きたことは全て、一瞬の出来事だった。セリュードは黒い物体に左腕を向け、クウァルの拳がシェルミナの腕を直撃し、短剣を叩き落とす。その衝撃で、短剣が落ちると同時にシェルミナの体も床に倒れた。

「アホか、お前は！！友達が傷付くのが怖いなら、一生分のトラウマになるようなことしてんじゃねぇよ！！」

起き上がりながら、「で、でも！」と叫ぶ。

「でもでもだってでもない。お前が死んで解決なんてするはずがねえ！！」
「そのとおりだ」
黙ってクウァルを見つめるシェルミナに、謎の黒い物体を掴んだセリュードが呟く。
「お前を親友に手をかけさせる。それが敵の狙いだったようだ・・・・・」
「それってどういう・・・・・・・」
フェルミナが聞きかけたが、「その前に」とセリュードに割り込まれた。
「みんな。少しばかり協力してくれ」

―※＊※―

「ば・・・・・・バカな。お前らは確かに、命を絶たれたはず・・・・・」
唖然とした表情をしていると、三人の後ろから人影が現れた。
「それは俺が魔法で見せた幻影。残念だったな」
得意げなセリュードの言葉にウロギートは目を見張る。彼の手には、監視用にはなった人工使い魔が握られていた。「バカな！？この結界空間の中では、全ての魔術は効力を弱める。幻術など効果すら発揮できないはずだ」
「だが、現にあんたはホワンがディステリアを刺し、自分も命を絶ったと思い込んでいた」
自分が見た映像と同じことを言われ、ウロギートは後ずさりした。
「あれは俺が見せた幻だ。城勤めしている時に見たミステリー小説の展開を真似て作ったんだ。どうだ、リアルだっただろ？」
「そんな映像だったんですか？というか、俺刺されたの！？」

自分を指差してディステリアが驚きの声を上げる。その横に立っているクウァルは、難しい顔をしている。
「似たような展開の小説、俺も読みましたが・・・・・・別段、面白いとも思いませんでしたよ」
「いや。あのシリーズは全部読むべきだよ」
「そうかな。私はあんまり好きじゃないけど・・・・・・」
小説を進めるセリュードに対し、セルスは複雑な表情をしている。
そんな彼らを見て、フェルミナは内心呆れていた。
「（大丈夫か、こいつら・・・・・・）」
会話もそこそこにセリュード達がウロギートのほうを向くと、前に出たシェルミナが聞く。
「・・・・・先生。どうして」
「う・・・・・くっ・・・・・ふっ・・・・・」
左手を顔に当てると、その下で不気味な笑みを浮かべ、「クックックックッ」と笑う。
「誤魔化すのは完全に不可能なようだ。仕方ない・・・・・」
静かにそう呟くと、後ろに隠していた右腕を振った。
「我が直接、手を下す！！」
素早く抜いた剣を振るが、直前で飛び出したセリュードが槍で受け止めた。
「場所を変えようじゃないか」
「・・・・・いいだろう。我が計画を邪魔したこと、後悔させてやろう」
その後、ウロギートは教室の壁を突き破り、それを追うセリュードも目にも止まらぬスピードで教室を駆け抜け、壁に開いた穴から外に飛び出した。
「おいおい。この壁の穴、どうするつもりだよ・・・・・」
呆れながら壁の穴から外を見ると、ウロギートの繰り出す攻撃にセリュードが苦戦していた。
「あの野郎・・・・・セリュードだけに任せておけない。俺も加

勢するぞ！！」
勢いよく飛び出すクウァルの後に、「俺も行くぞ！！」と飛び出した。
「じゃあ、私も行くね。シェルミナちゃん、フェルミナちゃん、ホワンちゃん。もう、大丈夫だよね？」
「はい・・・・・・」
三人が頷くと、セルスは笑顔になって穴から飛び出して戦いに加わった。そこに、ウロギートにより催眠状態に陥った学校の生徒たちが群れでやって来た。縛られて魔方陣に捕らえられていた生徒も、虚ろな表情をして操り人形のように立ち上がる。
「・・・・・・みんな・・・・・・」
襲いかかってくるとはいえ、こちらから攻撃することはできない。
シェルミナとフェルミナは、ホワンを挟むように背中を合わせた。

第６２話　迎え撃つ敵三つ

「くらうがいい！！」
鈍い灰色の光を放つウロギートの剣の斬撃を、セリュードは槍の柄で防いでいたが、問題はそのウロギートが従えている増援だった。
「行くがいい！ディゼアビースト・スレイブドール！！」
間接部が丸見えになっている人形に酷似した黒い怪物が、セリュードの隙をついて攻撃してきていた。
「（これが、ホワンって子が言っていた怪物か。能力がはっきりしない以上、うかつに動けない・・・・・・）」
ウロギートの剣がセリュードの槍を弾き、そこにスレイブドールが腕を突き出す。
「（・・・・・まずい）」
だがその攻撃を、クウァルの鉄拳が殴り飛ばす。
「あんたにしてはうかつじゃないか？」
着地してセリュードのほうを向くクウァルに、別の何者かが飛び掛った。二人は組み合ったまま、離れた場所まで校庭を転がる。
「クウァル！？」
その隙を突き、スレイブドールの腕がセリュードの腹に突き刺さった。その瞬間、ウロギートの口元がニヤリと歪む。
「くっ・・・・・でやああっ！！」
突き出した槍の穂先が胴体を貫くが、スレイブドールは槍が抜けても何事もなかったかのように、ウロギートの近くに着地した。
「ククククク・・・・・私の勝ちだ・・・・・」
「決着はまだついていない。勝負の結果は最後までわからないもの

だ・・・・・・」
静かに槍を構えるセリュードだが、その瞬間に体に異変を感じた。
「（くっ・・・・・・なんだ・・・・・・体が・・・・・・？）」
体が痺れ、意識が朦朧とする。セリュードはすぐに、先程の一撃が関係していると悟った。そこに、校舎の穴から飛び出したディステリアとセルスが着地する。
「次は俺たちが相手だ」
自分の武器である天魔剣を構えるディステリアに、ウロギートは勝ち誇ったような笑みを浮かべる。
「貴様・・・・・・何がおかしい・・・・・・・！！」
「君の仲間が置かれている状況を、理解していないことが、だよ。君の仲間をよく見てるといい」
ディステリアが「何？」と敵を見据えていると、セルスはセリュードの異変に気付いた。
「セリュード？どうしたの！？」
急いで駆け寄るセルスに、ウロギートは「勝ったな」と思ったが、
「大丈夫？」
「ああ」
聞いてきたセルスに苦しそうに答えたセリュードを見て、ウロギートは目を見張った。
「何！？バ・・・・・・バカな・・・・・・」
「何が『バカな』なんだ！？」
ディステリアが放った天魔剣の一撃を自らの剣で防ぎ、「ぐっ」と苦虫を噛み潰したような表情になる。
「（バカな・・・・・・ディゼアビースト・スレイブドールの能力は『催眠液投与』。爪に仕込まれた液を投与された者は、その作用で脳内物質の分泌が抑えられ、意識が眠りかけた状態にあるはず・・・・・・）」
状況分析のため防戦一方のウロギートに、ディステリアは高速・連続で攻撃を仕掛ける。

「（こいつの力は未知数。ならば、全力を出していない今のうちに、けりをつける）」
一気にけりをつけるため、ディステリアは天魔剣に魔力を込める。
だがその瞬間、ディステリアの右腕を激痛が襲った。
「・・・・・ぐっ・・・・・・!?」
自分の剣を押す力が弱まったことに気付いたウロギートは、そのまま一気にディステリアを押し飛ばした。
「うわぁっ!!」
着地したディステリアに、「フン」とウロギートは余裕の笑みを浮かべた。
「（しまった・・・・・せっかくのチャンスを・・・・・）」
「どうやら・・・・・貴様らには、スレイブドールの能力は効かないらしいな」
ディステリアの後ろには、セルスの回復魔法で傷を癒してもらったセリュードが臨戦態勢をとっていた。
「ホワンって子の証言からすると、そのスレイブドールって奴の能力は、他人を操る能力のようだな」
「正確には、スレイブドールの爪で皮膚を傷つけられ、そこから分泌される液を体内に取り込んだ者を、暗示にかけたものに近い状態で操る能力だ」
「そうか。だがいいのか?そんなことをばらせば、俺たちや軍に対策をとられるぜ?」
息が上がっているディステリアに、「ククククク」と笑う。
「対策をとられない方法が、一つだけある」
剣の柄を握り音が鳴ると、セリュードたちも武器を構える。
「貴様らを・・・・・皆殺しにすることだ!!」
スレイブドールと共に一斉に襲いかかるウロギートを、セリュードたちも飛び出して迎え撃つ。
「リヒト・ランス!!」
「ファイアボール!!」

セリュードの光の槍とセルスの炎の弾がウロギートに向かっていくが、それを横から伸びた腕が庇う。身代わりになったスレイブドールの腕に当たるが、煙から飛び出したそれらは無傷。
「くっ。ならこいつで・・・・・・」
ディステリアが天魔剣に光属性の魔力を込めるが、込めれば込めるほどディステリアの右腕に焼け付くような痛みが走った。
「ぐうっ・・・・・うおおおぉぉぉぉっ!!」
痛みを堪えて振り下ろした剣が、スレイブドールを地面に叩きつける。何事もなかったかのように起き上がると、でたらめに腕を振ってディステリアたちを吹き飛ばす。
「ルミナスランス!!」
体を回して天魔剣を突き出し、先ほど放ちそこねた光の槍を打ち出す。腕を潜り抜け胴体に直撃した光の槍はスレイブドールの体に穴を開けるが、何事もないかのように暴れ続ける。
「ウソだろ!?」
「驚いてる暇はない。来るぞ!!」
セリュードの声が響くと、八本に増えた腕がディステリアたちに襲いかかる。その間にウロギートは離れた場所から様子を伺う。
「お前らごときが相手になるかな?」
「うわっ!」
スレイブドールが滅茶苦茶に振り下ろす腕が、ディステリアたちを吹き飛ばす。セリュードの槍で突こうが、セルスの魔術を食らわせようが、怯むことなく攻撃を続ける。
「どうやら・・・・・ツキは私に味方しているらしい。貴様の仲間も、我が同胞が抑えてくれている」
溜め息をつくように呟くと、校舎玄関のガラス戸が開いて何かが飛び出す。
「おおおおおおおおおおおおおっ!!」
続いて響く雄叫び。ウロギートとディステリアたちの注意がそちらに向き、気付かないかのようにスレイブドールが腕を振る。

「――ゲイボルグ！！」
その腕を無数の矢が貫き、振り下ろす動作にすら耐えられなり自ら千切れる。
「なんだと・・・・・・！？」
ウロギートがそちらに目をやってやっと気付いたスレイブドールが顔を向けると、飛び出した影がその顔を思いきり蹴りつけた。
「クーフーリン、助かった」
その影の正体がすぐわかりセリュードが礼を言うが、言われたクーフーリンは腰を据えてゲイボルグを構える。
「そういうのは後だ。まずは目の前の敵を片づける！」

―※＊※―

後からジークフリートとブリュンヒルドとファーディアも駆けつけ、こちらの様子を伺っているスレイブドールに身構える。
「どうした、来ないのか？」
挑発するクーフーリンに、スレイブドールは動かない。
「自ら動こうとしない。まるで、人形だな」
セリュードの感想を聞き、「（ちっ）」とウロギートは舌打ちした。
「（与えられた命令は性格・確実にこなすが、奏者の思考読み取らなければ動くことすらできない。スレイブドールの欠点がここで出るとは）」
歯軋りするウロギートに影がかかる。気付いて上に目をやると、背中に黒い翼が現れたディステリアが天魔剣を掲げていた。
「フォーリング・・・・・アビス！」
技の名前を呟くと、そこから飛び出した羽が黒い流星群となって降り注ぐ。だが、ウロギートはその間を滑るように動いてかわす。その間、スレイブドールへ命令は出していなかった。

「ヴェント・ランス！！」
「アイシクルランサー！」
セリュードが突き出した風の槍をかわし、セルスが撃ち出した氷の槍をフットワークでかわす。
「もう一丁！フォーリング・アビス！」
かわした直後を狙って闇の力を集めた天魔剣を振り下ろす。狙いは悪くなくウロギートはかわせなかったが、代わりに受け止められる。
「くっ・・・・・うおおおおおおおおおおっ！！！」
構わず力で押し込み、徐々に天魔剣の刀身が迫る。ついに耐えられなくなったウロギートの右肩を切ったが傷は浅く、逆にディステリアが蹴り飛ばされる。その直後に闇の流星が降り注ぐが、土煙の中から出て来たウロギートのダメージは小さいようだった。そこにセリュードが飛び込むが、ウロギートの鋭い蹴り、拳に弾き飛ばされ、かざした手から放たれた衝撃波に吹き飛ばされる。
「うわあああああっ！？」
「くっ！！」
ウロギートの鋭い蹴り、拳に弾き飛ばされ、かざした手から放たれた衝撃波に吹き飛ばされる。踏み止まったもののダメージは小さくなく、ディステリアとセリュードは地面に倒れかける。
「ふん、鈍いな。その程度で我ら〈デモス・ゼルガンク〉を阻もうというのか？」
「ほざけよ・・・・・・」
「この程度で、諦めてたまるかよ・・・・・・」
「諦めない程度でひっくり返る実力差とでも？」
倒れないディステリアとセリュードにウロギートは呆れて溜め息をつき、空間に開いた穴から鈍く光る剣を抜いた。
「まあ、いくらザコでも試し切りくらいには使えるかな」
「ふん、ザコで上等」
不敵な笑みを浮かべ天魔剣を構える。彼らを回復させるために近づいていたセルスは杖を構えようとしたが、左腕を上げたセリュード

がそれを止める。
「ここからは俺がやる。二人は下がっていてくれ・・・・・・」
その言葉に、「何!?」とディステリアが突っかかる。
「ディステリアはすぐには動けないし、セルスは魔術の詠唱スピードがまだまだ遅い。俺が戦ったほうが、こちらに分がある」
「てめぇ。それ本気で・・・・・・」
ディステリアがセリュードの襟元を掴もうとするが、体に痛みが走り「ぐっ」と呻く。
「ディステリア。無理しないで。今、傷を癒すから・・・・・・」
杖に魔力を収集させ、回復魔法の一種であるヒーリングをかける。
ウロギートがセルスに剣を向けようとした時、一瞬で目の前に現れたセリュードが槍を振り、その一撃を剣で防ぐ。
「あの二人を傷つけた貴様を、俺は絶対に許さん!!」
「あっそ」
ウロギートはそっけなく言うと、そのまま二人は斬り合いになった。
「でやぁ!!」
槍を突き出して攻撃するが、ウロギートは剣を振ってそれを弾く。
横から振り下ろし、反対側の柄を振るが、ことごとく剣で防がれる。
「やはり弱いな!」
「まだまだ!!」
それからも果敢に攻めるがセリュードの攻撃は無駄が多く、相手に決定打を与えられずにいた。
「何をそんなに怒ってるんだ。ハッ!!」
反撃で放つ斬撃を構えた槍で止める。足元を狙った剣をジャンプで避けるが、そこにウロギートが蹴りを放つ。宙返りで反動を逃がして着地したセリュードだが、それから向かって来たウロギートは剣を突いて攻め立てる。
「ほらほらほらほら!どうしたんだ!?その程度じゃ、同族の半妖精すら守れないぞ!」
「くっ!!」

挑発しながら攻め立てるウロギートに、セリュードは防戦一方となってしまっていた。
「・・・・・セリュードの奴・・・・・・どういうつもりだ・・・・・」
「まだ動かないで。まだ傷が・・・・・・」
だがセルスは、ディステリアの体が受けているダメージが気になった。
「（敵の攻撃は受けてないのに、炎症になったようにダメージを受けている。力は扱え出したはずなのに、どういうこと・・・・・・？）」
ディステリアが風邪を引いた翌日。何度か訓練を行う内に光属性と闇属性の力を使ってもあまりダメージを受けなくなっていた。クトゥリアが言うには完全に使えるようになったとは言えないが、少なくともライジング・ルピナスとフォーリング・アビスに関して反動はなくなったらしい。
「（あれ？ルミナスランスは？）」
あれにも反動はない。ライジング・ルピナスとフォーリング・アビスを反動なしで使えるようになった影響かと思った。
「セルス・・・・・・」
「ん？」
「回復魔術の光が消えかけてるけど？」
怪訝そうな顔のセルスの集中力が途切れた瞬間、ヒーリングの光が消えていた。ディステリアに言われて、自身の集中力が途切れかけていることに気付いた。
「ああっ、ごめん！」
慌てて謝ると、再び術をかけて傷を治す。
「（それにさっきの天魔剣を包んでいた闇の力。フォーリング・アビスって、あんな技だっけ？）」
今まで見ていた中、あのように闇の刃を形成したことはなかった。
反動が出なくなったはずの闇属性の力で再び反動を受けるようにな

ったことを考えると。
「（もしかして・・・・・・）」
ある可能性が思い当たるが、治療を途切れさせないように集中する為、一端頭の隅に追いやる。
ヒーリングの光が消えると同時にディステリアが瞬時に飛び出した。
「えっ！？ちょ・・・・・・ディス・・・・・・」
呼び止めようとしたセルスはすぐそれをやめる。目の前のセリュードはウロギートの剣で自身の槍を飛ばされ、そこに蹴りをくらって地面に落とされていた。
「ぐっ・・・・・・」
体を起こそうとした瞬間、ウロギートは剣を突き出そうとする。だが剣が突き出された瞬間、間に割って入ったディステリアが、天魔剣でウロギートの剣先を受け止めた。
「・・・・・・ディス？」
攻撃を受け止めたディステリアは思い切り天魔剣を振り、ウロギートの剣を弾く。手合わせの際にクウァルが見せる深い踏み込み。それを自分なりにアレンジしてウロギートの懐に飛び込み、思い切り振り下ろす。天魔剣は地面を砕いたが、回避したウロギートは後ろに着地した。天魔剣を引いて立ち上がったディステリアは、セリュードに近づくと彼を後ろに蹴り飛ばした。
「うがっ！？」
「ちょ！！」
地面に叩きつけられたセリュードが悲鳴を上げ、セルスが声を出す。
「何するんだ！？」
「あんたらしくないな。ここまで直線的な戦いをするなんて・・・・・・」
「ぐっ・・・・・・」
痛いところを突かれて言葉を濁すと、飛ばされた槍を受け止めて、セリュードに駆け寄ったセルスがヒーリングをかけた。
「ディステリアの言うとおりですよ。どうしたんですか、本当に？」

黙り込むセリュードの前で、ウロギートとディステリアの剣がぶつかり合う。
「あの妖精の血を引く姉妹・・・・・・あの二人と友達を苦しめたあいつが・・・・・・許せなくて、な」
「ぐっ！くそっ・・・・・・」
一瞬、目を見張ったが、ディステリアが地面に着地した瞬間、崩れるように両膝を突いた彼を見て、もはや動くことすらできないと確信し、トドメを刺すべく突っ込む。だが、それを察知したセリュードが割って入り、ウロギートの攻撃を槍の柄で受け止める。
「死に損ないを庇って、どうするつもりだ？」
「仲間を助けるのは、同じチームとして当然のことだ！！」
「ハッ」
槍を弾いて笑うと、セリュードから離れて距離をとった。
「仲間、だと？笑わせる。強い力を持ってる奴に嫉妬感を覚えるくせに、よくそんな偉そうなことが言えるな」
「こっちのセリフだ。『この世界を修正する』とか偉そうなことを言っておきながら、やってることは罪のない人々を苦しめることか・・・・・・」
「クックック、罪もない・・・・・・だと？」
ディステリアの文句を聞くと、ウロギートはうつむきながら笑った。
「・・・・・・恥ずべき無知だ・・・・・・！」
その瞬間、ウロギートが出す殺気が膨れ上がった。
「（奴のまとう空気が変わった・・・・・・本気を出したってことか）」
セリュードは額から汗が流れ、槍を握る両手に無意識の内に力が入る。

―※＊※―

「おりゃあああああっ！！」
横薙ぎに振ったゲイボルグがスレイブドールの胴体を打つ。バランスを崩したところにすかさずゲイボルグを突き出し、その腹に穴を開けた。だが傷口から生えたいくつもの手がゲイボルグを掴み、固定する。
「ちっ、動けない・・・・・と焦ると思ったか？」
対するクーフーリンは笑みを浮かべていた。まず、内に眠る神としての力を腕にのみ解放し、力任せにゲイボルグを引く。だが引き抜かず、穂先が体に差し掛かるほどまで戻す。
「まさか・・・・・」
その先の行動を読んで、ファーディアは苦い顔をする。クーフーリンがゲイボルグを握る手に力を入れると、穂先から飛び出した無数の矢がスレイブドールを貫いた。
「っ！？っ！？っ！？」
「見たか！！」
そこでやっとゲイボルグを引き抜き、貫いていた胴体にさらに大きな穴を開ける。
「えげつない・・・・・」
「いやそうは言っても。俺たち、生き残るための手立てをしているだけだぜ」
地面に降り立ったクーフーリンの言葉に、ファーディアたちは納得せざるを得ない。と言うより、抵抗なく納得する。身構えた彼らに、腹に穴を開けたスレイブドールが襲いかかる。
「風穴開けられてもまだ来るのかよ！」
「まったく！連中はどういう悪趣味をしてるのかしらね！！」
声を上げながらファーディアは脇に飛び、ブリュンヒルドは片膝を下ろして構えた左腕の弓を連射する。複数の小さな矢はスレイブドールの体を貫通し、千切れた足が折れてバランスを崩したところにジークフリートがグラムを振り下ろし、一刀両断にする。だが、両

断されたにも関わらずスレイブドールは動き、左右から襲いかかる。
ブリュンヒルドを守るべく、慌ててセルスがクリスウォールを使おうとした瞬間、
「俺を忘れるな！クラドホルグ！！」
刀身が伸びた剣の一撃が、二つのスレイブドールの体をさらに切った。

第６３話　総力戦

ウロギートとディステリアたちが戦い、スレイブドールをクーフーリンたちが攻撃してる頃、ウロギートの言葉どおりクウァルはヘスペリアに足止めを受けていた。ただし、激しい戦いを繰り広げている訳ではなく、仲間の元へ行こうとするクウァルの前に立ちはだかり、戦いに加わらせようとしていないだけだった。

「・・・・・退いてくれないか？」

「私はあなたの敵よ。敵なら、どう答えるかわからなくはないでしょ？」

「否、だろ？だったら、力ずくで押し通るだけだ」

「その考え方・・・・・あんたの先祖と同じね！」

ヘスペリアの言葉の意味が割とすぐにわかった。

「力で不条理を押しのけ、力で敵を捻じ伏せ、力で・・・・・」

こちらに向けられた目から放たれる殺気に、クウァルは思わず身構える。だが、その殺気は今まで戦いに触れたことがない、黄金のリンゴの木の世話係が出すには重すぎて、強すぎる。

「――あたしたちの大切な仲間を、殺した」

「・・・・・教えてくれないか。なぜ、俺を狙う・・・・・」

しばらく黙っていたヘスペリアは、ゆっくり口を開いた。

「・・・・・あなたの先祖、ヘラクレスは・・・・・私たちと一緒に『黄金のリンゴ』を守っていたラドンを――殺したの」

一瞬、目を見張ったクウァルだが、「そうか」と呟いた。

「ヘラクレスの・・・・・１２の難業か・・・・・」

歯軋りをして睨みつけたヘスペリアの目は、悲しみに満ちていた。

「ずっと・・・・・ずっと、ずっと、ずっと、ずっと！！忘れようとしても、リンゴの木を見る度に思い出す」

潤んだ目を隠すように顔に手を当て、うつむくと、下ろしている右手を握り締める。

「忘れられないなら死にたいと思った時も会った。でも、同じ苦しみを持っている姉や妹を置いて、自分が死ぬことなんて許されるはずがない。そんなわがまま・・・・・・」

「だから、俺にその恨みをぶつけるのか・・・・・・」

「・・・・・あなたから見れば、逆恨みや八つ当たりなのは百も承知。でも、私は・・・・・・」

再び憎しみのこもった視線をクウァルに向ける。

「あんたに・・・・・・あんたがヘラクレスを継ぐ者だってわかった以上、ぶつけずにはいられないのよ！！」

「・・・・・難儀なことだな」

祖先の行いで後の子孫に恨みを向けられる。向けられた者はたまったものじゃないが、それは不条理に親友を奪われたヘスペリデスたちも同じ。決まりによって黄金のリンゴを戻されても、殺されたラドンを失った彼女たちはやりきれない気持ちだっただろう。

「だから・・・・・あなたの命でラドンを蘇らせる！！」

「命を移す？」向かって来るヘスペリアの言葉に、クウァルはハッとして彼女の拳を払う。

「まさか、〈活殺転魂（かっさつてんこん）のつづら〉！！」

「？何それ・・・・・・」

一瞬眉をひそめたヘスペリアは、クウァルを殴り飛ばした。結構軽い力で殴ったが、ヘスペリアの体は空中で回って地面を転がった。

「お・・・・・お～～い・・・・・・」

ここは戦場で、敵である以上女子供関係ないことはわかっているつもりだが、気が咎めるものは咎める。特に襲ってくるヘスペリアの身を案じるのは、油断、余裕、侮辱、侮りに当たるだろう。それでも、元が戦闘に向かないニンフの一人であるため、気にかけずには

いられない。
「（気を失ってるんなら、それ以上越したことはないんだけど・・・・・）」
クウァル自身、それが儚い願いだということはわかっている。クウァルが声をかけると、地面に手を突いたヘスペリアが起き上がる。
「ひっど～～い！こっちを戸惑わせて殴ったわね、女の子を！」
「ええっ！？そんなつもりは・・・・・って、関係ないだろ！」
「大有りよ！何、〈活殺転魂（かっさつてんこん）のつづら〉って！？私そんなの全然知らないんだけど！！」
「ええっ！？じゃあ、どうやってラドンを蘇らせるって！？」
普通は、というよりまともだったらまず聞かないこと。それがごく自然に出たことに、クウァルは驚くこともなく聞き流した。それはヘスペリアも同じで、クウァルのほうを向いて文句を言う。
「あれで殴り飛ばせたら、あのまま蛸殴りにするつもりだったの！？敵だから！？女子供容赦なし！？あんたには血も涙もないの！？」
「いやいやいや！血も流れてるし、涙も出る！・・・・・って、そんなこと今関係あるか！」
「大有りだって言ってるでしょ！」
傍から見れば馬鹿らしいとしか思えない言い争い。戦場でするにはあまりにも不釣り合いなことは言うまでもない。
「・・・・・やっぱり、あの乱暴者の血を引いてるだけはあるわ・・・・・」
声を落としたヘスペリアのまとう雰囲気がさらに重くなる。それだけでなく、彼女の金髪が何か風のようなものに煽られている。
「その血・・・・・今ここで絶やす！」
「（これは・・・・・腹くくるか）」
さっきの白けた空気から一転、気を引き締めて身構える。ジャンプで一気に距離を詰めてきたヘスペリアの拳をいなす。それを校舎の屋根から見下ろしていたカイネは、深く溜め息をついた。
「なんだよ。決意したにしてはまだ甘いじゃん」

足を組んだ膝の上に右腕の肘を着け、その手の上にさらにあごを置く。クウァルにラッシュや蹴りをかわされながらも、すばやく動いて翻弄するヘスペリアに目を向ける。

「（・・・・・ていうか、怒るとあんな顔するんだ。かわいい・・・・・）」

目を細くしてヘスペリアの起こり顔を思い出していると、カイネはハッと我に返る。

「・・・・・・・・・おいおいおい。何考えてんだ、僕・・・・・・」

「セルス。こっちはいいから、お前は自分の目の前のことに集中しろ！！」

「あっ、はい！！」

自分のやるべきことに集中しなければ、逆に仲間を危険にさらす。講義で習ってはいたものの、実戦で忘れずにいられるかというとそう簡単にはいかない。現にセルスは、クリスウォールで防ぐべきだったウロギートの攻撃を見落とし、ディステリアは黒い衝撃波に飛ばされてしまっていた。

「ぐあっ！！」

「ハハハハハハ！！使えない仲間がいると大変だな！！」

「黙れ！仲間は、使えるか使えないかじゃない！」

叫んだディステリアが空中で姿勢を整え、再び切りかかる。

「ほざいてろ！！」

天魔剣の攻撃を捌き、後ろに引いている左腕に黒い波動を溜める。放出させまいとセリュードが距離を詰めて槍を突き出すが、ウロギートは体を高速回転させてまとめて二人を弾き飛ばす。

「しまった。クリスウォール！！」

詠唱を終えてセルスが杖を向ける。弾き飛ばされたセリュードへ追撃に放った黒い衝撃波を、水晶の壁が阻む。

「ちっ！！」

さらにその後、切りかかったディステリアの攻撃を腕で防ぎいなす。

隙を突いて蹴り上げ、追い討ちに二度蹴って三度目で強く蹴り飛ばす。構えていた両腕から黒い波動を放出するが、今度も水晶の壁に防がれる。
「サンキュー、セルス」
「ううん、ごめん」
起き上がったディステリアは、なぜセルスが謝ったのかわからなかった。さほど気にせず、再びウロギートに跳びかかる。

―※＊※―

「世話が焼けるな。こっちはいつ、他を気にする余裕がなくなるかもしれないというのに」
「と言っても、こっちもすぐ終わる・・・・・」
そうファーディアが視線を戻した次の瞬間、四分割されたスレイブドールは襲いかかってくる。四連続で繰り出される突進をかわし、着地したブリュンヒルドが声を上げる。
「ウソ、まだ動くの!?」
「まるで、水辺に生息する毒蛇ヒュドラだな」
「だったら、細切れにするだけだ!!」
飛び出したクーフーリンがゲイボルグを構えるが、スレイブドールは新たに生やした腕を伸ばして彼を捉える。
「しまった!」
だが、その押さえた腕を伸びた刀身が切り落とす。
「まったく、世話の焼ける」
「サンキュー、ファーディア!」
「新技試すから、巻き込まれないでよ!」
距離を詰めるクーフーリンにブリュンヒルドが声をかけ、左腕に装備した弓を展開し構える。空中のクーフーリンに向かっていくスレ

イブドールに、大きく引いたゲイボルグを突き出す。
「食らえ！！」
無数の矢が降り注ぎ、スレイブドールの体を穴だらけにする。千切れそうになっているためかスレイブドールの動きが鈍るが、そこに光を集めたブリュンヒルドが巨大な矢を生成して向ける。
「リヒティブラスト――シュート！！！」
巨大な矢は光線となり、スレイブドールを飲み込み粉々に砕いた。残った欠片はわずかに動いたが、やがて糸が切れたように動きを止め、塵となって消滅した。
「さすがにここまで小さくされれば、動けないようだな」
「正直、助かった。あれでまだ襲ってきたら、倒すのに苦労したぜ」
ファーディアとジークフリートは軽口を叩いているが、敵に攻撃を許すほどの隙は作ってない。
「で、どうする？加勢するか？」
「いや、あれはセリュードたちの敵だ。俺たちは周りへの警戒」
「ついでに結界も壊そうか？」
そう言って校庭の端に目をやるブリュンヒルドに、クーフーリンもファーディアも特に反対はしない。その中でジークフリートは、周りの茂みを睨んでいた。
「ま、潜んでいる奴がさせないだろうが、な」

―※＊※―

ディステリアは左右から繰り出される斬撃を捌き、隙を見つけて反撃するが、一撃目、二撃目、三撃目と全てかわされてしまった。
「――ライジング・ルピナス！！」
光の力を込めた天魔剣を横薙ぎに振るが、ジャンプしたウロギートには当たらない。続いて立ち昇った光の柱も、空中で体をひねって

かわされる。
「ランダムに生える光の柱・・・・・大した威力のようだが、当たらなければどうということはない」
「わかってらぁ！！」
残った光の力を集め、踏み込んで天魔剣を振り続ける。しかし、すばやい身のこなしやジャンプでそれらはかわされ、逆に蹴りを食らってしまう。
「ぐっ！くっ・・・・・・」
「ザコを一度に相手しようと、分けて相手にしようと、さほど変わらない。回復などせずに、いっぺんに掛かって来い！」
後ろに下がるウロギートに、罠と警戒しつつディステリアは突っ込む。
「あいにく、俺はともかくリーダーはそんな安い挑発には――――」
右下に構えた天魔剣に、今度は闇の魔力を込める。
「――――乗らねえ！！」
体全体を使った斬撃は暗い紫色の軌跡を描き、天魔剣がウロギートの剣とぶつかる。
「ちっ・・・・・・だが、この程度・・・・・・」
押し返そうと剣を持つ腕に力を入れるが、その刃にひびが入り始めた。
「なっ！？」
騒然となった瞬間に砕けて、天魔剣がウロギートの体を真横に切りつけた。
「ぐぁっ・・・・・・」
後ろによろめき、血が噴き出したウロギートが見たのは、刀身から闇属性の魔力を放出する天魔剣。
「（なんだ、これは・・・・・・闇の・・・・・・・刃・・・・・・・？）」
その光景に、ディステリアもセリュードも目を見張る。
「（！？・・・・・・あの刃は・・・・・・・あいつ、まさか・・・・

・・）」
「くらえええええええええええっ！！」
目を見開くウロギートに向けて、縦に思い切り振り下ろす。
「（――まずい）」
すぐに逃げようとしたが、刃が振り下ろされるスピードのほうが速く、逃げ切る前にウロギートを両断・・・・・・
「調子に――」
・・・・・できなかった。
「乗るなあああああぁぁぁぁぁぁ！！！」
「なんだと・・・・・うわっ！？」
「こ、このプレッシャーは・・・・・・」
吹き荒れる突風、迸る黒い魔力。その中心にいるウロギートは、全身をトゲの付いた青黒い装甲に身を包んでいた。肩から生える曲がった角は下を向き、腕の装甲にはいくつもの小さなトゲ、Ｓの字に似た形の角が背中に生え、足は三本の爪が生えた巨大生物のような形に変化している。
「こいつは・・・・・・アテナが見たっていう魔導変化ってやつか」
「じゃあ、お姉ちゃんに怪我を負わせた奴と同じ力・・・・・・」
杖を握る手に力が入るセルスに、ディステリアが呆れた視線を向ける。
「・・・・・・・・あのよ。いい加減、アテナのことを『お姉ちゃん』と呼ぶのをやめないか？大きすぎる違和感に耐えられなくってきた」
「ちょ！そんなそっちの都合を押し付けられても・・・・・・」
先頭に位置するディステリアの注意が後ろに向いた時、変化したウロギートが黒い波動を放ちながら接近した。波動に当てられて体勢を崩したディステリアを殴り飛ばし、さらに追い討ちをかけようと距離を詰める。二本の曲がった爪が生えた右腕を振るが、その腕は割り込んだファーディアに受け止められた。
「！？あんた・・・・・・」

地面に落下したディステリアが呆けた声を出すと、ファーディアがクラドホルグを振りぬいてウロギートを弾き飛ばす。着地したところにジークフリートが飛びかかってグラムを振り下ろすが、片足を軸に体を回して振った右腕で弾く。

「ちっ！！」

刃に触れたもの全てを断ち切るグラムでも、刀身を横から弾かれたのでは何も切れない。だがすぐにグラムの刃を傾け、空中にいるまま振り下ろす。後ろに飛んでかわしたウロギートだったが、右肩から左脇腹にかけて浅いものの切り傷を受けた。

「（かわしきれなかった。さすがはジークフリートか・・・・・・）」

そこにブリュンヒルドが光の矢を連射。黒い波動で防ぐが、そこにクーフーリンが接近し、至近距離からゲイボルグを突き出す。

「ぐおおおおおおおおっ！？」

ゲイボルグから放たれた無数の矢がウロギートに直撃する。貫通させられず吹き飛ばしただけだったが、体に刺さってダメージは与えられたようだった。

「・・・・・成長を促すために、他人の闘いに手を出さないんじゃなかったのか？」

「基本そうだが、状況が変わった」

立ち上がったセリュードに、厳しい表情でファーディアが答える。

「奴が魔導変化とやらを発動した以上、傍観を続けるほうがどうかしてる。お前らの成長を優先して倒されたら元も子もないからな」

それがファーディアら、『現在に転生した元英雄』に課せられた注文。極力手は出さないが、どうにもならない事態に陥ったら助けること。彼らから見ればセリュードたちは戦力としては心許なく、訓練を積んだもののまだ不安が残る。なら、最初からクーフーリンら『元英雄』だけで対応すればいいと思うだろうが、それで事足りればクトゥリアは素養がある者をスカウトなどしなかった。

「はっきり言って、今の奴の力は未知数だ。気を抜くなよ」

「あなたたち『元英雄』を押し返す相手に、気を抜くなんてことはできませんよ」
立ち上がり槍を構えるセリュードと天魔剣を構えるディステリアが左右に散る。時間差で攻撃を加える二人だが、黒い波動に阻まれた上に吹き飛ばされる。
「（攻め方は悪くない。わずかな間に、とりあえずは成長したな）」
だが、問題はある。まだ戦場の空気に慣れてないセルスは、呑まれて足がすくんでいる。気付いたブリュンヒルドが矢を連射しながら下がり、彼女の側に寄り添う。
「気をしっかり持って。援護すら無理なら、この空気に慣れることを考えて」
「は、はい・・・・・」
顔色が悪いセルスを見て、ブリュンヒルドはクトゥリアらの不安が的中したと思った。今まで彼女が戦ってきたディゼアは、『怪物』に分類可能な容姿をしているし、実力もした。だが、目の前の敵ウロギートは人に近い姿で、それだけでも対人戦闘のイメージを与えてしまう。
「（その上、実力はかなり上。いくら実践を想定したところで、『戦場の空気』は本当の実戦でなきゃ感じられないものね）」
思考もそこそこに、ブリュンヒルドは目の前の戦況に集中する。グラムの切れ味を警戒するウロギートはジークフリートから距離を取り続け、逆にクーフーリンには接近していた。
「（こいつ！これじゃあ、ゲイボルグの力を発揮できねぇ）」
間合いの内側、すなわち槍の穂先の後ろに潜り込まれれば、槍を突くことができない。長物の弱点を突かれ思うようにゲイボルグを振れないクーフーリンに、挑発じみた攻撃を続ける。その程度のことで冷静さを失うクーフーリンではなかったが、逃れようとしてもそれを追って距離を詰めるため逃げられない。
「（くっ。これじゃあ、ろくな援護もできない）」
それはクラドホルグを振るに振れないファーディアも同じ。下手な

攻撃をすれば接近されているクーフーリンに当たるし、彼に当たらないよう気を付ければ狙いか攻撃が甘くなりウロギートに避けられる。

「（少し無茶するか）」

ジークフリートに視線を送り、ファーディアが駆け出す。それを見たジークフリートはグラムを構えてウロギートに接近するが、すぐ切りかからずに走り抜ける。

その動きにウロギートの注意が向いた瞬間、クーフーリンが飛び退いた。

「（しまった！）」

先端を向けられるゲイボルグをいなし、距離を詰めようとするが上から振り下ろされたクラドホルグが間に割って入る。

「ちっ！！」

伸びていた刀身が地面を砕き、土煙が舞う。その中を突っ切ったジークフリートが切りかかるが、グラムの刀身は流される。その可能性は頭に入れていたので、それほど動揺せず真正面から追撃をかける。何度か切りつけ、いなされた所で離脱し、収まりかけた土煙をゲイボルグが発射する無数の矢が突き抜ける。

第６４話　闇を抱く戦士たち

ディゼアビースト・スレイブドールの洗脳が解け、床に倒れた生徒たち。今までいじめられたとはいえ、シェルミナたちは放っておくことができず、手分けをして教室に寝かせていた。
「全く、シェルミナはお人よしなんだから」
「でも、それがシェルミナちゃんのいいところだよ」
フェルミナとホワンに、シェルミナは「うん。ありがとう」と笑うと、教室を出て、廊下の窓から外を眺めた。
「先生・・・・・今までの先生は・・・・・ウソだったの・・・・・」

―※＊※―

一方、校舎の外の校庭では。
「それくらいで！！」
黒い波動を全快にして、ゲイボルグの矢を弾く。攻撃を切りぬけて波動の放出を緩めかけた時、今度は光の矢が飛んできた。
「何！？」
再びは胴を噴出し、光の矢を掻き消す。それを発射したのは、セルスの側で構えているブリュンヒルドだった。
「白鳥くんに感謝ね」
再び弓を引き絞り光の矢を連射するが、黒い波動に掻き消された上、

かざした手から放たれた衝撃波が迫る。
「やばっ！！」
即座に腰の剣を抜こうとするが、それより早く駆けつけたディステリアとジークフリートが武器を振り下ろして衝撃波を掻き消す。ジークフリートのほうは剣を振るスピードで衝撃波を相殺したが、ディステリアのほうは光の力を込めて振り下ろしていた。
「まったく、無茶しやがって。その力、下手に使うと自分を傷つけるのだろ？」
「心配無用です。だいぶ慣れたからか知りませんが、最近はそれほどダメージはきません」
「そうか。それは失礼した！！」
刀身を縮めたクラドホルグを振るファーディアの攻撃をかわすウロギートに、ジークフリートとディステリアが接近する。正面のジークフリートが振り下ろしたグラムを回し蹴りで弾き、ジャンプしたディステリアが上から突き出された天魔剣を右手でいなし、切りかかったファーディアのクラドホルグを踵落としで地面に叩きつける。
「「「――っ！！！」」」
三人が目を見張った直後、ウロギートの赤い瞳が鋭く光った。

―※＊※―

一方、互いに全くと言っていいほど動いていないクウァルとヘスペリアのほうは、当然、決着はついていなかった。互いに睨みあって長い時間が過ぎ、周りを囲む壁が崩れた瞬間、ヘスペリアはそのほうを向いた。
「どうやら、仲間のほうは決着がついたようだ」
ヘスペリアは黙ったまま、クウァルのほうを向く。
「・・・・・・優しいな・・・・・・君は・・・・・・」

「ごまかさないで！！」
怒鳴るヘスペリアに、「そうだな」とクウァルは静かに言った。
「何が償いになるか・・・・・・俺にはわからない。だが・・・・・・俺はここで死ぬ訳には行かない」
「知りませんよ。あなたのそんな都合」
そこに誰かの声がすると、ヘスペリアの横に現れた男が彼女の首に当て身をした。目を見張ったクウァルを目にもくれず、男は倒れるヘスペリアを受け止めた。
「貴様が、ヘスペリアの言っていたカイネか・・・・・・」
「フン。おしゃべりな女だ」
睨みつけるクウァルを見もせず、カイネは冷たく呟いた。
「貴様の目的は・・・・・・」
聞こうとするクウァルに、「知りたければ――」とカイネがさえぎる。
「――倒すことだね。僕かヘスペリアを・・・・・・」
そう言い残すと、カイネはヘスペリアを抱きかかえて、その場から姿を消した。黙っているクウァルの後ろで爆発が起こり、振り返ると吹き飛ばされるセリュードたちが目に入る。彼らが地面に倒れると、クウァルが近づく。
「大丈夫か！？」
「余裕なし・・・・・・なんて言っていられる状況じゃないな」
体を起こすセリュードが向ける視線の先には、頭から血を流し立っているディステリアと、傷だらけの鎧をまといながらも余裕の表情をしているウロギートがいた。
「ふん、たわいもない・・・・・・」
「くそっ、ここまでとは・・・・・・」
膝を突きそうなところを踏ん張り、睨み付けているクーフーリンにウロギートは冷めた視線を向ける。
「俺もここまでとは思わなかったぞ。過去に英雄として名を馳せた者の力がここまで劣るとは、な。平和にかまけて鍛錬を怠っていた

か？」
「バカ言うなよ。再び人間界と神界がつながってから、一層鍛錬は積まれるようになった。異なる世界の神話に伝えられる存在とも拳を交えたし、な。互いにいい刺激を与えた」
「（その刺激がアレスの実力向上と性格の変化をもたらしたのか）」
神話上、情けないエピソードが多いアレスが強い理由を、ディステリアがそう見当付ける。
「ほう、つまりは・・・・・自らの力を強めるため他の神の領域を犯し、そこにいる存在を屠ったというわけか」
「バーカ。ギルガメッシュやエンキドゥと一緒にするな」
ジト目で言った何気ないクーフーリンの言葉に、ディステリアとセリュードは表情を引きつらせた。
「「（あれ？やった神いたの？）」」
「つまり、貴様はその禁忌を犯してないと？それでも同じだ！」
衝撃波を放ち、耐えようとしたディステリアとセリュードが吹き飛ばされると、駆けつけたクウァルが受け止める。
「悪い、助かった！」
「俺が手を出せない間に、豪いことになってるな」
「クウァル・・・・・あの子は・・・・・・」
だが彼は、そこで聞くのをやめた。ディステリアとウロギートのほうに動きがあった。突っ込むディステリアとウロギートが激突し、互いに衝撃で仰け反る。ほぼ同じタイミングで体勢を戻した両者は、これまたほぼ同時に動く。攻撃に転じたディステリアに対し、ウロギートはジャンプで回避。だが、天魔剣を反して振り上げた一撃が、目を見張るウロギートの左腕のトゲを切り落とした。
「――――！？」
ジャンプして追撃をかけようとするディステリアを蹴り落とす。体を回して体勢を整えようとするが、失敗して左肩から落ちる。見ていたセルスは息を呑み、駆けつけようとするが、ブリュンヒルドはそれを止める。

「なんで止めるの――――!?」
答えが返るより早くウロギートが高速で接近していき、屈んだまま体を起こしたディステリアは、地面を蹴って体勢を低くしたまま飛び出す。振り被った右腕が向かってくる前に天魔剣を振るが、胴体に当たる寸前にウロギートが体をひねった。剣先が空を切ったところに蹴りを食らわせられるが、ディステリアもすぐ相手の腹に膝蹴りを打ち込む。だが、少し柔らかいものの装甲に包まれた腹に蹴りを食らわせるのは得策ではなく、膝の痛みに顔をしかめる。
「っ!!」
よろめいて地面に着いた右足の膝に再び痛みが走り、思わず右手で押さえる。武器を持った手で痛みの患部を抑えるのは、大きな隙を生み出す愚行でしかない。当然、ウロギートは接近する。
「――――と思ったか!!」
と見せかけてすぐ止まり、両手を突き出して黒い衝撃波を飛ばす。すぐに動けないディステリアは食らうと思ったが、彼の上を通り抜けた長くしなる刀身が衝撃波を打ち消す。
「こんなヒヨっ子ばかり相手にしないで、少しはこっちも気にしたらどうだ?」
「ほざけ、過去の遺物たる元英雄が!!」
両手を向けて放った衝撃波を、空中で身動きが取れないファーディアは避けられない。とっさにクラドホルグで防御したものの。強い衝撃をまともに受けて体が軋む。なんとか着地できたが、地面に片膝を突いてしまう。
「ファーディアさん!!」
「注意を逸らすな!実力の差が激しいと、ほんの一瞬の隙で命取りだ!」
「それは少し違います。一瞬の隙の有無は、死ぬ順番の些細な変動を生むだけだ」
「何を・・・・・・」
何気なく侮辱したウロギートに怒りを覚えた瞬間、再び天魔剣から

大量の闇属性の魔力が噴き出す。驚く暇すらなく襲いかかって来た激しい痛みに、ディステリアは顔をしかめる。

「ぐうぅっ・・・・・・」

「力の制御ができてないのか？愚かな！！」

嘲笑うウロギートが迫ると、ジークフリートが飛び出す。避けられることは承知の上でグラムを振り、かわした後の蹴りも防ぐ。が、その瞬間ジークフリートが浮かべた笑みに、ウロギートは己の失敗を悟った。

「でやあああああっ！！」

グラムを振り下ろし、校庭が割れる。離れたウロギートの左足は、装甲が砕け肌が露出していた。次は仕留めるつもりでグラムを構えた時、すぐ近くで強い魔力を感じる。正体を探りたいが、わずかな隙でも見せるわけにはいかない。

「これ、どういうこと・・・・・・？」

そんなジークフリートの耳に、唖然としたブリュンヒルドの声が聞こえる。

「ディステリアって、こんなことできたの？」

「ううん・・・・・・そういえば、最初にあいつに傷を与えた時・・・・・」

セルスが言おうとした時、「ぐっ！」とディステリアが苦しそうな声を漏らす。ちょうど同じ時、形を成していた黒い魔力が拡散しかける。

「（わずかに形にはなってきた。だが・・・・・・まだ激しい痛みのせいで集中が切れる）」

顔をしかめながらも魔力を制御し、徐々に形を形成していく。それを見て、ファーディアたちは驚いて目を見張っている。「闇の魔力で刃を具現化させ、刀身を肥大化させたのか！？」

「魔力の具現化！？神の血が混ざった魔術師でさえ、できるかわからないことだぞ！！」

「私の肩に傷を負わせたあれか。今度はまともに切られるのだろう

な」
不敵な笑みを浮かべて挑発するウロギート。制御に苦しんでいるディステリアを好機と感じ、ジークフリートが構えているにも拘らず向かって来る。
「（こいつを越えれば・・・・・・）」
まともに相手をせず、適当にいなすつもりでジークフリートに向かっていき、グラムを振った彼の肩に手を当て、上を飛び越えた。
「しまった！」
唖然とした顔で後ろのウロギートに振り向くが、すぐ笑みを浮かべる。
「・・・・・・・・と、言うと思ったか？」
「――――！？」
負け惜しみか動揺を誘うためのフェイク。そう思っていたウロギートは、右腕を振り被って上に飛び上がっていたクウァルに気付かなかった。
「俺を無視するつもりだと、最初からわかってたぜ！！」
「はっ！！」
「どりゃあああああああああっ！！！！」
黒い波動を放出するが、クウァルの拳は止まらない。両腕を交差して受け止めるが、耐え切れない。邪魔など最初からなかったかのように、クウァルは拳を振り切ってウロギートを校庭に叩きつけた。
「「がはっ！！」」
砕けた地面の中で息を吐き出すが、それは黒い波動を突き抜けたクウァルも同じ。何かの力で打ち消したわけではなかったので、ダメージを受けるのは当然。
「・・・・・これだけのリスクを犯してやったんだ・・・・・・」
空中で苦しそうな声を漏らしながら、動けないまま地面に落ちていく。その間にウロギートは起き上がるが、這い出た時にプレッシャーを感じる。
「――――決めろおおおおおおおおおおっ！！！！」

叫び声を上げたクウァルをファーディアが受け止める。振り返ったウロギートの前には、黒く巨大な刀身を形成したディステリアが天魔剣を構えていた。

「まだ荒いが・・・・・お前を倒すくらいはできるはず・・・・・」

「試してみるといい。もっとも・・・・・」

地面を踏み鳴らし、黒い波動を放出して両腕を構える。

「――ザコには無理だろうが、な!!」

声を張り上げ、黒い衝撃波を放つ。足の痛みで動けないディステリアだが避けるつもりもなく、左足を動かし、体を大きくひねって天魔剣を振り衝撃波を突っ切った。

「――何!?」

「テネブラエセイバー!!」

闇の魔力で作られた漆黒の刀身は驚くウロギートに到達し、黒い波動ごと断ち切った。

「グギャアアアアアッ!!!」

断末魔の悲鳴を上げ、闇の力の柱の中に消える。闇の魔力の柱が消えると、ディステリアは気を失って地面に倒れた。

「ディステリア!!」

慌てて駆け寄るセルスとブリュンヒルドが、彼の様子を診る。

「大丈夫、気を失ってるだけ。でも・・・・・」

「光と闇の力を使いこなせなかった時の話しを聞く限り、同じ症状だと考えるべきでは?」

「そうかも、知れない」と、セルスはクーフーリンに同意する。

「とにかく、治療しなきゃ。クーフーリンさんたちも」

「悪いな」

「いえ。戦いでは、あんまり役に立てなくて・・・・・」

治癒術をかけつつ暗い表情をするセルスに、クーフーリンは首を振る。

「いや、セルスちゃん。戦いは何も、相手を倒すものだけで勝てる

わけじゃないんだ。前衛に出て剣や拳で戦う者、後衛で魔術を使って助ける者、様々な方法で援護する者。それぞれの役割をこなしてこそ、勝てるものなんだ」

「ファーディア、てめ。人のセリフを・・・・・・」

先に言いたいことを言われてクーフーリンは苦い顔をしたが、ファーディアは気にする様子はない。

「君は、君にできることをする。それが君の役割につながるはず。それをこなすのも『戦い』だ」

「・・・・・・はい」

セルスが微笑むと、ちょうどクーフーリンたちの傷が癒える。

「うし。じゃあ、俺たちはいい加減この目障りな結界を壊しに行こう」

「そうだな。生徒が怪物になってた原因も取り除いたわけだし・・・・」

確証がない以上危険なのだが、クーフーリンたちはいい加減この居心地の悪い空間から出たかった。

「じゃあ、引き続きディステリアたちを頼むわ」

「はい」とセルスが答えると、クーフーリンたちは散会して結界発生装置へ向かう。その後、一人暗い表情のクウァルに目をやる。

「どうか、したの？」

黙ったまま答えない。もう一度聞こうとすると、セリュードが手を伸ばして首を横に振った。

「よくわからないが、今の彼はそっとしておいたほうがいい」

「あっ、はい・・・・・・」

何が合ったか気にしつつ、セルスはディステリアたちの回復を終えた。しばらくして、学校を囲んでいた壁は崩れる。それを見届けたシェルミナの目から、一筋の涙が流れた。

「・・・・・・・・・さよなら・・・・・・・・・先生・・・・・・・・」

―※＊※―

戦いが終わってから数分後、気を失っていた生徒たちが目を覚ました。何が起きたか知らない生徒は、教室の床に寝かされていたことや、廊下の突き当たりの壁に穴があいていることに驚きを隠せず戸惑っていた。

「大丈夫？」

「え？ええ・・・・・・」

今まで嫌っていたシェルミナに心配され、女子生徒は戸惑った。

倒れていた生徒たちを介抱するシェルミナ、フェルミナ、ホワンに敵意を向ける者は多くなかった。中には「触るなよ」と拒絶する者もいたが、今までと比べては少なかった。

「助けてくれる者を拒絶するほど、冷たい者はおらんか」

「完全にいない・・・・・訳ではないようだが、な・・・・・・」

セリュードとディステリアが呟く。セリュードたちは教室の外で、開いているドアから中の様子を伺っていた。

「純血の人間とそれ以外の種族との間に明いた確執は、そう簡単に消えはしない」

クウァルの後に、「それが現実だ・・・・・・」とセリュードが続けた。

「そんな・・・・・・」

セルスは暗い表情になったが、クウァルが小さい頃から町の人の手伝いをしたにも関わらず、人々から認められるには時間がかかったことを思い出していた。

「さて、そろそろ俺たちも・・・・・・」

「やあ」

そこへイルムの声がしたので、ディステリア、クウァル、セルスは一斉に身構えた。

「・・・・・そんなに身構えなくてもいいだろう。我々には、も

う君たちを捕まえる理由はない」
ディステリアが「と言うと?」と聞き返す。
「今回の一件で軍の上層部は、軍の方針と幻獣に関する者に対する見解を、改めることにしたそうだ。だからと言って、すぐに君たちに協力することはできないが・・・・・・」
「気にしなくてもいい。そこまで期待はしてないから」
嫌味っぽく言うディステリアに、「ちょっと」とセルスが注意する。
「・・・・・それと、私から君たちに言いたいことがある」
警戒しながら、「なんだ」と聞くディステリアに、イルムは顔を上げた。
「娘を助けてくれて、ありがとう。このことは一生、忘れないでおくよ」
思わぬ言葉に、セリュード、クウァル、セルスはくすぐったそうな顔をしたが、ディステリアだけは背筋が凍ったように表情を強張らせていた。
「おや、お気に召さなかったか?」
肩をすくめたイルムは、おかしそうにそう言った。

―※＊※―

一方、町から出てすぐの場所では、クーフーリンのチームが馬を歩かせていた。
「一事はどうなることかと思ったが、一見落着になってよかったな」
「そうだな」
安堵の表情を浮かべるファーディアに、柔らかな笑みを浮かべたジークフリートが言う。彼らは兵士、戦闘が終わればまた次の戦場へ行かなければならない。と言ってもブレイティアでそんな指令は出ておらず、彼らは担当範囲を自由に巡っていいとされている。

「で、あとは軍のお偉いさん方次第か？」
「・・・・・と言っても、この国の軍がすぐ協力してくれる、ってことはないだろう」
皮肉を言うクーフーリンとファーディアに、ジークフリートとブリュンヒルドも微妙な顔をする。国の治安を維持する軍上層部の方針に口出しはできない。事件を解決しようとも、こちらに協力してくれるかどうかは、完全にあちら次第となってしまっている。それが今のブレイティアの立場。その時、ふと手を入れた道具袋に入っているカプセルに気付いた。
「あっ、こいつを渡すのを忘れてた」
それに気付いたクーフーリンたちがセリュードたちを探して、カプセルに入った〈イェーガー〉を渡したのは、また別の話。

第65話　七年前 - 全ての始まり -

エウロッパ大陸から見て北東に位置するムルグラント国。そこからさらに北東に向かった場所に位置し、エイジア大陸北部一帯に当たる国、〈スヴェロニア〉。東西に広がる広い国土は八つに分けられており、それぞれ火・水・風・土・雷・木・光・闇を司る神の名を冠しており、それをまとめる〈王国〉があった。

その中で、ナイン・リバーと呼ばれる河と、ラウド・リバーと呼ばれる河の近くにある第二の警備都市〈チェルノボーグ〉。元は一つの国で、名は〈ルマーニャ〉と言った。古来より吸血鬼（ヴァンパイア）や不死者の存在が伝えられ、ある者は迫害から逃れるために姿を隠し、またある者は人間を襲った。害の有無は関係なく、そこに住む人々は吸血鬼に関わる者をひどく嫌い、彼らと戦う力を持った吸血鬼始末人（ヴァンパイアハンター）でさえ、畏怖の目で見る始末だった。だが、この国のそういった事情は、外はおろか首都であるはずの〈王国〉にも知らされず、内部でひそかに処理されていた。

ある日の夕暮れ時、二人の少年が遊んでいた。白い髪をした少年はクルス、黒い髪の少年はクドラ。二人とも、幼い頃から一緒に遊んだ幼馴染だった。

「明日はお前の誕生日か。プレゼントは何がいい？」

最初にクドラが、クルスに聞いた。

「別に気を使わなくてもいいのに。一緒に祝ってくれさえすれば、それでいいよ」
「欲がないなぁ。まあ、そこがお前のいいところなんだが、な」
そう言われると、クルスはしばらく黙って考えことをしていた。
「どうした？」
「じゃあ・・・・・欲を出して言うけど・・・・・俺は――――」
その時、教会の一番上に設置されている鐘が鳴った。この国では、夕暮れ時から吸血鬼や不死者が横行し始めるので、教会の鐘が鳴ったら子供は帰らなければならないと決められていた。
「もう、時間か。じゃあな、クルス。また明日」
「ああ、また明日」
そう言って、二人はそれぞれ帰路についた。明日もいつもと同じ日々があり、それがずっと続くだろうと、二人とも信じて疑わずに。

この時、二人は気付いていなかった。明日、クルスの１０歳の誕生日。この日を境に全てが変わり始めるということに。

―※＊※―

窓から朝日が差し込む部屋の中、ベッドに寝ている少年が目を覚ました。髪は白く、年は１７、８歳ほど。この少年こそ、現在のクルスだった。
「あの時のことを・・・・・夢で見ることになるとは・・・・・・」
体を起こし、頭を押さえてそう呟く。その顔は、ひどく弱っている

ように青かった。
「（思えば・・・・・・あの時から全てが始まったんだ。・・・・・・あの時から・・・・・・・・）」
ふと、隣の棚に置いてある写真立てに目をやる。そこに入れてある写真には、クルスとクドラが写っていた。どちらもまだ幼く、無垢な笑顔をしている。おもむろにクルスはその写真を手に取った。
「（いったい・・・・・・どうして・・・・・・）」
写真を見つめるクルスの脳裏に、あの出来事が蘇る。七年前の、あの出来事が。

―※＊※―

クドラの１０歳の誕生日から、半月経ったある日のこと。クドラを初め多くの子供たちは、辺りが暗くなり始めるまで遊んでいた。やがて、日が暮れて家に帰る時間を知らせる教会の鐘が鳴る。
「あ～あ。もうちょっと、遊んでいたかったな～」
「仕方ないだろ。夜になったら吸血鬼が暴れだすんだから」
「そういえば、クルスくんってヴァンパイアハンターの訓練を受けてるんだよね？」
一人の少女が聞くと、「ああ」とクドラが答える。
「この前の誕生日に教会の人に素質を認められて、訓練を受けることになったんだって」
「いいなあ、俺もヴァンパイアハンターの力が欲しいよ」
「それは無理よ」と、一緒にいる少女が言う。
「ヴァンパイアハンターに必ずなれるのは、生まれた時に羊膜っていうのに包まれていた人なんだよ。それ以外の人がなるには、物凄い訓練と努力がいるって」
「おっ？だったら、クドラはなれるんじゃないのか？俺の父さんが、

お前は羊膜に包まれて生まれたって言ってたから・・・・・・」
少年がそう言った時、クドラは苦しそうな顔をして胸を押さえていた。
「どうしたんだ?クドラ」
「具合でも悪いの?」
クドラはよろめくと、「そうみたいだ」と呟いた。
「だったらもう帰ろうぜ。どの道もう帰らなければいけないし」
「うん」
子供たちが頷いたその時、辺りに生暖かい風が吹く。不安そうに周りを見渡した次の瞬間、空から巨大な黒い塊が落ちてきた。子供たちが何かと思ってそれに目をやると、それは全身を黒い体毛で包まれ、鳥の翼のような腕の先に手を持った巨大な怪物。大きく咆哮を上げると、口の中にある鋭い牙が見え、子供たちを恐怖で包み込んだ。
「う・・・・・・うわ~!!」
「ば・・・・・・化け物だ!」
すぐさま子供たちは、散り散りになって周りにある物陰に隠れた。
怪物はゆっくりと頭を左右に振り、巨大な足で歩き出す。少年二人が恐る恐る顔を出すと、怪物が進んでいる先に少女が隠れていることに気づいた。
「――――!!・・・・・・まずい」
歩みを止めた怪物が足元の物陰にうずくまって震えている少女に目をやると、巨大な爪を振りかざす。
「ハッ」
気付いた少女がとっさに避けたが、大きな衝撃が起きて少女が地面に倒れた。
「ああっ!!」
隠れていた少年たちが叫ぶと、すぐさまクドラが駆け出した。
「大丈夫か?」
「う・・・・・・うん・・・・・・あっ、後ろ!」

指差した方向を見ると、怪物の左爪が振り下ろされる所だった。その場にいる全員が息を呑み、誰もがもうダメだと思ったその時、クドラの中で何かが弾けた。気付いたら、怪物に向かって突っ込んでいた。

「無茶だ！！よせ！！」

「うおおおおおおおおおっ！！」

誰もが無謀だと思っていたが、クドラはそのまま突っ込んだ。突き出した右腕と怪物の爪がぶつかり合い、その辺りから爆発が起こる。

「・・・・・あ・・・・・・ああ・・・・・・」

恐怖を浮かべた表情で呟くと、煙が晴れて怪物が姿を現した。だが、クドラの右腕とぶつかった左腕は肘から先がなくなっており、その傷口から黒い液体が滴り落ちている。そして、煙が完全に晴れると少女の側には、クドラが立っていた。だが、その腕は暗い紫色の剛毛に包まれており、さらにそこから同じ色の翼が生えている。本人は、変化が起こった自らの両腕を見て、唖然としていた。

「これは・・・・・いったい・・・・・・？」

「グルルルッ・・・・・」

頭上でした唸り声で我に返る。クドラが見上げると同時に右の爪を振り下ろす怪物。すぐに迎え撃とうとしたが、近くに少女がいることに気付きとっさに彼女を投げ飛ばした。そのため回避が間に合わず、攻撃の直撃を受けてしまう。

「きゃあ！？」

「大丈夫か！？」

飛ばされた少女を、その先にいた少年が抱き起こした時、怪物の右腕が肩まで消し飛んだ。直後、煙の中から飛び出したクドラの腕からは黒い魔力が揺らめき、それを怪物に向かって思いっきり振り下ろした。

「うおおおおおおおっ！！！」

「ガアッ・・・・・」

口を大きく開き、牙を突き立てようとしたが、その瞬間、クドラの

腕の闇の魔力は大きな刃となって、怪物を頭から両断した。唖然となる子供たちと、目を見張るクドラ。倒れた怪物の体が消滅した後、地面に着地して自分の両腕を見ていた。

「（な・・・・・・なんなんだ・・・・・・これは？）」

敵を倒して唖然となっているクドラを、子供たちは恐怖の眼差しで見ていた。ふと、クドラが子供たちのほうに目を向けると、子供たちは悲鳴を上げて逃げ出した。

「う・・・・・・うわあぁぁ！！」

「た・・・・・・助けて～！！」

「ば・・・・・・化け物だ！！」

口々に叫んで逃げる子供たちを見て、クドラは立ち尽くす。近くの池を覗いて見ると、そこに映っているのは黒い翼を持った化け物の姿だった。

「化け物・・・・・・」

静かにそう呟くと、その場から姿を消した。

―※＊※―

それから数分後。町の人から通報を受けたヴァンパイアハンターたちが、教会の中で会議を行なっていた。

「いいか。あれから時間も経っていないから、そう遠くへは行ってないはずだ。見つけ次第、退治しろ」

ハンターたちが頷いた時、教会の扉が開いた。

「誰だ」

ハンターの一人が怒鳴って振り向くと、そこには三人の子供たちがいた。

「君たちか。悪いが、今は会議中で話を聞くこともできない。あのヴァンパイアは必ず退治するから、安心して家に帰るんだ」

「ち・・・・・違うんです！！」
少女が声を上げると、ハンターたちは次々と首を傾げた。
「お願い、クドラを・・・・・クドラを助けてあげて」
「あいつ、ヴァンパイアになっちまったけど・・・・・・俺たちを守ってくれたんだ。だから・・・・・・」
子供たちの必死の訴えを聞き、ハンターたちは顔を見合わせた。
「悪いが、それは出来ない」
「なんで！？」と少女は叫んだが、彼女自身すでに理由はわかっていた。
「ヴァンパイアが血を吸うのは、本能によるもの。どれだけ、押さえようとしても、押さえられはしない。・・・・・だから、例え知人だったとしても、ヴァンパイアである以上、退治するしかないんだ」
昔から、ヴァンパイアは必ず滅ぼさなければならない怪物であり、絶対悪だと教えられてきた子供たちは、黙り込むことしか出来なかった。
「辛いかもしれないが・・・・・これが現実なんだ。今、理解しなくてもいいけど、いつかは理解してくれ」
そう言うと、他のハンターたちに向かって「行くぞ」と言い、教会を出た。子供たちは、それを見送ることしか出来なかった。
「どうするんだよ。このままじゃ・・・・・・クドラが・・・・・・」
「でも・・・・・俺たち、どうしたら・・・・・・」
その時、少女は「クルス」と呟いた。
「クルスに頼んで、クドラを匿ってもらおう。そしたら・・・・・・」
「ダメだよ。大人はヴァンパイアハンターのことを、吸血鬼と戦わせる道具としか思っていない。クドラを匿ったことがばれたら、大人たちは絶対、クルスをひどい目に遭わせるに決まってるよ」
すぐにクルスの誕生日のことを思い出す子供たち。この国では、昔

から１０歳の誕生日に教会で祝福を受ける風習がある。普通は神父から祝福の言葉を受けて終了だが、クルスの場合はその中に、差し出された十字架に触れることが追加されていた。クルスが十字架に触れた途端、彼の体が白い光に包まれた。

「間違いない・・・・・この少年は、ヴァンパイアハンターとなる子供だ・・・・・・」

それを聞いたクルスの両親は、口では喜んでいたものの、その素振りはどこかでは子を恐れていたようにも見えた。その翌日、クルスはヴァンパイアハンターの組織（ギルド）に連れて行かれ、そこで訓練を受けることになった。

「大人たちは、新しいヴァンパイアハンターが生まれるのを心待ちにしていたように言ってる。でも実際は・・・・・化け物を見るような目でしか見ていない。戦いの邪魔になるから近づいちゃだめって父ちゃんは言うけど、あれは絶対に恐れている！！」

子供たちがクルスの様子を見に行こうとした時、それを聞いた両親に猛反対をされた時があった。

「今思えば・・・・・あれって、大人がヴァンパイアハンターになったクルスを、恐れているってことだろ。俺たちを守るためになろうとしてるのに、そんなのってないよ！！クルスは・・・・・・俺たちのために・・・・・・」

子供たちは三人とも、悔しさに手を握り締めていた。

この三人はある意味幸運だった。人の苦しみや葛藤を利用しようとする卑劣な者が、今この場にいなかったのだから・・・・・・

―※＊※―

「いたか？」
「いや、こっちにはいない」
「次、向こうだ」
ハンターたちが立ち去った後、建物の上から一羽の大きな黒い鳥が降りてくる。その鳥は少年の姿に変わると、ハンターたちが走っていった通りを見た。その少年は、ハンターたちに追われているクドラだった。
「（俺を探しているのか？無理もないか。俺も今じゃ、ヴァンパイアだ）」
いったい、何を持って自分がヴァンパイアになったと思っているのか疑問だったが、今クドラが追われているのは紛れもない事実。そして彼は、自分が育った町に迷惑をかけたくないと思い、町を出る決意をした。
「（次に会う時は、敵同士なのかな？クルス・・・・・・）」
再び黒い鳥に変身して飛び立つと、突然、目の前に全身が白い鳥が現れた。突然のことで驚くクドラだったが、すぐにその鳥がクルスに変身したものだとわかった。なぜなら、彼と二人きりで遊ぶ時、二人はなぜか使える変身能力を使って、野山を駆け巡っていたのだから。白と黒の鳥はしばらく睨み合っていたが、やがてクドラは目を背けて街の外に飛び立とうとした。
「待てよ、クドラ！」
とっさに呼び止められ、クドラはその場に羽ばたいていた。
「お前・・・・・・クドラだろ！？なんで町を出て行こうとするんだ！？」
「いたぞ！！」
そこに下から声が響く。クルスがそちらに気を取られた隙に、クドラは街の外に向かって滑空した。それに気付いて、クルスが慌てて追いかける。
「見ろ！クルースニクが追いかけているぞ」
「さすがは吸血鬼始末人だ・・・・・・。我々より早く吸血鬼を見

つけられる」
「きゅ・・・・・・吸血鬼?」
下にいるハンターの声に戸惑ったクルスは、どういうことか聞くために、思い切り羽ばたいて加速した。
「どういうことなんだ!?お前が吸血鬼って、何かの間違いなんだろ!?」
だが、クドラは何も言わず体を斜めにして急降下し、それに合わせてクルスもとっさに急降下の体勢をとる。下では、あっという間に姿を消した二羽の鳥にうろたえているようだったが、クルスは気にせずクドラの後を追った。急降下の後に風を受けて急上昇。と思ったら、左へのターン。と思ったら、ゆるやかな波線カーブ。まるで空中というハイウェイで展開されるカーチェイスならぬ、バードチェイスだった。
「す・・・・・すごい・・・・・・」
「あれほどの追跡劇を繰り広げるなんて・・・・・・あいつも素人じゃないな?」
街を囲む城壁に上がって、クルスとクドラの追跡劇を見つめるハンターたち。だが、その中の一人はそれを、不審そうな表情で見ていた。
「(あの動き・・・・・・確かに、素人のものではない・・・・・・だが、相手に決定打を与えようとはしていない・・・・・・あの者はいったい・・・・・・)」
やがて、空中ですれ違うクルスとクドラ。それに合わせてクドラは、クルスに耳打ちをした。
「・・・・・早く戻れ」
すぐに後ろを振り向くクルスだが、クドラは羽ばたいて少し高い位置に来ると、翼を大きく振ってそこから一気に急降下した。慌ててクルスも追いかけ、両者共にスピードを維持しつつ、今度は地表付近をハイスピードで飛び回る。やがて、木々が近づいて来ると、クドラは思いっきり翼を羽ばたかせ強引に曲がったが、クルスは曲が

りきれずに葉が多い茂る木の枝に突っ込んでしまった。
「ああ！？」
思わず人間の姿に戻ったクルスが、枝の中から顔を出した時には、クドラは遠くの空を飛んでいた。
「くそっ・・・・・・クドラ・・・・・・なんで・・・・・・」
そう言ってクルスは、いつまで経っても遠くの空を見つめていた。

―※＊※―

「・・・・・・！？・・・・・・」
日が差した野原に生えた木の根元で、それにもたれかかって寝ていた少年が、ハッと目を覚ます。黒い髪をしているその少年は、クドラであることは間違いなかった。クルスと同じように弱ったような表情で、頭を押さえる。
「もう・・・・・・永遠に思い出すことはないと思っていたのだが・・・・・・」
あれから、クルスは数え切れないほどの吸血鬼を退治し、クドラもまた数え切れないほどの街を回り、吸血鬼を退治してきた。その度に、クルスはいつか友を同じように退治するのかと悩み、クドラも同族を殺しているという感情に苦しめられていた。奇跡か偶然か、今まで二人が出会うことは一度もなく、そして今に至る。
「啓示・・・・・・なのか・・・・・・。クルスとの・・・・・・戦いが近いという・・・・・・」
その後、立ち上がって朝日が上る遠くの空を見ると、悟りきったような表情をして、溜め息をついた。

第６６話　首都の無い国

そして、七年前の出来事はそれだけではなかった。同年、１２月２４日、クリスマスの日。エウロッパ大陸にある国々はどこも、そのムードで賑わっていた。無論、スヴェロニア王国もその首都〈モクルスレイ〉も。だが、祭りで賑わっている時に限って、決まって何か惨事が起きる。無論この首都もそうだったが、この時ばかりはタイミングが悪すぎた。

「やるぞ」

「ああ」

大勢の武器を持った若者が路地裏に固まっており、彼らは互いに頷き合うと路地から飛び出してバラバラに散った。そして、夜１０時。中央広場に置かれたクリスマスツリーに、イルミネーションが灯されようとしたその時、その広間で大爆発が起きた。

「な・・・・・・なんだ・・・・・・・！？」

音を聞きつけて飛び出した兵士は凶弾に倒れ、血まみれの人々は悲鳴を上げ、吹き飛ばされた子供たちは泣き喚いていた。

「この国の覇権を、再び我らが指導者の手に！！」

そう叫びながら銃を乱射する若者たちを、厚い鎧にまとった兵士たちが総出で取り押さえる。だが、その瞬間に爆発が起こり、兵士たちが吹き飛ばされた。鎧のおかげで大事には至らなかったが、中には間接部に爆発を受け、そこから先が吹き飛んでいる兵士もいた。

「がああああっ！！」

「誰か・・・・・・誰か手を貸してくれ！」

そのまま、武装勢力と兵士たちによる武力衝突が起こり、双方に大

勢の死者が続出し、民間人もそれに巻き込まれていった。一夜にして、〈王国〉は地獄へと変わった。

―※＊※―

「大変です、市長！！」
「どうしたのだ？」
飛び込んだ市長室には、椅子に座り、資料に目を通しているヘクターがいた。
「スヴェロニア王国の首都〈モクルスレイ〉が陥落しました」
「なんだって！？」と、ヘクターは声を上げてイスから立ち上がった。
「詳しくはわかりません。ですが、かねてから危惧されていた、過激派の犯行だと見られています・・・・・・」
「・・・・・なんということだ・・・・・・」
ヘクターは頭を押さえ辛そうに呟く。その後、このニュースはイグリースだけでなく、瞬く間に全世界に伝わった。

―※＊※―

そして、現在。ハンターとしての力の覚醒、吸血鬼化した親友の失踪、王国の陥落。いろいろなことが頭の中に蘇った。
「（いったい・・・・・・この世界は、どうなっていくのだろうか・・・・・・）」
ふと、ベッドの頭にある棚の上に置いてある時計に目をやる。時間は七時を回っていた。

「やっべ！もうこんな時間だ！急がないと！！」
そう言うと、慌ててベッドから飛び降り、着替えをはじめた。

―※＊※―

どこにあるかわからない草原の中。旅人のマントをまとった四人の一団がいた。その内の一人は男性で、他は同い年の女性と、少女の二人。二人とも双子の姉妹らしく、顔立ちも服装も似ているが、小さい方の少女の瞳は赤みがかったピンク色をしていた。
「リリナ、ミリリィ。もう少ししたら町に着く。それまでがんばるんだ」
「うん・・・・・・」
女性に守られながら、一人の少女が頷く。しかし、もう一人の少女は、彼女を忌々しく睨んでいる。
「うぐっ」
その時、先頭を歩いていた男性が呻いて地面に膝を突いた。
「パパ！？」
異変に気付いたミリリィが駆け寄ると、男性はそのまま倒れた。
「あなた、しっかりして」
だが、男性の顔色は悪く、肌もだんだん冷たくなっていた。
「私はもう・・・・・・ダメだ。最後に・・・・・・伝えたいことが・・・・・・ある」
最後の力を振り絞って上げた手を、女性が優しく握る。
「誰も恨んではいけない。恨む必要など・・・・・・な・・・・・・・う・・・・・・ぐっ・・・・・・！」
「パパ！！」
それを最後に男性は息を引き取り、地面に膝を突いたミリリィが叫んで涙を流す。

「パパ・・・・・どうして・・・・・・」
泣きじゃくるリリナの言葉に、ミリリィの体が震える。
「お前のせいだ・・・・・・」
「えっ・・・・・・？」とリリナが呟くと、ミリリィが憎しみのこもった目で睨む。
「お前のせいで・・・・・・パパが死んだんだ。お前のせいだ！！」
「やめなさい、ミリリィ。『誰も恨んではいけない』って、言い残したでしょ・・・・・・」
「なんで庇うの！？全部こいつの・・・・・こいつが生まれたせいなんだよ！私も、パパもママも人間なのに・・・・・・こいつが吸血鬼だったせいで、私たちも吸血鬼扱いされてるんだよ！！」
「ごめんなさい・・・・・ごめんなさい・・・・・お姉ちゃん」
「うるさい！いくら謝ったって・・・・・あたしはあんたを許さない・・・・・！」
頭を抱えてうずくまるリリナに、「許さないから！！」と叫んだ。

―※＊※―

「ぁっ・・・・・」
まだ夜が明けてない森の中で、一人の少女が目を覚ます。寝袋のチャックを開いて体を起こすと、夜のような黒髪の毛先が下に落ちる。白地に薄いオレンジのラインが中央を通っている服を着ており、旅をしてるのか、周りにはリュックやマキをくべた跡が残っていた。
「（また・・・・・あの夢か・・・・・）」
悲しそうな目でうつむいていると、そこへ
「お目覚めですか、リリナお嬢さま」
声のほうを見ると、木陰に男性が一人立っており、少女は不機嫌そうにその男性を見た。

「おや・・・・・この呼び方は気に入らなかったかい？」
悪意のこもった笑みで、男はリリナに近づく。すぐさま寝袋から出ると、男のほうを見た。
「なんの用なの？連続殺人鬼、ジェラレ・バーレンディー」
冷たく言い放たれると、「お～お、冷たい」と言って立ち止まる。
「用件などわかっているでしょう。私は、お嬢さまを迎えに来たのです。名門貴族エルハンス家ご息女、リリナ・エルハンスさま」
「私は・・・・・貴族のお嬢さまなんかじゃない・・・・・！」
いつでも飛びかかれるように構えるリリナに、ジェラレは大して警戒はしていなかった。
「それに・・・・・何度来ても、答えは同じよ」
それを聞き、ジェラレは一瞬でリリナの前に現れ、彼女のあごに手を当てた。
「あなたは、闇の世界で暮らすべきなんだ。いくら望もうと、光の世界で暮らすことはできない」
「そ・・・・・そんなこと・・・・・」
「『ない』と言い切れますか？あなたが吸血鬼だと知った時の、人間どもの態度をもう忘れたのですか！？血を吸われた者が吸血鬼にならないと知っても、奴らは態度を変えなかった！どうがんばろうと、吸血鬼は闇の中で生きるしかないのですよ」
「・・・・・だからって・・・・・罪のない人を傷つけるなんて・・・・・」
「罪のあるなしなど関係ない。これは、同胞を守るために必要なことなのだよ」
返す言葉もなく、黙り込むリリナ。ジェラレは手を離すと「ま、いずれわかるよ」と言い残し、闇の中に姿を消した。

―※＊※―

〈エイジア大陸〉最西端、すなわち〈エウロッパ大陸〉との境にある五つの町。その内の一つを、四人の男女が歩いていた。それはエウロッパ大陸の警備を任されたはずの、セリュード、クウァル、セルス、そしてディステリアたちだった。

「この国の、いくつもわかれた地方を収める都市は、それぞれ神々の名前が付けられているの。まず、〈天空首都スヴァローグ〉・・・・・」

「天空首都!?空に浮かんでいるのか!?」

セルスの声をさえぎり驚くディステリアに、セルスの幼馴染でチームメイトのクウァルが呆れた視線を送る。

「バカ、そう名前が付いてるって話だ」

そう言ったクウァルに、「わ、わかってる」とディステリアは顔を逸らすと、ガイドブック片手にセリュードが説明する。

「まあ、スヴァローグを恐れ敬っている連中からは〈モクルスレイ〉とも呼ばれる。他にも、火の神の名を冠した〈工業都市スヴァロギッチ〉、雷の神の名を冠した〈学究都市ペルーン〉、水の神の名を冠した〈貿易都市プリペガラ〉、風の神の名を冠した〈風車都市ストリボーグ〉、大地母神の名を冠した〈農耕都市モコシ〉、それから警備隊の基地が設置されている警備都市。光の神の名を冠した〈ベロボーグ〉と闇の神の名を冠した〈チェルノボーグ〉・・・・・・」

「そして、戦神の名を冠した〈軍事都市ルエヴィト〉だ」

声のほうを向くと、白い髪をした一人の青年が歩いて来ていた。胸から腹部にかけて白い十字架が入った、灰色地の袖の長い服を着ており、腰には短い剣が差してあった。

「それと、今の説明には木の神の名を冠したもう一つの学究都市、〈自然都市ポリスーン〉が抜けている。巨大発電施設がある〈学究都市ペルーン〉と比べて見劣りしがちだが、どちらも隣同士で規模はそれほど変わらない。覚えておいてもらいたい」

「詳しいですね？地元の人ですか？」と、セルスが聞く。
「ああ、ここ〈太陽都市ダジボーグ〉に住んでいるクルス・タルボージュだ。と言っても、駐在兵みたいなものなんだけどな」
そう言ってクルスは、ディステリアたちの目の前に止まった。
「ご丁寧にどうも。俺はクウァル、こっちは幼馴染のセルスで・・・・・」
幼馴染と言う言葉が出た途端、クルスの顔が一瞬強張ったが、ディステリアはそれを見逃さなかった。
「旅の仲間のセリュードと、ディステリアだ」
「・・・・・旅・・・・・ね。で、ここへは旅行でかい？」
「いや。俺たちは任務で・・・・・」
ディステリアが言いかけた瞬間、他の三人が慌てて彼の口を押さえ込んだ。
「そう。旅行だよ、旅行」
「でも最近、物騒だから気をつけたいな～って・・・・・思って て・・・・・」
誤魔化すセリュードとセルスに、「・・・・・まあ・・・・・」とクルスは言葉を濁す。
「確かに用心したほうがいいな。今も過激派が何かしないように、警備が厳しくなっているって言うから・・・・・なんなら、俺が町を案内するよ」
とりあえず納得した様子のクルスに、三人はほっと溜め息をついた。
彼が離れた後、セリュードはディステリアを睨む。
「・・・・・気をつけてくれよ、ディステリア。我々がこの国に探りを入れているのは、国家機密にも値するのだから・・・・・」
「・・・・・悪かったよ。次からは気をつけるよ・・・・・」
「次からでなく、この町に入る前から気をつけてもらいたかったな」
厳重注意をする仲間、特にクウァルに「ごめん」とうなだれる。
「まあまあ、失敗は誰にでもあるんだし、それくらいにしなさいよ」
「だが・・・・・」

セルスにクウァルは言い返そうとするが、「まあ、確かにそうだな」と、ディステリアから離れる。
「だが、セルス。お前はディステリアに甘すぎる！」
そう言って大股で歩くクウァルを見て、セリュードとセルスは肩をすくめた。
「何あいつ。嫉妬してるの？」
セリュードが「みたいだ・・・・・・ね」と呟くと、嫉妬を向けられた当人は、溜め息をついて頭をかいた。

―※＊※―

～―回想―～
話は一端、前日に戻る。
「俺に・・・・・・監視任務・・・・・・・？」
「そうだ」
聞き返したクルスに、対不死者組織ルマーニャの長、ガシムが答える。組織の名前は、この国の名前を〈チェルノボーグ〉と改名する時に、元からあったヴァンパイアハンター組織の名前に、元々の国の名前をつけることを交換条件としたことに起因する。
「ターゲットに関係がある者が、現れたのですか？」
『ターゲット』とは、この組織の言葉で吸血鬼や不死者と確認され、排除対象者となった者に対する呼称である。
「いや。それがわからないから、君に見てもらおうと思っている。もしもの場合は・・・・・・」
「俺に彼らの抹殺を・・・・・・・ですか・・・・・・・？」
「そうだ」
ガシムが言うと、部屋の中を沈黙が包む。組織にとって、自分は捨

て駒でしかないことをクルスは悟っていたが、ヴァンパイアハンターとしての素質が見いだされ、この組織に身をゆだねるに連れ、覚悟は固まっていった。

「（例え捨て駒でしかなくても、俺は・・・・・・）」

さらに覚悟を固めているクルスに、ガシムが机から出した資料を見せる。

「実は、一人ではない。四人組みだから、もしもの時は苦しいかもしれないが・・・・・・」

「わかりました。覚悟はしておきます」

差し出された資料を受け取ると、早速目を通す。そこには四人の男女、セリュード、クウァル、セルス、ディステリアが映されていた。

～―回想終わり―～

―※＊※―

現在。クルスはオープンカフェで休むセリュードたちを、離れた席から見ていた。

「（別に・・・・・・怪しい所は見受けられないけど・・・・・・）」

それが、話し合いをしているセリュードたちを見ての第一感想だった。

「それで・・・・・・チームリーダーさんは、どこが怪しいと・・・・・・？」

「別に・・・・・・確かにパラケルからリーダーに任命されたが、だからって絶対服従ってことはないだろ」

ディステリアとセリュードの会話に出て来た『絶対服従』と言う言葉に、一瞬、クルスが反応する。

「しかし・・・・・・ここに来る前に話し合った時と、怪しい国は変わらない」
「そりゃあ・・・・・・あれからなんの情報も仕入れてませんからね・・・・・・」
クウァルもセルスもそれを聞くと、気まずい空気が場を包み、全員が口をつぐんだ。
「（こいつらを監視していくのか？）」
今まで何事にも油断しないことを教えられてきたクルスだが、この時ばかりはやる気が失せてきた。
「（それに・・・・・・こいつらが本当に吸血鬼なら、太陽が出ている今の状況が平気であるはずが・・・・・・）」
その時、「きゃあ～！！」と、辺りに悲鳴が響き渡った。
「今の悲鳴は！？」
「向こうだ！！」
「お代、ここに置いておきますね」
ディステリアが立ち上がり、セリュードが顔を向け、クウァルは黙って駆け出し、セルスは代金を置き、三人の後を追いかけた。その無駄のなくすばやい動きの流れに、クルスは目を奪われた。
「（ヴァンパイアの仕業ではなさそうだが・・・・・・俺も行くか）」
セリュードたちの戦い方や実力を見るため、何より監視任務を全うするため、クルスも後を追いかけることにした。もちろん、代金を置いて。

―※＊※―

現場へ駆けつけたセリュードたちが見たものは、全身を黒い体毛で

包まれ、鳥の翼のような腕の先に手を持った巨大な怪物。クルスは知らないが、それはクドラの覚醒のきっかけを作った謎の怪物だった。

「（なんだ・・・・・こいつは・・・・・？）」

目を見張るクルス。だが、セリュードたちはさほど驚くことなく、すぐに散会した。

「セルス！お前はそいつを逃がせ！」

「わかった！こっちです」

クウァルに言われ、襲われていた女性をセルスが逃がしていると、セリュードは槍、クウァルとディステリアは剣と、それぞれ自分の武器を抜いた。

「リヒト・・・・・ランス！！」

「イグニス・セイバー！！」

「フォーリング・アビス！！」

セリュードが槍に溜めた光属性の魔力を凝縮して飛ばし、クウァルが剣に集めた炎を刃にして飛ばし、ディステリアが天魔剣を振り下ろして、背中の翼から無数の闇の流星を飛ばす。一斉攻撃を受けた怪物は、満足な反撃も出来ずに地面に倒れ、それを見たクルスは唖然とした。

「（連携にほとんど無駄がない・・・・・それに、最初に民間人を逃がす判断の速さ。こいつら・・・・・ただの旅行者じゃないな）」

睨むように見られているのも構わず、セリュードたちは倒れた怪物に近づいた。

「なんなんだ、こいつは？」

「さあ・・・・・このような怪物は見たことがない」

冷静な顔をしているクウァルを見て、クルスは考えた。

「（その割には、落ち着いている。元から物事に対して反応が薄いのか、それとも・・・・・この怪物の存在を知っていたのか・・・・・）」

疑いの表情で見ていると、三人にセルスが近づいてくる。
「（少し・・・・・探りを入れてみるか）」
そう考えて、クルスはセリュードたちに近づいていき、「なあ」と切り出そうとした。
「クルス。お前、この怪物について何か知らないか？」
「・・・・・・っ！？」
セリュードの突然の質問に思わず驚いて、目を見張ってしまった。
「ど・・・・・どうしてそんなことを聞くんだい？」
動揺を悟られないように、落ち着いて聞き返す。
「お前、普通こういう怪物を見たら、まず逃げ出すかその場に固まるかの二つに一つだ。だがお前は、そのどちらでもなかった。それどころか・・・・・・」
「三人の戦いを、冷静な目でしっかり観察していたよ」
クウァルとセルスの指摘に、言葉を失う。
「それに、最初に会った時、『住んでると言っても、駐在兵のようなもの』と言っただろ？と言うことは、こういう存在に対抗するために送られた」
そう言って、ディステリアも倒した怪物を見下ろす。
「さらに・・・・・休日と言うのなら、なぜ俺たちに案内を申し出たんだ？ほぼ、毎日が仕事だ。休日くらい自由に過ごすだろう」
「そうしなかったと言うことは、よほどお人よしなのか・・・・・・もしくは・・・・・・」
「・・・・・俺たちを監視するため・・・・・か」

第67話　光のハンターと闇のヴァンパイア

「・・・・・やれやれ、こうも簡単に見抜かれるとは」
セリュードとクウァルに言われて頭をかくが、クルスはすぐに厳しい顔つきになる。
「なら、俺からも聞こう。君たちはいったい何者なんだ？あれほど無駄のない連携と強力な技、冷静な判断が素早く出来るなど、ただの旅行者じゃないだろう？」
それは、先ほどの戦い方で判断できる。なら、いったい何者なのか。その疑問が未解決だった。
「そりゃそうだろ。俺は現役の兵士だ。そこで、こいつらは同僚。現在、休暇旅行中なんだよ」
そう言われては、今の動きを納得せざるを得ない。現役の兵士なら素人ではないので、あのような素早い判断や連携が出来ても、なんの不思議もなかった。だが・・・・・・
「完全に納得はできない、と言う顔をしてるな。まあ、詳しい話は宿の部屋でしてやるよ。俺たちは大丈夫だが、お前は立ちっぱなしだと疲れるだろ」
「み・・・・・・見くびるな！俺はこれでも、ヴァンパイアハンター・・・・・・」
そこまで言って、クルスは口を滑らせたことに気付いた。
「じゃあ、そのハンターさんがなぜ俺たちを見張るのか、その訳を宿で教えてもらおうか」
クルスは、自分のうかつさを呪った。

―※＊※―

町の入り口近くにある宿の一室で、セリュードたちは椅子に座ってクルスから話を聞いていた。

「・・・・・で、君は、本当は何者なんだ？」

「最初に言った通り、駐在兵だよ」

ディステリアの問いに、迷いなくクルスは答えた。

「国境近くにある町〈警備都市チェルノボーグ〉にある対不死者組織〈ルマーニャ〉から派遣されたのさ」

「ルマーニャ・・・・・聞いたことがないな。クウァル、知ってるか？」

「いや・・・・・」

セリュードに聞かれて首を振るクウァルに、「当然だ」と言うクルス。

「〈チェルノボーグ〉の町長・・・・・いや、町の権限を握っている組織の上層部は、内部の情報が外に漏れないように手を回してるんだ」

「そりゃまた、どうして？」と、セリュードが首を傾げる。

「さあ。どういう訳か、俺にもわからない。ただ、昔から俺が住んでいる町は他の街や国に対して閉鎖的なんだ。それには、昔から伝わる『吸血鬼伝説』に関係しているってことは、確実に言えるんだ」

「そうなんだ」

セルスが頷くと、「そういえば」とクウァルが切り出した。

「お前は、どうして俺たちを見張ってたんだ？」

「正確には、お前に監視を命じたのは誰で、どういう理由だったんだ？」

セリュードが質問を補足すると、クルスはしばらく腕を組んで考えていた。彼にとっては、自分が身を置く組織にかかわることなので、

話すべき情報を慎重に選んでいた。とはいえ、彼自身、その組織のことをあまり信用していない。

「俺が組織に入るずっと前から、吸血鬼はルマーニャ・・・・・・現在の〈警備都市チェルノボーグ〉の外に現れることはなかったんだ。だが、五年ほど前・・・・・ルマーニャがスヴェロニア国の一つに統合され、〈警備都市チェルノボーグ〉と改名してから、周辺都市で吸血鬼や不使者の出現情報が集まりだしたんだ」

「それが、どう俺たちを見張ることに繋がるんだ？」

「ディステリア。話は最後まで聞くものだ」

セリュードが注意するとディステリアは口を噤み、クルスは話を続ける。

「厳重な警備が敷かれている町の境界を越えるのは、とても一人や二人では無理なんだ。例えば、何者かの手引きがない限り。そう考えて調査した俺たちはその背後に、〈ラニャーリ〉という組織がいることを突き止めたんだ」

「？・・・・・なんだ、そりゃ？」

「『吸血鬼（ヴァンパイア）と不死者（アンデッド）によって作られた組織』・・・・・ということしかわかっていない」

「名前の由来は？」と、クウァルが聞く。

「不明だ。どういう因果関係でこのような名前が付いたか、わかっていない」

セリュードはあごに手を当てて考え込むが、それに構わずクルスは話を続ける。

「ある日、町の境にある検問所を越えようとしたヴァンパイアがいたんだが、倒す前に妙なことを口走ったんだ」

「妙なこと？」と、今度はセルスが聞く。

「『俺たちには、あるお方の後ろ盾がある。例え俺を倒しても、すでに多くの同士が町の外に出て、好き放題しているだろう』・・・・・と」

「つまり・・・・・誰か、町の外へ手引きする協力者がいた、っ

てことね」
セルスの言葉に、クルスは「そういうことになる」と言った。
「それで、調べてみて出てきた組織が・・・・・・ら・・・・・・らみゃ？」
詰まるディステリアに、「ラニャーリだ」とクルスが補足する。
「どうも覚えづらく『ラニーニャ』と間違えてた者もいた」
「なるほど。それで、そいつらの規模とかはわかっているのか？」
「いや。これ以上は守秘義務に当たる」
セリュードの質問にクルスは情報公開を控える。だが、セリュードは彼の属する組織や、彼自身がこれ以上はっきりした情報を持っていないことを悟った。
「それにしても・・・・・・休暇で国外から来た俺たちに監視とは・・・・・・よっぽど用心深いんだな」
腕を組んで椅子の背もたれにもたれたディステリアが、なかば愚痴るように呟いた。
「臨時とはいえ、ここも首都だからな」
「ここも・・・・・・とは・・・・・・？」
セリュードが首を傾げると、「ああ」と答えるクルス。
「本来の首都であった王国〈天空首都スヴァローグ〉が崩落してから、ここと隣にある〈月光都市ミエシャッツ〉が臨時の首都として扱われるようになったんだ。ちなみに〈太陽都市ダジボーグ〉と〈月光都市ミエシャッツ〉は〈警備都市ベロボーグ〉と周辺都市から少しずつ分けられたんだ」
ディステリアは「なるほどねぇ・・・・・・」と言って、窓の外を見た。
「国境にある五つの町は〈太陽都市ダジボーグ〉、〈月光都市ミエシャッツ〉、〈貿易都市プリペガラ〉、〈警備都市チェルノボーグ〉、それから〈軍事都市ルエヴィト〉だ。この五つを越えられると、とても俺たちには手が出せないし、何より国の内情を知られる危険がある。だから、それぞれに組織の兵が何人か派遣されている。俺も

その一人だ」
「なるほど。だが、疑問は残る。吸血鬼伝説くらい世界中にあるだろうに、どうしてそいつらはそれを隠そうとするんだ？」
「さあ・・・・・そこまでは」
クウァルのこの指摘に対して、クルスは肩をすくめるだけで答えなかった。民間人だったクウァルとセルスや、見習い兵も同然のディステリアにはわからなかったが、セリュードには何かを感じていた。
「・・・・・しかし、町に神様の名前が使われているとは・・・・・本人たちから見れば、かなり迷惑なんじゃないか？」
「この地方は、古くから土地の神々に対する信仰心が深かったんだ。だから都市に神の名前をつけているのも、彼らを敬うという意味が込められていたんだろうな」
身を乗り出すようにして聞くディステリアに、なんでもないという表情で答える。

―※＊※―

翌々日。クルスは〈太陽都市ダジボーグ〉にある詰め所に戻った。
「結局・・・・・捕らえ所のない人たちだったな・・・・・」
「よう、戻ったのか？」
後ろからした声に振り返ると、クルスは相手を見るなり、すぐ身を正した。
「ディマ・ラーナ少佐」
「・・・・・監視任務、ご苦労だった。早速だが、報告を頼むよ」
「ハッ」
クルスは敬礼するとディマについて行き、彼の部屋で任務の報告を行なった。
「本人たちは旅行だと言っていましたが、それが本当かどうかは不

明です。今後、更なる周辺捜査が必要かと」
そうは言ったものの、クルスには彼らが敵だとは思えなかった。報告が終わった後、ディマは落としていた視線をクルスに向ける。
「・・・・・・で」
「はい？」
思わず聞き返したクルスに、ディマは顔を上げて続ける。
「その連中は、お前から見てどういう奴らだ？」
「どういう・・・・・とは？」
質問の趣旨がわからず聞き返したクルスに、ディマは返答に困ったような顔をする。
「例えば・・・・・信用における・・・・・とか、本性を隠している・・・・・とか。彼らに対するお前の印象だよ」
「・・・・・しかし・・・・・印象による安易な判断は、冷静な判断に支障をきたす恐れが・・・・・」
「固いね」
「そうやって、教わってきました」
溜め息をついて言うディマに、クルスは答える。
「その固さが・・・・・お前を苦しめなければいいのだが、な・・・・・」
その言葉に首を傾げたその時、部屋の前をドタバタとかける足音がした。
「大変です、ディマ・ラーナ少佐！」
「何事だ？」
ドアを開けて入って来た兵士に聞くと、「ハッ！」と兵士は敬礼した。
「今しがた、第七分隊より『ラニャーリと思わしき一団が、学究都市ペルーンに向かっている』と、入電がありました！」
それを聞き、クルスとディマは驚いた。
「まずい。〈学究都市ペルーン〉には国全体の電力を補う巨大発電施設があるんだ。そこを落とされたら・・・・・」

「国の半分が停電に追い込まれる・・・・・敵の規模は？」
「中隊レベルです。近くを巡回中の部隊は、第八小隊と第十三小隊です。必要とあれば、援軍として送りますが？」
「わかった。そのように取り計らってくれ」
ディマの指示に「ハッ」と兵士は敬礼し、すぐさま部屋を出て行った。
「大丈夫でしょうか？第五小隊も第十三小隊も、戦闘階級（ランク）はAランクですが、敵のほうが多いとなると」
「ならば、君にも行ってもらうとしよう。すぐに準備したまえ」
クルスも「ハッ」と敬礼すると、すぐさま部屋を出て行った。

―※＊※―

スヴェロニア国のほぼ中央に位置する〈学究都市ペルーン〉。そこには、小国をまかなえるほどの電力を作り出せる巨大な発電施設がいくつかあり、この国の電力の約3分の1が発電されている。その内の一つで、発電所の職員たちが銃を構えて、攻めてきた吸血鬼やアンデッドに対抗した。しかし、不死者が攻めてくると思わなかったために普通の銃しか配備されておらず、侵攻を止めるには至らなかった。
「く・・・・・くそ・・・・・・！バ・・・・・・・化け物・・・・・！」

追い詰められ、息も絶え絶えに銃を撃つが、いくら頭や胸を打ち抜こうが倒れることはなかった。やがて弾が切れ、迫ってきていた吸血鬼はマントの隙間から伸ばした腕で職員の首を鷲掴みし、そのまま牙をむき出しにしてその首に噛み付いた。

「ギャアアァァァァ～」！！！

噛み付かれた職員の皮膚から血の気が引き、やがて腕をたらして息絶える。血を吸い尽くした職員を放すと、その手で自らの口元を拭った。

「チッ。なぜ、こういう場所にいる人間の血は、こうもまずいのだ。塩辛い上にドロドロしている。健康管理がなっていないと見える」

吸血鬼は忌々しげに愚痴り、マントを翻して踵を返すと、先ほどの職員が立ち上がりニヤリと笑う。その口元からは鋭い牙が見えたがそんなことを気にもせず、潜入してきた吸血鬼の一団は発電施設の心臓部へ侵入した。

「太陽の光ほどではないが、電気の光も眩しくてかなわん。早々に片づけるぞ」

吸血鬼となった職員たちが破壊作業に取りかかろうとしたその時、外から仲間の悲鳴らしきものが聞こえた。

「なんだと！？もうハンターたちが来たとでも言うのか」

破壊作業を吸血鬼になった職員たちに任せて外に出てみると、自分が連れてきた部下を引き裂く者がいた。その存在がいることは予想していたが、目の前にいる者が予想していた者と違うことに彼は目を見張った。

「バカな・・・・・・なぜ・・・・・・」

目の前で部下の吸血鬼を引き裂いていたのは、自分と同じ吸血鬼。全身を暗い紫色の体毛に包まれ、腕に翼が生えたクドラだった。そこにいた吸血鬼を一通り倒すと、クドラは赤い目でボスの吸血鬼の方を睨む。

「貴様が・・・・・・こいつらのボスか・・・・・・？」

「いかにも。だが、我のほうの質問にも答えてもらおう。貴殿も吸

血鬼・・・・・クドラクとお見受けする・・・・・・」
それを聞いて、残った部下たちはざわめきだす。だが、クドラはただ相手を睨んでいた。
「関係ないだろ」
「確かに・・・・・・同族をここまで殺したのだ。生かしてはおけん！」
そう言ってマントの下の腕を挙げ、部下に攻撃命令を出したその時、クドラに飛びかかろうとした吸血鬼たちを無数の光の矢が貫き、炎に包み込んだ。
「何！？」
吸血鬼が叫び、驚いたクドラが光の矢が降ってきたほうを見上げると、白い光に包まれた一羽の白い鳥が降って来て、地面に着地すると人の姿になる。
「何者だ！？」
「対不死者組織ルマーニャ第六討伐部隊所属、クルス・タルボージュ」
それは紛れもなく、幼馴染のクルス。思わぬ乱入者にクドラは目を見張ったが、クルスのほうにそんな余裕はない。
「ハンターだと！？くそっ、我らが分裂してると悟られたか」
「どうなさいます」
「決まっておろう！！」
吸血鬼は叫ぶと、マントの下からいくつかのカプセルを放り投げた。そのカプセルは地面についた途端、三箇所から黒い煙を噴き出し、その煙はやがて一つの形となった。
「――――！？・・・・・こいつは！」
クドラとクルスは目を見張った。鳥の翼のような腕の先に手がついた、黒い体毛の怪物。クドラの覚醒のきっかけになった、そして昼間〈太陽都市ダジボーグ〉に現れた謎の怪物そのものだった。
「なぜこの怪物がここに？貴様、いったい！？」
クルスの問いに答えず吸血鬼は腕を振り、命令を下す。

「やれ、チュリュボテル！皆殺しにしろ！！」
チュルボテルは一吼えすると、クドラとクルスに襲いかかる。だが、二人とも左右に散ってかわすと、クルスは剣で、クドラは腕の爪ですれ違いざまに首や胴体を切り飛ばす。倒されたチュルボテルは吸血鬼と同じように、灰となって崩れ去った。
「クッ、おのれ。だが、おかしい。あの白い髪のほうはクルースニクで間違いなかろうが、なぜ、クドラクが吸血鬼を倒す力を持っているのだ・・・・・・？」
クドラに胸を貫かれた吸血鬼は、灰と化して崩れ去る。それは、クドラが赤い羊膜に包まれて生まれてきた、ヴィエドゴニャだからこそ得た、ヴァンパイアハンターとしての能力だったが、そんな本人すら知らないことをこの場にいる者がしっているはずはなかった。
「ちっ・・・・・・なんでもいい。死ね！裏切り者！」
他のチュリュボテルを倒したクドラに吸血鬼が襲いかかろうとし、気付いたク銅鑼が振り返る。迎え撃とうとしたその時、
「ヴェントランス！」
風が渦巻く槍の穂先の形をしたエネルギーが、クドラと吸血鬼の間を割り込んだ。地面をえぐった風の槍で土煙が舞い上がると、吸血鬼は距離をとった。
「今度はなんだ！？」
割り込んだ攻撃が飛んできたほうを見ると、旅人用マントをまとい、槍を持った青年を先頭に、剣を持った男性二人、その後ろを女性が一人と言う一団が、突っ込んできていた。それは、クルスが監視していたセリューードたち。
「えっ？皆さん、どうしてここに！？」
クルスがそう聞きながら、飛び掛って来たチュリュボテルの胴体を剣で切り裂く。仰け反りながらも攻めてくるチュリュボテルの攻撃をかわしながら、胴体に剣を当て続ける。
「話してもいいか？」
「勝手にしろ」

吸血鬼を天魔剣で切ったり足で蹴ったりしてるディステリアが聞くと、クウァルが素っ気なく言う。
「〈軍事都市ルエヴィト〉で、ここが襲われてるって聞いて飛んできたんだ」
「飛んで・・・・・って、あそこからじゃ、どんなに走っても一日半はかかるぞ」
「だから、ディステリアが言っただろ?『飛んで』って」
意味深な笑みを浮かべてクウァルが言うと、飛びかかってきたチュリュボテルをセリューードが槍で貫き、クウァルが殴り飛ばし、セルスが光属性の魔法で攻撃する。そして、ディステリアは。
「はあああああああっ!!」
背中に黒く大きな鳥の翼を生やし、手に白い光を放つ剣を握り、チュリュボテルや吸血鬼たちを切り伏せていた。それを見て、クルスもクドラも、そして部下を率いていた吸血鬼も、信じられないという顔で見ていた。
「バカな・・・・・黒き翼は、暗黒の住人の証。光の力を使えるはずがない・・・・・」
「ところが、俺は使えるんだよね。反動は受けるけど・・・・・」
ディステリアのその言葉の通り、ディステリアの右腕は焼け、煙が立ちはじめた。苦痛で顔が歪むが、それでもディステリアは剣を振り続けた。
「おい。まさか、また新しい技が目覚めようとしてるんじゃないだろうな」
拳で殴り飛ばした吸血鬼を、天魔剣で切り伏せる。その時のディステリアの表情は、クウァルの懸念の確信を持っている表情にも見えた。
「冗談じゃないぞ!実戦でそれをやって倒れられたら、大変なのはこっちだ」
「戦力増加という意味では、歓迎するべきなんだろうが・・・・・」

正直、新しい技を覚える度に、慣れるまで倒れられるのはセリュードとしては歓迎できない。苦笑いした彼に吸血鬼たちが襲いかかるが、セルスが光の雨を降らせてその体を焼く。

「セリュードさん、気を逸らさないで」

「悪かった」

セルスに注意され謝ったセリュードは、腰を落として槍を構え、跳びかかる吸血鬼たちを迎え撃つ。それらが全滅するのに、そう時間はかからなかった。

第６８話　思わぬ出会い、すれ違い

引き連れていた部下が全滅し、襲撃者の親玉は狼狽する。
「くそっ！なんなんだ、こいつらは！？」
気付いた時には戦力強化に連れてきていたチュリュボテルも全て倒されており、残っているのは指揮していた吸血鬼、ただ一人だけだった。
「さて。こいつを捕まえて事件の全容解明・・・・・なんてことはできないのか？」
「ああ。ヴァンパイアハンターでも、噛まれれば死んでしまう。だから、吸血鬼は殺すしかない」
セリュードの問いに対して厳しい言葉を吐くクルスに、残された吸血鬼は後ずさりする。
「おのれ！道連れにしてやる！」
そう叫ぶなりクドラに襲いかかるが、動きは完全に捉えられており、彼の腕に胸を貫かれた。
「ガハッ・・・・・なぜ・・・・・・貴様は・・・・・・」
「『吸血鬼を倒せるか』って？知らないよ。そんなのは・・・・・・」
何かが弾けるような音がすると、襲いかかった吸血鬼の体は灰と化した。
「終わった・・・・・・か・・・・・・？」
クウァルの言葉でハッと気付いたクドラは、早々にその場から立ち去った。
「なっ、おい。ちょっと待て・・・・・・」
すぐさまセリュードが呼び止めるが、クドラが立ち止まることはな

かった。
「あいつは・・・・・・」
ディステリアが聞くと、放心状態に近いクルスが顔を逸らして呟いた。
「クドラ・・・・・・俺の・・・・・・幼馴染だ・・・・・・」
その後、立ち去ったクドラと入れ違いに、今度はディマが来た。
「クルス・・・・・・おわっ！ここにもいたのか・・・・・・ん？そちらの方々は？」
来るなり周りの状況をすぐに理解し、さらにディステリアたちのことも聞いてきたので、クルスは少し困惑した。
「ええ・・・・・・と。先ほどお話いたしました、セリュードさん、ディステリアさん、クウァルさん、セルスさんです」
「ほう・・・・・・こいつらが例の四人か」
「・・・・・・と言うことは貴様か？クルスに俺たちの監視任務を与えたのは・・・・・・」
「そのことについては、言うまでもないだろう。こちらも仕事なんでね」
セリュードもわからなくはないので、喧嘩を売りそうなクウァルとディステリアを抑えて、妥協することにした。

―※＊※―

その後、発電所内に残っている吸血鬼を討伐した。
「じゃあ、俺らは戻ります」
「また会うことがあったら、くれぐれもよろしく」
「協力的なのはいいですが、それは無理だとわかってるんじゃないですか？互いに・・・・・・」
「ほう・・・・・・」

皮肉を込めたセリュードの言葉に、ディマは興味深そうに目を細める。彼らは互いに別れを告げ、セリュードたちは〈軍事都市ルエヴィト〉に、クルスとディマは〈太陽都市ダジボーグ〉の詰め所に戻った。

「少佐は、あの四人組がラニャーリに係わっていると？」

「係わっているかも知れんが、係わっていないかも知れん」

椅子に座って、背もたれにもたれかかる。

「ところで・・・・・現場にいたのは、お前とあの四人だけか？」

その質問に、ビクッと肩が震える。気付いたのか気付かなかったのか、ディマは続ける。

「どうなんだ？」

「・・・・・はい」

極自然に聞くディマに、戸惑いながらもなんとか声を絞り出した。

「そうか。わかった」

そう言うと、ディマはそれ以上は聞かなかった。

―※＊※―

その頃、周りを闇に包まれた森の中。そこに何人かの男たちがいた。

「失敗・・・・・だと・・・・・・？」

「ハッ、申し訳ありません」

怒りに満ちた声がすると、地面に膝を突いている部下の一人が頭を下げた。

「邪魔したのは・・・・・ルマーニャの奴らか？」

「どうなさいますか？ドン・ドラクルさま」

するとその男は、自分の名前を呼んだ部下のほうを睨んだ。

「な・・・・・何か・・・・・お気に触ることでも・・・・・？」

恐怖に満ちた言葉で弁明するが、ドラクルは「いや」と答える。
「『さま』は付けなくてもいい。」
「は？」と、部下は首を傾げる。
「だから、『さま』は付けなくてもいい。『ドン』とは『首領』を意味する言葉だから、『さま』をつければ意味が重複する」
ほとんどの部下が、「ああ、なるほど」と頷く。
「話を戻しましょう。我々が攻めた発電所で落とせた場所は一つもありません。完全に失敗です」
影の集まりの中から、悔しそうに唸る声が聞こえる。
「おのれ。忌々しいヴァンパイアハンターども！！」
「そろそろ、彼らがうっとうしくなってきませんか？」
「しかし、今の我々の戦力では、奴らを皆殺しにすることはできない」
「それならば、いいものがありますよ」
暗闇の中から聞こえてきた声に、ドラクルの部下のほとんどが身構える。
「何者だ！？」
部下が騒ぐ中、ドラクルだけは静かに佇んでいた。
「皆の者、構える必要はない。この者は、我々の協力者だ。名前は確か・・・・・・」
「ジェラレ。ラトデニのおっさんの使いだ」
闇の中から声の主が答えと、ドラクルの部下はざわめきだした。
「ラトデニ！？我々にあの役立たずを渡した奴か！？」
「おいおい、できそこないとは酷いな。不完全とはいえ、戦力としては利用可能なはずだ」
「お前、言わせておけば！！」
部下の一人がいきり立つが、「抑えろ」とドラクルが命令する。
「し、しかし・・・・・・」
「抑えろ、と言っていることがわからないのか？」
闇の中から睨みつけてくるドラクルのプレッシャーに彼の部下たち

はすくみ、ジェラレは冷や汗をかく。部下が静かになると、ドラクルはプレッシャーを解いた。
「部下が失礼した。で、ラトデニはなんと？」
「チュリュボテルの戦闘データを回収したいと。代わりに、追加戦力分をお渡しします」
プレッシャーが消えたにも関わらず冷や汗をかくジェラレは、上着のポケットから出したカプセルを草の上に置く。
「そんな所に置かなくても、直接渡せばいいだろ」
「そ、それもそうですね」
表情を引きつらせながらカプセルを拾ったジェラレはドラクルに近づき、カプセルを渡すと代わりに映像が入った端末を受け取った。
「・・・・・・・・確かに」
端末を見せ、笑みを浮かべると、ジェラレは森の暗闇の中に消えて行った。

―※＊※―

翌日。行きと同じように、セリュードたちはイェーガーに乗って、〈軍事都市ルエヴィト〉に戻って来た。四人は、町外れにある倉庫の一つに寝泊りさせてもらっている。本来なら宿に泊まるべきなのだが、何かが起こった時、町外れまで走ると何分かのロスが起こってしまう。そこで持ち主に頼んで、町の外に近い倉庫群を借りて寝泊りしているのである。
「いや～、えらい目にあった～」
ディステリアがそう言って倉庫にイェーガーを入れると、小さなドアの入り口に誰かの気配がする。
「聞いたよ」
子供のような声がすると四人が声のほうを向く。そこには作業服姿

の少年が立っていた。
「やあ、ローハくん」
戦闘を切り抜けたと思えないほど能天気な声でセリュードが答えたが、ローハは無視してイェーガーの装甲に手を当てた。
「本当に、発電所に行って来たんだ」
「よくわかったな」
「見張りの人たちが、レーダーで君たちが飛んでくのを知った」
欠伸を抑えるクウァルが言うと、ローハは笑みを浮かべて答える。
「おっ。と言うことは、それで信用するって人がいるのか？」
「逆だよ。信用を得るための狂言だと言う人もいるんだ」
それを聞いて、ディステリアはがっくり肩を落とした。
「詳しくは知らないけど、上層部には君たちを疑っている者が多いらしいよ」
「だろうな」
セリュードが溜め息交じりに言うと、クウァルも呆れた表情をする。
「彼らから見れば、俺たちは所属不明の戦闘機を駆る正体不明の小規模部隊だからな」
彼ら四人を、自分たちが所有する倉庫の一つに住まわせているのも、それを探るためでしかなかった。しかし、それはセリュードたちも同じ。自分たちの・・・・・そして、いずれ全世界の敵となる謎の組織デモス・ゼルガンク。ブレイティア以上に世間に認知されていないその組織の協力者が、この軍事都市で武器輸入をしているか否かを調べるのが、彼らの任務でもあった。
「昨日からラジオなどで聞いているが、発電所が襲われたってニュースはない。それどころか、職員が死んだのは事故だって報道されている」
セリュードが携帯ラジオからイヤホンのコードを引き抜くと、ちょうどやっているそのニュースがスピーカーから流れた。
「当然だろうね。いつ反乱分子となるか分からない者たちを、制定するような情報を流すとは思えない」

そう言うローハに、「確か・・・・・・」とクウァルが言う。
「襲撃者は吸血鬼だったな。ルマーニャが情報を隠蔽してると考えるべきだろう」
「くそう。なんで隠そうとするんだよ。別に、都合も悪くないだろう」
ディステリアは思わずイェーガーの装甲を叩き、その音で今までコクピットで寝ていたセルスが目を覚ます。
「当たったってしょうがない。今は、俺たちにできることをやろう」
セリュードの言葉にディステリアは舌打ちしたが、頭をかいて顔を上げた。
「・・・・・・わかったよ」

―※＊※―

一方、〈太陽都市ベロボーグ〉では。
「さてと・・・・・・。食料とかはこれくらいでいいかな・・・・・・」
なぜか、クルスがメモを片手に、買い物袋を抱えていた。
「・・・・・まったく、なんで俺が食料とかの買出しに行かなきゃならないんだ!?そりゃあ、俺はじゃんけんで負けたけどよ・・・・・」
ぶつくさ文句を言いながら歩いていると、
「いや、放して下さい！」
と女の声がして思わず足を止める。声のほうを見ると、一人の少女が、柄の悪い男に腕を捕まれていた。赤みがかったピンクの瞳に黒い長髪・・・・・・リリナだった。
「いいじゃねぇかよ。少しばかり付き合うくらい」
「いや、離して下さい。人を呼びますよ!!」

はやっとのことで腕から逃れると、リリナ柄の悪い男を睨みつけた。だが、睨まれたゴロツキのほうは、何かに魅了されたようにヘラヘラしている。

「いいじゃねぇか。そっちから誘ってるんだから」

品定めするかのような下品な目つきで、リリナの体を見る。今のリリナは、オレンジのワンピースにミニスカート、白のソックスという格好で、クルスも一瞬目を奪われたが、『誘っている』という言葉は全く合っていなかった。

「（もてない男の口説き文句・・・・・・てか？やれやれ・・・・・・）」

心の中で溜め息をついたクルスはあろうことか立ち去ろうとしたが、嫌がるリリナの悲鳴が耳に届き続ける。無理矢理誘う柄の悪い男のほうも目障りだったので助けることにした。

「やめろよ、みっともない」

「なんだてめぇは？こっちは取りこんでんだ。引っ込んでろ！！」

「そうは行かない。街中で騒ぐのは迷惑行為防止条例違反だ。そこのところ知ってるなら、覚悟はいいよな・・・・・・？」

そう言って少し睨むと「ぐっ」と黙り込む。だが、左手に持っている買い物袋のせいでいまいち迫力に欠ける。

「くそっ！覚えていろ！」

しかし効果はあったようで、柄の悪い男はそう言い残して逃げて行った。

「危ない所を、ありがとうございます」

「いえ、仕事ですから」

頭を下げるリリナに、それだけ言って立ち去った。しっかり買い物袋も忘れずに。

―※＊※―

夜。辺りを巡回していたクルスは、町から少し離れた所にある丘に差し掛かると、そこにリリナが座っているのを見つけた。
「あれ？君は・・・・・・」
思わず声を欠けて駆け寄ると、彼女はクルスのほうを振り返る。
「あっ、昼間、助けてくれた人」
「こんな時間に何を・・・・・・？」
一瞬、「月光浴」と言いそうになったが、それでは吸血鬼と思われるかもしれないのでやめた。実際、吸血鬼なのだが彼女の場合、魔術などで後天的になった〈真祖〉と呼ばれる吸血鬼であり、普段からあまり魔力を使わないため血を吸う必要はなく、本人もそのつもりはない。
「えっと・・・・・・星・・・・・・夜空を見たくて」
「ふ～ん」
クルスは何気なく空を見上げたが、夜空は雲の多い天気で星はほとんど見えない。唖然とする二人は、しばらく黙り込んでいた。
「・・・・・・・・・・・・所々に雲があると言うのも・・・・・・結構、乙だね」
苦笑い、フォローに全くなってない。リリナが原っぱに寝転ぶと、つられてクルスも寝転んだ。
「まあ、こういうのもいいけど・・・・・気をつけていないと襲われるぜ」
なんのことを言っているのか、見当はついている。でもリリナは、クルスのほうを見て、意地悪そうな顔で聞いた。
「何に？」
「それは・・・・・・」
リリナのほうを向いた時、言葉を切った。そこには、まるで吸い込まれそうな彼女の瞳があり、そっと彼女の頬に反対の手の指を当てた。頬が紅潮したリリナはそのまま頭を寄せてきて、クルスも顔を近付けようとしたが、寸前でハッと気付いて体を起き上がらせた。

「俺は・・・・・・クルス。お前は？」
「リリナ・・・・・・だよ」
体を起こして家名も名乗ろうとしたが、すぐに思いとどまった。エルハンス家が名門貴族だったのは、もう昔の話。吸血鬼であるリリナが生まれたために、今では没落貴族となっており、名乗るのは控えていた。
「リリナ。夜は吸血鬼が出るから・・・・・・その・・・・・・早く家に帰ったほうがいい。・・・・・・じゃ・・・・・・じゃあな」
頬が紅潮したままで、クルスは町に走って行く。その後ろ姿を見送って、リリナは悲しそうな顔をする。
「・・・・・・優しいんだ、クルス・・・・・・。でも・・・・・・あたしは・・・・・・」
吸血鬼である自分が目覚めたら、彼のような人間も平気で襲うようになる。リリナは、それが怖くて仕方なかった。一方クルスは、あの時なぜ名前を名乗ったか、疑問に思っていた。

―※＊※―

翌日、〈軍事都市ルエヴィト〉。町の中でクトーレに会い、ルルカは思わず「あっ」と呟いた。
「おや、また会ったね♪」
クトーレに眩しい程の笑顔を向けられたので、ルルカは思わず頬を赤らめた。
「おはようございます・・・・・・クトーレさん」
「呼び捨てでかまわないよ。俺、これでも１８歳だから」
手を振って立ち去ろうとすると、ルルカは通り過ぎたクトーレのほうに振り返る。
「待って、お願いがあるの！！」

「ダメだ」
叫んだ直後、クトーレは何も聞かずに拒否したためルルカは面食らった。
「どうして!?・・・・・・って、まだ何も言っていないんですけど・・・・・・」
「お前・・・・・・戦い方を教えてもらいたいんじゃないのか?」
驚いて目を見張ったルルカを見て、「当たりか」と溜め息をついた。
ルルカは目を伏せて、理由を話しだす。
「私・・・・・・悔しかったの。あいつに・・・・・・手も足も出なかったのが。クトーレが来てくれなかったらどうなっていたかと思うと、今でもゾッとして・・・・・・」
「・・・・・・理由はそれだけじゃないだろ」
これまた当たりだった。ジェラレは両親の命を奪ったカタキ。ニュースでは死亡したとされていたが、彼女にはまだ生きていて、どこかに潜んでいるように思えてならなかった。
「復讐のために戦うと言うのなら・・・・・・やめておけ」
「な・・・・・・!?なんでよ!?」
ルルカが掴みかかるが、クトーレは冷静な目で見つめていた。
「憎しみに任せて力を揮えば、必ず相手に大きな隙を見せることになる」
「・・・・・・ッ・・・・・・そ・・・・・・そんなこと・・・・・・」
「それに・・・・・・憎しみは新たな憎しみを呼び、連鎖を生み出す。それこそ、奴らが最も求めている状況だ」
「奴ら?」
ルルカが首を傾げると、彼女の手を払ったクトーレは背を向けて立ち去ろうとした。
「待って!奴らって誰!?あなたはいったい、何を言ってるの!?」
クトーレの腕を掴んだその時、彼女の腕に、鉄のような冷たい感触が伝わってきた。思わず手を離すと、クトーレはそのまま歩いて行

った。
「――――！！・・・・・・ま・・・・・・・待って！！」
ハッと我に返ったルルカは、クトーレの後を追おうとした。だが、その時、ルルカの横をディステリアとセリュードが通り過ぎた。
「ん？今の・・・・・・？」
「どうした？ディス」
「いや、なんでもない。次に行こう」
二人は、手の平サイズの装置の画面に映った地図を見ながら、町の中を歩いて行った。

第69話　思わぬ障害

「くっそ～～。ひどい目にあったぜ・・・・・・」
クルスに邪魔された柄の悪い男は、ぶつくさ文句を言いながら町中を歩いていた。
「しかもなんだったんだ、あいつ。背筋が凍りそうだった・・・・・・」
しかも、クルスがヴァンパイアハンターとして修羅場を潜り抜けてきたことに気付いていない。
「まあいい。今度会ったら、目にものを見せてやればいい」
そんなことを言っているとすぐ側を、クトーレを追いかけるルルカが通り過ぎる。
「ちょっと待ってよ、クトーレ！」
「呼び捨てることを許した覚えはないが？」
「おおっ！！」
すぐ振り返り、彼女の後を追いかけた。気付いたルルカが振り返ると、柄の悪い男は立ち止まる。
「な、何か？」
「いや。君、かわいいからどこか遊びに行かないか、と思って」
「間に合ってます」
そう言って背を向けると、柄の悪い男はルルカの腕を掴む。
「そんなこと言うなよ。あんなつれない男よりかは、相手をしてやるよ」
「離して！」
腕を払うと、「こいつ」と柄の悪い男は顔を引きつらせる。

「相手の迷惑を少し考えたら?私、あいつを追いかけるのに忙しい・・・・・」
言いきらないうちにハッと気付いて振り返ると、そこにクトーレの姿はなかい。
「しまった・・・・・・」
柄の悪い男から離れて辺りを見渡すが、クトーレの姿はどこにもなかった。
「ああ、もう!あんたのせいで見失ったじゃない!!」
「キミのように魅力的な女を置いていく薄情男なんか放って置けよ。それよりさ・・・・・・」
「物覚え悪いの?間に合ってるわよ!」
「お前・・・・・・優しくしてれば調子に乗りやがって!」
いきなり態度を変えた柄の悪い男は乱暴にルルカの腕を掴むが、男の腹を強く蹴りつける。
「うげっ!?」
腹を抑えてうずくまる柄の悪い男を見下ろすルルカの目は、さっきと違って冷たい鋭さを持っていた。
「お前の相手なんてお断りだ」
「お前・・・・・・俺を怒らせたな!!」
逆上して襲いかかろうとした時、男の顔に空き缶が当たる。
「うげっ!?」
「・・・・・・なんで空き缶?」
「まったく・・・・・・」
溜め息交じりの呆れた声がすると、ルルカの後ろにクトーレが歩いて来ていた。
「それ以上、聞くに堪えない下品なセリフを吐くのはやめてくれないか?気分が悪くなって、昨日の残りを吐きそうになる」
「なっ、ならないでよ!!」
目付きの鋭いルルカが慌てると、「いや、冗談だから」とクトーレが言う。しかし、冗談だとしても気分がいいものではなく、顔をし

かめる。
「てめ、人の楽しみに口を挟むな！」
「へえ、君にはこんな楽しみがあるんだ。悪趣味すぎて目障りだ」
「ほざけ！！」と柄の悪い男は殴りかかるが、クトーレは軽く身をかわし、男の足をかけ、肩を掴んで投げ飛ばした。あまりに鮮やかな身のこなしにルルカは目を見張り、柄の悪い男は顔から地面に落ちた。
「く、くそっ！覚えてやがれ！！」
「やだよ、気分が悪くなる」
逃げる柄の悪い男の捨て台詞に、ジト目のクトーレが適当に返す。
「あの動き・・・・・やっぱりあんた、只者じゃないね」
「只者であろうがなかろうが、その程度のことが君にとって重要なのか？」
「その程度って！」
親のカタキをとるためにも強くなりたいルルカは、『その程度』という一言で片づけられたことが気に触る。ところがその時、
「ん、クトーレさん？」
叫ばれて振り返ったクトーレは、即座に顔を逸らす。彼を呼んだ相手は顔をしかめながら近づいてくる。
「そんな顔しなくてもいいじゃないですか」
「知り合い？」と聞いたルルカに「知らん」と答えると、話しかけた相手は表情を引きつらせた。
「おい。そりゃ、ないだろ。確かにクトゥリアの奴がからかった時はただ傍観してたけどな・・・・・・」
「おい、ディステリア」
話しかけてきた少年に、連れらしい青年が話しかける。
「どうしたんだ？っと、知り合いか？」
「メンバーの一人、らしいですよ。詳しく聞かされてませんが・・・・・」
「ふーん」と青年はクトーレを見る。二人は同い年に見えなくもな

いため、どう話すべきか考えているようだった。
「そんな話し辛そうにしなくてもいいんじゃないか？こっちも、どうすればいいか対応に困る」
「ああ、それは失礼」と青年は頭をかいた。
「セリュードだ。こっちはディステリア」
「俺はクトーレだ」
「彼女は？連れじゃないのか？」
「ただ付きまとってるだけだ。迷惑でたまらん」
肩をすくめた瞬間、ルルカが鋭い蹴りを放つ。しかし、クトーレはすばやく屈んでかわし、次の蹴りもジャンプでかわした。
「人をストーカーみたいに言うな」
「そんなつもりで言ったんじゃないんだが・・・・・気に触ったなら謝るよ」
「だったら、私を鍛えて」
「その手には乗りません」
そんなやり取りを見ていたディステリアとセリュードは、状況がわからず唖然としていた。
「ええっと・・・・・どういうことだ？」
「おや。いたずらにからかわないところを見るに、意地の悪さは受け継いでないようだな」
「俺はあの人の弟子だったが、セリュードは違う。ってか、そんなこと思ってたのか！？」
苦い顔をするディステリアに、「まあ、な」と疲れた表情で肩をすくめた。
「あの悪趣味な人に嫌な思い出しかないわけだし・・・・・」
「それで、弟子だった時期のある俺を避けられても困ります」
「そうだな、すまない」
小さく謝った後、真剣な表情でディステリアとセリュードを見る。
「で、どうしてここにいる？ただ観光に来た・・・・・というわけではあるまい」

「事態を知ってる俺たちが、そんなことできるか」
ディステリアが顔を逸らすと、「何々?どういうこと?」とルルカが聞いて来る。雰囲気が柔らかくなったので、表の人格に戻ったとクトーレは判断した。
「君にはまず関係のない話だ。悪いが、外してくれないか?」
「いやよ。鍛えてくれる、って言うなら考えてあげてもいいわよ」
「・・・・・・・・君も懲りないね」
顔を引きつらせるクトーレに、「ええ、懲りませんとも」とルルカが笑う。
「・・・・・・というわけだ。話はこいつを撒いてから」
そう言って去っていくクトーレとそれを追うルルカを見て、ディステリアとセリュードはただ突っ立っていた。
「なんだか知らないが・・・・・・」
「ああ。大変だな、あいつも・・・・・・」
事情を知らないながらも二人はクトーレに同情した。

―※＊※―

その頃、セリュードたちが寝泊りしている倉庫では、セルスとクウァルがノートパソコンを開いて、何かを調べている。
「ディステリア・・・・・大丈夫かな・・・・・・?」
「セリュードがついているんだ。大丈夫だろ」
しかし、それ以上に彼に聞きたいことがあった。そのためか、口には出してないが無意識の内に、彼の顔を睨んでしまっていた。
「・・・・・?どうした?俺の顔に、何か付いているか?」
「えっ?・・・・・・ううん・・・・・・そうじゃないけど・・・・・・」
セルスは慌てて顔をそらすが、今度はクウァルがセルスの顔を睨ん

でいた。
「ホントの本当に、なんでもないから」
クウァルは一端、「そうか」と言ったが、その後にパソコンの画面に顔を向けて、続きを言った。
「俺はてっきり、俺がディステリアに当たることを気にしてるのかと思ったよ」
それを聞き、思わず「ぶっ！？」と噴き出してしまう。
「当たりだな」
呆れたクウァルが呟くと、セルスは目を白黒させる。
「ど・・・・・どうしてわかったの！？」
「どれくらい付き合ってると思ってるんだ・・・・・？」
クウァルの『付き合ってる』と言う言葉を聞いて、思わず顔が赤くなるが、それを見て溜め息をつく。
「『幼馴染として、どれくらい付き合ってる』って意味だったんだが・・・・・？」
「え・・・・・あ・・・・・アハハハハハ・・・・・」
呆れ顔で言われ苦笑いするセルスを見て、「まったく」と再び溜め息をつく。
「だって・・・・・『付き合ってる』なんて言われれば、普通は・・・・・」
「そんなの、お前が勝手な妄想をしてるからだろ」
キーボードを打って情報を引き出すクウァルに、セルスは怒りもしない。長い付き合いで慣れているからだ。
「じゃあ・・・・・クウァルにとって、あたしはなんなの・・・・・？」
不安そうな表情のセルスとは裏腹に、クウァルは表情を変えない。
「あの時、イリスって奴に言ったはずだ。お前はただの幼馴染で、それ以上でもそれ以下でもない・・・・・」
「・・・・・じゃあ・・・・・なんで・・・・・ディステリアに突っかかるの・・・・・？」

思わずキーボードを打つ手が止まり、戸惑いの表情で首を傾げる。
「それは・・・・・なぜだろうな・・・・・・」
「クウァルって、昔からそうだよね。私と楽しそうに話している男の子がいると、睨んじゃって。あれじゃあ、あんな怪力がなくても友達なんてできないよ」
ふとうつむいて、考える。考える。考える。しかし、答えは出なかった。
「もしかして・・・・・嫉妬してるの・・・・・・？」
「・・・・・かも・・・・・・知れない」
「躊躇なく言うんだね。そんなこと・・・・・・」
しばらく考え、「・・・・・どうしてだろうな」と呟いた後、クウァルもセルスも作業を再開した。

―※＊※―

ディステリアとセリュードが倉庫に戻ると、セルスとクウァルが休憩していた。
「お疲れ。収穫は？」
「全然ダメだ。情報量が多すぎて、俺には無理」
「私も。どれも噂に余計な尾鰭が付いた感じがして・・・・・・あ～～、もうダメ」
「おいおい、大丈夫か？」
机に突っ伏してうなだれるセルスに、ディステリアが近寄ろうとする。だが、クウァルの鋭い視線が、彼の足を止めた。
「な、なんだよ」
「なんでもない・・・・・・」と顔を逸らし、クウァルは目を閉じた。
「そっちはどうだった？」

「予想通り。クトゥリアさんに許可をもらってブレイティアのことを明かしたが、あまり話しを聞いてもらえなかった。どうすれば情報を開示してくれるかもわからない」
「地道にやって信用を得るしかない、ってことはわかってるんだがよ・・・・・・」
そのためには事件が起きてもらわなければならない。だが、それは誰かに犠牲になって成立するもの。守る者を犠牲にして誰かに認めてもらうなど本末転倒。
「なら、これから起きる事件の解決以外で信用を得るしかないんだよな」
「そのためには、政府が隠してる情報が必要・・・・・・だあ～～！悪循環じゃねぇか！！」
隠してるとは限らないが、実際外に洩れないようにしている。
「まあ・・・・・どんなにしても情報は必ず漏れる者だ。手がかりがあると、思って情報サイトにつないだが・・・・・・」
「玉砕か」
肩を落としたディステリアに、「ああ」と溜め息をついた。が、すぐ体を起こす。
「待て。そこは『惨敗』だろ。玉砕ってなんだ、玉砕って！」
「膨大な情報量という壁にぶち当たって、砕けてるじゃん。気力が」
「だからって、『玉砕』って言うな！縁起が悪い」
「縁起のいい、悪い、関係ないんじゃないか？この場合・・・・・・」
「お前、そこのところ気が回らないな」
「わざわざ回すまでもないだろ」「お前な・・・・・・」
「なんだ・・・・・・」
「二人ともいい加減にして～～！！」
睨み合ったディステリアとクウァルを止めるため、セルスが立ち上がって声を上げ、再びイスに座ってうな垂れる。それを見て溜め息をついたセリュードは、気を取り直すべく顔を上げる。

「それについて少し朗報だ。さっきクトーレって奴に会った」
「誰だ？」
「俺も知らないが、ディステリアの話だとメンバーの一人らしい」
「俺たちよりも早い段階から、調査とか続けてたみたいなんですよ」
「ほう」とクウァルが感心するように呟く。「じゃあ、その人に教えてもらえば・・・・・・」
「ところがそう簡単にはいかない」
肩をすくめたディステリアに、セルスとクウァルが首を傾げる。
「ちょっと厄介な女の子に絡まれてて。当然ながら、彼女はメンバーじゃない」
「えっ。現地で誘ったメンバーじゃないの？」
「残念ながら」と溜め息をつくようにセルスに答える。
「彼女を撒かない限り、彼は俺たちに接触できないだろう」
「と言うことは・・・・・・俺たちはこのまま、独自の調査を続けなければならない」
「実質そうだろうな」と溜め息をついたセリュードはクウァルにそう答える。
「・・・・・最悪。またあのバカみたいな情報錯綜サイトに行かなきゃならないの？」
「噂でも、事実を含むことがある」
頭を抱えるセルスに、イスに座りながらセリュードが言う。
「睦月に聞いたんだが、シャニアクのことわざにこんなものがある。『火のないところに煙は立たない』。噂だって、何か火種になるようなものがあって出たはずだ」
「そうだな。なあ、セルス、クウァル。お前らが見つけた情報と俺らの持ってる情報を照らし合わせよう」
「でも、バカみたいに多いよ」
「構わないさ」とディステリアが答える。
「それにしても・・・・・・なんでシャニアクの連中って、もっともなことを言うのに『愚者』なんて言われるんだ？」

「さあな・・・・・・」
その疑問はさておき、ディステリアたちは早速情報を照らし合わせ始めた。もっとも、セリュードとディステリアが手に入れた情報と、セルスとクウァルが拾った情報の量に差がありすぎて、かなり苦労したが。

―※＊※―

一方。クトーレとルルカはまだ追いかけっこを続けていた。
「しつこいな。いい加減、付け回すのをやめろ！」
「嫌よ。私を強くしてくれるなら、考えてあげてもいいけど」
「何度も聞くようだが、その強くなりたい理由は？」
「あのジェラレって言う男を倒すため。あいつが私の両親のカタキなの。だから！！」
「奴を殺して、お前も同じ存在になる、か？」
「えっ？」と目を丸くするルルカに、「悪い冗談だ」とクトーレが言う。
「それが理由である限り、俺はあんたに戦い方を教えはしないよ」
小さく、悲しそうに呟いて歩いて行くクトーレを、ルルカは呆然とした表情で見送る。
「ちょっと、それどういう意味よ」
ハッと我に返って追いかけるが、その日は話しをすることはなかった。

―※＊※―

その一週間後。〈警備都市チェルノボーグ〉にある対不死者組織ルマーニャの本部に、ある情報がもたらされた。
「ラニャーリのアジトが判明したって！？」
クルスの声に、ハンターの一人が「はい」と答える。会議室ではほとんどのヴァンパイアハンターが集まり、会議を開いていた。
「確かなのか。それは」
両肘をテーブルについて、指を組んでいるガシムが聞く。
「匿名での情報でしたので半信半疑でしたが、その後の調査で真実だと判明いたしました」
「その場所は？」
沈黙に包まれる議会。ハンターの一人が聞くと、資料を持ったハンターは口を開いた。
「元首都・・・・・・旧モクルスレイ領」
それを聞き、議会の中にざわめきが起きる。
「どうしますか？ガシム総隊長」
ディマが問うと、目を閉じたがシムは立ち上がって議会を見渡す。
「・・・・・今から４８時間後に、我らルマーニャの総力を結集して総攻撃を開始する。各自、それまでに必要な物を準備するように」
いつもと変わらず、一方的に命令を伝えて、議会は終了した。

―※＊※―

出撃、一時間前。ガシムは自室で、一つの写真立てを手にしていた。
それには、こちらに笑顔を向けている長髪の女性が写っていた。
「もうすぐ全てが終わる。お前を吸血鬼にした奴らを、皆殺しにできる」
写真立てを置いたガシムの目は憎しみに満ちており、腰に剣を指す

とドアを開けた。だが、そこには重そうな鎧の上にマントをまとった、いかつい髭面の男が立っていた。
「なんだ・・・・・私の部屋には近づかないよう、言っておいたはずだ。ラトデニ」
しかし、ラトデニは黙っていたので、「ふん、まあいい」と呟き、歩き出した。
「依頼していた武器の積み込みが完了した」
「そうか。代金はいつも通り払うから、さっさと消えろ」
だが、ラトデニはその場を動こうとはしなかったので、忌々しそうな表情で振り向いた。
「まだ何かあるのか？」
「お前の抱えている部下の中に・・・・・ヴァンパイアと繋がっている者がいる」
「何・・・・・？」と、ガシムは眉をひそめる。
「情報は流してはいない。ただ面識があるだけだが、いつ情報を流すようになるかわからんぞ」
「例えそうだとしても、もう遅い・・・・・いや、襲撃直前に知らせるかも知れん」
「すぐにでも探し出すというのなら、私も協力しよう」
だがガシムは、「いや」と断った。
「それが真実だとしても、今、裏切り者を探そうとすれば、総攻撃の時間を引き延ばしてしまう。奴らには一刻の猶予も与えん」
「結構」
ガシムの答えを聞き、ラトデニはクックッと笑った。その後、時間になり、〈ルマーニャ〉のハンターたちは総出で出動した。

第７０話　加速する歯車

メンバーを二～四人のチームに分けてバラバラの方角へ広がり、〈スヴェロニア国〉国境を辿りながら、目的地である旧モクルスレイ領を目指す。それが、ルマーニャ総本部の決定した作戦内容だった。その内の一チーム、クルス、ディマ組は、〈軍事都市ルエヴィト〉と、目的地である元首都モクルスレイの間にある草原。

「なんだ・・・・・この感じ・・・・・・」

近くに吸血鬼を感じた時の、かきむしられるような感じ。と同時に、どこか懐かしい感じがする。

「どうした？クルス」

「あっ、いえ・・・・・・なんでも・・・・・・」

すぐにクルスは答えたが、落ち着かない感じがしていた。

「（この感じ・・・・・近くに吸血鬼がいる。でも、ディマ先輩は感じていない・・・・・・）」

ついには歩を止めて、気配がする方角を見ていた。

「そういえばお前・・・・・・クルースニクなんだって？」

「クルースニク・・・・・・。なんですか、それ？」

「知らないのか？勉強不足だな・・・・・・」

眉をひそめて聞き返したクルスに、ディマは溜め息交じりに頭をかく。

「クルースニクってのは、『十字架』と言う意味を持つ吸血鬼始末人だ。と言っても、おまえ自身詳しいかと思うが・・・・・？」

ふと、七年前のことを思い出す。白い鳥に変身して、黒い鳥になったクドラを追いかけていた時、下にいたハンターたちは何かを言っ

ていた。もっとも、空高く上っていたので、ほとんど聞き取れていなかったが。

「この辺りじゃあ『最強の吸血鬼始末人（ヴァンパイアハンター）』と呼ばれているんだ。と言っても、クドラクって吸血鬼に勝つには、少し工夫・・・・・って言うか、まじないがいる」

クドラクと聞いてビクッと体が反応したクルス。

「まじない？」

ごまかすために聞くと、「ああ」と得意げに答える。

「自分が生まれた時についていた羊膜を、粉末状にした物を袋に入れて携帯するか、その羊膜の一部を携帯するか、だ」

「別に・・・・・最強じゃないじゃないですか」

「う・・・・・きついな～。お前のことだぞ・・・・・」

意外と薄い反応に困り、ディマは再び頭をかく。

「まあ、クドラクとクルースニクは互いに宿敵なんだ。クドラクが姿を変えると、クルースニクも同じ姿になって戦う。本能・・・・・なのかな・・・・・互いを敵視し、どちらかが倒れるまで戦い続ける・・・・・」

少し顔をうつむけるクルス。吸血鬼と対峙すると、自分でも驚くほど冷徹に行動できる。

「（クドラと会っても、同じようになってしまうのか・・・・・）」

「俺は先に行くぞ」

悩んでいるクルスを置いて、ディマは先へ進んだ。すかさずクルスは、脇道へ逸れて気配がするほうへ駆けて行った。

「（・・・・・この心が煮えたぎるような感じ・・・・・。これが先輩の言っていた『互いを敵視する本能』・・・・・。だけど・・・・・同時に懐かしさも感じる。この気配は・・・・・誰だ・・・・・？）」

気配をたどって草原を駆け抜け、やがて一人の人影を見つけた。一気にスパートをかけてその近くに着地すると、そこにいたのは、七

年前に失踪した幼馴染、クドラだった。
「クドラ!?なぜ、ここにいるんだ!?」
「クルスこそ・・・・・・なぜ・・・・・・」
思いもよらない突然の再会に驚く二人だが、先に察したのはクドラのほうだった。
「なるほど。今やお前も・・・・・・ルマーニャの一員と言う訳か・・・・・・」
「あ・・・・・・ああ・・・・・・」
いつ仕掛けられてもかわせるように構えるクドラに対し、クルスは立ち尽くしていた。
「ターゲットの善悪問わず、発見次第抹殺する。それがルマーニャ絶対の掟・・・・・・と聞いた」
「確かに俺は組織の一員。だが、それ以前に・・・・・・お前の幼馴染だ!!」
そう叫ぶと、クドラは構えるのをやめた。
「・・・・・・こんな俺でも・・・・・・まだ幼馴染と言ってくれるのか・・・・・・」
めくった腕は、黒い剛毛に覆われていた。思わず息を呑むクルスに対し、クドラはわかりきっていたからか全く表情を変えない。
「やっぱりお前でも・・・・・・そんな顔するんだな・・・・・・」
「ち・・・・・・違う・・・・・・俺は・・・・・・」
だが、完全に否定することができない。自分の中に、吸血鬼となった幼馴染を恐れ、同時に闘争本能を向ける自分がいた。その本能が、今のクドラはクドラクだと教えていた。
「今や吸血鬼クドラクとなった俺は、クルースニクであるお前にとって最大で絶対に倒さなければならない敵のはずだ」
「・・・・・・お前が吸血鬼と言うのなら・・・・・・」
やっと戦う気になったのか、と、一瞬、クドラは覚悟を固めた。
「なら、どうして・・・・・・お前に吸血鬼を倒す力があるんだ」
思わぬ言葉に驚き目を見張る。

「・・・・・『吸血鬼を倒すクドラク』の情報は、組織に入っている。それに発電所で戦った時、お前は確かに吸血鬼を倒していた・・・・・なぜだ!?」

ゆっくり上げた左腕を見て、呟くように、今、自分が持っている仮説を話す。

「・・・・・おそらく・・・・・俺の中には、ヴィエドゴニャの力が混ざっているんだと思う・・・・・」

「ヴィエドゴニャ?」

聞いたことがあるような気がして記憶を探っていると、思い当たって目を見張る。

「っ!!ヴァンパイアハンターの一種か!?」

「ああ。だが、死後は吸血鬼になると伝えられている。俺は一度、死んだ者なのか・・・・・それとも、まだ生きているのか・・・・・」

自分の腕を見て悲しそうに話すクドラに、クルスは何も言えずにいた。

「俺と一緒にいる所を見られれば、お前に迷惑がかかる。早く行け」

「待て、まだ話は・・・・・」

背を向けるクドラに言いかけるが、クドラは何も言わずに草原から去って行った。

―※＊※―

各チーム出発から一週間。ここは、モクルスレイ郊外。各チームの当初の目的地であり、作戦開始時の待機場所。その一つの草むらの影に、クルスとディマが隠れていた。

「それにしても、いやな天気だ。この暗さ・・・・・まるで夜だ」

空は厚い雲に覆われており、昼近くにも拘らず、夕暮れ時に近い暗

さになっていた。
「各自・・・・・到着してると思いますか・・・・・・？」
「さあ、どうだろうな・・・・・・」
興味なさそうな声でディマは呟いた。クルスはルマーニャの一員になってこの方、所属を明らかにする時以外は一度もルマーニャという名前を使っていない。それは、部下を『消耗品』としか考えない組織の上層部と、それに妄信して自分は愚か、仲間ですら『道具』として扱うことを受け入れている、組織のメンバーたちが構成するルマーニャという組織に対する不信からだった。
「（いつかは俺も・・・・・そういう風になるのかな・・・・・・）」
そんな自分を「ククッ」と嘲笑った時、
「誰かいるのか！？」
どこからか警戒のこもった声がした。二人は慌てて息を潜めると、草むらの前に何人か出て来た。かすかに聞こえてくる話し声から、何人かが仲間に知らせようとしているようだった。
「しまった、気付かれた！」
「一人でも逃がすと、気付かれちまう！悪党じゃないが、徹底的に叩け！！」
飛び出すと同時に、「わかってる！！」と叫んだが、その瞬間に一瞬、脳裏にクドラの姿がよぎる。
「・・・・・・・・・・・クソッ・・・・・・！」
クルスは歯軋りしながらも剣を振って、慌てふためいている吸血鬼を斬った。
「クソッ・・・・・・ドン・ドラクルに報せろ！！」
「わかって・・・・・・ギャア！！！」
「行かせはしない！！」
報せに走ろうとした吸血鬼を即座に斬り捨てるクルス。さらに、後から剣で切りかかるディマ。その攻撃に、吸血鬼たちは自然と二手に分かれた。

「ク・・・・・・クソッ・・・・・・なんとしても後方に・・・・・・」

「行かせねえと言ってるだろ！！！」

クルスが目の前にいる最後の一人を倒した時、右側に吸血鬼の気配を感じたので、クルスは反射的に剣を振った。

「キャアッ！？」

突然の悲鳴と何かが落ちる音に思わず目を見張る。なんとそこには、草むらに尻餅をついているリリナがいた。

「なんで・・・・・・ここに・・・・・・？」

しばらく呆然としていたが、再び目つきが厳しくなる。

「・・・・・・ここは危ない。早く立ち去るんだ・・・・・・」

「え・・・・・・？あ・・・・・・はい・・・・・・」

立ち上がると同時に、敵を片づけたディマがやって来る。走り去るリリナの後ろ姿を見ながら、怪訝そうな顔でクルスに近づいた。

「いいのか？彼女を行かせて・・・・・・？」

「――――！？・・・・・・どういう意味・・・・・・」

だが、有無を言わさず「行くぞ」とだけ告げ、目標地点に急いだ。

「・・・・・・すみません。俺のせいで敵に見つかって・・・・・・」

「・・・・・・いや、いい。作戦開始時間に近かったから、むしろちょうど良かった。それより・・・・・・」

深刻な表情で駆けるディマに、クルスは思わず固唾を呑む。

「彼女とは・・・・・・いつからだ・・・・・・？」

突然そんなことを聞かれて、「えええっ！！」と驚いてしまった。

「・・・・・・そんなに驚くことか・・・・・・？」

「いや、だって・・・・・・作戦行動中ですから・・・・・・」

「なるほど。やっぱ固いな・・・・・・」

溜め息をつくように言うと、クルスの頭を軽く叩いた。

「い・・・・・・急ぎましょう。開始時間を過ぎているのなら、他の班も動いているはずです」

「そう・・・・・だな」
一端、ディマは呟いたが、すぐ顔を上げる。
「クルス」
「なんですか？」
呼び止められ振り返ると、ディマは厳しい表情をしていた。
「・・・・・覚悟・・・・・・しとけよ・・・・・・」
しばらく唖然としたが、すぐに表情が崩れた。
「・・・・・覚悟なんて・・・・・・組織に入った時からできてますよ・・・・・・」
悲しそうに言って歩き出すクルスに、「そうじゃなくて」と言いかけたが、その時、周りから爆音や悲鳴のような音が聞こえだした。
「始まったか・・・・・・」
ディマが悲しそうに呟いた。

―※＊※―

同時刻、モクルスレイが見える丘の上に、旅人用マントを身につけたクトーレが現れた。
「今は吸血鬼が根城にしているという元首都、旧モクルスレイ領・・・・・」
ゴミが入らないように口元を覆っていたマントの一部を下に下げると、煙が上がり始めたモクルスレイを見つめた。
「そんな、今は危険極まりない元首都に、いったいなんの用だ・・・・・とでも言いたそうだな」
後ろを振り返りもせず話している相手は、同じく旅人用マントに身を包んで、後ろに立っているルルカ。その背中に背負っているリュックサックは、大量の荷物を入れているために、大きく膨らんでいた。

「なんで・・・・・わかったの・・・・・・・？」
「あんな下手な尾行。気付くな、というほうが難しい」
嫌そうな顔で言ったので、「むう～っ」と顔を膨らませた。
「ちょうどいい。よく見ておけ。私怨や憎しみによる戦いが、どれだけ醜いのか」
そう言って歩き出すクトーレを、「ちょ、ちょっと待って」とルルカは追いかけた。

―※＊※―

さらに同時刻。〈軍事都市ルエヴィト〉にある倉庫の一つ。テーブルの上に地図を広げて、セリュードたちが調べた情報をまとめていた。
「ここ三週間の調査で、妙なことがわかった。この町にいくつかある軍事工場で作られた武器のほとんどが、一端バラバラの場所に送られた後、いくつかの地域を巡って、ある一箇所に送られていた」
「こっちもそうだった。おそらく、調査の目が入った時のことを考えて、そのかく乱を企んでいたのだろう」
セリュード、クウァル順で報告し、その後をセルス、ディステリアと続く。
「最低でも十箇所以上も巡らせた上に、途中で荷物を分けたり合わせたりしてたから、調べるのが大変だったわ」
「だが、それらを合わせて考えると、一端、スヴェロニア国全土に散らばった武器が、最終的にはある一箇所に送られていたことが分かった。それが・・・・・」
ディステリアとクウァルが「ここだ」と地図を指差すと、その指はそれぞれ別の二箇所。クウァルは〈警備都市チェルノボーグ〉と、ディステリアは〈工業都市スヴァロギッチ〉を指差していた。

「何を言っている。最終的に武器が送られたのは、〈警備都市チェルノボーグ〉だ」
「違う。最終的に送られたのは、〈工業都市スヴァロギッチ〉だ」
「何を言っている。そちらの捜査が間違っているのでは？」
「何、言ってんだ。間違えているのはそっちだろ！」
「俺とセルスの調査が間違ってると言いたいのか！？」
「そっちこそ。俺とセリュードが不甲斐ないとでも言いたいのか！？」
そのまま、クウァルとディステリアは「そっちだ」「そっちだ」と言い争いを始めてしまった。
「ちょっと二人とも～」
二人をなだめようとするセルスをよそに、セリュードは地図を見ていた。
「待てよ。何も武器が送られたのが一箇所とは限らない・・・・・・ん？」
ふと、セリュードは最初に会った時にしたクルスとの会話を思い出す。

～―回想―～

「俺が組織に入るずっと前から、吸血鬼はルマーニャ・・・・・・・・現在の〈警備都市チェルノボーグ〉の外に現れることはなかったんだ。だが、五年ほど前・・・・・ルマーニャがスヴェロニア国の一つに統合され、〈警備都市チェルノボーグ〉と改名してから、周辺都市で吸血鬼や不使者の出現情報が集まりだしたんだ」

～―回想終わり―～

「なあ・・・・・・」
セルスがなだめてるにも拘らず、言い争いをしているディステリアとクウァルに、セリュードが話しかける。
「確か〈警備都市チェルノボーグ〉には、対不死者組織があるんだったな？」
「ん？そう言えば、そうだったな」
「まさか、その組織がこんな工作をして武器を手に入れた、なんて言う気じゃないだろうな？」
「そのまさかが、本当だったとしたら？」
「おいおい、本気かよ」
目をまばたかせるディステリアとクウァルに、セリュードが自説を言うとクウァルは驚いた。
「そいつらは、人々を吸血鬼から守るための組織なんだろ？そんな奴らが武器を手に入れようが、なんら不思議はないだろ」
「確かにそうだが、クルスの話を聞く限り、彼らは閉鎖的・・・・・・過ぎるんだ・・・・・・」
「確かに。そこらにあるも等しい吸血鬼伝説や、そいつらの存在を隠す必要なんて・・・・・・」
そこまで言った時、ディステリアの脳裏にある疑問が浮かぶ。
「なあ・・・・・・」
「ディステリア。多分、俺も同じことを考えている」
首を傾げているセルスとクウァルをよそに、同時に言う。
「この国の吸血鬼の特徴は？」

―※＊※―

カタカタカタ、とキーボードを叩き、セルスはネットワーク上に公開されている、吸血鬼に関する情報を引き出した。

「吸血鬼の特徴・・・・・・。基本的に生物を襲い、その血を吸う。一度に吸われる量が多いため、襲われたらまず助からない・・・・・・」

セルスの後、クウァルとディステリアが代表種を上げる。

「代表的なものは・・・・・・ラグシェのラミア、エンプーサに・・・・・イグリース、ハイラント地方のバーヴァン・シー」

「ヒンディアのブータ、ピチャーチャ。以外に少ないものだな・・・・・・」

「まさか。世界には未確認の吸血鬼が、最低でも十数種類はいるって話だ」

クウァルの後に、セリュードがあごに手を当てる。

「その十数種類のほとんどが、ルマーニャ・・・・・・現在の〈警備都市チェルノボーグ〉にいるものか」

「つまり、ルマーニャ・・・・・・現在の〈警備都市チェルノボーグ〉に昔からいる吸血鬼については、何一つ情報が公開されていない」

セルスが言ったその時、ディステリアがハッと顔を上げる。

「まさか・・・・・・ルマーニャの奴ら・・・・・・。そこに住む吸血鬼の対抗策を作らせないために・・・・・・・・？」

「ちょっと待った。なんのために・・・・・・・・？」と、クウァルが聞き返す。

「・・・・・・そりゃあ・・・・・・自分たちが獲物にありつきやすいように・・・・・・」

理由としては弱い。と言うより、無茶苦茶だった。

「・・・・・・国が・・・・・・いや、町か。町の連中が一緒になってか？わざわざ、対不死者組織まで作って・・・・・・？」

「それに・・・・・・だとしたら、クルスのことを疑うことになっちゃうよ。私は・・・・・・悪い人だとは思えないんだけど・・・・・」

セルスに「甘いな」とクウァルが言う。

「だが、クルスが俺たちと共に、発電所を守るために戦ったのは事実・・・・・・」
「敵の吸血鬼も、敵意丸出しだったからな・・・・・・」
セリュードが言うと、四人は「うーん」と考えこんだ。そこに、「大変だ」とローハが飛び込んできた。
「どうしたんだ、ローハ？」
ディステリアが聞くと、ローハが息を切らせる。
「今、緊急ニュースで、旧モクルスレイ領で大規模な戦闘が行われているって・・・・・・」
それを聞き、「何！？」と声を上げる四人。
「・・・・・・モクルスレイ・・・・・・・・・・・・って、どこだ？」
ディステリアが首を傾げると、クウァルが「バカ」と言う。

第７１話　長き一日の始まり

「知らないのか。昔、この国の首都だった場所だ」
「ええ。クリスマスの日に、テロリストの襲撃があって・・・・・・
それがきっかけで・・・・・壊滅したんです・・・・・・」
ローハの言葉に思わず黙り込むディステリア、クウァル、セルス。
だが、セリュードはふと何かに気付くと、再び地図を見た。
「旧首都モクルスレイ・・・・・・。位置は・・・・・・〈工業都
市スヴァロギッチ〉の近く・・・・・・！？」
それを聞き、ディステリア、クウァル、セルス、ローハが、セリュ
ードの方を見る。
「俺とディステリアの調べでは、分けられた大量の武器はここに運
ばれた。そこから奴らが、さらに運んだとすれば・・・・・・」
指で地図をたどると、旧・首都モクルスレイ領に行き着く。
「元・首都。ここに運ばれたと、十分に考えられる！！」

―※＊※―

「だ～か～ら～。いちいち『元』ってつけないで」
「なんだ。紛れもない事実だろ？」
町の入り口の門をくぐった所で、ルルカの方に振り返る。
「・・・・・そりゃあ・・・・・そうだけど・・・・・」
再び歩き出すクトーレとルルカ。陥落して以来、誰一人として入っ

たことがないため、周りの建物は所々が崩れており、瓦礫が道路に散乱していた。
「なぜ、ここが壊滅したか・・・・・・・知ってるか・・・・・・・？」
「えっ？ええ、知ってるわ。この国の政権を奪われた人を指導者とする人たちが、テロリストとなって破壊活動を行なったから、でしょ？」
しばらく歩くと、「４０点だ」と言った。
「なっ・・・・・・どこか間違えてる・・・・・・？」
「残念ながら、そんな単純な問題じゃない。その政権を奪われた人物は、大国の一つハルミアに武力侵攻を訴えていた。だが、当時、国を治めていた王族の指導者は、それに強く反発していた」
首を傾げて歩いているルルカに、さらに続ける。
「その平和主義の主張が市民の指示を集め、武力侵攻をかかげていた人物は追放されることとなった。」
「当然よね。みんな、平和が一番だもん」
「だが・・・・・・全ての人間が、そう思ってはいなかった」
立ち止まって上を見上げるクトーレに、ルルカは再び首をかしげる。
「ハルミアがかつて、世界のほとんどの国に対し、武力行使に移ったことは知ってるか？」
振り向きざまに聞くと、ルルカは「えっ、ええ」と答える。
「その時にハルミアが侵攻し、攻撃した場所の一つが・・・・・・・ここだ」
「ここって・・・・・・モクルスレイ！？」
驚くルルカに、「そうだ」と頷くと、「ちょ・・・・・・ちょっと待って」と言う。
「その話と、ここが壊滅したことって、なんの関係があるの！？」
「追放された人物と言うのが、その時に政権に関わっていた人物だった」
それを聞き、「ええっ！？」と驚く。
「その侵攻で国民の大半を殺されたその人物は、ハルミアに対し報

復活動を行なうと宣言した。だが、王族はそれに反対し、その人物を追放した。しかし、それに反発する者たちが追放された人物の下に集まり、政権を手に入れようと水面下で動いていた」

「その人たちが・・・・・あの事件を起こした・・・・・・」

「そうだ」

クトーレが答えると、「ちょっと待って。肝心なことを聞いてないわ!!」とルルカが声を上げる。

「その人たちの動機は何!?どうして、その人たちは『平和』であることに反対して、あんなことをしたの!?」

「それを見つける手がかりは、すでに渡しているはずだ・・・・・・」

そう言って、クトーレはルルカの目の前まで接近する。顔がすぐ近くまで近づいたので、ルルカは顔が紅潮し始めた。だが次の瞬間、クトーレの左腕がルルカを抱きしめたかと思うと、そこから飛んだ瞬間に、そこで爆発が起きた。

「わっ!?・・・・・なっ!?」

突然のことに理解できないルルカをよそに、クトーレは彼女を抱きかかえ、元来た道を戻り始めた。

「クソッ、逃がすか。門を崩せ!!」

二人が門の真下に差しかかったちょうどその時、爆音と共に門が崩れ始めた。ルルカが潰されると思った瞬間、クトーレはステップを踏んで間一髪、門の脇に転がり込んだ。

「やったか?」

「いや、まだわからない」

最低でも二人の声が聞こえてきた。クトーレは彼らに気付かれないように、足音を立てずにその場を離れ、門から路地を通り抜けた先にある大通りに出ると、とりあえず瓦礫の影にルルカを下ろした。

「・・・・・ハッ・・・・・なんなの、あいつら!?」

「テロリストの生き残りだ」

我に返って呟くルルカに説明すると、「えっ?」と聞き返す。

「彼らはハルミア軍の侵攻により、家族や友達を失い、憎しみを捨てきれず、報復することしか考えられなかった者たちだ。彼らはかつての指導者の下、政権を手に入れ、かつてから計画していた報復攻撃を行なおうとしていた」

「――――!?・・・・・・それが・・・・・・彼らの動機・・・・・・？」

「彼らの行なったことにより、多くの罪の無い命が奪われ、生き残った者の心にも大きな傷を生み、多くの恐怖と憎しみが生まれた」

あまりの話に、言葉を失うルルカ。虐殺と言われても仕方のない戦闘行為と、その果てに生まれた傷と憎しみ。今となっては、それは全て『過去』の話に過ぎなかった。

「・・・・・でも・・・・・その人たちの気持ち・・・・・・すこしだけ、わかる気がする・・・・・・」

クトーレが厳しい表情で、「本気で言ってるのか」と聞くと、ゆっくりと頷く。

「大切な人が死んだら・・・・・・誰だって・・・・・・その原因を憎むわ・・・・・・。それに、簡単には・・・・・・許さないと思う・・・・・・」

「ならば、あえて言おう。その考えは早計だと」

「早計だと!?」

突然、ルルカがクトーレの胸倉を掴んだ。目つきが鋭くなり、声の調子が変わっているところから、もう一つ人格が表に出ているようだった。

「私だって、何も悪いことをしていないのに、お父さんとお母さんを殺されたのよ・・・・・・。殺した奴は絶対許さないし、そいつに復讐してやりたいとも思ってる・・・・・・！」

「そして、今度は自分が仇として狙われるつもりか!?」

「――――!?」

冷たいクトーレの一言にルルカは目を見張る。顔色一つ変えずに、彼女の腕を物凄い握力で掴んだので、ルルカのほうが痛みで顔を歪

めた。
「ならお前は、自分が仇だと狙われたら、黙って討たれてやるのか・・・・・・!?」
しばらく黙り込むが、「・・・・・・・う・・・・・・うるさい!!」と、腕を振ってクトーレから離れる。
「あんたなんかに何がわかるんだ!?大切な人を奪われた苦しみや悲しみ・・・・・・。何も知らないくせに、知った風なことを言うな!!」
すると突然、辺りの空気が重くのしかかるような感覚がした。
「・・・・・・なら君は・・・・・・俺の何を知ってるんだ・・・・・・!?」
表情は落ち着いているが、クトーレからは怒りのような気配が漂っていた。それに圧倒され、言葉を失うルルカ。だが、
「まっ、そういう訳だ」
という軽い声で我に返った時にはその気配は消えており、ルルカも主人格に戻っていた。
「憎しみはまた新たな憎しみを生み、更なる連鎖を作りだす。それこそ、奴らの狙い通りに・・・・・・」
「・・・・・・!?また・・・・・・奴らって誰なの!?」
その時、遠くのほうで爆発音がした。
「何!?」
「本格的になってきたな・・・・・・」
ルルカが爆発のほうを見るとクトーレが呟くが、彼女には何がなんだかわからない。
「えっと・・・・・・いったい何が・・・・・・」
「世界には、知らなくてもいいことがたくさんある。巻き込まれない内に、早く町の外に・・・・・・」
だが、そこまで言った時、白地に赤い十字架が入ったマントのような服をまとった男性が、二人飛び出してきた。それにルルカは目を丸くするが、クトーレは舌打ちして苦い表情で呟く。

「ちっ、手遅れだったか」
「ここにもいたか！！」
そう叫ぶなり、いきなり銃を乱射した。ルルカもクトーレも、とっさにそれを避ける。
「きゃあああっ！！何・・・・・・こいつら」
「相手は吸血鬼だ！！女でも容赦するな！！」
「わかってる！！」
ひたすら銃を乱射する二人のハンターに、「ちょっと待ちなさいよ！！」とルルカが叫ぶ。
「私たちは吸血鬼じゃないわ！失礼なことを言わないで！」
「なら、この弾丸に当たってみろ」
銃を構えるハンターに、「い・・・・・・いやよ！痛そうだもん！」と、速攻で拒否する。
「本当に吸血鬼じゃないなら、こいつで撃たれても灰にならないはずだ」
「・・・・・・じゃあ、普通の人が当たっても、なんにもならないの・・・・・・？」
「本体は普通の銃だ。普通に考えて、死ぬだろう」
「この銃で撃たれて死んでも、灰にならなかったら吸血鬼じゃなかったってことだ。わかったらさっさと撃たれろ！！」
「そんなのめちゃくちゃよ～！！」
引き金を引こうとするハンターに、叫び声を上げるルルカ。逃げ出そうとしたルルカに銃口を向けたその時、クトーレがハンター二人に、それぞれ同時に拳と蹴りを放って気絶させた。
「まともに話そうとするだけ無駄だ。こいつらに、世間の常識は通用しない」
膝の力が抜け、「なんなのよ～、こいつら～」と言うと、着地したクトーレが冷たい視線を向けて答える。
「おそらく、ヴァンパイアハンターだろ」
「えええっ～！？こんな、一般人まで殺そうとする奴らが～！？」

「さっきも言っただろ。こいつらには、世間の常識は通用しない。ヴァンパイアさえ倒せれば、その過程で何をやってもいいと教えられているんだ」

「そんな、まさか」とルルカは言いかけたが、さっき自分が殺されそうになったことを思い出し、言い留まった。

「・・・・・・まさか、本当に～？」

「・・・・・・世界には、どんなに信じられなくても、ゆるぎない事実がたくさんあるんだ」

そう言うと、ハンターたちが持っていた銃を拾い上げ、グリップの辺りを分解した。

「コンバットタイプの銃に近いが、弾の装填はカートリッジ式になっているな。だから、攻撃の隙が少ないのか・・・・・・」

その後、カートリッジから銃弾を一つ摘まみ出した。ルルカがそれを見ていると、次の瞬間、取り出した弾の上の部分が、ひとりでに離れたように見えた。

「・・・・・・なるほど・・・・・・銀製の銃弾の内部に、聖水を仕込んでいるのか。だから、吸血鬼や人狼、不死者などに効果があるのか」

銃弾を傾けて、中身を空のガラス瓶に入れる。

「・・・・・・な・・・・・・何してるの・・・・・・？」

「何かの役に立つかもしれないから、ちょっと拝借してるんだよ」

「拝借って・・・・・・もしそのせいで、この人たちが吸血鬼に教われたら、どうするの！？」

だが、クトーレは「こいつらの命に、それだけの価値があるのか・・・・・・？」と冷徹に言う。

「価値があるもないも、そんなもので片づけられるほど、命は軽いものじゃないでしょ！」

それを聞いたクトーレはフッと笑い、「その通りだ」と言うと、聖水を入れたビンをベルトにあるホルダーへ入れ、奥へ進んで行った。

―※＊※―

《こちら第一部隊。目標エリア、占拠完了》
《こちら第六部隊。エリア内の敵、殲滅完了》
《こちら第十三部隊！至急、救援を・・・・・・うわあああああっ！！！》
《第十三部隊、通信途絶。近くを巡回中の部隊は、第十三部隊担当エリアの敵を殲滅せよ》
通信の内容を聞き、「よく言うよ・・・・・・」とクルスは溜め息をついた。
「そう言うなよ。近くにいるのは俺たちだろ。行ってやろうじゃないか」と、ディマがなだめる。
もし、第十三部隊やられてできた穴から吸血鬼たちが逃げれば、この作戦での殲滅が不可能となってしまう。組織の名誉と威信、そして、ほぼ全ての人数をかけたこの戦いは、ルマーニャという組織にとって絶対に勝たなければならず、失敗も許されない『聖戦』だった。だが、クルスにとっては組織のエゴでしかなく、第十三部隊の担当エリアに向かう中で、そう思わずにいられなかった。
「そ～ら、お出迎えだぜ」
ディマの声でハッと我に返ると、目の前には両腕にコウモリの翼が生えている、異形の人影が二つ飛び降りて来ていた。だが、二人とも後ろを向いており、クルスとディマに気付いたのは、ディマが二人の内、片方を銃で撃った時だった。
「何！？こっちにも・・・・・・」
驚いて爪を向けるもう一人を、すぐさま高速移動したクルスが剣で切り伏せた。地面に落ちた吸血鬼の体が炎の包まれると同時に、クルスも地面に着地した。
「こいつら・・・・・・『こっちにも』って言ってたけど、他にも

駆けつけた部隊がいたのか・・・・・・？」
二人が首を傾げていた時、上のほうで瓦礫を踏む音がした。二人がそちらを見上げると、旅人用のマントに身を包んだ一人の男、クトーレが立っていた。クトーレのほうも、自分を警戒しているクルスとディマを見下ろしている。互いに睨み合う形で黙っていると、遠くのほうで爆発が起こり、それがきっかけで反射的にディマが聞く。
「何者だ・・・・・・貴様・・・・・・？」
「他者に名を聞くなら、まず、自分の名を名乗るのが礼儀だろう」
クトーレにそう言われて、「ぐっ」と黙り込むディマ。クルスも、戦いでの礼儀を説かれるとは、全く思っていなかった。しかし、それこそが、クトーレがあえて相手の名前を聞かなかった理由だった。
「対不死者組織ルマーニャ所属、ディマ・ラーナ」
「同じく、クルス・タルボージュ」
「なるほど、ガシムの操り人形か」
自分の素性を明かした二人にクトーレが呟くと、「なんだと！！」と反射的に叫んだ。だがクルスは、すぐにそう思われても仕方ないと思えてきた。
「それで・・・・・・貴行の名は・・・・・・？」
「俺の名は・・・・・・」
ディマに聞き返されたクトーレはそう呟くと、右回りに方向転換してそのまま瓦礫の上を飛んで立ち去ってしまった。これには、二人とも唖然としてしまう。相手に聞かれるまでクトーレが黙っていたのは、相手のほうから自分が何者なのか聞くのを待っていたから。そうすれば、こうして相手の名を聞いてやすやすと逃げられるが、それはさっき自分が説いた礼儀に反することだった。
「こ・・・・・こら、待ちやがれ！！」
すぐさま追いかけようとするクルスを、「待て」とディマが呼び止める。
「ここで追いかけたら、目標地点への到着が遅れる。それが敵の狙いかも知れん」

「わ、わかったよ。・・・・・・それにしても・・・・・・自分ではあんなことを言っておいて、それを無視するなんて・・・・・・」

ぶつくさと文句を言いながら、クルスとディマのチームは目的のエリアに向かって行った。だが、着いて早々に彼ら見たのは、崩れて間もない瓦礫に、口を開けて息絶えている何人かのヴァンパイアハンター。さらに、青い炎に包まれてまだ間もない、ヴァンパイアたちの死体だった。

「・・・・・・な・・・・・・なんだよ・・・・・・これ・・・・・・」

「おそらく、さっきの男がやったのだと思うが・・・・・・いったい、なぜ・・・・・・」

経験の浅いクルスはもちろん、さすがのディマもこれには唖然とした。と、そこへ、大きな銃を抱えた、別のチームのヴァンパイアハンターたちがやって来た。

「なんだ、これは。いったい、何が・・・・・・」

「わからない。俺たちが来た時には、すでにこうなっていた」と、ディマが言う。

「そんなことより、ガシム隊長が『秘密兵器』を投入したらしい」

クルスは、仲間がやられたと言うのに、それを『そんなこと』で済ませたことに腹が立ち、『秘密兵器』と言う言葉が耳に入らなかった。

「なんでも・・・・・・吸血鬼たちに対する切り札らしい」

「うまくいけば、我々の勝利は確実だ」

それはつまり、『後でどれだけの犠牲が出ようと、この戦いでこの国にいる吸血鬼のほとんどは死滅する』という意味。吸血鬼を狩るために組織に入ったクルスにとっては、これほど喜ぶべき話はない。だが、彼の心には何か抵抗感があった。

「今、我々に下された指令は、その『切り札』が最終制圧ポイントにスムーズに行けるようにするために、手分けをして奴らの注意を我らに向けること」

つまり、囮か。クルスは心の中で悪態をついた。それに気付いているのかいないのか、それとも承知しているのか、秘密兵器の存在を報せたハンターたちは、「いくぞ」と散会した。

「あいつら・・・・・・」

だが、クルスはそこで口をつぐむ。組織に不満を持っているということは、他のハンターたちには秘密にしていた。もちろん、尊敬している先輩であるはずのディマにも。

「どうした？行くぞ」

溜め息をつき、「ああ」と頷くと、自分たちも陽動に走った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0828q/

幻想戦記

2011年11月28日09時52分発行